

京都府遺跡調査報告書

第 35 冊

下 植 野 南 遺 跡 Ⅱ

<本文編>

2 0 0 4

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター



(1)調査地遠景(東から)



(2)I・J地点完掘状況(北東から)



(1)F 地点上層遺構完掘状況(北から)



(2)F 地点下層遺構完掘状況(西から)



(1) I・J 地点上層遺構完掘状況(上が北)



(2) I・J 地点下層遺構完掘状況(北東から)



(1) S T F 181・183 全景(南から)



(2) S T J 99 全景(西から)



(1) S T J 84 主体部検出状況(南から)



(2) S T J 95 全景(東から)



(1) 方形周溝墓出土土器



(2) 竪穴式住居跡ほか出土土器



土辺古墳出土家形埴輪

序

京都府乙訓郡大山崎町字円明寺、同下植野に所在する下植野南遺跡に関する報告書を『京都府遺跡調査報告書』第35冊として刊行します。

下植野南遺跡の発掘調査は、名神高速自動車道西宮線大山崎ジャンクション建設に伴い、日本道路公団関西支社の依頼を受けて、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターが主体となって、平成9年度から平成14年度までの6か年にわたって実施したものであります。

各年度の調査成果の概要については、逐次『京都府遺跡調査概報』・『京都府埋蔵文化財情報』に掲載してきたところですが、本書は、それら概要報告で果たせなかった詳細な事実報告を行ったものであります。

現地での発掘調査の実施から本書の刊行に至るまで、日本道路公団関西支社に、多大のご理解とご協力を賜りました。また、京都府教育委員会・大山崎町教育委員会をはじめ、関係各方面から、有益なご指導ならびに、ご助言を頂くことができました。ここに厚く御礼申し上げます。

最後に、この仕事にかかわった担当職員諸君の労苦をねぎらうとともに、本書が京都府のみならず、わが国の考古学研究の進展に寄与することを、心から願ってやみません。

平成16年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
理事長 上田正昭

例 言

1. 本書は、名神高速自動車道西宮線(通称：名神高速道路)大山崎ジャンクション建設に先立ち、日本道路公団関西支社の依頼を受けて実施した京都府乙訓郡大山崎町字円明寺、同下植野に所在する下植野南遺跡の発掘調査報告書である。
2. 下植野南遺跡に関しては、平成11年度刊行の中央自動車道西宮線拡幅工事に先立つ埋蔵文化財調査報告書(『下植野南遺跡』京都府遺跡調査報告書 第25冊)があり、本書はそれに続く『下植野南遺跡Ⅱ』である。
3. 名神高速自動車道西宮線大山崎ジャンクション建設に伴う埋蔵文化財調査は、平成9年度から平成14年度までの6か年にわたって発掘調査を実施し、本報告書の作成は、平成14・15年度の2か年にわたって整理作業を実施した。
4. 現地調査および本報告書にかかる経費は、日本道路公団が全額負担した。
5. 本書に掲載した遺構図は、国土座標第6系座標系(日本測地系)を測量基準として用いた。方位はすべて座標北をさす。また、国土地理院発行地形図の方位は真北をさす。標高は東京湾海拔(TP)を使用した。
6. 本遺跡についてはすでに『京都府遺跡調査概報』などによってその調査成果の一部を公表しているが、本報告書の整理作業の過程でいくつかの新しい所見を得ることとなった。本報告書の作成にあたっては、これらを正すように努めた。したがって、本書と既存の概報との間に相違がある場合は、すべて本書が正しいものとする。
7. 遺構名については各地点ごとに01から番号を付け、その遺構の性格により、SK(土坑)、方形周溝墓(ST)と番号の前に明示した。ただ各地点ごとにSK01と重複する可能性があるため、さらに地点名を記した(これにより、SKF01は土坑の性格をもつF地点の1番目の遺構となる)。なお、複数の地点ちにまたがる遺構については、より古い年度の調査地点の番号に統一した。
8. 本書は、各年度担当者の協力のもとに、下層遺構を藤井整が、上層遺構を石井清司が報告書刊行にむけて作業を行った。執筆者は各文末に示すこととした。本書の編集は調査第1課が行った。
9. 本書に掲載した写真は、遺構・遺物の検出状況を各年度の調査担当者と一部、調査第1課資料係主任調査員田中彰が行い、また、遺物写真については田中が撮影した。
10. 調査・整理報告に関わる実測図・写真などの記録は、当調査研究センターにおいて保管している。

本文目次

第1章 序説-----	1
第1節 はじめに-----	1
第2節 位置と歴史的環境-----	1
第3節 これまでの調査成果-----	4
第4節 地区割り設定の概要と調査の経過-----	5
1. 地区割り設定-----	5
2. 年度別調査の概要-----	7
第5節 調査体制と本書の構成-----	11
1. 調査体制-----	11
2. 本書の構成-----	12
第2章 検出遺構-----	15
第1節 基本層序と古環境-----	15
第2節 縄文時代の遺構と遺物-----	15
(1) 遺構-----	15
(2) 遺物-----	19
第3節 弥生時代の遺構-----	19
(1) 方形周溝墓の名称と計測値について-----	19
(2) 方形周溝墓-----	20
(3) そのほかの遺構-----	42
第4節 古墳時代前期の遺構-----	43
(1) 竪穴式住居跡-----	43
(2) 井戸-----	45
(3) 溝状遺構-----	45
第5節 古墳時代中・後期の遺構-----	47
(1) 竪穴式住居跡-----	47
(2) 掘立柱建物跡-----	55
(3) 土坑・ピット-----	61
(4) 溝状遺構-----	64
(5) そのほかの遺構-----	65

(6)久我暇関連遺構-----	66
(7)H地点-----	68
第3章 出土遺物-----	69
第1節 弥生時代の遺物-----	69
(1)土器-----	69
(2)石器-----	80
第2節 古墳時代前期の遺物-----	88
(1)竪穴式住居跡の出土土器-----	88
(2)そのほかの遺構出土の土器-----	91
第3節 古墳時代中期以降の遺物-----	92
1. 土器-----	92
(1)竪穴式住居跡の出土土器-----	92
(2)掘立柱建物跡の出土土器-----	106
(3)土坑ほかの出土土器-----	106
(4)S T J上面の出土土器-----	115
(5)溝状遺構の出土土器-----	116
(6)包含層の出土土器-----	121
2. 製塩土器-----	122
3. 石製模造品-----	126
4. 鉄器-----	130
5. 古銭-----	134
第4章 平成14年度の調査-----	136
1. 土辺地区の調査-----	136
(1)調査概要-----	136
(2)まとめ-----	140
2. 五条本地区の調査-----	141
3. 門田地区の調査-----	142
(1)検出遺構-----	142
(2)まとめ-----	142
第5章 考察	
第1節 弥生時代中期の下植野南遺跡-----	143
1. はじめに-----	143

2. 弥生時代中期の墓域-----	143
(1) 存続期間-----	143
(2) 墓域-----	143
(3) 墓群-----	145
(4) 周溝-----	145
(5) 墳丘-----	146
(6) 墳丘の拡張-----	147
(7) 埋葬施設の配置-----	148
(8) 木棺墓-----	148
(9) 周溝内埋葬-----	149
(10) 棺内出土遺物-----	150
(11) 供献土器-----	150
(12) 穿孔と打欠-----	151
(13) ミニチュア土器-----	154
(14) 朝鮮系無文土器-----	154
(15) 被葬者像-----	155
(16) 方形周溝墓の階層性-----	155
3. まとめ-----	156
第2節 下植野南遺跡出土の弥生時代石器-----	157
1. S T J 99主体部出土の石剣-----	157
2. 武器が出土する主体部-----	158
(1) 京都府内の武器出土主体部およびその可能性のある土壌-----	158
(2) 本州の剣出土の主体部および主体部の可能性のある土壌-----	161
(3) 小結-----	163
第3節 下植野南遺跡の集落遺構について-----	166
1. 古墳時代前期の遺構-----	166
2. 古墳時代中期以降の集落-----	169
3. 奈良時代以降の遺構-----	171
第4節 朝鮮半島系土器の出土をめぐって-----	171
1. はじめに-----	171
2. 亀岡市里遺跡の概観と問題点の抽出-----	172
3. 乙訓地域における中後期集落の動態-----	174
4. 精華町森垣外遺跡の調査成果-----	177
5. まとめ-----	180
第5節 集落遺跡出土の製塩土器について—古墳時代中期を中心にして—-----	181

1. はじめに-----	181
2. 製塩土器研究の進捗に寄与した遺跡と製塩-----	182
3. 丸底製塩土器の小型化をめぐって-----	188
4. 集落跡の属性研究と製塩土器の具体的様相-----	188
5. まとめ—製塩土器研究の問題点の指摘—-----	191
第6節 下植野南遺跡の石製模造品-----	192
1. 集落出土の石製模造品の問題-----	192
2. 製作プロセス-----	193
3. 流通プロセス-----	194
4. 使用(廃棄)プロセス-----	195
5. 下植野南遺跡における石製模造品の生産と流通-----	196
6. おわりに-----	197
第7節 久我畷について-----	197
1. 久我畷関連遺構-----	197
2. 久我畷について-----	199
付編 草本を用いた櫛状工具-----	208

付 表 目 次

付表1 調査組織表-----	12
付表2 縄文土器一覧-----	18
付表3 方形周溝墓規模一覧-----	22
付表4 方形周溝墓主体部・木棺墓一覧-----	24
付表5 竪穴式住居跡規模一覧-----	46
付表6 掘立柱建物跡規模一覧-----	56
付表7 製塩土器集計表-----	124
付表8 石製模造品出土一覧-----	126
付表9 石製模造品法量表-----	128
付表10 有孔円板一覧-----	129
付表11 白玉法量表-----	131

付表12	古銭一覧	135
付表13	遺跡の属性	192
付表14	検出遺構一覧表	214
付表15	弥生土器観察表	235

挿 図 目 次

第1図	周辺遺跡分布図	2
第2図	下植野南遺跡年度別トレンチ配置図	4
第3図	地区割り図	6
第4図	各トレンチ土層柱状図	16
第5図	縄文遺物分布図	17
第6図	方形周溝墓名称図	20
第7図	主体部名称図	20
第8図	弥生時代遺構全体図	21
第9図	古墳時代前期遺構全体図	44
第10図	古墳時代中期以降遺構全体図	48
第11図	石製模造品分布概念図	127
第12図	白玉形態分類模式図	130
第13図	家形埴輪名称図	138
第14図	下植野南遺跡方形周溝墓分布図	144
第15図	方形周溝墓出土土器概念図(1)	152
第16図	方形周溝墓出土土器概念図(2)	153
第17図	同じデザインを持つ石製武器	158
第18図	京都府内石製武器出土墓壙および本州西部・四国の剣出土土壙墓平面図	159
第19図	墓壙出土石剣および銅剣	164
第20図	下植野南遺跡古墳中期以降全体図	167
第21図	下植野南遺跡竪穴式住居跡分布図	169
第22図	下植野南遺跡掘立柱建物跡分布図	170
第23図	亀岡市里遺跡竪穴式住居跡分布図	173
第24図	亀岡市里遺跡第5-1・2トレンチ平面図	174

第25図	里遺跡出土土器	174
第26図	下植野南遺跡出土土器	175
第27図	乙訓地域の古墳時代集落の推移	176
第28図	中海道・算用田・殿町・馬場・今里遺跡出土土器	177
第29図	精華町森垣外遺跡関連図	178
第30図	森垣外遺跡出土遺物	179
第31図	製塩土器実測図(製塩遺跡)	183
第32図	製塩土器実測図(集落遺跡)	184
第33図	精華町森垣外遺跡集落構造図	189
第34図	八幡市内里八丁遺跡集落構造図	190
第35図	森垣外・内里八丁遺跡出土製塩土器	191
第36図	竪穴式住居跡別白玉出土概念図	194
第37図	竪穴式住居跡S H J 13白玉分布図	195
第38図	久我畷と下植野南遺跡	198
第39図	久我畷土層概念図	199
第40図	久我畷の調査地点	200

第1章 序 説

第1節 はじめに

下植野南遺跡は、長岡京跡右京の南端に隣接し、淀川に注ぐ小泉川の左岸の沖積低地に位置する複合遺跡であり、『京都府遺跡地図』^(注1)(1989年版)によると、縄文時代から弥生時代にかけての集落遺跡と記されている。下植野南遺跡はこれまでに名神高速道路の拡幅工事(以下、名神拡幅地点)や大山崎町体育館の建設(以下、体育館地点)に伴う発掘調査が行われ、弥生時代から平安時代・中世にかけての溝跡・竪穴式住居跡群・掘立柱建物跡・土坑などを多数検出しており、広範囲に広がる墳墓および集落遺跡であることが明らかとなっている。今回、体育館地点の西側を中心に中央自動車道西宮線(名神高速道路)大山崎ジャンクション(JCT)の建設が予定され、下植野南遺跡の範囲に含まれるとともに、当該地は長岡京の推定復原(平城京型)によると右京九条二坊、同十二坊十三町隣接地にあたるため、日本道路公団関西支社の依頼を受け、当調査研究センターが、平成9年度から平成14年度までの6か年にわたり発掘調査を実施した。なお、長岡京跡の調査としては、長岡京跡右京第589次(7ANSKT-3地区)調査に該当する。

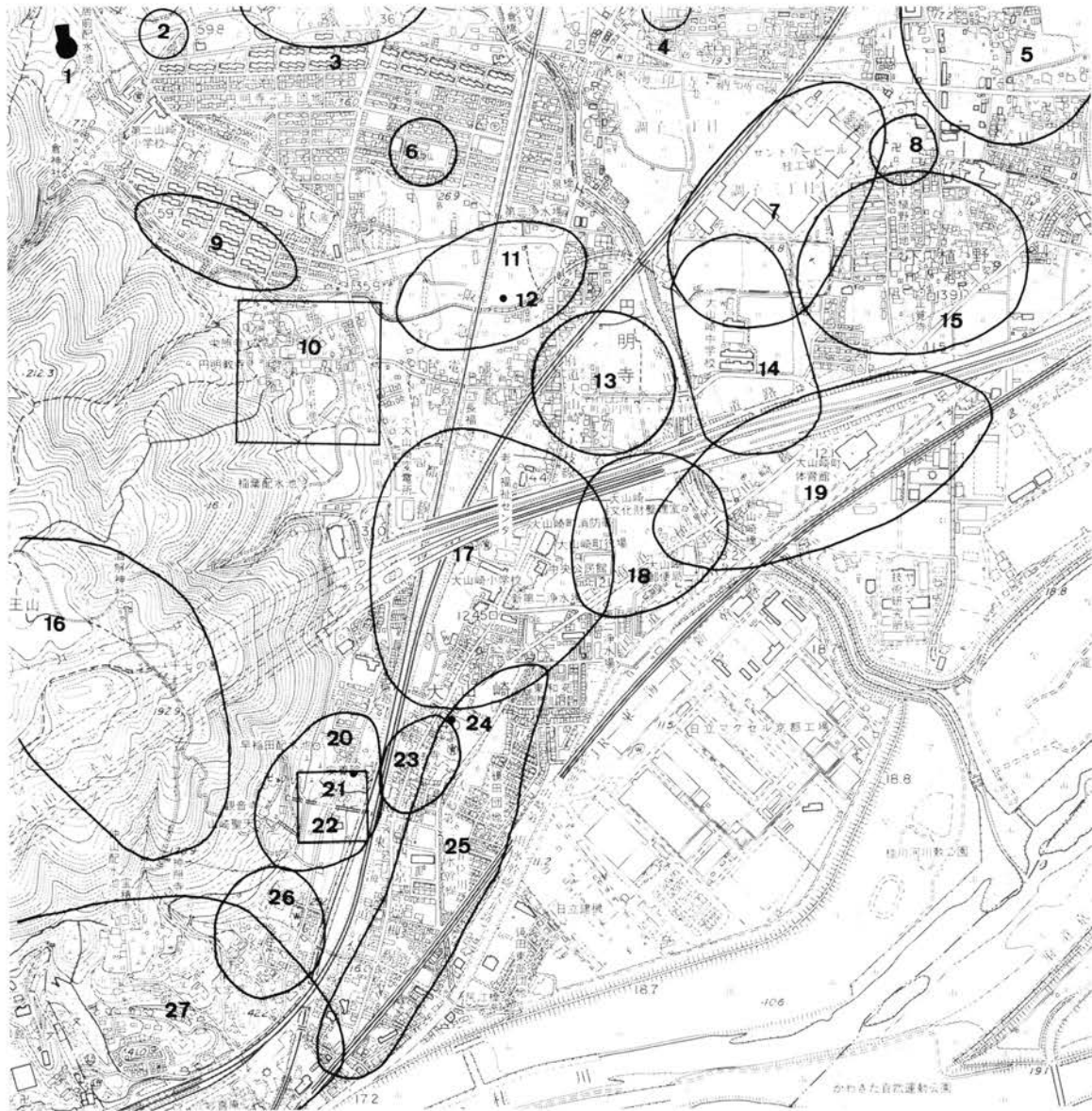
調査にあたっては、日本道路公団・京都府教育委員会・大山崎町教育委員会をはじめ、各関係機関のご協力を得た。記して謝意を申し上げる。

第2節 位置と歴史的環境

下植野南遺跡が所在する大山崎町は、大阪から京都盆地への入り口部を占め、桂川・淀川・木津川の三川が合流する地点付近に位置する。その面積の多くが河川や山地となっており、狭隘部であるため、水陸交通の要衝として重要な地域である。下植野南遺跡は桂川の支流である小泉川(延長8.6km)と小畑川(延長31.5km)に囲まれた地域に広がる沖積低地上に広がる遺跡であり、礫層によって形成された微高地を利用した遺跡である。

大山崎町の遺跡(第1図)を中心に、乙訓地域の歴史を概観すると、大山崎町山崎遺跡^(注2)・脇山遺跡^(注3)でサヌカイトを素材とした横剥ぎのナイフ型石器(国府型ナイフ形石器)が出土しており、後期旧石器時代には人の足跡がたどれるが、遺構の状況などは明らかでない。

縄文時代には、草創期に久保川遺跡でチャート製の木葉形尖頭器が、大山崎町宮脇遺跡^(注4)で局部磨製異形石器(俗称トロトロ石器)が出土しているが、明瞭な遺構に伴うものではない。続く前期以降では小泉川流域を中心として縄文時代の遺跡の分布が知られる。長岡京市下海印寺遺跡^(注5)では押型文土器や後期の遺構が、長岡京市友岡遺跡では船元式土器が多く出土している。前述の脇山遺跡^(注6)では中期末(北白川C式)の生駒西麓産の深鉢を含む土坑、長岡京市碓遺跡^(注6)では沼状に堆積した青灰色粘土層から中期～後期の土器、晩期の土坑などがある。下植野南遺跡でも名神拡幅地点



第1図 周辺遺跡分布図(1/30,000)

- | | | | | |
|------------|--------------------------------|-----------|------------|-----------|
| 1. 鳥居前古墳 | 2. 石倉遺跡 | 3. 脇山遺跡 | 4. 大縄遺跡 | 5. 南栗ヶ塚遺跡 |
| 6. 葛原親王屋敷跡 | 7. 砦遺跡 | 8. 境野遺跡 | 9. 西法寺遺跡 | 10. 円明寺跡 |
| 11. 久保川遺跡 | 12. 里後遺跡 | 13. 金蔵遺跡 | 14. 松田遺跡 | 15. 宮脇遺跡 |
| 16. 山崎城跡 | 17. 百々遺跡 | 18. 算用田遺跡 | 19. 下植野南遺跡 | 20. 白味才遺跡 |
| 21. 白味才古墳 | 22. 山崎廃寺 | 23. 堀尾遺跡 | 24. 傍示木遺跡 | 25. 山崎津遺跡 |
| 26. 山崎遺跡 | 27. 河陽離宮跡・相応寺跡・山崎国府跡・山崎院跡・山崎駅跡 | | | |

や今回報告する大山崎JCT地点の調査で縄文時代中期から晩期の土器とともに、一部土器棺墓、ピットなどの遺構も確認しており、縄文時代の様相も明らかになりつつある。

弥生時代の遺跡では、長岡京市に前期の環濠集落として著名な雲宮遺跡^(注7)がある。雲宮遺跡では2重にめぐる環濠とともに、穿孔されたイノシシの下顎なども出土しており、弥生時代開始期の乙訓地域を知る重要な成果があがっている。中期初頭には、銅鐸鑄型片が出土した向日市鶏冠井遺跡^(注8)、方形周溝墓が検出された長岡京市南栗ヶ塚遺跡^(注9)があり、中期中葉には脇山遺跡、長岡京市

神足遺跡^(注10)が知られる。神足遺跡は墓域と集落域の関係を窺える点で極めて重要な遺跡である。神足遺跡は中期中葉から後葉にかけて存続するが、中期後葉に成立する遺跡として碯遺跡^(注11)があげられる。このうち同一地域内には、南栗ヶ塚遺跡、碯遺跡が存在するが、いずれも下植野南遺跡とは時期的に重ならない。この地域には神足遺跡を除けば、墓域と集落域の関連が窺える遺跡は少ない。下植野南遺跡も検出されたのは墓域のみで、集落と墓域の関係については未解明である。

古墳時代には、乙訓南部地域の前期の盟主墳的性格をもつ大山崎町鳥居前古墳^(注12)がある。鳥居前古墳は全長70mを測る帆立貝式前方後円墳で、後円部には竪穴式石室がある。鳥居前古墳と同一丘陵には後期に属する大山崎町西明寺古墳が1基あるのみで鳥居前古墳に続く顕著な古墳は存在せず、首長墓の系譜は長岡京市恵解山古墳へと移行する。大山崎町内での古墳は数が少なく、下植野南遺跡に近接した位置で土辺古墳や境野古墳群^(注13)などが知られる程度である。土辺古墳は本報告でもとりあげる一辺13mの方墳で、平成14年度の下植野南遺跡土辺地区の調査で確認された川西編年Ⅱ期の埴輪を伴う埋没古墳である。西溝から出土した家形埴輪は、復原高約100cmで、張り出した屋根を支える「方杖」、屋根から下がる「幕板」などが付されており、建築史上も極めて重要な成果があがった資料である。境野古墳群では、発掘調査が実施された境野1号墳で、10cm内外の葺石と思われる小石群と基底部を残した円筒埴輪が知られており、埴輪は川西編年のⅢ期の特徴をもつ。また、下植野南遺跡名神拡幅地点の調査でも方墳と思われる周溝を確認しているが、その数は少ない。同じく古墳時代後期の顕著な古墳群は知られていないが、今回報告する下植野南遺跡土辺地区で、海拔10m前後の位置で川西編年のⅣ期の特徴を持った埴輪を含む円墳や、陶邑編年^(注14)のTK23・47型式の特徴をもった須恵器を含む円墳の検出があり、低地部に古墳が造られている様相も明らかとなりつつある。

古墳時代の集落遺跡としては大山崎町算用田遺跡^(注15)がある。算用田遺跡は、下植野南遺跡とは小泉川を挟んだ対岸にある集落遺跡であり、海拔9mの低位部で弥生時代後期末の竪穴式住居跡1基、古墳時代中・後期の竪穴式住居跡3基、飛鳥時代の竪穴式住居跡1基と掘立柱建物跡1棟を検出している。また、近接地(長岡京跡右京第192次調査)でも古墳時代中・後期の竪穴式住居跡を5基検出しており、下植野南遺跡とともに、この周辺が古墳時代中・後期の一大集落遺跡であることが想像できる。

奈良時代の遺跡は、下植野南遺跡で一部確認しているが顕著な遺構はなく、古代遺跡の多くが平安時代に集中する。下植野南遺跡も長岡京の旧条坊復原案では九条域に含まれるがこの時期の顕著な条坊や建物遺構はなく、長岡京期における様相は明らかではないが、平安時代以降については、第4次山城国府や河陽離宮の公的施設や官道の様相が明らかとなりつつあり、交通の要衝としての大山崎町を如実に表す遺構・遺物が数多く検出されている。今回の下植野南遺跡の調査でも山崎津から鳥羽離宮・平安京へ続く久我畷に関連する遺構を検出している。明らかに久我畷が平安時代まで遡ると断定するだけの資料は出土していないが、中世以降における久我畷の様相は明らかとなった。

(石井清司)

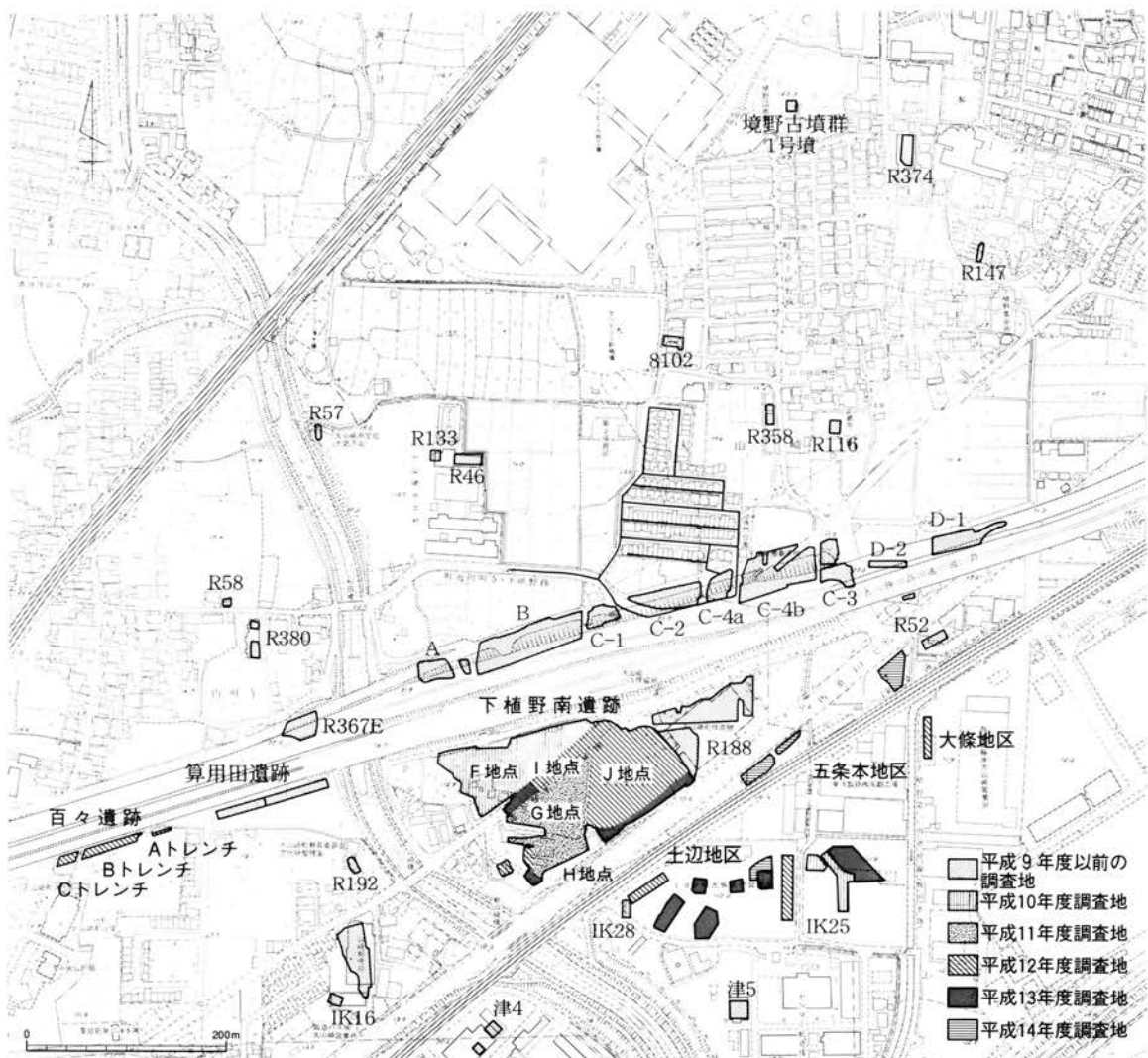
第3節 これまでの調査成果

下植野南遺跡は、当初「宮脇松田遺跡」と呼称されていたが、昭和60(1985)年の大山崎町教育委員会による体育館地点の調査の成果を受け、当該地が宮脇松田遺跡とは遺跡の性格を異にするため、別名称として取り扱うように検討され、新たに下植野南遺跡と改称された遺跡である。

下植野南遺跡の埋蔵文化財調査は、前述の体育館地点の調査以降、名神拡幅地点の調査として当調査研究センターが、平成2年度以降、平成6年度にかけて発掘調査を実施し、遺跡の実態が明らかになりつつある。

縄文時代には、晩期(滋賀里Ⅳ式)の遺構として深鉢を埋納した土器棺と考えられる土坑を検出しているが、集落などの実態は明らかでない。そのほか縄文時代中期(船元式)以降、晩期(長原式)までの遺物が出土しているが、いずれも遺構に伴っていない。

弥生時代には、名神拡幅地点のA地区で弥生時代中期の土坑と溝を、同C-1トレンチでは、広口短頸壺を利用した小児用の土器棺墓と思われる土坑、また、C-2トレンチの南東約150mにある体育館地点の調査では、弥生時代中期の方形周溝墓6基と自然流路と思われる幅約2mの



第2図 下植野南遺跡年度別トレンチ配置図(1/20,000)

素掘りの溝を検出している。6基の方形周溝墓は、いずれも墳丘上面が削平されており、主体部は確認できず、周溝を検出したのみである。各周溝は互いに溝を共有するもので、溝の中央部や北辺コーナー部に陸橋部を設けているものがある。各周溝からは弥生時代中期の土器片を少量出土したのみである。

古墳時代の遺構を前期、後期に分けて概観すると、古墳時代前期には名神拡張地点のC地区で検出された5基の方形竪穴式住居跡と溝状遺構がある。竪穴式住居跡^(注16)のほかには、Cトレンチで川西編年のⅢ期に属する円筒埴輪を出土した方墳がある。なお、この2基の古墳は、報告書では庄内式土器を含む方形周溝墓2基として位置づけ、溝内出土の埴輪を周溝墓の埋没後に造られた埴輪棺の残欠として扱われている。A地区において北東から南西に向かって流れる流路が認められている。この流路は、遺構面を直接埋める原因となる洪水を起こしたと思われる。B地区からは、旧小泉川水系のものと思われる自然流路がトレンチ北から南へ流れていたことが確認されている。また、C地区中央において、北東から南西に流れる幅約5～7mの自然流路を検出している。この流路については、トレンチ南の体育館地点の調査地区において、その延長部分と思われる自然流路の遺構が、ほぼ同じ規模で確認されている。

須恵器出現以降の古墳時代中・後期には10基の方形竪穴式住居跡と溝状遺構を検出している。各竪穴式住居跡は体育館地点と同様、TK10・MT15型式の時期のものが主体である。また、掘形および柱穴からの出土遺物がなく、その時期については不確定な部分が多いが、掘立柱建物跡の多くが、この竪穴式住居跡と相前後した時期のものと思われる。なお、BトレンチSR35707の周辺では大形須恵器や滑石製品の出土があり、祭祀遺物がまとまって出土している。

平安時代では、Bトレンチの北端で拳大の自然石を含む礫を利用した路面とその両側溝を、C-5トレンチでは掘形および柱穴内に土師器皿、須恵器壺・鉢を含む掘立柱建物跡を検出したほか、土坑、溝状遺構などを検出している。

中世ではC-3トレンチで後述する久我畷に関連した両側溝と路面を検出した。この両側溝では出土遺物がなく、時期決定の資料を欠くが、門田地区の調査成果から中世段階のものと思われる。また、丸太材を利用した杭列を含む近世以降と思われる久我畷西側溝がある。

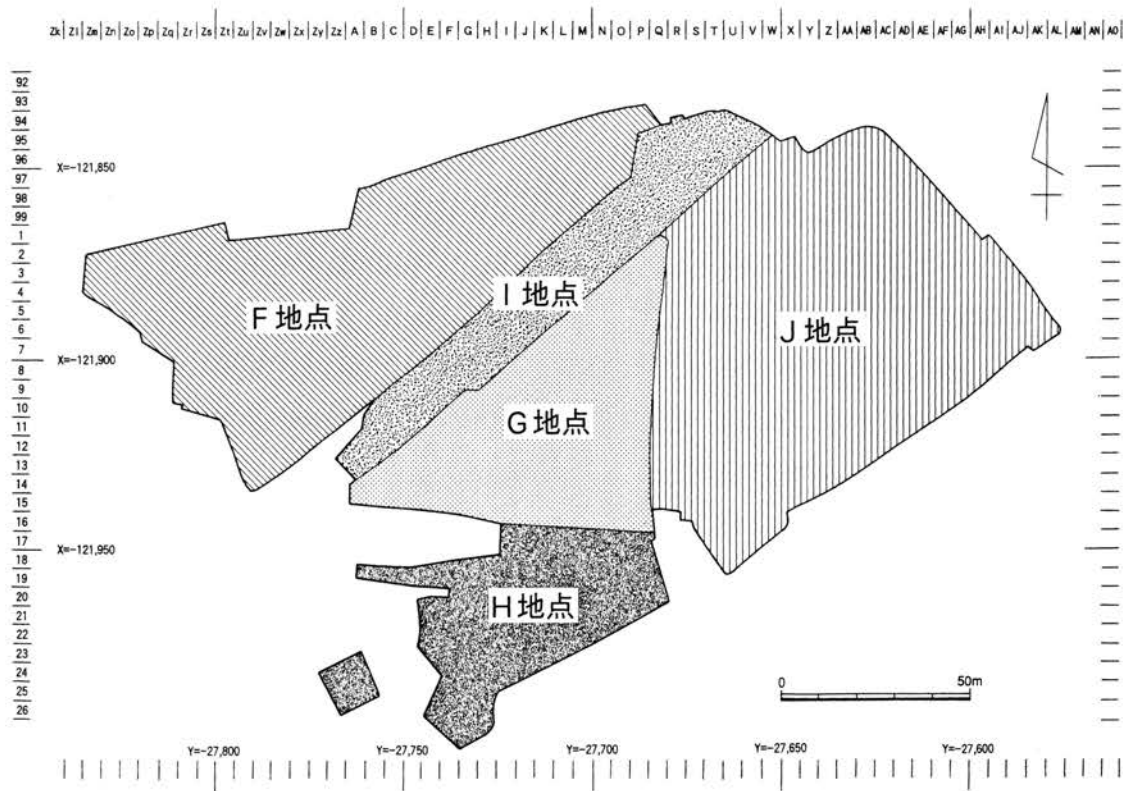
(尾上 忍)

第4節 地区割り設定の概要と調査の経過

1. 地区割り設定

名神大山崎JCT建設に伴う下植野南遺跡の発掘調査は、平成9年度から平成14年度までの6か年にわたって、総面積は約25,000㎡以上の調査を実施した。調査地区は広範囲であるため各小字名をとって、土辺地区、五条本地区と呼称するが、国道171号線の南側については、小字名が3地区にまたがるため、調査地の大半を占める小字から門田地区と呼称する。

地点名は平成2年度以降、平成6年度にかけて発掘調査を実施した名神拡張地点の調査区で設定したA～E地点を継続して平成9・10年度の調査地点をF地点、平成11年度の調査地点は前半



第3図 地区割り図

と後半に分かれたため、前半部の地点をG地点、後半部の流路を挟んだ南側をH地点とした。平成12年度は大山崎町多目的広場跡地と府道とに分かれたため、府道下の調査地点をI地点、多目的広場跡地の調査をJ地点とし、各地点ごとに遺構名を順次設定した。

このため、溝状遺構SD01が各年度の各地点で重複する可能性があるため、本報告では遺構をその性格(竪穴式住居跡；SH、溝状遺構；SD、性格不明遺構；SX、方形周溝墓；ST)に地点名(F・G・Hなど)、さらに検出遺構の番号(01・02・03など)を付す方法で記載した。つまり、F地点で検出した溝と考えられる1番最初の遺構はSDF01というように記入することとなる。

平成9年度の調査は2月から3月までの短期間の調査であったため、重機による掘削と遺構上面での粗掘り作業のみで終了した。このため、明確な地区割り設定は行わなかった。

平成10年度の調査は調査面積約6,000m²と広範囲であり、重機掘削後の粗掘り段階で遺物を検出できたため、この時点で地区割り設定を行った。この地区割り設定は南北ラインをアルファベットで、東西を算用数字で表示した5m方眼を組み、その方眼の南東隅の交点をその地区名とした。ただ、平成10年度に設定した地区割り表示では、平成11年度のG・H地点で齟齬をきたしたため、本報告ではF地点の当初の地区割りを一部変更した(地区割り図参照)。この変更後の地区割りでは、南北のアルファベットのAラインはG地点のトレンチ西端近くであり、それよりもさらに西側(主にF地点)ではZz・Zy・Zxと順次つけ、Aラインから続くZ以降、さらにその東側については不統一ではあるが、AA・AB・ACと明示した。東西ラインの1ラインもF地点の北端近くに設定したが、さらにその北側にも調査が及んだため、1ラインのさらに北側を99・

98・97と明示した。

ただ、この地区割り、地区名、遺構名の表示は本報告書の中心部分である門田地区での表示であり、門田地区とは国道171号線、新幹線を挟んだ南側の土辺地区、五条本地区では各地区ごとにトレンチ名を明示し、そのトレンチ名の中での遺構名としたため、例えば土辺地区の場合は、STB-3トレンチのSD01とSTB-2トレンチのSD01がある。

2. 年度別調査の概要(第2図)

平成9年度の調査

名神大山崎JCT建設に伴う下植野南遺跡の発掘調査は、平成9年度に門田地区と五条本地区の2か所で開始された。門田地区(長岡京跡右京第589次、F地点)は、長岡京の推定復原(平城京型)によると長岡京域とその隣接地にあたり、調査面積約2,200m²の発掘調査を実施した。ただ、F地点の調査は平成10年2月2日から着手したため、平成9年度の調査としては、遺構面までの土層の堆積状況を確認するとともに、検出遺構面までの深さを確認することに主眼をおいた調査であった。調査は重機掘削および人力による粗掘り作業を行い、地表下約1.4~1.5mで平安時代の黒色土器や緑釉陶器を含む褐色砂礫層を確認したほか、青灰色粘土が堆積した中世の湿地状の落ち込みなどを検出したが、詳細な遺構検出作業は次年度に行うこととなった。

五条本地区(長岡京跡右京第585次・以下R585次と呼称)は長岡京右京九条一坊十三町域で、調査面積約120m²の発掘調査を実施し、地表下約2.3mの第5層(茶褐色粘質土層)から土師器・須恵器を、その下層の第6-1層(暗褐色粘質礫混じり土層)と第6-2層(暗灰褐色粘質礫混じり土層)で弥生時代終末~古墳時代前期の土器が出土した。

平成10年度の調査

平成10年度は、門田地区(F地点)・五条本地区・土辺地区の3か所で調査を行った。

門田地区では、前年度調査区内での遺構検出のための精査に努めた。ただ、前年度での精査面が奈良~平安・鎌倉時代の遺物が混在した包含層の上面である可能性が高く、明瞭な遺構が検出できないため、重機により前年度精査面から約10~20cmの厚さまで削りとり、標高約10m前後の茶褐色砂礫土・茶褐色粘質土の直上で再度精査を行った。その結果、古墳時代中・後期の土器を含んだ竪穴式住居跡・溝状遺構・土坑などを検出した。また、前年度トレンチで遺構の状況が明らかになったため、同トレンチをさらに東側に拡張し、発掘調査を実施した。最終的には調査面積約6,000m²を測る。

F地点では、古墳時代中・後期の遺構面での空中撮影とその図化作業に際して、全面での精査を再度行ったところ、調査地の東部で黒褐色粘質土が一辺約10m前後で、方形にめぐむものを数か所確認し、空中撮影後に精査したところ、弥生時代の方形周溝墓に伴う周溝であることが明らかとなった。この方形周溝墓は東半部では黒褐色粘質土の堆積土はないが、西半部では厚さ10~30cm堆積しているため、調査地全面に亘り黒褐色粘質土を除去したところ、方形周溝墓を新たに確認するとともに、古墳時代前期の竪穴式住居跡と井戸状遺構を検出した。

F地点の調査によって、門田地区では上層遺構とその下層遺構があり、上層遺構として古墳時代中・後期以降の竪穴式住居跡・掘立柱建物跡を含む集落遺構が、下層遺構として古墳時代前期の集落遺構(竪穴式住居跡3基と井戸状遺構)・弥生時代中期の墳墓群(方形周溝墓17基)が存在することが明らかとなった。

F地点の調査終了後の平成11年1月からは、F地点とは府道下植野大枝線を挟んだ田畑部で、2か所のトレンチを設定(調査面積約1,100m²)して発掘調査に着手した。同地点は長岡京の京域からはずれるため、新たに大山崎町遺跡確認第31次調査(略記号でI K31次調査、以下G地点と呼称)として行い、上層遺構として掘立柱建物跡や溝状遺構を確認したが、調査期間が平成11年2月末日までを予定していたため、その詳細は次年度に持ち越された。

五条本地区では、門田地区とは国道171号線・J R東海道新幹線を挟んだ南東方向で下植野南遺跡の南東端の限りを確認するために試掘トレンチを3か所設定した。第1トレンチ(I K25次第1次調査;調査面積約150m²)と、その南延長の第2トレンチ(I K25次第2次調査;調査面積約300m²)で、中世の包含層と古墳時代のピットを検出した。また第1・2トレンチとは東側に接して設定した第3トレンチ(I K25次第3次調査;調査面積約330m²)では古墳時代前期の井戸や溝状遺構を検出し、下植野南遺跡がさらに南東方向に広がることを確認した。

門田地区の南側に位置する土辺地区では、五条本地区と同様、下植野南遺跡の範囲を確定するための試掘調査(I K28次調査;調査面積約330m²)を実施し、F・G地点で検出した中世の流路跡(S D F99)の延長部を確認したが門田地区で検出したような上・下層の遺構の存在の有無については明らかにできなかった。

平成11年度の調査

平成11年度は門田地区のみの調査であった。門田地区では平成10年度に設定した2か所のトレンチの精査とともに、2地点の間となる田畑部全域(G地点)の発掘調査を実施した。

前年度の調査で掘立柱建物跡を検出したI K31次-第1トレンチ上面での精査終了後に、第1トレンチを広げる形で、重機掘削・人力による粗掘り作業を進めると、F地点で検出した南北方向の溝の延長部を確認し、古墳時代中・後期の遺構がさらに広がることが明らかとなった。また、G地点の南端で中世以降に掘削された流路跡を検出し、F地点のような上層遺構・下層遺構が存在するのはこの流路までであることを予想した。前年度のI K31次-第2トレンチで検出していた掘立柱建物跡や溝状遺構のうち、S D G202、S D G213(注:『概報』ではS D02、S D13)として検出していた遺構が、調査地を拡張することにより、方形周溝墓の周溝であり、再度I K31次-第2トレンチの西・東壁の断面観察を行ったところ、方形周溝墓の墳丘盛土を検出した。このため、G地点の調査では上層遺構の古墳時代中・後期の竪穴式住居跡や掘立柱建物跡などの調査終了後に、人力によって順次掘削作業を繰り返して、方形周溝墓の検出に努めた。その結果、方形周溝墓を7基検出した。

G地点での発掘調査がほぼ終了した平成11年11月から、G地点の南側の流路跡の幅を確認するために新たにトレンチを広げて発掘調査(H地点)を行った。H地点ではFあるいはG地点とは遺

跡の様相は異なり、調査地南端で稲株痕跡を検出し、FあるいはG地点の集落の水田部であると予想した。またこの下層では古代および弥生時代と考えられる溝状遺構を検出したが、方形周溝墓は検出されなかった。

平成12年度の調査

平成12年度は、門田地区・五条本地区・土辺地区の3地区で発掘調査を行った。

門田地区では、F地点とG地点の間の府道下植野大枝線の付け替え工事が終了したために発掘調査が可能となった部分(I地点)とG地点の東側で多目的広場部分の発掘調査を実施した。

かつて府道があったI地点は、旧街道である久我畷の推定部分であるため、これまでのF・G地点のように上層遺構の直上までの重機掘削を控え、地区割りというP～Rライン付近で試掘トレンチを設定し、久我畷の有無とその土層の堆積状況を確認した。この確認調査では現在の水道・電気・排水のための埋設管が府道に沿う形であったため、調査方法を検討し、まずこの試掘トレンチから西側で、約75mの延長部までは埋設管の除去できる深さまで重機掘削したのちに、人力によって粗掘りと精査を行って久我畷の関連遺構の調査を行った(I-0トレンチと仮称)。これに対して試掘坑の東側の約30mの延長部では、府道のアスファルトを除去した面から順次人力によって掘削する方針となった(I-1トレンチと仮称)。I-0トレンチでは調査の結果、中世での久我畷関連遺構を、I-1トレンチでは現代の府道の直下に近代・近世の土塁状の路面を確認し、久我畷と呼ばれる道路面が中世～現代まで連続と続いていることが明らかとなった。

大山崎町多目的広場があったJ地点の発掘調査(調査面積約6,100m²)では、上層遺構として竪穴式住居跡・掘立柱建物跡や溝状遺構を検出し、特にG地点ではやや希薄であった竪穴式住居跡・掘立柱建物跡はJ地点の北側では希薄であったが、国道171号線に接した南端部分でややまとまって検出した。

J地点もF・G地点と同様に下層調査を実施したところ、新たに方形周溝墓を35基検出し、下植野南遺跡全域で82基の方形周溝墓が存在することが明らかとなった。また各方形周溝墓ではF地点で一部検出していた埋葬施設が比較的良好な状態で存在していることが明らかとなり、墳丘規模によって埋葬施設の数を検討できること、埋葬施設での木棺痕跡が明瞭なものがあり、棺構造を検討できる資料であることが明らかとなった。

H地点では、前年度の調査地の南西端で流路の端を確認するために調査地を設定(調査面積約200m²)して遺構の検出を行ったところ、溝状遺構の延長などは検出したが、流路の延長部の肩部はさらに南西部にあることが明らかとなった。

五条本地区では、工事用道路予定地にトレンチを設定したところ古墳時代中・後期の方形竪穴式住居跡を1基検出し、古墳時代中期以降の集落がさらに広がることが確認できた。

土辺地区では、下植野南遺跡の南西の広がりを確認するために2か所のトレンチを設定して調査を行ったところ、第1トレンチでは沼状遺構を、第2トレンチでは溝状遺構と弥生時代の土坑を検出し、土辺地区でも門田地区から広がる遺構・遺物が存在することが明らかとなった。

平成13年度の調査

平成13年度は、門田地区・土辺地区・五条本地区の3地区で発掘調査を実施した。

門田地区では、平成12年度の後半の調査である旧多目的広場(J地点)の南側で、掘立柱建物跡や竪穴式住居跡を検出していたが、今年度はその下層で方形周溝墓2基(STJ199・200)を新たに検出した。そのうちSTJ199は、東西約10.5m、南北約10.0mの方形を呈し、その中心部では2基の埋葬施設を検出した。

I地点では、昨年度に久我畷関連遺構の調査を終了した北東側の調査地(I-1トレンチ)で方形周溝墓3基(STI48・49・62)を検出した。

新たにトレンチを設定した南西側の調査地(I-2トレンチ)では、最上層で中世および近世の道路面(久我畷)と井戸、その下面では古墳時代後期から奈良時代にかけての掘立柱建物跡6棟と竪穴式住居跡1基(SHI09)を検出した。古墳時代中・後期の遺構面の検出、図化作業の終了後に下層遺構の追求に努めたところ、新たに古墳時代前期の竪穴式住居跡1基(SHI54)と弥生時代中期の方形周溝墓1基(STI23)を検出した。

古墳時代後期の竪穴式住居跡は流路に削られ、床面の状態もよくなかったが、古墳時代前期の竪穴式住居跡は遺存状態がよく、検出面からの深さ約20cmを測る。床面では土師器壺・甕・高杯など多量の土器が出土した。なお、SHI54は最初に作られた後、新たに建て替えられた痕跡が認められた。

土辺地区では、5か所のトレンチを設定して、発掘調査を実施した。STB3-1トレンチ(調査面積約300m²)では、中心部に3か所の埋葬施設をもった方形周溝墓を1基検出した。また、方形周溝墓の南西部では、明確な遺構に伴わなかったが石剣が出土した。STB3-2(調査面積約200m²)・STB3-4トレンチ(同300m²)では、須恵器有蓋高杯の蓋(STB3-2トレンチ)、埴輪(STB3-4トレンチ)を含んだ古墳時代前・中期の古墳の周溝と思われる溝状遺構を確認した。STB3-3トレンチ(調査面積約200m²)・STB3-5トレンチ(調査面積400m²)では、顕著な遺構が見つからなかった。

五条本地区では、平成10年度の調査で古墳時代前期の井戸や竪穴式住居跡の一部を確認していたが、平成13年度はその調査地の東側(調査面積約1,100m²)で、中世以降の耕作に伴う畝跡や人・馬の足跡などを検出した。畝跡や人・馬の足跡は青灰色粘質土層中で検出したもので、その痕跡が荒い砂礫によって埋まっていた。なお、この地はたびたび洪水を受けていたようで、特に大きな洪水を受けた痕跡が3回ほど認められた。

古墳時代に属する遺構は、竪穴式住居跡2基、井戸1基、土坑4基、溝3条、柱穴などがある。竪穴式住居跡SH05は、一辺約4.7m、検出面から床面までの深さ約0.15mを測る。竪穴式住居跡SH06は、竪穴式住居跡SH05以上に遺存状態が悪く、周壁溝しか残っていなかった。周壁溝は3.5×4.1mで、床面での標高は約7.8mを測り、標高から考えて竪穴式住居跡はかなり低湿地に建てられていることが判明した。

両竪穴式住居跡は、調査地の北側で東西にのびる幅約2.5m、深さ約0.5mの人為的に掘削された溝SD01(出土遺物がなく、時期は不明)が大量の土砂に埋まった後、整地をして造っている。

井戸は円形で、トレンチ南側で調査地外に半分のびるもので、直径約2.3m・深さ1.2mを測る。井戸の底部付近には井戸枠として使用されていた板材が一部残存していた。井戸周辺では柱穴も確認したが、建物跡として復原できるものはなかった。

竪穴式住居跡の東側には南北方向の溝SD03がある。遺構の検出状況からこの溝を境に集落域と湿地ないし生産域とを分けていたようで、居住域を中心に整地が行なわれたものと考えられるが、この溝の東側には整地に伴う礫の堆積がほとんど認められなかった。

平成14年度の調査

平成14年度は、門田地区、土辺地区、五条本地区の3地区で発掘調査を行った。

門田地区の調査はこれまでの調査地区のなかでは南西隅部にあたり、門田地区の中心部とは国道171号線を挟んだ南側で、幅約10m、長さ約5mのトレンチを2か所設定(調査面積約850m²)して行った。東側に設定した第1トレンチでは攪乱が著しく、明確な遺構・遺物は検出できなかった。西側に設定した第2トレンチでは掘立柱建物跡3棟を検出した。各掘立柱建物跡は掘形直径約0.3mを測るもので、2間×3間(SB01)、1間×2間以上(SB02)、2間×2間の総柱建物(SB03)といずれも小規模なものである。掘形から出土した遺物に少量の古墳時代中・後期の遺物が出土しており、平成12年度に検出していたJ地点の掘立柱建物跡群に続くもので、古墳時代中・後期の建物群が南西方向にさらに広がることが明らかとなった。ただ、このトレンチでは下層の古墳時代前期の集落跡、弥生時代中期の方形周溝墓がなく、下層遺構についてはこの地点まで広がらないことが明らかとなった。

土辺地区では、平成13年度のSTB3-4トレンチで検出していた埴輪を含んだ溝状遺構(SD1301)が円墳あるいは方墳であるかどうかを確認するためにSTB3-4トレンチの北側を拡張するようにトレンチ(調査面積約300m²)を設定して調査を行った。この結果、SD13D01は一辺約13mを測る方墳の南周溝であることが明らかとなり、埋葬施設は後世の削平によって削られていたが、周溝内からは埴輪のほか土師器が出土した。特に円筒埴輪は川西編年Ⅱ期で、東側の周溝からは祭殿建物を模したと思われる家形埴輪が1個体まとまって出土した。

五条本地区では、平成10年度に発掘調査を行ったR585次調査で検出していた古墳時代前期の旧河道SD01を検出する目的で、発掘調査を行った。発掘調査ではR585次のSD01と並行するように流れる古墳時代前期の溝状遺構を検出したほか、土坑、ピットなどを検出した。

第5節 調査体制と本書の構成

1. 調査体制

本書は、大山崎JCTに伴う発掘調査のうち、特に遺構密度が高く、広範囲に調査を行った長岡京跡右京第589次調査とIK-31次調査を含む、門田地区の調査成果をまとめたものが中心であり、一部、平成14年度の発掘調査の概要をまとめたものである。

発掘調査は前述のように、平成9年度から平成14年度までの6か年をかけて行い、平成14年度後半から平成15年度にかけて報告書作成のための整理作業を行った。

付表1 調査組織表

調査年度	調査期間	主な調査地点	総務課長	調査第2課長	主な調査担当
平成9年度	平成10年1月17日 ～ 平成10年3月10日	門田地区F地点北西半・五条本地区	福島利範	安藤信策	課長補佐兼調査第4係長平良泰久、主任調査員戸原和人、調査員岩松保・松尾史子
平成10年度	平成10年4月13日 ～ 平成11年2月25日	門田地区F地点・G地点試掘・土辺地区・五条本地区	福島利範	安藤信策	課長補佐兼調査第4係長奥村清一郎、主任調査員戸原和人・石井清司、主査調査員竹下士郎、調査員中村周平・野島永・松尾史子
平成11年度	平成11年4月12日 ～ 平成12年1月28日	門田地区G地点・H地点	福島利範	平良泰久	課長補佐兼調査第4係長奥村清一郎、主任調査員松井忠春・石井清司、主査調査員竹井治雄、調査員藤井整・中島(松尾)史子
平成12年度	平成12年4月11日 ～ 平成13年3月9日	門田地区I地点(I-0トレンチ)・J地点・久我畷・土辺地区・五条本地区	福島利範	平良泰久	課長補佐兼調査第4係長奥村清一郎、主任調査員松井忠春・石井清司・増田孝彦・小池寛、調査員森島康雄・野島永・中島(松尾)史子
平成13年度	平成13年4月9日 ～ 平成13年12月20日	門田地区J地点南拡張区・I地点(I-1・2トレンチ)・久我畷	福島利範	平良泰久	課長補佐兼調査第4係長奥村清一郎、主任調査員石井清司・増田孝彦・引原茂治、調査員中村周平・河野一隆・藤井整
平成14年度	平成14年5月7日 ～ 平成14年7月30日	土辺地区・五条本地区	安田正人	長谷川達	調査第1係長石井清司、主任調査員増田孝彦・引原茂治、調査員藤井整
平成15年度		報告書作成作業	安田正人	長谷川達	調査第3係長石井清司、主任調査員岩松保、調査員高野陽子・野島永

各年度の調査体制は以下の通りである。

調査主体者 樋口隆康(平成9～14年度)、上田正昭(平成15年度)

調査責任者 木村英男(平成9～13年度)、中谷雅治(平成14・15年度)

なお、各年度の総務課長以下調査担当については、一覧表とした(付表1)。

現地調査および報告書作成にあたっては、多くの調査補助員、整理員、作業員の方々にご協力をいただいた。また、調査期間中および整理期間中には以下の方々に貴重な御教示、御指導をいただきました。記して感謝いたします。

青柳恭介・赤澤徳明・秋山浩三・有馬伸・今尾文昭・伊庭功・梅本康広・大庭重信・片岡宏二・蒲原宏行・桐山秀穂・國下多美樹・高橋克寿・種定淳介・都出比呂志・寺前直人・永井宏幸・中川寧・永田稲男・長友朋子・襦宜田佳男・深澤芳樹・福永信哉・濱田延充・濱野俊一・藤田三郎・古谷毅・豆谷和之・石井智大・宮本長二郎・森岡秀人・若林邦彦・徐光輝・劉振東・張慧明・崔完奎・山中章・山田康弘・千賀久・福田敏朗(順不同・敬称略)

2. 本書の構成

下植野南遺跡では縄文時代から中・近世までの遺構・遺物を数多く検出した。本書は遺構の項

目として縄文・弥生・古墳時代と古い時代から順に遺構の説明を行ったのち、同様の順番で遺物の説明を行う。検出遺構・出土遺物が数多くあるため、遺構とその遺構から出土した遺物のうち、図示することがむずかしいものや、性格が不明確なものについては遺構一覧表で記し、本文では割愛することとした。また、この遺構一覧表では、すでに概報や情報で報告した旧遺構名も併記した。

(石井清司)

下植野南遺跡関連文献

- A-1：戸原和人・岩松保「長岡京跡右京第585次・第589次・下植野南遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第85冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1998
- A-2：石井清司・竹下士郎・中村周平・藤井整・尾上忍「名神大山崎ジャンクション関係遺跡平成10年度発掘調査概要 (1)長岡京跡右京第589次」(『京都府遺跡調査概報』第90冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1999
- A-3：松井忠春・石井清司・藤井整・中島史子・尾上忍・今林信祐「名神大山崎町ジャンクション関係遺跡平成11年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第95冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2000
- A-4：石井清司・藤井整「名神大山崎ジャンクション関係遺跡平成12年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第101冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2000
- A-5：石井清司・増田孝彦・中村周平・河野一隆・藤井整「名神大山崎ジャンクション関係遺跡平成13年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第105冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2000
- B-1：竹下士郎「下植野南遺跡(下層)の調査」(『京都府埋蔵文化財情報』第71号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1999
- B-2：野島永・魚津知克「下植野南遺跡方形周溝墓出土の磨製石剣」(『京都府埋蔵文化財情報』第78号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2000
- B-3：藤井整「方形周溝墓の被葬者一下植野南遺跡の調査から一」(『京都府埋蔵文化財情報』第79号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2001
- B-4：石井清司「平成12年度下植野南遺跡(上層)の発掘調査」(『京都府埋蔵文化財情報』第81号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2001
- B-5：松尾(中島)史子「久我畷の発掘調査」(『京都府埋蔵文化財情報』第82号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2001
- B-6：増田孝彦「平成13年度発掘調査略報 16. 下植野南遺跡」(『京都府埋蔵文化財情報』第83号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2002
- B-7：増田孝彦「平成14年度発掘調査略報 2. 下植野南遺跡(土辺地点)」(『京都府埋蔵文化財情報』第83号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2002
- B-8：引原茂治「平成14年度発掘調査略報 20. 下植野南遺跡(門田・五条本地点)」(『京都府埋蔵文化財情報』第83号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2002

下植野南遺跡の周辺調査では、東隣りの大山崎町体育館建設に伴う長岡京跡右京第188次調査、名神拡幅工事に伴う調査が終了し、報告書も刊行されている。既に刊行されている報告書には以下のものがある。

- C-1：林亨・近澤豊明・中塚良「下植野南遺跡－長岡京跡右京第188次調査報告」（『大山崎町埋蔵文化財調査報告』 第3集 大山崎町教育委員会） 1996
- C-2：中川和哉ほか『下植野南遺跡』（『京都府遺跡調査報告書』第25冊 （財）京都府埋蔵文化財調査研究センター） 1999

第2章 検出遺構

第1節 基本層序と古環境

下植野南遺跡門田地区での発掘調査前の状況はF地点、G地点の大半が水田部分であり、J地点は大山崎町多目的広場、H地点が宅地、I地点が府道下植野大枝線であり、集落が密集しているという状況ではなかった。

調査前の地表面は土地利用によって異なるが、旧表土面は標高11.2m前後を測り、後述する弥生時代遺構面は標高9.6m前後で、北東方向から南西方向に比高差約0.8m前後とわずかに傾斜している。この弥生時代の遺構面から旧地表面までの約2m前後の土層の堆積状況(第4図)をみると、旧地表面下の標高10.6m前後までは中・近世の耕作に伴う包含層と調査地の東側を流れる小泉川の洪水層が堆積している。この洪水層は少なくとも3～4回に亘って堆積しており、そのたびに耕作化の努力が行われていたようであり、五条本地区、土辺地区では人や偶蹄目の動物の足跡や耕作に伴う畝などが数多く検出されている。

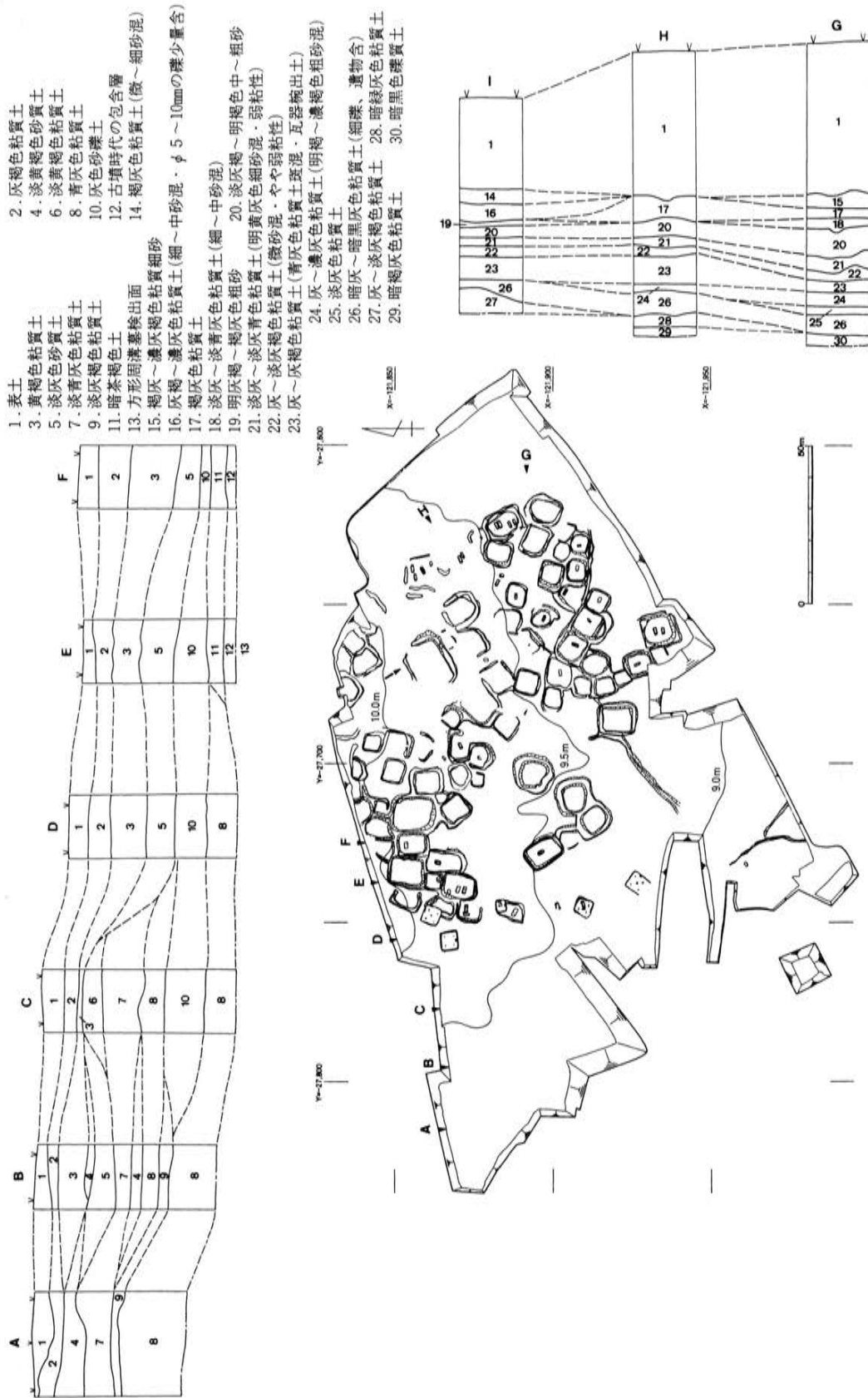
古墳時代の遺構は中世包含層の下、標高10m前後に堆積している暗茶褐色土、灰褐色粘質土を除去した段階で、古墳時代中期以降、平安時代までの遺構面(上層遺構面)を検出した。さらに古墳時代中期以降の基盤層、暗黒灰色粘質土を除去して縄文・弥生・古墳時代前期の遺構面(下層遺構面)を検出した。ただ、古墳時代中期以降の基盤層、暗黒灰色粘質土は北西部のF地点では厚く堆積しているが、南東部のJ地点では薄くなる傾向にある。

今回の調査では、周辺環境、特に後述する久我畷に関する検討が必要であったため、花粉分析^(注17)を行ったところ、中・近世包含層の上面堆積土からは「針葉樹のマツ属複維管束亜属が非常に卓越し、落葉広葉樹のハンノキ属、コナラ亜属などが混じる森林」で、中世包含層下面の瓦器碗を含む堆積土では「コナラ亜属とマツ属複維管束亜属が優占する森林」であった。また、調査地全域のサンプルでは「イネ科が非常に高率であり、オモダカ属、ミズアオイ属、キカシグサ属、サンショウモなどのいわゆる水田堆積が多く」、たとえ久我畷が機能していても集落が道路沿いに並ぶという光景ではなく、田園地帯のなかに道路が存在する光景であったと思われる。

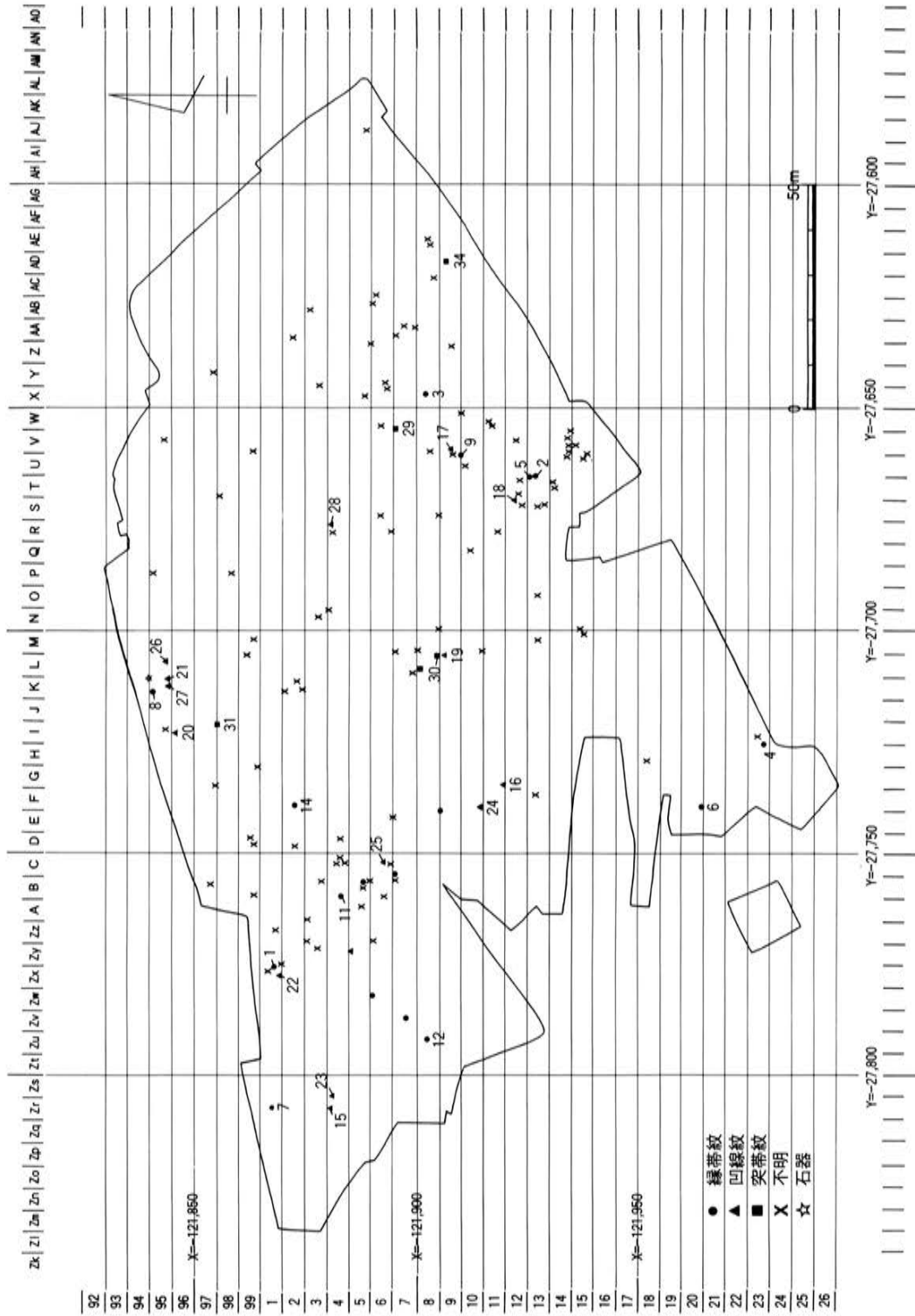
第2節 縄文時代の遺構と遺物

(1)遺構

方形周溝墓の基盤層である黄褐色粘質土での精査に際して縄文土器が点在しており、縄文時代の遺構の有無を確認するために精査を行った。その結果、各地点とも明確な遺構はなく、F地点でわずかに弥生時代の遺構面の下層で炭化物が検出された。この炭化物は包含層中に散乱した状態であり、その出土状況から遺構面とは認識できなかった。また、G地点の調査でも南北25m、



第4図 各トレンチ土層柱状図



第5図 縄文遺物分布図

付表2 縄文土器一覧

報告	器種	時期	型式名	遺構	報告地区名	備考(縄目・胎土)
1	深鉢口縁		縁帯文	SDF98	1-Zx	
2	深鉢		縁帯文	STJ20 東溝下層包含層	13-T	
3	深鉢口縁	後期前葉～中葉	縁帯文	包含層	7-J	北白川上層
4	深鉢	後期前葉～中葉	縁帯文	包含層	23.24-H. I	
5	深鉢		縁帯文	STJ20東溝下層包含層	13-T	
6	深鉢口縁	後期前葉～中葉	縁帯文	包含層	20.21-E. F	
7	浅鉢	後期前葉～中葉	縁帯文	SDF01	1-Zr	北白川上層・波状口縁
8	深鉢耳部	後期前葉～中葉	縁帯文	STF206	94.95-J. K	北白川C?
9	深鉢	後期前葉～中葉	縁帯文	STJ05北溝	10-U	渦巻状
10	深鉢	後期前葉～中葉	縁帯文	包含層	特定不能	窓枠状
11	深鉢	後期前葉～中葉	縁帯文	包含層	4-A. B	巻き貝ではない
12	浅鉢か	後期前葉～中葉	縁帯文	包含層	8-Zu	
13	深鉢か	後期前葉～中葉	縁帯文	包含層	特定不能	北白川上層
14	浅鉢か	後期前葉～中葉	縁帯文	STF181	2-E. F	北白川C?
15	深鉢口縁	後期末～晩期初	凹線文	包含層	3.4-Zr	滋賀里 I
16	浅鉢	後期末～晩期初	凹線文	包含層	11.12-F. G	滋賀里 I
17	深鉢口縁	後期末～晩期初	凹線文	STJ05北西溝	9-U. V	波状口縁
18	深鉢口縁	後期末～晩期初	凹線文	STJ106東溝	12-S	肥厚・福田K II
19	深鉢口縁	後期末～晩期初	凹線文	STG69東溝	9-L	
20	深鉢か	後期末～晩期初	凹線文	STF189西溝	95.96-I	滋賀里 I
21	深鉢か	晩期末	凹線文	STF204	95-K	
22	深鉢か	後期末～晩期初	凹線文	包含層	1.2-Zw~ Zy	粗製
23	浅鉢口縁	後期末～晩期初	凹線文	SHF111-8	4-Zs	精製・滋賀里 I
24	浅鉢		凹線文	包含層	10.11-E. F	
25	浅鉢口縁	後期末～晩期初	凹線文	SHF113畦	6-C	宮滝・波状口縁
26	浅鉢	後期末～晩期初	凹線文	STF204	95-L	ヘナタリ?・滋賀里 I
27	浅鉢	後期末～晩期初	凹線文	STF204	95-K	
28	浅鉢		凹線文	STJ77西溝包含層	4-R	
29	深鉢口縁	晩期末	突帯文	STJ84	6.7-V. W	無刻
30	深鉢	晩期末	突帯文	STG69東溝	8-L	長原
31	深鉢	晩期末	突帯文	STF186西溝(F-G)	97-I	長原
32	粗製深鉢			包含層	特定不能	
33	深鉢口縁	晩期末	突帯文	包含層	特定不能	長原
34	底部	晩期末	突帯文	SPJ187 南拡張区	9-A. D	

東西20mにわたり、幅3m、深さ2m以上のサブトレンチを設定し、下層の断ち割り調査を行ったが弥生時代以前の遺構は検出できなかった。

出土した遺物は、縄文時代後期前葉～中葉(縁帯文期)、後期末～晩期初頭(凹線文期)、晩期末(突帯文期)の3時期があるが、いずれも遺構に伴うものではなく器壁も磨滅が著しい。土器の分布状況(第5図)のとおり、縁帯文期・凹線文期のものは全体としては西半に偏り、突帯文期のものは東半に分布の中心がある。

これまでの調査でも体育館地点で突帯文土器片が、名神拡幅地点のC-3トレンチでは滋賀里IV式の土器棺が検出されており、晩期の土器分布は東に広がるようである。

(2)遺物(図版第198)

縄文時代の遺物は、縄文時代後期前葉から中葉(縁帯文期)、後期末から晩期初頭(凹線文期)、晩期末(突帯文期)の3時期がある。いずれも明確な遺構に伴わない包含層資料で、出土した縄文土器は時期の判別が困難なものが大半である。時期の判別したものについてはそれぞれ縁帯文(●)、凹線文(▲)、突帯文(■)とし、図版第198に示した縄文土器の出土地点は、第5図の番号で明示した。

縄文時代後期前葉～中葉(縁帯文期)の遺物には深鉢(1～13)と浅鉢(14)がある。有文のものには渦巻状(9)と窓枠状(10)がある。

縄文時代後期末～晩期初頭(凹線文期)の遺物は、宮滝式から滋賀里I式までの遺物である。27は山形口縁の浅鉢で頸部にヘナタリによる凹線文系土器で、山形口縁部直下にはヘナタリの頭部を突き刺して展開させる扇形文が認められる。宮滝式までさかのぼる資料は確実なものはこの1点のみである。

縄文時代晩期末(突帯文期)の遺物は、船橋式から長原式にかけての遺物である。出土した個体数は、縄文時代各時期を通じて最も少ないが、破片の大きさはこの時期のものが最も大きい。

なお、石器には縄文時代のものと思われる石鏃のほか、方形周溝墓S T F 205の南溝から石棒と思われる石材(緑泥片岩製)が出土した。周溝内からは、この石棒以外にも8・21・26・27などの縄文時代後期後半から末の宮滝式の縄文土器が出土している。

第3節 弥生時代の遺構

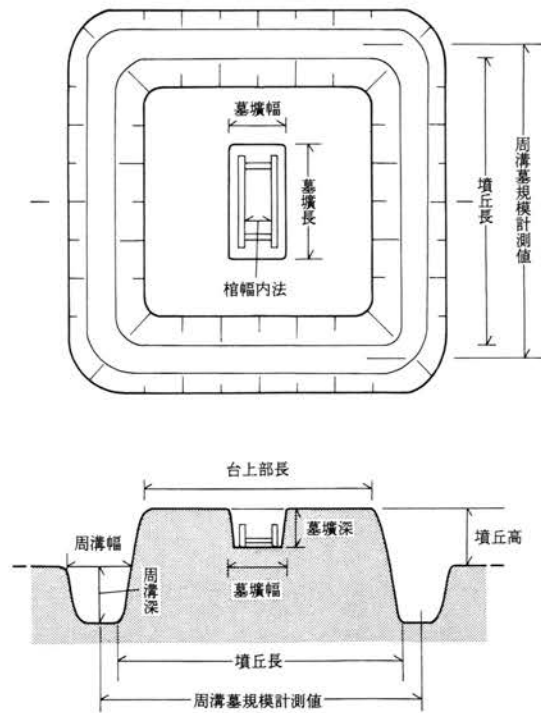
(1)方形周溝墓の名称と計測値について(第6・7図)

はじめに本書で使用する方形周溝墓の各呼称を定義し、数値の計測方法も明示しておきたい。

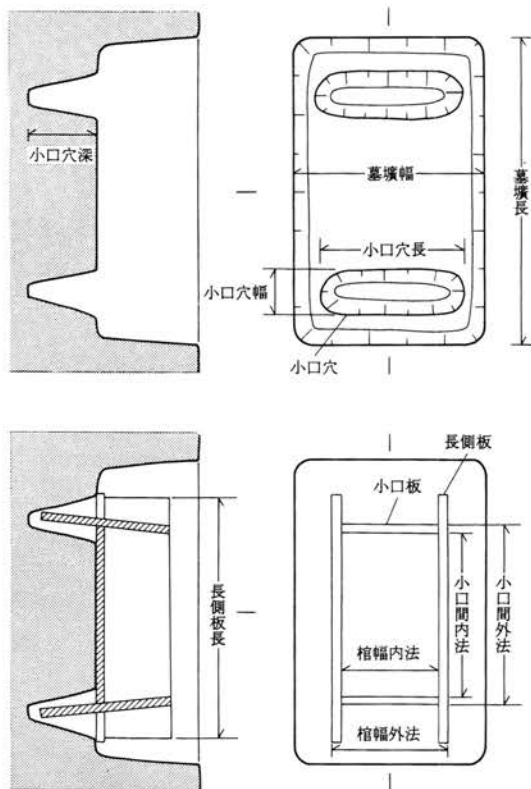
方形周溝墓の「規模」については、周溝の中央から、反対側の同じ地点までを計測する。これは検出のレベル、つまりは削平の度合いによって規模が変わることを避けるためである。「面積」もこの数値を元にして計算している。

「墳丘」は周溝内の墳丘側の立ち上がりから反対側の同じ地点までを指し、その長さを「墳丘長」とする。また、特に「台状部長」と断った場合は検出された面での墳頂部平坦面の長さを指している。

「周溝幅」は検出された数値を採用している。つまり、墳丘が弥生時代のベース面以下まで削平されている場合は検出面の数値を、墳丘が残存している場合はベース面でその幅を計測してい



第6図 方形周溝墓名称図



第7図 主体部名称図

る。「周溝深」「墳丘高」も同様である。

主体部に関しては、墓壇または木棺痕跡の長軸に当たる部分を「長」、短軸に当たる部分を「幅」としている。これは小口に関しても同様である。「墓壇深度」は検出面から墓壇底面まで、「木棺深度」は木棺底板の下面と認識できる部分までの深さを指す。

木棺については、遺存状況が良ければ内法、外法といった計測値の表示が可能であるが、当遺跡では木棺の棺材が遺存しておらず、内法を計測することはできなかった。このため本文中や主体部一覧表などで「棺の長さ」「棺の幅」といった表現をとる場合は全て外法の数値が採用されるものと理解されたい。

(2) 方形周溝墓

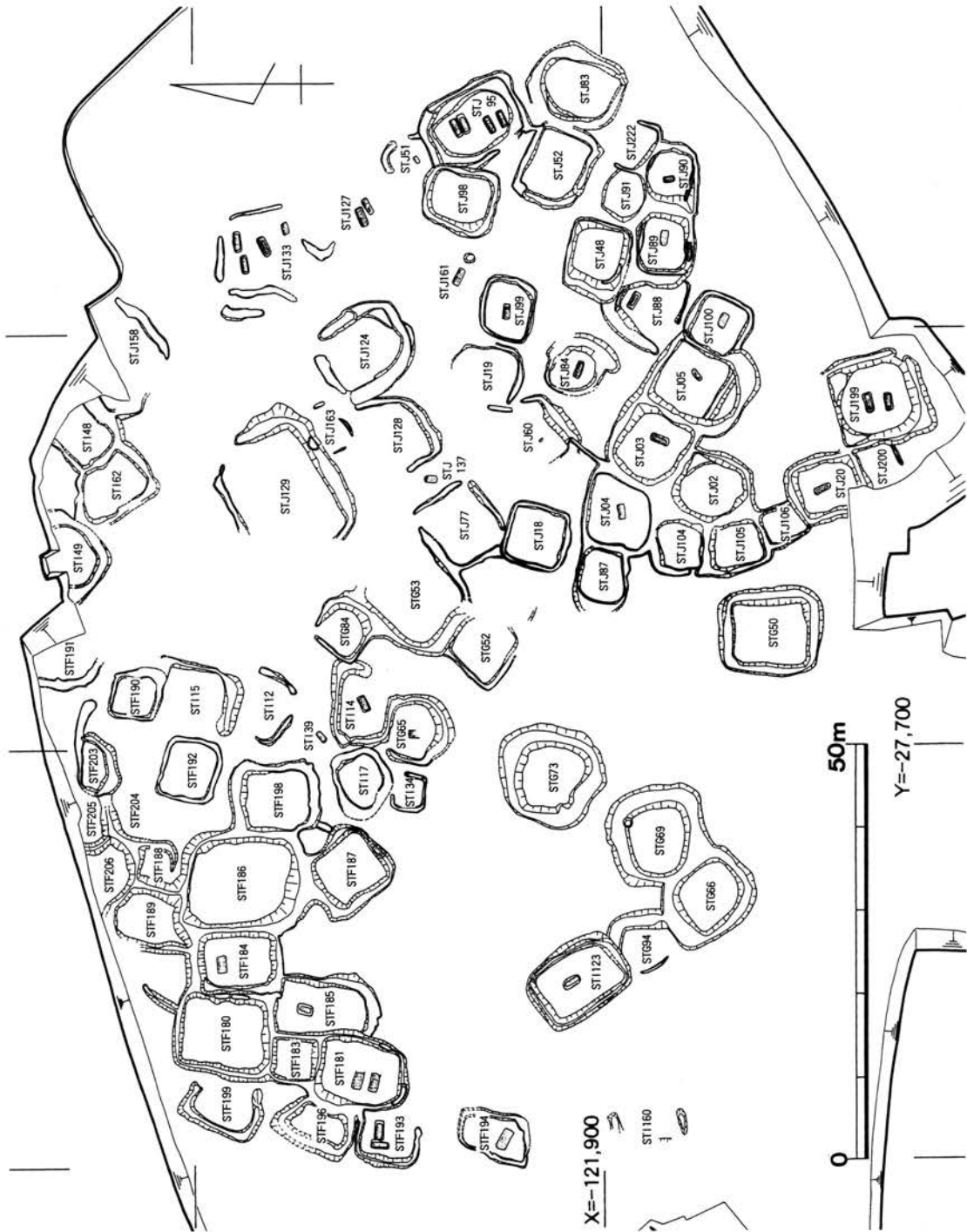
下植野南遺跡では、過去に報告されたものを含めると、総数79基の方形周溝墓が検出されている。本報告で扱うのは、このうち、平成9年度以降に検出された76基の方形周溝墓と3基の木棺墓、土壙墓である。

なお、各方形周溝墓は西北のものから南東のものへと順を追って記述することとし、遺構番号順には並んでいない(付表3 方形周溝墓規模一覧表を参照)。

STF199(図版第7) 96~98-D~F区で検出した南北に長い長方形の方形周溝墓で、墳丘中央をSDF22によって壊されている。面積は約54.8㎡以上である。溝は四周をめぐり、東溝はSTF180西溝と共有する。この両者の前後関係は不明である。この周溝墓からは供献土器は出土していない。

STF196(図版第7) 99・1-D~F区で検出した南北に長い長方形の方形周溝墓で、墳丘北

西隅をSHF174によって壊されている。面積は35㎡以上である。溝は四周をめぐり、東溝はSTF181西溝と共有する。この両者の前後関係は不明である。供献土器は東溝から壺42が1点出



第8図 弥生時代遺構全体図

付表3 方形周溝墓規模一覧

単位m

番号	遺構名	規模		面積 (㎡)	主体 部数
		東西	南北		
1	STF199	6.6+	8.3	54.8+	
2	STF196	4.8	7.3	35.0+	
3	STF193	6.8+	7.0	47.6+	2
4	STF194	4.6	8.5+	39.1+	1
5	STF183	5.3	5.9	31.3	
6	STF181	8.0	10.5	84.0	2
7	STF180	8.6	11.1	95.5	
8	STF185	6.4	12.5	80.0	1
9	STF184	7.6	9.9	75.2	1
10	STF189	7.2	8.7	62.6	
11	STF206	6.9	5.1+	35.2+	
12	STF188	5.0	4.7	23.5	
13	STF186	11.5	13.8	158.7	
14	STF187	7.5	8.7	65.3	1
15	STF205	4.4+	3.1+	13.6+	
16	STF204	4.7+	3.5+	16.5+	
17	STF203	6.3	3.7	23.3	
18	STF192	7.1	6.4	45.4	
19	STF198	8.1	9.2	74.5	
20	STF190	5.3	5.6	29.7	
21	STI15	7.5+	9.0	67.5+	
22	STI12	7.5	7.0	52.5	
23	STF191	3.0+	7.0+	21.0+	
24	STI49	7.6+	6.6+	50.2+	
25	STI48	7.1+	6.5	46.2+	
26	STI62	6.6	9.0	59.4	
27	STJ158	10.7+	11.5	123.1+	
28	STI160	4.5+	8.1	36.5+	
29	STI123	7.5	10.5	78.8	1
30	STI17	6.5	5.8	37.7	
31	STI34	4.2	3.7	15.5	
32	STI39	—	—	—	1
33	STI14	8.6	6.5	55.9	1
34	STG65	7.4	6.9	51.1	1
35	STG84	6.1	5.8	35.4	
36	STG94	5.1	6.3	32.1	
37	STG66	9.4	8.3	78.0	
38	STG69	9.8	9.1	89.2	
39	STG73	9.7	10.0	97.0	
40	STG52	6.9+	8.0	55.2+	
41	STG53	11.1	11.3+	125.4+	
42	STJ77	8.2	8.9	73.0	
43	STJ18	7.0	7.3	51.1	
44	STG50	8.7	10.6	92.2	
45	STJ87	7.4(+)	5.6	41.4(+)	
46	STJ04	8.9	8.5	75.7	1
47	STJ104	6.5	6.2	40.3	
48	STJ105	6.2	6.9	42.8	
49	STJ106	4.4	5.4	23.8	
50	STJ02	8.2	9.0	73.8	
51	STJ20	7.3	8.3	60.6	1
52	STJ03	9.4	8.5	79.9	1
53	STJ200	5.7+	5.1	29.1+	
54	STJ199	9.5	10.1(+)	96.0(+)	2
55	STJ05	8.3/10.4	8.6	71.4/89.4	1
56	STJ100	6.7	6.7	44.9	1
57	STJ129	12.3	16.0+	196.8+	
58	STJ163	4.7	5.9	27.7	
59	STJ137	—	—	—	1
60	STJ128	8.9	6.5+	57.9+	
61	STJ124	8.7	10.1	87.9	
62	STJ60	8.7	4.0+	34.8+	1
63	STJ19	7.6	8.4+	63.8+	
64	STJ84	6.1	6.1	37.2	1
65	STJ99	7.1	6.1	43.3	1
66	STJ88	7.0	8.3	58.1	1
67	STJ48	7.5	6.8	51.0	
68	STJ89	8.6	6.9	59.3	1
69	STJ91	6.5	6.0(+)	39.0(+)	
70	STJ90	7.3	6.2	45.3	1
71	STJ222	6.0	3.6+	21.6+	
72	STJ133	9.4	8.5+	79.9+	4
73	STJ127	—	—	—	2
74	STJ161	—	—	—	1
75	STJ98	6.6	8.2	54.1	
76	STJ51	5.0+	5.8	29.0+	1
77	STJ95	8.5	11.9	101.2	4
78	STJ52	9.1	7.3	66.4	
79	STJ83	8.0+	10.2	81.6+	

土している。

S T F 193(図版第8・9) 1～3-D・E区で検出したほぼ正方形の方形周溝墓で、面積は47.6㎡以上である。溝は四周をめぐるが、南溝は東半分が浅く、すでに削平されて検出できなかった。S T F 181西溝と共有する東溝は深く、断面「U」字形に掘削され、検出面から80cmの深さがある。

主体部は、墳丘の中央からやや北よりの位置で、2基が直交して配されている。西側に位置する第1主体部が先行する主体部である。ともに木棺と掘形の埋土の差を確認したが、木棺痕跡は明確ではなかった。主体部同士に切り合いが認められるもの、また、直交して配されるものは当遺跡ではこの周溝墓に限られる。2基の主体部に埋置された木棺はどちらも小口板を底板に載せる型式である。木棺痕跡の長軸は第1主体部が182cm、第2主体部が150cmで共にやや大型である。

供献土器は西溝の第1主体部に近接した地点で4個体が出土した。全て周溝が中位まで埋没した段階の遺物である。特に壺35・36は同一レベルでの出土であることから、墳丘上から転落したのではなく、当初から周溝内へ入れられた可能性が高い。

S T F 194(図版第9・10) 4～6-D・E区で検出した南北に長い長方形の方形周溝墓で、面積は39.1㎡以上である。溝は四周をめぐるが南溝は東半分が浅く明確ではない。溝の深度は約25cmで「U」字形に浅く掘り込まれている。北溝はS H F 171によって削平されており、周溝も検出できなかった。

主体部は墳丘の中央からやや南よりの位置で1基確認したが、主軸には沿っていない。木棺痕跡は明確でなく土壙墓の可能性もある。墓壙の規模は長軸270cm、短軸120cm、残存深度50cmである。

供献土器は西溝から3個体が出土した。壺39、鉢40は周溝の底に近い位置から、北側に位置する甕41は溝底から浮いた位置から出土している。ただし、レベル的には変わらないことからほぼ同時期に転落もしくは投棄されたものと考えられる。

S T F 183(図版第11) 99-F区で検出したほぼ正方形の方形周溝墓で、面積は31.3㎡である。溝は四周をめぐるが東溝と西溝は30～37cmと浅く、そのほかは70～86cmと深い。その溝の深度差は約45cmと開きがある。周溝は西溝を除く3方をほかの方形周溝墓と共有する形となっているがその前後関係は不明である。周溝深度の差は再掘削などに起因するものと考えられるが、周溝を共有しない西溝が浅いことから、本来のS T F 183に伴う周溝は浅いものであると判断できる。

供献土器は東溝から壺59が出土した。遺物は周溝の底に近い位置から出土しているが、頸部以上は出土していない。

S T F 181(図版第12・13) 1・2-E・F区で検出した南北に長い長方形の方形周溝墓で、面積は84㎡である。溝は四周をめぐる。

主体部は墳丘中央より南半の範囲で2基検出した。ともに古墳時代の流路S D F 22によって主体部の東端上部が削平されているが、墓壙の立ち上がりを確認することはできた。木棺の痕跡は検出できていないため土壙墓の可能性が高い。主体部は北側に位置する第1主体部が長軸231cm、南側の第2主体部が長軸221cmではほぼ同規模の墓壙長である。2基の主体部は墓壙の西端を揃え

付表4 方形周溝墓主体部・木棺墓一覧

単位cm

遺構名	種別	型式	墓壇			棺			備考	被葬者
			長辺	短辺	深度	長辺	短辺	深度		
STF193-1	木棺墓	無	218	97	13	182	44~50	13	直交配置	
STF193-2	木棺墓	無	234	102	16	150	58~66	16		
STF194-1	土壇墓?	—	270	120	50	—	—	—		
STF181-1	土壇墓?	—	231	109	12	—	—	—	石鏃1・剥片1	
STF181-2	土壇墓?	—	221	106	16	—	—	—		
STF185-1	木棺墓?	無	190	118	51	130	58~60	51	石鏃5・剥片1	
STF184-1	土壇墓?	—	199	111	32	—	—	—		
STF187-1	木棺墓	無	250	116	75	168	48	32	周溝内埋葬	
STI123-1	木棺墓	有	254	137	70	190	53	42		
STI39-1	木棺墓?	無	150	48	11	53+	31	11		
STI14-1	木棺墓	有	200	94	14	155	66	12		
STG65-1	木棺墓	有	76+	107	18	58+	71	18		
STJ04-1	土壇墓?	—	173	72	14	—	—	—		
STJ20-1	木棺墓?	無	218+	80	20	—	—	—		
STJ03-1	木棺墓	無	234	102	30	182	42~45	30	石鏃1・剥片1	
STJ199-1	木棺墓	無	246	100	41	180	46	36	剥片1	
STJ199-2	木棺墓	有	222	90	34	160	47	29	剥片1	
STJ05-1	土壇墓?	—	162	66	12	—	—	—		
STJ100-1	土壇墓?	—	171	95	11	—	—	—	剥片2	
STJ137	木棺墓	有	157	92	39	146	41	29	区画外	
STJ60	木棺墓?	有	—	—	—	—	—	—	小口穴?	
STJ84-1	木棺墓	無	212	84~92	18	150	47~51	18	棺底板無し?	
STJ99-1	木棺墓	有	190	79~84	9	166	57	9	石剣1・石鏃4・剥片44	
STJ88-1	木棺墓	無	216	92	27	150	30	21	剥片1・浅い棺	
STJ89-1	木棺墓	無	178	80	16	104	40	16		小児
STJ90-1	木棺墓	有	140	71	11	100	36	9		小児
STJ133-1	木棺墓	無	242	92	33	173	64	33	石鏃7・剥片1	
STJ133-2	木棺墓	有	142	80	20	50+	—	—		小児?
STJ133-3	木棺墓	有	219	79~84	31	178	58	31		
STJ133-4	木棺墓	無	252	109	42	162	50	42	剥片1	
STJ127-1	木棺墓	有	231	100	34	180	53	34	区画外・石鏃1	
STJ127-2	木棺墓	有	210	80	19	170	52	19	区画外・剥片1	
STJ161	木棺墓?	有	213	84	44	185	—	—	区画外・木蓋土壇墓?	
STJ51-1	木棺墓	有	97	51	25	62	34	25	石鏃1	小児
STJ95-1	木棺墓	無	240	92	24	196	62	24	剥片3	
STJ95-2	木棺墓	無	249	88~101	21	190	49	21	剥片1	
STJ95-3	木棺墓	無	216	82	19	175	53	19		
STJ95-4	木棺墓	有	206	85	8	156	55	8	剥片1	

た形で並んで掘削されており、ほぼ同時に埋葬されたか、計画的に墓壇が配置されたかのいずれかの可能性が考えられるが、当遺跡ではこうした並列する主体部は複数検出されている。このことから、後者の可能性が高いものと考えられる。第1主体部からは石鏃1点、剥片1点が出土し

ている。出土の位置などについては不明である。

供献土器は南溝から7個体、東溝から2個体が出土した。特に南溝の供献土器は約1.5mの範囲に6個体が集中して出土しており、これら全てを墳丘上から転落したと考えることは難しい。東溝から出土した水差47は胴部中位から上下に割れ、1個体の水差が口縁部と底部を接するように出土した。墳丘上から転落した場合でもこのような状況になる可能性はあるが、そうした説明ではやや不自然な出土状況である。周溝内に意図的に投棄されたものである可能性が指摘できよう。

S T F 180(図版第14・15) 96~98-F~H区で検出した南北に長い長方形の方形周溝墓で、面積は95.5m²である。溝は四周をめぐる。供献土器は東溝から8個体、北溝から2個体、西溝から1個体が出土した。最も供献土器が多い方形周溝墓である。

供献土器は東溝のものが周溝底に接した形で出土しており、北溝と西溝のものはやや浮いた状態で出土している。北溝から出土した壺58・甕64は、周溝の底からやや浮いた状態で出土した。ほぼ検出レベルが揃い、かつそれぞれの口縁と底部が互い違いになる格好で出土しており、これも周溝内に投棄された可能性が指摘できる。最も集中度の高かった東溝では、約3.8mの範囲から8個体の土器が出土した。墳丘上に置かれた供献土器がこの地点に集中して転落したとは考えにくく、むしろ当初から周溝内へ投棄されたものと考えられる。また、出土した土器は完形には復原することができず、同一個体の破片は比較的近い位置で、かつ破片同士が複雑に折り重なるように出土している。東溝はのちにS T F 184によって再掘削されているが、この遺物が出土した深度には達しておらず、これらの供献土器の出土状況はS T F 180に伴うプライマリーなものであると判断できる。朝鮮系無文土器の可能性が考えられる甕65もこの一群から出土している。

S T F 185(図版第16・17) 99~2-G・H区で検出した南北に長い長方形の方形周溝墓で、面積は80m²である。溝は四周をめぐるが南溝がやや不整形である。

墳丘中央からやや北に寄った位置で主体部を1基検出した。墓壙長軸190cm、残存深度は51cmで比較的遺存状況は良い。この主体部では検出時に木棺痕跡の一部を確認しており、その長軸は130cmである。棺内から4点の石鏃と剥片1点が出土したが、これらは埋土を全量採取して洗浄した結果出土したもので、棺内における石鏃の正確な位置は不明である。

供献土器は東溝から3個体、南溝から2個体、西溝から1個体が出土した。ただし、西溝のものは出土状況などからS T F 183に伴う可能性が高い。供献土器は東溝のものがやや溝から浮いた状態で出土している。甕68・69は細片での出土である。

S T F 184(図版第17・18) 97・98-H・I区で検出した南北に長い長方形の方形周溝墓で、面積は75.2m²である。溝は四周をめぐる。周溝の深さなどから、S T F 180の周溝が埋没した後には築造されたものと考えられる。主体部は墳丘中央より北に寄った位置で1基検出した。木棺痕跡は確認できず、土壙墓となる可能性が高い。墓壙は長さ199cm、幅111cmである。

供献土器は東溝と南溝から各1個体、西溝から8個体が出土した。ただし、東溝のものは出土状況などからS T F 186、西溝のものはS T F 180に伴うものと判断される。供献土器は南溝の壺71がやや溝底から浮いた状態で出土している。

S T F 189(図版第19) 調査範囲内では最も北に位置する95・96-I・J区で検出した南北に長い不整な長方形の方形周溝墓である。面積は62.6㎡である。溝は四周をめぐるが西溝は後世の攪乱によって一部が失われている。周溝はS T F 188と共有する東溝だけが深く、ほかと共有しない西溝は浅いことから、この方形周溝墓の溝は本来浅かったものと判断できる。主体部は検出できなかった。供献土器は西溝から広口壺72が出土している。

S T F 206(図版第20・21) 調査区の北端94・95-J・K区で検出した方形周溝墓で、面積は35.2㎡以上である。S T F 206の北溝は調査区外にあり、検出したのは残る3方向の溝である。周溝は深さ約70~90cmで断面はゆるやかな「U」字形を呈している。南溝では周溝以下のベース面に板状炭化物を検出した。この板状炭化材については、周溝内埋葬などの木棺材の可能性もあると考え、複数の断ち割りをを入れて検討したが、掘形などは認識できず、材も幅20~30cm程度の大きさであったことから方形周溝墓に伴うものではないと判断した。主体部は検出できなかった。

西溝から壺74、供献土器は南溝から鉢73・87、甕88が出土している。このうち南溝から出土した鉢87、甕88については、出土位置などからS T F 204に伴うものであると判断した。

S T F 188(図版第21・22) 95・96-J・K区で検出したほぼ正方形の方形周溝墓で、面積は23.5㎡である。下植野南遺跡では面積の狭い部類に入る。周溝は四周をめぐるが、南溝はS T F 186の北溝と共有せずに巻き込むような形状となっている。この溝は急に浅くなって途切れるため本来はS T F 186の北溝がこの周溝墓の南溝であった可能性もある。主体部は検出できなかった。

供献土器は東溝で無頸壺75とミニチュア壺76の2個体が出土した。出土状況から、ミニチュア土器は底部を欠く無頸壺の内部に入っていた可能性が高い。こうした出土状況はS X G 97などでも認められる。また、神足遺跡・長岡京跡右京第766次調査にも同様な報告例がある。

S T F 186(図版22・23) 96~99-I~L区で検出した東西11.5m、南北13.8mの南北に長い方形周溝墓で、面積158.7㎡の規模を誇る。規模が確定しているものの中では最大である。周溝は四周をめぐる。主体部は検出されていない。

供献土器は西溝から1個体、南溝から2個体が出土している。いずれも壺である。

S T F 187(図版第24・25) 1・2-J・K区で検出したほぼ正方形の方形周溝墓で、面積は65.3㎡である。周溝は四周をめぐる。主体部は墳丘上では検出されなかったが、南溝で周溝内埋葬を1基検出した。この周溝内埋葬は、周溝調査を進めていく段階で墳丘裾を切り込む墓壇ラインを検出したことから、急遽、中央部に墓壇の短軸方向を観察するために畦を残しながら慎重に進めた。その結果、棺の底近くの部分ではあったが、側板の痕跡を平面的に確認することができた。この周溝内埋葬の墓壇は、周溝がほぼ埋没した段階で掘削されている。棺内の長軸断面図がやや不十分なものとなったが、墓壇は検出面で長軸250cm、短軸116cm、短軸の断面観察から木棺は少なくとも32cmの深さがあることが判明している。墓壇底に小口穴が穿たれていないことから小口板を棺底にのせる型式の木棺であると考えられる。

供献土器は東溝から3個体、西溝から3個体、北溝から1個体が出土している。東溝の高杯を除けばいずれも小片である。西溝では標高9.7m付近を中心に遺物が散乱した状況で出土した。

周溝内埋葬が9.7~9.8mのレベル付近で切り込み面を確認していることから、周溝内埋葬の前後にこの遺物が埋没したものと考えられる。

S T F 205(図版第26) 調査区の北端94-K・L区で検出した方形周溝墓で、面積は13.6㎡以上である。周溝は東溝を除く3辺を検出した。その深さはベース面から約60cmで断面形状は「U」字形を呈する。墳丘盛土は約35cmが残存し、その単位は約15~20cmの厚さで帯状に積まれていることが断面で観察できたが、ブロック状の単位土を認識するには至らなかった。こうした状況は複数の方形周溝墓で確認できた。この帯状の単位が墳丘盛り上げ時の一単位となるものと考えられる。また、主体部は検出できなかった。

南溝から供献土器が出土しているが、位置などからS T F 204に伴うものである可能性が高い。

S T F 204(図版第26・27) 95-K・L区で検出した。この方形周溝墓は、S T F 205と共有する北溝、S T F 188と共有する西溝の一部を検出したのみで、全体を検出できなかった。面積は16.5㎡以上である。周溝の大部分を検出できなかったにもかかわらず方形周溝墓の可能性があると判断するのは、S T F 205と対応する墳丘盛土層を認識できたという点と、この方形周溝墓に伴うと判断できる供献土器(87・88)が出土しているという2点を根拠としている。それが成立しない場合は、方形周溝墓ではないと位置付けを改める必要がある。供献土器は北溝で2個体が出土した。共に周溝がベース面近くまで埋没した段階で墳丘から転落したものと考えられる。

S T F 203(図版第28) 94・95-L~O区で検出した東西に長い不整形な方形周溝墓で、面積は23.3㎡である。周溝は四周をめぐるが、どの溝も不整形で深さも揃わない。特に北溝は長く東にのびているが、並列する方形周溝墓は確認されていない。

供献土器は北溝で1個体出土している。北溝底に接する状態で出土した甕90は、残存率は3/4程度で残りの破片は出土しなかった。

S T F 192(図版第28・29) 96・97-L~N区で検出したほぼ正方形の方形周溝墓で、面積は45.4㎡である。溝は四周をめぐるが南溝だけがやや深い。いずれの溝もほかと共有していないが、東側に位置するS T I 15では西溝が検出されていないため、このS T F 192の東溝が利用されていた可能性がある。

供献土器はいずれもほぼ完形に近い個体が溝底に接するか、やや浮いた状態で出土している。周溝を共有する際に攪乱を受けなかったため、供献土器がほぼ原状で出土している可能性がある。この方形周溝墓では主体部は検出されていない。

S T F 198(図版第30) 98・99-L・M区で検出したほぼ正方形の方形周溝墓で、面積は74.5㎡である。溝は四周をめぐるが、西溝はS T F 186の東溝と共有する。周溝は浅い皿状で、供献土器は3個体出土している。地点が明らかなもののみドットで提示した。

S T F 190(図版第31) 94~96-N・O区で検出したほぼ正方形の方形周溝墓で、面積は29.7㎡である。溝は四周をめぐるが、西溝はS T I 15北溝と共有する。南溝は約50cm程度遺存しているが、ほかの周溝は削平をうけ、深さ25cm程度が残存するのみである。

S T I 15(図版第31・32) 96・97-N・O区で検出したほぼ正方形の方形周溝墓で、面積は

67.5m²以上である。北溝をS T F 190南溝と共有する。西溝を検出することができなかったが、S T F 192東溝を共有していた可能性もある。溝は幅・深さともに均一ではない。

供献土器は南溝から広口壺の口縁部(96)と胴部(97)の一部が出土している。

S T I 12(図版第33・34) 98・99-N・O区で検出した方形周溝墓で、東西の周溝は幅が狭いがしっかりと断面「U」字形に掘り込まれている。西溝は北に向かって次第に浅くなり途切れてしまう。面積は52.5m²である。供献土器は東溝から出土した如意状口縁の甕101のみである。

S T F 191(図版第34) F地点の東端、93・94-O・P区で検出した方形周溝墓で、面積は21m²以上である。周溝はゆるやかに弧を描いており、大半がトレンチの外側にある。供献土器の可能性のある甕104が出土したため、ここでは方形周溝墓の可能性を指摘しておきたい。

S T I 49(図版第35・36) 93・94-Q~S区で検出した方形周溝墓で、面積は50.2m²以上である。北半部は調査区外であるため検出できた周溝は南溝と西溝のみで、東溝はS T I 62の周溝を切る形で掘削されている。方位(主軸)の異なる周溝が切り合う例はこの方形周溝墓のみである。ただし、周溝埋土の認識はきわめて困難で、周溝の切り合いも含めて、そのほかの事例と比較しつつ検討する必要を残している。

供献土器は南溝から広口壺が1点出土している。出土状況や破片の散乱状況から、仮にS T I 62と切り合っている場合でも、この供献土器はS T I 49に属するものと判断できる。

S T I 48(図版第36・37) 93~95-T~V区で検出した長方形の方形周溝墓で、面積は46.2m²以上である。東部は調査区外のため東溝を除く3辺の溝を検出した。S T I 48は配管などの攪乱により一部は壊されていた。供献土器は南溝から壺105が出土している。

S T I 62(図版第37) 94・95-S~U区で検出したややいびつな長方形を呈する方形周溝墓で、面積は59.4m²である。周溝の一部は攪乱によって墳丘上面は古墳時代後期の流路S D G 48によって壊されている。S T I 62は非常に検出が困難で、西溝については一部検出できなかった。

S T J 158(図版第38・39) 94・95-V~X区で検出した方形周溝墓で、大半は調査区外にあり検出できなかった。面積は123.1m²以上である。周溝の大半は削平され、南溝では14~20cm程度しか残存していない。供献土器は、南溝から広口壺108が1点出土している。

S T I 160(図版第39) 8-D・E区で検出した方形周溝墓で、面積は36.5m²以上である。S T I 160は攪乱や上層遺構との切り合いが複雑で、遺構として認識できる部分はきわめて少ない。特に、この周辺は遺構の検出がきわめて困難な地域であったこともあり、全容は明らかではない。

方形周溝墓と認識できるのは北・南・西溝の一部で、西溝の一部と考えられる溝からほぼ完形の甕1点が出土した。この甕109は当初、後世の溝状遺構に巻き上げられた弥生時代の遺物と認識していたものであるが、調査後半段階で南北の併行する溝を検出し、この遺物がこの方形周溝墓に伴う可能性があるかと判断した。

S T I 123(図版第40~42) 6~8-G~I区で検出した長方形の方形周溝墓で、面積は78.8m²である。溝は四周をめぐるが、西溝の上層をS D F 22によって削平されている。周溝は深さ約60cmで断面「U」字形を呈している。北溝と東溝のコーナー部分はやや浅くなるが、その差は

23cm程度で陸橋部を形成するという状況ではない。墳丘の盛土は高さ28cmが残存しているが、盛土の単位を認識することはできなかった。

主体部は墳丘中央部で1基検出した。この主体部は盛土を切って掘削されており、墳丘上で検出したものとしては最も深く約70cmが遺存している。また、木棺痕跡も断面では比較的明瞭に確認することができた。墓壙の長軸254cm、短軸137cm、木棺の長軸190cm、短軸53cmである。木棺の平面プランは、箱型で小口板が墓壙底に差し込まれる型式のものである。

供献土器は、いずれも周溝底からやや浮いた状態で出土している。概報の段階ではS T G 94の北溝に属すると判断して報告した把手付きの台付鉢111も、出土層位などからこの周溝墓の南溝に属する遺物と考えられる。

S T I 17(図版第43) 1・2-L・M区で検出したややいびつな正方形の方形周溝墓である。面積は37.7㎡である。周溝はやや浅い断面「U」字形で四周をめぐる。特に西溝は検出状況が悪くプランが明瞭でない。墳丘盛土も20cm程度が残存しているのを確認した。周溝内からはこの墓に伴う遺物は出土していない。

S T I 34(図版第44) 2・3-L・M区で検出したほぼ正方形の方形周溝墓である。面積は15.5㎡と最も小さな方形周溝墓となる。周溝は基本的には四周をめぐるが、北東のコーナー部分だけは途切れている。この部分は広範囲で陸橋と呼ぶことは難しい。東溝は断面図B-B'の地点で約51cmの深さがあり、そこから急激に周溝の壁が立ち上がる。調査時には、周溝内埋葬の存在も視野に入れて調査を行ったが、そうした痕跡は認識できなかった。

S T I 39(図版第44) 1-N区で検出した無区画の木棺墓である。この木棺墓はS T F 198とS T I 12・14・17に囲まれた空地で検出された。周溝を検出できなかったことと、木棺墓の主軸が周辺の方角周溝墓と合わないことなどから、この主体部が区画溝を伴わない単独の木棺墓であると判断した。調査時の失敗で長軸の土層断面を半分しか実測できなかったが、棺内埋土と掘埋土の差を認識した。残存している部分から推定すると、被葬者は小児の可能性が高い^(注18)。

供献土器は出土しておらず、墓壙内からは、石鏃や剥片などの遺物も出土していない。

S T I 14(図版第45・46) 1・2-N・O区で検出した東西に長い長方形の方形周溝墓で、面積は55.9㎡である。溝は四周をめぐる南溝はS T G 65と共有する。周溝の東南コーナー部分が途切れる形態となっているが、これはG地点の調査時に周溝を検出できなかったため、本来は四周をめぐる可能性もある。S T I 14の東溝はS T G 84と切り合うが、G地点で周溝を検出できなかったこと、周溝と主体部の主軸が揃わないことなどから、無区画の主体部である可能性も考えられる。

主体部は、中央部で木棺墓を1基検出したが、墳丘とは主軸が異なっている。下植野南遺跡ではこのような検出例は少数である。木棺は墓壙底に小口を埋める型式のもので、小口穴と断面観察で確認できた木棺痕跡から棺の長辺155cm、短辺66cmの木棺を復原できる。供献土器は北溝から甕口縁部片114が出土している。

S T G 65(図版第46・47) 2~4-M~O区で検出したほぼ正方形の方形周溝墓で、面積は

51.1m²である。この周溝墓周辺は検出時、非常に周溝の埋土の認識に苦しんだ地点である。周溝墓は南溝が大きく湾曲して円形に近い形状を示しているが、南溝以外の周溝は全て直線的に掘削されており方形周溝墓と認識することができる。

主体部は中央で1基検出した。この主体部はI地点の調査時に検出したもので、長軸側は76cmが残存していた。G地点の調査では不定形の大きな落込みと認識したものであるが、ここでは主体部の可能性があるものとして報告しておきたい。埋土に差が認められたので、木棺墓の可能性が高い。供献土器は南溝から3点、西溝から1点が出土している。周溝からは、石器(S89)が1点出土している。

STG84(図版第48・49) 1・2-P・Q区で検出したほぼ正方形の方形周溝墓で、面積は35.4m²である。周溝は北西コーナー部分が切れる形態で、西溝が浅く幅も狭いのに対し、そのほかの周溝は幅も広く深い。これは東溝を共有するSTG53の再掘削によるものであると考えられる。墳丘盛土は45cm程度が遺存している。この周溝墓の北側にも墳丘盛土と考えられる層が認識できることなどから、調査区外にまだ方形周溝墓が広がる可能性が高い。

STG94(図版第49～51) 8・9-H・I区で検出した方形周溝墓である。当初の調査では図のような周溝と認識して調査を行った。しかし、調査終了時に墳丘と考えられる層を除去し、さらに下層にサブトレンチを入れて確認した結果、STI123の南溝と直交する位置で複数の供献土器と周溝の残欠を確認することができた。周溝の深さは検出面から17cm、幅は検出面で35cmと狭い。こうした幅の狭い周溝は、STJ48・88～90でも同様の検出例があり、また、当初墳丘と考えていた地点から供献土器と考えられる遺物が複数出土したため、図版第49でトーンを貼って示した部分が本来のSTG94の形である可能性が強いと判断した。

以上から復原すると、STG94は東西5.1m、南北6.3mの長方形の方形周溝墓で、面積は約32.1m²となる。周溝はおそらく四周をめぐっていたものと考えられる。北溝については、周溝の深さが異なることなどからSTI123の築造に伴って再掘削されたものと判断した。このことから、概報で扱った^(注19)把手付きの台付鉢111は、STG94の周溝墓ではなく北側のSTI123に伴うものと判断した。供献土器は、把手付きの台付鉢111を除いて4個体が出土している。

STG66(図版第51・52) 9～11-I～K区で検出したほぼ正方形の方形周溝墓で、面積は78m²である。周溝は北溝の一部をSTG69と共有しつつ四周をめぐり、東溝がやや幅が狭く深く掘削されるが、そのほかはやや浅い。土層の堆積状況から、周溝は比較的早い段階で埋没しているものと考えられる。供献土器は北溝から壺125・126が、西溝から壺116・124が、南溝から壺115が出土している。また、墳丘盛土は30～40cm程度残存しているが主体部は検出されなかった。

STG69(図版第53・54) 8～10-J～M区で検出したややいびつな正方形の方形周溝墓で、面積は89.2m²である。墳丘の北東隅を古墳時代前期の井戸SEG79に切られている。周溝は南溝の一部をSTG66と共有しつつ四周をめぐり、東溝から縄文時代晩期の突帯文の深鉢が出土しているが下層からの混入と考えられる。墳丘盛土は40cm程度残存しているが、主体部は検出されなかった。

S T G 73(図版第54～56) 5～7-L～N区で検出したややいびつな正方形の方形周溝墓で、面積は97m²である。墳丘の南西隅は下層の砂礫を誤って掘削したため、平面形が不整形となった可能性もある。周溝の断面は浅く広い椀形で四周をめぐる。

供献土器は北溝から壺129、南溝から壺128、甕130～132が出土している。この周溝墓に関するものとして特に注目されるのは、南溝より外側で検出された壺127である。その出土状況は図版第54のように、弥生時代のベース面上で土圧でつぶれたような状態で出土した。この土器は底部を下にして出土したが、破片は揃わなかった。状況的には底部を打ち欠かれた土器が、墳丘ではない周溝の外側に置かれていたと考えられるものである。

S T G 52(図版第57・58) 4・5-O～Q区で検出したほぼ正方形の方形周溝墓で、面積は55.2m²以上である。墳丘の東半分を古墳時代中・後期の流路S D G 48によって削られている。また、北溝をS T G 53の南溝によって再掘削されているが、本来は四周をめぐっていたものと考えられる。周溝の認識は非常に困難で、特に上層遺構と錯綜する南東コーナー部分では、溝の南側を検出ができなかった。墳丘はすでに削平されて残っておらず、主体部も検出されなかった。

供献土器は北溝で3個体、南溝で2個体が出土した。南溝で出土した高杯136は伏せた状態で、甕137は周溝にほぼ平行するように横倒しになって、南溝の底から約20cm程度浮いた状態で出土した。

S T G 53(図版第58～60) 2～4-P～R区で検出したややいびつな長方形を呈する方形周溝墓で、面積は125.4m²以上である。周溝の中央を古墳時代の流路S D G 48によって削られている。この方形周溝墓はG・I・J地点にまたがる位置にあり、3度にわけて調査する形となった。最終的には北溝を検出することはできなかったが、G地点の調査時には壁際で北溝の一部を検出しており、本来周溝は四周をめぐっていたものと考えられる。ただし、G地点で確認した北溝は、西溝がベース面から50cm程度掘削されているのに対してきわめて浅く、ベース面をわずかにくぼめる程度しか掘削されていなかった。この周溝墓以外にも四周のいずれかが極端に浅く掘られている例があることから、この溝がS T G 53の北溝であると判断した。墳丘については、G地点で確認したベース面から約20cm程度は残存していたものと推測されるが顕著ではなかった。主体部は検出されなかった。

供献土器は、西溝と東溝で出土したがいずれも破片で、まとまった形では出土しなかった。特に、西溝で出土した138・139は同一個体と考えられるもので、底部と胴部が約2.5mほど離れて出土した。このS T G 53の南溝がS T G 52の北溝や墳丘を壊す形で掘削されていることから、この周溝が再掘削された際に、溝内にあった供献土器も壊された可能性が考えられる。

S T J 77(図版第60・61) 3～5-R～T区で検出した正方形の方形周溝墓で、面積は73m²である。墳丘の中央を奈良時代の溝S D J 01によって削られている。南コーナーはS T J 18によって切られる。周溝は四周をめぐるが、北・東・南溝の3か所が途切れている。特に東コーナーについては50cm近い深さから急激に立ち上がっており、陸橋を意識して掘り残した可能性もある。西溝では供献土器と考えられる破片が出土しているが、遺物は完形ではなく、二次的に動いた形

跡がある。また、周溝の幅もほかの周溝と比較して広いことなどから、STG53によって再掘削された可能性がある。少なくとも、STG77はSTG53とSTI18に先行して造られているものと考えられる。墳丘については認識できず、主体部も検出していない。供献土器は先にも触れたように西溝で出土しているが、STG77に伴う供献土器がSTG83の周溝を掘削する際に巻き上げられた可能性が高いと考えられるため、壺140はこの周溝墓に帰属させた。

STJ18(図版第62・63) 5～7-R・S区で検出したほぼ正方形の方形周溝墓で、面積は51.1m²である。墳丘の中央を奈良時代の溝SDJ01によって削られている。周溝は細く深い形態のものが四周をめぐる。墳丘については盛土を確認できなかった。また、主体部も検出していない。この方形周溝墓はSTG77の周溝を一部切る以外は、ほかの方形周溝墓と接することがなく単独で存在している。ただし、STJ04の北溝との間に土層観察用セクション(図版第63、E-F)を残して観察した結果、ほぼ同時に開口していたことを確認している。

STG50(図版第63～65) 10～13-O～Q区で検出した南北に長い長方形の方形周溝墓で、面積は92.2m²である。周溝はいずれも共有せず単独である。周溝は深い「U」字形のもので四周をめぐる。周溝の深さは南溝ではベース面から80cmに達する。周溝の埋没状況から、周溝の下半はベース土や墳丘の崩落土によって短期間のうちに埋まっているものと思われる。南溝で出土した供献土器は、いずれも周溝の底に接する形で出土しており、埋没が始まる前に周溝内に転落、もしくは投棄されたものと考えられる。周溝のうち、西溝と北溝の上層は古墳時代前期の溝SDG51によって再掘削されている。

墳丘盛土は、古墳時代の暗黒灰色で砂礫混じりの洪水砂層によって覆われており、認識は容易であった。ただし、ここでも盛土は高さ30cm前後の帯状に観察できるのみで、ブロック状の盛り上げ単位は認識できなかった。盛土は最大で60cm近く残存していたが、主体部が存在した可能性の高い墳丘中央部分については現代の攪乱によって失われていた。この周溝墓では周溝が80cm近く、墳丘が60cm近く遺存していたことから、築造当時の墳丘上から周溝底までの高低差は、少なくとも2m近いものであったと考えられる。

供献土器は南溝から甕142が1点、周溝に平行する形で溝底に接した状態で出土した。また、南東コーナーから出土した壺141は、胴部下半を欠失しており、かつ口縁部が下になった状態で出土している。仮にこの土器が転落したと考える場合、墳丘でない側から転落していることになる。供献土器の位置付けについては、まとめて詳述することにした。

STJ87(図版第65・66) 7・8-Q・R区で検出したややいびつな長方形を呈する方形周溝墓で、面積は41.4m²である。周溝は四周をめぐるが西溝だけがやや歪である。墳丘については既に削平されていたものと考えられ、主体部も検出できなかった。供献土器は南溝で3個体、北溝の外側で3個体が出土した。東溝から出土した2個体はSTJ04に伴うものと判断した。南溝では周溝の底に接した形で水差148が倒立して出土しているが、この胴部上半は1m弱ほど東に離れた位置で出土した。どちらも周溝の底に接しており、転落したと考えた場合もほぼ同時であるものと考えられる。また、その東側で出土した壺146は、横転したような状態で出土した。これ

も墳丘側から転落した可能性が高いが、周溝の底からやや浮いた形で出土しており、先の水差とはやや時間的な開きが認められる。

S T J 04(図版第67~69) 7・8-R~T区で検出したややいびつな台形を呈する方形周溝墓で、面積は75.7㎡である。墳丘の西側を奈良時代の溝S D J 01によって削られている。周溝は四周をめぐり、北溝以外は周囲の方形周溝墓と周溝を共有する。また、東溝は古墳時代前期の溝S D G 51によって再掘削されている。

墳丘は既に削平されているものと考えられるが、墳丘中央部で主体部と考えられる土壌を1基検出した。この主体部は、ベース面と比べて砂礫を含まないことから遺構と判断したもので、S T J 84などで検出した明瞭な木棺痕跡を確認したものと比較すると判断が困難なものであった。埋土は分層が困難で、また、小口板の痕跡も認められなかった。ここでは土壌墓の可能性のあることを指摘するにとどめておきたい。

供献土器は、西溝の底からやや浮いた形で出土している。高杯151は脚部と杯部が約20cm程度離れて出土している。この高杯に近接した位置で出土した壺150は高杯と出土レベルがほぼ同じである。この壺は破損状況がひどく、頸部以上は出土していない。南溝で出土した広口壺149は、これら2個体の供献土器と対照的で口縁部の一部を除いてほぼ完形を保っている。口縁部は周溝の底に向かう側が欠損しており、周辺でも破片が出土していないことから、当初から打ち欠かれていたか、転落時に欠損した可能性が指摘できる。

S T J 104(図版第69・70) 9・10-R・S区で検出したほぼ正方形の方形周溝墓で、面積は40.3㎡である。周溝は西溝の一部が切れている。この部分は西溝が約60cm程度の深さから急に立ち上がっており、意図的に掘り残されたものと考えられる。墳丘の東側を奈良時代の溝S D J 01によって削られている。また、南溝と東溝の一部は古墳時代前期の溝S D G 51によって再掘削されている。

墳丘はベース面から考えれば遺存していた可能性が高いが、認識はできなかった。また、主体部も検出できなかった。供献土器もこの方形周溝墓では出土しなかった。

S T J 105(図版第70~72) 10・11-R・S区で検出したややいびつな正方形の方形周溝墓で、面積は42.8㎡である。周溝は西溝をのぞく全てを周囲の方形周溝墓と共有する。この方形周溝墓では周溝の再掘削を確認した。東溝の南半で設定した土層観察用セクション(図版第72、東溝断面E-F)で、本来は幅の狭い2本の周溝であったS T J 105東溝とS T J 02西溝が、再掘削の際に幅の広い1本の周溝として掘り直されていることを確認した。墳丘はすでに削平されていて盛土は確認できず、主体部も検出できなかった。

供献土器は、おもにS T J 02と共有する東溝から出土した。東溝の北半に位置する甕158は出土位置が中央より東寄りであり、かつ周溝の底に接して出土している点などからS T J 02に帰属するものと判断した。南半に位置する供献土器のうち、広口壺153がS T J 105西溝で出土した破片と接合したため、これらの遺物はS T J 105に帰属するものと判断した。先にも触れたようにこの周溝は再掘削されているが、これらの遺物は全て再掘削後の周溝内から出土したものである。

S T J 106(図版第72・73) 12-R・S区で検出した正方形の方形周溝墓で、面積は23.8㎡である。墳丘の西半が奈良時代の溝S D J 01によって削られている。周溝は四周をめぐり、このうち北溝をS T J 105と南溝をS T J 20と共有する。北溝は周溝底のレベルや溝の形状などから連続して築造された可能性が高いが、S T J 20には先行している。墳丘はすでに削平されており、主体部も検出できなかった。

供献土器は、東溝から甕156が1点出土している。この甕はほぼ完形を保持しており、胴部内にも埋土が流入した形で出土した。

S T J 02(図版第73~75) 10・11-S・T区で検出したややいびつな正方形を呈する方形周溝墓で、面積は73.8㎡である。溝は四周をめぐり、東溝以外の周溝は周囲の方形周溝墓と共有している。また、西溝は古墳時代前期の溝S D G 51によって再掘削されている。S T J 105で詳述したとおり、当初は、別に掘削された2本の周溝を1本にするような再掘削が行われていることが南溝で確認できた。これと同様に、S T J 03南溝と共有するS T J 02北溝でも、2本の周溝を1本にする再掘削が行われていることを確認した(図版第73、北溝断面D'-D)。墳丘はすでに削平されたものと考えられ、主体部も検出されなかった。

供献土器は、西溝以外の全ての周溝で出土した。ただし、西溝についても古墳時代の再掘削によって上層部分が失われており、当初から供献土器がなかったのかどうかは不明である。この古墳時代の溝に削平されずに残った供献土器として底部の欠失した甕158がある。この甕は周溝の底からわずかに浮いた形で、大きくみて内面を下にした2つの破片が、口縁を互い違いに重なり合い、その上に内面を上にした破片が重なるように3つの破片が分かれて出土した。墳丘上から転落したと考えるにはやや不自然な出土状況である。東溝で出土した壺157は胴部上半は南側から、残りが北側からで2m離れた地点から出土した。これも墳丘上から転落したと考えるには不自然な出土状況である。ただし、この個体については、再掘削の影響の可能性も考えられる。

S T J 20(図版第75~77) 12~14-S・T区で検出したややいびつな正方形を呈する方形周溝墓で、面積は60.6㎡である。周溝は四周をめぐるものと考えられるが、南西コーナー部分が調査区外となったため一部不明な部分が残る。周溝は北溝の西半をS T J 106と南溝をS T J 200と共有する。墳丘は30cmが遺存しており、主体部も中央部で1基確認した。主体部は墳丘面での検出が困難であったため、墳丘を断ち割った際に検出した。このため、墓壙の南端を正確に把握することができなかった。最終的には掘形部分と木棺内との間にわずかな土質の違いを認め、この主体部が木棺墓である可能性が高いとの結論に達した。墓壙は長軸218cm以上、短軸80cmである。

供献土器は、西溝の底に接した形で無頸壺159が、南溝では短頸壺160が、東溝から1個体、北溝から2個体が出土している。また、土器以外にも東溝で縄文時代の石鏃(S 29)1点と楔形石器(S 90)1点が出土している。

S T J 03(図版第78~81) 8・9-T・U区で検出したややいびつな正方形を呈する方形周溝墓で、面積は79.9㎡である。周溝は四周をめぐり、北溝以外は全て周囲の方形周溝墓と周溝を共有している。S T J 02と共有する南溝で再掘削の痕跡を確認している。また、西溝と北溝は古墳

時代前期の溝S D G 51によって再掘削されている。

墳丘は認識できなかったが、ベース面と比較すると遺存していた可能性が高い。主体部は中央からやや東側によった位置で木棺墓を1基確認した。この主体部は墓壇埋土と棺内埋土が比較的明瞭に観察できた木棺墓で、断面では木棺材の痕跡も一部で確認できた。墓壇は長軸234cm、短軸102cmで、木棺痕跡は墓壇の中でもやや西に偏った位置にあり、長軸182cm、短軸は北側が42cm、南側が45cmである。木棺内の埋土を全て洗浄した結果、木棺の北半の西側から石鏃が1点(S 20)出土した。石鏃の位置は特定できないが、出土した高さは墓壇底から10cm以内の範囲である。また、棺内南半の東側の埋土から剥片が出土している。

供献土器は、南溝と東溝から出土している。南溝の底からやや浮いた形で出土した無文の広口壺168は、ほぼ完形にまで復原でき、出土状況もその場で押しつぶされたような状態で出土している。甕171は東西約150cmの範囲に散らばった形で出土した。この甕はS T J 02～05・104から出土したものが接合している。最も破片数の多いS T J 03に伴う遺物と考えて良いようだが、それでも西溝、南西溝、南溝、東溝と北溝以外の全ての溝から出土したものが接合している。この周溝墓では、周溝の再掘削が行われているが、この遺物は全て周溝の底に接した形で出土しており、再掘削によって巻き上げられたとは考えがたい。周溝内に投棄される際にすでに破片となっていた可能性を考える必要があるだろう。

東溝で出土した広口壺66・69はその場で押しつぶされたような状況で出土したが、ほかの遺物と異なり周溝底から50cm近く浮いた形で出土している。遺物としては、頸部以下胴部下半までが出土しているが磨滅が著しく接合はできなかった。

S T J 200(図版第82) 14・15-T・U区で検出したややいびつな長方形の方形周溝墓である。その西半は調査区外にのびており、面積は29.1㎡以上である。周溝は西溝が調査区外で、残りは全て検出した。盛土は認識することはできなかった。主体部も検出していない。

供献土器は、北溝と南溝で出土した。北溝のものはS T J 20で詳述したとおりである。南溝から出土した甕172は周溝底からやや浮いた状態で出土している。

S T J 199(図版第83～85) 13～15-U～W区で検出したほぼ正方形の方形周溝墓で、面積は96㎡以上である。周溝は四周をめぐり、北溝をS T J 20と西溝をS T J 200と共有する。東南コーナーは切れており意図的に掘り残された可能性もある。墳丘盛土を認識することはできなかった。主体部は墳丘上で並列して2基検出した。北側に位置する第1主体部は長辺246cm、短辺100～118cmの墓壇に、長辺180cm、短辺46cmの木棺の痕跡が確認できた。第2主体部は墓壇長辺222cm、短辺90cmで、木棺痕跡は長辺160cm、短辺47cmである。第2主体部には浅い小口穴が存在した。棺内から遺物は出土していないが、棺検出面で石鏃(S 71)が1点出土している。

供献土器は、東溝から壺174が周溝底からやや浮いた形で出土しているほかはいずれも小片である。出土位置はドットで提示したとおりである。

S T J 05(図版第85～87) 9～11-U～W区で検出したややいびつな長方形を呈する方形周溝墓である。方形周溝墓の北東を古墳時代の溝S D J 06と土坑S K J 47で削られて、また、北溝は

古墳時代前期のSDG51によって再掘削されている。

この方形周溝墓は、本来東西8.3m、南北8.6mのほぼ正方形であったものを、南溝1(SDJ118)を埋めて新たに南溝2を掘削して長方形に拡張したものである。STJ05は占有面積の拡張が認められる当遺跡では唯一の例で、拡張前の面積は71.4m²、拡張後は89.4m²である。

拡張前の南溝である南溝1(SDJ118)は、検出面からの深さ約50cmのゆるい断面「U」字形の溝で、中位まで埋没した段階で上層を人為的に埋め戻されている。この溝1から供献土器は出土していない。拡張のために掘削された南溝2は幅広く掘削され、STJ100の南溝の一部を壊している。このことからSTJ100は、STJ05築造から拡張までの間に造られたものと考えられる。

主体部は中央からやや東に寄った位置で1基検出した。これを主体部と判断した根拠はベース面との砂礫混入状況の差である。ただし、その埋没状況や位置、特に周溝の方向に主体部が規制されていない点などいくつかの問題を残している。墓壙であるとすれば長軸162cm、短軸66cmの土壙墓の可能性が考えられる。

供献土器は、北溝以外の全ての溝から出土している。西溝出土のものはSTJ03で述べたとおりである。南溝で出土した甕181と東溝で出土した高杯183は共にほぼ完形で出土しているが、高杯については出土時に下になっている側の脚部が欠損している。転落時に割れたものか、打欠によるものか断定はできないが、脚裾部を完全に失っていることから、後者の可能性が高いと考えられる。

STJ100(図版第88・89) 10・11-W・X区で検出したほぼ正方形の方形周溝墓で、面積は44.9m²である。方形周溝墓のほぼ中央を古墳時代の溝SDJ06によって、北溝の一部をSDG51によって削平されている。周溝は四周をめぐるが、周溝南西のコーナー部はSTJ05の東溝が再掘削された際に削られている。周溝はいずれも幅が狭い断面「U」字形を呈している。西溝の埋没状況からSTJ05の東溝が埋没し始めた段階でSTJ100が掘削されたものと考えられる。先にも触れたSTJ05の拡張はその後ということになる。

主体部は中央で1基確認した。主体部の上半はSDJ06によって削平されており、わずかに10cm程度が残存しているという状況であった。平・断面ともに木棺痕跡を認められなかったため土壙墓の可能性がある。

供献土器は、西溝から高杯が、東溝から短頸壺86が出土した。高杯についてはSTJ05で詳述した。東溝から出土した短頸壺186はほぼ完形に復原できるものである。南溝上面では石鏃(S91)が1点出土しているが、包含層出土遺物である。

STJ129(図版第89・90) 98～1-S～V区で検出した長方形の方形周溝墓で、面積は196.8m²以上を測り、当遺跡では最大規模の方形周溝墓である。墳丘の西側は古墳時代の溝SDG48によって削平されている。周溝は南溝がSTJ163と一部共有するものを含めて四周をめぐると思われるが、検出が比較的容易であった東溝と南溝以外はいずれも不明瞭であった。特に西溝は南西コーナー部分からすでに浅くなり検出することができなかった。また、南溝が粘質土の埋土

であるのに対して北溝は埋土に礫が多く含まれていて、やや様相が異なる。北溝は北西のコーナー部分を検出することはできなかった。南溝では周溝底に土坑状の落ち込みを検出したが、周溝内埋葬とみる根拠は見当たらない。墳丘盛土、主体部ともにすでに削平されており検出できなかった。供献土器は出土していないが、石庖丁(S54)が1点出土している。

S T J 163(図版第91) 1・2-U・V区で検出した長方形の方形周溝墓で、面積は27.7m²である。北溝はS T J 129の築造の際に削られたか、当初からS T J 129の南溝を利用していたかのどちらかは断定できない。周溝は細く狭いことから、当初は方形周溝墓と認定することもためられたが、南溝と西溝の状況がS T J 89などで検出された再掘削前の方形周溝墓の周溝と酷似しているため、方形周溝墓の可能性があると判断した。

この周溝墓では墳丘盛土、主体部ともにすでに削平されており検出できなかった。また、供献土器も出土しなかった。

S T J 137(図版第91・92) 3-T区で検出した無区画の木棺墓で周溝は検出されなかった。方形周溝墓の間のわずかな空閑地に、当初から周溝をもたない木棺墓として掘削されたものと考えられる。墓壙は弥生時代のベース面と認識した層を少し下げた段階で検出したもので、断面では明瞭に墓壙を認識できるものの、平面では検出が困難であった。この墓壙は長軸157cm、短軸92cmで、墓壙深度は39cmと墳丘上で検出される主体部と比べると深い。墓壙底には小口穴が穿たれているが、北側の小口板は早い段階で棺内に倒れ込んだらしく平面的には棺痕跡を認識することができなかった。木棺の復原長は長軸146cm、短軸41cmである。

S T J 128(図版第92・93) 2・3-T~V区で検出した長方形の方形周溝墓で、面積は57.9m²以上である。北溝を除く3方の溝は検出できたが西溝は北へ向かって浅くなり途切れる形になっている。このことから北溝は当初から非常に浅かった可能性が高い。東溝、西溝から推測される北溝の推定ライン上で壺184が出土しており、検出困難ではあったがこの甕の位置に周溝がめぐっていた可能性も考えられる。東溝はS T J 124の西溝によって切られている。

S T J 124(図版93・94) 1~3-V~X区で検出した長方形の方形周溝墓で、面積は87.9m²である。溝は四周をめぐるが北溝と南溝はきわめて浅い。北西のコーナー部分は古墳時代の溝S D J 06とS D J 114によって削られている。墳丘盛土は削平され、主体部も墳丘中央部を現代の攪乱によって破壊されており検出できなかった。供献土器は東溝から甕が1個体出土している。

魅し溝完掘時に、炭化物の混じる焼土痕S X J 131を検出した。

S T J 60(図版第94・95) 6・7-U・V区で検出した方形周溝墓で、面積は34.8m²以上である。周溝は、南溝と東溝の一部を検出したのみで、北溝と西溝については検出できなかった。南溝は深さ51cmの断面椀形で、周溝底に接した形で水差189が出土している。この南溝は比較的検出が容易であったが、西溝は甕190が出土した地点より北では周溝を確認することができなかった。北溝は複数の土層観察用サブトレンチを設け溝の追求に努めたが、検出に至らなかった。

墳丘盛土はすでに削平されていたが、主体部の残欠と考えられる小口穴を1か所確認した。小口穴埋土の特徴やその位置から、主体部の可能性が高いと判断した。

供献土器は、西溝で甕190が倒立した状態で出土した。甕190は底部を欠損しているが、打欠によるものか削平されたものかは判断できない。東溝から出土した壺187・188は正確には東溝の延長線上にあり、S D J 06によって削られた部分から出土している。位置や状況などからS T J 60に帰属するものと判断した。南溝から出土した水差189は周溝底に接して出土した。

この周溝墓では周溝の検出も困難であったが、南溝が深さ約50cm掘削され、かつその底から供献土器が出土しており、さらに主体部の残欠と考えられる小口穴も検出したため、方形周溝墓と認識して報告を行った。南溝以外の周溝が検出困難であった理由は説明できないが、北溝だけが極端に浅かった可能性も考えられよう。

S T J 19(図版第96) 4～6-V・W区で検出した長方形の方形周溝墓で、面積は63.8m²以上である。溝は四周をめぐっていたものと考えられるが、いずれの周溝も浅く検出は困難であった。特に西溝は古墳時代の流路S D J 06によって削平されており、かろうじて深さ約15cmを検出することができるにとどまった。ここでは方形周溝墓の可能性のあるものとして報告したい。

S T J 84(図版第97・98) 6～8-V・W区で検出した長方形の方形周溝墓で、面積は37.2m²である。周溝は、ほかの方形周溝墓と共有せずに四周をめぐる。特に東溝が幅広く、南西コーナー部はS D J 06によって削平されている。墳丘盛土の有無については検出が遅れたことが原因で乾燥が進み確定できなかった。

検出面で主体部の検出が困難であったため、墳丘に複数の断ち割りを設定しつつ墳丘とベース面を掘削した結果、墳丘のほぼ中央に当たる位置で主体部を1基検出した。S T J 84の主体部は、本調査中で最も明瞭に棺痕跡を確認することができた方形周溝墓である(巻頭図版5-(1))。

木棺は小口板を挟みこむ型式で小口穴はない(図版第98のトーン部分は、特に棺材の痕跡が明瞭であった部分である。棺と掘形の規模は付表4を参照されたい)。この主体部では棺底板と蓋の痕跡は検出できなかった。短軸方向の断面では棺の底面中央部が窪む形となっていることから、当初から底板がなかった可能性も考えておく必要がある。

供献土器は北溝から1個体、東溝から2個体が出土した。

S T J 99(図版第99～101) 5・6-W～Y区で検出した長方形の方形周溝墓で、面積は43.3m²である。周溝は比較的幅の狭いものが四周をめぐる。供献土器と考えられる甕197はこの西溝から出土しているが、図版第101で示したとおり、方形周溝墓の検出面より高い位置で出土している。

この方形周溝墓でも中央部から主体部を1基検出した。木棺痕跡は平面的には東半が明瞭であった。棺内からは石剣1点、石鏃9点、磨製石器片1点、打製石剣の切先?1点、小口穴から管玉1点、剥片多数が出土した。石剣の出土位置は図示(図版第100)したとおり、木棺北側の側板に沿う形で、かつほぼ水平に置かれたような形で出土した。また、石鏃は墓壙底から5cm内外の位置で、木棺東半に散らばるような形で出土した。石剣と石鏃の出土レベルに数cmの差があるのは棺材の腐朽によるものと思われ、両者はほぼ同一面に存在したものと考えられる。主体部の埋土を洗浄した結果、欠損した石鏃の先端部が出土した。

最も注目されるのは、東小口周辺を中心に出土した管玉1点と多量の剥片である。これらの遺物は小口穴に落ち込むような形で分布していた。下植野南遺跡で棺内から石鏃以外の遺物が出土した事例は、この方形周溝墓1基のみである。

S T J 88(図版第101・102) 8~10-W~Y区で検出したいびつな方形周溝墓で、面積は58.1m²である。周溝は四周をめぐるようであるが、南溝はS D G 51によって削られている。周溝は広い皿状の断面形できわめて不整形である。この方形周溝墓では、掘削終了後に墳丘、周溝底に複数の断ち割りを入れた結果、北溝と南溝でさらに古い段階の周溝を検出することができた。また、東溝でも同様の周溝を検出したが、これはS T J 89に帰属するものである。つまり、この周溝墓では、当初幅の狭い周溝が四周をめぐるっていたもの(図版第101トーン部分)が、隣接する周溝とあわせて2本の周溝を1本にする再掘削が行われた結果、全体がきわめて不明瞭で判りにくい幅広の周溝にされたものと思われる。

この方形周溝墓からは主体部が1基検出されている。位置的には北溝に非常に近く、そのほかに空閑地を残している。木棺痕跡は平面的には確認が困難で、断面観察の結果、側板・小口板・棺蓋と考えられる棺材痕跡を確認した。棺蓋は墓壙底から約20cmと低い位置にあることから、棺蓋が棺内に落ち込んだ可能性があると考えて調査を進めたが、棺蓋より上には側板の痕跡はのびず、棺底板と考えられる痕跡も認められないことから、本来の状況に近いものであると判断した。あくまでも棺材の痕跡による判断ではあるが、極端に棺の高さが低いものが存在している可能性を指摘しておきたい。

供献土器は、西溝から1点出土しているが、検出面に近い高さで出土していることから周溝再掘削後に転落した遺物と考えられる。また、南溝からは石鏃(S 31)が1点出土している。

S T J 48(図版第103~105) 7・8-X~Z区で検出したほぼ正方形の方形周溝墓で、面積は51m²である。先述したS T J 88と同じく、周溝は当初幅の狭いものが四周をめぐるっていたようで、ここでも再掘削が行われたものと判断される。

供献土器の出土層位は中層で、いずれも再掘削後の埋土内から出土している。北溝から出土した鉢200は原位置と考えられる状況で出土しているが、199は北溝と東溝のものが接合している。これらの遺物は周溝の中層から出土しており、再掘削によって遺物が原位置を失ったとは考えがたい。当初から破片としてこの方形周溝墓に持ち込まれた可能性を指摘しておきたい。この方形周溝墓では墳丘盛土は認識できず、主体部も検出されなかった。

S T J 89(図版第105・106) 8~10-Y~A A区で検出したほぼ正方形の方形周溝墓で、面積は59.3m²である。この周溝墓でも再掘削前の周溝を確認した(図版第105濃いトーン部分)。当初の周溝は東西7m以上、南北約5.9mの規模で、再掘削後のものより一回り小さい規模であったと考えられる。

主体部は中央部やや東寄りの位置で木棺墓を1基検出した。ただし、東溝については再掘削前の周溝が検出されていないことから、本来は墳丘の中央部に位置していた可能性もある。この主体部も墳丘をベース以下まで断ち割った段階でようやく検出できたものである。墓壙は長軸

178cm、短軸80cm、深度は16cmが遺存していた。木棺は小口穴をもたない型式のもので、木棺痕跡は底板以外は不明瞭であった。木棺の規模は短軸40cm、長軸104cmになるものと推定される。

供献土器は、再掘削前の北溝から2点出土している。広口壺202と細頸壺203は共に上半の一部を欠損しているが、本来はほぼ完形に近かったものと思われる。

S T J 91(図版第107) 8・9-Z・AA区で検出したややいびつな正方形の方形周溝墓で、面積は約39㎡である。周溝は四周をめぐることを確認したが、周溝の検出が困難な方形周溝墓であった。特に、北溝ではゆるやかな落ち込みを確認したが、立ち上がりは確認することができなかった。区画を意図したと見られる東溝の存在から方形周溝墓と判断した。

供献土器は東溝から甕204・205が出土している。

S T J 90(図版第107~109) 9・10-Z~AB区で検出したややいびつな正方形の方形周溝墓で、面積は45.3㎡である。周溝は四周をめぐるが、南溝はSDG51によって削られている。この方形周溝墓でも南溝で再掘削の痕跡を確認した(図版第108トーン部分)。

この方形周溝墓では、平面での確認が困難で、断ち割りによって確認した主体部を1基検出している。主体部は墳丘のほぼ中央に位置し、小口穴をもつ型式の木棺墓である。木棺痕跡から短軸36cm、長軸100cmの木棺が推定される。

供献土器の壺206は北溝で検出面に近い高さから出土しており、周溝の再掘削後に墳丘から転落したものである可能性が高い。

S T J 222(図版第109) 8・9-AA~AC区で検出した方形周溝墓で、隣接するS T J 91と同様北溝を認識することができなかった。推定面積は21.6㎡以上である。方形周溝墓の可能性のあることを指摘するにとどめたい。

S T J 133(図版第110~113) 97~1-X~AA区で検出した南北に長い長方形の方形周溝墓で、面積は79.9㎡以上である。周溝は四周をめぐるものと考えられるが、いずれもきわめて浅く、特に南溝は特定できなかった。墳丘も削平されており検出できなかった。

この方形周溝墓では4基の主体部を検出した。以下、北に位置するものから報告する。

第1主体部は墓壇長軸242cm、短軸92cm、深度33cmである。棺痕跡は棺内埋土と掘形埋土の差を認識したもので長軸173cm、短軸64cm、深度33cmである。木棺は小口穴をもたない型式のもので棺内に落ち込んだと考えられる棺蓋痕跡も確認した。棺内からは4基の主体部のうちで唯一石鏃が出土した。うち5点(4個体)は原位置を押さえることができた。いずれも墓壇底から5cm以下の高さで出土している。

第3主体部は小口穴をもつ型式の木棺墓である。木棺痕跡は不明瞭であったが墓壇埋土との差は認識可能であった。墓壇長軸219cm、短軸79~84cm、深度31cm、木棺は小口穴をもつ型式のもので長軸178cm、短軸58cm、深度31cmである。棺内から遺物は出土していない。

中心主体となる可能性が高い第4主体部は、方形周溝墓の主軸からやや振れている。墓壇長軸は252cm、短軸109cm、深度42cmで、当遺跡では最も規模が大きい。木棺は小口穴をもたない型式のもので長軸162cm、短軸50cm、深度42cm、埋土の観察から木棺の西端が先に崩れたために棺内

に土砂が流入した痕跡が観察できた。棺内から遺物は出土していない。

4基の中で最も小規模な第2主体部は断ち割りによって一部を破損したが、墓壙長軸が142cm、短軸80cm、深度20cmである。木棺は小口穴をもつ型式のもので東側の小口痕跡だけを検出した。

供献土器は、その可能性があるもの2個体が北溝で出土した。また、南溝となる可能性がある溝から甕209が出土している。

S T J 127(図版第114・115) 99～2-Y～A B区で検出した2基の木棺墓である。先に報告したS T J 137同様、区画をもたない単独の木棺墓である可能性も考えられるが、周辺に位置するS T J 133の周溝がきわめて浅いこと、主体部が並列していることなどから本来は方形周溝墓として区画を有していた可能性が高いと判断した。

第1主体部は墓壙長軸231cm、短軸100cm、深度34cm、木棺は小口穴をもつ型式のもので長軸180cm、短軸53cm、深度34cmである。第2主体部よりも木棺痕跡は明瞭であった。棺内から石鏃片(S52)が出土している。

第2主体部は墓壙長軸210cm、短軸80cm、深度19cm、木棺は小口穴をもつ型式のもので長軸170cm、短軸52cmである。棺内から遺物は出土していない。北側に位置するこの第1主体部が墓壙規模も木棺規模も第2主体部を上まわる。主体部の北半に設定した断割から石鏃(S51)が出土している。

S T J 161(図版第115) 4-Y区で検出した区画をもたない主体部である。

この主体部は、ほかの主体部と埋土の特徴が大きく異なる。木棺墓の場合、木棺の腐朽とともに徐々に棺内に土砂が堆積したものと考えられ、その埋土の分層は難しいものが多い。その反面、掘形と棺内の埋土は比較的認識しやすいという特徴がある。しかし、このS T J 161では明瞭に色調の異なる埋土が薄く層状に堆積しているのを確認することができた(図版第115)。調査中は棺内と掘形の埋土の区別が非常に難しいことから土壙墓と認識して調査を行っていたが、墓壙底から小口穴が検出された。木棺墓とするには掘形埋土が認められず、土壙墓とするには小口穴の説明が困難である。小口穴の存在からこの主体部を木棺墓の一種として扱うこととするが、位置付けについては類例を待って再検討する必要がある。

S T J 98(図版第115～117) 3～5-Z～A B区で検出した長方形の方形周溝墓で、面積は54.1㎡である。周溝は四周をめぐり、東溝は隣接するS T J 95の西溝を削っている。供献土器は、ほぼ完形に復原できるものが、西溝と東溝から周溝の底に接した状況で出土した。

S T J 51(図版第117・118) 2～4-AA・A B区で検出したややいびつな正方形の方形周溝墓で、面積は29㎡以上である。この周溝墓は周溝の認識が困難で、北溝は北東コーナー部分を検出したがきわめて浅い。方形周溝墓ではなく単独の木棺墓となる可能性もある。墳丘盛土も供献土器も出土していない。

主体部は小口穴を有する型式の木棺墓が1基検出されている。墓壙長軸は97cm、短軸51cm、深度25cm、木棺の規模は長軸62cm、短軸34cm、深度25cmで、木棺痕跡は側板と小口板が比較的明瞭に観察できた。本調査中では最も小さい木棺規模である。棺内から石鏃(S27)が出土している。

S T J 95(図版第118～123) 3～6-A A～A D区で検出した長方形の方形周溝墓で、面積は101.2㎡である。墳丘盛土の崩壊が著しかったためか、墳丘の認識が難しい方形周溝墓であった。周溝は四周をめぐるが西溝が途中で浅くなり検出できなかった。

主体部は4基の木棺墓を検出した。4基の主体部は2基ずつ並列するように配置され、それぞれ並列するものはほぼ同程度の規模である。墳丘の中央部には主体部を配するに十分なスペースは確保されておらず、当初から4基を並列して埋葬する意図があった可能性が高い。最も南に位置する第4主体部だけが小口穴を有する型式のものである。

最も北に位置する第1主体部は墓壇長軸240cm、短軸92cm、深度24cm、木棺は小口穴を有さない型式のもので長軸196cm、短軸62cm、深度24cmである。棺内から遺物は出土していない。

第1主体部と並列する第2主体部は墓壇長軸249cm、短軸は最大で101cm、深度21cm、木棺は小口穴をもたない型式のもので長軸190cm、短軸49cm、深度21cmである。棺内から遺物は出土していない。

第3主体部は墓壇長軸216cm、短軸82cm、深度19cm、木棺は小口穴をもたない型式のもので、長軸175cm、短軸53cm、深度19cmである。棺内から遺物は出土していない。

第3主体部と並列する第4主体部は墓壇長軸206cm、短軸85cm、深度8cm、木棺は小口穴をもつ型式のもので長軸156cm、短軸は55cm、深度は8cmである。この主体部では、北側板の木棺痕跡の下に筵状の植物繊維痕跡が認められた。分析の結果、種類については同定することはできないが、草本の茎部であることが明らかとなった。こうした明確な事例はこの遺跡では1例のみであるが、S T J 84の主体部では墓壇底が湾曲しており、底板がなかった可能性も考えられる。底板材の代替品として筵が敷かれていた可能性も考慮しておく必要がある。

東溝と西溝で破片となった供献土器が6個体出土した。遺物の出土レベルに差があるため、周溝の再掘削の際に巻き上げられた供献土器である可能性が高いと思われる。このうち、広口壺212は、西溝の2か所と、S T J 52南溝で3か所に分かれて出土した。再掘削によるものである可能性が高い。

S T J 52(図版第124・125) 5～8-A A～A C区で検出したほぼ正方形の方形周溝墓で、面積は66.4㎡である。周溝は北東コーナー部分の検出が困難であったが四周をめぐるものと思われる。墳丘盛土は認識できず主体部も検出されなかった。

供献土器は、壺212が周溝底に接する形で出土し、S T J 95西溝出土の破片と接合した。

S T J 83(図版第126) 6～8-A B～A D区で検出したややいびつな長方形の方形周溝墓で、面積は81.6㎡以上である。周溝は特に西・南溝の検出が困難であったが、四周をめぐるものと思われる。墳丘盛土は確認できず、主体部も検出されなかった。

(3) そのほかの遺構

方形周溝墓以外に単独で弥生土器が出土したのものがある(図版第127・128)。これらの遺物は、いずれも1個体が単独で出土したもので以下のような理由が考えられる。一つは方形周溝墓の溝が削平されて遺物だけが残った場合、もしくは周溝を検出できなかった場合。一つはS T G 73の

事例のように墳丘外に土器が置かれていた場合である。また、これらが単独の土器棺墓であった可能性も否定はできないが、いずれも1個体での出土であるため根拠を欠く。位置的には、STF181の南で検出されたSXF215～218などが一つの方形周溝墓になる可能性があるが確定できない。これらの中で、STG48上層で出土したSXG97は、底部を欠く甕230と小形の椀形鉢229の2点からなる遺構で、鉢が甕の体部内に入った形で2個体が出土している。出土位置から上流に当たるSTG57かSTG53の遺物が混入した可能性もあるが、甕の器壁は残りが良く、強くローリングされた形跡が認められないことなどから、検出できなかった方形周溝墓が存在した可能性が高いと考えられる。

H地点では、弥生時代の遺物を含む溝SDH12とSDH17を検出した。出土遺物はいずれも小片であるが、甕の比率が高く、墓域の南側にも居住域が広がる可能性もある。

(藤井 整)

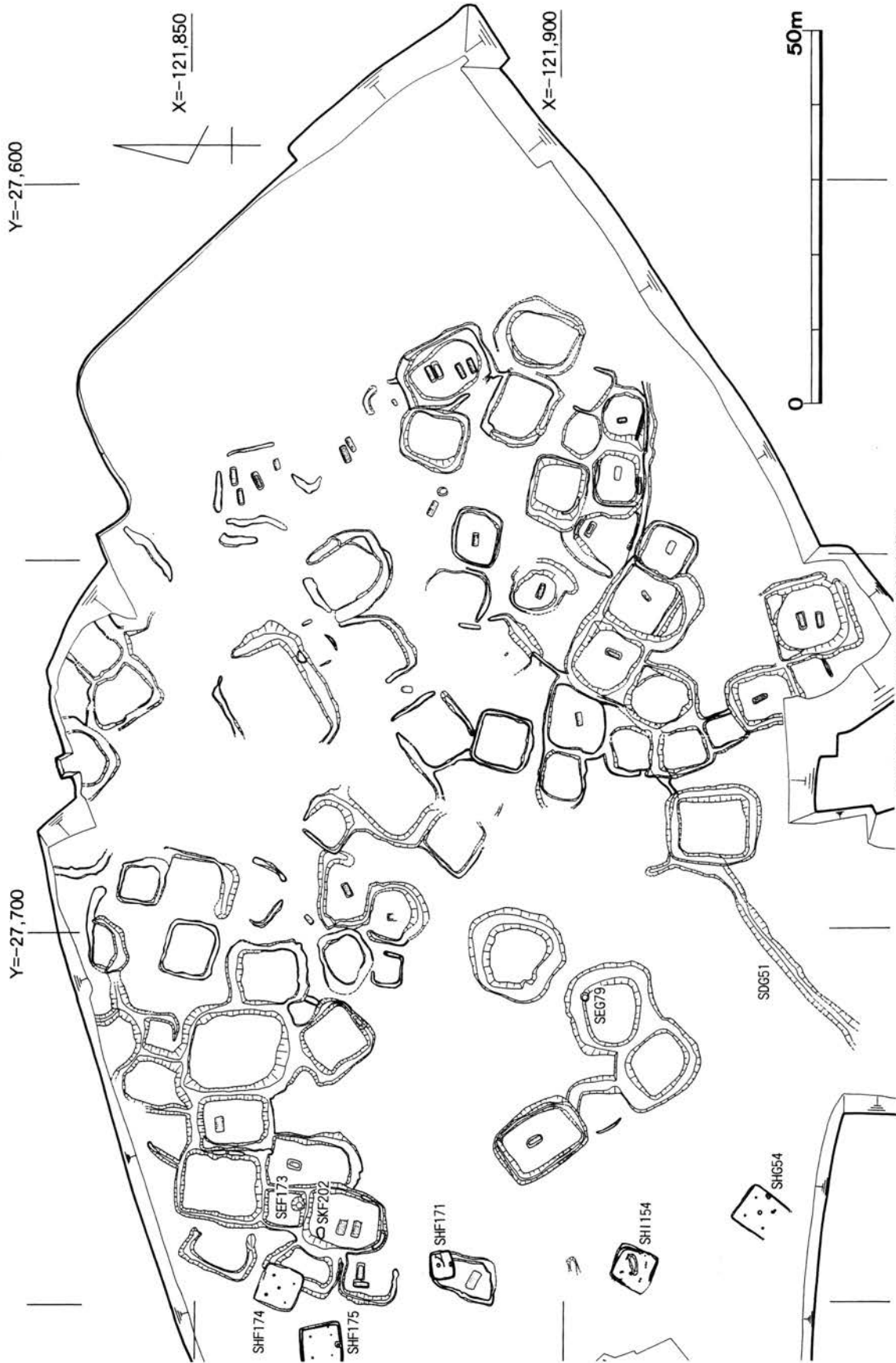
第4節 古墳時代前期の遺構

古墳時代前期の遺構とは庄内～布留式土器の出土する時期の遺構であり、須恵器出現期、あるいは下植野南遺跡では未だ須恵器を含まない時期を想定したものである。層位的には古墳時代中期以降のベース面である黒褐色粘質土を除去し、黄褐色粘質土まで掘削した段階で検出できる遺構である。この時期の遺構には竪穴式住居跡5基、井戸状遺構2基、溝状遺構3条などがある。

(1) 竪穴式住居跡

SHF175a・b(図版第137) 東西6.0m、南北5.7mの方形の輪郭を検出したことから、一基の住居跡と推定して掘削作業に取りかかった。その結果、遺構検出面から床面までの深さ約10cmで、南辺を除く3辺で周壁溝と4本の支柱穴を検出した(SHF175a)。この床面の精査中に、さらにこの住居跡の下層にSHF175aよりもわずかに小さく、南北約5.2m、東西約5.6mを測る新たな住居跡が存在することが確認できた(SHF175b)。SHF175bでも周壁溝が確認されたほか、床面中央で焼土を含むことから炉跡と思われる直径約75cm、深さ12cmの円形土坑を検出した。また、南辺中央で一辺約80cm、深さ30cmの貯蔵穴と思われる方形土坑がある。SHF175bでは175aの柱穴以外に柱穴がなく、柱穴は上層・下層の住居で共有されたものと考えられる。埋土の堆積状況から、SHF175bの柱穴を共有しながらも、規模を拡張してSHF175aに建て替えたものであろう。この住居跡ではほとんど遺物が出土していないが、検出面のレベルや埋土の状況などから、SHF174と同時代のものと考えられる。

SHF174(図版第138) 一辺約5.8mの方形の住居跡で、検出面から床面までの深さ約43cmを測る。床面は北辺・東辺の一部がとぎれるが、周壁溝のほか、4か所のピットと中央に直径約40cm、深さ10cmの焼土を含む炉跡と思われる円形土坑がある。SHF174は床面近くで大量の土器と共に多くの炭が出土した。また、埋土は数種類の色合いや質の違う土が、この住居跡の南壁部から斜めに堆積していたことから、この住居は火事で焼け落ちた後、当時の人々が人為的に埋めたものと推測される。



第9図 古墳時代前期遺構全体図

S H F 171(図版第138) 長辺約4.0m、短辺約3.3mで、やや隅丸の長方形を呈する住居跡で、検出面から床面までの深さ約15cmを測る。主柱穴は確認できなかったが、幅約20cm、床面からの深さ5cmの周壁溝を検出した。また、この住居跡の中央部では、炉跡と思われる炭を含む浅い土坑を検出した。

S H I 154 a・b(図版第139) I地点調査地西端で検出した方形の竪穴式住居跡で、西端部は中世流路であるS R F 99によって削り取られている。S H I 154は2時期にわたって建て替えがあり、当初に掘られた一辺約5.0mのS H I 154 aを新たに一辺約5.7mに拡張しており、S H I 154 aのものと思われる周壁溝を確認している。柱穴はS H I 154 a、S H I 154 bのそれぞれの柱穴が近接して8か所ある。S H I 154の埋土内には、炭とともに多量の土器と鉄器が含まれていた。

S H G 54(図版第140) G地区東端でS H I 154の南約12mにある方形の竪穴式住居跡である。S H G 54は南西辺が中世流路であるS R F 99によって削り取られており、その全容は明らかでないが、東西約5.2m、南北6m以上、深さ約35cmを測る。主柱穴は4本柱で柱間は2.8~3.0m、柱穴の深さは床面から35cmを測るものである。床面は南東辺の一部がとぎれるが周壁溝があり、中央には直径約50cm、深さ10cmの円形土坑、南東辺中央には東西40cm、南北30cm、深さ17cmの方形土坑がある。S H G 54からは少量の土器と埋土中から鉄鏃が出土した。

(2) 井戸

S E F 173(図版第141) 検出面での直径は約2.0mで、最深部までの深さ約1.1mを測る素掘りの井戸である。埋土は、暗茶灰褐色を呈する粘質土が中心で、下層は砂利・粗砂混じりとなる。この埋土の中からは、ほぼ完形に復原できるものや完形に近い土器が多く出土した。下層から出土した土器は、S H F 175、S H G 54などの竪穴式住居跡に先行する。

S E G 79(図版第141) G地点中央やや北側の8L区で検出した直径1.3m、検出面から底部までの深さ1.6mを測る円形の井戸。上層では飛鳥時代の須恵器杯身・壺・甕の体部片が出土したが、3層以下では土師器細片25点が出土した。上層出土遺物から飛鳥時代の井戸とも考えられるが、3層以下では土師器片のみであり、埋土がS E F 173に近似することから下層の竪穴式住居跡群に伴う井戸と思われる。

S K F 202(図版第142) 長軸約1.6m、短軸約1.1m、深さ約10cmにも満たない浅い土坑である。土坑底部から土師器甕、高杯などが出土した。

(3) 溝状遺構

S D G 51(図版第142) 調査地の南端で西から東方向に流れる溝。検出全長約116m、上面幅0.8~2.5m、深さ約0.7mを測る。S T G 51は方形周溝墓の周溝を利用するかのようにより掘削されたもので、S D G 51の東端はS T J 90の南溝部分でとぎれる。S T G 50から西では直線的に南西方向に流れる。西端は中世流路であるS R F 99でとぎれる。方形周溝墓の周溝底とS D G 51の溝底では比高差25~50cmを測り、方形周溝墓の底までは掘削していないことが断面観察からわかる。S D G 51の遺構検出のための精査および上面掘削中には古墳時代中期以降の土器が検出され

付表5 竪穴式住居跡規模一覧

地点名	遺構番号	規模(m)		方位	床面積(mi)	焼土および 竈の有無	共伴遺物
		東西	南北				
F	SHF06	4.2	4.1	N30° E	17.22		
F	SHF07	4.9	5.8	N18° W	28.42		白玉230点・鉄鏝1点
F	SHF08	3.9	4.3	N3° E	16.77		
F	SHF10	3.6	3.6	N2° W	12.96		
F	SHF19	5.0	5.0	N3° E	25.00		白玉2点
F	SHF20	3.4	3.2+	N9° W	10.88+		
F	SHF25	2.9+	3.7	N20° E	10.73+		
F	SHF36	4.2	4.5	N19° W	18.90	焼土塊	
F	SHF37	4.3	4.5	N22° W	19.35		
F	SHF38	3.4	4.0	N0°	13.60		
F	SHF39	4.6	5.5	N10° W	25.30		
F	SHF40	4.5+	5.0	N14° E	22.50+	北辺有	
F	SHF41	2.5+	1.7+	不明	4.25+		
F	SHF61	3.7+	4.5	N30° E	16.65+		
F	SHF64	4.3	4.2	N18° W	18.06	北辺有	
F	SHF111	2.6+	5.0	N7° E	13.00+	焼土塊	白玉3点・板状鉄材
F	SHF113	5.2	5.4	N28° W	28.08		白玉182点・鉄鏝3点・鉄片
F	SHF115	4.3	4.4	N20° E	18.92	北東辺	
F	SHF116	5.2	4.2	N14° W	21.84	焼土塊	
F	SHF120	4.3	4.1	N28° E	17.63	北西辺	
F	SHF121	4.5	4.4	N5° E	19.80	焼土塊	勾玉1点
F	SHF122	5.2	4.4	N23° E	22.88		
F	SHF123	4.5	5.5	N23° W	24.75	焼土塊	
F	SHF150	4.8	4.8	N41° E	23.04		
F	SHF171	4.0	3.3	N14° W	13.20	焼土塊	
F	SHF174	5.8	5.8	N23° E	33.64	焼土塊	
F	SHF175	6.0	5.7	N9° W	34.20	焼土塊	
G	SHG33	4.2	4.5	N36° E	18.90	北辺有	白玉54点
G	SHG54	5.4	5.4+	N38° E	29.16+		
G	SHG55	4.2	3.8	N15° W	15.96		鉄鏝・刀子
G	SHG56	3.4	3.7	N5° E	12.58		刀子
I	SHI08	3.9	3.5+	N42° W	13.65+	北辺有	
I	SHI109	4.2	3.8	N27° W	15.96		
I	SHI154	5.4	5.7	N19° E	30.78		
J	SHJ13	4.6	3.2	N40° E	14.72		白玉638点・有孔円板30点・剣形石製品7点・石製品1点・剥片1点
J	SHJ14	2.5	3.0	N33° W	7.50		白玉11点
J	SHJ16	2.8	3.1	N9° E	8.68		
J	SHJ24	3.7	3.5	N43° W	12.95		

J	SHJ27	3.6	3.1	N 6° W	11.16		白玉 1点
J	SHJ28	2.8	2.6	N37° E	7.28		
J	SHJ41	2.9	3.1	N24° W	8.99		
J	SHJ53	3.6	1.3+	N43° W	4.68+		
J	SHJ94	2.4+	4.0	不明	9.60+		
J	SHJ126	6.0	5.8+	N41° W	34.80+	北辺有	
J	SHJ191	4.8	4.5	N 5° W	21.60		
J	SHJ192	4.2	4.1	N44° W	17.22		
J	SHJ193	3.7+	3.9	N 3° E	14.43+		鉄片
J	SHJ194	3.2	2.6+	N 7° E	8.32+		
J	SHJ201	5.4	5.6		30.24		

たが、多くが古墳時代前期の土器であり、埋土も S E F 173 に近似する暗茶灰褐色粘質土であることから、S H F 174 などの時期に掘り込まれた溝と思われる。

第5節 古墳時代中・後期の遺構

下植野南遺跡の門田地区では、標高10.5m前後で中世遺物を少量含む灰褐色粘質土が厚さ20～50cm堆積しており、この灰褐色粘質土層を除去した段階で検出できる遺構を上層遺構として一括呼称している。

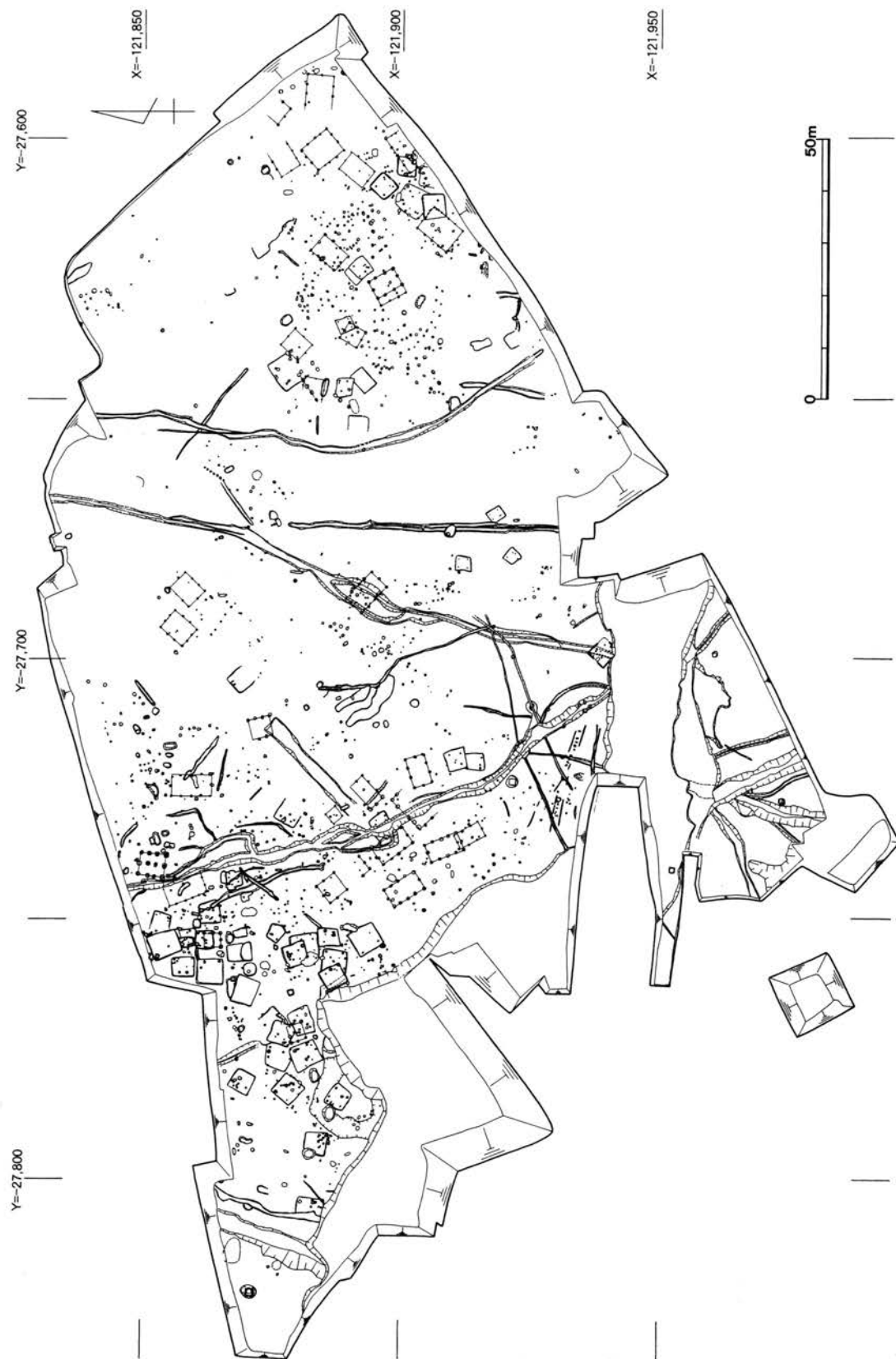
この上層遺構には中世の土師器皿、瓦器椀などを含む素掘り溝群のほか、現府道直下の調査部分では久我畷に関連した両側溝などを検出しているが、中世段階の遺構が灰(あるいは青灰)褐色粘質土を埋土としているのに対して中世以前の古墳時代中・後期(須恵器出現以降)や奈良・平安時代の遺構はおもに暗褐色粘質土を埋土とするものが多い。中世以前の遺構の埋土と検出面のベース面とは近似した土質・色調であり、遺構検出作業では難渋をきわめた。

(1) 竪穴式住居跡

上層遺構は、前述のように遺構の埋土と基盤層の土質が近似していることから検出作業は難渋し、古墳時代中・後期の遺構は、おもに遺物の散布している地点を中心に精査を加え、どうにか竪穴式住居跡として捉えた遺構である。このため竪穴式住居跡としてとらえるにはやや疑問の残る資料もある。

古墳時代中・後期の竪穴式住居跡は付表5のとおり、45基前後を数える。各竪穴式住居跡は上面が大きく削り取られており、遺構検出面から住居跡の床面までの深さは10cm前後と浅く、遺構の残り具合は良くなかった。

S H F 111(図版第143) 西半部を S D F 18、南東コーナー部を S D F 99によって削り取られた竪穴式住居跡で、遺存する東辺では一辺約5.0m、遺構検出面から床面までの深さ約12cmを測る。床面の南西部には焼土と一部炭が残っていた。遺物の大半は床面よりも上面で出土しており、須恵器杯身・杯蓋・有蓋高杯・甕・大型器台・甕、土師器高杯・椀・甌・把手付甕、滑石製白玉、製塩土器、板状鉄材がある。須恵器の特徴から今回の調査した竪穴式住居跡の中では古相の陶器



第10図 古墳時代中期以降遺構全体図

編年TK216型式の時期のものが含まれている。なお、大型器台481はSHF113で、甕478はSHF38・113、土師器甕474はSBF91の北東隅の掘形、把手付甕480はSKF04で同一個体の破片が^(注21)出土している。

SHF121(図版第143) SHF111の東約12mにあり、東西4.5m、南北4.4m、遺構検出面から床面までの深さ8cmを測る方形の竪穴式住居跡である。床面には周壁溝および明らかに主柱穴と思われるものは検出しえなかったが、床面中央やや北よりに焼土を検出した。SHF121はSEF104によって切られている。埋土内には須恵器を含まず、土師器片のみコンテナ・バット1箱程度であり、図示できたのは高杯脚部1点と南西コーナー付近で出土した滑石製勾玉1点(S172)のみである。SHF121出土遺物は大半が土師器の細片であり、時期決定の資料を欠く。土師器の細片には布留前期までさかのぼる可能性もあるが、遺構検出面がSHF111と同一の黒褐色粘質土上面であり、SHF111と相前後する時期のものと思われる。

SHF06(図版第144) SHF151北約15mにあり、東西4.2m、南北4.1mを測る方形の竪穴式住居跡である。SHF06は遺構検出面から床面までの深さ18mを測り、床面では周壁溝がなく、9か所の円形ピットを確認した。埋土内からは土師器甕が出土した。

SHF120(図版第145) 溝状遺構SDF147に囲まれたような位置にあるが、SDF147の埋没後に掘り込まれた方形の竪穴式住居跡である。その規模は東西約4.3m、南北約4.1m、遺構検出面からの深さ25cmを測る。住居跡床面には6か所の円形ピットがあり、そのうち4か所が主柱穴と思われる。北西辺中央やや北よりには造り付け竈がある。竈は馬蹄形でその中央部の凹みから土師器甕の体部片が出土した。埋土内から須恵器杯身・杯蓋・無蓋高杯、土師器甕・高杯が出土し、土師器は細片のものが多し。

SHF150(図版第144) SHF120の北7mにあり、一辺4.8mを測る方形の竪穴式住居跡である。遺構検出面から床面までの深さ約10cmと浅く、壁面の立ち上がりおよび床面の遺存状態は良好ではなかった。床面には10か所のピットを検出したが、主柱穴となるものはみつからなかった。床面での出土遺物は須恵器片、土師器片がコンテナ・バット1箱にも満たない程度であり、図示し得たのは須恵器片1点のみである。

SHF123(図版第145) SHF116・SDF147の遺構検出時の精査作業で、須恵器、土師器を多く含む焼土があり、その焼土を中心に、方形に落ち込む遺構を確認したため竪穴式住居跡と考えた。ただ壁面が不明瞭であり明確なピットもなく、やや竪穴式住居跡と考えるには疑問の残る遺構である。

SHF123は東西約4.5m、南北約5.5mを測る方形で、前述の焼土は北西部に直径1.5mの範囲に広がっている。SHF123からは、コンテナ・バットにして4箱程度の遺物が出土し、須恵器杯身・杯蓋・有蓋高杯・甕、土師器甕などがある。有蓋高杯などやや古い型式のものを含むが、その大半はMT15型式のものと思われる。

SHF116(図版第146) 住居跡4基が集中する3・4-Zy・Zz区にあり、北接するSHF115を切り、掘立柱建物跡SBF156によって切られている。竪穴式住居跡は方形を呈し、その規

模は東西5.2m、南北4.2m、遺構検出面からの深さ約15cmを測る。SHF116の床面には4か所の柱穴があり、東辺のピットは主柱穴とは言い難いものである。東辺部の南よりに焼土塊がある。埋土内からは須恵器杯身・杯蓋・無蓋高杯・器台、土師器甕などがコンテナ・バットに1箱程度出土した。須恵器にはMT15・TK10型式のもののほか、飛鳥時代の遺物が混在している。また、須恵器器台568は別遺構から出土したものと接合した。

SHF115(図版第146) SHF116の北に隣接しており、東西4.3m、南北4.4m、検出面からの深さ約20cmを測る方形の竪穴式住居跡で、南東コーナーはSHF116に切られている。床面での遺存状態は悪く、明瞭な周壁溝は見つからなかった。西壁中央には土師器体部片を一部据え、焼土が馬蹄形にめぐる造り付け竈が築かれている。SHF115の埋土内からは杯身・杯蓋・壺・甕などの須恵器がコンテナ・バットに1箱程度、土師器は甕・甑の細片がコンテナ・バット2箱程度出土した。図示しえた中には置き竈、甑が含まれており、置き竈534はSHF115の北にあるSHF114で同一個体のものが出土している。

SHF122(図版第150) SHF08・19と同様、旧流路に推積した黒褐色砂礫土層から切り込まれた遺構である。平面輪郭および遺構内の掘削に際して難渋した竪穴式住居跡で、明確に竪穴式住居跡と位置付けていいのか、やや疑問が残る。SHF122は東西5.2m、南北4.4mと東西に長い方形を呈し、遺構検出面から床面までの深さ約8cmを測る。床面では明瞭なピットおよび周壁溝はない。埋土内からは須恵器の出土がなく、土師器壺・甕・高杯・甑の細片がコンテナ・バットにして1箱にも満たない量が出土した。

SHF19(図版第148) SHF19は旧流路に推積した黒褐色砂礫土層を切り込んだ遺構で、平面輪郭精査および遺構掘削に際して難渋した遺構である。SHF19は一辺5.0m、遺構検出面からの深さ約15cmを測る方形の竪穴式住居跡で、周壁溝はなく、主柱穴と思われるピットも検出できなかった。埋土内には図示した須恵器杯蓋・有蓋高杯蓋・無蓋高杯のほか、土師器甑などが少量出土した。また、埋土の水洗いに際して滑石製白玉2点が出土した。

SHF08(図版第148) SHF19と同様、旧流路に推積した黒褐色砂礫土層から切り込まれた方形の竪穴式住居跡で、東西3.9m、南北4.3m、検出面から床面までの深さ約20cmを測る。床面には7か所以上のピットを検出したが、いずれも床面からの深さ10cmと浅く、主柱穴と思われる明瞭なピットは検出できなかった。埋土内からは須恵器杯蓋・甑のほか、土師器壺・高杯などの細片がコンテナ・バットにして1箱にも満たない程度出土した。

SHF07(図版第147) 調査区北端で黄褐色粘質土を切り込んで造られた竪穴式住居跡である。規模は東西4.9m、南北5.8mとやや南北に長い長方形を呈し、遺構検出面から床面までの深さ約20cmを測る。床面では周壁溝および主柱穴は検出できなかった。SHF07の埋土掘削に際しては、西半分の床面より上面で滑石製白玉約230点(一部水洗いに際して出土したものを含む)が出土した。埋土内出土の土器は図示した須恵器杯身・無蓋高杯・甕、土師器壺・甕・高杯がコンテナ・バットにして2箱程度出土した。なお、図示した須恵器甕587はSHF10からも同一個体の破片が出土している。このほか、鉄鏃1点も出土している。

S H F 25(図版第147) 南北3.7m、東西2.9m以上、遺構検出面からの深さ10cmを測る方形の竪穴式住居跡で、西半部は精査を何度か志みたが、明瞭には検出できなかった。床面では、東壁に平行するように2か所のピットを検出した。埋土内からは、T K 208型式と思われる須恵器甕が出土した。

S H F 10(図版第149) S H F 10は一辺3.6m、遺構検出面から床面までの深さ約15cmを測るやや小規模な方形の竪穴式住居跡である。S H F 10は掘立柱建物跡(S B F 55)の掘形によって、床面中央および南壁部が切られている。床面の遺存状態は悪く、7か所の円形ピットと北辺西よりで、一辺70cm、床面からの深さ15cmを測る方形土坑を検出した。周壁溝は確認できなかった。埋土内には須恵器杯身・杯蓋・甕、土師器甕・高杯などの細片がコンテナ・バットに1箱にも満たない程度出土し、図示できる土器は、須恵器杯身・甕の破片である。

S H F 20(図版第150) S H F 10の南約4mにあり、南辺はS K F 69によって切られている。S H F 20は、S H F 10と同様、東西3.4m、南北3.2m以上を測る小規模な方形の竪穴式住居跡で、遺構検出面から床面までの深さ約4cmを測る。S H F 10は周壁溝・ピットがなく、S H F 22と同様、竪穴式住居跡と明確に位置付けていいものかやや疑問が残る遺構である。埋土内からは須恵器杯身・杯蓋・甕、土師器甕などの細片がコンテナ・バットに1箱にも満たない程度出土した。

S H F 64(図版第149) S K F 27を切り、S D F 88によって切られた方形の竪穴式住居跡である。S H F 64は東西4.3m、南北4.2mで、南辺が北辺に比べて広い台形状を呈し、遺構検出面から床面までの深さ10cmを測る。床面には周壁溝はなく、ピットも6か所を検出したが、明瞭な支柱穴はない。北辺で中央よりやや西側に偏して馬蹄形の造り付け竈があり、竈中央には底部を打ち欠いた土師器甕603を正位の状態で据えている。竈の東約0.5mには一辺約80cm、深さ約35cmの方形土坑がある。また、竈の西側で床面直上から、完形の須恵器杯身が出土した。

S H F 64からは、須恵器杯身・杯蓋・甕、土師器甕・鉢・高杯・甌が、また、竪穴式住居跡内からではないが、住居跡の北方の近接した位置から韓式土器が出土した。

S H F 36(図版第151) S H F 36は旧流路に推積した黒褐色砂礫土層を切り込んだ遺構であり、また、南東に隣接したS H F 39を切り込んでいるため、平面輪郭および遺構掘削に際して難渋した遺構である。S H F 36は、東西4.2m、南北4.5m、検出面からの深さ20cmを測る方形の竪穴式住居跡で、北壁の西端ではS H F 36の上面遺構の可能性もあるが、埋土上面およびその外面に焼土面を検出した。

床面には6か所のピットを検出した。壁面をめぐる周壁溝は検出できなかった。埋土内からは須恵器杯身・杯蓋・無蓋高杯・甕などがコンテナ・バットに1箱に満たない程度出土した。

S H F 39(図版第151) S H F 36によって切られた東西4.6m、南北5.5m、遺構検出面から床面までの深さは15cmを測る、やや南北に長い方形の竪穴式住居跡である。床面では3か所の円形ピットを検出したが、周壁溝は検出できなかった。埋土内からは須恵器杯身・杯蓋・壺・短頸壺、土師器壺・甕・高杯・甌などがコンテナ・バットにして1箱程度出土した。図示した壺687は、前述のS H F 07・10の埋土内から、同一個体が出土している。

S H F 37(図版第152) S H F 36と同様、黒褐色砂礫土層を切り込んだ方形の竪穴式住居跡であり、後述するS H F 40を切る。S H F 37は、東西4.3m、南北4.5m、遺構検出面から床面までの深さ20cmを測る。床面にはピットを3か所検出したが、明瞭な周壁溝はなかった。埋土内からは、須恵器杯身・杯蓋・壺・無蓋高杯、土師器壺・甕・甑、韓式土器などが出土しており、その特徴からMT15型式の時期と思われる。

S H F 40(図版第152) S H F 37に切られた方形の竪穴式住居跡で、東西4.5m以上、南北約5.0m、検出面からの深さ約20cmを測る。床面には壁面に近接した位置にある2か所を含め、3か所の円形ピットがある。また、北壁中央には、土器(壺・甕の体部)片を含む東西約60cm、南北約80cmの不整形の焼土痕があり、造り付け竈の痕跡と思われる。埋土内からは須恵器杯身・杯蓋・甕・甑、土師器壺・甕・高杯片などコンテナ・バットにして3箱程度出土したが、その大半が細片であり、図示できるものは少ない。

S H F 41(図版第152) 南側をS H F 37に、西側の大半はS D F 99によって削り取られ、わずかに北東コーナー部分のみ遺存する竪穴式住居跡である。S H F 41は遺構検出面からの深さ15cmを測る。

埋土内からT K 10型式と思われる須恵器杯身・杯蓋が出土した。

S H F 38(図版第153) S H F 39の南壁と北壁を接するかのような位置にある方形の竪穴式住居跡で、東西3.4m、南北4.0m、遺構検出面からの深さ約20cmを測る。床面には周壁溝はなく、壁面とは平行しない位置に3か所のピットと3か所の土坑がある。埋土内からは、須恵器杯身・杯蓋・甑、土師器壺・甕の細片がコンテナ・バットに1箱程度出土した。

S H F 113(図版第153) S H F 38の南約3mにある方形の竪穴式住居跡で、東西5.2m、南北5.4m、検出面からの深さ10cmを測る。S H F 113は周辺の竪穴式住居跡と同様、旧流路に堆積した黒褐色砂礫土層を切り込んでおり、床面が明瞭でない。床面では3か所のピットを検出したほかは、周壁溝は検出できなかった。埋土内からは、須恵器杯身・杯蓋・甑・横瓶、土師器甕・高杯などの土器類のほか、長頸鏃などの鉄器(T 4・6・7)、滑石製白玉182点が出土した。

S H F 61(図版第154) S H F 64の南東約12.5mにあり、東西3.7m以上、南北4.5m、遺構検出面からの深さ10cmを測る方形の竪穴式住居跡である。床面には5か所の円形ピットと直径80cmの浅い土坑がある。周壁溝は検出できなかった。なお、S H F 61の東辺については精査を繰り返したが壁面が不明瞭であり、竪穴式住居跡と位置付けていかどうか疑問の残る遺構である。埋土内からは須恵器細片が出土した。

S H I 08(図版第155) S H I 08は東西3.9mで、南北はS D I 02によって南端が削られており、残存長3.5m、遺構検出面から床面までの深さ6cmを測る方形の竪穴式住居跡である。S H I 08の床面では、明瞭な周壁溝や柱穴は検出できなかった。北壁中央やや東寄り、「U」字形の焼土塊がめぐる造り付け竈がある。竈には、須恵器杯身を伏せた状態で据え、その上面には土師器甕の体部片を重ねている。須恵器杯身の西約20cmでは、土師器長胴甕が半截した状態で置かれていた。

S H I 109(図版第154) S D F 22・S B I 140によって切られた東西4.2m、南北3.8m、遺構検出面から床面までの深さ15cmを測る方形の竪穴式住居跡である。床面には4か所の円形ピットを東半部で検出できたのみである。周壁溝はない。埋土内から須恵器杯蓋、土師器甕の細片が出土した。

S H G 55(図版第155) S H G 59を切る東西4.2m、南北3.8m、遺構検出面から床面までの深さ8cmを測る方形の竪穴式住居跡である。床面は支柱穴と思われるピットが3か所あるが、北西部の支柱穴は検出できなかった。周壁溝は検出できなかった。S H G 55の床面直上では古墳時代後期以降の須恵器杯身・杯蓋・皿・甕などの細片が多く出土しており、F地点の竪穴式住居跡群にくらべて新相のものが多い。

S H G 56(図版第156) 北接するS H G 55によって北辺を切られた方形の竪穴式住居跡で、東西3.4m、南北3.7m、検出面から床面までの深さ10cmを測る。床面には南辺に2か所の柱穴と1か所の土坑を検出した。周壁溝は検出できなかった。埋土内には須恵器杯身、土師器甕・椀・高杯などが出土しており、S H G 55と近接した時期のものと思われる。

S H G 33(図版第156) G地点の南端で検出した東西4.2m、南北4.5m、遺構検出面から床面までの深さ20cmを測る方形の竪穴式住居跡で、S D G 48埋没後に造られ、南半は中世流路であるS R F 99によって削り取られている。床面では上面幅約20cm、深さ約10cmの周壁溝がめぐる。ピット8か所のうち4か所が支柱穴と思われる。北辺中央には長軸約70cm、短軸約55cmの焼土があり、造り付け竈があった可能性が高い。床面では須恵器細片、土師器甕・高杯のほか、滑石製白玉が54点出土した。

S H J 13(図版第159) J地点中央で検出した竪穴式住居跡で、東西4.6m、南北3.2mとやや東西方向に長いもので、遺構検出面から床面までの深さ6cmを測る。床面には明瞭な周壁溝、支柱穴はなく、竪穴式住居跡と位置付けていかどうか疑問の残る遺構である。床面直上にはわずかの土器とともに埋土の水洗中から滑石製白玉638点、有孔円板30点、剣形石製品7点が出土した。なお、S H J 13は後述するS H J 27によって一部切られている。

S H J 14(図版第157) J地点南西部で南西コーナーをS D J 01によって一部削り取られた方形の竪穴式住居跡である。S H J 14は東西2.5m、南北3.0m、遺構検出面から床面までの深さ10cmを測るもので、床面に5か所の円形ピットがあり、4か所は支柱穴と思われる。周壁溝は検出できなかった。埋土から土師器細片のほか、滑石製白玉11点が出土した。

S H J 16(図版第157) S H J 14の北西約7mで検出した東西2.8m、南北3.1m、遺構検出面から床面までの深さ6cmを測る方形の竪穴式住居跡である。床面には4か所の円形ピットを検出しているが、周壁溝は検出できなかった。埋土から土師器細片が出土した。

S H J 24(図版第160) S B J 21の東約0.6mと近接した位置で検出した東西3.7m、南北3.5m、遺構検出面から床面までの深さ10cmを測る方形の竪穴式住居跡である。床面に9か所の円形ピットを検出したが明瞭な支柱穴はなく、周壁溝も検出できなかった。

S H J 53(図版第160) 大半がS H J 24によって削り取られた方形の竪穴式住居跡で、東西3.6m、

南北1.3m以上、遺構検出面から床面までの深さ6cmを測るもので、床面には明瞭な周壁溝・支柱穴は検出できなかった。

SHJ27(図版第159) SHJ13の北側で、SHJ13を切る方形の竪穴式住居跡である。SHJ27は東西3.6m、南北3.1m、遺構検出面から床面までの深さ4cmを測るもので、床面には周壁溝はなく、5か所の円形ピットを検出した。SHJ27もSHJ13と同様、遺構面が浅く、遺構の平面輪郭も方形でないことから竪穴式住居跡と位置付けていかどうか疑問の残る遺構である。

SHJ28(図版第157) SHJ14の南西約6.0mにある方形の竪穴式住居跡で、東西2.8m、南北2.6m、遺構検出面から床面までの深さ2cmを測るもの。床面には4か所の円形ピットがある。SHJ28は、遺構面が浅く、不整形の平面輪郭であることから竪穴式住居跡と位置付けていかどうか疑問の残る遺構である。SHJ28からは須恵器無蓋高杯が出土した。

SHJ41(図版第160) 掘立柱建物跡SBJ107に切られた東西2.9m、南北3.1m、遺構検出面から床面までの深さ14cmを測る方形の竪穴式住居跡である。床面には4か所の円形ピットを検出したが、周壁溝はなかった。埋土から須恵器細片のほか土師器甕が出土した。

SHJ94(図版第158) 東半部はSKJ57によって削られた南北4.0m、東西の遺存長2.4m、遺構検出面から床面までの深さ4cmを測る竪穴式住居跡である。SHJ94は東半部の壁面の検出に努めたが不明瞭であり、竪穴式住居跡と位置付けていかどうか疑問の残る遺構である。

SHJ126(図版第158) J地点中央で、東西6.0m、南北は南半が不明瞭であるが5.8m以上、遺構検出面から床面までの深さ22cmを測る方形の竪穴式住居跡である。SHJ126はSAJ100・SBJ123によって切られており、一部柱穴がSAJ100と重複している。そのため、厳密ではないが、3m等間隔で2個一対の柱穴を4か所検出しており、床面は2時期にわたる可能性がある。北壁中央には竈の痕跡と思われる焼土が遺存している。埋土内からは須恵器杯身・杯蓋、土師器甕・高杯などが出土した。

SHJ191(図版第162) SBJ183に切られ、SHJ201を切る方形の竪穴式住居跡である。SHJ191は東西4.8m、南北4.5m、遺構検出面からの深さ6cmを測り、床面では周壁溝がめぐり、4本柱の支柱穴がある。埋土内からは須恵器片のほか、土師器壺・甕・高杯、製塩土器などが出土した。

SHJ192(図版第161) SBJ182の南西約1.0mと近接した位置にある東西4.2m、南北4.1m、遺構検出面からの深さ2cmを測る方形の竪穴式住居跡である。床面では周壁溝がめぐり、4本柱の支柱穴がある。埋土内からは須恵器杯身・杯蓋、土師器細片が出土した。

SHJ193(図版第162) SBJ197によって切られた東西3.7m以上、南北3.9m、遺構検出面からの深さ14cmを測る方形の竪穴式住居跡である。床面では東辺を除く3辺に周壁溝と4本柱の支柱穴がある。埋土内からは須恵器杯身・杯蓋・壺・ジョッキ形須恵器、土師器壺・甕・高杯などが出土した。

SHJ194(図版第163) SHJ193の南西約0.5mと近接した位置にある方形の竪穴式住居跡である。SHJ194は東西3.2mで、南北は南半部がトレンチ外となるため全長は不明であるが、遺

存長約2.6m、遺構検出面からの深さ10cmを測る。床面では西辺に周壁溝と2か所の支柱穴と思われる円形ピットがある。また、北西部では炭化した木材が出土した。埋土内からはジョッキ形須恵器、土師器壺・高杯などが出土した。

S H J 201(図版第161) S H J 201はS H J 191に切られたもので、北辺4.3m、南辺5.4m、南北5.6mを測る台形を呈し、遺構検出面からの深さ約25cmを測る。床面には11か所の円形ピットがあり、そのうち3か所が支柱穴と思われる。周壁溝はみつからなかった。埋土内からは出土遺物がなく時期は不明である。

(2)掘立柱建物跡

S B F 156(図版第163) S H F 115・116の上面で検出した東西棟の掘立柱建物跡である。S B F 156は東西2間が1.65mの、南北2間が1.5mの等間隔の建物である。ただ北西の中央および東端、南西の中央掘形が不明瞭であり、建物跡としてまとめてよいものかどうか疑問の残る遺構である。

掘形は、一辺0.35~0.7mの円あるいは隅丸方形を呈し、柱穴痕は明瞭ではなかった。掘形検出面から底部までの深さ0.15~0.3mを測る。

S B F 155(図版第164) S H F 10の上面で検出した南北棟の掘立柱建物跡で、建物の主軸はN 2° Wと真北に近い。S B F 155は、東西の梁間の柱間隔が1.35mの等間隔であるのに対して南北の桁行は北から1.65m・1.5mとわずかに差異があり、梁間に比べて柱間隔がわずかに広がる。各掘形は、直径0.5~0.8mの円形を呈し、柱穴直径は0.15~0.2mを測り、遺構検出面から掘形底部までの深さ0.2~0.6mとばらつきがあり、特にS H F 10の竪穴式住居跡と重なる掘形では深くなる。

S B F 96(図版第164) S B F 91の南西方向に近接してある南北棟の掘立柱建物跡で、東柱列はS D F 22と重複した位置により、わずかに南端の掘形のみ識別できた。これによると、S D F 22の埋没後にS B F 96は造られたものと考えられる。S B F 96は、桁行4間(6.45m)×梁間3間(4.35m)、桁行柱間の間隔は北から1.8m・1.5m・1.35m・1.8mで北端と南端の柱間がわずかに広い。梁行柱間の間隔は西から1.35m・1.5m・1.5mを測る。各掘形は直径0.35~0.5m、柱穴直径0.16m、掘形検出面からの深さ約0.2~0.3mを測る。

S B F 91(図版第165) S D F 22の東で近接して造られた南北棟の総柱建物跡である。S B F 91は、桁行3間(4.8m)×梁間2間(4.2m)で、桁行柱間の間隔は北から1.5m・1.5m・1.8mで南端の柱間がやや広がっている。梁行柱間は2.1mの等間隔である。各掘形は一辺0.6~1.2mを測る円形に近い方形で、柱穴は直径0.3~0.4m、検出面からの深さ0.4~0.5mを測る。北列中央の掘形では、掘形上面が削られ角礫が厚く推積している。S B F 91の掘形のうち、北側柱中央ロー四掘形から須恵器杯蓋(772)、南側柱中央ロー一から須恵器杯身(774)、南西隅のイー一掘形から須恵器体部片(773)が出土している。S D F 91は、後述するS D F 22の溝が機能した時期の建物と思われる。

S B F 92(図版第166) S D F 22の東側でS D F 42を切った南北棟の掘立柱建物跡である。S

付表6 掘立柱建物跡規模一覧

地点名	地区名	遺構番号	規模(m)		建物の形態		方位	備考
			東西	南北	柱間数	種別		
F	3, 4-Zy	SBF156	3.3	3.0	2×2	東西棟	N18° W	
F	99-C	SBF155	2.7	3.15	2×2	南北棟	N3° 未満	
F	98, 99-D, E	SBF96	4.35	6.45	3×4	南北棟	N23° W	
F	97, 98-E, F	SBF91	4.2	4.8	2×3	総柱	N8° E	
F	97, 98-H, I	SBF92	4.1	7.9	2×4	南北棟	N1° 30' W	
F	5-E	SBF107	4.2	4.2	2×2	?	N40° W	
I	5-G, H	SBI40	2.5	2.4	1×1	東西棟	N41° W	
F	6, 7-H, I	SBI153	3.0	6.1	2×4	南北棟	N45° 50' W	
I	97, 98-N, O	SBI05	5.55	4.35	3×3	東西棟	N42° E	
I	99, 1-P, Q	SBI06	5.25	4.2	2×3	東西棟	N44° 30' E	
I	2-K	SBI09	3.6	4.05	2×3	南北棟	N14° W	
I	7, 8-G, H	SBI161	3.0+ α	8.1	2?×5	東西棟	N47° E	
I	6-F, E	SBI139	3.0+ α	1.8+ α	1?×2?	?	N37° E	
I	6, 7-F, G	SBI140	3.9	7.2	2×4	南北棟	N36° W	
I	7, 8-D, E	SBI145	3.75	6.9	2×4	南北棟	N29° W	
G	5~7-P, Q	SBG47	7.05	4.2	2×4	東西棟	N44° E	
G	7, 8-I, J	SBG83	5.8	3.6	2×3	東西棟	N15° W	
G	9-F	SBG314	3.6	6.6	2×4	南北棟	N20° W	
G	10-G	SBG315	3.9	6.75	2×3	南北棟	N28° W	
J	4-W, X	SBJ167	4.2	3.6	2×2	東西棟	N13° E	
J	3-AH, AI	SBJ179	4.05+ α	2.1+ α	1?×2?	南北棟	N39° E	
J	4, 5-AI, AJ	SBJ180	6+ α	5.04	2×3?	東西棟	N5° E	
J	2, 3-AF, AG	SBJ178	4.95+ α	4.35	3?×2	東西棟	N37° W	
J	4, 5-AF~AH	SBJ181	5.25	6.3	3×4	南北棟	N41° E	
J	5, 6-AF, AG	SBJ182	4.05	5.85	3×2	南北棟	N48° W	
J	7, 8-AF~AH	SBJ197	8.0	2.1+ α	1?×4	東西棟	N37° W	
J	8~10-AC~AE	SBJ183	5.1	7.35	3×4	南北棟	N43° E	
J	6, 7-AA, AB	SBJ21	3.6+1.65	5.4	2×3	南北棟	N30° W	西庇をもつ南北棟
J	1, 2-L, M	SBJ45	4.05	6.0	2×3	東西棟	N42° E	
J	5, 6-D, E	SBJ107	3.6	3.9	2×2	総柱	N32° E	
J	3, 4-Y, Z	SBJ123	4.2	4.5	2×2	南北棟	N44° E	

B F92は桁行4間(7.9m)×梁間2間(4.1m)で、桁行の柱間間隔は北から1.9m・1.9m・2.05m、2.05m、梁間は2.05mの等間隔である。各掘形は、直径0.3~0.1m、検出面から底部までの深さ0.15~0.2m、柱穴直径約0.15mを測る。S B F92掘形のうち、北列西端のハ一五掘形からは、完形に近い須恵器杯身(785)と滑石製白玉1点が、イー二掘形からは須恵器杯蓋(679)が出土して

おり、S B F 91・S D F 22と同時期と思われる。建物主軸方位は、N 1°30′Wで真北に近い。

S B F 107(図版第165) S B F 107は、調査地中央南域にある桁行2間以上(4.2m以上)、梁間2間(4.2m)の南北棟の建物跡である。南辺がF地点調査地南壁に一部かかり、I地点へ続く。S B F 107の桁行西列の延長線上にS B I 139の西列がある。S B F 107とS B I 139が一連(同一)の掘立柱建物となる可能性もあるが、S B I 139の南列(梁間)は、1.5mの等間隔で、S B I 107の柱間間隔とは異なることから、ここではS B F 107とS B I 139は、別の掘立柱建物跡と考えておく。S B F 107の掘形直径約0.45~0.60m、柱穴直径約0.2m、検出面から底部までの深さ0.3mを測る。

S B I 40(図版第168) S D F 22の東側にある1間×1間の掘立柱建物跡である。S B I 40は東西の柱間2.5m、南北の柱間2.4mで掘形直径約0.4m、柱穴直径約0.14m、遺構検出面から底部までの深さ0.15~0.42mを測る。掘形内からは須恵器甕の体部片が出土した。

S B I 153(図版第168) S B I 153はI地点の調査が3期に亘って調査されたため、調査段階では意識できなかったが、遺構図面の検討段階で掘立柱建物の可能性があると考えた遺構である。S B I 153は桁行4間(6.1m)×梁間2間(3.0m)で、西側柱は明瞭であるが、北および東側柱は不明瞭である。掘形直径0.3~0.6m、柱穴直径約0.15m、遺構検出面から底部までの深さ0.15~0.2mを測る。掘形内からは出土遺物がなく時期は不明である。

S B I 05(図版第169) 旧府道下で、旧府道に平行するような方位(N42°E)に建てられた東西棟の掘立柱建物跡である。S B I 05はI地点での最初の重機掘削に着手した地点で検出された遺構であり、S B I 05が中世以降の遺物を含む青灰色粘質土層の上面から掘り込まれたものなのか、あるいは青灰色粘質土層を除去してはじめて検出できる遺構なのかどうかは明らかでない。ただ掘形内の埋土に青灰色粘質土を含まないこと、埋土の基本がF・G・J地点の掘立柱建物跡の掘形と近似したものであることから、中世以前の遺構と考えられる。

S B I 05は、桁行3間(5.55m)×梁間3間(4.35m)で、桁行の柱間間隔は、北から1.95m・1.8m・1.8m、梁間の柱間間隔は1.5m・1.35m・1.5mを測る。各掘形は一辺0.3~0.4m、遺構検出面から掘形底部までの深さ0.15~0.3m、柱穴直径0.1~0.12mを測る。

S B I 06(図版第170) S B I 05の南約2.0mにあり、S B I 05と同様、遺構掘削面は明らかでないが、中世以前の遺構と思われる東西棟の掘立柱建物跡である。

S B I 06は、桁行3間(5.25m)×梁間2間(4.2m)で、桁行の柱間間隔は北から1.8m、1.8m、1.65m、梁間の柱間間隔は西から2.25m・1.95mを測る。各掘形は一辺0.3m、遺構検出面から掘形底部までの深さ0.1~0.3m、柱穴直径0.12mを測る。S B I 05の建物主軸がN42°Eに対して、S B I 06はN44°30′Eと建物主軸がわずかに東へ振れている。

S B I 09(図版第169) I地点中央で検出されたもので、南西部を現代の攪乱土坑で、北端部を中世久我畷の北側溝で削平されている。梁間は不明で、桁行のみを検出した南北棟の掘立柱建物跡である。桁行は3間分(4.05m)のみを検出し、その柱間の間隔は1.35mの等間隔である。各掘形は一辺0.3~0.6mで、掘形一辺が東西に長い傾向がある。掘形検出面から底部までの深さ

0.15～0.3m、柱穴直径0.2mを測る。

S B I 161(図版第168) I地点とG地点にまたがる地点で、S T I 123の周溝および墳丘の精査に際して検出した掘形群である。西側柱掘形と北側柱掘形の規模が異なり、掘立柱建物跡と位置付けていかどうかや疑問の残る遺構である。また、S B I 161はS D F 22と重複関係にあるが、十分に検討することなく掘削作業を行ったため、その重複関係は明らかでない。S B I 161は桁行5間(8.1m)×梁間2間(3.0m)以上で、掘形は一辺0.5～1.0m、柱穴直径0.1～0.2m、掘形検出面から底部までの深さ約0.5mを測る。桁行の柱間間隔は西から1.8m・1.5m・1.5m・1.5m・1.8m、梁間の柱間間隔は北から1.2m・1.8mである。掘形内には土師器、須恵器の細片を含むが時期は不明である。

S B I 139(図版第167) I地点北端で検出した東西2間以上(3.0m以上)×南北1間(1.8m)以上の掘立柱建物跡である。東西方向の柱列は1.5mの等間隔で、東側にはS D F 22があり、掘形が削平された可能性がある。南北方向の柱列の延長部にはS B I 107の西列と直線的に続き、前述のようにS B F 107と同一遺構の可能性もあるが、東西方向の南列の柱間間隔が異なること、S B F 139の南北方向の東列掘形が明瞭でないことから別遺構と考える。S B I 139の掘形は一辺0.45～0.7m、柱穴直径約0.15m、検出面からの深さ0.2～0.5mを測る。

S B I 140(図版第167) S D F 22を切る南北棟の掘立柱建物跡である。S B I 140は、桁行4間(7.2m)×梁間2間(3.9m)で、桁行の柱間間隔は北から2.1m・1.65m・1.65m・1.8m、梁間の柱間間隔は1.95mの等間隔である。各掘形は一辺0.4～1.2m、柱穴直径0.12～0.2m、掘形検出面から底部までの深さ0.3～0.5mを測る。

S B I 145(図版第166) S B I 140の西約4.0mにある南北棟の掘立柱建物跡である。S B I 145は、桁行4間(6.9m)×梁間2間(3.75m)で、桁行の柱間間隔は北から1.5m・1.8m・1.5m・2.1m、梁間の柱間間隔は西から1.8m・1.95mを測る。各掘形は一辺0.55～0.7m、柱穴直径0.12～0.2m、掘形検出面から底部までの深さ0.3mを測る。

S B G 47(図版第172) G地点東端で、S D G 48の上面で検出した東西棟の掘立柱建物跡である。S B G 47は、桁行4間(7.05m)×梁間2間(4.2m)で、桁行の柱間間隔は北から1.95m・1.65m・1.65m・1.8mで、梁間の柱間間隔は2.1mの等間隔である。掘形は一辺0.45～0.6m、掘形検出面から底部までの深さ0.3～0.5m、柱穴直径0.2mを測り、柱穴内には一部柱根が遺存していた。各掘形からは土師器細片が出土しているが時期を決定するだけの資料ではない。

S B G 83(図版第171) S D F 22の東約2.5m、S H G 55の北約3.5mにある東西棟の掘立柱建物跡である。S B G 83は、桁行3間(5.8m)×梁間2間(3.6m)で、桁行の柱間間隔は東から1.8m・1.9m・2.1m、梁間の柱間間隔は1.8mの等間隔である。各掘形は一辺0.3～0.4m、柱穴直径0.1m、掘形検出面から底部までの深さ0.1～0.5mを測る。各掘形からは須恵器、土師器細片が出土しており、その特徴から古墳時代後期の竪穴式住居跡と同時期のものと思われる。

S B G 314(図版第170) 後述するS B G 315の北側で、重複するようにある南北棟の掘立柱建物跡である。S B G 314は桁行4間(6.6m)×梁間2間(3.6m)で、桁行の柱間間隔は1.65m、梁

行の柱間間隔は1.8mの等間隔である。各掘形は一辺約0.5～0.6mで、柱穴直径0.12～0.2m、掘形検出面からの深さ0.1～0.4mを測る。各掘形からは須恵器・土師器の細片が出土したが、所属時期を示す明瞭なものはなかった。

S B G 315(図版第171) G地点の西半で、S B G 314と重なるようにある南北棟の掘立柱建物跡である。S B G 315は、桁行3間(6.75m)×梁間2間(3.9m)で桁行の柱間間隔は2.25m、梁行の柱間間隔は1.95mのそれぞれ等間隔である。各掘形は一辺約0.3～0.4m、柱穴直径0.12～0.2m、掘形検出面からの深さ約0.2～0.25mを測る。桁行西列北から3列目ハ一三の掘形からは須恵器・土師器の細片が出土したが、時期を示す明瞭なものはなかった。

S B J 167 S B J 167は東西2間(4.2m)以上×南北2間(3.6m)で、東西の柱間間隔は2.1m、南北の柱間間隔は1.8mの等間隔である。掘形は一辺0.4mであるが、本来は上面での検出であることから考えると、掘形は一回り大きくなるものと思われる。柱穴直径は0.1mを測る。

S B J 179(図版第177) 調査地東端で検出した桁行1間(2.1m)以上×梁間2間(4.05m)の南北棟の掘立柱建物跡であり、東半部はトレンチ外となる。桁行1間の柱間間隔は2.1m、梁間の柱間間隔は西から2.1m・1.95mを測る。各掘形は一辺0.4～0.5m、柱穴直径0.15～0.18m、掘形検出面から底部までの深さ約0.5mを測る。S B J 179の主軸方位はN39°Eを測り、後述するS B J 182・183と方位が近似している。掘形内からは出土遺物がなく時期不明。

S B J 180(図版第177) S B J 179の南に近接した位置で検出した東西棟の掘立柱建物跡である。S B J 180は桁行3間以上(6m以上)×梁間2間(5.04m)を測り、桁行の柱間間隔は北列が東から2.1m・1.65m・2.25mに対し、南列は東から2.1m・1.95mとばらつきがある。梁間は検出した東列では、北から2.64m・2.4mとなる。なお梁間西列は中世流路によって削平され、検出できなかった。S B J 180の主軸方位は、N5°Eで磁北に近い。各掘形は一辺0.4～0.5m、柱穴直径0.1～0.14m、検出面から掘形底部までの深さ0.2～0.35mを測る。掘形内からは土師器片が出土した。

S B J 178(図版第175) 後述するS B J 181の北約1.8mで検出した東西棟の掘立柱建物跡である。S B J 178は、桁行3間(4.95m)以上×梁間2間(4.35m)で、桁行の柱間間隔は1.65mの等間隔、梁間の柱間間隔は北から2.25m・2.1mを測る。各掘形は、一辺約0.3～0.4m、柱穴直径0.1m前後、検出面から掘形底部までの深さ0.1～0.25mを測る。なお、S B J 178の東半部は検出できなかった。ホ一三掘形からは須恵器杯蓋の口縁部片が出土しており、古墳時代後期のものと思われる。

S B J 181(図版第175) S B J 178とは近接した位置で検出した南北棟の掘立柱建物跡である。S B J 181は桁行4間(6.3m)×梁間3間(5.25m)で、桁行の柱間間隔は、東列が北から1.65m・1.8m・1.2m・1.65mに対して、西列は北から1.65m・0.9m・1.8m・1.95mとばらつきがある。梁間の柱間間隔は東から1.65m・1.65m・1.95mを測る。各掘形は一辺0.35～0.5m、柱穴直径は0.1～0.14m、掘形検出面から底部までの深さ0.15～0.4mで、桁行が比較的深く掘り込まれている。主軸方位はN41°Eである。ニ一掘形、イ一三掘形から須恵器杯蓋(791)の破片が出土し

ており、古墳時代後期の時期と思われる。

S B J 182(図版第176) S B J 181の西側に近接してある南北棟の掘立柱建物跡である。S B J 182は、桁行3間(5.85m)×梁間2間(4.05m)で、桁行の柱間間隔は南列で東から1.65m・1.8m・2.4mを測るのに対し、北列は東が1.95mである。なお、北列は東から1列目を検出したのみで残り2か所は検出できなかった。梁間の柱間間隔は、東から2.4m、1.65mとなる。各掘形は直径0.3~0.4m、柱穴直径0.12~0.16m、掘形検出面から底部までの深さ0.1~0.35mを測る。掘形内からは須恵器杯蓋、土師器細片が出土しており、古墳時代後期の時期と思われる。

S B J 197(図版第176) 調査地南端で検出した東西棟の掘立柱建物跡であり、南半部は調査地外となる。S B J 197は、桁行4間(8.0m)×梁間1間(2.1m)以上で、桁行の柱間間隔は東から1.88m・1.8m・2.4m・1.92mを測る。各掘形は一辺0.3~0.42m、柱穴直径0.12~0.18m、掘形検出面から底部までの深さ0.12~0.22mを測る。なお、S B J 197は、S H J 193の埋没後に造られたものである。北柱列西端の掘形からは土師器細片が、その西側掘形からは須恵器杯身(792)が出土しており、古墳時代後期の時期と思われる。

S B J 183(図版第174) 調査地南端で検出した南北棟の掘立柱建物跡で、S H J 191の埋没後に造られている。S B J 183は桁行4間(7.35m)×梁間3間(5.1m)で、桁行の柱間間隔は東から3列が1.8mの等間隔であるのに対して、4列目は1.95mとわずかに広がる。梁間の柱間間隔も北から1列目が1.8mに対して2・3列目は1.65mの等間隔となる。各掘形は一辺0.3~0.5m、柱穴直径0.1~0.2m、掘形の検出面から底部までの深さ0.25~0.4mを測る。S B J 183の各掘形や柱穴からは少量の土師器の細片(790)が出土したほか、ホー四掘形から須恵器杯蓋の細片、イー四掘形から須恵器甕の口縁部片が出土しており、須恵器の特徴から古墳時代後期の時期と思われる。

S B J 21(図版第173) J地点中央やや南寄りで検出した南北棟の掘立柱建物跡である。S B J 21は、桁行3間(5.4m)×梁間2間(3.6m)の身舎に1間分(1.65m)の西廂がつく建物で、身舎は、桁行・梁間とも柱間が1.8mの等間隔であるのに対して、廂の出は1.65mでわずかに柱間間隔が狭くなる。各掘形は、0.4~0.7mの円あるいは方形で、掘形検出面から底部までの深さ0.35~0.45m、柱穴の直径0.1~0.2mを測る。各掘形・柱穴からは土師器の細片が出土するものが大半であったが、イー一、ハー一の掘形から須恵器杯蓋の細片が出土した。この須恵器細片は型式名までは明らかではないが、古墳時代後期の時期のものと思われる。

S B J 45(図版第174) S B J 21の北東約6.0mにある東西棟の掘立柱建物跡である。S B J 45周辺では、柱穴を含む土坑を数多く検出したが、建物跡としてまとまるものはS B J 45の1棟のみである。S B J 45は、桁行3間(6.0m)×梁間2間(4.05m)で、桁行の柱間間隔は東2列が1.95mの等間隔に対して3列目が2.1mとわずかに広がる。梁間も北から2.1m・1.95mの柱間間隔で北列がわずかに広がる。各掘形は0.4~0.5m、柱穴直径0.15~0.2m、遺構検出面から掘形底部までの深さ0.2~0.4mを測る。各掘形・柱穴からは土師器の細片が少量出土したものが大半であるが、イー一掘形で須恵器甕の口縁部片、ロー一掘形で須恵器杯蓋、イー三掘形で須恵

器杯蓋が出土した。各須恵器は細片であり、型式名までは明らかではないが、古墳時代後期の時期と思われる。

S B J 107(図版第173) S H J 41とは重複関係にあり、S H J 41の埋没後に造られた東西2間×南北2間の総柱建物である。S B J 107は東西2間(3.6m)×南北2間(3.9m)で、柱間間隔は東西1.8m、南北1.95mの等間隔である。掘形直径0.5~0.6m、遺構検出面から掘形底部までの深さ0.55~0.8mを測る。出土遺物がなく時期は不明。

S B J 123(図版第172) F地点中央でS H J 126とは重複した位置関係にある。調査最終段階で検出したため、その前後関係は厳密ではないが、S H J 126を切ったものと思われる。S B J 123は桁行2間(4.5m)×梁間2間(4.2m)で掘形は一辺0.3~0.4m、柱穴直径0.1~0.2m、遺構検出面から掘形底部までの深さ0.4mを測る。掘形内からの出土遺物がなく時期は不明。

S A J 110(図版第177) J地点中央で検出した掘形4か所からなる柵列である。S A J 110を構成する掘形は長辺約0.8m、短辺約0.6m、検出面からの深さ0.1mと比較的規模が大きく、掘形内からは直径約0.15mの柱穴をそれぞれ検出している。S A J 110は掘立柱建物跡を想定して周辺部での精査を繰り返したが、対となる掘形の検出がなく、ここでは柵列として考えている。なお、掘立柱建物を想定すれば柱間間隔は1.5m前後である。S A J 110の北端の掘形から須恵器杯蓋、須恵器甕体部片、土師器のそれぞれ細片が少量出土しており、古墳時代後期の時期と思われる。

(3)土坑・ピット

S E J 135(図版第178) 調査地東端で検出した直径1.18m、遺構検出面からの深さ0.53mで黒色粘質土を埋土とする井戸状遺構で、遺構内から須恵器杯身、土師器甕などが出土した。

S E H 11(図版第194) S D H 08の西約3.3mで検出した井戸。S E H 11は掘形の一辺約1.2m、検出面からの深さ約0.6mを測り、内側には一辺約0.8mの横棧縦板組の方形の木枠がある。S E H 11の井戸枠内からは、土師器皿、鉢・甕・羽釜のいずれかと思われる口縁部片、黒色土器Bの椀、須恵器鉢などの細片が出土しており、11世紀前半の時期と思われる。土器以外には桃などの種子が出土した。

S K H 16(図版第178) S D H 02に切られた東西1.47m、南北0.93m、検出面からの深さ10cmを測る方形土坑で、土坑内から土師器片が出土した。

S K F 109 S H F 06の北約1.2mで、一辺約0.6m、検出面からの深さ約20cmを測る不整形土坑である。土坑内からは須恵器杯身・杯蓋、土師器壺、製塩土器が出土した。

S K F 63(図版第178) 溝状遺構S D F 88によって東端が一部削り取られた不整形土坑で、東西1.8m、南北1.6m、深さ16cmを測る。埋土内から須恵器杯蓋・甕・壺、土師器壺などが出土した。

S K F 65 S K F 63の西約2.5mで検出したもので、明瞭な輪郭ではなく、平面も不整形を呈し凹み状の遺構とも思われる。埋土内から須恵器壺・甕が出土した。

S K F 28(図版第178) S B F 92の北3mの位置で、南に弧を描く半円形の土坑。東西2.4m、南北最大幅1.7m、遺構検出面からの深さ20cmを測る。埋土内には焼土を含む。土坑内から須恵

器杯蓋・甕、土師器壺・甕・甌などが出土した。

S X F 114 S H F 115の北側で検出したもので、当初はS H F 115によって削られた竪穴式住居跡と考えて精査を進めたが、平面輪郭が不整形であり、不明土坑として記述する。S X F 114は一辺約5mを測り、遺構検出面からの深さ10cmを測る。S X F 114埋土内からは、須恵器杯身・杯蓋・高杯・甕のほか、S H F 115で図示した土師器甕の同一破片が出土した。

S K F 02(図版第179) 直径1.4m、遺構検出面からの深さ18cmを測る円形土坑である。土坑内から須恵器杯身・杯蓋、土師器高杯などが出土した。

S K F 78(図版第179) S K F 02の北側で畦の除去中に検出した東西85cm、南北52cmの焼土坑である。土坑内からは須恵器杯蓋・提瓶、土師器高杯・甌、製塩土器などが出土し、甌のうち、同一個体の破片がS H F 115から一片出土した。

S K F 146 S D F 147を切り、中世以降の流路であるS R F 99によって南側は削られている。南北軸3m、東西軸3.5mの楕円形を呈し、遺構内には須恵器杯身・短頸壺、土師器甕・甌などが出土した。

S K F 69 S H F 20を切る楕円形土坑で、長軸3.5m、短軸2m、遺構検出面からの深さ0.1mを測る。S K F 69からは、須恵器杯蓋、土師器甕・高杯の細片が少量出土した。

S K F 76(図版第179) S H F 36の北にあり、長軸1.8m、短軸1.7mの方形に近い不整形土坑である。遺構検出面から底部までの深さは5cmと浅い。S K F 76の西端部に焼土塊が、また、S H F 36と隣接した位置でS K F 76の上面にも長軸0.8m、短軸0.5mの焼土面があった。埋土内から須恵器杯身・杯蓋、土師器壺・甕などが出土した。

S K F 67 一辺が3m前後の方形に近い不整形土坑である。S K F 67は皿状の底部を呈し、遺構検出面からの深さ約10cmを測る。埋土内から須恵器杯身・杯蓋、製塩土器の細片が出土した。

S K F 47(図版第180) 一辺約1mを測る方形土坑で、遺構検出面からの深さ10cmを測る。土坑内からは土師器甕のほか、須恵器、製塩土器の細片が出土した。

S K F 44 S B F 92と重複した位置にある長軸2.2m、短軸0.8m、検出面からの深さ10.5cmを測る不整形土坑である。土坑内から須恵器杯蓋・壺・甕のほか、土師器、製塩土器の細片が出土した。

S K F 34(図版第180) S B F 91の南西約3.0mで、S K F 47に近接してある一辺0.7m、検出面からの深さ5cmを測る方形土坑である。埋土内には焼土を含み、須恵器杯身のほか、土師器の細片が出土した。

S K F 58(図版第180) S K F 34の西約10cmと近接した位置にある長軸0.65m、短軸0.48m、検出面からの深さ5cmを測る円形土坑である。埋土内から土師器片、製塩土器片が出土した。

S K F 176(図版第180) 方形周溝墓S T F 203の西溝中央で、周溝の埋没後に掘り込まれた焼土・炭も多量に含む長軸約0.6m、短軸約0.55m、深さ20cmの方形土坑である。埋土内から須恵器杯身、土師器椀・高杯などが出土した。

S K I 01(図版第180) I地点中央で検出した長軸1.1m、短軸0.95m、検出面からの深さ10cm

を測る円形土坑で、土師器甕などが出土した。

S K I 127(図版第181) S K I 126の北西約4.5mで検出した長軸1.6m、短軸1.3m、検出面からの深さ10cmを測る不整形土坑で、土坑の埋土には炭を含む。S K I 127は、S P I 144の掘形を切っている。埋土内からは須恵器杯蓋、土師器甕・高杯などが出土した。

S K I 126(図版第181) 長軸1.65m、短軸1.05m、深さ10cmを測る楕円形土坑である。土坑内から須恵器杯身・杯蓋・横瓶、土師器甕が出土した。

S K G 06(図版第182) S D G 02・03の間で検出した長軸1.65m、短軸1.05m、検出面からの深さ10cmを測る楕円形土坑で、土坑内から完形に復原できる奈良時代の長胴甕が出土した。

S K G 31 G地点北端で、トレンチ壁に一部のびる短軸1.4mを測る楕円形土坑である。土坑内から須恵器細片、土師器皿底部片を含む土師器細片が出土した。土師器皿の特徴から奈良時代以後のものと思われる。

S K J 49 J地点西端で検出された皿状の底部をなす落ち込みで、埋土内には一部焼土を含み、土師器片が出土した。

S K J 54(図版第182) S P J 08の北東約2.5mにある長辺2.43m、短辺1.8m、遺構検出面からの深さ16cmを測る楕円形土坑で、土師器・須恵器のほか、滑石製白玉が出土した。

S K J 224(図版第183) S K J 224は明確な遺構輪郭は確認できなかったが、遺物除去後、わずかに窪みを検出したため土坑と思われるものである。ジョッキ形須恵器が出土した。

S K J 47(図版第183) J地点南半で、S D J 06によって西端が切られた長軸2.2m、短軸2.0m、検出面からの深さ50cmを測るもので、底部は皿状を呈している。後述するS D G 51を切っている。埋土内から須恵器壺・甕口縁部片、土師器高杯・鉢などが出土した。

S K J 101(図版第184) S B J 21の南西約2.8mで長軸約2.65m、短軸約1.3m、遺構検出面からの深さ25cmを測る楕円形土坑で、須恵器碗、土師器高杯が出土した。

S K J 225(図版第184) 直径0.54m、深さ5cmを測る円形土坑で、土坑上面から土師器片が出土した。

S K J 195(図版第184) S D J 196によって切られた長軸1.52m、短軸1.2m、深さ10cmを測る隅丸方形土坑である。土坑内から土師器が出土した。

S K J 229(図版第185) S H J 193の西壁でS H J 193に切られた、一辺0.8m、遺構検出面からの深さ0.3mを測る方形土坑。土坑内から土師器壺などが出土した。

S K J 154(図版第186) 調査地東端、S B J 186に近接する長軸2.3m、短軸1.3m、遺構検出面からの深さ0.1mを測る楕円形土坑。土坑内から須恵器有蓋高杯・甕などが出土した。

S K J 214(図版第185) 長軸約1.6m、短軸約1.3m、深さ約30cmを測る不整形土坑内にさらに長軸1.25m、短軸0.8mの不整形に掘り込まれた2段土坑で、埋土内に焼土を含む。深く掘り込まれた土坑内には土師器高杯のほか、石材が含まれていた。

S K J 215(図版第185) S K J 214の南約20cmと近接した位置にある方形土坑であるが、南半部は調査地外のため全体の形状は不明である。土坑内からは土師器壺・高杯などが出土した。

S K J 139(図版第186) 調査地東端にある直径2.0m、遺構検出面からの深さ32cmを測る円形土坑である。土坑内には炭を含み、須恵器杯身・杯蓋、土師器甕などが、比較的まとまって出土した。

S K J 198(図版第186) 調査地南端で検出した直径約1.1m、遺構検出面からの深さ約15cmを測る円形土坑で、南半はトレンチ外となる。ジョッキ形須恵器、土師器片が出土した。

S K J 146(図版第187) 西半部を攪乱により削り取られており、推定直径0.8m、深さ20cmを測る円形土坑である。土坑内から土師器甕が1個体出土した。

S P J 159(図版第187) 直径約0.55m、深さ約15cmを測る円形ピットで、土師器高杯を含む土師器片、製塩土器などが出土した。

S P J 68(図版第187) S P J 61の南東約3mに位置する直径0.2m、検出面からの深さ5cmを測る円形ピットで、鉄鋌(T14)が出土した。

(4)溝状遺構

S D F 01 F地点の西端で上面幅3.5～5.5m、遺構検出面からの深さ1.5m、検出全長25mを測る溝である。S D F 01西側では明瞭な遺構がなく湿地状地形となる。溝内からMT15型式の須恵器無蓋高杯、土師器壺・高杯、製塩土器などが出土した。

S D F 18 S D F 18は平成9・10年度にかけて調査したもので、東接するSH111との遺構の前後関係が明らかでない溝状遺構である。S D F 18は検出全長21.5m、上面幅0.7～1.5m、遺構検出面からの深さ0.2mを測り、南端はS R F 99によって削りとられている。埋土内から土師器高杯が出土した。

S D F 22(図版第188) S D F 22は、調査地中央域を北から南南東に向け流れる溝で、上面幅2.0m、深さ0.4～0.7mを測り、総延長約40mにわたって検出した。断面は「U」字形を呈し、砂礫や砂質土で埋もれていた。埋土から出土した土器の多くが6世紀前半代のものであることから、竪穴式住居を中心とした集落が営まれていた時期とほぼ同時期に機能していたと考えられる。この溝を境に、東側では竪穴式住居跡の数が少なくなっている。

S D F 88 S H F 64・S K F 63を切る溝状遺構で検出全長23.5m、上面幅0.8～1.5m、検出面からの深さ0.2mを測る。埋土内から須恵器甕の口縁部片が出土した。

S D F 147 上面幅1.0～1.4m、深さ0.5mを測る溝で、一辺の長さ4.5m以上で「コ」の字形にめぐる。S H F 120、S E F 105によって切られており、埋土内から須恵器杯身・杯蓋、土師器甕、製塩土器などが出土した。

S D F 108 S H F 111の南東部で検出した上面幅20cm、深さ5cmの小溝で、南延長部はS D F 99に切られる。須恵器把手付椀が出土した。

S D G 41 G地点中央で、南北に一部斜行しながら北から南へ流れる溝状遺構である。S D G 41は全長37m以上で、上面幅0.3～0.6m、遺構検出面から底部までの深さ0.5mを測り、後述するS D G 48・51を切る。溝内から須恵器直口壺の口縁部片・杯細片、土師器高杯が出土した。

S D G 48(図版第189) G地点東端で、北端はI地点まで続き、南端は一部S R F 99に切られ

ながらもH地点まで続く調査地全域を縦断する南北方向の溝である。

全長90m以上、上面幅2m、検出面から底部までの深さ0.6mを測り、SDG41に切られ、SHG33、SBG47はSDG48が埋まった後に造られている。砂礫層内より土師器壺の頸部、甕体部のそれぞれ細片が出土した。

SDG58 G地点南半で、SDF22から別れた上面幅0.5~0.8m、遺構検出面から底部までの深さ20cmを測る溝状遺構である。SDG58とSDF22の合流地点では、SDF22が上面幅3mと幅広くなり、SDF22で溜めた水をSDG58に注ぎ込むような様相を呈している。溝内から古墳時代の土師器高杯・甕片が出土した。

SDG59 G地点中央北側で、上面幅4.0m、検出面からの深さ15cmを測る溝状遺構である。SDG59の埋土は溝内から須恵器杯身・瓶・樽形甕、土師器高杯のほか、奈良時代の土師器椀・皿などが混在して、コンテナ・バットに3箱程度出土した。

SDJ01(図版第190) J地点西端で、北から南へほぼ真北に掘り込まれた全長49m、上面幅1.5~2.0m、検出面から底部までの深さ0.6mを測る溝状遺構である。SDJ01の北端は3ライン付近でとぎれる。南端は調査地外へのびる。埋土内から奈良時代以後の土師器・須恵器が出土した。

SDJ06(図版第190) J地点中央を南北方向にやや弓なりになりながらも真北方向にのびる検出全長90m、上面幅1.0~2.0m、検出面からの深さ0.4mを測る溝状遺構である。後述するSDJ46によって切られる。引手壺(T17)が1点出土した。

SDJ46 調査地南端で10ライン付近からトレンチ南壁につづく検出全長20m、上面幅1.0m、検出面から底部までの深さ0.5mを測る溝状遺構で、溝は北から南へほぼまっすぐに掘られている。

(5) そのほかの遺構

SXF211(図版第195) F地点の西端で、SDF01の西肩近くで検出したものである。精査段階では、明瞭な遺構は検出できなかったが、土師器甕と須恵器杯身・杯蓋が1個体ずつ並んだ状態で出土した。

SXF212(図版第195) SXF211の南側で、SXF211と同様、明瞭な遺構は検出できなかったが、須恵器杯身・甕がほぼ完形の状態で出土した。

SXF151 SXF151は一辺4m前後の台形状を呈し、遺構検出面からの深さ3cmと浅いものである。SHF123と同様、須恵器、土師器が上面精査の際に散布していた状態であり、コンテナ・バットにして3箱程度の土器が出土した。図示し得た遺物は須恵器杯身・有蓋高杯蓋・甕であり、その特徴からMT15型式に相当するものと思われる。

SKG92 SRF99の東約2.0mで検出した、直径2.5m、検出面から底部までの深さ22cmを測る円形土坑である。西方向で一部溝状に掘り込まれており、SDF22に連結される。

SXJ223(図版第195) 竪穴式住居跡SHJ13とSHJ94の間にあり、長軸5m、短軸4mの範囲で須恵器杯身の出土があり、精査を努めたが、明確な遺構の輪郭が確認できなかったものである。

(6)久我畷関連遺構

I地点の大半を占める府道下植野大枝線は、乙訓郡の条里地割を直線的に斜行し、平安京の朱雀大路の延長線である鳥羽作道から山崎駅を繋ぐ「久我畷」と推定されている道路で、下植野南遺跡の発掘調査では着手前から注目されている地点であった。

このI地点は総延長130m、幅60mであり、府道に伴う埋設管が予想できたため、調査方法を検討するため府道を横断する形で試掘トレンチを設定した。その結果、多くの埋設管が埋められており、全域を表土直下から人力によって調査することは困難であると判断し、I地点を3区画に分け、調査方法を各トレンチで変えた。すなわち、中央のIトレンチでは全ての埋設管を重機によって除去するため、表土下約1.7mまで重機掘削を行ったのち、人力による精査を加え、東端(I-1トレンチ)および西端(I-2トレンチ)では埋設管を残したまま、上面のアスファルト直下から順次人力によって精査を加えた。

SDI02(図版第196) 検出全長54m、上面幅1.2m、検出遺構面からの深さ0.2~0.4mを測る溝状遺構で、濁褐色礫混粘土から切り込まれている。後述するSDI03と対となるもので、推定中世久我畷の南側溝と思われる。SDI02とSDI03の溝の心々距離は8.5~9mを測り、SDI02の北肩から北に約0.2~0.3mの位置にSDI02と平行するように杭列がある。SDI02の北東端はN区で途切れる。これは溝が東にいくに従って徐々に浅くなることから類推すると、一部重機掘削によって削平したためであり、本来は北東方向にそのままのびるものと思われる。SDI02の埋土内からは平安時代以降の土師器・須恵器の細片が出土した。

SDI03(図版第196) 検出全長43m、上面幅0.5~1.5m、検出遺構面からの深さ0.2~0.4mを測る溝状遺構である。北東端はN区で途切れる。SDI03もSDI02と同様、一部重機掘削によって削平したため、本来は北東方向にそのままのびるものと思われる。SDI03は、推定中世久我畷の北側溝と思われ、南肩から北に約0.2~0.3mの位置に本溝と平行するように杭列がある。なお、溝底は、SDI02の標高に比べて若干浅くなる。埋土内からは平安時代以降の土師器、須恵器の細片のほか、瓦器椀が出土した。

I-1トレンチはアスファルトを除去したのち、順次人力によって掘削作業を行ったが現代の排水施設が合流する地点であり、Iトレンチ以上に攪乱部分が多く、良好な状態で遺構を検出することはなかった。アスファルト上面から下約0.3mで路面状遺構を、さらに順次掘削を行うと杭列と矢板を検出したが、SDI02・03のような明確な溝状遺構は検出できなかった。

なお、I地点の調査前に行った、試掘トレンチの断面観察では、上層で畦畔あるいは農道を想定するような土塁状の高まりとその両側(北・南側)には、水田の耕作に伴う水平堆積土を確認しており、各土層の時期を検討するために層位ごとに調査を行った。花粉分析の結果から水田の耕作面と思われる堆積土を検出し、各層から染め付けを含む遺物が出土した。また、水田面の堆積土を切り込んだ井戸(SEI52)があり、この井戸から寛永通寶が数枚出土した。

SDI31(図版第197) 中世久我畷の南側溝SDI02の延長部と思われるもので、現代の攪乱によって各地点で削り取られており、溝は途切れ途切れになっている。推定全長9m、上面幅

0.3m、遺構検出面からの深さ0.2mを測り、埋土は灰色砂質土で、埋土内から少量の土器が出土した。

S D I 56(図版第197) S D I 03の延長部と思われるもので、上面幅1.8~3.0m、深さ0.2~0.3mで、検出全長12.0mを測る。東端は削平されている。

S X I 33(図版第197) 96とSラインの交点付近から扇状に小指大の礫が一層広がるものである。上面に堆積した淡灰褐色砂質土を除去した段階で検出できた。この礫層は黒褐色粘質土の直上に薄く堆積しているもので、明瞭な遺構の輪郭は検出できず、路面の上面に敷きつめた礫面を想像したが、一部分に礫が広がること、推定久我畷の一部決壊したところから礫面が広がることから、ここでは人工的に礫を敷き詰めたと仮定するよりも、洪水によって運ばれてきた礫の可能性が高い。

S D I 106(図版第196) I地点中央で検出したS D I 02の西延長部と思われる同一の溝状遺構で、中世久我畷の南側溝と思われる。上面幅2.0~2.7m、検出面から底部までの深さ0.2mを測る。西端は中世流路であるS R F 99によって削られている。

S D I 122(図版第196) I地点の西端で検出した全長16m、上面幅2.0m、検出面から底部までの深さ0.2mを測る溝状遺構である。S D I 03と同一のもので、中世久我畷の北側溝と思われる。本溝はS D I 106と同様、西端は削られている。

S F I 162(図版第196) S D I 106(久我畷南側溝)とS D I 122(久我畷北側溝)の間にあり、栗石を敷き詰めた路面状遺構である。S F I 162は検出全長17m、幅7mで、栗石直上と栗石を除去した面で、少量の土器とともに古銭(K1~12)が出土した。また、S F I 162の両肩には、杭列がある。

柵列 久我畷関連遺構の調査では、直径約6cmの丸木材を利用した杭列を数多く検出した。杭列については時期を明確にできないが、杭の遺存状況が良く、現代に近い時期のものであると思われる。

S A I 21(図版第197) 近世以降の久我畷の路面上面で検出した丸木材(直径6cm前後)を利用した杭列である。杭列は路面北肩付近に打ち込まれており、側板を固定するためのものと思われる。全長約4.9mまで確認した。

S A I 24(図版第197) S A I 21と同様、直径約6cmの丸木材を利用した杭列で、全長1.6mまで確認した。S A I 21の延長線からわずかに南にずれている。

S A I 25(図版第197) S A I 21の南約2.5mで検出した丸木材(直径約6cm)を利用した杭列である。杭列は現在の攪乱(水道管)によって一部削平されているが、全長約3.5mまで確認できた。S A I 21とS A I 25の杭列は一对をなすものと思われ、その杭列の間(約2.5m)が近世以降のある時期の路面幅と思われる。

S A I 26(図版第197) S A I 24の南約2.5mで検出した丸木材(直径約6cm)を利用した全長約2.8mの杭列である。S A I 24と対となる路面両肩の護岸施設と思われる。ただ、S A I 21・25の延長部からS A I 24・26へは南へずれており、近世のある時期には久我畷がTライン付近で現

府道からわずかにずれていくことが明らかになった。

S A I 27(図版第197) S A I 23の延長部にある直径約10cmの丸木材を利用した杭列である。杭の間には一部板材(厚さ1.5cm)を利用した側板が据えられており、S A I 27の丸木材は側板を固定するためのものと思われる。杭列は同一遺構と思われるS A I 23からのものと考え、全長14m以上を測る。

S A I 30(図版第197) S A I 28・29と同様の丸木材を利用した杭列で、杭列の間には護岸用の板材(厚さ1.5cm)が側板として据えられている。西端のS A I 22と同一のものと思われ、その全長は15mを測る。なお、S A I 30が路面の南肩の杭列、S A I 27が北肩の杭列と考えると道路幅は約5.2mとなる。

(7) H地点

S D H 02(図版第191) S D G 51と同一遺構と思われるもので、後述する中世流路S R H 06によって、大半が削平されている。

S R H 06(図版第191) 上面幅16.0~20.2m、検出面からの深さ1.25mを測る中世流路で、F・G地区の西端を流れJ区の南西端に至る。S R F 99と同一遺構の可能性はある。

S D H 08(図版第192) S R H 06によって北端は削られ、南端はトレンチ外となる。検出全長18.0m、上面幅4.0m、検出面からの深さ0.4mを測る南北方向の溝状遺構である。溝内西辺に沿って等間隔に墨書人面土器が出土した。同東辺では土師器皿・甕などが出土した。

S D H 09(図版第191) 調査地東半で、S D G 48とつながるもので、S R H 06によって切られた検出全長11.0m、上面幅1.2~1.8m、検出面からの深さ60cmを測る南北方向の溝状遺構である。

S D H 12 S D H 08と重複する位置にあり、S D H 08の完掘後に検出した全長10m、上面幅0.2~0.9m、検出面からの深さは30~50cmを測る南北方向の溝状遺構である。北半部ではS D H 08と重複するが南半部では西方向へずれていく。

S D H 13(図版第191) 調査地西端で検出した全長25m、上面幅3.5~4.0m、検出面からの深さ65cmを測る南北方向の溝状遺構である。埋土は上層が灰色粘土を含んだ砂層で、下層は黒灰色粘土である。

S K H 16(図版第178) S D H 02を切った東西1.47m、南北0.93m、検出面からの深さ10cmを測る方形土坑で、土坑内から土師器片が出土した。

S D H 17 S D H 08の東で検出した全長8.5m、上面幅0.5m、検出面からの深さ30cmを測る南北方向の溝状遺構である。

S D H 19(図版第191) S D H 17を切った、全長11.0m、上面幅0.7m、検出面からの深さ55cmを測る南北方向の溝である。

S X H 20 調査地南端で検出した東西方向に落ち込む凹みで、稲株痕跡を数多くとどめた水田面と思われる。

(石井清司)

第3章 出土遺物

第1節 弥生時代の遺物

方形周溝墓の遺物 各方形周溝墓では、主体部から石剣・石鏃が出土したものが7例で、ほかの主体部からは遺物の出土はない。土器は周溝内あるいは周溝と考えられる地点から出土しており、完形に復原できるものと、当初から破砕されていた可能性が高いものがある。以下、各方形周溝墓ごとに遺物の説明を行う。なお、口径・規模・調整などの詳細は巻末の土器観察表を参照していただきたい。

(1) 土器

S T F 193出土土器(図版第199) S T F 193からは35～38が出土した。35は西溝の南半から36と共伴出土した広口短頸壺である。体部最大径が低い位置にあり、底部へのフォルムもやや鈍重なイメージを受ける。球胴形に張る胴部の下半にタテ方向のミガキ、上半にハケ後ナデののちに櫛描直線文を2帯施す。この壺の櫛原体は9条/31mmと幅が広い割に条数は少ない。また、6～7回の継ぎ描きが行われ、下段では9回にも及ぶ点も特徴である。胴部下半にスス痕がある。搬入品の可能性が高い。36は西溝の南半で出土した広口短頸壺である。35に比べてやや口頸部が短い形態で、胴部は球形に張り、最大径はやや低い位置にある。器壁は磨滅が著しく、かろうじて底部付近をタテミガキで調整している可能性を指摘できるのみである。器壁はほとんど残っておらず、施文の有無は不明だが現状では櫛の痕跡は確認できない。底部をミガキで処理するのが特徴で、胎土も2～3mm程度の長石や石英が目立ち、特に含有鉱物の量が多いなど搬入品の可能性が高い。37は口縁部をヨコナデで調整して口縁端面を形成する甕である。口縁の上端部をハケ工具によって刻み、胴部は強く張る。外面は短いピッチのタテハケで調整する。内面はヨコハケ後ナデで、口縁のヨコハケの後に胴部のナデを施している。胴部内面の下半部にはドーナツ状のスス痕が認められる。38は甕用蓋である。西溝の2個体の壺と共に出土した。甕口縁の可能性も考えられたが、内面調整が粗雑であることなどから蓋と判断した。

S T F 194出土土器(図版第199) S T F 194からは39～41が出土した。39は西溝南半で出土した広口短頸壺である。胴部の一部は推定復原であるが、胴が強く張る。口縁は端部が内面よりも下がるタイプで、下端にハケ刻みを施す。鉱物粒径は大きいものが目立ち、チャートはほとんど含まれず赤色粒が多いのが特徴で、搬入品の可能性がある。器壁は内外面共に荒れており調整は不明であるが、胴部下半はミガキの可能性もある。40は口縁が弱く外反する如意状口縁の鉢である。広口短頸壺39のやや北側で出土した。この小形の鉢は外面をタテハケで調整するが、大半が磨滅している。底部には木葉を2枚重ねた圧痕が明瞭に残っている。41は如意状口縁の甕である。胴部が強く張り、口縁端部はヨコナデ後に櫛描波状文を施すが、ヨコナデが弱いため口縁はやや

不整形である。甕としてはやや大形の部類に入り器壁が厚いのも特徴である。組成比は低いが山城地域では一定量の出土が認められる甕である。

S T F 196出土土器(図版第199) S T F 196からは壺の底部42が1点出土した。

S T F 181出土土器(図版第200・205) S T F 181からは43～53・102・103が出土した。43は広口壺の口縁部片で、端部は上下に拡張を指向するが明瞭でない。これと同一個体とみられる無文の胴部片も全体の1/8程度の破片が出土しているが、接合、図化ともに困難である。44と45は壺の胴部下半である。後者には底部外面に木葉圧痕があり、前者は磨滅が著しい。46は胴部の強く張る壺である。外面の調整はハケの後にナデ、その後胴部下半にミガキを加える。このような調整の壺は唐古・鍵遺跡^(注22)13次S D 06最下層資料などに類例があるが組成率は高くない。外面胴部下半にドーナツ状スス痕があるが、内面にはスス痕は認められない。47はやや背が高い摂津型水差である。器壁の遺存状況は悪いが、無文と思われる。頸胴部はハケ後ナデ、胴部下半にはミガキを施している。この土器は胴部上半と下半に2分され、それぞれ互い違いに並列するように出土したが、胴部には打撃痕のようなものは認められない。48は小形の甕で、口縁をヨコナデで整形しないため、口縁端部は面を形成するものの形態的には安定していない。底部には木葉圧痕が認められるが著しく磨滅している。外面にはススがこびりついている。49は底部から口縁部まで直線的に広がる小形の甕である。口縁をつまんで折り曲げてつくり出すため、胴部に比べると口縁部の器壁は薄い。胴部内面はタテケズリで仕上げるが器壁は厚い。また、外面に礫の移動痕を観察できる部分があることからタテハケの前にケズリを行っている可能性が高い。胴部内面にケズリ調整が認められるのは全器種の中でこの1点のみである。50は「く」の字口縁の甕である。口縁端部はわずかに跳ね上げぎみにヨコナデで調整される。外面調整のハケは細かくやや繊細である点が特徴的である。器壁は薄いが内外面ともにケズリの痕跡は認められない。口縁内面のヨコハケもていねいにナデ消され、口縁端部には刻目も持たない。外面にはススが付着している。51は甕の胴部下半である。外面にはススが付着しており、外面の剥離が特に著しい。52は「く」の字口縁の甕である。胴部最大径は高いが、プロポーションにシャープさを欠く。口縁端部はやや跳ね上げぎみに整形される。外面調整は細かいタテミガキで、その範囲は胴部最大径付近にまで及ぶ。一次調整のハケは磨滅により観察できない。器壁は薄いが内外面ともにケズリの痕跡は認められない。53はミニチュア壺である。全面手づくね調整で不整形である。102・103は如意状の甕口縁である。口縁は短く外反し、おそらく胴部最大径が口縁を上回るものと考えられる。

S T F 183出土土器(図版第200) S T F 183からは壺が1点出土した。54は無文の広口壺である。頸部以上は出土しなかった。肩部から上の破片は接合していないが、同一個体と判断し図上で復原した。外面はハケの後、胴部下半をミガキで調整している。

S T F 180出土土器(図版第201) S T F 180からは55～65が出土した。このうち、55～57・60～63・65が東溝で集中して出土した遺物である。55は頸部が強くすばまり口縁端部が外方に下がるタイプの広口壺である。頸部に直線文、それ以下に波状文を施すが、特に波状文は波長が不安定である。櫛原体は4条で幅7.5mmとやや隙間のあいたものが用いられる。コブ状突起は全ての

調整が終了してから3か所に貼り付けられていたと考えられるが、折損したコブも含めて2か所しか残存していない。木葉圧痕は認められない。56は55と同型式の広口壺である。形態・施文位置・施文パターンまではほぼ同じであるが、口縁内面にコブ状突起が付されておらず、木葉圧痕をもつ点が異なる。57は無文の広口壺である。口縁は直線的に開くが、55や56とは異なり、胴部は強く張らない縦長のプロポーションとなる。胴部下半はタテハケ、胴部中位から上半にかけてはタテミガキが施される。こうした調整の壺は1点のみである。58は無文の広口壺である。頸部がややすぼまり胴部は強く張らない。外面調整は全面タテハケで、口縁端部は面をもち端面は正面から刻む。このタイプの壺は組成比は低いものの、長岡京市神足遺跡^(注23) S K 1689、能登川町中沢遺跡^(注24) 4次 S X 1などに類例がある。58は64の甕と同一地点で出土している。59は無文の小形短頸壺である。調整は全面磨滅しているが、底部外面はタテハケの後にナデと指頭圧で整形する。本調査ではこの型式は1点のみの出土である。60は壺の底部である。61は口縁部が短く外反する高杯である。口縁端部と脚部内面にはヨコハケが残る。脚柱部は中実で積み上げ法によって成形されている。62は椀形の高杯である。内外面ともに器壁の磨滅が著しいが、脚部外面はタテミガキが施された可能性が高い。脚柱部は中実で積み上げ法によって成形されている。椀形口縁の高杯はこの1点のみである。63は甕の口縁である。甕としては非常に器壁が厚い。口縁内面にはヨコハケを施す。64は「く」の字口縁の甕である。やや大形で口縁端部は面をもち、端面を正面から刻む。器壁は薄く含有鉱物に雲母を含むなど非在地の可能性が高い。65は胴部が張らず砲弾形に立ち上がる甕である。口縁部は出土しなかった。外面調整はタテハケかタタキの後、ナデによって整形するが、粘土紐の積み上げ痕跡がよく観察できることから、一・二次調整ともにていねいなものではなかったものと思われる。この個体は最終調整でやや角ばった棒状の工具をタテ方向に、ちょうどタテミガキと同じような動きで器面を調整することが特徴である。この調整は結果的にミガキに近い効果を生むが、器壁には複数のタテ方向のキズが残る点が異なる。一見してケズリのようにも見えるが、単位の幅を認識することができない。また、器面に多くの砂粒が浮き出ているにも係わらず、動いた形跡がないことから、この調整はケズリではないと判断できる。九州で出土する「朝鮮系無文土器」の最終調整に類似したものがあることから、この関係についても注意しなければならない。この問題については「まとめ」でふれることにしたい。

S T F 185出土土器(図版第202) S T F 185からは66~70が出土した。66は短頸壺である。内面の粘土紐の接合痕から、内傾接合であることが明瞭に観察できる。この接合部できれいに剥離しており、胴部下半は出土しなかった。小形の短頸壺の組成率は低く、本調査ではこの1個体のみである。67は如意状口縁の甕である。口縁部は短く外反する。含有鉱物に長石を含むが、その比率が低くかつ雲母を含むなど胎土に特徴がある。また、色調も淡赤褐色系で搬入品の可能性がある。68は如意状口縁の甕である。胴部下半を欠損するが、同一個体と考えられる底部が存在するため図上で復原した。全体的にはハケ原体も粗くつくりが雑で、口縁部もヨコナデで調整されるが不整形である。69は如意状口縁の甕である。口縁部は短く折り返しヨコナデで整形される。口縁はほぼ水平に外方向へ張り出す形態である。胴部がやや強く張り、口縁径を上回る。70は口

縁を「く」の字に曲げる甕である。外面はタテハケの後、胴部最大径付近をヨコミガキ、その後胴部下半をタテミガキにしており、当遺跡で出土したそのほかの壺などと、ミガキの順序が異なることが注目される。胴部最大径の位置が比較的低位、口縁端部の跳ね上げも顕著ではない。

S T F 184出土土器(図版第202) S T F 184からは壺が1点出土した。71は頸胴部の境が明瞭で口縁は漏斗状に開くタイプの広口壺である。頸部以下に波状文を7帯めぐらせるが最下段のものは全周していない。櫛原体は1帯3条、幅3.5mmの細いものを使用している。口縁端部は肥厚していないが、櫛描文の特徴からやはり本調査では新しい要素をもっているといえる。底部には木葉圧痕が残る。

S T F 189出土土器(図版第202) S T F 189からは壺が1点出土した。72は広口壺の口縁である。

S T F 206出土土器(図版第202) S T F 206からは2点の土器が出土した。73は如意状口縁の小形鉢である。外面はタテハケ、内面はハケ後ナデで仕上げる。口縁内面にはハケ工具による波状文が施される。口縁内面に施文をもつ個体はこの1点のみである。74は壺底部である。底部は磨滅が著しいが、木葉圧痕をもっていた可能性が高い。

S T F 188出土土器(図版第202) S T F 188からは2点の土器が出土した。75は大形の無頸壺である。口縁部はやや立ち上がり気味に整形され、胴部のプロポーションもやや縦長である。外面調整は胴部上半がハケ後ナデ、下半はハケ後ナデ、その後タテミガキである。口縁端部に直線文2帯、以下に波状文7帯を施文するが、波状文は安定しておらず水平にも描かれていない。また、波状文が一部では直線文のように間のびした部分も認められる。76は75と共に出土したミニチュアの無頸壺である。ナデと指頭圧で成形する。

S T F 186出土土器(図版第203) S T F 186からは77~79が出土した。77は頸部がすほまり漏斗状に口縁部へと開く広口壺である。形態的には55と似ており施文パターンも同じであるが、口縁端部が下方へと垂下しない点が異なる。底部は凹み底で、木葉圧痕の痕跡らしきものはあるが、磨滅しており明瞭ではない。78と79は壺の底部である。いずれの底部にも木葉圧痕が認められるが、79は磨滅が著しいため拓本はとれなかった。

S T F 187出土土器(図版第203) S T F 187からは80~85が出土した。80~82は広口壺の口縁である。壺は口縁部にコブをもつものともたないものがある。水平口縁の高杯84は、同一個体と考えられる破片を図上で復原したものである。口縁部は水平に張り出すが、内面に凸帯はついていない。

S T F 204出土土器(図版第203) S T F 204からは86~88が出土した。87は椀形鉢である。器壁は厚く、外面のミガキは密できわめていねいな作りである。内面のナデもていねいで粘土紐痕跡を残さない。88は如意状口縁の小形甕である。やや下ぶくれの形態で全体的に不整形である。口縁部はヨコナデで仕上げるが、端部は丸くおさめ、面を形成しない。外面にはススが附着している。

S T F 203出土土器(図版第203) S T F 203からは小形甕が1点出土した。90は出土位置からS T F 203に伴うものと判断した小形甕である。この型式のものが本調査では一定量出土してい

るがこの個体と同じく口縁端部に刻目をもたないものが主体である。ススは内外面に認められるが、内外面共に底部に近い位置にはススが付着していない。

S T F 192出土土器(図版第204) S T F 192からは91~95が出土した。91は無文の広口壺である。器壁は磨滅しているが、頸部と胴部最大径付近の一部でタテミガキの痕跡が確認できることから、全身ミガキの壺と考えられる。無文の広口壺は、本調査資料でも一定量出土しているが、ミガキ調整のものはこの1点のみである。胴部下半にはスス痕跡があり、内面には認められない。底部外面は木葉圧痕の可能性はあるが、明瞭ではない。92は小形の短頸壺である。外面は波状文を施し、内面は縦方向のナデで仕上げる。口縁部のコブ、底部の木葉圧痕の痕跡は共にない。93は如意状口縁の甕である。外面はタテハケ、口縁部をヨコナデで仕上げる。口縁端部は整った面をもち、刻みは施さない。94は口縁部をヨコナデで仕上げる如意状口縁の甕である。ハケ原体はやや粗くしっかりしたものが用いられる。口縁部のナデは広範囲で口頸部まで施し、そのハケをナデ消す。壁が薄くプロポーションも良いので搬入品の可能性もある。底部はナデによって調整するていねいなつくりで、ドーナツ状の形態をよく残している。95は小形の甕である。比較的小さな底部から口縁部へと直線的に開く形態をとる。口縁部は指頭圧によって整形しつつ外方へ開くため、胴部に比べて器壁がやや薄くなる。底部には木葉圧痕が認められる。内面には粘土紐接合痕が残る。

S T I 15出土土器(図版第204) S T I 15からは96・97が出土した。96は広口壺の口縁である。口縁部はわずかに肥厚しつつ広く開き、端部は面をもつが施文は行われていない。97は壺の頸胴部片である。直線文の間に波状文2帯を配する構成である。

S T F 198出土土器(図版第204) S T F 198からは98~100が出土した。98は胴部が強く張る大形の広口短頸壺である。口縁部はわずかに肥厚し、端面にはハケ工具による斜格子状の刻目がめぐる。頸胴部には13帯の櫛描文が施文されるが、9帯目のみが波状文で、ほかは直線文である。櫛原体はきわめて細かく1帯の幅は8条/10mmである。99は小形の短頸壺である。100は如意状口縁の甕である。口縁端部に面をもたず、胴部は口径を上回らない。外面の一部でタテハケを確認できる以外は磨滅しており、口縁端部の刻目の有無も不明である。

S T I 12出土土器(図版第205) S T I 12からは甕1点が出土した。101は如意状口縁の甕である。胴部は強く張らず、口縁はゆるやかに外反する。口縁端部にはヨコナデは施されず、刻目をもつ。

S T F 191出土土器(図版第205) S T F 191からは甕1点が出土した。104は大形甕の胴部下半である。外面は粗いタテハケで調整される。ハケの特徴などから近江型甕の底部である可能性が高い。底部は凹まない平底である。外面の一部にスス痕があり、大形甕でありながらも使用された痕跡があるのは興味深い。断面にまでスス痕が認められることから使用中に破損した可能性が考えられる。

S T I 48出土土器(図版第205) S T I 48からは壺1点が出土した。105は大形広口壺の口縁部である。口縁部をやや垂下ぎみに強く肥厚させ下端を刻む。口縁部を肥厚させるものは、本遺跡

では少ない。

S T I 49出土土器(図版第205) S T I 49からは壺1点が出土した。106・107はほぼ同じ地点から出土した壺で、胎土などから同一個体と考えられる。図化できなかったが、胴部片も出土している。頸部から胴部には直線文を5帯配し、以下に波状文と直線文を交互に配する。櫛原体は9条/11mmのものが用いられている。

S T J 158出土土器(図版第205) S T J 158からは壺1点が出土した。108は広口壺である。出土片数が少ないため図上で復原を行った。口縁部は広く張り出し下端を刻む。施文は残存部位のものはすべて直線文である。頸部上半については磨滅しておりその有無は不明であるが、頸部以下には施されていない。櫛原体は6条/10.5mmのものが用いられている。

S T I 160出土土器(図版第205) S T I 160からは甕1点が出土した。109は「く」の字口縁の甕である。口縁部はゆるやかに外反するが、口縁端部は跳ね上げにはなっていない。

S T I 123出土土器(図版第206) S T I 123からは110～113が出土した。110は壺の胴部下半である。111は鉢部が直線的に開く形態の把手付きの台付鉢である。口縁端部はヨコナデによって整形される。把手は成形時に差し込む形態で、水差の把手と同様の技法が用いられている。順序としては、ナメハケ→把手差し込み→ナデ・ヨコナデ→施文の順である。施文工具はヘラで、区画文→施文→透かし孔の順である。透かし孔は外面やや上方から工具を差し込んで開けている。透かし孔には三角のものと四角のものがあり、四角は対向で6か所、三角はその間に配置され、確認できるだけで3か所認められる。本来は四角の間に6か所あったものと思われる。112は如意状口縁の小形甕である。器壁が厚く外面はやや粗いタテハケで調整される。113は如意状口縁の甕である。上端にハケ工具による刻みを施す。

S T I 14出土土器(図版第206) S T I 14からは甕1点が出土した。114は「く」の字口縁の甕の口縁部である。端部には正面からハケ工具による刻みが加えられている。

S T G 65出土土器(図版第206) S T G 65からは117・118が出土した。117は広口壺の口縁である。116と同じ型式であるが別個体である。118は壺の胴部下半である。

S T G 94出土土器(図版第206) S T G 94からは119～123が出土した。119は無文の広口壺である。口縁部は肥厚せずゆるやかに広がる。胴部は強く張らず縦長の形態となる。底部は凹み底で木葉圧痕はない。120は直口短頸壺である。外面はタテハケ、内面は縦方向のナデで仕上げる。接点はないが同一個体と考えられる破片を図上で復原した。121は口縁が短く外反し、胴部は強く張る壺である。外面調整はナデののち、胴部下半をやや粗いミガキで調整する。122は水平口縁の高杯である。杯部は直線的に立ち上がる。内面の凸帯は貼り付けで三角形に近い形である。杯部内面までていねいに磨かれており、ほかの高杯と比較しても器形の均整がとれている。脚柱部は中空で円盤充填が行われる。脚柱内面にはシボリ痕も認められる。口縁部は短く水平に張り出し下端を刻む。123は「く」の字口縁甕である。壁面は粗いタテハケで調整される。器壁はきわめて薄く、口縁端面にはハケ工具による刻目が正面から施される。

S T G 66出土土器(図版第206・207) S T G 66からは115・116・124～126が出土した。116は

口縁端部をわずかに肥厚させる広口壺の口縁である。胴部下半と頸部以上の破片をあわせて10片前後が出土しているが、ほとんど接合しない。図で示したのもも口縁部と頸部を図上で復原したものである。端面に施文はない。124は高杯の水平口縁部である。内面には凸帯がめぐり、その外側には櫛描波状文が施される。125・126は甕の底部である。

S T G 73出土土器(図版第207) S T G 73からは127～132が出土した。127は広口壺の頸部以下である。胴部下半はタテハケ、内面はナデで調整する。底部を欠失しているが、打欠によるものかどうかは判断できない。肩部から胴部にかけて波状文3帯と直線文3帯を配する。櫛原体は7条/13mmのものが用いられている。130は如意状口縁甕の口縁部である。口縁端部はヨコナデで調整し端部には面をもつ。刻目は施されない。128・129は壺の底部、131・132は甕の底部である。

S T G 52出土土器(図版第207) S T G 52からは133～137が出土した。136は杯部の浅い、やや扁平な高杯である。杯部は凸帯ではなく、ナデによって強くアクセントを付けた形になっている。口縁部は水平に張りだし下端部を刻む。高杯自体はまとまって出土したにもかかわらず脚柱部は欠損しており出土していない。脚裾部はやや薄く華奢なもので、脚裾端部を刻む点もほかの高杯には見られない特徴である。137は如意状口縁の甕である。ややいびつで胴部の張りに偏りがあるが、わずかに口径が胴部最大径を上回る。口縁部は短く外反しヨコナデで調整される。端面には刻目をもたない。

S T G 53出土土器(図版第207) S T G 53からは壺1点が出土した。138は壺胴部で139とは接点はないが、この壺の底部の可能性が高い。胴部上半には櫛描直線文が4帯以上施される。櫛原体は5条/8.5mmのものが用いられている。底部に木葉圧痕は認められない。

S T J 77出土土器(図版第207) S T J 77からは壺1点が出土した。140は端部を肥厚させる広口壺の口縁部である。端部に刻目はない。

S T G 50出土土器(図版第207) S T G 50からは141・142が出土した。141は広口壺である。頸胴部の境が不明瞭で、頸部は径をあまり変えずに長くのびる。頸胴部施文に5帯の波状文が配される点は、施文パターンとしては珍しい。口縁端部は肥厚し、上端はヨコナデによって上方への拡張を指向しているが、跳ね上げ口縁にはなっていない。142は如意状口縁の甕である。胴部は強く張り、口径を上回る。胴部最大径はまだ肩部にまでは上がっていない。胴部内面にはタテナデの痕跡を明瞭に残している。

S T J 87出土土器(図版第208) S T J 87から出土した土器は143～148の6点で、1点の水差を除いて全てが壺である。145は口縁部が長く開く広口壺である。頸胴部の施文は直線文が7帯配され、口縁端部には波状文が施される。櫛原体は7条/13mmのものが用いられている。胴部最大径付近の破片については接合しないため図上で復原した。146は口縁部が短く開く広口壺である。頸部から胴部にかけて6帯の直線文が配される。櫛原体は7条/11mmのものが用いられる。148はいわゆる撰津型水差である。口縁部はやや肥厚する。施文は上段から3帯が直線文、下段の3帯が波状文で、上段の2帯の直線文は、口縁の傾斜に規制され側面からみると斜めに施される形になっている。櫛原体は5条/10.5mmのものが用いられている。

S T J 04出土土器(図版第208) S T J 04からは149～151が出土した。149は頸部のやや太い広口長頸壺である。口縁はやや肥厚し、端部を波状文で施文する。施文範囲は広く頸部から胴部までに9帯の直線文を配する。櫛原体は5条/8mmとややまばらな印象を受けるものが用いられている。150は細頸壺の胴部で、151の高杯と同様に離れた地点で出土した破片が接合している。この細頸壺は胴部最大径の位置が低く、強く算盤玉形に張り出す形になっている。残存している頸部以下には5帯の波状文が配される。櫛原体は10条/9mmでほかに比べて条数も多いのが特徴である。151は高杯である。杯部はやや浅く、口径は器高を上回る。脚柱部は①筒状のものを少ししぼりぎみにし、②上下から粘土をつめ、③全体ができたなら仕上げに充填するという工程を踏んでいる。脚裾はややめくれ上がるように反っている。この高杯は蓋に転用されている。甕とのサイズが合わなかったのか、杯部内面にまでススが付着している。

S T J 105出土土器(図版第209) S T J 105からは152～155が出土した。152は強く締まった頸部から漏斗状に大きく開く広口壺である。全体的に磨滅が著しいが、頸部から頸胴部境にかけて3帯以上の直線文が施されていることを確認できる。口縁部はわずかに肥厚し、端部を垂下させるもので、口縁内面には3か所にコブ状突起が付されている。153は広口壺である。胴部と口縁端部を全て波状文で飾るものは、この遺跡の資料としては少ない施文パターンである。波状文は9帯、櫛原体は5条/9mmのものが用いられる。口縁内面には4か所にコブ状突起が付されている。重厚な底部には木葉圧痕が認められる。154は壺の底部片、155は甕胴部下半である。底部から胴部にかけてやや直線的に立ち上がっており、胴部最大径は高い位置にあるものと考えられる。胴部内面に特にススが付着している。

S T J 106出土土器(図版第209) S T J 106からは甕1点が出土した。156は如意状口縁の甕である。胴部が張り、口縁部は短く外反する。器壁は磨滅が著しく、調整は不明である。底部には木葉圧痕が認められる。

S T J 02出土土器(図版第209) S T J 02からは2点の土器が出土した。157は短頸壺である。口縁部は短く外反し端部は巻き込むように処理し、端面は正面から刻む。頸部以下の櫛描文は全て波状文で、胴部最大径より下がった位置にも施文されており、6帯まで確認できる。波状文の波長は短く小刻みである。櫛原体は6条/8mmのものが用いられている。158は如意状口縁の甕で、底部は欠失して出土していない。口縁端部はヨコハケで調整され、その後上端部をハケ工具によって刻まれている。口縁内面のヨコハケは胴部内面のタテナデに切られている。

S T J 20出土土器(図版第210) S T J 20からは159～161・163・164が出土した。159は無頸壺である。胴部には7帯の直線文を確認することができる。最も口縁部に近い部分には、もう1帯施文されていた可能性がある。櫛原体は8条/12mmのものが用いられる。器壁はきわめて厚く鈍重である。160は短頸壺である。胴部が強く張り、口縁部は短く外反する。外面はタテミガキ、内面はタテナデで調整する。S T J 20ではほかに口縁下端を刻む壺の口縁161、甕の口縁162・163、甕の底部164などが出土している。いずれも細片であるが、この方形周溝墓に属する供献土器と考えられる。

S T J 03出土土器(図版第210) S T J 03からは165~171が出土した。167は壺の頸部以下のもので頸部に直線文を1帯、その下には波状文を5帯配している。この壺は発色が鈍い赤褐色で、55の広口壺に似ており、淡灰色のものが大半を占めるこの遺跡の土器の中にあつて、目立つ存在である。櫛原体は6条/8mmのものが用いられる。168は無文の広口壺である。外面は全面タテハケで調整する。口頸部と頸胴部の境にアクセントがある。171は如意状口縁の甕である。胴部はあまり強く張らず口径が上回る。口縁端面は強く主張しないが、ていねいなヨコナデで整形される。

S T J 200出土土器(図版第210) S T J 200からは壺の口縁162と壺172が出土した。172は頸部のしまらない短頸壺で、口縁部はナデによって整形する。外面はタテハケ、内面はタテナデで調整する。口縁内面のヨコハケをタテナデが切る形になる。

S T J 199出土土器(図版第211) S T J 199からは173~178が出土した。173は広口壺の口縁である。口縁端部が面をもち大きく垂下する。口縁下端には刻目が施され、端面には波状文が施される。174は小形の短頸壺である。頸部が締まり口縁部が水平に外反する。口縁端部に刻目はもたず、口縁内面にコブ状突起はつかない。胴部には波状文2帯を確認することができる。櫛原体は4条以上/6mm以上のものが用いられている。175・176は小形の甕である。177は如意状口縁の甕である。口縁は短く外反し、口縁端部には正面から刻みが施される。

S T J 05出土土器(図版第211) S T J 05からは179~181・183が出土した。179は大形の広口壺の口縁部片である。口径は46.2cmに達し、広く確保された口縁端面には、波状文を施文した後、下端から大きく刻目を施す。頸部の施文は口縁にほど近い位置まで及ぶ。このような大形の壺はこの1点のみである。180は壺の胴部片で、その器壁の厚さなどから中形の壺の胴部と思われる。直線文の下に波状文が施される。櫛原体は7条/11.5mmである。181は中形の短頸壺である。外面は磨滅、内面は口頸部にヨコハケを残し、それ以下はナデで調整する。底部を欠失しているが穿孔ではない。183は水平口縁の高杯である。脚裾部は欠損している。杯部は深く全体に背が高い。脚柱部は中実でゆるやかに裾が広がる形態である。口縁内面にはススが付着しており、蓋として再利用されている。

S T J 128出土土器(図版第211) S T J 128からは壺1点が出土した。184は頸部が長く、口縁部が短く外反するややいびつな広口壺である。調整は磨滅しており不明である。

S T J 124出土土器(図版第211) S T J 124からは甕1点が出土した。185は如意状口縁の甕である。内外面共に磨滅が著しい。口縁端部には刻目の痕跡はない。

S T J 100出土土器(図版第211) S T J 100からは小形の短頸壺186が出土した。胴部施文は全て波状文で、櫛原体は5条/11mmのものが用いられている。口縁端部には上下から刻目が施される。口縁内面にはコブ状突起が付されているが、遺存しているのは一か所1個で対向側には付けられていない。

S T J 60出土土器(図版第212) S T J 60からは187~191が出土した。187は広口壺で、口縁部直下から8帯の直線文と1帯の波状文を配する。施文はさらに続く可能性がある。櫛原体は4

条／6mmと条数が少ないものが用いられる。口縁端面には波状文が施される。189は瓢型のいわゆる摂津型水差で、口縁の一部は出土しなかった。外面はハケの後、胴部上半はナデ、その後櫛描直線文を4帯施文する。胴部下半はハケの後にはタテミガキを施す。櫛原体は7条／12.5mmとやや幅広のものが用いられている。上段の直線文は口縁部の傾斜にあわせて斜行している。190は如意状口縁の甕である。胴部外面は粗いタテハケで調整される。口縁部はヨコナデで調整されるが、端部は明瞭な面をもたない。底部を欠損しているが穿孔ではない。188は壺の胴部下半、191は甕の胴部下半である。

S T J 19出土土器(図版第212) S T J 19からは甕2点が出土した。192は口縁がゆるやかに外反する甕である。調整は内外面共に磨滅しており不明である。口縁部に刻目の痕跡はない。193は甕の胴部下半である。

S T J 84出土土器(図版第212) S T J 84からは194～196が出土した。194は広口壺の頸胴部で、残存部には8帯の直線文が配される。櫛原体は4条／9mmで条数も少なく、ややまばらなものが用いられる。195は小形の直口壺である。外面は胴部下半がタテミガキ、胴部最大径付近がヨコミガキである。口縁部外面はタテハケ後ナデである。胴部最大径の位置がやや高く、不安定な形態である。この土器は方形周溝墓の再掘削前の周溝内から出土している。196は如意状口縁の甕で、胴部片が出土しなかったため図上で復原を行った。口縁部はヨコナデで仕上げて端面を形成する。

S T J 99出土土器(図版第213) S T J 99からは如意状口縁の甕197が出土した。口縁部はヨコナデで仕上げて端面を形成する。

S T J 88出土土器(図版第213) S T J 88からは口縁がやや長くのびた小形の短頸壺198が出土した。胴部外面は4帯の波状文で構成されている。櫛原体は5条／7mmのものが用いられている。口縁内面にコブ状突起はない。

S T J 48出土土器(図版第213) S T J 48からは199～201が出土した。199は口縁部が肥厚しつつ大きく開く広口長頸壺である。胴部はやや算盤玉形を指向するが顕著ではない。口縁部はやや強いヨコナデで、上端へも拡張のきざしを見せるが顕著ではない。頸部から胴部にかけて磨滅が著しいが、6帯の櫛描直線文を確認した。櫛原体も7条以上は確認できたが、その条数は不明である。口縁端面も磨滅のため施文の有無は不明である。200は直口の鉢である。口縁部には紐孔が2個一対で2か所設けられている。小形品にもかかわらず器壁は8mmと厚い。調整は外面に粗いミガキが施されるがやや雑である。201は壺の底部である。

S T J 89出土土器(図版第213) S T J 89からは壺2点が出土した。202は広口壺である。口縁部と胴部、胴部下半はいずれも接点がなかったため図上で復原した。施文はすべて波状文で構成され、少なくとも5帯が確認できる。櫛原体は6条／11mmのものが用いられている。203は小形の直口壺で、195と異なり均整がとれ、口縁部の処理もていねいである。胴部最大径はやや下にあり下ぶくれの形状となる。胎土の特徴から搬入品の可能性がある。文様構成は、6帯全て波状文で、櫛原体は6条／10.5mmのものが用いられている。

S T J 91出土土器(図版第214) S T J 91からは甕の底部2点が出土した。204の底は欠損しているが穿孔ではない。

S T J 90出土土器(図版第214) S T J 90からは短頸壺206が出土した。頸部は短く、口縁は強く外反する。コブ状突起は1か所のみ残存する。対角線上にハケが少し薄くなっている部分があり、もとは2か所にコブ状突起が付されていた可能性が高い。施文は全て波状文で、磨滅が著しくかろうじて観察できる程度である。波形は粗雑で横軸もずれており、波頂間も短い。櫛原体は5条/7mmのきわめて細かいものが用いられる。底部は欠損しているが穿孔ではない。

S T J 133出土土器(図版第214) S T J 133からは壺2点と甕の底部1点が出土した。207は広口壺の口縁部である。外面調整はタテハケでおそらく無文の広口壺であろう。208は壺の胴部下半である。底部を欠損しているが穿孔ではない。209は木葉圧痕の認められる甕の底部209で^(注25)ある。

S T J 98出土土器(図版第214) S T J 98からは遺物が2点出土した。210は壺の胴部下半である。接合しないが、同一個体と考えられる口縁部片も出土しているため図示した。胴部には少なくとも4帯以上の直線文が配されている。櫛原体は6条/8.5mmのものが用いられている。211は如意状口縁の小形甕である。口縁はやや丸くおさめつつ面を形成している。端部に刻み目はない。口縁部は最終調整のナデがていねいに施されており、一次調整は見えない。外面にはススが付着している。

S T J 95出土土器(図版第214) S T J 95からは213~217が出土した。213は頸部が強く締まり漏斗状に口縁部が開く広口壺である。全面磨滅が著しく施文の有無は不明である。214は胴部が算盤玉形に張る短頸壺である。頸胴部間に不自然な段がある。外面調整は胴部上半をナデで仕上げが、下半には粗いナメハケを残す。胴部下半から底部にかけてはケズリが認められるがその範囲は狭い。この地域ではほかに類例のない型式のものである。216は「く」の字口縁の甕である。口縁部は強く外反するが、口縁端部は跳ね上げにはなっていない。217は接合しないがこの甕の底部の可能性はある。

S T J 52出土土器(図版第214) S T J 52からは木葉圧痕をもつ甕の底部218と壺212が出土した。212は広口長頸壺である。頸胴部界がややくびれ、口縁部は長く外反する。端部は上下に拡張する傾向を見せるがまだ顕著ではない。胴部の張りが弱くやや算盤玉形に張るが、これもまだ顕著ではない。頸部の施文は磨滅しており、その有無は不明である。胴部には3帯の櫛描直線文を確認することができるが磨滅が著しく条数の確認も困難である。櫛原体は6~8条の可能性はあるが、最も良好に残存している部分では6条/10mmである。

そのほかの遺構(図版第203・211・215・216) 単独で出土したものあるいは後世の遺構に混入していたものは、89・182・219~265である。S X F 216から出土した89は、やや跳ね上げぎみに口縁端部を仕上げる甕である。器壁の大半は磨滅しているが、器壁の残存している部分にはハケが認められないことから、胴部下半はミガキの可能性が高い。底部もやや薄くつくられており、非在地の甕である可能性が強い。S X J 230からは無文の壺182が出土した。S X F 219からは2

点の壺が出土した。219は壺の頸胴部で、残存部には直線文が4帯配される。櫛原体は6条/13mmのものが用いられている。220は壺の頸胴部である。外面は磨滅が著しく施文の有無も不明である。221はS X F 217から出土した、やや細身の縦に長いプロポーションの広口壺である。口縁端部はやや斜めにさがるが端部に明瞭な面はもたない。内外面にはスス痕がある。S X F 218からは222～224の遺物が出土した。222は無文の広口壺である。頸胴部界からほぼ直線的に口縁部まで開く形状である。胴部外面は全面タテハケ調整である。頸部内面に内傾接合を示す粘土紐接合痕が確認できる。223は無頸壺である。胴部は強く張りだし算盤玉形を指向する。内外面共にハケで調整される。口縁部は短く外反し端面を形成する。224は小形の甕である。口縁部はヨコナデによって調整されるがやや不整形である。S X F 220からは2点の壺が出土した。225は小形の短頸壺、226は壺胴部片である。227はS X F 215から出土した脚柱部中実の高杯である。口縁部は短く折り返し杯部は深い。脚柱部と杯部を別に作って接合したためか、杯部と脚柱部の軸線が合わずややいびつに傾いている。杯部と脚柱部の接合点では円板充填状の剥離が認められる。228はS X I 65から出土した甕用蓋である。S X G 97から出土したのは229・230である。小形の椀形鉢229は、甕230の内部に入った形で出土した。229は外面タテハケ調整の小形の鉢で、底部には木葉圧痕が認められる。甕230は口縁部が短く外反する甕である。端部は面を形成し上端からハケによる刻目を施す。231は上層遺構であるS H F 115から出土した太頸壺で、周辺に方形周溝墓は検出されていない。口縁直下から直線文が2帯配される。櫛原体は6条/10.5mmのものが用いられている。233も上層遺構であるS H F 123から出土した壺用蓋で、周辺に方形周溝墓は検出されていない。235はS K J 54の出土で、直線文の下に波状文を施す。238は波状文を2帯施す。櫛原体は5条/12mmのものが用いられている。239～245はS D F 98の出土で、239は大和型水差の把手、242は近江型甕の口縁部片である。

(藤井 整)

(2) 石 器

今回報告する石器類は、弥生時代中期の方形周溝墓主体部出土、あるいは、主体部埋土のウォーター・セパレーションによって検出できたものが主体である。石器は器種ごとに説明されることが多いが、埋葬主体部出土の石器群については、遺構ごとに石器の存在の状況をコンテキストとして語る必要があるため、変則ではあるが遺構ごとに石器の説明を行い、そのあり方に関する解釈を交えたい。また、墓壙内出土の石器には明らかに縄文時代の特徴をもつものや磨滅が見られるものが含まれる。方形周溝墓を築いたベースは、縄文時代の包含層になっていたものと想定される。

S T J 99出土石器(図版第217) 石器は棺中央部で若干出土しているが、大半は東小口部分で出土しており、東小口の小板を設置した穴付近は剥片などの出土量が特に多い。

石器は断面観察から棺内の遺物と出土面が変わらない1群(上層)と、間層をもち、その下に分布する1群(下層)の2群に分かれる。下層の石器は両面加工の打製石器をつくる行程で生じた剥片・細片が多く、接合関係をもっている。1点打製石鏃が含まれている。剥片から復原される両

面加工石器は、石鏃などの小形のものには対応せず大形品と考えられることができ、弥生時代のものとすれば打製石剣の製作過程で生じたものとも考えられる。

後述するS1は安山岩製の石剣ではあるが、研磨工程ののち打撃によって刃部が形成されており、その剥離痕とは対応しない。研磨工程の前には打撃による整形工程があったものと考えられるが、出土接合資料は部分的な一連の工程を示すに過ぎない。また、石材の特徴も異なることからS1の加工時に生じたものではないことがわかる。また、墓壙掘削時に別の打製石剣の整形加工が墓壙内で行われたことを示すほどの石器の出土量ではないし、工程が整形加工全般を示すものではない。これらの下層石器群には1点のみ石鏃が含まれており、上層の切先部付近の剥片との接合関係が認められる。

下層石器群の評価は難しいが、下層接合資料はほかの石器が完成品やその破損品が多いのに対して異質であることから、縄文時代包含層中の遺物の可能性も視野に入れる必要があるが、磨滅は認められず、まとまった接合関係の評価すれば埋葬時の遺物と考えることも可能であり断定することはできない。

S1はサヌカイト(安山岩)製の石剣である。素材となったサヌカイトは微小な白色斑点を含む特徴的なもので安山岩としたほうが良いかもしれない。石剣(S1)は表面が研磨されたのち刃部のみが鋸状を呈するように打撃によって加工されている。切先部分近くまで研磨が及び、薄くなっていくことから、打撃による刃部形成は機能の再生などの2次的な加工ではなく、石器製作者の一連の製作プランによって加工されたものと考えられる。石剣は刃部と柄部に分かれるが関は形成されない。柄部は端部の両脇が張り出し、握りやすいように面取りが施される。この面取りの研磨面に対して刃部加工の剥離面は切り勝つ。柄部側の端面は研磨加工されているが、サヌカイトの自然面(原礫面)の痕跡が認められる。自然面を基部側にもってくる加工は、サヌカイト製の打製石剣では多く見られる現象である。刃部の最大幅が先端部寄りで杏仁状を呈し、柄の端部が開く形態はサヌカイト製の打製石剣にも同形態のものが認められる。

図版第100に見られるように、石剣は完形の状態で棺内の東小口近く、木棺北側の側板に沿う形で平坦な面を上にして、切先を西側に向けた状態で墓壙底から若干浮いて出土した。棺の東小口部分に頭部がきていたと仮定するならば、頭部右側に置かれた副葬品として理解できる。法量は長さ15.7cm、幅3.7cm、厚さ2.0cm、重量87.34gである。

S2は粘板岩製の剥片で、片面に研磨面が残され磨製石器の断片であることがわかる。主体部からの出土という状況を考えると、磨製石剣、磨製石鏃の破片である可能性が高い。法量は長さ1cm、幅0.5cm、厚さ0.2cm、重量0.07gである。

S3はサヌカイト製の両面加工石器の先端部と考えられる。基部側は折れ面である。先端部にもかかわらず厚みがあるため、大形の石鏃や打製石剣の先端部の可能性が指摘できる。埋土のウォーターセパレーションの結果検出されたため、棺外か棺内かは判別できない。法量は長さ1.2cm、幅1.1cm、厚さ0.4cm、重量0.52gである。

S4～6は1個体のサヌカイト製の石鏃になる石器である。S4・5は直接の接合関係が認め

られ、S4・6は直接の接合関係はないが剥離面の状況などから若干の破片を介して接合するものと考えられる。図面に見られるようにそれぞれの破片は裁断面をもっている。接合あるいは接合を想定して並べた場合、石鏃側辺には溝状の先端部からの衝撃で生じた剥離痕が見られる。いわゆる衝突痕とされる典型的な剥離である。S4・6は小口部分上層から、S5は下層からの出土である。S4の法量は長さ1.1cm、幅0.8cm、厚さ0.2cm、重量0.21gである。S5の法量は長さ2.85cm、幅1.7cm、厚さ0.4cm、重量1.87gである。S6の法量は長さ0.6cm、幅0.5cm、厚さ0.1cm、重量0.05gである。

S7は杏仁状を呈するサヌカイト製打製石鏃である。先端部と基部は破損しておりいずれも折れ面である。風化はほかの剥離面と変わらない。法量は長さ4.1cm、幅1.6cm、厚さ0.5cm、重量2.72gである。

S8・9は1個体のサヌカイト製打製石鏃である。折れ面を介して接合関係が見られる。先端部基部は若干破損している。先端部と考えられるS9の側辺には溝状の剥離痕があり、衝突痕と考えられる。S8のS9との接合面近くの器表面には折れ面からの剥離があり、折れ面に生じた衝撃により器表面が剥離したと考えられる。S8の法量は長さ4.2cm、幅1.4cm、厚さ0.4cm、重量2.63gである。S9の法量は長さ0.9cm、幅0.7cm、厚さ0.25cm、重量0.11gである。

S10・11は棺の中央部で検出したサヌカイト製の平基式の石鏃である。互いに折れ面で接合している。先端部は欠損しているが、側辺には縦方向の溝状の剥離痕が見られる。S10の法量は長さ0.7cm、幅1.2cm、厚さ0.2cm、重量0.2gである。S11の法量は長さ3.2cm、幅1.7cm、厚さ0.25cm、重量2.14gである。

S12は三角形を呈する平基式のサヌカイト製石鏃である。5点の破片が接合しているが、接合面はいずれも新しく発掘時の損傷と考えられる。本来は完形の状態で棺内にあったものと考えられる。S12の法量は長さ4.1cm、幅2.3cm、厚さ0.3cm、重量2.35gである。

S13・14はサヌカイト製の横長の剥片である。刃部形成などの2次加工時に生じる細片に似る。S14はS1との接合関係を考えたが、接合面とされた面に剥片をつけると研磨面より高くなり、工程状の無理が生じる。また、石材の違いや接合面の形状が若干異なり、別個体のものとした。S13の法量は長さ0.55cm、幅0.95cm、厚さ0.1cm、重量0.04gである。S14の法量は長さ0.61cm、幅1.16cm、厚さ0.2cm、重量0.07gである。

S15・16は1枚のサヌカイト剥片であるが古い折れ面を介して接合する。いずれも小口部下層からの出土である。図化したものにはS15の背面にS15+S16の剥片剥離以前の剥片の破片が接合する。S15の法量は長さ2.1cm、幅2.0cm、厚さ0.3cm、重量0.97gである。S16の法量は長さ1.4cm、幅1.4cm、厚さ0.2cm、重量0.25gである。

S17は幅2.2cmで出土資料中では大形の剥片に数点の剥片剥離以前の破片が接合するサヌカイト製石器の接合資料である。いずれも小口部下層からの出土である。多くのものは大形剥片の背面部に接合するが、打面部に背面部側からの加撃によって剥がされた剥片が1個体接合している。この接合資料にはS15+S16の剥片が大形剥片の背面部に接合する。

これら一連の接合資料は、大形剥片が剥がされたと同じ方向からの剥片剥離が大半を占める。

この剥片剥離工程が石器の整形過程を示すものであるならば、1つの縁辺の限定された加工を示し、剥片剥離工程であれば交互剥離または若干の打面調整を含む剥片剥離の一連の過程を示すものと考えられる。これらの資料群からは一つの石器の整形加工の完成や有効な目的剥片の剥離工程は見られず、部分的な一連性しか見出せない。これらの石器が意図的に集められ棺内にもたらされたと考えれば、図化できないような碎片や接合片を拾い集めたことになる。しかも、一工程のみを限定して抽出し、碎片を含み集めたことになる。碎片が含まれることと接合関係があることは一般には、その場所で剥片剥離が行われたことが想定される。しかし、前述したように、この剥片剥離行為自体は、完成品の製造工程を示していない。また、棺内出土の石器との関連も薄い。

この接合資料の存在を考えるには二つの可能性が指摘できる。もともとこれらの接合資料が墓壙の穿たれた地層に含まれていたか、石を割るという行為が葬送儀礼の一つとしてあったという可能性である。後者の場合では、剥片剥離行為が目的意識をもち意図的であるように思える。

S18は緑色凝灰岩製の管玉の未製品である。棺の小口部上層から出土している。管玉の小口面には穿孔部のずれを示す痕跡が認められる。穿孔は途中で終り、穿孔時についたと考えられる横方向の線状痕が残されている。外面は側面部が面取り状に研磨され、ほぼ円形に仕上げられている。破損面は図面上からの剥離を示しているが、穿孔が及んでいる部分で逆方向に力が抜け剥離面が不自然になる。管玉素材の分割段階以前の内部の傷が、穿孔に伴う力によって広がり破損したものと考えられる。S18の法量は長さ1.07cm、幅0.51cm、重量0.33gである。

S19はサヌカイト製の剥片である。法量は長さ1.2cm、幅1.5cm、厚さ0.2cm、重量0.19gである。

S T J 03出土石器(図版第218) S20は凹基無柄のサヌカイト製石鏃である。先端部は破損している。形状から縄文時代の石鏃と考えられる。法量は長さ1.2cm、幅1.5cm、厚さ0.3cm、重量0.51gである。S21はサヌカイト製剥片の端部の破片である。打面部側はほかの剥離面と同じ風化を示す折れ面である。法量は長さ0.6cm、幅1.4cm、厚さ0.2cm、重量0.08gである。いずれも主体部からの出土である。

S T I 14出土石器(図版第218) S22は主体部内から出土したサヌカイト製の剥片である。法量は長さ0.8cm、幅1.1cm、厚さ0.2cm、重量0.13gである。

S T F 187出土石器(図版第218) S23・24は溝内埋葬主体部掘形から出土したサヌカイト製の剥片である。S23の法量は長さ0.75cm、幅0.85cm、厚さ0.15cm、重量0.07gである。S24の法量は長さ0.8cm、幅0.65cm、厚さ0.15cm、重量0.04gである。

S T J 48出土石器(図版第218) S25の法量は長さ0.7cm、幅0.85cm、厚さ0.15cm、重量0.05gである。S26は南周溝の暗灰褐色粘質土中から出土した黒色粘板岩製の石庖丁である。法量は長さ2.8cm、幅4.6cm、厚さ0.6cm、重量7.56gである。

S T J 51出土石器(図版第218) S27はサヌカイト製の凹基無茎の石鏃である。主体部棺内から出土している。先端部は新しい破断面である。棺内からの出土ではあるが形状から縄文時代の

石鏃であると考えられる。法量は長さ1.7cm、幅1.6cm、厚さ0.2cm、重量0.53gである。

S T I 34出土石器(図版第218) S 28は南周溝畦部下層から出土した半透明の黄色味を帯びた瑪瑙製の礫である。周縁に風化を受けた剥離面が見られるが、自然礫と考えられる。このような質の礫は含まれていないことから、遠方地からもたらされたと考えられるが帰属時期は弥生時代以前という以外不明である。法量は長さ2cm、幅2.6cm、厚さ0.75cm、重量3.53gである。

S T J 20出土石器(図版第218・220) S 29は東溝の南畦の南側から出土したサヌカイト製の石鏃である。平面形が五角形を呈することから縄文時代の石鏃と考えられる。それを傍証するように整形加工時の剥離面は磨滅を受けている。二次的な堆積物であると考えられる。法量は長さ1.9cm、幅1.5cm、厚さ0.35cm、重量0.72gである。S 90は、東溝出土のサヌカイト製楔形石器である。法量は長さ2.6cm、幅2.45cm、厚さ0.8cm、重量4.63gである。

S T J 88出土石器(図版第218) S 30は主体部の掘形内から出土したサヌカイト製の剥片である。法量は長さ1cm、幅2.6cm、厚さ0.35cm、重量0.35gである。S 31は西溝上層から出土したサヌカイト製の有茎石鏃である。側辺の一部は新しい破断面をもつ。基部の両側辺には研磨による刃潰しが認められる。法量は長さ5.9cm、幅2.4cm、厚さ0.5cm、重量7.22gである。

S T J 95出土石器(図版第218) S 32~37はすべてサヌカイト製の石器である。S 32は第1主体部を4分割したうちの、南西区掘形内から出土している。全体的に磨滅を受けている。法量は長さ1.74cm、幅2cm、厚さ0.25cm、重量0.80gである。S 33は第1主体部北東区掘形内から出土した。法量は長さ1.8cm、幅1.1cm、厚さ0.5cm、重量0.54gである。S 34は西溝から出土した遺物で、弥生時代と考えられる石器に比べて風化が進んでいる。法量は長さ3.15cm、幅3.3cm、厚さ0.91cm、重量7.21gである。S 35は第2主体部南東区掘形内から出土した。上方からの加撃によって表裏両面に剥離痕が形成され、側面の折れはそのとき生じたものと考えられる。法量は長さ1.4cm、幅1cm、厚さ0.3cm、重量0.44gである。S 36は第1主体部南東区掘形内から出土した細片である。法量は長さ0.5cm、幅0.9cm、厚さ0.25cm、重量0.06gである。S 37は第1主体部南東区掘形内から出土した。打面部側は新しい折れ面である。法量は長さ1.2cm、幅0.7cm、厚さ0.25cm、重量0.12gである。

S T J 100出土石器(図版第218) S 38~49は主体部出土のサヌカイト製の石器、剥片である。S 38は側片部に折れ面をもつ剥片で、折れ面を介してS 43の剥片と接合する。S 38の法量は長さ1.9cm、幅2.25cm、厚さ0.45cm、重量1.17gである。S 39は下端部が折れ面の剥片である。法量は長さ1.5cm、幅1.3cm、厚さ0.4cm、重量0.71gである。S 40は打面部側と両側辺が折れ面で構成される碎片である。法量は長さ1.1cm、幅0.9cm、厚さ0.15cm、重量0.20gである。S 41は上下が折れにより欠損している碎片である。法量は長さ0.9cm、幅0.9cm、厚さ0.1cm、重量0.05gである。S 42の法量は長さ0.9cm、幅0.55cm、厚さ0.2cm、重量0.07gである。S 43の法量は長さ1.15cm、幅0.4cm、厚さ0.3cm、重量0.10gである。S 44は上下が折れ面の碎片であるが、端部の折れは調査時のものと考えられる。法量は長さ0.75cm、幅1cm、厚さ0.15cm、重量0.16gである。S 45は下端部が折れ面の碎片である。法量は長さ0.9cm、幅1.05cm、厚さ0.6cm、重量0.38gであ

る。S46は打面部側が欠損した剥片である。法量は長さ1.1cm、幅1.2 cm、厚さ0.25cm、重量0.31 gである。S47は上下が折れ面によって構成された碎片で、側辺部には整形加工と考えられる剥離痕が見られる。石鏃などの成品または未成品の一部と考えられる。法量は長さ1cm、幅1.3 cm、厚さ0.3cm、重量0.49 gである。S48は上下が欠損した碎片で、上部の折れは調査時のものである。法量は長さ0.8cm、幅0.8cm、厚さ0.1cm、重量0.13 gである。S49は打面および打点を残す剥片である。法量は長さ0.9cm、幅1.4cm、厚さ0.15cm、重量0.17 gである。

S T J 199出土石器(図版第218・219) S50は南周溝西側から検出されたサヌカイト製剥片である。法量は長さ1 cm、幅1.9cm、厚さ0.25cm、重量0.32 gである。S68は第1主体部棺部分土層サンプルの水洗によって検出したサヌカイト製細片である。法量は長さ0.85cm、幅0.75cm、厚さ0.25cm、重量0.05 gである。S70は第1主体部棺部分土層サンプルの水洗によって検出した粘板岩製の研磨面をもつ碎片である。片側辺には刃部と考えられる研磨角度の違いが認められる。大きさから石剣、石庖丁の破片である可能性がある。法量は長さ2.5cm、幅1.9cm、厚さ0.25cm、重量1.08 gである。S71は第1主体部棺検出面の暗灰褐色土のサンプルを水洗した際に検出したサヌカイト製の石鏃である。翼の末端に調査時にできたと考えられる新しい剥離が認められる。石鏃の形態から、縄文時代の石鏃の可能性が指摘できる。法量は長さ1.6cm、幅1.45cm、厚さ0.3cm、重量0.47 gである。S72は第2主体部の西側小口部分から出土したサヌカイト製の剥片である。法量は長さ1.5cm、幅1.5cm、厚さ0.3cm、重量0.57 gである。S73は第1主体部出土のサヌカイト製剥片である。末端部と打面部側は破損し、折れ面状を呈する。

S T J 127出土石器(図版第218) S51は第2主体部の断ち割り部分から出土した先端と基部が破損しているサヌカイト製石鏃の体部である。両端は折れ面で風化はほかの剥離面と同じである。法量は長さ1.4cm、幅0.9cm、厚さ0.5cm、重量0.89 gである。S52は第1主体部の棺内から出土したサヌカイト製石鏃で先端部と翼部が欠損している。風化面は弥生時代の石器に比べ深く、形状からも縄文時代の石鏃と考えられる。法量は長さ1.3cm、幅1.3cm、厚さ0.3cm、重量0.31 gである。S53は第1主体部掘形棺外から出土したサヌカイト製の剥片である。法量は長さ0.9cm、幅1.2cm、厚さ0.25cm、重量0.17 gである。

S T J 129出土石器(図版第218) S54は周溝墓南東溝出土の粘板岩製の石庖丁である。図面の左側の面は大きな素材時の剥離面がわかる程度の浅い研磨が施されている。研磨による刃部はこの面から形成されている。図面右面の刃部剥離痕が比較的細かく見られ、剥離面は研磨加工の後生じたものである。紐孔は2か所あるが、現在の貫通している孔と孔の間には、浅い窪み状の穿孔を試みた形跡が認められる。法量は長さ5.2cm、幅3.2cm、厚さ0.5cm、重量37.03 gである。

S T J 133出土石器(図版第219) S55は第1主体部から出土したサヌカイト製の石鏃である。基部の一部が欠損している。基部の両側辺が研磨によって加工されている。法量は長さ4.9cm、幅1.9cm、厚さ0.4cm、重量3.49 gである。S56は第1主体部から出土したサヌカイト製石鏃である。法量は長さ1.5cm、幅1.3cm、厚さ0.4cm、重量1.12 gである。S57は第1主体部出土のサヌカイト製打製石鏃で、同じ主体部から出土したS58と折れ面を介して接合する。折れ面はほかの

剥片と同じ風化面である。S57とS58の接合した後の法量は長さ2.4cm、幅1cm、厚さ0.4cm、重量0.90gである。S59・60は古い折れ面を介して接合するサヌカイト製石鏃の破損品である。ほかの破損面も折れ面である。第1主体部から出土している。法量は長さ1.6cm、幅0.9cm、厚さ0.3cm、重量0.37gである。S61は第1主体部から出土したサヌカイト製石鏃である。基部側と考えられる部分は、古い折れ面によって欠損している。法量は長さ1.6cm、幅1.2cm、厚さ0.3cm、重量0.53gである。S62は第1主体部棺内から出土したサヌカイト製の石鏃である。先端部と考えられる部分は、縦方向の力が加わり破損したと考えられる剥離痕が石器平面に残る。基部側は古い折れ面である。法量は長さ2.2cm、幅1cm、厚さ0.5cm、重量1.32gである。S63は背面に自然面が残るサヌカイト製剥片である。石器表面は磨滅作用を受けており本来の包含層からの再堆積物であると考えられる。法量は長さ1.9cm、幅1.7cm、厚さ0.4cm、重量0.93gである。

S T J 133出土石器は再堆積と考えられるS63を除くとすべてが打製石鏃である。石鏃の形態は、カエシ部分から端部にかけて内湾するように中茎部分がつくられているもの(S55・56・61)、刃部と基部の変化点が明瞭でなく、身幅に比べて厚みのあるもの(S57+S58・S59+S60・S62)の2形態に分けられる。いずれも調査地点周辺の弥生時代中期の遺跡から出土する石鏃の形態と同じであり、接合資料や破損の状況からいわゆる戦死墓中の遺物と考えられる。

S T F 181出土石器(図版第219) S64は主体部に設定した畦部から出土したサヌカイト製剥片である。法量は長さ1.7cm、幅1.5cm、厚さ0.3cm、重量0.58gである。

S T F 185出土石器(図版第219) S65は主体部棺内から出土したサヌカイト製の石鏃である。素材剥片時の剥離面が両面に大きく残され周辺の整形加工によって石器が形成されている。基部の両側辺は研磨によって滑らかに加工されている。先端部側は破損しており、破損面は古い折れ面である。研磨工程を介在しているため、加工頻度は低いが完成品で破損は使用時のものと考えられる。法量は長さ2.2cm、幅1.5cm、厚さ0.2cm、重量0.70gである。S66は主体部から出土したサヌカイト製の石鏃である。片方の翼が破損している。法量は長さ2cm、幅1.2cm、厚さ0.2cm、重量0.50gである。S69は主体部から出土したサヌカイト製の石鏃破片である。上下が破損しており、図面右側の先端部側に、前方からの力によって形成されたと考えられる剥離面が器表面に見られる。基部側は古い折れ面である。法量は長さ1.3cm、幅1.1cm、厚さ0.45cm、重量2.27gである。

土辺地区S T 07出土石器(図版第219) S74は第1主体部棺内から出土したサヌカイト製石鏃である。基部は古い折れ面で破損している。法量は長さ1.9cm、幅1.8cm、厚さ0.35cm、重量0.90gである。S75は主体部棺内から出土したサヌカイト製石鏃である。石鏃は完形であるが、器表面が磨滅しており2次堆積の遺物と考えられる。法量は長さ2cm、幅1.3cm、厚さ0.4cmである。S76は中央主体部断ち割り中から出土したサヌカイト製石鏃である先端部は発掘時と考えられる新しい欠損である。法量は長さ2.7cm、幅2cm、厚さ0.5cm、重量2.39gである。S77・78は第1主体部棺内から出土したサヌカイト製剥片である。S78は上下端が古い折れ面によって破損している。S77の法量は長さ1.4cm、幅1.6cm、厚さ0.2cm、重量0.25gである。S78の法量は長さ

0.65cm、幅1.6cm、厚さ0.2cm、重量0.18gである。S79～83は第2主体部出土のサヌカイト製の剥片・碎片である。S79は両側辺が折れ面の剥片である。法量は長さ1.3cm、幅1.25cm、厚さ0.3cm、重量0.31gである。S80は片側辺と打面部が折れ面の剥片である。法量は長さ1.2cm、幅0.85cm、厚さ0.25cm、重量0.13gである。S81の法量は長さ0.9cm、幅0.85cm、厚さ0.15cm、重量0.06gである。S82は磨滅が見られる。法量は長さ0.9cm、幅0.8cm、厚さ0.15cm、重量0.12gである。S83の法量は長さ0.4cm、幅0.7cm、厚さ0.15cm、重量0.03gである。S84・85は第4主体部出土のサヌカイト製剥片である。S84の法量は長さ1.1cm、幅1.3cm、厚さ0.2cm、重量0.19gである。S85の法量は長さ0.85cm、幅1cm、厚さ0.15cm、重量0.09gである。

主体部3か所から石器が出土しているが、石鏃や剥片に磨滅が見られるものがあることから2次堆積物の可能性が指摘できる。S74以外の石鏃は、形態的な違いや磨滅から縄文時代の遺物と考えられる。ほかの剥片類は、石鏃などの完成された石器の破片は見られないことから、弥生時代以前の2次堆積物と考えられる。

S T G 65出土石器(図版第220) S89はS T G 65南東溝の暗灰色粘質土から出土した両面調整の石器である。風化が弥生時代のものに比べて深い。石鏃の未成品の可能性が指摘できる。法量は長さ3.4cm、幅2.9cm、厚さ1.1cm、重量7.82gである。

周溝墓以外の遺構および包含層(図版第218～220) S25はS T J 48の下層から出土したサヌカイト製剥片である。剥片端部は折れ面で破損している。両側片上部の窪みは新しい欠損である。S86は土辺地区S K 217出土のサヌカイト製剥片である。剥片には新旧2つの風化面が認められることから、2次堆積の遺物である可能性が指摘できる。S87は土辺地区S D 1401畦出土の粘板岩製石庖丁である。S88はH地点S D H 08東側の暗褐色粘土から出土したサヌカイト製石器である。出土層は古墳時代遺物包含層である。石鏃と考えられるが分厚いため未製品の可能性が指摘できる。器表面は磨滅が認められる。法量は長さ2cm、幅1.9cm、厚さ0.5cm、重量1.67gである。S91はJ地点包含層出土の金山産サヌカイトと考えられる風化面をもつ石鏃である。翼部分は発掘調査時のものと考えられる破損面である。法量は長さ3.25cm、幅1.4cm、厚さ0.3cm、重量1.4gである。S92はJ地点包含層出土のサヌカイト製石器である。石器は発掘時の破損のため先端部で2つに別れる。この新しい破損面を除くと石器には剥離面がわからないほど磨滅している風化の古い面と、剥離痕がしっかりした新しい風化面がある。新しい風化面は基部側に見られる。風化の古い部分には斜平行剥離と考えられる痕跡が認められることと、法量から有舌尖頭器であった可能性が指摘できる。2次堆積の遺物が再利用されたものと考えられる。法量は長さ6.25cm、幅2.9cm、厚さ0.8cm、重量13.87gである。S93はJ地点包含層出土のサヌカイト製割器である。S94は土辺地区包含層出土の磨製石剣である。両側辺は面取り加工によって刃部が形成されていないため剣把部分と考えられる。図面上部の器表面には、長軸方向と直行する方向の浅い沈線が表裏にめぐる。剣把部分の蔓巻加工や鞘の及ぶ部分など何らかの基準線である可能性も想定される。法量は長さ9cm、幅3.55cm、厚さ0.85cm、重量30.69gである。

(中川和哉)

第2節 古墳時代前期の遺物

(1) 竪穴式住居跡の出土土器

S H F 175出土土器(図版第221) S H F 175で、図示できるものは、266の1点であり、そのほかは土師器細片のみである。266は撫で肩の体部で、「く」の字形に屈曲する頸部から、やや内湾ぎみに立ち上がる口縁部へ続くもので、口縁端部は内側に丸みをもってわずかに肥厚する。

S H F 174出土土器(図版第221～224) S H F 174は、焼失家屋と思われもので、住居跡内からは炭とともに多量の土器が出土した。ただ、出土土器は細片が多く、今回図示できたのはその一部である。

S H F 174からは壺、甕、鉢、高杯、器台などが出土した。壺267は、直立ぎみに立ち上がる頸部から口縁部は中位でわずかに屈曲するもので、口縁部外面の中位には粘土帯を貼り付けて二重口縁状を呈している。口縁端部は直立ぎみにわずかにつまみ上げている。壺268は、外湾ぎみに屈曲する頸部から斜め上方に立ち上がる口縁部へ続くもので、口縁端部を丸くおさめる。体部外面にはタタキを施している。壺270は、体部最大径が中位近くにあるやや扁球形の体部で、口頸部は直立ぎみに立ち上がる頸部から大きく外反する口縁部へ続く。頸部および体部外面には縦方向のヘラミガキを施す。壺271は、体部最大径が中位よりもやや上方にあり、口頸部は斜め上方に直線的に立ち上がり、口縁端部はわずかに外方に肥厚する直口壺である。体部外面はタタキのち、体部上半に縦方向のヘラミガキを施す。

甕は、口頸部の形態および体部の調整方法によりA～Dに大別できる。

甕Aは肩部の張らない体部から、口縁部は外反ぎみとなり、口縁端部はそのまま丸くおさめるか、わずかに上方につまみ上げているものである。体部外面には幅広で右上がりのタタキが認められるものである。

甕Bは甕Aと同様、肩部の張らない体部から、口縁部は外反することなく直線的に広がるもので、口縁端部は丸くおさめる。体部外面は主にハケ調整を施すもの。

甕Cは肩部の張らない体部で、口縁部は外反ぎみとなり、口縁端部をわずかに肥厚させるもので、体部外面には右上がりの細いタタキメを、内面はヘラケズリを施すもので、いわゆる庄内甕である。

甕Dは球形に近い体部で、口縁部はやや内湾ぎみに立ち上がるもので、口縁端部が内側にやや肥厚して丸くおさめるもの(甕D1)、口縁端部をややつまみ上げるもの(甕D2)、内傾する面をつくるもの(甕D3)、外方に肥厚するもの(甕D4)がある。甕Dはいわゆる布留式甕である。

甕Eは強く外反する頸部から口縁部は斜め上方に立ち上がる複合口縁形を呈するもので、体部外面はハケを施すものが多い。

甕A(291・345～349)は、撫で肩の体部で口縁部は外反ぎみとなり、口縁端部を丸くおさめるもので、体部外面には右上がりのタタキを施している。体部内面は粗いヘラケズリ調整を施すもの(345・347)がある。345の口縁端部は内側にわずかに肥厚するものである。

甕B(272・296～299・304・305・307・310～313・318・328・331)は、細片が多く、口縁部の形

状からみているため、その一部は別の分類に含まれる可能性もある。体部および口頸部が図示できた資料でみると331は球形に近い体部で底部はわずかに尖りぎみとなる。口頸部は撫で肩の体部から外反ぎみとなり、口縁端部は丸みをもっておわる。体部外面はハケ、内面はヘラケズリを施す。

S H F 174では甕Cの明瞭なものはないが、口縁部の形状から300が甕Cとなる可能性がある。300は外反する口縁部から口縁端部をわずかにつまみ上げたものである。

甕Dは球形に近い体部で口縁部は外反ぎみとなり、口縁端部を肥厚させたいわゆる布留式甕である。甕Dの出土量は多く(301・302・308・309・314～317・319～322・332～344・350・352～357)がある。甕Dのうち、344・355・357は、口縁端部を内側にわずかに肥厚させ、丸くおさめたもの(甕D 1)である。また、314・354・356は口縁端部を上方につまみ上げているもの(甕D 2)である。350・352は甕D 1、甕D 2にくらべてやや長胴ぎみとなり、口縁端部を内側に肥厚させ、内傾する面を作っている。321・322・343のように口縁端部外面をわずかに肥厚させ、外傾する面を作っている甕D 4もある。甕D 4は全体の形状がわかるものはない。

甕E(290・292～295・325～327)は、「く」の字形に屈曲する頸部から外反ぎみに短く立ち上がるもの(290)、外反ぎみにやや長く立ち上がるもの(294・327)、斜め方向に直線的に立ち上がるもの(292・293・295・326)がある。体部はいずれも撫で肩で、底部まで復原できるものでは、丸底ぎみの平底のもの(294・295)が多い。体部外面はハケで仕上げるもの(326)とタタキメを明瞭に残すもの(292～294)がある。325は口縁部の形状から近江・東海系のものと思われる。292・294は京都北部での出土例が多い器形のものである。

甕351は、長胴形の体部で口縁部は直線的にやや斜め方向に立ち上がり、口縁端部は尖りぎみにおわる。体部外面はハケで仕上げるが一部タタキメをとどめる。体部内面は下半がヘラケズリ、上半はハケで仕上げる。

鉢は半球形の体部で、口縁部は「く」の字形に屈曲し、口縁端部をそのまま丸くおさめるもの(287)と上方へつまみ上げるもの(288)がある。288は体部内外面および口縁部外面をていねいにヘラミガキしている。289は砲弾形の体部で、口縁部は体部からそのまま続き、口縁端部は丸くおさめるものである。体部内面のナデは粗いものである。

高杯は胴部から水平にのびたのち斜め上方に直線的に立ち上がるもので、杯部の屈曲部に明瞭な段を設けている276と段を設けていないもの(274・275)がある。脚部は中実で裾開きとなる。

器台285は、浅い椀状の杯部で裾部は杯部から直線的に広がるものである。

S H F 171出土土器(図版第225) S H F 171からは壺・甕・高杯などが出土した。壺361は直口壺の口縁部片で、口頸部は直線的に斜め上方に立ち上がるものである。362は球形の体部で外面には一部ヘラケズリが認められる。甕364～366は甕D1である。高杯363は中実の柱状部から斜め方向にのびる杯部へ続くもので、杯部下半では外面に鈍い段を設けている。

S H G 54出土土器(図版第225) S H G 54からの出土遺物は少なく、かつ大半が細片であり、図示できる資料は、甕・高杯・手づくね土器などである。甕373・374は口径も復原できない細片

である。口頸部は「く」の字形に屈曲する頸部からわずかに内湾しながら立ち上がるもので、体部外面には右上がりの細かいタタキメが残る。高杯367は、水平ぎみにのびる杯部下半から強く外反するもので、杯部屈曲部にはヘラによる刻み目を施している。371は、長胴ぎみの体部で口頸部がわずかに外反する手づくね土器である。なおSHG54に帰属するかどうかは不明瞭であるが、上面精査中にSHG54の周辺から白玉5点と製塩土器が少量出土した。

SHI154出土土器(図版第225～227) SHI154もSHF174と同様、焼失家屋と思われるものである。SHI154からは広口壺、直口壺、甕、高杯、器台などが出土した。

広口壺388・395は、内傾あるいは直立ぎみに立ち上がる頸部から、口縁部は水平ぎみに立ち上がったのち、斜め上方に強く外反する複合口縁形を呈するものである。395の体部片と思われるものが398である。398は体部下半に体部最大径があり、底部は突出ぎみの平底である。体部外面には一部横方向のヘラミガキが認められる。壺389は筒状の頸部から水平ぎみにのびる口縁部へ続き、口縁端部はわずかに下方に肥厚して面をつくる。頸部と体部の境には、粘土紐を貼り付けた後に刻み目を施して加飾している。壺391は筒状の頸部から口縁部は水平ぎみにのびた後、口縁端部を上方に肥厚させて面をつくったもので、口縁部外面には2条の擬凹線文を施している。

直口壺392～394は、頸部から口縁端部にむかって斜め方向に直線的あるいは外反ぎみに立ち上がるもので、口縁端部はやや尖りぎみに丸くおさめるもの(394)とわずかに内側につまみ上げるもの(393)がある。直口壺のうち、全体が復原できる394は、体部最大径が中位にあり、底部は平底である。壺390は、全体の形状は明らかではないが、口縁部は直立ぎみに立ち上がったのち、口縁端部をわずかに外反させている。壺407は体部が欠損しており、全体の形状が明らかではないが、口頸部の形状から壺あるいは台付き壺となるものである。口頸部は「く」の字形に小さく屈曲したのち、斜め上方に直立ぎみに長くのびる口縁部へ続き、口縁端部は尖りぎみにおわる。口縁部内・外面にはていねいな横方向のヘラミガキを施している。

甕には甕A、甕B、甕E、甕Fがある。甕A(410)は、口縁部が外反ぎみに立ち上がるもので、体部外面には右上がりの粗いタタキメが残る。甕B(409・411～413・422)は、口縁端部が外反ぎみにおわるもの(411)、外反ぎみに立ち上がったのち、口縁端部をわずかにつまみ上げるもの(409)がある。全体の形状が明らかな413の体部は、やや長胴ぎみで体部最大径が中位近くにあり、底部は丸底ぎみの平底である。なお、甕Bとして図化した資料の多くが細片であり、体部の詳細が明らかなものが少ないため、甕Bとして記した中には、甕Cに含まれる可能性のあるものもある。甕Dには、414・415・417～421がある。417は全体の形状が明らかでなく、甕Bに含まれる可能性があるもので、口縁端部はやや内湾しておわる。419の口縁端部は丸く内傾する。421は口縁端部をつまみ上げる。420は、口縁端部を内側に肥厚させて面を作っている。

甕E425は、撫で肩の体部から頸部が水平ぎみにのびたのち、斜め上方に外反ぎみに短く立ち上がるもので、東海系S字口縁の甕である。体部下半片も出土しているが、接合復原できず、脚部のみ図示できた。424は頸部から口縁部への境が明瞭であり、口縁部が斜め方向に直線的にのびる複合口縁形を呈する甕で、山陰地方に特徴的なものである。

高杯399は、杯部が斜め上方に直線的にのびるもので、脚部の可能性もあるが、断面からみた粘土紐の形状から杯部と考えた。404も399と同形態であるが断面からみた粘土紐の形状から脚部としたものである。高杯脚部402は、中実の柱状部から裾開きに広がるもの、400・401・403は杯部から脚部にむかってそのまま開くものである。

器台396・397は浅い皿状の杯部で、口縁部は上方に短く立ち上がる。器台408は、浅い皿状の受け部から、口縁部は上・下方に粘土紐を貼り付けて面を作っている。受け部は下段受け部の上にさらに上段受け部を付けている。上段受け部はわずかに外反したのち、さらに直立ぎみに長くのびるもので、北陸地方での出土が多い器台である。器台406は、中空の柱状部から脚部は水平ぎみにのびたのち、外反ぎみに広がり、脚端部は内側にわずかに肥厚する。受け部は柱状部から斜め方向に短くのびたのち、外反ぎみに高く立ち上がり、端部は短くつまみあげている。脚部下段および中位の屈曲部にはヘラ状工具による刻み目を、杯部下半および口縁端部外面には円形竹管文を加飾している。脚部には2個一対で3か所の円形透かし孔を開けている。405は、406とよく似た杯部で、口縁部外面には円形竹管文を加飾していないものである。

(2) そのほかの遺構出土の土器

S E F 173出土土器(図版第227～229) S E F 173は円形土坑であり、その形状から井戸の可能性が高い遺構である。S E F 173からは、広口壺6、直口壺1、甕A 7、甕B 3、甕C 1、甕D 4、高杯1などが出土した。

広口壺は6個体出土し、頸部から直線的に斜め上方に立ち上がり、口縁端部がそのままおわるもの(427・428)と口縁端部がわずかに直立ぎみに屈曲するもの(426)がある。体部は扁球形を呈し、右上がりのタタキののち、ハケあるいはナデ調整を施す。底部は、遺存するものはいずれも突出ぎみの平底である。

甕は、口縁部および口縁端部の形状により4タイプのものがある。甕Aは、肩部の張らない体部から口縁部は外反ぎみとなり、口縁端部はそのまま丸くおさまるもので、甕A(430・432～434・439・440・444～447・458)の大半は、体部外面に幅広で右上がりのタタキが認められる。439は体部外面は左上がりあるいは水平ぎみのタタキで、体部下半では縦方向のヘラミガキを施している。体部内面はヘラケズリ。444は、体部上半を右上がりのタタキで、下半をハケで仕上げている。内面はハケ調整である。完形に復原できる447は、体部最大径が中位よりもやや上方にあり、底部は小さく丸底ぎみの平底となる。体部外面はタタキののち、一部ハケが認められる。内面はヘラケズリを施している。458は、体部最大径が中位近くにあり、底部は突出ぎみの平底である。体部内面はハケを施している。

甕Bは、甕Aと同様、肩部の張らない体部から、口縁部は外反することなく、直線的に広がるもので、口縁端部は丸くおさめる。甕B(435・448～451)の体部外面は主にハケ調整を施す。448は、体部最大径が中位よりも上方にあり、体部外面は縦方向のハケ、内面はヘラケズリののち粗いハケを施している。451は、体部最大径が中位近くにあり、底部は丸底ぎみに平底である。435は、体部最大径が中位よりも下半にあり、口縁部の立ち上がりはやや直立ぎみとなる。体部内・

外面はハケで仕上げ、タタキの痕跡は認められない。

甕E(455~457)は、撫で肩の体部で、強く外反する頸部から口縁部が斜め上方に立ちあがる複合口縁形を呈するもので、体部外面はハケを施す。455は、口縁部の屈曲部が456よりも鈍くなっている。457は、頸部からわずかに屈曲する口縁部へ続くもので、底部は丸底ぎみの平底である。

高杯441は、やや深めの椀状を呈し、口頸部は強く外反したのち、口縁部が斜め上方に立ちあがる複合口縁形を呈するもので、脚部は短い中実の柱状部から裾開きとなる。柱上部下端には、円形透し孔がある。

SEG79出土土器(図版第229) SEG79の上面からは、土師器椀461・462が出土しており、古墳時代後期以降のものが含まれているが、下層からは壺463が出土した。463は直口ぎみに立ち上がる口縁部片で、頸部には断面三角形の鈍い突帯がめぐる。

SKF202出土土器(図版第224) SKF202からは出土土器が少なく、また細片であったため、図示できたのは358・359・360の3点である。器台360は、浅い椀状の杯部から口縁部はやや強く外反したのち、斜め上方に直線的にのびる。京都北部での出土例が多いものである。口縁部内・外面はナデ調整を施す。358は、短い裾開きの高杯脚部、359は、やや丸底ぎみの平底である。

SDG51出土土器(図版第225) SDG51は遺構でも記したように、G地点からJ地点へとこのびる溝であり、その遺物の中には奈良時代の須恵器杯B、古墳時代後期の須恵器甕、土師器椀379などを含んでいるが、J地点での遺構検出状況では、上層の褐色土を除去して下層の遺構精査時に検出した遺構であること、古墳時代前期の土師器の出土量がほかの新しい時期の遺物よりも多いため、古墳時代前期の遺構と考え、ここではその時期のものを中心に図示した。

壺375は倒卵形に近い体部から外湾ぎみに長く立ち上がる頸部へ続き、口縁部は直立ぎみに立ち上がる。体部内面はヘラケズリ調整である。甕376・380・381は、「く」の字形に屈曲する口縁部で、口縁端部を内側に肥厚させ、内傾する面を作っている。高杯382は、水平ぎみにのびる杯底部から斜め上方に直線的にのびるもので、外面には断面三角形の突帯を設けている。383・384は、中空の脚部である。

第3節 古墳時代中期以降の遺物

1. 土器

(1) 竪穴式住居跡の出土土器

S HF 111出土土器(図版第230) S HF 111からは須恵器杯身・杯蓋・有蓋高杯・有蓋高杯蓋・壺・器台、土師器甕・高杯・甌、製塩土器、滑石製白玉8点などが出土した。

須恵器杯身468・469は内湾ぎみに立ち上がる口縁部で、口縁部の立ち上がり部高1.9cm(468)・1.4cm(469)を測り、受け部は斜め上方に突出する。底部外面は2/3の範囲にヘラケズリを施す。杯蓋464~466は、水平ぎみの天井部で、天井部と口縁部の境の稜は、水平(464・466)あるいは垂下ぎみ(465)となる。口縁部はわずかに開きぎみとなり、口縁端部は尖りぎみにおわる。天井部外面は2/3以上の範囲にヘラケズリを施す。有蓋高杯470は、やや内傾ぎみの口縁部で、受け部は

断面三角形状で突出ぎみとなる。脚部の大半は欠損しているが、三方に方形の透かし孔があったものと思われる。有蓋高杯蓋467は、天井部中央が欠損しているが円形のツマミがあったものと思われる。天井部は水平ぎみとなり、天井部と口縁部の境の稜は明瞭である。口縁部は垂直ぎみに立ち上がるもので、口縁端部は内・外方にわずかに肥厚している。天井部外面の大半はヘラケズリを施す。壺475は、体部最大径が中位よりやや上方にある扁球形の体部で、口頸部はゆるく外反する頸部からやや内湾ぎみとなる口縁部へ続く。頸部と口縁部の境には断面三角形状の突帯、頸部および肩部外面には4条を櫛原体とする波状文を頸部には2帯、肩部には1帯加飾し、体部外面の中位にはカキメを施している。甕478は、肩部の張った球形に近い体部で、口頸部は強く外反し、口縁端部外面には1条の沈線をめぐらす。体部外面はタタキののち横方向のカキメをていねいに施す。478はSHF38・SHF113からその同一の破片(部位)が出土している。器台481は、内湾ぎみに深く立ち上がる杯部で、口縁部は外反ぎみとなり、口縁端部は上方にわずかに肥厚し、尖りぎみにおわる。脚部は、杯部から裾開きとなり、脚部底より高さ3.5cm付近で一端は外反して段を設けている。杯部外面には、杯部の中位部分と口縁部の境部分に断面三角形状の突帯を2条設け、それぞれの突帯部分の上の位置には9条を一単位とする波状文を杯部中位には3帯、口縁部には1帯加飾している。脚部では2本を単位とする断面三角形状の突帯によって5区画に分割し、各突帯間には3帯の波状文を、最下段の脚部裾には1帯の波状文を加飾している。また、脚部には各突帯間に7方向の方形の透かし孔を市松模様に配している。481と同一個体の部位がSHF113からも出土している。

土師器甕471は体部下半を欠損しているもので、口頸部は単純「く」の字形に外反し、口縁端部は丸くおさめる。体部外面はハケを施す。甕472は、やや長胴ぎみの体部から口頸部は単純「く」の字形に外反するもので、口縁端部は内側に肥厚し内傾する面をつくる。体部内面はヘラケズリ、外面はハケ調整を施したもので、布留式新段階のものである。甕480は、472と同様の口縁部の形状であるが、体部最大径付近に牛角状の把手を2か所設けている。甕480と同一個体の部位がSKF04からも出土している。高杯479は、浅い椀状を呈する杯部で口縁部は直立ぎみとなり、口縁端部は丸くおさめる。脚部は中空で裾開きとなる。高杯脚部477は、479と同様の器形のものと思われる。高杯476は、杯部が欠損しておりその形状は不明である。脚部はやや柱状を呈し、脚部下半で裾開きとなる。476は脚部中央に2か所の円形透かし孔がある。

甗473は、直立ぎみに立ち上がる体部で、口縁部は体部からそのまま続きその境が不明瞭である。口縁端部はわずかに内湾する。体部の中位に牛角状の把手を2か所設けている。甗474は、甗473に比べて体部がやや開きぎみの砲弾形をなし、口縁部は体部からゆるく外反したのち、口縁端部でわずかに内湾する。体部外面には一部ヘラミガキが認められる。

SHF120出土土器(図版第231) SHF120からは須恵器杯身・杯蓋・無蓋高杯、土師器甕・高杯・甗、製塩土器などが出土した。

須恵器杯身485～488は、内傾ぎみの口縁部で、口縁端部は内側に沈線状の段を設けている。口縁部の立ち上がり部高1.6cm(485)、2.0cm(486)、1.5cm(487)を測り、受け部は断面三角形状で突

出する。底部外面は2/3以上の範囲にヘラケズリを施すもの(486)のほか、1/2以下の範囲のもの(485・487・488)がある。杯蓋482・483は、水平ぎみ(483)あるいは丸みをもつ(482)天井部から垂下する口縁部へ続くもので、口縁部と天井部の境の稜は鈍い。口縁端部は内側に沈線状の段を設けている。無蓋高杯484は、椀状の杯部から一端直立ぎみに立ち上がったのち、直線的に斜め上方に立ち上がる口縁部へ続くもので、口縁端部は尖りぎみにおわる。杯部下半には縦位の環状把手を貼り付け、杯部上方には7条を1単位とする1帯の波状文を加飾している。脚部は裾開きとなるもので脚端部は丸みをもち面を作っている。脚部には4か所の方形透かし孔を開けている。484は同一個体の部位がS H F 123、S D F 147からも出土している。

土師器甕489は、単純「く」の字形を呈するもので、口縁端部は尖りぎみにおわる。高杯490は脚部を欠損している。杯部は斜め上方にわずかに内湾しつつ立ち上がる浅い椀状を呈するもので、口縁端部は外方に肥厚して丸みをもっておわる。甑491は、底部および口縁部を欠損しており、体部片のみである。体部は底部からやや開きぎみに直線的に立ち上がるもので、体部上半には牛角状の把手を2か所貼り付けている。体部内・外面はハケが認められる。

S H F 123出土土器(図版第231) S H F 123からは須恵器杯身・杯蓋・有蓋高杯・甕・甗、土師器甕・高杯、製塩土器などが出土した。

須恵器杯身493～497・499～504は、内傾ぎみに立ち上がる口縁部で、口縁端部がそのまま丸くおさまるもの(493・494・500・501)と内側に沈線状の段を設けるもの(495～497・499・502・503)がある。口縁部の立ち上がり部高1.3～2.1cmを測り、受け部は水平ぎみに突出する。底部外面は2/3程度の範囲にヘラケズリを施すもの(494・499・500・503)と1/2あるいはそれ以下の範囲にヘラケズリを施すもの(493・495・496・501)がある。有蓋高杯498は、浅い椀状の杯部から口縁部は内湾ぎみに立ち上がり、受け部は斜め上方に突出する。口縁部の立ち上がり部高2.0cmを測る。脚部は裾開きとなり、脚端部で外側にわずかに肥厚する。脚部外面の中位よりやや下方には断面三角形の突帯をめぐらし、その上方には2条の突帯とその間に円形透かし孔を開けている。甗(506・507)は、いずれも口縁部が欠損しているものである。体部は球形を呈し、506では体部中位に2条の沈線文とその間に縦位の列点文を加飾している。507は体部上半にカキメを施している。

土師器甕505は、肩部の張らない体部から口縁部は単純「く」の字形に屈曲するもので、口縁端部は内側にわずかにつまみ上げている。体部外面はハケ、内面はヘラケズリを施す。甕508は球形に近い体部で、口縁部は短く「く」の字形に屈曲するもので、口縁端部はわずかに内側に肥厚し、丸くおさめる。体部内面にヘラケズリを施す。

S H F 150出土土器(図版第231) S H F 150からは須恵器杯身・器台(あるいは高杯)脚部、土師器片のほか、製塩土器が出土した。須恵器杯身515は内湾ぎみに立ちあがる口縁部で、口縁端部は内側に沈線状の段を設けている。脚部516は脚端部外面に断面三角形の段を設けている。

S H F 06出土土器(図版第231) S H F 06からは須恵器杯蓋、土師器高杯・甕の体部片、製塩土器が出土した。須恵器杯蓋509は水平ぎみの天井部で、天井部と口縁部の境の稜は鋭く断面三

角形状を呈している。口縁端部外面には、内側に沈線状の段がある。土師器高杯511は椀状の杯部で口縁端部は丸くおさめる。高杯脚部510は裾開きのものである。甕512は撫で肩の体部で、口縁部は「く」の字形に屈曲し、口縁端部は外方に屈曲する。

S H F 121出土土器(図版第231) S H F 121は須恵器の出土がなく、土師器甕・高杯・甌片のほか、滑石製勾玉、製塩土器などが出土した。土師器甕514は、「く」の字形に屈曲する口縁部で、口縁端部は内側に肥厚して面を作っている。高杯513は、中空の柱状部から裾開きとなるものである。

S H F 115出土土器(図版第232) S H F 115からは須恵器杯身・杯蓋・壺・甕、土師器甕・甌・竈、製塩土器などが出土した。

須恵器杯身524～526・530は、内傾ぎみに立ち上がる口縁部で、口縁端部は丸くおさめるもの(524～526)と内面に沈線状の段を設けるもの(530)がある。口縁部の立ち上がり部高は1.6cm前後を測るもの(524・525)と2.0cm前後を測るもの(526・530)があり、受け部は水平ぎみに突出するもの(524～526)とやや上方に突出するもの(530)がある。底部外面は1/2の範囲にヘラケズリを施す。杯蓋517～523・527・528は、水平ぎみ(521・523)あるいは丸みをもつ(517～520・522・527・528)天井部で、口縁部と天井部の境の稜が鋭いもの(523)と鈍いもの(517～519・522・527・528)がある。口縁端部は、わずかに外反し内傾する面をもつもの(518～520・523・527・528)と沈線状の段を設けるもの(517・519・521・522)がある。天井部外面は1/2程度の範囲にヘラケズリを施すものが大半である。壺529は、口縁部片であり、全体の形状は不明である。口縁部は直立ぎみに立ち上がる頸部からわずかに外反する口縁部へ続き、口縁端部は上・下方に肥厚し、丸みをもっておわる。甕536は、撫で肩の体部で、斜め上方に立ち上がる頸部からわずかに外反する口縁部へ続き、口縁端部は上・下方に肥厚し、丸みをもっておわる。体部内面には青海波文の当て具痕が、外面にはタタキメを残す。甕531・537は、強く外反する頸部から口縁部へ続き、口縁端部は内傾ぎみとなり、尖りぎみにおわる。531は、体部外面に格子目状の、内面には青海波文のタタキがある。537は頸部および体部上半にはカキメを施す。

土師器甕533は、肩部の張った体部から口縁部は「く」の字形に屈曲するもので、口縁端部は尖りぎみにおわる。体部外面の体部最大径付近に把手を貼り付けた痕がある。体部外面はハケ、内面には一部ヘラケズリが認められる。甕539は、口径16cm・器高35cmを測る長胴甕である。体部は体部最大径が下位にあって、下ぶくれ状を呈し、口縁部は単純「く」の字形に屈曲する。体部外面および口縁部内面にハケ調整を施す。甕535は、539と同様、単純「く」の字形に屈曲する口縁部片である。甌538は、口縁部にむかってやや開きぎみのもので、口縁端部は内・外面にわずかに肥厚する。体部下半が欠損しているため把手の形状は明らかでない。竈534は、下半が欠損しており、体部上半部分が遺存しているものである。受け部は体部から内湾ぎみに立ち上がるもので、受け部直径18.0cmを測る。廂部は受け部端から約7.0cmの位置に貼り付けたもので、廂の出は4.5cm前後と思われる。534と同一個体の部位がS K F 114からも出土している。

S H F 19出土土器(図版第233) S H F 19からは須恵器杯蓋・無蓋高杯・有蓋高杯蓋、土師器

甌、製塩土器、滑石製白玉2点などが出土した。

須恵器杯蓋540・541は、水平ぎみの天井部からやや開きぎみの口縁部へ続くもので、口縁部と天井部の境の稜は鋭く、断面三角形状を呈している。天井部外面は2/3程度の範囲にヘラケズリを施す。無蓋高杯543は、椀状の杯部から口縁部はやや直立ぎみに立ち上がった後に外反し、口縁端部は内側に沈線状の段を設けている。杯部外面には断面三角形状の突帯とその下方に波状文を加飾している。有蓋高杯蓋542は、水平ぎみの天井部からやや開きぎみの口縁部へ続くもので、天井部と口縁部の境の稜は鋭く、断面三角形状を呈する。天井部には中窪みのツマミを貼り付けている。土師器甌544は、直立ぎみに立ち上がる体部で、そのまま口縁部へ続き、口縁端部は内・外方にわずかに肥厚する。体部外面には牛角状の把手を貼り付けている。

S H F 10出土土器(図版第233) S H F 10からは須恵器杯身・杯蓋、土師器甕・高杯・把手付椀、製塩土器などの細片がコンテナ・バットに1箱にも満たない程度出土した。

須恵器杯身545は口縁部が欠損している。受け部はやや斜め上方にのび、底部外面の2/3程度の範囲にヘラケズリを施す。甌546は口縁部が欠損している。体部最大径が上位にあるもので、体部最大径付近に2条の沈線文とその間に斜めの列点文を配し、下段の沈線文の位置に円形の孔を開けている。

S H F 41出土土器(図版第233) S H F 41からは須恵器杯身・杯蓋、土師器片、製塩土器などが出土した。

須恵器杯身547は、内湾ぎみに立ち上がる口縁部で、口縁部の立ち上がり部高1.9cmを測り、受け部はやや斜め上方に突出する。底部外面の1/2以下の範囲にヘラケズリを施す。

S H F 61出土土器(図版第233) S H F 61からは、須恵器・土師器・製塩土器の細片が出土した。須恵器549は口縁部片であり、ゆるく外反する頸部から直立ぎみに立ちあがる口縁部へ続くものである。口縁部外面には、斜め方向に一部ヘラ描きされている。

S H F 20出土土器(図版第233) S H F 20からは須恵器杯身・杯蓋・甌、土師器甕の細片が出土しており、図示しえたのは550の須恵器甌の口縁部片のみである。

S H F 25出土土器(図版第233) S H F 25からは遺物が極少であり、須恵器壺の口頸部片が1点図示できたのみである。548は、外反ぎみに立ち上がる口頸部片で、口縁端部は上・下方に肥厚し、尖りぎみにおわる。口頸部外面には断面三角形状の突帯を2条めぐらし、その前後に6～9条を一単位とする波状文をそれぞれ1帯ずつ配している。

S H F 08出土土器(図版第233) S H F 08からは須恵器杯蓋1点のほか、土師器壺・高杯、製塩土器などの細片がコンテナ・バットにして1箱にも満たない程度出土した。

須恵器杯蓋551は、天井部を欠損しているが、水平ぎみになるものと思われ、口縁部は垂下し、口縁部と天井部の境の稜は断面三角形状に鋭く突出する。554は甌の口頸部片で、ゆるく外反する頸部から水平ぎみに屈曲したのち、外反する口縁部へ続く。口縁端部はわずかに外反し、内面に沈線状の段を設けている。頸部外面は12～14条を一単位とする波状文で加飾している。

土師器壺552は筒状にのびる頸部片である。高杯脚部553は柱状部から大きく裾開きとなるもの

である。

S H F 116出土土器(図版第233) S H F 116からは須恵器杯身・杯蓋・壺蓋・無蓋高杯・器台、土師器甕・把手付甕・高杯、製塩土器などがあり、土師器の多くは細片であった。また、須恵器器台568は、S H F 116床面からの出土ではなく、S H F 116の上面から出土しており、同一個体の部位がS H F 37・40からも出土している資料である。

須恵器杯身559・560は、内傾ぎみに立ち上がる口縁部で、口縁端部内面には沈線状の段を設けている。口縁端部の立ち上がり部高1.8cm前後である。受け部はやや斜め上方に突出する。559の底部外面は2/3程度の範囲にヘラケズリを施す。杯蓋555～558・561・564は、水平あるいは丸みをもつ天井部から、口縁部はやや開きぎみに垂下するもので、口縁端部はわずかに外反して尖りぎみにおわるもの(555)と、内側に沈線状の段を設けているもの(556・558・561・564)がある。天井部と口縁部の境の稜はいずれも鈍い。天井部外面は1/2程度の範囲にヘラケズリを施す。杯蓋563は、水平ぎみの天井部から口縁部へ続き、口縁部内面には断面三角形のカエリが付く。天井部中央は欠損しているが、ツマミがつくものと思われる。無蓋高杯562は、内湾ぎみに立ち上がる杯部からやや内傾したのち、斜め上方に直線的に立ち上がる口縁部へ続くもので、脚部は杯底部から直線的に広がり、脚端部は底部近くで外側に肥厚したのち、尖りぎみにおわる。脚部外面の中位にはカキメがあり、3方に方形の透かし孔を開けている。器台568は、受け部が遺存せず脚部のみの資料である。脚部は底部から内湾ぎみに立ち上がったのち、柱状部へ続くもので、脚部と柱状部の境には断面方形の突帯が1条めぐる。脚部外面は断面三角形のやや鈍い2条の突帯で4区画され、最下段は無文、第2・3段の区画部分では2帯の波状文を、第4区画部分には1帯の波状文と羽状文を加飾し、そののち、2・3・4段の区画部分には三角形の透かし孔を市松文様に配している。柱状部外面も脚部外面と同様、2条の鈍い突帯文によって6区画され、各突帯文間には2～4帯の波状文と6か所の方形透かし孔で加飾している。

土師器壺565は、撫で肩の体部から単純「く」の字形に屈曲する口縁部へ続くもので、口縁端部は尖りぎみにおわる。口縁部内・外面は磨滅により調整不明。体部外面には横方向のハケ調整が認められる。甕566・567は、単純「く」の字形に屈曲する口縁部で、口縁部がやや外反ぎみのもの(566)と斜め上方に直線的に立ち上がるもの(567)がある。566の体部外面はハケ、567の体部外面には一部縦方向のヘラミガキが認められる。

S H F 07出土土器(図版第234) S H F 07からは、図示しえた須恵器杯身・無蓋高杯・甕、土師器壺・高杯・器台のほか、土師器甕細片などがコンテナ・バットにして2箱程度と滑石製白玉230点、製塩土器が出土した。

須恵器杯身569～573は、内傾(569)あるいは直立ぎみに立ち上がる(570・571・573)口縁部で、口縁端部が丸くおさまるもの(570)と内面に沈線状の段を設けるもの(569・571)、内傾する面をもつもの(573)がある。口縁部の立ち上がり部高1.5～2.1cmを測る。受け部はやや斜め上方に突出するもの(569・572・573)と水平ぎみにのびるもの(570・571)がある。底部外面は1/2程度の範囲にヘラケズリを施す。無蓋高杯577は、斜め上方にやや内湾ぎみに立ち上がる杯部から、斜め

上方に直線的に立ち上がる口縁部へ続くもので、杯部と口縁部の境にはわずかに稜を設けている。脚部は、やや開きぎみの柱状部から「く」の字形の屈曲する脚部へつづくもので、柱状部上半にはカキメを施している。甕582は体部下半を欠損したもので、その体部の形状は明らかでないが、体部上半の肩部は張っている。口頸部は外反ぎみに立ち上がるもので、端部は下方に肥厚し、外面に段を設けている。体部および頸部の一部にカキメを残し、内面には当て具痕をすり消している。582と同一個体の部位がS H F 10からも出土している。

土師器壺574～576・578・579は、球形(574・575)あるいは扁球形(576・578)の体部から、口縁部は単純「く」の字形に屈曲するものである。体部外面はハケを施すもの(574・575)のほか、ナデ調整で指オサエ痕が顕著なもの(578)がある。579は、撫で肩の体部で口縁部は直線的に斜め上方に立ち上がるものである。体部内面にヘラケズリを施す。

580は壺の頸部あるいは器台の受け部とも考えられるものであるが、細片のためその器形は不明である。高杯581は柱状部のみ図示できたものである。柱状部は直線的に広がるもので、外面には一部ヘラミガキを施している。

S H F 40出土土器(図版第234) S H F 40からは須恵器杯身・杯蓋・甕・甗、土師器壺・甕・高杯などがコンテナ・バットにして3箱程度出土したが、図示できる資料は少なかった。

須恵器杯身586・588は、内湾する口縁部で、口縁端部がそのまま尖りぎみにおわるもの(588)と内側に沈線状の段を設けるもの(586)がある。口縁部の立ち上がり部高1.9cm(586)、1.3cm(588)を測り、受け部は水平ぎみにのびるもの(586)とやや上方に突出するもの(588)がある。底部外面は2/3以下の範囲にヘラケズリを施す。杯蓋583～585は、天井部が水平ぎみで、天井部と口縁部の境の稜が明瞭であり、天井部外面の2/3以下の範囲にヘラケズリを施すもの(583)と丸みをもつ天井部で、口縁部が内湾ぎみとなり、口縁端部が強く外反し、天井部外面には1/2程度の範囲にヘラケズリを施すもの(584・585)がある。甕593は、撫で肩の体部上半から口頸部は外反ぎみに立ち上がり、口縁端部は上・下方に肥厚して尖りぎみにおわる。体部内面には青海波文の当て具痕が、外面にはタタキメを残している。甗589は、口頸部を欠損したもので、体部片のみ図示できた資料である。体部は球形で体部最大径付近にカキメを施している。

土師器甕587は、球形に近い体部で、口縁部は単純「く」の字形に屈曲する。体部外面上半にはハケが認められる。甕590は体部下半を欠損しているが、扁球形の体部と思われるもので、口頸部は、強く外反する頸部から斜め上方に立ち上がる口縁部へ続くもので、口縁端部を丸くおさめる。甕591は、単純「く」の字形に外反する口縁部片、592は肩部の張りがなく、口縁部は直立ぎみに立ち上がるものである。

S H F 64出土土器(図版第235) S H F 64からは須恵器杯身・杯蓋・甕・甗、土師器甕・高杯、製塩土器などが出土した。図示しえた資料のうち甕603は造り付け竈の支脚として使用されたもの、須恵器甕602と土師器甕607は竈の東側で方形に掘り込まれた土坑から出土したものである。ほかにはS H F 64の床面あるいはその上面から出土したものである。須恵器杯身600・601は、内傾する口縁部で口縁端部は丸くおさまるもの(600)と内面に沈線状の段を設けるもの(598・599・

601)がある。受け部はほぼ水平に突出する。底部外面は2/3以下の範囲にヘラケズリを施す。杯蓋594~597は、丸みをもつ天井部で垂下する口縁部へ続くもの(594・595)と口縁部が開きぎみになるもの(596・597)があり、口縁端部内面に沈線状の段をもつもの(595~597)ともたないもの(594)がある。天井部外面は2/3程度の範囲にヘラケズリを施すもの(597)と1/2程度の範囲にヘラケズリ調整を施すもの(594~596)がある。甕602は、体部最大径が上位にあるもので、口頸部は筒状の頸部から外反する口縁部へ続く。体部外面には格子目状のタタキを施し、内面はナデで仕上げる。甕604は、球形の体部から頸部は斜め上方に直線的に立ち上がるもので、口縁部は欠損している。頸部外面の上半には波状文を、体部中位にはカキメで加飾している。

土師器甕603・607・608は撫で肩の体部で、口縁部は単純「く」の字形に屈曲するものである。体部の2/3程度が遺存している603は、体部最大径が中位よりやや下にあるものと思われる。607・608の体部外面はナデ、603の体部外面は縦方向のハケ調整が認められる。甕610は扁球形の体部で、底部は平底ぎみとなる。口縁部は単純「く」の字形に屈曲し、口縁端部はわずかに外反する。体部外面の中位には把手を貼り付けた痕跡が2か所ある。高杯609は、斜め上方に直線的に立ち上がる杯部から丸みをもって口縁部へつづくもので、口縁端部は尖りぎみにおわる。脚部は杯底部から裾開きとなる。杯部内・外面と脚部外面に一部ヘラミガキを施している。

鉢605は、内湾ぎみに立ち上がる体部から、口縁部は直立ぎみに立ち上がるものである。

漢式系土師器606は、SHF64の北方の近接した位置で出土したもので、土師器に近い焼成である。底部は一部欠損しているが、平底になるものと思われる。体部最大径が中位よりやや上方にあり、口縁部は単純「く」の字形に屈曲する。体部外面には粗い縦位のハケ調整を施す。

SHF122出土土器(図版第235) SHF122からは須恵器の出土がなく、土師器壺・甕・高杯・甌・手づくね土器、製塩土器の細片がコンテナ・バットに1箱にも満たない程度出土しており、図示できたのは土師器甕・甌・手づくね土器のみである。

土師器甕611・612は、単純「く」の字形に屈曲する口縁部で、口縁端部は丸くおさめるもの(611)と端部が内側に肥厚して内傾する面をつくるもの(612)がある。甌614は、体部中位よりやや下半に体部最大径があるもので、口縁部はわずかに外反する。底部は5か所に楕円形の孔を開けており、その中央に円形の孔があったかどうかは欠損しており不明である。体部外面には2か所の把手を貼り付けている。手づくね土器613は、倒卵形の体部を呈しており、口縁部は欠損して不明である。

SHF37出土土器(図版第236) SHF37からは須恵器杯身・杯蓋・壺・壺蓋・甕・無蓋高杯、土師器壺・甕・高杯・羽釜・甌、製塩土器などが出土した。

須恵器杯身618・619・625は、内傾ぎみに立ち上がる口縁部で、口縁端部は丸くおさめるもの(618・625)と尖りぎみにおわるもの(619)がある。口縁部の立ち上がり部高は1.5cm前後を測る。底部外面は2/3程度の範囲にヘラケズリを施す。杯蓋615~617・621~623は、水平ぎみの天井部で天井部と口縁部の境の稜が鈍く、口縁部は開きぎみとなる。口縁端部は沈線状の段を設けている。天井部外面は、2/3の範囲にヘラケズリを施すもの(615・616)と2/3以下のもの(617・621・

622)がある。621は口径10.5cmとやや小振りで、口縁部と天井部の境が不明瞭であり、壺蓋の可能性もある。無蓋高杯620は、浅い椀状の杯部から口縁部は斜め上方に直線的に立ち上がるもので、杯部と口縁部の境にはわずかに段を設けている。脚部は欠損しておりその形状は不明である。壺630は、球形の体部で斜め上方にのびる頸部から、口縁部はわずかに外反するもので、口縁部外面には2条の沈線状の窪みがめぐる。体部内面は青海波文の当て具痕が、外面にはカキメが認められる。壺631も630と同じ形状のものと思われるもので、体部外面にはカキメが認められる。

土師器甕624・627は、体部から斜め上方に直線的に立ち上がり、口縁端部が尖りぎみにおわるものである。羽釜628は、やや胴部の張ったもので、口縁部および底部は欠損している。口縁部近くには幅約3cmのつばがめぐっている。体部外面にはハケが認められる。

漢式土器629は、丸底の底部から直立ぎみに立ち上がる胴部へ続くもので、頸部はゆるく立ち上がる。体部外面には横1.5cm・縦1.8cm程度の原体のタタキ板を体部下半では左上がり、体部中位では横方向に叩いている。

S H F 38出土土器(図版第236) S H F 38からは須恵器杯身・甕、土師器壺・甕・甑、製塩土器などがコンテナ・バットに1箱程度出土したが、いずれも細片が多く、図示できたのは須恵器杯身・杯蓋・甕、土師器甕である。

須恵器杯身633は、内湾する口縁部で口縁端部は丸みをもっておわる。口縁部立ち上がり部高1.1cmを測り、受け部は水平ぎみに突出する。底部外面は1/2程度の範囲にヘラケズリを施す。杯蓋632は天井部からやや開きぎみの口縁部へ続くもので、口縁端部は尖りぎみにおわる。天井部と口縁部の境は明瞭な段を設けている。甕634は、口頸部を欠損したもので、体部のみ遺存している。体部は扁球形で体部最大径が中央よりもやや上位にあり、体部最大径付近にカキメを施す。底部外面には粗い面取りを行っている。

土師器甕635は、短い筒状の頸部から強く外反する口縁部へつづくもので、口縁端部内面にはわずかに段を設けている。体部外面はハケ、内面はヘラケズリを施す。636は、撫で肩の体部で、頸部が短く外湾したのち、斜め上方に立ち上がる口縁部へ続き、口縁端部はわずかに外方に肥厚する。体部外面にはハケ調整を施す。637は長胴形を呈する体部で、口縁部は内湾ぎみに立ち上がり、口縁端部はわずかに内側に肥厚する。

S H F 36出土土器(図版第236) S H F 36からは須恵器杯身・杯蓋・無蓋高杯、土師器甕、製塩土器などがコンテナ・バットに1箱程度出土したが、いずれも細片が多く、図示できたのは須恵器甕、無蓋高杯である。

須恵器甕641は、撫で肩の体部から外反する頸部へ続き、口縁端部は外方に肥厚させ、面をつくる。642は、口頸部および底部が欠損しており、全体の形状は明らかではないが、扁球形の体部を呈したものである。無蓋高杯638・639は、椀状の杯部で、口縁部は杯部からわずかに内湾したのち直線的に斜め上方に立ち上がるもの(638)と杯底部から直線的に広がる柱状部で、脚部が外反ぎみにひろがり柱状部に3方の方形透かし孔を空けたもの(639)がある。弥生土器甕640は平底の底部で斜め上方に立ち上がる体部へつづく。体部上半および口縁部は欠損している。体部外

面にはタタキメが認められる。640は混入したものと思われる。

S H F 113出土土器(図版第237) S H F 113からは須恵器杯身・杯蓋・甕・甗・提瓶、土師器碗・高杯、製塩土器、滑石製白玉182点などが出土した。

須恵器杯身646は、受け部から水平ぎみに内傾したのち直立ぎみに立ち上がる口縁部へ続くもので、口縁端部は丸くおさまる。底部外面は2/3程度の範囲にヘラケズリを施す。647は直立ぎみの口縁部で受け部が下方ぎみにのびる。底部外面は1/2程度の範囲にヘラケズリ調整を施す。648～650は、内傾ぎみの口縁部で受け部は水平ぎみとなる。口縁部内面には沈線状の段を設けている。杯蓋643は、水平ぎみの天井部から垂下する口縁部へ続き、口縁部と天井部の境の稜は鈍い。口縁端部は沈線状の段を設けている。天井部外面は2/3程度の範囲にヘラケズリを施す。644・645は、丸みをもつ天井部から垂下あるいは開きぎみの口縁部へ続くもので、口縁部と天井部の境の稜は鈍い。口縁端部は沈線状の段を設けている。天井部外面は1/2の範囲にヘラケズリを施す。甕655は、口縁部片であり、外反ぎみにのびる口縁部から口縁端部を下方に肥厚させ面を作っている。甗651は、球形の体部で斜め上方に立ち上がる頸部から水平ぎみに外反したのち、斜め上方に立ち上がる口縁部へ続く。頸部上半および体部上半に一部波状文を加飾している。提瓶658は、片張りの胴部で肩部には環状の把手を貼り付けている。体部片面には乱方向のカキメがみられる。

土師器碗656・657は、丸底ぎみの底部から内湾ぎみに立ち上がる口縁部へ続くもので、口縁端部は尖りぎみにおわる。高杯653は、浅い碗状を呈する杯部で脚部は裾開きとなる。脚部のみ遺存している652・654も653と同様の杯部がつくものと思われる。高杯659は、口径24.0cm前後を測る中形品で、中空の脚部から杯部は水平ぎみに開いたのち斜め上方に立ち上がるもので、口縁端部は強く外反する。

S H F 39出土土器(図版第238) S H F 39からは須恵器杯身・杯蓋・壺・短頸壺、土師器壺・甕・甗・高杯、製塩土器などがコンテナ・バットに1箱程度出土したが、いずれも細片が多い。

須恵器杯身674・675は、内傾(675)あるいは直立ぎみに立ち上がる口縁部(674)で、口縁端部内面には沈線状の段を設けている。口縁部の立ち上がり部高2cm前後を測り、受け部は水平(674)あるいはやや斜め上方(675)に突出する。底部外面は1/2程度の範囲にヘラケズリを施す。壺678は、体部最大径が中位よりやや上方にあるもので、口頸部は外反したのち、口縁端部をつまみ上げている。体部外面は体部最大径付近に2条の沈線文とその間に1帯の波状文を、口頸部外面には2条の断面三角形の突帯とその上・下面に波状文を加飾している。体部外面の下半にはタタキメを残している。壺676は扁球形の体部で、口頸部は直立ぎみに立ちあがり、口縁端部は尖りぎみにおわる。

土師器甗679は、体部下半を欠損しているが、体部下半よりやや開きぎみに口縁部へつづくもので、口縁部はわずかに内湾ぎみに立ち上がる。体部外面には2か所の把手を貼り付けた痕がある。高杯677は、杯部および脚部下半を欠損したもので、裾開きの柱状部である。

S H I 08出土土器(図版第237) S H I 08では、竈の中央部およびその周辺から須恵器杯身、

土師器甕が、竈部分からやや離れた地点で須恵器杯蓋、土師器甕などが出土した。

須恵器杯身671・672は、口縁部の立ち上がりが短く、断面三角形状を呈するもので、飛鳥Ⅰ^(注25)の時期と思われる。

土師器甕673は、口縁部は単純「く」の字形を呈し、口径20.1cm、体部最大径21.8cmを測る。体部外面は縦方向のハケを施す。甕670は床面から出土したもので、単純「く」の字形を呈し、口径15.7cm、体部最大径15.6cmを測る。

S H I 109出土土器(図版第237) S H I 109は大半がS D F 22によって削り取られており、わずかに須恵器杯蓋、土師器甕が少量出土したのみである。須恵器杯蓋668は、やや丸みをもつ天井部から垂下する口縁部へ続くもので、天井部と口縁部の稜は鋭い。土師器甕666・667は、単純「く」の字形に屈曲するもので、体部最大径が中位より下にあるやや下ぶくれの胴部になるものと思われる。669は甕の把手部である。

S H G 33出土土器(図版第237) S H G 33では土師器甕、須恵器のほか、滑石製白玉54点、製塩土器などがコンテナ・バット1箱程度出土したが、図示し得る資料が少ない。

土師器小型丸底壺662は、体部最大径12.8cmを測り、外面は縦方向のハケ、内面はヘラケズリを施す。661は662と同じ形状のもので、口径13.0cm、体部最大径13.9cmを測り、口縁部は単純「く」の字形を呈し、口縁端部は丸くおさめる。甕660は、単純「く」の字形の口頸部で、口縁端部がわずかに肥厚する。そのほか、細片のため図示しえなかったが、口縁端部が内側に肥厚し、面をつくる布留式新段階の口縁部片がある。高杯664は、浅い椀状の杯部で、中空の柱状部から裾開きの脚部へ続くものである。高杯663は、口径13.4cmを測り、体部より内湾ぎみに立ち上がるもので、口縁端部は丸くおさめる。665は、脚部細片で底部径9.0cmを測る。

S H G 55出土土器(図版第238) S H G 55からは須恵器杯身・杯蓋・壺・皿、土師器椀・皿・壺・甕・鉢・高杯などが出土した。ただ細片のものが多く、土器の遺存状態は良くなかった。なお、竪穴式住居跡内では一部奈良時代以降の遺物が混在している。

須恵器杯身702は、口径6.5cm、口縁部の立ち上がり部高0.3cmを測る小形のもので、底部は欠損しておりヘラケズリの範囲は不明。杯蓋703は、丸みをおびた天井部から口縁部へ垂下し、天井部と口縁部の境の稜は不明瞭である。天井部の2/3以下の範囲にヘラケズリを施す。皿704は、底部から直線的に屈曲したのち口縁部へ続き、口縁端部はわずかに外方に肥厚する。704は焼きひずみがあり、一部変形している。壺706は、外反ぎみに立ち上がる口頸部から、口縁端部は直立ぎみに立ち上がるもので、体部内面には青海波文の当て具痕が、外面には縦位のタタキののち、横位のカキメを施している。

土師器壺694は、体部下半を欠損したもので、球形に近い体部から筒状の頸部へ続き、口縁部はゆるく外反する。体部内面は粗い横方向のヘラケズリを施す。甕707～711は、単純「く」の字形を呈する口縁部で、口縁端部はやや尖りぎみにおわる。708・709・711は口縁端部を上方にわずかにつまみ上げている。709は口縁部の外反が強く、胴部は長胴ぎみとなる。椀680～688・690・691は、丸底ぎみの底部から内湾ぎみに立ち上がる口縁部へ続くもので、口縁部からそのま

ま直立ぎみに立ち上がるもの(682・683・685～687・690・691)と、わずかに外反ぎみに屈曲するもの(684)がある。口径に対して器高が高くやや深い形状のもの(680・681・686～688)と器高が低く浅い形状のもの(682～685・690・691)がある。体部内面はナデ調整が主体であり、一部、底部近くに横方向のヘラケズリが認められるもの(687)がある。690では放射状の暗文を1段施している。皿689は、1割にも満たない細片であり、口径は若干前後する資料である。底部から外反ぎみに立ち上がるもので、口縁端部はわずかに外方に肥厚する。鉢701・705は底部を欠損しており、全体の形状は明らかでないが、斜め上方に立ち上がり胴部からそのまま口縁部へ続き、口縁端部がさらに強く外反するものである。体部外面は細かいハケを施す。鉢698は、直立する胴部上半からそのまま口縁部へ続き、口縁端部はわずかに外反する。鉢699・700は、斜め上方に内湾ぎみに立ち上がる体部から、口縁端部はわずかに外反させたものである。体部外面はハケ、内面はナデ調整を施す。高杯695～697はいずれも杯部が欠損しているもので、中空の柱状部から裾開きの脚部へ続くものである。

S H G 56出土土器(図版第239) S H G 56からは須恵器杯身、土師器椀・甕・高杯などが出土した。須恵器杯身712・713は口径9.0～10.4cm前後を測る小形品で、口縁部の立ち上がりは短く、断面三角形を呈している。

土師器壺720は球形の体部を呈し、体部中位に体部最大径がある。口頸部は直立ぎみに短く立ち上がる頸部から、口縁部は強く外反する。体部外面には縦方向のハケを施している。甕717～719・721・722は撫で肩の体部で口頸部は強く外反する。体部外面は縦方向のハケ、内面はナデ調整を施している。椀715・716は、丸底ぎみの底部から内湾ぎみに立ち上がる口縁部へ続くもので、口縁端部は尖りぎみにおわる。高杯714は杯部を欠損したもので、脚部は裾開きとなる。723は、斜め上方にのびる杯部から大きく外反するもので高杯あるいは鉢と思われる。鉢724は直立ぎみに立ち上がる杯部からわずかに外反する口縁部へ続くものである。

S H J 28出土土器(図版第239) S H J 28からは、図示しえた無蓋高杯のほか、須恵器杯蓋、土師器片が出土した。無蓋高杯725は、深い椀状の杯部で、口縁部は直立ぎみに立ち上がる。脚部は杯部から裾開きとなるもので、下半は欠損している。

S H J 94出土土器(図版第239) S H J 94からは須恵器杯蓋・椀、土師器甕が出土した。

須恵器椀728は丸底ぎみの底部で、内湾ぎみに立ち上がる体部下半部から上半部は直立ぎみに立ち上がる深い椀状を呈し、口縁部は「く」の字形にゆるく外反し、口縁端部は丸くおわる。

土師器甕729は、撫で肩の体部から「く」の字形に外反するものである。730の体部はハケ、内面はヘラケズリを施している。

S H J 201出土土器(図版第239) S H J 201からは須恵器杯身が出土した。須恵器杯身726は口縁部の立ち上がりが1.0cmと短く、受け部は水平ぎみにのびる。

S H J 41出土土器(図版第239) S H J 41出土土器は土師器、須恵器の細片が大半であり、図示しえたものは土師器甕のみである。土師器甕731は口径が体部最大径を凌駕するもので、撫で肩の体部から口縁部は「く」の字形に屈曲するものである。

S H J 126出土土器(図版第240) S H J 126からは須恵器杯身・杯蓋・甕、土師器甕・鉢などが出土した。

須恵器杯身735・736は、内傾ぎみに立ち上がる口縁部で、口縁端部は丸みをもっておわる。受け部は水平ぎみにのびる。底部外面は1/2の範囲にヘラケズリを施す。杯蓋732～734は、丸みをもつ天井部で、口縁部はやや開きぎみとなる。口縁端部は丸くおさめるもの(732)と、内側に沈線状の段を設けるもの(733・734)がある。天井部外面の1/2の範囲にヘラケズリを施している。739は甕の口縁部片と思われるもので、外反する口縁部から口縁端部は下方に肥厚して面を作っている。

土師器甕738は、撫で肩の体部で口縁部および体部下半を欠損したものである。737は鉢の口縁部片と思われる。

S H J 13出土土器(図版第240) S H J 13からは須恵器器台、土師器壺・甕・高杯、滑石製白玉638点、有孔円板30点、剣形石製品7点などが出土した。

須恵器753は、器台脚部あるいは壺口縁部の可能性があるが細片のため不明である。器台とすれば裾開きとなるもので、外面に6～7条を1帯とする波状文を2帯施している。

土師器壺743は、やや肩部の張った体部で、「く」の字形に屈曲する頸部から口縁部は内傾ぎみに直線的に立ち上がる。744は、ゆるく外反する頸部で口縁端部には1条の波状文をめぐらす。甕745は、口縁端部を内側に肥厚させて内傾する面を作っている。746・750は、単純「く」の字形に屈曲するもので口縁端部を丸くおさめたものである。高杯740～742は、やや深めの椀状を呈したもので、口縁端部が尖りぎみにおわるもの(740・742)と、内側にわずかに丸みをもっておわるもの(741)がある。脚部は杯底部から裾開きとなる。751は水平ぎみの杯下半部から斜め上方に立ち上がる皿状を呈したものである。752は中空の柱状部で裾開きとなる。

S H J 14出土土器(図版第240) S H J 14からは須恵器壺、土師器甕片、滑石製白玉11点などが出土した。

須恵器壺755は、肩部の張った体部で底部は丸底ぎみとなる。口頸部はゆるく外反するもので、口縁端部はわずかに外反する。口縁部外面には断面三角形の2条の突帯とその間に波状文を施している。

土師器甕754は、単純「く」の字形に屈曲するものである。

S H J 53出土土器(図版第240) S H J 53からは須恵器杯蓋のほか、土師器細片が出土した。須恵器杯蓋756は、丸みをもった天井部から口縁部は強く開く。天井部と口縁部の境の段は不明瞭である。

S H J 24出土土器(図版第240) S H J 24からは須恵器杯身・杯蓋、土師器細片が出土した。

須恵器杯身758・759は、断面三角形の短い口縁部で、受け部は水平ぎみにのびる。

土師器高杯あるいは鉢760は、斜め上方に立ち上がる上半部から口縁端部は内側に内傾する面を作っている。757は中空の柱状部である。

S H J 192出土土器(図版第240) S H J 192からは須恵器杯身・杯蓋・甕の体部片、土師器

甕・高杯などが出土した。須恵器杯身762は内傾する口縁部で受け部は水平ぎみにのびる。底部外面は2/3程度の範囲にヘラケズリを施している。土師器甕763・764は撫で肩の体部で口縁部は単純「く」の字形に屈曲するものである。体部外面は縦方向のハケ、内面はハケあるいはヘラケズリ調整を施している。高杯761は、杯部上半あるいは脚部を欠損したものであるが、椀状の杯部を呈したものと思われる。

S H J 191出土土器(図版第241) S H J 191からは須恵器細片のほか、土師器壺・甕・高杯、製塩土器などが出土した。

土師器壺767は球形に近い体部で、「く」の字形に屈曲する頸部から口縁部は、斜め上方に直線的に立ち上がるものである。甕766は、「く」の字形に屈曲する頸部から口縁部は内湾ぎみに立ち上がり、口縁端部は内傾する面を作っている。高杯765は椀状の杯部を呈するもので、口縁端部は尖りぎみにおわる。

S H J 194出土土器(図版第241) S H J 194からはジョッキ形須恵器、土師器高杯などが出土した。

ジョッキ形須恵器768は、平底の底部から体部が直立ぎみに立ち上がり、口部端部は直立ぎみに立ち上がる。体部には1か所、縦位の把手を貼り付けたものと思われる。体部外面には2条の断面三角形の突帯とその間に波状文を加飾している。

土師器高杯769～771は、斜め上方に内湾ぎみに立ち上がる杯部で、口縁部はわずかに外反するもの(769)と杯部からそのままつづくもの(770)がある。脚部は中空の柱状部から裾開きとなる。771は椀状の杯部で、中実の柱状部から裾開きとなるものである。

S H J 193出土土器(図版第241) S H J 193からは須恵器杯身・杯蓋・椀・壺・甕、土師器壺・甕・鉢、製塩土器などが出土した。

須恵器杯身777は、直立ぎみに長く立ち上がる杯部で、受け部は水平ぎみにのびる。底部外面の2/3の範囲にヘラケズリを施している。778は、口縁部の立ち上がりが777に比べて短く、やや内傾ぎみとなる。底部は1/2の範囲にヘラケズリを施している。杯蓋775・776は、丸みをもつ天井部からやや開きぎみの口縁部に続くもので、天井部と口縁部の境の段は不明瞭である。口縁端部は尖りぎみにおわる。ジョッキ形須恵器779は、深い椀状を呈し、口縁部は体部からわずかに内湾したのち、直立ぎみに立ち上がる。体部には1か所、縦位の把手を貼り付けたものと思われる。体部外面は2条の断面三角形の鈍い突帯と3帯の波状文で加飾している。短頸壺780は、肩部の張った扁球形の体部で、口頸部は内傾ぎみに短く立ち上がる。壺781は、撫で肩の体部で、外反ぎみに立ち上がる口縁部へ続くもので、口縁部外面は外方に丸く肥厚している。

土師器壺786は、体部下半を欠損しているが、球形に近い体部で体部最大径が中位近くにあるものと思われる。口頸部は直立ぎみに立ち上がる頸部から外傾ぎみの口縁部へつづき、口縁端部は尖りぎみにおわる。体部内・外面には縦方向のハケ調整を施している。口縁部外面には横方向のハケ調整が認められる。787も球形に近い体部で、口頸部は単純「く」の字形に外反する。

甕784は、「く」の字形に屈曲する頸部から口縁部は内湾ぎみとなり、口縁端部は内側に肥厚し

て内傾する面を作っている。785は、撫で肩の体部で頸部は直立ぎみに立ち上がり、口縁部は斜め上方に直線的にのびている。高杯782は、椀状の杯部を呈したもので、783は斜め上方に立ち上がる杯部で、口縁部は外反ぎみとなり深い椀状を呈している。

(2) 掘立柱建物跡の出土土器

掘立柱建物跡からの出土遺物は少なく、5棟の掘立柱建物跡でも掘形の一部に少量の遺物が出土したのみである。

S B F 91出土土器(図版第241) S B F 91からは須恵器杯身・杯蓋、甕あるいは甕の体部片があり、そのうち、杯身は柱穴内から出土した。

須恵器杯身774は、内傾ぎみに短く立ち上がる口縁部で、受け部は水平ぎみに短くのびる。底部は欠損しているが外面の1/2の範囲にヘラケズリを施している。杯蓋772の天井部は欠損しているが、丸底ぎみの天井部と思われるもので、口縁部はわずかに内湾する。口縁端部は内側に沈線状の段を設けている。773は体部片と思われるが細片のため器形は不明である。外面にはカキメを施している。

S B F 92出土土器(図版第241) S B F 92の掘形内からは須恵器杯身・杯蓋のほか、滑石製白玉1点が出土した。

須恵器杯身789は、内傾ぎみに立ち上がる口縁部で、口縁端部内面には沈線状の段を設けている。受け部はやや斜め上方にのび、底部外面の1/2の範囲にヘラケズリを施している。杯蓋788は、丸みをもつ天井部からやや内湾ぎみとなる口縁部へつづくもので、口縁端部内面には沈線状の段を設けている。

S B J 183出土土器(図版第241) S B J 183の各掘形内からは須恵器杯蓋、土師器の細片が出土しているが、図示しえたのは土師器甕片のみである。

土師器甕790は、単純「く」の字形に屈曲する口縁部で、口縁端部は内側に肥厚して内傾する面を作っている。

S B J 181出土土器(図版第241) S B J 181の各掘形内からは須恵器杯蓋を含む須恵器細片、土師器の細片が出土しているが、図示しえたのは須恵器杯蓋791の1点である。791は丸みをもつ天井部から垂下する口縁部へ続くもので、口縁端部は内側にやや丸みをもっている。天井部の1/2の範囲にヘラケズリを施している。

S B J 197出土土器(図版第241) S B J 197の各掘形内からは須恵器細片、土師器の細片が出土した。須恵器杯身792は、内傾ぎみに立ち上がる口縁部で、口縁端部は尖りぎみにおわる。底部外面の1/2の範囲にヘラケズリを施している。

(3) 土坑ほかの出土土器

S K F 02出土土器(図版第242) S K F 02では図示しえた須恵器杯身・杯蓋、土師器高杯脚部のほか、図示しえなかったが土師器甕の体部、高杯脚部、須恵器甕の体部のそれぞれ細片が出土している。

須恵器杯身795は、口径12.4cm、器高4.9cm、立ち上がり部高2.0cmを測る。口縁端部内面には

わずかに沈線状の段を設けている。底部外面は全体の1/3程度の範囲にヘラケズリが及んでいる。須恵器杯蓋793・794は、水平ぎみの天井部で、天井部と口縁部の境の稜が断面三角形を呈するもの(793)と天井部が丸みをもち、天井部と口縁部の境の稜が鈍い794があり、口縁端部内面は沈線状の段を設けている。793は天井部の2/3程度、794は1/2程度の範囲にヘラケズリを施す。

土師器高杯796は底径9.6cmを測り、中空の柱状部から脚端部へ続くものである。

S K F 76出土土器(図版第242) S K F 76で図示しえたのは須恵器杯身・杯蓋、土師器甕であるが、図示しえるまでには復原できなかったものとして土師器甕あるいは甌の体部片がある。

須恵器杯身799・800は、口縁端部内面に沈線状の段を設けるもので、底部外面は1/2以下の範囲にヘラケズリを施す。799の口縁部立ち上がり部高は1.6cm、800の口縁部立ち上がり部高1.5cmを測る。杯蓋797・798は天井部を欠くもので、口縁部と天井部の境の稜は鈍く、口縁端部は外反ぎみとなり、内面には沈線状の段を設けている。

土師器甕802は、体部下半を欠くもので、口縁部は内湾ぎみに立ち上がったのち、口縁端部内面を肥厚させて面を作っている。801は単純「く」の字形の口縁部で、口縁端部は丸みをもっておわる。

S K F 78出土土器(図版第242) S K F 78では須恵器杯身・杯蓋・提瓶、土師器高杯・甌・甕などがコンテナ・バットに1箱程度出土したが、図示しえたのは須恵器杯蓋・提瓶、土師器高杯・甌である。図示しえなかったが須恵器杯身は、立ち上がり部高1.8cmを測り、口縁端部内面には沈線状の段を設けているものであるが、細片のため口径不明。

須恵器杯蓋803・804は、水平ぎみの天井部から口縁部は垂直ぎみに垂下するもの(803)と外反ぎみに広がるもの(804)があり、口縁端部内面は沈線状の段を設けている。天井部外面は天井部の1/2程度の範囲にヘラケズリを施す。提瓶806は、体部下半を欠損しているが、球形状のもので環状の把手をもち、口頸部は直立ぎみに立ち上がる頸部から水平ぎみに外反する口縁部へ続く。

土師器鉢805は、斜め上方に広がる杯部から直立ぎみに立ち上がったのち、口縁端部が外反するもので、口径13.9cmを測る。甌807は、牛角状の把手を2か所設け、底部には推定直径6.3cmの円形とそのまわりに楕円形の孔を、2あるいは3か所焼成前に開けている。

S K F 04出土土器(図版第242) S K F 04では須恵器杯身の細片2点と甕体部片、土師器、製塩土器の細片が小袋に1袋程度出土した。復原・図示できる資料は須恵器甕体部片、土師器甕・高杯片・椀がある。

須恵器甕体部片811は、口縁部および体部下半を欠き、体部上半部のみである。体部は体部最大径が中位より上方にあり、体部最大径33.4cmを測る。体部外面はていねいな縦方向のタタキメが残る。

土師器甕809は、口縁端部内面が肥厚し、内傾する面をつくる布留式新段階のものである。高杯808は中空の柱状部で脚部は裾開きとなる。椀810は内湾ぎみに立ち上がる口縁部で、口縁端部は尖りぎみにおわる。

S K F 146出土土器(図版第242) S K F 146からは須恵器杯身・短頸壺、土師器甕・甌などが

出土した。

須恵器杯身812・815・816は、口縁部の立ち上がり内傾ぎみで、立ち上がり部高1.5～2.0cmを測る。口縁端部は丸くおさまる。底部は2/3程度の範囲にヘラケズリを施す。短頸壺813は、扁球形の体部で、口頸部は直立ぎみに立ち上がる。体部外面の1/3程度の範囲にヘラケズリを施す。

土師器甕814・817・819は、単純「く」の字形を呈するもので、口縁部の口径11.8cm(817)、同14.3cm(813)、同30.2cmを測るもの(819)がある。甗818は、底部のみ遺存したものであるが、直径5cm前後の円形のまわりに楕円形の透かし孔を設けているものである。

S K F 47出土土器(図版第243) S K F 47からは須恵器片、土師器甕、製塩土器が出土した。

土師器甕820は撫で肩の体部で、口縁部は単純「く」の字形に屈曲する。口縁端部は強く外反する。体部外面にはハケ調整を施している。821は体部下半に体部最大径があるものと思われる。口頸部は「く」の字形に屈曲したのち、口縁部がやや内湾ぎみとなる。口縁端部は外方に肥厚し、内傾する面を作っている。体部内・外面はハケ調整を施す。

S K F 65出土土器(図版第243) S K F 65からは須恵器壺・甕が出土した。壺830は、口頸部が直立ぎみに立ち上がる短頸壺で、肩部外面には横方向のカキメが認められる。甕829は、単純「く」の字形に屈曲する口頸部から口縁端部は外方に肥厚して面をつくるもので、体部外面にはタタキののち横方向のカキメが認められる。

S K F 109出土土器(図版第243) S K F 109出土土器には須恵器杯蓋、土師器壺の体部片、製塩土器がある。

須恵器杯蓋822は、丸みをもつ天井部から垂下する口縁部へ続き、口縁端部はわずかに外反するもので、天井部外面の2/3以上の範囲にヘラケズリを施す。

土師器壺823は、体部上半を欠くもので、底部はやや突出ぎみの平底となる。

S K F 148出土土器(図版第243) S K F 148からは須恵器杯蓋が出土した。

須恵器杯蓋824は口縁部片で、天井部と口縁部の境の稜は鈍く、口縁端部は内面に沈線状の段を設けている。

S K F 52出土土器(図版第243) S K F 52からは須恵器杯身が出土した。

須恵器杯身825は、立ち上がり部高2.0cmを測り、内傾ぎみの立ち上がり部で、口縁端部内面には沈線状の段を設けている。底部外面は2/3以下の範囲にヘラケズリを施している。

S K F 69出土土器(図版第243) S K F 69からは須恵器杯身、土師器甕・高杯などの細片が小袋に2袋程度出土した。

土師器甕826は、斜め上方に立ち上がる口縁部で、体部は張りが弱く撫で肩ぎみである。高杯827は、浅い椀状を呈し、口縁端部は丸みをもっておわる。脚部828は杯部から中空で裾開きとなるものである。

S K F 28出土土器(図版第243) S K F 28からは、須恵器杯身・杯蓋・甕・壺、土師器壺・甕・甗などがコンテナ・バットに2箱程度出土した。須恵器杯身は、図示しえるだけの良好なものではなかったが、細片をみると、口縁部の立ち上がり部高2.0cm前後で、口縁端部内面には沈

線状の段を設けているものがある。底部のヘラケズリの範囲は細片のため不明。

杯蓋831・832は、口縁部と天井部の境の稜が鈍く、口縁部はやや外開きぎみとなり、口縁端部は尖りぎみのものと沈線状の段を設けているものがある。天井部はやや丸みをもち、2/3程度の範囲にヘラケズリを施す。壺833は、外反ぎみに立ち上がる頸部から口縁端部は内・外面に肥厚し、三角形状を呈するもので、頸部外面の上半には櫛描波状文を加飾している。

土師器壺839は、撫で肩の体部上半から直立ぎみに立ち上がる頸部へ続き、口縁端部はやや内湾ぎみとなる。体部外面に縦方向のハケ調整が認められる。甕835・837は、球形ぎみの体部から口縁部は単純「く」の字形を呈し、口縁端部は内面がわずかに肥厚し、丸みをもっておわる。体部外面はハケ、内面はヘラケズリあるいはハケでていねいに仕上げたもので、布留式の中でもやや古相を呈するものである。甕834・836は、撫で肩の体部から口縁部は外反ぎみとなり、口縁端部は丸みをもっておわる。甕838は扁球形の体部と思われるもので、2か所に把手を貼り付けた痕がある。口頸部は「く」の字形に屈曲するもので、口縁端部は内・外方に肥厚して水平面を作っている。体部外面には横方向のハケ調整が認められる。甗840は、口径26.0cm、底径9.0cm、器高29.8cmを測るもので、牛角状の把手を2か所設け、底部には直径5.6cmの円とそのまわりに楕円形の透かし孔を4か所開けている。外面は縦方向のハケ調整を施している。

S K F 63出土土器(図版第244) S K F 63からは須恵器杯蓋・壺・甕、土師器壺などが出土した。須恵器杯蓋841は水平ぎみの天井部で、天井部から口縁部の境の稜は鋭く、口縁部はやや内傾ぎみとなる。口縁端部は尖りぎみにおわる。天井部外面は2/3以下の範囲にヘラケズリを施す。壺844は、体部中央よりやや上方に体部最大径があり、口頸部は外反ぎみに立ち上がる頸部から口縁端部を上・下方に肥厚させ、尖りぎみにおわる。体部内面には青海波文の当て具痕がみられ、外面はタタキののち横方向のカキメを施す。甕845は、球形に近い体部で、口頸部は短く外反する頸部から外反ぎみに広がる口縁部へ続き、口縁端部は上・下方に肥厚して尖りぎみにおわる。口縁端部外面には2条の沈線文がめぐる。体部内面には青海波文の当て具痕がみられ、外面にはタタキののち横方向のカキメを施す。

土師器壺842は、外反ぎみに短く立ち上がる頸部から、さらに外反する口縁部へ続くものである。壺843は、撫で肩の体部で口頸部は直立する頸部から外反する口縁部へ続き、口縁端部は丸くおさめる。体部内・外面には指オサエ痕が顕著である。

S K F 44出土土器(図版第244) S K F 44からは須恵器杯蓋・壺のほか、甕の口縁および体部片、土師器細片が小袋に1袋と製塩土器が出土した。

須恵器杯蓋846・847は、丸みをもつ天井部と思われ、天井部と口縁部の境の稜は鈍い。口縁端部は尖りぎみにおわる。天井部は2/3以下の範囲にヘラケズリを施す。壺848は、外反ぎみに立ち上がる口頸部から口縁端部は上・下方に肥厚する。

土師器甕849は、「く」の字形に屈曲するもので、体部最大径が口径にほぼ等しいものである。

S K F 176出土土器(図版第244) S K F 176からは須恵器杯身のほか、土師器椀・高杯などが出土した。

須恵器杯身853は、口縁部の立ち上がり部高2.4cmを測り、口縁端部は丸くおさめるもので、底部外面は2/3以上の範囲にヘラケズリを施す。

土師器碗852は、底部から内湾ぎみに立ち上がり、口縁端部は尖りぎみにおわる。851は、高杯と思われるもので、斜め上方に立ち上がる杯部から口縁端部は外方に肥厚する。

S K F 97出土土器(図版第244) S K F 97からは土師器壺・甕が出土した。

土師器壺854は、撫で肩の体部で、口頸部は外反する頸部から斜め上方に直線的に立ち上がるもので、口縁端部はわずかに丸みをもって肥厚する。体部外面は横方向にハケ、内面はヘラケズリを施す。甕855は口縁部が「く」の字形を呈する庄内系甕である。S K F 97はS H F 36・39の竪穴式住居跡の下面で検出した遺構である。

S K F 117出土土器(図版第244) S K F 117からは須恵器杯身・杯蓋・甕、土師器甕、鐸形土製品のそれぞれ細片が小袋に3袋程度出土しており、図示しえたものは須恵器杯身と鐸形土製品の2点である。

須恵器杯身856は、口縁部の立ち上がり部高1.6cmを測り、口縁端部内面には沈線状の段を設けている。底部外面は1/2程度の範囲にヘラケズリを施す。

鐸形土製品857は、四隅のコーナーが丸みをもつ方形で鐸本体を表現しており、器壁厚0.8cmである。上面には釣り部を概略化するようにつまみ上げている。このつまみ部には棒状のもので円孔を開けている。

S K F 62出土土器(図版第244) S K F 62からは、須恵器口縁部片のほか、土師器細片が出土した。

須恵器壺850は、外反する頸部から口縁部は外方に肥厚して丸みをもつ面をつくり、内面は尖りぎみにおわる。

S K F 23出土土器(図版第244) S K F 23からは土師器高杯片が出土した。

土師器高杯864は、水平ぎみにのびる杯部下半から斜め上方に立ち上がる体部をもつ碗状の杯部で、柱状部は中空である。杯部外面には粗いハケ調整が認められる。

S K F 67出土土器(図版第246) S K F 67からは須恵器杯身・杯蓋、製塩土器が出土した。

須恵器杯身906は、底部と口縁部を欠損したもので、受け部は斜め上方にのびる。杯蓋905は、丸みをもつ天井部から口縁部は開きぎみとなる。天井部外面の1/2の範囲にヘラケズリを施す。

S X F 151出土土器(図版第246) S X F 151からは須恵器杯身・杯蓋・有蓋高杯蓋・甕、製塩土器のほか、土師器の細片が出土した。

須恵器杯身901・902は、口縁部が斜め上方に立ち上がるもので、口縁端部は丸みをもっておわる。受け部は水平あるいは斜め上方にのびる。底部外面は2/3の範囲にヘラケズリを施す。蓋900は、天井部に2帯の櫛描文と2列の列点文で加飾している。甕903・904は筒状にのびる頸部から外反ぎみにのびる口縁部へつづくものである。

S X F 114出土土器(図版第246) S X F 114からは須恵器杯身・杯蓋・高杯脚部、土師器甕が出土した。

須恵器杯身908は、底部に焼き歪みがあるもので、口縁部は斜め上方に立ち上がり、口縁端部には内側に沈線状の段がある。杯蓋907は、丸みをもつ天井部で、口縁部は内湾ぎみとなる。口縁部と天井部の境の段は明瞭である。909は、高杯脚部片と思われるもので、外面には断面三角形の突帯とその上方に波状文がある。

土師器甕910は把手をもつ甕の細片である。

S X F 212出土土器(図版第247) S X F 212からは須恵器杯身、土師器把手付椀・甕などが出土した。

須恵器杯身930は内傾する口縁部で、口縁部の立ち上がり部高1.6cmを測る。受け部はやや斜め上方に突出する。底部外面は2/3程度の範囲にヘラケズリを施す。

土師器把手付椀931は、丸底の底部から斜め上方に直線的に立ち上がる体部へ続き、口縁端部は尖りぎみにおわる。体部中位近くに1か所角状の把手を貼り付けている。甕932は、撫で肩の体部で、口縁部は単純「く」の字形に屈曲する。体部外面はハケ、内面はナデ調整を施す。甕933は口径20.3cm、器高34.5cmを測るもので、体部中位近くに体部最大径がある。口頸部は単純「く」の字形に屈曲する頸部からやや内湾ぎみに立ち上がる口縁部へ続き、口縁端部は外方につまみ上げている。体部外面はハケ、内面はヘラケズリを施している。

S X F 211出土土器(図版第347) S X F 211からは、須恵器杯身・杯蓋、土師器甕などが出土した。

須恵器杯身938～941は、内傾する口縁部で口縁端部を丸くおさめるもの(939・941)と内側に沈線状の段を設けているもの(938・940)がある。受け部はやや外方に突出する。底部外面は1/2程度の範囲にヘラケズリを施す。杯蓋944～948は、丸みをもつ天井部からやや開きぎみの口縁部へ続くもので、口縁部と天井部の境の稜は鈍い。天井部外面の1/2程度の範囲にヘラケズリを施す。

土師器甕935・942・943は、単純「く」の字形に屈曲する口縁部で、口縁端部は丸くおさめる。全体の形状がわかる942は、口径14.8cm、器高22.4cm、943は口径16.6cm、器高24.8cmで体部最大径が中位よりやや下方にある。甕949は「く」の字形に屈曲する頸部で、口縁部はわずかに内傾し、端部は外方につまみ出している。口径12.0cm、器高15.7cmを測り、体部最大径が中位よりやや下方にある。甕934は、体部上半と口縁部を欠損したものである。底部は丸底で球形に近い体部となる。体部外面はハケ、内面はヘラケズリを施す。

須恵器936・937は高台をもつ杯B、あるいは壺の底部片と思われるもので、上面包含層の遺物の可能性が高い。

S K I 01出土土器(図版第244) S K I 01からは須恵器甕、土師器壺・甕・鉢などが出土した。

須恵器甕863は、球形に近い体部で、口頸部は外反ぎみの頸部からさらに屈曲する口縁部へ続き、口縁端部は上方に肥厚し、丸みをもっておわる。体部内面には青海波文の当て具痕が、外面には縦位のタタキメが残る。

土師器甕859は、体部最大径が中位よりやや上方にあり、口頸部は斜め上方に直線的に立ち上がる。甕862はやや長胴ぎみの体部から、口縁部は単純「く」の字形を呈する。体部内面および

口縁部外面には指オサエ痕が残る。鉢861は、半球形を呈する体部から口縁部は大きく外反するもので、口縁端部は水平ぎみに広がる。

S K H 16出土土器(図版第244) S K H 16からは土師器壺が出土した。865は外反ぎみに立ち上がる口頸部で、頸部と口縁部の境には段を設ける二重口縁壺である。

S K J 224出土土器(図版第245) S K J 224からは、ジョッキ形須恵器が出土した。866は平底の底部で、体部は内湾ぎみに立ち上がり、口縁部は内傾ぎみとなる。口縁部と体部の境および体部には、断面三角形の突帯を3条めぐらし、その突帯間に2帯の波状文を施している。体部には、断面円形の把手を縦位に貼り付けている。

S K J 198出土土器(図版第245) S K J 198からは、ジョッキ形須恵器、土師器甕・高杯が出土した。

ジョッキ形須恵器867は、口径7.9cm、器高7.3cmの小形品で、深い椀状の体部から、口縁部は斜め上方に短く立ち上がる。体部には3条の鈍い突帯の間に1帯の波状文を加飾する。体部には縦位の把手があったものと思われるが欠損している。897は壺の底部片である。

土師器甕868は、体部最大径と口径がほぼ等しく、口縁部は単純「く」の字形を呈するものである。高杯脚部869は、杯部を欠損したもので、中空の柱状部から裾開きとなる。

S K J 101出土土器(図版第245) S K J 101からは、須恵器椀、土師器鉢・高杯が出土した。

須恵器椀870は、平底の底部から内湾ぎみに立ち上がる体部へ続き、口縁部はわずかに外反するものである。

土師器高杯871は、水平ぎみにのびる杯底部から、口縁部は斜め上方に直線的に立ち上がるもので、口縁端部は尖りぎみにおわる。高杯872・873は、杯底部から内湾ぎみに立ち上がる椀状の杯部を呈したものである。高杯脚部874は、裾開きとなるものである。鉢875は、高杯あるいは鉢の上半部である。口縁部は外反ぎみとなる。

S K J 154出土土器(図版第245) S K J 154からは、須恵器壺・有蓋高杯・甕、土師器高杯のほか、製塩土器が出土した。須恵器壺887は、撫で肩の体部で、口縁部は短くやや外反ぎみとなるものである。有蓋高杯888は、直立ぎみに立ち上がる口縁部で、受口部は水平ぎみとなる。脚部は杯底部が裾開きとなるもので、脚部下半には断面三角形の段を設けている。甕886は筒状の頸部で、口縁部は強く外反し、口縁部外面にも2条の断面三角形の突帯をめぐらしている。

S K J 47出土土器(図版第245) S K J 47からは、須恵器甕、土師器高杯・壺などが出土した。須恵器甕876は、外反する口縁部で外面には断面三角形の突帯をめぐらしている。

土師器高杯877～879・880は、椀状の杯部を呈したもので、中空の柱状部から裾開きの脚部へつづいている。高杯881は、水平にのびる杯底部から、斜め上方に長くのびるもので、口縁端部は外反ぎみとなる。脚部は欠損して不明。壺882は口縁部片で、口縁部は斜め上方に直線的に立ち上がるものである。

S K J 214出土土器(図版第245) S K J 214からは、土師器壺・高杯が出土した。

壺885は球形の体部で、口縁部は単純「く」の字形に外反するものである。高杯883・884は椀

状の杯部で、脚部は中空の柱状部から裾開きとなるものである。

S K J 54出土土器(図版第245) S K J 54からは、須恵器壺あるいは甕の細片、土師器甕・高杯・鉢のほか、製塩土器、滑石製白玉5点などが出土した。

土師器甕890は、「く」の字形を呈する口縁部で、口縁端部は丸くおさめるものである。高杯891は体部下半を欠損しているが、水平ぎみにのびるものと思われ、杯上半部は斜め上方に直線的に長く立ち上がるもので、口縁端部は強く外反する。高杯893・895は、水平ぎみにのびる杯底部から、直立ぎみに立ち上がる浅い椀状を呈したもので、895は柱状部から裾開きの脚部である。892は壺の底部片と思われるもので、底部外面には横方向のヘラケズリが認められる。889は甑と思われるもので、直立する体部から口縁部はわずかに外反する。

S K J 215出土土器(図版第245) S K J 215からは、土師器高杯片が出土した。896は、内湾ぎみに立ち上がる椀状を呈したもので、口縁部はさらに内湾ぎみとなる。

S K J 109出土土器(図版第245) S K J 109からは、須恵器甕、土師器鉢が出土した。

須恵器甕898は体部片で、体部上半の肩部に2条の沈線文の間に櫛描波状文を加飾している。

土師器鉢899は浅い椀状を呈し、口縁部は直立ぎみに立ち上がり、口縁端部には内側に沈線状の段を設けている。口縁部は一部欠損しているが、口縁部の形状から片口があったものと思われる。体部下半部を欠損している。体部上半には2か所の把手を取り付けている。

S K G 06出土土器(図版第246) S K G 06からは、図示した土師器甕のほか、土師器細片がある。

土師器甕911は、口径21.8cm、器高32.3cmを測る長胴のもので、口径が体部最大径を凌駕する。口縁部は単純「く」の字形に屈曲する。体部外面は縦方向のハケ、内面はナデ調整を施している。

S K I 127出土土器(図版第246) S K I 127からは、図示しえなかった須恵器杯蓋のほか、土師器高杯などが出土した。

土師器壺913・915は、単純「く」の字形に屈曲し、口縁端部は尖りぎみにおわる。913は、直立ぎみに立ち上がる頸部から口縁部は外反ぎみとなる。体部内面には横方向のヘラケズリを施している。高杯914は、水平ぎみにのびる杯底部で、杯上半部は欠損しているが、斜め上方に広がるものと思われる。脚部は、中空の柱状部から裾開きになるものと思われる。

S K I 126出土土器(図版第246) S K I 126からは、古墳時代中・後期の須恵器杯身・杯蓋・横瓶、土師器甕のほか、一部奈良時代の遺物が混在している。

須恵器杯身919・920は、内傾ぎみに立ち上がる口縁部で、受け部は水平ぎみとなる。底部外面の1/2の範囲にヘラケズリを施している。杯蓋918は、丸みをもつ天井部から口縁部に垂下し、天井部と口縁部の境は不明瞭である。口縁端部内面には、沈線状の段を設けている。横瓶921は、口頸部と体部の2/3以下が残っている。口頸部は、筒状にのびる頸部から、口縁部は内湾ぎみに立ち上がるもので、口頸部外面には2条の沈線文と、その下にヘラ状工具による列点文がある。体部外面はていねいにタタキ、内面は青海波文の当て具痕がある。

土師器甕916は、口径が体部最大径を凌駕するもので、口縁部は単純「く」の字形に外反する。土師器皿917は底部から内湾ぎみに立ち上がる。

S K J 139出土土器(図版第246) S K J 139からは、須恵器杯身・杯蓋・壺、土師器甕・鉢のほか、甌の細片が出土した。

須恵器杯身925・926は内傾する口縁で、受け部は水平ぎみにのびる。杯底部は丸みをもつもの(926)と平底ぎみのもの(925)がある。杯蓋923・924は、丸みをもつ天井部から口縁部は垂下する。天井部と口縁部の境は不明瞭である。壺927は、筒状の頸部から口縁部は外反ぎみとなり、口縁端部は外方に丸く肥厚する。

土師器甕929は、単純「く」の字形に屈曲する口縁部で、体部最大径が口径を凌駕している。鉢928は、斜め上方に内湾ぎみに長く立ち上がる体部で、口縁部は内湾ぎみに立ち上がる。

S E J 135出土土器(図版第246) S E J 135からは須恵器杯身・甕体部片、土師器甕の細片が出土した。

須恵器杯身922は、内傾ぎみに立ち上がる口縁部で、受け部は水平ぎみにのびる。底部外面の1/2の範囲にヘラケズリを施している。

S X F 213出土土器(図版第248) S X F 213は、竪穴式住居跡S H F 37と重複するようにあるもので、一部S H F 37に帰属する資料が含まれている可能性がある。S X F 213からは須恵器杯身・杯蓋・壺、土師器甕・甌などが出土した。

須恵器杯身955～958は、口縁部の立ち上がりが高く、内傾ぎみとなる。口縁端部は丸みをもつもの(957・958)と、内側に沈線状の段をもつもの(955・956)がある。受け部は水平あるいは斜め上方に短くのびる。底部外面の1/2あるいは2/3の範囲にヘラケズリを施している。杯蓋950は水平ぎみの天井部で、口縁部は垂下し、天井部と口縁部の境に断面三角形の段を設けている。951～954は、丸みをもつ天井部から口縁部は開きぎみとなり、天井部と口縁部の段は鈍い。口縁端部内面には沈線状の段を設けている。壺959は口縁部片で、外反ぎみに立ち上がる頸部から口縁端部は直立ぎみに肥厚する。壺体部960は、球形状の体部片で、体部上半には沈線状の段とその下に帯の波状文で加飾している。頸部は斜め上方に立ち上がるもので、外面には波状文が認められる。

土師器甕965は、「く」の字形に屈曲する頸部から口縁部はわずかに内傾する。口縁端部は丸みをもっておわる。961・963は、球形に近い体部で、口縁部は単純「く」の字形に屈曲する。962は体部下半に体部最大径があるような形状で、口縁部は外反ぎみに屈曲する。甌964は、体部下半を欠損しているもので、体部上半は直立ぎみに立ち上がり、口縁部はわずかに内湾する。体部外面には、牛角状の把手を2か所貼り付けている。壺966は、扁球形の体部で、口縁部は斜め上方に長く立ち上がる。口縁部および体部上半は横方向のヘラミガキが認められる。高杯967は浅い皿状を呈した杯部で、脚部は中空である。

S X J 223出土土器(図版第249) S X J 223からは須恵器杯蓋、土師器甕・鉢・高杯・甕などが出土した。

須恵器杯蓋974は、丸みをもつ天井部から口縁部は開きぎみとなり、口縁端部は尖りぎみとなる。天井部と口縁部の境には鈍い段を設けている。

土師器甕976は「く」の字形に屈曲する口縁部で、口縁端部は内傾する面を作っている。鉢975は、斜め上方に広がる体部から口縁部は直立ぎみとなる。高杯978は、水平ぎみにのびる杯底部から斜め上方に直線的に立ち上がる深い皿状を呈するもので、杯底部上端の外面には、鈍い段がある。977は甕の把手片である。

S X J 227出土土器(図版第249) S X J 227からは土師器壺・甕・高杯が出土した。

壺979は「く」の字形に屈曲する口縁部で、口縁端部は尖りぎみにおわる。体部は欠損しているが、球形になるものと思われる。甕980は単純「く」の字形に屈曲する口縁部で、口縁端部は尖りぎみにおわる。高杯981は水平ぎみにのびる杯底部から斜め上方に立ち上がるもので、口縁端部は尖りぎみにおわる。

S X J 226出土土器(図版第249) 土師器甕が出土した。987は肩部の張った球形に近い体部で、口頸部は直立ぎみに立ち上がる頸部から口縁部に続き、口縁端部は内側に肥厚して内傾する面をつくる。

S X J 228出土土器(図版第249) 土師器甕989が出土した。体部最大径が中位よりもやや上にあり、口縁部は「く」の字形を呈し、口縁端部は内側に肥厚して内傾する面を作っている。

(4) S T J 上面の出土土器

J地点ほかでは方形周溝墓の周溝の上面精査に際して明らかに方形周溝墓には伴わない遺物が出土した。これらの遺物は本来、包含層として取り扱うべき資料ではあるが、ここでは方形周溝墓(S T)の上面として記述を行う。

S T J 129上面出土土器(図版第249) S T J 129の上面からは須恵器杯身982が出土した。982は内傾ぎみに立ち上がる口縁部で、受け部は斜め上方にのびる。体部外面の2/3の範囲にヘラケズリを施している。

S T J 52上面出土土器(図版第249) S T J 52上面からは土師器鉢983が出土した。983は丸底ぎみの底部で、体部は斜め上方に広がり、口縁端部は直立ぎみとなる。底部外面にはヘラケズリ調整を施している。

S T F 187上面出土土器(図版第249) S T F 187上面からは土師器高杯の脚部片が出土した。990は杯部を欠損しており、脚部は中空の柱状部から裾開きとなる。

S X F 217上面出土土器(図版第249) S X F 217上面からは高杯脚部988が出土した。988は中空の柱状部で裾開きとなる。

S T J 19上面出土土器(図版第249) S T J 19上面からは土師器高杯が出土した。984は水平ぎみにのびる杯底部から斜め上方に外反ぎみに長く立ち上がるものである。

S T J 99上面出土土器(図版第249) S T J 99上面からは土師器壺・甕が出土した。985は撫で肩の体部で、口縁部は斜め上方に直線的に立ち上がるものである。高杯986は水平ぎみの杯底部から斜め上方に長く立ち上がるもので、口縁部は外反ぎみにのびる。

S T J 124上面出土土器(図版第249) S T J 124上面からは土師器高杯、韓式土器が出土した。土師器高杯991は深い椀状を呈するもので、口縁端部はわずかに外反する。993は浅い椀状を呈す

るもので、口縁端部は直立ぎみとなる。995も杯部上半を欠損しているが993と同形状のものと思われる。994は中空の柱状部で、裾開きとなる脚部片である。992は土師質で、体部外面に格子目状のタタキを施した韓式系土師器と思われるものである。

STJ97上面出土土器(図版第249) STJ97上面からは土師器高杯が出土した。高杯996は杯底部から内湾ぎみに立ち上がる、やや深めの椀状を呈するものである。

STJ60上面出土土器(図版第249) STJ60上面からは土師器鉢が出土した。997は丸底の底部で、口縁部は直立ぎみに立ち上がる椀状を呈したものである。

STJ84上面出土土器(図版第249) STJ84上面からは土師器椀が出土した。998は丸底ぎみの底部で、口縁部は直立ぎみに立ち上がり、口縁端部は尖りぎみにおわる。

STJ98上面出土土器(図版第249) STJ98上面からは須恵器高杯の脚部片が出土した。999は裾開きとなるもので、柱状部と脚部の境には断面三角形状の段を設け、脚端部は断面三角形状に上方に肥厚している。

STJ100上面出土土器(図版第249) STJ100上面からは須恵器壺の口縁部片が出土した。1000は直立ぎみに立ち上がる頸部から口縁部は外反ぎみとなり、口縁端部は外方に肥厚して面を作っている。

STJ03上面出土土器(図版第249) STJ03上面からは須恵器短頸壺が出土した。1001は、丸底ぎみの体部下半から体部上半は口縁部に向かって直線的に内傾するもので、口頸部は直立ぎみに短く立ち上がる。体部外面下半にはヘラケズリが認められる。

(5) 溝状遺構の出土土器

溝状遺構は遺構編で記述したように各地区にまたがるものが多く、各地点で若干出土遺物の様相が異なる。ここでは、各地点にまたがる溝状遺構については、地点別に分けて説明を行う。

SDF22出土土器(図版第250・251) SDF22は遺構で記したように、F～I地点にのびる総延長40mの溝であり、多種の遺物が出土した。

F地点では、須恵器杯蓋・甕・壺、土師器甕・高杯などが出土した。

須恵器杯蓋1002・1003は、水平ぎみの天井部から、口縁部は垂下するもので、天井部と口縁部の境には断面三角形状の段を設けている。口縁端部内面には沈線状の段を設けている。天井部外面には2/3の範囲にヘラケズリを施している。甕1015は、筒状の頸部から口縁部は外反ぎみとなり、口縁端部は外方に肥厚して下方に突出する面を設けている。口縁部外面には中位部分に突出ぎみの段を設け、その上・下に一帯の波状文を加飾している。1016は、「く」の字形に屈曲する口縁部片で、口縁端部は上方に肥厚している。1017は、甕あるいは壺の口頸部片で、口頸部の中位に鈍い段を設け、その下方に一帯の波状文を加飾している。1018は壺の体部片で、やや扁球形の体部で体部最大径付近に一帯の波状文が認められる。

土師器甕1033は、「く」の字形に屈曲する口縁部で、口縁端部は内側に肥厚して内傾する面を作っている。高杯1036は水平ぎみにのびる杯底部片、1034は裾開きとなる脚部片である。1035は内湾ぎみに立ち上がる杯上半部で、口縁部はわずかに外反し、尖りぎみにおわる。

G地点からは、古墳時代中・後期の土器とともに、一部奈良時代の土器も出土した。

須恵器杯蓋1004～1006は、水平ぎみの天井部から口縁部が垂下するもので、口縁端部が尖りぎみにおわるもの(1005)と、平坦面をつくり、わずかに外方に肥厚するもの(1004・1006)がある。天井部と口縁部の境には断面三角形の段を設け、天井部外面の2/3の範囲にヘラケズリを施している。杯蓋1007は丸みをもつ天井部で、天井部と口縁部の境の段は鈍い。壺1025・1026は口頸部片で、筒状の頸部から口縁部は外反するもので、口頸部外面には2条の鈍い突帯状の段を設け、その間に波状文を施したものである。1037は、筒状の頸部で口縁部は外反し、口頸部外面にはカキメを施している。無蓋高杯1027は腰部を形成するもので、口縁部はわずかに外反ぎみとなる。杯部上半には断面三角形の2条の突帯と、その下方に波状文を加飾している。脚部は裾開きとなり、脚端部は上方に肥厚して、丸みをもっておわっている。1039は同形状の脚部片である。1038は内湾ぎみに立ち上がる杯部で、口縁部と杯部の境には鈍い段を設けている。

土師器壺1010・1019は、体部下半に体部最大径がある扁球形の体部で、口縁部は斜め上方に直線的に立ち上がる。甕1030は、単純「く」の字形に強く外反するものである。1028は単純「く」の字形に屈曲し、口縁端部は水平ぎみの面を作っている。1029は「く」の字形に屈曲する頸部から口縁部は斜め上方に立ち上がる複合口縁形を呈したものである。1008・1009は単純「く」の字を呈し、口縁端部は上・下方にわずかに肥厚して面を作っている。1020は、甕の把手片である。1011は、丸底ぎみの底部で、口縁部は内湾ぎみに立ち上がる。体部外面はヘラケズリを施している。高杯1031・1032は水平ぎみに立ち上がる杯底部から、斜め上方に直線的に立ち上がる。高杯1012・1013は椀状を呈する杯部で、口縁端部は内湾ぎみとなる。脚部片1014・1022・1023は、中空の柱状部で裾開きとなるものである。1043は甑の口縁部片で、口縁端部は水平面をつくり、外面には強いナデにより、わずかに凹みをつけている。1024は、須恵器杯あるいは皿の底部片、1041・1042は、杯あるいは椀の底部片であり、いずれも上面遺物と思われる資料である。

H地点からは、須恵器杯蓋、土師器甕が出土した。

須恵器杯蓋1044は、丸みをもつ天井部と思われるもので、口縁部は垂下し、天井部と口縁部の境の段は鈍い。口縁端部内面には、沈線状の段を設けている。土師器甕1045は、単純「く」の字形を呈するもので、口縁端部はわずかに内側に肥厚している。1046は体部最大径が上位にあり、口頸部はわずかに内傾する頸部から口縁部は外反するものである。

I地点では須恵器甕、土師器壺・甕・高杯が出土し、土師器の大半はS H I 109と重複した位置で出土した。

須恵器甕1047は、口縁部片で口縁部上半には断面三角形の突帯がめぐる。

土師器壺1048は「く」の字形に屈曲する頸部から、口縁部はわずかに内湾したのち、外反する複合口縁形を呈するものである。甕1049～1052・1057・1059は「く」の字形を呈する口縁部で、口縁端部が上方にわずかにつまみ上げるもの(1049・1052・1059)と内側に肥厚して内傾する面をつくるもの(1050・1051・1057)がある。1053～1056は高杯脚部片である。

皿1058は、底部から斜め上方に短く立ち上がる体部をもつものである。1058は上面遺物が混在

したものと思われる。

S D F 147出土土器(図版第251) S D F 147からは須恵器杯身・杯蓋・壺、土師器壺・鉢・竈などが出土した。須恵器杯身1060～1063・1067は内傾する長い口縁部で、口縁端部には沈線状の段を設けている。受け部は斜め上方に短くのびる。底部外面の2/3の範囲にヘラケズリがおよんでいる。杯蓋1064・1065は、水平あるいは丸みをもつ天井部から口縁部は垂下するもので、口縁端部内面には沈線状の段がめぐる。壺1069は倒卵形を呈する体部で、口頸部は筒状の頸部から口縁部はゆるく外反するもので、口縁端部は外方に肥厚させ、面を作っている。体部上半にはカキメがある。

土師器壺1068は倒卵形の体部で、口頸部は斜め上方に直線的に立ち上がるものである。鉢1071は、直立ぎみに立ち上がる体部から口縁部は斜め上方に外反し、口縁端部外面は内・外方に肥厚させて面を作っている。1071は下層の遺物が混在したものと思われる。1070は中空の柱状部で裾開きとなるものである。椀1072は平底ぎみの底部から内湾ぎみに立ち上がる口縁部へ続くもので、体部外面にはナデ調整を施している。竈1073は、体部下半から内湾ぎみに立ち上がり、口縁部は直立ぎみとなる。体部上位には2か所の把手をもつ。背部には円形穴を開けている。

S D G 59出土土器(図版第252) S D G 59からもほかの溝状遺構と同様、古墳時代中・後期から奈良時代の遺物が出土している。

須恵器杯身1079～1082・1109・1110・1113は、断面三角形の短い口縁部で、受け部は斜め上方に直線的に立ち上がるもの(1080・1109・1110・1113)と、屈曲しながら立ち上がるもの(1081・1082)がある。底部外面の1/2の範囲にヘラケズリを施している。杯蓋1074～1076は水平あるいは丸みをもつ天井部で、口縁端部内面には短いかえりをつけている。天井部中央にはつまみを貼り付けている。蓋1077・1078・1107・1108は、杯身あるいは杯蓋か厳密には決定しえない資料である。丸みをもつ天井部から口縁部は、外反ぎみとなる。甕1091は、外反ぎみに立ち上がる口頸部で、口縁端部は内側に尖りぎみにおわる。1092・1111は、直立ぎみに立ち上がる頸部から、口縁部はゆるく外反するもので、口縁端部は内側に尖りぎみにおわる。1086は、丸みをもつ底部から、直線的に斜め上方にのびる口縁部へ続くもので、口縁部外面には沈線がめぐる。1083は横瓶あるいは平瓶の口縁部片、1084は横瓶の体部上半・肩部である。1112は、直立する体部上半から狭い頸部にむかって直線的に内傾する体部片であり、壺と思われる。1087は高台が高く、体部の深い杯である。

土師器皿1089・1090・1097・1098は、丸みをもつ底部から内湾ぎみに立ち上がる口縁部へ続くもので、口縁端部は外方にわずかに肥厚しておわる。1090の外面はていねいな横ヘラミガキを施している。1097・1098は、口縁端部をわずかに外反させている。1098の内面には螺旋暗文+1段の放射状暗文がある。椀1093～1096は、丸みをもつ底部から内湾ぎみに立ち上がる口縁部へ続くもので、口縁端部は尖りぎみにおわる。1099・1100・1106は、単純「く」の字形を呈したものである。甕1115は、底部を欠損しているが、内湾ぎみに立ち上がる体部から口縁部に外反するもので、口縁端部は尖りぎみにおわる。体部外面の2か所には把手を取り付けている。高杯1102～

1105は、浅い椀状を呈したもので、脚部は裾開きとなる。鉢1101は、砲弾形を呈したもので、口縁部は直立ぎみとなる。口縁部には1か所、注ぎ口のための片口がある。

SDF 88出土土器(図版第253) SDF 88からは、須恵器壺の口縁部片が出土した。1116は、直立ぎみに立ち上がる頸部から外反する口縁部へ続くもので、口頸部外面には4条の断面三角形の鈍い段と、その間に波状文を加飾している。

SDF 108出土土器(図版第253) SDF 108からは、ジョッキ形須恵器が出土した。1117は椀状の体部から口縁部は直立ぎみに立ち上がるもので、口縁部と体部の境には鈍い段を設け、体部外面には波状文を施している。体部には縦位の把手が付いていたものと思われる。

SDF 01出土土器(図版第253) SDF 01からは須恵器無蓋高杯、土師器高杯・鉢などが出土している。無蓋高杯1120は、杯部と口縁部の境に段を設けている。土師器高杯1119は中空の柱状部から裾開きとなる脚部である。鉢1118は、斜め上方に直線的に立ち上がる体部上半から、そのまま口縁部となり、口縁端部は内傾する面を作っている。

SDF 18出土土器(図版第253) SDF 18からは土師器器台・高杯が出土した。1121は、外反ぎみにのびる受け部から、口頸部は屈曲して短く立ち上がる器台片と思われる。高杯1122は、水平ぎみにのびる杯底部から体部が斜め上方に長くのびるもので、口縁端部は外反する。脚部は杯底部から裾開きとなる。

SDG 41出土土器(図版第253) SDG 41からは須恵器杯身・杯蓋、土師器高杯・椀・甕などが出土した。須恵器杯身1125・1126は、断面三角形の短い口縁部で、受け部は斜め上方にのびる。底部外面1/2以下の範囲にヘラケズリを施している。杯蓋1124は、丸みをもつ天井部から垂下する口縁部片である。土師器椀1127は、丸みをもつ底部から口縁部は内湾ぎみとなり、口縁端部は外方にわずかに肥厚する。高杯1129は椀状の杯部で、脚部は中空の柱状部から裾開きとなる。甕1128は体部片で、水平ぎみにのびる把手をつけている。

SDG 48出土土器(図版第253) SDG 48からは須恵器杯身・杯蓋、土師器甕・高杯が出土した。須恵器杯身1134は内傾する口縁部で、口縁端部は沈線状の段を設けている。杯蓋1133は丸みをもつ天井部からやや開きぎみの口縁部へ続くもので、天井部と口縁部の境の段は鈍い。土師器甕1131は、「く」の字形に屈曲したのち斜め上方に短くのびる複合口縁形の甕、1132は単純「く」の字形に屈曲したものである。1130は中空の柱状部から裾開きとなる高杯脚部片である。

SDJ 01出土土器(図版第253) SDJ 01の出土土器は古墳時代のものと奈良時代のものが混在している。

須恵器壺1140は体部片で、肩部近くに1条の沈線文と、その下方にヘラ状工具による列点文を加飾している。1138は奈良時代以降の須恵器杯Aである。土師器甕1135・1136・1139は単純「く」の字形を呈するもので、口径27cm以上のもの(1135・1136)と、口径17.2cmを測るもの(1139)がある。1137は中空の柱状部で、裾開きとなる高杯脚部片である。

SDJ 06出土土器(図版第253) SDJ 06もSDJ 01と同様、古墳時代中・後期の遺物を主体とするが、一部奈良時代の遺物が含まれている。須恵器杯身1143～1146は、内傾するやや長い口

縁部(1143)から、断面三角形の短い口縁部となるもの(1146)までが混在している。杯蓋1141・1142は、水平ぎみの天井部からやや開きぎみの口縁部へ続くもので、天井部と口縁部の境の段は鈍い。壺1149は、直立ぎみに立ち上がる頸部から口縁部は外反し、口縁端部は外方に肥厚して面を作っている。甕1151は外反する口縁部で、口縁端部を下方に肥厚させて面を作っている。1153は、扁球形の体部から直立ぎみに長くのびる頸部へと続く臚である。1154は大形の甕の体部片である。1148は奈良時代以降の須恵器杯Bである。土師器高杯1150は斜め上方に高くのびる杯上半部、1152は中空の柱状部で裾開きとなる脚部である。

S D H02出土土器(図版第261) S D H02出土土器には、古墳時代前期の遺物とともに、一部須恵器が混在している。土師器壺1406は、斜め上方に直線的に立ち上がる直口壺の口縁部片、1404・1411は「く」の字形に屈曲する口縁部で、口縁端部は内側に丸く肥厚するもの(1404)と内傾する面をつくるもの(1411)がある。1407～1409は底部片で、1407では、外面に細かいタタキを施している。1412・1413は、須恵器口縁部片で、1412は斜め上方に直線的にのび、口縁端部は尖りぎみにおわる。1413は、直立ぎみに立ち上がる頸部から口縁部は外反ぎみとなり、口縁端部は上方に肥厚して面を作っている。口縁部には、1条の断面三角形の鈍い突帯がめぐる。

S D H22出土土器(図版第261) S D H22からは土師器甕・高杯片が出土した。甕1414は輪高台で、体部外面にていねいなタタキメが認められる。1415は、高杯あるいは器台の柱状部である。

S D H06出土土器(図版第261) S D H06は、遺構で記したように、中世以降の流路跡であり、古墳時代の遺物が混在している。1416は古墳時代の須恵器無蓋高杯、1417は壺、あるいは鉢の底部片、1418～1420は杯あるいは碗の底部片である。1427～1429は壺(瓶子)の口縁部片、体部片であり、1429の底部は回転糸切りによる。1421・1422は、いわゆる「て」の字口縁の土師皿、1423は口縁端部は二段調整による土師皿、1424・1425は黒色土器片である。また、S D H06からは平瓦片(1435)が数点と土馬が出土している。土馬1434は馬具などを表現しない裸馬である。

砂利河川出土土器(図版第261・262) 砂利河川とは、前述のS D H06と、その北側で検出したS D F22を含んだ旧河道であり、内部から出土した遺物は、古墳時代中・後期のものから、平安時代までのものが混在する。

(石井清司)

S D H08出土土器(図版第260) S D H08からは、須恵器杯身B、土師器杯C・皿A・甕A・甕Cが出土した。

須恵器杯B1387の胎土はやや緻密で、色調は淡灰色を呈する。体部から口縁部にかけてわずかに内湾し、高台も外にやや強く踏ん張っている。土師器皿1395の胎土はやや緻密で、色調は淡橙褐色を呈する。口縁端部の折り返しは弱く、口径と器高からしてもあまり見られない形態である。1388は胎土が粗く、色調も暗橙褐色で、ほかの土器とは様相が異なる。内面の暗文は、磨滅のため一部しか認められないが、一段と考えられる。甕1394は、頸部から口縁部にかけて大きく開き、口径が胴径より大きくなっている。胎土はやや粗く色調は淡褐色を呈する。1403も1394と同様の形態で、体部内面にはヨコハケが認められる。

出土土器のなかで最も注目すべきものは、以下に報告する墨書人面土器である。一般に「墨書人面専用土器」と言われる壺は、底部を型押しして外面に粘土紐の巻き上げ痕を残すが、今回出土した墨書人面土器は、すべて外面にハケが認められ、球形に近い胴部をもつ甕に属する。1392・1396～1398の胴下半部内面に無文叩きが、1393と1401の胴下半部内面に青海波叩きの技法が確認できる。1389・1390・1397～1399・1401・1402の内面には、頸～胴部内面にかけて板ナデ痕がある。

1392と1396の器形は全く異なるが、胎土はともに硬質で、色調も酷似している。1400・1401は、ほかの土器と比較すると底部が尖りぎみであるという点で共通しているが、内面調整や胎土が異なる。1398は胴部下半で顕著に屈曲し、北河内地域で出土する甕Aの形態に酷似している。1393だけが、ほかの甕Aと異なる淡灰褐色を呈したきめのやや細かい胎土である。この胎土の状況や胴下半部内面に青海波叩きの当て具痕が見られる点などは、北河内産の土器の様相を強く示している。

出土した11個体には、墨書のあるもの(1396～1402)とないもの(1389～1393)とがある。甕Aに描かれる墨痕は全体的に磨滅して確認しづらいが、外面の墨書の形態は大きく2分類できる。1397～1399は、明確な眉・目・顔の輪郭が表現され、1396・1400～1402は、顔とはきわめて判断し難いような円弧が描かれる。1396にのみ、口縁端部をなぞるような墨書が見られる。

1401の胴部内面全体には2次的な被熱の痕跡が認められ、甕の中で何かを燃やすなどの祭祀的行為を行ったとも考えられる。また、1393は焼成後、底部が外側から意図的に穿孔されている点から、祭祀具としての性格をもっていたとも考えられる。

ところで、これら遺物の出土状況であるが、1387の須恵器杯身は例外として、墨書人面土器を含む甕AはすべてSDH08の西寄り、それ以外のもの(1388・1394・1395)はすべてSDH08の東寄りで検出されている。さらに甕Aの中でもまとまりが見られ、北側寄りでは1392・1398と1387・1397が、そこから少し南に下がった地点で1393が、さらに同じ距離で南に下がった地点から、1396・1400・1401が点々と北から並んで出土している。

今回出土した墨書人面土器は、平城宮跡や長岡宮跡においてよく見られる壺B・Cと言った、いわゆる「墨書人面専用土器」ではなく、甕Aに墨書するものである。共伴する須恵器や土師器は、総体的に奈良時代後半の様相を示しているが、これらの資料が長岡京遷都直前における大祓の祭祀具として使用された可能性も否定できないであろう。

(尾上 忍)

(6) 包含層の出土土器(図版第248・254～259)

F地点では須恵器杯身・杯蓋・壺・甕・高杯・甕・ジョッキ形土器、土師器甕・壺・高杯などが出土している。そのうち、須恵器壺1187は体部最大径が中位よりやや上部にあり、口頸部は直立ぎみの頸部から外反する口縁部へつづくもので、口頸部および体部を断面三角形の鈍い突帯や沈線文間に波状文で加飾している。1191は球形に近い体部で、外反する口頸部へつづき、口頸部外面には2条の突帯と、その上・下に波状文で加飾している。

土師器甕(1217)は倒卵形の体部で、口頸部は「く」の字形に屈曲したのち、わずかに外反し、口縁端部は内側に肥厚している。底部は欠損しているが、裾開きの脚部があったものと思われ、東海系S字口縁甕の範疇に入るものと思われる。

I地点では中央部の凹み状の部分から比較的まとまって出土した。凹み状の部分からは須恵器杯身(968)、土師器甕(971・973)・椀(970)が、ほぼ完形に復原できる状態で出土した。

G地点もF地点と同様、古墳時代中期以降の須恵器杯・杯蓋・甕、土師器甕・壺などがある。特記すべきものとして、縄文土器(1337)などがある。1337の腹部は縄文を、底部近くは格子タタキを施している。また時期は新しくなるが沈線文や滴状・竹管文で加飾した新羅系土器(1385)があり、同様のものがI地点の包含層(1384・1386)からも出土している。

奈良・平安時代以降のものはF・I・G地点の包含層中に散在し、土師器皿1325・1326は、「て」の字口縁の特徴をもつが、屈曲が鈍く器壁も厚いことから、平安時代中期のものである。この土師皿と近接した時代のものとして、須恵器鉢1311などがある。1331～1339は白磁椀、1345は須恵器円面硯、1346は須恵器風字硯で、法量などから平安時代以降のものと思われる。ただ、下植野南遺跡の出土遺物のうち、官衙的なものである風字硯、円面硯各1点のほか、須恵器蓋に転用硯と思われるものが1点ある程度で、その出土量は極少である。

(石井清司)

久我畷関連の出土遺物(図版第259) I地点では、久我畷関連遺構から少量の土器が出土した。久我畷北側溝と推定しているSDI03からは「く」の字形に屈曲する土師器甕(1368)、須恵器杯B(1367)、篠産緑釉陶器の底部片(1369)のほか、14世紀代と思われる瓦器椀(1370)が出土した。同じ北側溝と推定しているSDI122からは14世紀代の瓦器椀(1371～1374)のほか、白磁底部片(1375)が出土している。久我畷南側溝と推定しているSDI02からは9世紀後半と思われる須恵器杯B(1363・1366)、杯蓋(1364・1365)の細片が、同じく南側溝と推定しているSDI106からは古墳時代の土師器片(1360・1362)のほか、9世紀代の須恵器杯B(1361)の細片が出土している。

I地点の北端部I-1トレンチでの、中世以降の久我畷に関連した土堤状の高まりでは検出できなかったが、その両側の水田面と思われる水平堆積層からは、14世紀代の中国製青磁雷文椀(1377)、16世紀代の青磁椀、15世紀の備前焼播鉢(1381)、17世紀代の信楽焼播鉢(1382)、肥前磁気染付椀(1379)などが出土した。

(引原茂治)

2. 製塩土器(図版第263)

下植野南遺跡から出土した製塩土器の総量は、同時期の集落遺跡の出土量と比較すると少量である。しかし、神戸市域や和歌山市域を含む大阪湾岸一帯から搬入された土器も多く見られる。以下、図化できた製塩土器を中心に形態的特徴や胎土・焼成・色調などについて記述しておきたい。なお、いわゆる蛸壺形を呈する土器を丸底I式、椀形を呈する土器を丸底II式として慣例に従い分類するが、丸底I式においても、体部の器高が高い個体については、丸底Ia式として分

類した。この丸底Ⅰa式は、大阪湾岸の神戸市域を中心に分布する土器である。

S H G 54出土製塩土器(1495～1497) 1495は、右下がりの平行タタキで成形する。砂粒は少なく、破断面は黒褐色、外表面は淡灰褐色である。1496は、横方向と右下がりの平行タタキで成形する。砂粒は少ない。1497は、横方向のタタキメが観察できる脚台である。1495～1497は、接合点はないが、同一個体と考えられる。脚台内面には、指頭圧痕が観察でき、ほかの基本的な所見は、1495・1496に共通している。当該土器の脚台は、それ自体での自立が可能な形状を保持していることから、兵庫県引野遺跡分類の脚台Ⅲ式(注27)の範疇で捉えることができる。また、脚台Ⅲ式から形骸化が著しく進行する脚台Ⅳ式への移行時期は、布留併行期でも新段階に比定されていることから、当該資料は布留中段階以前に比定し得る。

S H F 111出土製塩土器(1498・1499) 1498は、器壁が薄く、胎土に砂粒をほとんど含まず、淡褐色を呈している。1499は、横方向の平行タタキにより成形しており、器壁は薄く、灰色を呈している。両者には共通する要素はみられるが、搬入元は特定できない。

S H F 115出土製塩土器(1500～1512) 1500・1501は、丸底Ⅱ式に分類でき、砂粒をほとんど含まず、淡赤褐色および桃色を呈している。焼成は堅緻である。1503・1506は、外面に平行タタキメが観察でき、砂粒を含み、淡赤褐色ないしは淡褐色を呈している。一方、1502・1504・1505・1507～1511は、砂粒を一定量含み、器壁が厚いなど共通の要素がある。当該遺構からは、比較的タタキメを有する土器片が多く出土しており、紀淡海峡付近の製塩土器の出土量はわずかである。

S H F 07出土製塩土器(1513) 1513は、土器底部に近い部位であるため、平行タタキメに切り合いがみられる。砂粒を多く含み、色調は淡褐色である。タタキメを有し、粗い胎土などの諸特徴から、大阪湾岸の神戸市域からの搬入土器の可能性はある。

S H F 39出土製塩土器(1514・1515) 1514は、丸底Ⅱ式に分類でき、砂粒をほとんど含まず、淡赤褐色を呈している。西庄遺跡に代表される紀淡海峡付近の製塩土器である。1515は、不明瞭ではあるが、タタキにより成形されており、砂粒を一定量含み、淡褐色を呈している。

S H F 37出土製塩土器(1516～1521) 1516・1517・1521は、典型的な丸底Ⅱ式に分類でき、砂粒をほとんど含まず、淡赤褐色を呈している。紀淡海峡付近から搬入された製塩土器である。また、1519・1520は、杯形を呈する形態的特徴を有しており、丸底Ⅱ式に分類できる。前者と同じく紀淡海峡付近から搬入された製塩土器である可能性が高いが、器高に対する口径の比率が高いため、1516・1517・1520と同様の認定にはやや疑義がある。ここでは、紀淡海峡を除外した大阪湾岸南部からの搬入土器としておきたい。なお、当該遺構からは、紀淡海峡付近からの搬入土器が、図化しえなかった個体も含め、大半を占める。S H F 37が陶邑編年MT 15型式併行期に比定できることと、その出土傾向に何らかの関係が想定できよう。

S H F 40出土製塩土器(1522・1523) 1522は、平行タタキにより成形しており、微砂粒を多く含み、丸底Ⅰ式に分類できる個体である。一方、1523は、タタキによる成形であり、器壁が厚い。色調は淡赤褐色である。

付表7 製塩土器集計表

遺構名	破片数	備 考
SHF06	10	
SHF07	84	貝殻条痕
SHF08	19	
SHF10	31	平行タタキ、砂粒系、胎土は外側が暗茶褐色で、内面は黒色
SHF111	58	赤褐色、丸底Ⅰ式、紀淡海峽西ノ庄、平行タタキ
SHF113	22	西ノ庄、紀淡海峽
SHF115	118	丸底Ⅰ式・平行タタキ、黒褐色＋白色砂粒、大阪湾四条畷周辺、神戸市域?
SHF121	13	
SHF122	8	
SHF123	98	
SHF150	4	
SXF151	2	
SHF19	26	
SHF20	17	平行タタキ
SHF36	5	
SHF37	34	
SHF38	15	灰色硬質白色砂粒
SHF39	34	神戸市域か
SHF40	140	
SHF41	32	
SHF61	42	
SHF64	58	
SKF67	1	
SKF85	4	
SHG33	9	
SHG54	1	
SHJ191	4	

遺構名	破片数	備 考
SHJ193	1	
SHJ194	1	
SKF04	5	
SKF109	3	紀淡海峽西ノ庄
SKF27	4	
SKF28	1	
SKF34	10	
SKF47	18	紀淡海峽西ノ庄
SKF58	1	
SKF78	10	
SDF147	185	
SDF22	2	
SKF44	11	
SRH06	2	
SKG10	1	
SKJ154	2	
SKJ54	4	淡黒褐色硬質白色砂粒
SPF103	18	
SPF14	1	
SPF149	1	
SPF168	20	
SPF169	1	
SKF17	2	
SKF72	1	
SKF86	16	大阪湾岸
SPF95	1	
SPJ206	1	
SDF01	3	
SDF98	2	
包含層	227	灰白色・暗赤褐色、平行タタキ
合計	1444	

S B F 91出土製塩土器(1524・1525) 残存状況が著しく不良であるため、口縁部の傾斜角度など、不明な点が多い。微砂粒を含み、淡褐色を呈している。1525は、丸底Ⅰ式に分類できる個体であり、微砂粒を含み、淡褐色を呈している。

S K F 44出土製塩土器(1526) 半截した卵形を呈しており、器壁は厚く、微砂粒を含み、淡褐色を呈している。形態的な特徴から大阪府四条畷市域から出土する製塩土器に近似している。

S K F 47出土製塩土器(1527～1531) 1527は、砂粒をほとんど含まず、淡赤褐色を呈する丸底Ⅱ式に分類できる個体である。紀淡海峽付近からの搬入土器である。1528・1530は、上半部のみの残存であるが、砂粒を多く含み、淡灰褐色を呈することから、大阪湾岸でも神戸市域の製塩土

器に近似している。形態的には丸底Ⅰa式として分類しうる個体である。1531は、丸底Ⅰ式に分類できるが、平底であることに特徴がある。

S K F 28出土製塩土器(1532・1533) 1532は、微砂粒を含み、淡赤褐色を呈する丸底Ⅱ式の土器である。紀淡海峡付近からの搬入土器である。1533は、外表面にタタキメを有し、胎土が緻密であり、器壁も薄く、淡灰褐色を呈する。

S K F 109出土製塩土器(1534) 典型的な丸底Ⅱ式の製塩土器である。紀淡海峡付近からの搬入土器である。

S K J 154出土製塩土器(1535) 器壁は薄いものの、砂粒を多く含む。大阪湾岸でも神戸市域からの搬入土器である可能性がある。

S D F 147出土製塩土器(1536) 胎土は精良であり、淡褐色を呈している。神戸市域に散見できる特徴を有している。

S X F 213出土製塩土器(1537) 口縁部が内側に傾斜する特徴をもち、丸底Ⅱ式に分類できる個体である。内面に貝殻条痕がなく、搬入元の特定には到らない。

F 地点包含層出土製塩土器(1538～1541) 1538は、器壁が薄く、硬質である。1539・1540は、胎土などの諸特徴から神戸市域に多く見られる特徴を有しており、丸底Ⅰa式に分類できる。1541は、精良な胎土を有し、淡赤褐色を呈する。

以上が、図示しえた製塩土器の所見であるが、最後に、竪穴式住居跡から出土している製塩土器全般の傾向について概観しておきたい。

製塩土器は、器壁がきわめて薄いことから、著しく細片化する傾向が強い。そのため、破片総数は、搬入された製塩土器の絶対数を把握するうえで、絶対的な根拠にはならない。また、調査時における微細片の採取は、現況の発掘調査の精度では、完全に行うことは不可能であり、現在採取した製塩土器の出土総量などは、あくまで出土の傾向として捉えなければならない。

ここでは、以上の認識を念頭におき、下植野南遺跡から出土した製塩土器の出土傾向をまとめにかえて概観しておきたい。

下植野南遺跡から出土した製塩土器の総量は、1,444点である。時期的には陶邑編年MT15型式併行期の竪穴式住居跡からの出土量が最も多い。一方、搬入元別では、全ての製塩土器の搬入元を特定できない現況ではあるが、200余点の紀淡海峡付近の製塩土器を同定できた。全体の11%ではあるが、交易による当該地域からの搬入を想定できる。また、神戸市域からの搬入と思しき製塩土器は、微量ではあるが同定するに到っている。委細は、考察に譲るが、京都府八幡市内里八丁遺跡では、搬入元の特定はできないが、一地域から搬入される傾向があり、その点において下植野南遺跡における製塩土器のあり方とは、大きな相違がある。多地域からの搬入を認めることができる下植野南遺跡と一地域からの搬入のみ確認できる内里八丁遺跡では、集落の生成過程における生産力に著しい違いが認められる。また、この傾向は、出土する土器や石製品の出土総量にも同じ傾向を見出すことができる。

このように下植野南遺跡から出土した製塩土器は、竪穴式住居によって構成される集落の属性

を検討するうえで、基本資料として重要であり、今後、ほかの遺跡との比較検討が待たれる。

なお、本稿は、松尾史子の観察および分類の基礎作業を基層に、小池が文章化したことを附記しておきたい。

(小池 寛)

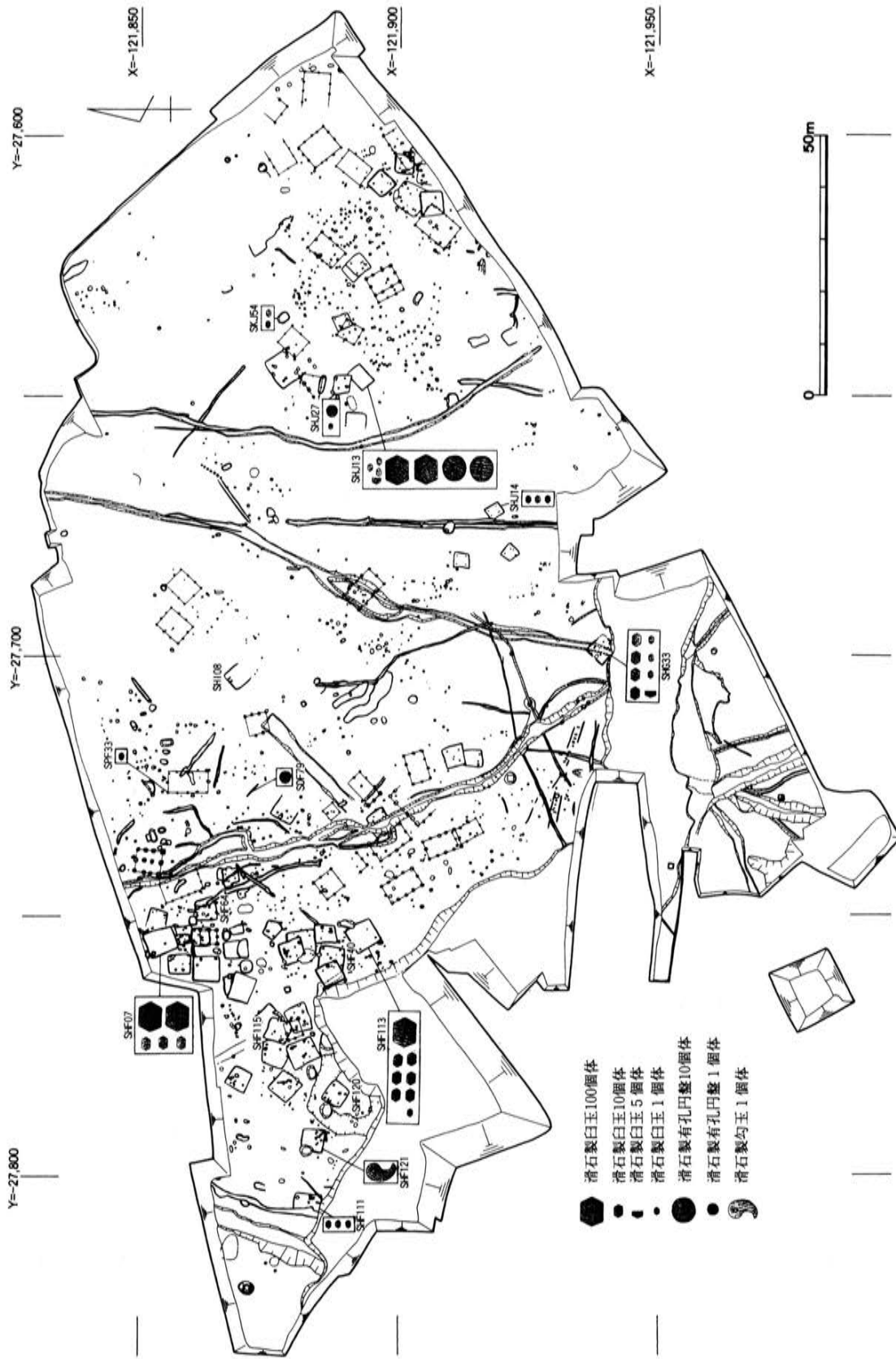
3. 石製模造品(図版第264)

石製模造品が出土した竪穴式住居跡には、SHF07・19・111・113・121、SHG33・54、SHJ13・14・27がある。竪穴式住居跡から出土した石製模造品全点を計測・観察し、形態や研磨箇所について分類を行い、製作技法の違いを明らかにすることを試みた。ここで取り上げた石製模造品は、調査中に竪穴式住居跡から取り上げたものと調査後にサンプリングした埋土から水洗中に出土したものがある。石材の識別方法は、色調の違いによって判断した。また、観察者の違いによる認識誤差を無くすため、観察・計測を一人が行った。

石製模造品とは、滑石・蛇紋岩などの軟質な石材を主として利用し、器物を模造した古墳時代の祭具の1種である。学史的には碧玉を材質とする腕輪形石製品(鍬形石・車輪石・石釧)などのいわゆる石製品と区別するのが通例である。ただし、石製模造品は時期が降るにつれて粗製のものが多く見られるようになり、模造の対象が明確でないものも多い。下植野南遺跡出土の石製模造品には勾玉・剣形品・有孔円板・管玉・白玉がある。出土遺構は付表8のとおり、溝からの出土例もあるが、大半は竪穴式住居跡から出土したものであり、共伴遺物から『陶邑古窯址群』の須恵器編年によればMT15型式に該当し、暦年代にして6世紀初頭～前半に該当する。なお、後

付表8 石製模造品出土一覧

地区名	遺構名	勾玉	管玉	白玉	有孔円板	剣形品	ガラス玉	土玉
F地区	SHF07			230				
	SHF111			8				
	SHF113			182				
	SHF121	1						
	SBF92			1				
	SDF79				1			
	包含層	1		2			1	1
G地区	SHG33			54				
	SHG54		1	5				
	包含層	1		43				
J地区	SHJ13			638	30	7		
	SHJ14			11				
	SHJ27			1	1			
	SKJ54			5				
	STJ95			2				
	SKJ198		1					
	包含層			8	6			
	合計	3	2	1190	38	7	1	1



第11図 石製模造品分布概念図

付表9 石製模造品法量表

単位 mm

番号	種類	遺構名	地区	遺存長	遺存幅	厚さ	孔径	色調	備考
S95	剣形石器	SHJ13	4区	30.0	16.0	2.5	3.0	灰色	側○
S96	剣形石器	SHJ13	4区	27.0	15.0	4.0	2.0	灰色	端○・側斜○
S97	剣形石器	SHJ13	3区	31.0	24.0	4.5	1.3	灰色	端・側○
S98	剣形石器	SHJ13	4区	22.0	17.0	4.0	2.5	灰色	端・側○
S172	滑石製勾玉	SHF121	2区	39.65	19.0	4.8	1.9	暗緑灰色	
S179	滑石製勾玉	SXG327		27.5	17	4	3.5	灰色	
S217	滑石製勾玉	包含層	3-LM	28.9	17.65	7.7	1.85	暗緑灰色	
S174	管玉	SHG54		8.15	3.4		1.35	濃緑灰色	端○
S200	管玉	SKJ198		30.35	4.65		1.8	灰色	端○
S223	ガラス玉	包含層	F地点7-D	6.1	7.75		1.7	青紺色	
S224	土玉	包含層	F地点5-O	5.4	7.8	5.4	1.8	青灰色	

○は研磨痕残存

述するように、碧玉製管玉1点は庄内式～布留式土器を共伴する竪穴式住居跡から出土したのでほかと時期差があるが、ここでは併せて報告する。

下植野南遺跡の石製模造品の石材は、滑石または滑石片岩と推定され、肉眼で暗灰緑色・灰色・白灰色のものに分けられるが、白灰色のものは少ない。また、暗灰緑色の石材は片理が発達しているため平板状の素材を作出し易いが、灰色のものは貝殻状断痕を認める。また、絹雲母や鬆の嵌入したものや、古墳出土の石製模造品に多い光沢のある灰褐色の蛇文岩質のもの、有孔円板に使用されることの多い緑簾片岩や緑泥片岩は見られない。これらの産地は、紀ノ川～吉野川ラインの中央構造線沿い(和歌山か)の露頭から、または転石を採取したものと考えられる。これらは、荒割・形割によって全体の形状を成形した後に、砥石によって研磨して仕上げられる。

図版第264では、遺構別に分けて遺物を図示している。勾玉は全点図示した。剣形品と有孔円板は、破損が激しいものもあり比較的完形に近いものを図示した。白玉は、総数約1,200点近く出土しており全点図示するのは困難なため、後述する分類にしたがって選択的に図示した。

勾玉(S172・179・217) 3点出土している。竪穴式住居跡SHF121から出土した勾玉は1点(S172)のみであり、ほかにSXG327から1点(S179)、包含層から1点(S217)出土している。ここでは、逆「C」字形に置いた側を表面、その逆側を裏面と呼んで、穿孔方向と平行方向を縦、それと直行する方向を横と呼称して、以下の記述を行う。S172は完形で、表面を砥石によって少なくとも6方向に研磨して仕上げる反面、裏面の3方向の研磨とは意識を違えている。側面は縦方向に研磨している。穿孔は片面穿孔で裏面から行っている。S179・217は、表裏面とも2方向に研磨しており、側面は縦方向の研磨を施す。S217は、両面穿孔であり、片面には穿孔を中絶した痕跡が認められる。

有孔円板 有孔円板は38点出土した。すべて双孔であり、片面穿孔である。表裏面を研磨しているものとしていないものがある。研磨していないものは2点あり、研磨しているものと色調

付表10 有孔円板一覧

単位 mm

番号	遺構	地点	最大径	最小径	最大孔径	最小孔径	最大厚	最小厚	色調	備考
S 99	SH J 13	2 区	14.9	13.5	1.45・1.3	1.3・1.2	2.5	2.1	灰色	端・側○
S 100	SH J 13	3 区	17.9	15.8	1.6・1.7	1.5・1.65	4.0	3.1	灰色	端・側○
S 101	SH J 13	4 区	14.8	14.3	1.7・1.4	1.5・1.3	2.5	2.2	灰色	端・側○
S 102	SH J 13	2・4 区セク	17.2	15.7	1.3・1.2	1.2・1.1	2.7	2.4	暗緑 灰色	端・側○
S 103	SH J 13	3・4 区セク	19.65	16.25	1.5・1.6	1.45・1.55	2.5	2.05	暗緑 灰色	端・側○
S 104	SH J 13	1・3 区セク	19.4	16.05	1.25・1.35	1.2・1.3	3.25	2.9	灰色	端○・ 側?
S 105	SH J 13		19.5	18.0	1.5		3.5	1.5	灰色	端・側○
S 106	SH J 13	3 区	22.1	20.2	1.55・1.6	1.5・1.55	3.25	2.3	暗緑 灰色	端・側○
S 107	SH J 13		23.45	20.65	1.55・1.45	1.4・1.4	3.1	2.4	灰色	端・側○
S 108	SH J 13	4 区	23.2	20.8	1.55・1.5	1.35・1.45	3.1	2.5	灰色	端・側○
S 109	SH J 13		22.0		1.5		3.0	2.0	灰色 ?	端・側○ ?
S 110	SH J 13	4 区	21.3	19.8	1.25・1.25	1.15・1.2	2.7	2.2	灰色	端・側○
S 111	SH J 13	3・4 区セク	24.15	20.0	1.6・1.65	1.45・1.6	2.8	2.15	灰色	端・側○
S 112	SH J 13		2.5	20.5	2.0		4.0	3.0	灰色 ?	端・側○ ?
S 113	SH J 13	4 区	26.25	25.0	1.25・1.15	1.2・1.0	3.05	2.0	灰色	端・側○
S 114	SH J 13	4 区	26.7	24.45	1.65・1.7	1.6・1.65	4.05	2.8	暗緑 灰色	端○・ 側?
S 115	SH J 13	3・4 区セク	22.65	22.4	1.7・1.65	1.65・ (1.25)	3.6	1.9	灰色	端○・ 側?
S 116	SH J 13	4 区	26.45	25.4	1.35・1.4	1.3	3.0	1.3	暗緑 灰色	端・側○
S 117	SH J 13	4 区	25.6	17.05	1.5	1.45	3.5	2.85	暗緑 灰色	端・側 ○、側は 斜と横
S 118	SH J 13		28.0	19.5	1.4・1.4	1.35・1.35	3.1	2.7	灰色 ?	端・側 ○?
S 119	SH J 13	3・4 区セク	27.0	26.45	1.45・1.55	1.35・1.45	4.0	2.4	灰色	端・側○
S 120	SH J 13	4 区	27.45	25.5	1.8・1.85	1.75・1.8	4.2	3.55	灰色	端・側○
S 173	SH J 27	4 区	20.75	18.2	1.75・1.95	1.7・1.75	3.95	1.6	灰色	端○・ 側?
S 218	J 地点包 含層		18.55	15.1	1.4・1.35	1.3・1.25	2.8	1.85	暗緑 灰色	端・側○
S 219	J 地点包 含層		23.85	23.6	1.25・1.4	1.2・1.25	3.1	2.6	暗緑 灰色	端・側○
S 220	J 地点包 含層		28.3	24.75	1.7・1.65	1.6・1.6	4.0	2.75	灰色	端・側○
S 221	J 地点包 含層		26.9	26.2	1.2・1.35	1.15・1.3	3.8	3.1	暗緑 灰色	端?・ 側斜
S 222	J 地点包 含層		29.0	27.8	1.3・1.4	1.25・1.3	2.7	1.8	灰色	端・側○

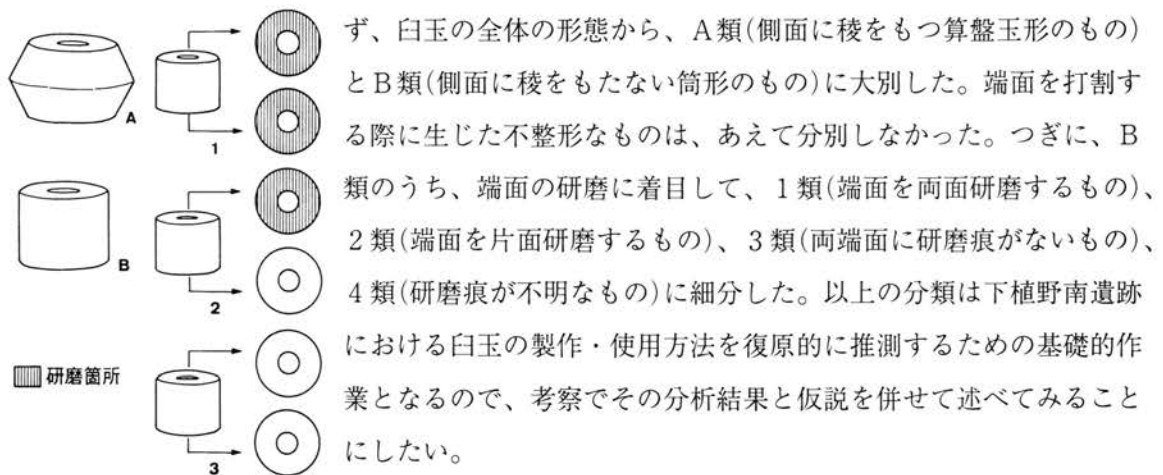
○は研磨長残存

が違うことから、石材に応じて研磨の精粗を変えている可能性が指摘できる。側面は、ほとんどが穿孔方向と平行の縦方向の研磨であったが、1点だけ横方向に研磨したものが認められた。

剣形品 剣形品はS H J 13から7点出土した。すべて扁平なつくりであり、鎬や茎をつくり出した写実的なつくりのものはみられない。穿孔は片面からであり、すべて基部に1孔をもつ。砥石による研磨回数は、磨滅・破損のため明瞭ではないが、ほとんどが単方向であり、2方向に研磨しているものも確認できる。

管玉 2点出土している。竪穴式住居跡S H G 54から出土した管玉(S 174)は、先述したように古墳時代前期にさかのぼる碧玉製のものである。弥生時代の系譜を引く細身のもので、片面穿孔と判断される。もう1点は、S K J 198から出土し、滑石製である。

白玉 白玉は住居から約1,200点近く出土した。これらは、攻玉時の製作技法が白玉全体の形状に反映すると予測されたため、計測・観察にしたがって、以下のように分類(第12図)した。ま



第12図 白玉形態分類模式図

(河野一隆・今林信祐)

4. 鉄器(図版第265)

門田地区では40点の鉄器片が出土した。そのうち、器種がわかるもの23点について図示した。出土鉄器は竪穴式住居跡のほか、土坑、溝、包含層などから出土している。

T 1は、竪穴式住居跡S H F 174出土。丸関をもつ柳葉式の鉄鎌である。茎が一部欠損する。残存長7.2cm、最大幅2.0cmを測る。古墳時代前期に通有なものである。

T 2は9-C・D区包含層、一部、竪穴式住居跡S H I 154上層埋土を含む排土から出土した。鎌身から茎に至る無関の圭頭鎌である。T 1と同様に古墳時代前期初頭前後のものともみられる。茎が欠損する。残存長4.5cmを測る。

T 3は竪穴式住居跡S H I 154出土。茎の一部が欠損する。T 2よりも鎌身が厚く関が明瞭になる小形の圭頭鎌である。残存長3.3cmを測る。

T 4～9までは、古墳時代後期の長頸鎌である。いずれも台籠被をもつ。

T 4はS H F 113出土。無関の柳葉鎌身をもつ長頸鎌である。茎尻を欠損するものの完形に近く、全長15.6cmとなる。T 5はF地点、8-Q区包含層出土。茎の一部が屈曲するが、概ねT 4

付表11 白玉法量表

単位mm

番号	遺構名	出土地点	石材	分類	最大径	最小径	最大孔径	最小孔径	最大厚	最小厚
S 121	SHJ13	4区	灰色系	A-2	4.95	4.0	1.6	1.4	2.4	1.8
S 122	〃	4区	灰色系	A-1	5.15	5.0	2.1	2.0	2.9	1.9
S 123	〃	4区	灰色	A-1	3.9	3.7	1.6	1.5	2.9	2.6
S 124	〃	3区	灰色	A-1	4.7	4.6	1.55	1.45	2.0	1.9
S 125	〃	4区	暗緑灰色系	C-3	5.1	5.0	1.6	1.5	4.0	2.0
S 126	〃	4区	灰色系	A-4	4.4	4.3	1.8	1.7	3.3	2.8
S 127	〃	2区	灰色	A-1	4.95	4.6	1.75	1.7	2.1	1.95
S 128	〃	4区	灰色	A-1	3.9	3.9	1.3	1.3	3.0	2.7
S 129	〃	4区	灰色	A-2	4.55	4.5	1.25	1.1	2.3	1.9
S 130	〃	4区	灰色系	B-1	4.0	3.9	1.7	1.6	2.9	2.8
S 131	〃	2区	灰色	B-2	3.9	3.8	1.45	1.4	2.7	2.0
S 132	〃	4区	灰色	B-1	3.95	3.8	1.55	1.5	2.85	2.75
S 133	〃	4区	灰色	A-2	4.05	3.9	1.75	1.7	3.05	2.35
S 134	〃	3区	灰色	A-1	4.2	4.1	1.7	1.6	3.0	2.6
S 135	〃	4区	灰色系	B-2	4.2	4.1	1.6	1.55	3.55	3.15
S 136	〃	4区	灰色	A-1	4.4	4.25	1.4	1.35	2.9	2.85
S 137	〃	4区	灰色	A-1	5.0	5.0	2.0	1.9	3.7	3.0
S 138	〃	4区	白灰色	C-4	5.35	5.3	1.6	1.55	4.45	2.75
S 139	〃	4区	灰色	B-1	4.75	4.65	1.85	1.65	3.0	2.85
S 140	〃	4区	灰色	B-1	4.9	4.85	1.75	1.65	3.0	2.85
S 141	〃	3・4区 セク	灰色	B-1	4.1	4.05	1.45	1.4	2.05	2.0
S 142	〃	4区	暗緑灰色	C-3	4.05	4.0	1.5	1.45	3.5	1.9
S 143	〃	4区	灰色	C-2	4.25	4.2	1.6	1.5	3.0	1.55
S 144	〃	3・4区 セク	暗緑灰色	B-1	4.25	4.2	1.25	1.2	2.25	2.1
S 145	〃	2区	灰色	B-1	4.3	4.2	1.2	1.15	3.3	2.9
S 146	〃	4区	灰色	C-2	5.1	5.0	1.75	1.7	3.0	2.0
S 147	〃	2区	灰色	B-1	6.15	6.1	1.8	1.75	3.3	2.95
S 148	〃	4区	灰色	A-4	4.1	4.05	1.5	1.4	2.85	2.35
S 149	〃	4区	灰色系	B-2	4.2	4.1	1.55	1.25	2.5	2.45
S 150	〃	4区	灰色	A-1	4.5	4.45	1.75	1.7	2.75	2.4
S 151	〃	4区	暗緑灰色系	B-1	5.4	5.35	1.4	1.3	1.9	1.85
S 152	〃	3・4区 セク	灰色	B-2	4.8	4.7	1.75	1.65	3.5	3.2
S 153	〃	4区	白灰色	C-4	5.8	5.55	1.8	1.6	4.1	2.75
S 154	〃	4区	白灰色	B-3	6.5	5.4	1.7	1.55	3.1	2.2
S 155	〃	4区	暗緑灰色	B-1	4.25	4.2	1.25	1.2	2.5	2.4
S 156	〃	4区	暗緑灰色	B-1	4.2	4.15	1.35	1.25	2.95	2.7
S 157	〃	4区	灰色系	B-1	4.9	4.85	1.75	1.7	3.05	2.9
S 158	〃	4区	暗緑灰色系	B-2	4.8	4.7	2.1	1.95	3.2	2.85
S 159	〃	4区	暗緑灰色系	B-1	4.2	4.1	1.5	1.5	2.7	2.6

S 160	SHJ13	4区	暗緑灰色系	B-1	4.9	4.85	1.5	1.45	3.1	2.8
S 161	〃	2・4区 セク	白灰色	B-4	4.8	4.6	1.35	1.3	2.7	2.3
S 162	〃	2・4区 セク	灰色	C-1	3.9	3.8	1.55	1.4	4.1	2.4
S 163	〃	2・4区 セク	灰色	A-4	4.5	4.45	1.45	1.35	1.85	1.3
S 164	〃	4区	灰色系	B-1	4.0	4.0	1.4	1.4	2.1	1.7
S 165	〃	3区	灰色	B-1	4.8	4.7	1.7	1.6	3.8	3.6
S 166	〃	2・4区 セク	灰色	B-1	4.3	4.2	1.45	1.4	2.35	1.75
S 167	〃	4区	灰色	B-1	3.4	3.3	1.3	1.1	2.3	2.3
S 168	〃	4区	灰色系	B-1	4.15	4.05	1.6	1.55	3.05	2.6
S 169	〃	2区	灰色	B-3	4.7	4.65	1.85	1.8	4.6	3.7
S 170	〃	4区	灰色	B-1	4.0	4.0	1.8	1.7	3.4	3.1
S 171	〃	4区	灰色	B-1	3.7	3.7	1.5	1.3	3.0	2.9
S 175	SHG54		灰色	A-1	3.9	3.7	1.6	1.5	3.7	3.1
S 176	〃	3区	灰色	B-1	4.7	4.7	1.6	1.6	2.3	1.9
S 177	〃	2・3区	暗緑灰色	B-1	4.5	4.5	1.5	1.4	2.3	1.8
S 178	〃	4区	灰色	B-2	4.4	4.3	1.6	1.6	3.0	2.6
S 180	SXG327		灰色	A-1	4.7	4.6	2.1	2.0	3.5	2.7
S 181	〃		灰色	A-1	4.5	4.4	2.0	1.9	3.3	2.7
S 182	〃		灰色	A-1	4.4	4.2	2.0	2.0	3.6	2.9
S 183	〃		灰色	A-1	4.5	4.5	2.2	2.1	2.9	2.5
S 184	SHF113	3・4区	灰色	A-1	4.95	4.8	1.4	1.35	2.5	2.0
S 185	〃	4区	暗緑灰色	B-2	4.3	4.25	1.9	1.85	3.7	3.3
S 186	〃	4区	暗緑灰色	A-1	4.55	4.25	2.1	2.0	3.35	1.8
S 187	〃	3・4区	灰色	A-1	4.35	4.3	1.5	1.45	3.6	3.1
S 188	〃	3・4区	暗緑灰色	A-1	5.3	5.15	1.85	1.75	4.05	3.65
S 189	〃	4区	灰色	A-2	5.25	5.2	2.05	2.0	3.95	3.5
S 190	〃	3・4区	暗緑灰色	B-1	4.2	4.15	1.1	1.05	2.1	1.8
S 191	〃	4区	灰色	B-1	4.5	4.4	1.5	1.5	2.5	1.7
S 192	〃	4区	灰色	C-1	4.15	4.1	1.5	1.5	2.4	1.4
S 193	〃	3・4区	灰色	B-4	5.4	5.25	1.7	1.45	3.0	2.5
S 194	〃	3・4区	暗緑灰色	B-1	4.6	4.4	1.6	1.55	2.5	2.45
S 195	〃	3・4区	暗緑灰色	B-1	4.4	4.35	1.8	1.7	2.95	2.4
S 196	〃	3・4区	灰色	B-1	5.2	5.15	1.15	1.1	2.4	1.8
S 197	〃	3・4区	暗緑灰色	B-1	4.4	4.2	1.5	1.45	1.7	1.5
S 198	〃	4区	暗緑灰色	A-1	4.5	4.4	1.9	1.8	3.2	2.8
S 199	〃	4区	灰色	B-1	4.5	4.45	1.65	1.6	5.4	5.0
S 201	SHF07	3区	暗緑灰色	A-1	6.05	5.8	2.5	2.25	3.6	3.35
S 202	〃	3区	灰色	C-1	5.75	5.65	2.1	2.05	3.0	1.95
S 203	〃	3区	暗緑灰色	B-1	5.8	5.5	2.3	2.2	3.7	2.8
S 204	〃	3区	暗緑灰色	A-1	5.6	5.5	2.1	2.0	3.9	2.7
S 205	〃	3区	暗緑灰色	B-2	5.85	5.7	2.15	2.1	3.45	2.8
S 206	〃	3区	暗緑灰色	A-1	5.7	5.6	2.2	2.1	3.9	3.4

S 207	SHF07	3区	灰色	A-3	6.0	5.9	2.2	2.1	2.9	1.8
S 208	〃	3区	灰色	B-1	5.7	5.65	1.95	1.9	4.35	4.3
S 209	〃	3区	灰色	C-1	5.8	5.7	2.1	2.1	3.0	2.0
S 210	〃	3区	暗緑灰色	B-1	5.9	5.8	1.9	1.9	3.8	3.5
S 211	〃	3区	暗緑灰色	C-1	5.6	5.5	2.4	2.3	3.5	1.5
S 212	〃	3区	灰色	C-2	5.85	5.8	1.85	1.8	3.35	1.95
S 213	〃	3区	灰色	B-1	5.6	5.45	1.9	1.85	3.5	3.1
S 214	〃	3区	暗緑灰色	A-1	5.6	5.3	2.3	2.2	3.3	2.3
S 215	〃	3区	灰色	A-1	4.35	4.3	1.65	1.6	2.9	2.6
S 216	〃	3区	灰色	B-1	3.95	3.9	1.4	1.35	2.75	2.4

と同様の台篋被に柳葉の鎌身をもつ。全長16.3cmに復原できる。T 6はT 4と同様、竪穴式住居跡SHF113出土。片小爪・片逆刺をもつ片切刃造りの鎌身をもつ。残存長12.35cmを測る。T 7も竪穴式住居跡SHF113出土。長頸鎌の茎と考えられ、接合はしないがT 6と同一個体と考えられる。T 8は竪穴式住居跡SHF07出土。片逆刺の片切刃造りの鎌身となる。篋被は短く、茎が欠損する。残存長8.6cmを測る。T 9は3-J・K・L区包含層出土。長頸鎌の篋被と茎の一部である。

T 10はI地点、9-C・D区包含層および一部、竪穴式住居跡SHI154上層埋土を含む排土から出土。柳葉の鎌身である。残存長4.9cmを測る。

T 11・12は刀子残片である。T 11は竪穴式住居跡SHG55出土。刀子の身残片である。刃部に錆がみられるようで、その厚みからすれば、切刃造りとなろう。残存長2.9cmを測る。T 12はF地点、2-O・P区包含層出土。装具類は付属していないが、棟関をもち、古墳時代後期のものとみられる。残存長1.3cmを測る。

T 13はI地点、9-C・D区包含層および一部、竪穴式住居跡SHI154上層の排土から出土した。刃部を欠損した鉞である。残存長5.7cm、幅1.0~1.1cmを測る。

T 14・15は板状の鉄製品である。T 14はSPJ68出土。4点に破砕した状態で出土した。下端部は薄く撥状に広がる。上端部分はやや厚く2mmを超える。先端部分が欠損しているものとも考えることもできるが、上端に破断面らしき形状が見当たらないため、下端部分のみ撥状に広がるものとみてよさそうである。全長12.4cm、下端部最大幅3.6cmを測る。小形の直刃鎌に類似するが、刃部がみられないこと、幅の広がる下端部分が薄く、鍛打して延ばされたような形状からすれば、小形の鉄鋌の類と考えて差し支えない。

T 15は竪穴式住居跡SHF111出土。T 14と同様に刃部となる部分がみられないことから小形の板状鉄材の類としてよからう。残存長9.85cm、幅1.7~2.05cm前後を測る。

T 16はJ地点、4-Y区包含層出土。肉眼観察では4孔が穿たれる小札である。全長6.45cm、最大幅3.65cm、最大厚1.0mm、重量10.74gを測る。

T 17は、SDJ06出土。一辺6mm前後の方形断面の鉄棒を曲げて造られた引手壺である。銹化腐蝕が著しいが、環の内側には皮革のような有機質が付着しているように見える。残存長5.1cmを測る。

T18はS D F 22出土。残存長5.1cm、幅1.9～2.5cm、厚さ1.6～2.1cmを測る不定形の鉄塊である。断面は四角形に近く、側面には縦方向の窪みがみられるが、用途は不明である。

T19はF地点、4-H・I区包含層出土。差金部分と考える。差金長3.3cmを測る。

T20はI地点、9-D区包含層出土。平根の鉄鏃の鏃身部分が錆化したものか。

T21は6-N区包含層出土。一部刃部が形成されるが器種は不明である。図の上半部分は幅1.6cm、棟の重ね2mmを測る。残存長5.8cmを測る。

T22は方形周溝墓S T J 05東南溝出土。弥生時代の所産かと考えられる鉄片である。残存長2.4cm、最大幅2.05cmを測る。楔として利用されたのであろうか。

T23は、竪穴式住居跡S H G 54出土。残存長1.8cm、最大幅1.2cm、最大厚2mmを測る。

今回の調査において、鉄鋌が出土したことは注目できる。近年、古墳時代の竪穴式住居跡からも鉄鋌の出土例が増加しており、日本列島においては墳墓に埋納されるだけでなく、実際に鉄素材として利用されるものであった可能性が高くなってきた。^(注29)大分県日田市荻鶴遺跡、岡山県総社市窪木薬師遺跡^(注30)では、鍛冶が行われた作業空間に鉄鋌が遺存していた。鉄鋌を製作したか、あるいはそれを利用して新たな鉄器を生産したか、どちらかが想定される状況にある。また一方で、愛媛県松前町出作遺跡祭祀遺構や大阪府阪南市亀川遺跡土坑478などでは、浅い窪みに土器や滑石製模造品やほかの鉄片類などとともに鉄鋌が遺棄^(注31)されていた。今回の小形鉄鋌は、その出土状況からみて、後者の祭祀遺物として遺棄された場合に類するものかと想定されよう。ただし、下植野南遺跡は、先回の調査において集積された土器群(B地区S X 36842)とともに大型の鍛錬鍛冶滓^(注52)が出土しており、古墳時代後期には当集落内で鍛冶作業が行われていたことは確実である。T16の小札も鍛冶原料として再利用される対象であったものかもしれない。^(注33)

(野島 永)

5. 古 銭(図版第265)

古銭は、寛永通寶と判読できるものや、5枚が癒着した状態のものを含め、総数37枚が出土した。古銭の出土位置は、いずれも久我畷の関連調査を含めてI地点であり、ほかの地点での出土はない。古銭銘からみた初鑄年の古いものは、初鑄年621年の開元通寶で、最も新しいものは初鑄年1636年の鉄銭の寛永通寶までである。遺構出土のものとしては、I地点西端部のI-2トレンチのS F I 162の礫敷遺構の礫直上から出土した開元通寶(初鑄年621年)から元祐通寶(初鑄年1086年)までの10枚のものと、礫を除去した段階で出土した熙寧元寶・天禧通寶(初鑄年1017年)が出土している。I地点東端部のI-1トレンチのS X I 33の礫敷遺構の直上でも元祐通寶が、S D I 02の上面精査中に元豊通寶(初鑄年1078年)が出土しており、ほかの古銭は久我畷の堆積中からのものが大半である。寛永通寶は、久我畷の路面からは離れた井戸(S E I 52)から出土しているものが大半である。古銭では、鑄孔が八角形の天禧通寶、外縁ケズリの祥符通寶(初鑄年1009年)がある。

(石井清司)

付表12 古銭一覧

番号	出土地点	古銭名	書体	初鑄年	時代	径(cm)	重さ(g)	備考
K 1	SFI162直上 9-D区	開元通寶	真書	621	唐	2.4	2.6	
K 2	SFI162直上 9-C区	天禧通寶	真書	1017	北宋	2.4	17.9	5枚
K 3	SFI162直上 9-C区	皇宋通寶	真書	1038	北宋	2.4	3.1	
K 4	SFI162直上 8-D区	元祐通寶	行書	1086	北宋	2.35	2.4	
K 5	SFI162直上 8-D区	天聖元寶	篆書	1023	北宋	2.5	3.3	
K 6	SFI162直上 8-D区	軋元重寶	真書	758	唐	2.35	3.1	
K 7	SFI162直上 8-D区	□□元寶				2.4	3.1	
K 8	SFI162直上 8-E区	皇宋通寶	真書	1038	北宋	2.5	3.0	
K 9	SFI162直上 8-E区	元祐通寶	行書	1086	北宋	2.35~2.4	3.1	
K10	SFI162直上 9-D区	明道通寶	篆書	1032	北宋	2.5	3.3	
K11	SFI162礫下 8-E区	熙寧元寶	篆書			2.4	3.0	
K12	SFI162礫下 8-D区	天禧通寶	真書	1017	北宋	2.45	3.2	
K13	SXI33石敷面	元祐通寶	行書	1086	北宋	2.4	3.1	
K14	SXI33石敷面	元祐通寶	篆書	1086	北宋	2.4	1.2	
K15	SXI33粗堀中 46-V区	元豊通寶	篆書	1078	北宋	2.4	2.9	
K16	SXI33粗堀中 46-V区	寛永通寶	3期	1636?	江戸	2.5	2.8	
K17	SDI02上面精査中	元豊通寶		1009	北宋	2.35	2.9	
K18	I地点包含層	元豊通寶	篆書	1078	北宋	2.5	2.8	
K19	I地点包含層	祥符通寶	真書	1009	北宋	2.2	2.8	外縁ケズリ
K20	I地点包含層	□□元寶				2.2	1.9	模鑄銭?
K21	SRF99	聖宋元寶	行書	1101	北宋	2.4	3.1	
K22	SRF99	皇宋通寶	篆書	1038	北宋	2.5	3.9	
K23	I地点包含層	乾元大寶		958	平安	1.8	0.6	皇朝十二銭
K24	I地点包含層	祥符通寶	真書	1009	北宋	2.45	3.3	
K25	7-F区淡青灰色粘砂質土	天禧通寶	真書	1017	北宋	2.4	2.2	銭孔八角形
K26	SEI52	寛永通寶		1636?	江戸	2.55	15.3	期不明・5枚
K27	SEI52	寛永通寶	3期	1636?	江戸	2.3	2.5	鉄銭
K28	SEI52	寛永通寶	3期	1636?	江戸	2.4	2.7	鉄銭
K29	SEI52	模鑄銭				2.2	1.8	
K30	8-G区橙茶褐色粗砂層	寛永通寶	1期	1636?	江戸	2.4	2.5	
K31	49-R・S区精査中	寛永通寶	1期	1636	江戸		2.5	
K32	49-R・S区精査中	寛永通寶	1期	1636	江戸		2.5	

第4章 平成14年度の調査

大山崎JCTに伴う下植野南遺跡は、平成14年度が最終年度となる。平成14年度は今回の報告書の中心部である国道171号線の北地域が終了し、国道171号線の南側の門田地区、土辺地区、五条本地区で発掘調査を行った。門田地区では、J地点の掘立柱建物群の広がりを思わせる3棟の掘立柱建物跡は検出できたが、下層遺構である弥生時代の方形周溝墓や古墳時代前期の竪穴式住居跡などは検出できなかった。土辺地区では平成13年度に試掘調査を行った土辺3-4トレンチで検出した溝状遺構の性格を明らかにするために、調査区を約300㎡拡張して調査を行った結果、古墳であることが明らかとなった。五条本地区ではピット・土坑のほか溝状遺構などを検出した。

1. 土辺地区の調査(図版第266~268)

平成13年度に調査を実施した土辺地区3-4トレンチにおいて、円筒埴輪を包含する周溝の一部が検出され、その形状から直径15m程度の円墳の存在が想定されていた。ただし、平成13年度の調査範囲が、高速道路建設に伴う橋脚部分の調査に限られていたため、古墳の形状や規模に関しては推定の域を出ないものであった。このため、関係諸機関と協議の上、平成14年度は橋脚建設後に道路建設用地内で、古墳の形状・規模・埋葬施設の有無を明らかにするために発掘調査を実施した。

調査は、平成13年度に古墳南側の周溝が確認されていたため、その調査成果を踏まえ東・西側の周溝がかかるよう、また、南側周溝の西端が平成13年度調査トレンチと重なるように北東から南西にのびる「L」字状のトレンチを設定した。ただし、用地の関係上、古墳全体の調査を行うことはできなかった。なお、検出された古墳については、関係諸機関での協議の結果、小字名を冠して土辺古墳と命名されることになった。

(1) 調査概要

平成14年度の調査では、地表下約2mまでの現在の盛り土を中心とした堆積土を重機で掘削したのち精査を行った。その結果、中世以降と考えられるものと、古墳時代の2時期にわたる遺構を検出した。

中世以降と考えられる遺構は、古墳検出面上である標高9m前後で耕作に伴うと考えられる人・牛・馬などの足跡と推定される痕跡が確認できた。これらは洪水に伴い埋没し、足跡痕には砂が堆積していた。この遺構面より上層は洪水を受けるたびに整地・耕作が繰り返し行われたようで、部分的ではあるが2~3面同様な面が認められる。これらの遺構については、平成13年度に調査が行われた隣接するトレンチでも、ほぼ同じ高さで同様なものが検出されている。

古墳時代の遺構は、これらの耕作面を除去した段階で検出したもので、2条の溝を検出し、昨

年度の調査成果とあわせると、これらの溝が古墳に伴う周溝であることが明らかとなった。

土辺古墳の東側周溝S D1401は、溝東側肩部は検出できなかったが、推定幅約3m、深さ約0.6m、西側周溝S D1402は、幅約3m、深さ約0.3mを測り、西側周溝の南端部は東側に屈曲し、前年度に検出していた溝につながるということが明らかとなった。また、平成13年度調査で検出されていた溝の北側延長部を確認した。その結果、当初、直径15mの円墳が想定されていたが、周溝の延長部分の検出により、一辺約13mの規模を有する方墳であることが明らかになった。

S D1401からは円筒・朝顔形埴輪が、S D1402南側では円筒・朝顔形埴輪、北端からは良好な状態で方杖をもつ特異な家形埴輪が出土した。家形埴輪、円筒・朝顔形埴輪ともにまとまって出土しており、特に家形埴輪は上下2層からなるが、入母屋作りの屋根部を下にむけ、転落したかのような状態で検出された。家形埴輪は周溝がある程度埋まってから落ち込んでおり、人為的に溝内に落とされた可能性もある。その後、中世の土地利用に伴い古墳が破壊されていったようで墳丘・周溝が削平を受けている。この土地利用に伴う削平は、S D1401に比べてS D1402・南周溝側が著しい。

S D1402・南周溝西半分付近一帯は、下層遺構の確認を行ったところ、周溝底面以下には砂礫を含んだ流路跡が認められ、削平されやすい状況であったとも考えられる。家形埴輪の残存状況は、下層部は大半が残存しておらず、中世の土地利用に伴い削平されたものと考えられる。

埋葬施設は、ほぼ墳丘中央部を調査したにもかかわらず、検出することはできなかった。家形埴輪同様、中世遺構の削平に伴い消滅したものと考えられる。

そのほかの遺構としては、S D1402西側において土坑S K1403を検出した。土坑は楕円形を呈し、長軸2.5m、短軸1.4m、深さ0.5mを測る。時期は不明であるが、古墳築造の際の整地層上から掘り込まれているため、土辺古墳と同時期のものと考えられる。

(増田孝彦)

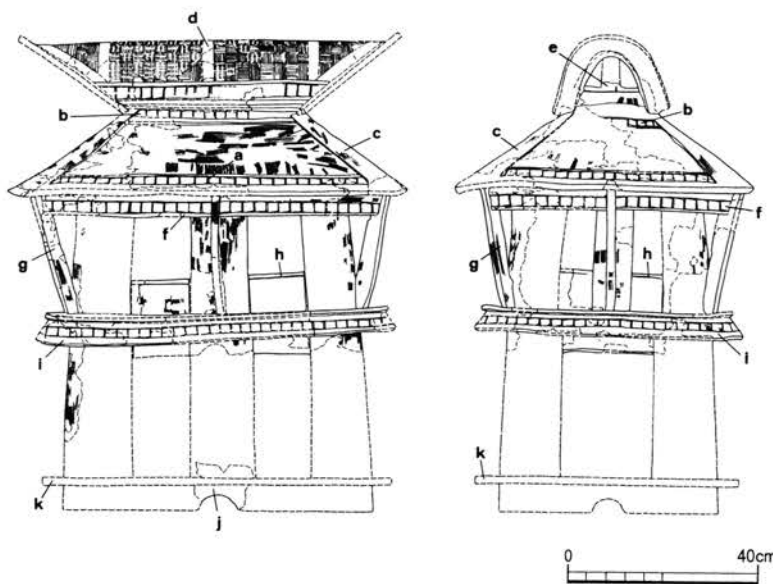
円筒・朝顔形埴輪(図版第271・272) 円筒・朝顔形埴輪は、細片が多く、基底部から最上段まで復原できるものはない。また、口縁部・底部の破片でも厳密に口径・体部径などが計測できるものは少ない。

H 2・3は、朝顔形埴輪の口縁部で、口径については細片であるため復原値で図示した。内外面には横方向の細かいハケ調整がある。H 4は、断面台形状の突帯で、方形透かし孔がある。外面には斜め方向のハケ調整がある。H 5は、円筒埴輪の口縁部片で、口縁部は直線的に外反する。H 6は、朝顔形埴輪の肩部および頸部片で、頸部屈曲部には突帯がめぐる。頸部外面の突帯の貼り付け後に縦方向のハケ、肩部外面は斜め方向あるいは横方向のハケ調整を施している。H 7は、朝顔形埴輪の最上段部および肩部片で、最上段の突帯には鱗を貼り付けたと思われる斜めの切り込みがある。H 8も朝顔形埴輪の最上段部で突帯は剥離している。H 9は突帯片で長形状を呈している。H 10は、方形の透孔をもつもので、突帯の形状は剥離しており不明。H 11~14は、口縁部片、H 18・21・24は、鱗部片で鱗の幅については細片のため不明。厚さは12~14mmを測る。H 29は、最上段部で口縁部はわずかに外反し、端部は外傾する面をつくっている。突帯から口縁

部までの高さ約6cmである。突帯の剥離したところでは一辺1.5cm程度の方角刺突が1か所認められる。H30は、断面台形の突帯で、方形透孔がある。H31は、鱗付き円筒埴輪と思われるもので、鱗部は剥離しておりその痕跡だけを残している。突帯は断面長方形を呈し、突帯間の幅は約15cmを測る。外面は縦のち横方向のハケ調整を施している。H23・33は、基底部片で、H22は横方向のハケ、H33は縦方向のハケ調整が認められる。H34・36～38は鱗部片、H36は鱗幅約9.5cm、厚さ約1cm、H37は鱗幅約11cm、厚さ1cmを測る。H38は鱗部の最下端部片で端部を斜めに切り込んでいる。H34・35も鱗部と思われる細片で、片面には針状工具で文様が描かれている。この文様はいずれも細片資料のため、画題の一部を残すに過ぎないが、特にH35に見られる木葉状の文様は3単位連なっており、舟の櫂か人物の毛羽を表現したものかもしれない。H34の裏面は縦方向のハケ調整を施している。H41は、円筒埴輪の口縁部片で、口縁端部は外方に巻き込むような形状を呈している。内外面は粗い縦方向のハケ調整を施している。H42は、H5と同様、口縁部が直線ぎみに外反する。突帯は剥離しておりその痕跡をとどめるのみであるが、口縁端部から突帯までの幅は7.5cm前後と思われる。H43は、ゆるく外反する口縁部で最上段の突帯から口縁部までの幅約8.0cm、その下段の突帯間の幅は約14cmを測る。最上段の外面は縦方向のハケ、その下段の突帯間は縦のち横方向のハケ調整を施している。内面は縦ハケ調整。H44・45が朝顔形埴輪の口縁部片である。

(石井清司)

家形埴輪(図版第269～271) 土辺古墳で出土した家形埴輪は、入母屋造の高床建物でその復原高は約100cmである。先述したように、円筒埴輪の型式などから4世紀後半の年代が与えられる。家形埴輪は細部にわたって、ていねいに表現がなされており、考古学的にも建築学的にも非常に重要な資料であるとともに多くの問題も投げかけることとなった。以下に家形埴輪について詳述する。



第13図 家形埴輪名称図

出土した家形埴輪は、屋根部分と高床部分の約9割、そして床下部分の妻側柱1本分、下端の透かし部分1か所で、完全に倒立した状態で周溝内から出土しており、床下部分の大半は出土していない。

家形埴輪の特徴を屋根から順を追って説明したい。寄棟部分(下屋根)は、平側長約84cm、妻側長約

63cmで、下屋根の下端と上端に、それぞれ梯子状の面違を文様帯としてもつ。面違は文様帯の中央に区画線を配し(a)、それを基準に両サイドへと左右対称となるように削り出された文様帯である。下屋根下端の文様帯は四周をめぐるが、上端の文様帯は妻側と平側では高さが異なり段違いに配されている(b)。この上下の文様帯をつなぐように、降棟にも帯状の突帯が付されている(c)。この寄棟の上に切妻の屋根(上屋根)が乗る形になる。上屋根には網代が線刻表現され、その棟覆を押さえる役目を果たす網代押縁の表現も3帯配される(d)。上屋根の妻側には破風板が付くが、屋根の上には堅魚木や鱗は付いていない。破風板は左右とも端部を欠く。ただし、棟押縁との接点に残された痕跡から復原した。妻側には寄棟から垂直に立ち上がる壁があり、ここには2個一対の窓が切り込まれている(e)。

下屋根の下端文様帯のちょうど裏側にあたる部分に「幕板」がつけられる(f)。幕板にも面違の文様が施されている。この幕板の中央と両端を支えるように、妻側・平側あわせて8か所に取り付けられた「方杖」がある(g)。方杖は高床部分の柱から斜めに取り付けられ、直線的に下屋根の軒と幕板を支える位置に付されている。

高床部分は2間×2間で、全てに窓が切り込まれ、腰壁には窓枠表現と考えられる沈線が施されている(h)。平側約60cm、妻側約43cmのサイズで、柱厚約2.0cm、壁厚約1.4cmである。高床部分と床下部分の間には「へ」の字状の屋根が付く(i)。この屋根にもやはり面違の文様帯が付される。コーナー部分は、ゆるやかなカーブを描き、直線的には曲がらない。

高床部分と床下部分の間には内面に床表現である突帯がめぐらされる。突帯の幅は妻側が5.2cm前後、平側が3.4～5.6cmと一定ではない。中央には広い面積の空間が存在し、大阪府美園1号墳出土例のようなベッドなどは付されていない。

床下部分は妻側の柱1本分だけが残存しているが、それも下端までは残っていない。高床部分の壁の高さを参考にして、床下部分を復原した場合、この柱の下には腰壁がなかったものと考えられる。平側については全く破片が出土しておらず、窓表現か否かも含めて不明である。

基底部の破片として半円形の透かし部分だけが1か所分出土した(j)。この半円の透かし破片には、基底部から5.6cmの高さに外面の突帯が剥がれた痕跡が確認できる。最下段の突帯は破片も出土しておらず、その形状は明らかでないが、裾廻りの突帯の剥離位置から考えると高床部分でみられるような「へ」の字状のものではなく、「一」字状のものであったと推測できる(k)。この突帯と残存している床下部分の間の柱をどの程度の高さに想定するかによって、復原高は大きく変わることになる。なお、復原案では、床下部分の柱の高さを高床部分を参考にして約34cmと想定して復原した。

この埴輪には朱の痕跡が残されている。特に床下部の柱や上屋根部の妻側(内面)で顕著で、面違や壁表現などの線刻の中にも見いだすことができる。その部位は断片的ながらほぼ全ての箇所を確認できる。このことから、本来は全面朱彩されていた可能性が高いものと考えられる。

今回出土した家形埴輪には各所に粘土紐の接合痕が観察でき、この家形埴輪は内傾接合で製作されたことがわかる。高床部分の柱を参考にすれば、粘土紐の幅は1帯約3cmである。

製作技法については、順を追って説明したい。まず、第1段階として粘土紐を積み上げ、四角い底のない箱状のものを作り、ヨコハケを主として用いながら成形し、その段階で半乾燥させる。半乾燥が終了した段階で、粘土をさらに2帯積み上げ、さらに柱部分に粘土を貼り足して、壁と柱の表現に高低差を付ける。壁部分の不必要な粘土を切り離し、柱の体裁と壁を整え、柱部分にタテハケを行う。この時、高床部分と床下部分ではわずかに5mm程度の幅の差をつけ、高床部分側を細く表現している。

第2段階として、下屋根を反転させた状態で裏側から積む。ほぼ壁にあたる部分まで積んだ段階で、表返して既にしてあった壁と接合する。その後、軒まで粘土を回していく。この時、最終的な軒の厚さは2/3程度の厚みに抑えて成形する。屋根はこの段階で半乾燥を行う。

第3段階として、壁に窓を穿ち、窓枠表現となる沈線を施す。そののち、高床と床下の間にある屋根を取り付ける。内面の床表現についてはその順序は定かではないものの、おそらくこの作業の前後に取り付けが行われるものと考えられる。また、最下段の突帯についても、その剥離状況からみてこの段階に取り付けられた可能性が高い。

第4段階として、まず四隅の柱の角を斜めに削り落とし、方杖を下屋根へと伸ばす。その後両端の方杖をつなぐように下屋根の裏側に粘土帯を1帯めぐらせる。さらにこの粘土帯を目印に今度は妻側と平側の中央の柱から方杖をのばす。これは、方杖をそれぞれ3か所に付してから幕板を付けると、幕板を直線的に付しにくいという製作上の考慮から選択された順序であろう。

第5段階として、下屋根の面違表現と下棟の表現を付けるために粘土帯を付す。粘土帯はていねいにハケで押さえられたのち、両側を沈線で区画して文様帯を設定し、中央に区画線を入れた後に、中央からヘラ状の工具で立体的に削り出して施文する。削り出した後に再度両端と中央に沈線で区画を施す。

第6段階として、上屋根を乗せる作業を行う。上屋根は平側に平行になるように粘土帯を積みながらヨコハケで成形する。上屋根の外形と破風板まで成形した段階で、上屋根と下屋根の境になる部分から、突帯と文様帯を付していく。網代表現は、帯状文を配した後にていねいに区画してから施される。網代は1マスが2.2~2.6cm四方で、正確に沈線で表現している。

第7段階として、上屋根の妻側に壁を入れ、窓を切り取る。下屋根はすでにかなり乾燥段階を経ており、この壁はすぐにも剥離するような危うい接着状況である。この壁を付けた後に、棟木を付け、全面を赤色に彩色して完成としている。

(藤井 整)

土器(図版第272) 土辺古墳では、埴輪とともに土師器細片が数点周溝内から出土した。また、S D 1401・1402の間の、墳丘および下層遺構の存在を確認するための断ち割り調査に際して土器数点が出土した。

H48・50・52は周溝内から出土したもので、H48は土師器壺、H50は高杯柱状部、H55は高杯杯部片である。H49・52は下層の断ち割り調査に際して出土したもので、甕・高杯の細片である。H49・51も出土したため、弥生時代の遺構があるかどうか確認したが、今回の調査ではみつから

なかった。

(2)まとめ

土辺古墳は現在の盛土を含め、地表下3.8m、標高9m前後で検出した一辺約13mを測る方墳である。古墳は小泉川の氾濫、中世以降の開墾によって埋葬施設を含めた墳丘の大半が大きく削りとられており、周溝のみを検出した。周辺の調査では土辺3-2トレンチで古墳時代中期以降のTK47型式の須恵器を含む円墳を検出したが、土辺古墳と同時期の古墳の検出例がなく、土辺古墳が単独で形成されたのか、周辺の未調査区に同時期の古墳が点在するかどうかについては明らかでない。ただ、大山崎町域での古墳の分布では、土辺古墳の北750mにほぼ同時期と思われる境谷1号墳や西約2kmに位置する鳥居前古墳があり、木津川・桂川・淀川の三川の合流地点に位置する土辺古墳は重要な位置にあるものと思われる。

この土辺古墳の周溝内からは、円・朝顔形埴輪、家形埴輪、土師器が出土した。円・朝顔形埴輪は最上段のタガの間隔が狭く、鱗を有しており古墳時代前期、川西編年の2期に相当する。家形埴輪は面違文様や上段部の切妻表現と寄棟表現の大きさなど、前期の家形埴輪の特徴を備えており、円・朝顔形埴輪の特徴と符合する。この家形埴輪には、奈良県宮山1号墳出土の家形埴輪に見られる幕板表現とともに、軒の出が深いために支えたと思われる方杖表現がある。方杖については中国や東南アジアで現存する建物に表現されているが、日本での方杖を表現した家形埴輪の出土例がなく、今後検討する必要があるが、古墳時代において中国の影響のもとに方杖をもつ建物が存在したことを窺わせる資料である。建物本体では、上段部と下段部の境に表現された突出表現は小屋根の表現が考えられるが、下段部の大半が欠落しているため、高床構造か二階建て構造かのいずれであるかは明らかでない。ただ、全体の構造から今回出土した家形埴輪は祭殿を表現した家形埴輪と考えられる。

このように、今回の調査は調査範囲が狭かったにもかかわらず、古墳時代前期の下植野南遺跡の様相、類例のない家形埴輪の出土など多大な成果を得た。

(増田孝彦・石井清司)

2. 五条本地区の調査(図版第273)

土辺古墳の北東約200mに位置する調査区である。今回の調査地は、平成10年度の長岡京跡右京第585次調査で検出した古墳時代前期の旧河道の延長部にあたり、また、古墳時代後期の可能性がある竪穴式住居跡を検出した下植野南遺跡の中の大條地区(IK-39次調査)に隣接する。今回の調査では、古墳時代前期の旧河道の延長部の状況を明らかにするとともに、古墳時代後期の集落の広がりを中心にすることを目的として実施した。

この地区に設定したトレンチでは、標高約9.1~9.3mで堆積層もしくは整地層とみられる層を確認した。この層の上面では若干のピットなどを検出したが、建物としてまとまるものではない。ピットからは明確な時期を示す遺物が出土していない。また、この層中からは古墳時代の土師器片が多数出土した。弥生土器片も少量含まれる。

この下層には河川堆積とみられる礫層が広がっており、ほぼ全体的に自然流路跡であることを確認した。なお、今回検出した自然流路跡はほぼ東西方向であり、長岡京跡右京第585次調査検出の旧流路とは直交するかあるいは途中で屈曲するものと思われる。

3. 門田地区の調査(図版第273)

今回報告する調査地は、J地点から国道171号を挟んで東約50mに位置する調査区である。J地点では、古墳時代中期以降の集落跡や、その下層で方形周溝墓群を確認しており、それらの広がりを確認することを目的として調査を実施した。

この地区では、新設の水路を挟んで東西2か所のトレンチを設定して調査した。仮に、西側のトレンチを1トレンチ、東側を2トレンチとする。今回、顕著な遺構を検出したのは1トレンチである。ここでは、掘立柱建物跡3棟、土坑などの遺構を検出した。2トレンチでは自然流路跡もしくは湿地状の地形を検出したのみである。なお、1トレンチで遺構を検出したのは、標高約9.3mの黄灰色系シルト層上である。

(1) 検出遺構

S B 01 1トレンチ東半部で検出した。2間×3間の南北棟の掘立柱建物跡である。南北の柱間約2～2.2m・東西の柱間約1.3～1.5mで、全体的には、一辺約4.2mの、ほぼ正方形平面の建物である。掘形は方形状を呈し、一辺約20～30cm、検出面からの深さは約30～40cm、柱穴は径約12cmを測る。柱穴からは少量の土器小片が出土した。

S B 02 1トレンチ中央付近で検出した。1間×2間以上の南北棟の掘立柱建物跡とみられる。柱間は南北約1.5～1.8m、東西約3.1mを測る。掘形は方形状を呈し、一辺約15～30cm、検出面からの深さは約15～30cm、柱穴は径約12cmを測る。

S B 03 1トレンチ西側で検出した。2間×2間の総柱の掘立柱建物跡とみられる。柱間寸法は一定せず、柱筋も通らない部分があるが、全体的には約3.9m四方の建物と考えられる。掘形は方形状を呈し、一辺約20～40cm、検出面からの深さは約15～25cm、柱穴は径約10～20cmを測る。掘形内からは少量の土器小片が出土した。

S K 04 S B 01の北側約2mで検出した。北端部はトレンチ外になるので全容は不明であるが、楕円形状の土坑とみられる。あるいは溝であるかもしれない。検出長約95cm、幅約50cm、深さ約20cmを測る。この土坑内からは、庄内式と思われる甕などが出土した。

(2) まとめ

今回、1トレンチで検出した掘立柱建物跡は、掘形内出土の土器片からみて、古墳時代頃のものと考えられる。1トレンチの西側にあたるJ地点では、古墳時代中期以降の竪穴式住居跡や掘立柱建物跡からなる集落跡を確認している。今回検出した掘立柱建物跡は、J地点で検出した集落跡の東側への広がりを示すものとも考えられる。なお、方形周溝墓は、今回の調査地までは広がっていないものと考えられる。

(引原茂治)

第5章 考 察

第1節 弥生時代中期の下植野南遺跡

1. はじめに

昭和60(1985)年、大山崎町立体育館建設に伴う発掘調査(体育館地点)から始まった下植野南遺跡の調査は、平成2(1990)年の名神拡幅地点、そして今回の大山崎JCTの調査と続き、一時的な中断期間を置きながらも、広範囲にわたって発掘調査が行われてきた。これらの調査のなかで弥生時代中期の墓域を確認した。ここではこれまでの調査結果を踏まえ、方形周溝墓群について各項目ごとに検討を加えたい。

2. 弥生時代中期の墓域

(1) 存続期間

下植野南遺跡で検出された方形周溝墓は総数82基、区画をもたないもの3基で、その範囲は約17,000㎡に及ぶ。この報告では出土した土器のうち、図化可能な個体は全て掲載した。時期的には凹線文を全く含まない資料である。また、壺胴部のミガキ調整が胴部最大径ではヨコ方向、胴部下半ではタテ方向と分かれていること、円板充填技法を採用した高杯が存在することなどから、資料の大半は畿内第Ⅲ様式古段階を中心とした時期におさまるもので、その前後に位置づけられる資料は、存在してもわずかであると考えられる。これらの土器が墓域出土資料であることを考慮すれば、墓域の存続期間は畿内第Ⅲ様式古段階にほぼ限定できるものと考えられる^(注34)。

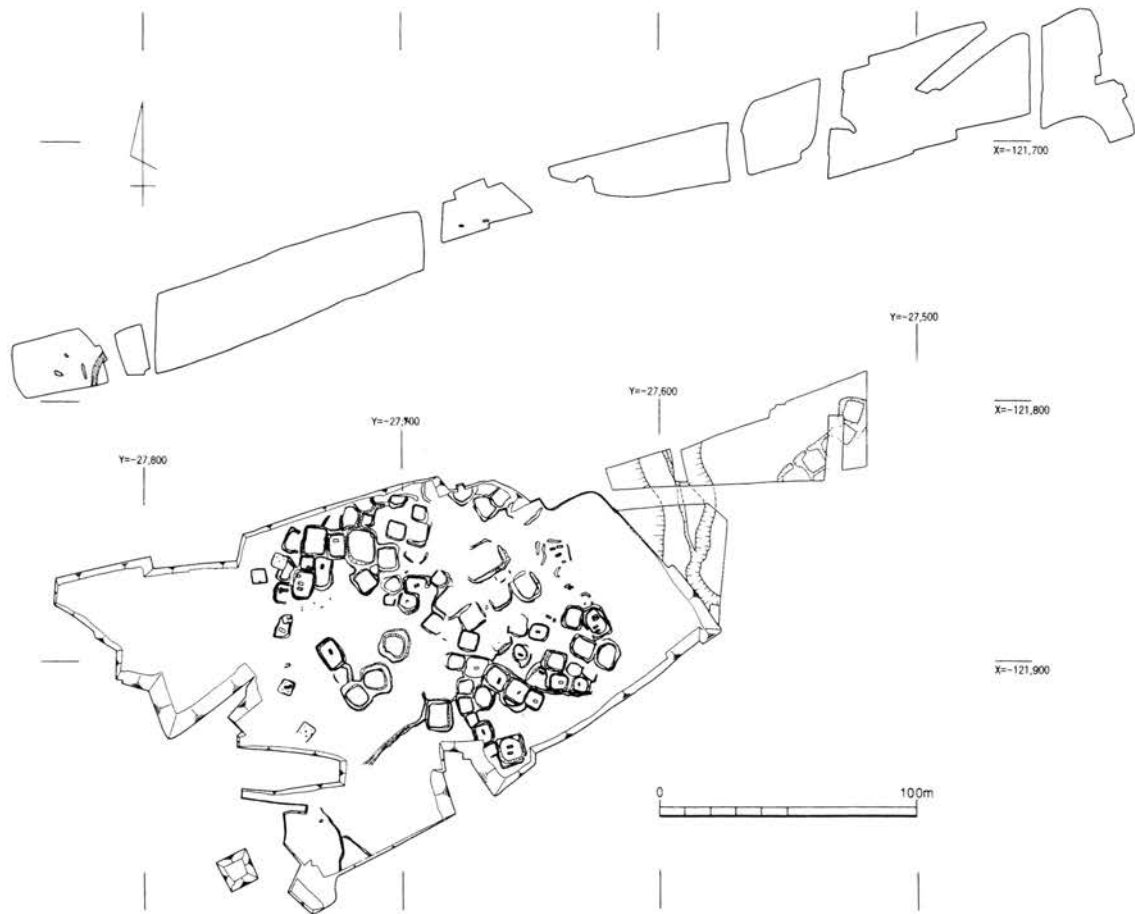
(2) 墓域

これまでの調査成果からみて、墓域の大部分がすでに調査によって明らかになったものと考えられる。現時点での墓域の規模を推定しておきたい。

方形周溝墓はF地点の北端まで広がるが、名神高速道路を挟んで北に位置する名神拡幅地点では検出されていない。このことから、墓域の北限は、少なくとも高速道路の下で収束するものと考えられる。

墓域の東側は、長岡京跡右京第188次調査(体育館地点)で検出された6基が、ほぼ同時期のものと推定される。体育館地点の方形周溝墓は周溝を接続しつつ、まだ東へと伸びる傾向が看取できる。この国道171号線を挟んだ東側に位置する土辺地区では、平成14年度の調査(第4章)で報告したように方形周溝墓は検出されていないため、国道171号線からJR東海道新幹線の下で収束するものと考えられる。

南側は国道171号線の下にむかってまだ延伸する可能性があるが、J地点の調査成果から、その密度は比較的希薄であるものと判断できる。ただし、H地点では、溝から弥生土器が出土して



第14図 下植野南遺跡方形周溝墓分布図

おり、この組成が甕に偏ることから、H地点の南に居住域が存在する可能性もある。この国道171号線を挟んで南側に位置する土辺地区STB3-1トレンチの調査では、方形周溝墓(ST07)が検出されているが、この方形周溝墓の出土遺物は、門田地区の方形周溝墓群に比べて、少なくとも1小様式は遅れる時期のものである。また、門田地区から土辺地区STB3-1トレンチまでの間に設定した複数のトレンチでは、方形周溝墓が検出されていないため、同一の墓域ではなく、時期の異なる墓域が土辺地区に展開しているものと考えられる。こうした墓域の移動は長岡京市神足遺跡の事例と同様に理解しうるものである。

墓域の西側については中世以降の旧河川(SRF99)によって大きく削平されているため判断材料を欠くが、F・G地点ともに方形周溝墓の密度は西に向かうにつれて薄くなっており、ほぼ墓域の西限をおさえたとみてもよからう。現状では東端を除く墓域の大部分が調査によって明らかになったものと考えられよう。

弥生時代中期中葉の段階で下植野南遺跡を墓域として採用し、当初門田地区を中心に、その後土辺地区へと移動しつつ継続的に利用した集団が近辺に存在したものと考えられるが、現時点ではその居住域と考えられる遺跡は見つかっていない。ただ、名神拡幅地点では、ほぼ同時期と見られる溝や土坑などが検出されており、名神拡幅地点、もしくはH地点に比較的近い位置で、今後、居住域が検出される可能性は高いものと考えられよう。

(3) 墓群

周溝の共有の有無などを参考にすると、北から、S T F 186を中心として広がるA墓群、S T G 66を中心として小さくまとまるB墓群、S T J 03を中心として南に展開するC墓群、S T G 65、S T G 57から東へと広がるD墓群、体育館地点に列状に展開するE墓群の、5墓群の小墓域に分けることができる。

この遺跡では周溝の再掘削や、複数回の埋葬行為のために、同じ方形周溝墓を何度か訪れることがあったことは確かであるが、明確な墓道の存在は認められない。

A～Eの墓群が認められるものの、周溝を共有しないものもいくつか存在している。また、周溝の再掘削前には、周溝を共有していなかったものもいくつか存在している。大きな墓群を形成するものとしては、北に広がるA墓群と、南に広がるC墓群があり、A支群とC支群が2つの核になっていると考えられる。A墓群では、中核となるS T F 186、B墓群ではS T J 03で比較的古い要素をもつ供献土器が、外縁に位置する方形周溝墓から比較的新しい要素をもつ供献土器が出土している。ただし、これらの供献土器には大きな時間差は認められない。これらは最終的には大きな墓群を形成することになるが、形成の当初は、やや離れた位置に起点となる方形周溝墓が造営され、それぞれ複雑に展開しつつ墓域を形成していったものと考えられる。これらの墓群が占有する領域は、当初から予定されたもので、墓域のランドデザインに沿う形で計画的に空地が確保されていた可能性が高い。

これらの墓群の中では、方形周溝墓と区画をもたない埋葬施設が混在している状況が明らかとなった。これまで、こうした区画をもたない埋葬施設については、方形周溝墓とは墓域を異にし、そこに階層的秩序が表示されているものとのモデルが提示されてきた。しかし、近畿地方では方形周溝墓の検出例が増加する中で、想定された土壙墓群の検出例は増加していない。区画をもたない木棺墓群が存在する根拠となっている遺跡のひとつである神足遺跡・長岡京跡右京第10次調査の場合も、この解釈の可能性が指摘されているが、トレンチ幅が狭いことから、現時点ではそれらが木棺墓群であると位置づけることは困難であろう。今後、方形周溝墓調査時に周辺を精査する事例が増加すれば、方形周溝墓と区画をもたない木棺墓や土壙墓が混在する状況が明らかになる可能性が高いといえる。

(4) 周溝

方形周溝墓の平面プランとしては、周溝が四周をめぐるものが基本形となっているが、周溝の一部を掘り残しているS T J 77・104などの事例も散見される。しかし、これらは墳丘も削平されているため、掘り残された東隅が陸橋として実際に機能していたかどうか不明である。

方形周溝墓の周溝には、ベース面から80cm近くまで深く掘削されているものと、完全に削平されて、検出もままならないほど浅いものがある。同一検出面におけるこのような差異は、おそらく本来的な墳丘の高低や周溝の深浅を反映したのと考えられる。また、この遺跡では、周溝の一部が全く検出されなかった例がある。S T J 60では、区画内と考えられる位置から小口穴の痕跡を確認しており、南溝は深さ約50cmまで掘削され、かつ、その最下層から遺物も出土している

が、北溝は、最終的に複数のサブトレンチを設定し、南溝と同程度の深さまで確認を行ったが、検出できなかった。

周溝の埋没状況は各方形周溝墓ごとにまちまちであるが、その多くは帯水と乾燥を繰り返すといった状況下にあったものと考えられ、墳丘とベース土の崩落によって、周溝の中位あたりまでは、早い段階で埋没しているようである。これらの中には、周溝を再掘削したものが散見された。周溝の再掘削は、周溝を共有して新しい方形周溝墓を造営する場合や、複数埋葬の場合に墳丘を盛り直すことなどを目的として行われるものと、これまでは考えられてきた。下植野南遺跡では、本来は別々に掘削された2つの周溝を一本化する目的で再掘削が行われるという、これらとは若干異なる事例が認められた。以下、順を追って説明する。

新しい方形周溝墓を造営するための再掘削は、周溝を共有して接続するものに普遍的に認められる。ほぼ同規模で周溝を接続して造営されたものとして、S T J 02・05・100などがあり、S T J 100の北溝で明らかな周溝の再掘削が、また、S T G 94の北溝がS T I 123造営時に再掘削されていることを確認した。

一方、本来は別々に掘削された2つの周溝を、一本化する目的で再掘削が行われたものとしてS T J 89がある。S T J 89は幅1.5～2mの「外側の周溝」を検出するとともに、北溝の内側で新たに幅0.6m前後の狭い「内側の周溝」を検出することができた。この「内側の周溝」は再掘削時の溝である「外側の周溝」とは異なり、整った「U」字形を呈し、南西のコーナー部分ではシャープに屈曲する。この「内側の周溝」からは、供献土器と考えられる遺物(202・203)が出土しており、「内側の周溝」は再掘削以前の本来の周溝であると考えられる。周溝の幅が狭く、周溝深度もほぼ一定でコーナー部分もシャープに曲がる、きわめていいいに掘削された方形周溝墓の姿が浮かび上がる。

再掘削は単数埋葬、複数埋葬の区別無く実施されており、周溝の再掘削が、新たな主体部を掘削する前段階の行為とは直結しない可能性が指摘できる。新たな被葬者がいない場合であっても、一定の期間は埋葬後も周溝の管理が行われていた可能性が高い。こうした再掘削によって発生する土は再び墳丘を盛り直すのに使用されたであろうが、墳丘盛土内からは供献土器片とおぼしき遺物は出土していない。しかし、周溝内には細片の土器が含まれる場合があることから、こうした細片の土器が再掘削によって墳丘盛土に混入し、再び崩落して周溝内に入った遺物である可能性が考えられる。こうした再掘削の痕跡が顕著であったのはA墓群で、供献土器の出土量がB墓群と比べると少ない。再掘削がその一因となっている可能性がある。

下植野南遺跡では、周溝が切り合っている方形周溝墓が検出されている。これらは、検出の難しかった地点でいくつか認められたもので、本来的には破壊しながら造墓するという性格のものではないと考えるのが妥当であろう。

(5) 墳丘

一部の方形周溝墓で墳丘盛土を確認した。この墳丘の盛土単位やその作業手順などについては、現地で検討を重ねたが、土壌化が進行しており明らかにすることはできなかった。かろうじて、

盛土は土層観察の結果、約10～15cm程度づつ何度かに分けて盛り上げが行われたことが確認できた。また、下層に自然流路が存在する場所に造られた方形周溝墓では、その流路の砂礫が墳丘の盛土に含まれていることから、溝を掘削した際の土がそのまま盛土として利用されたことも明らかとなった。

現存する盛土の高さは、最も高いものでも約30cm程度で、それ以上は後世の削平を受け残存していない。主体部の墓壙深度から逆算して、盛土本来の高さを推測すると、遺構検出面から直接掘り込まれたと考えられるS T J 137の木棺墓の墓壙の深度は39cm、同様の状況を示すS T J 161の墓壙深度は44cmである。後者は木蓋土壙墓の可能性も考えられるが、いずれも40cm前後の深さの墓壙が掘削されている。また、S T J 133の第4主体部の木棺は、少なくとも42cmの深さがあることが判明している。このことから、全く墓壙が検出されなかった周溝墓の盛土は、40～50cm以上は最低でも盛られていた可能性が高いと考えられる。

墳丘の高さについての傍証となるのが古墳時代前期の遺構である。S D G 51は、G地点からJ地点にかけて東西に貫く深さ1.0m程度の溝で、G地点でS T G 50の墳丘にあたって迂回し、その後、S T J 02・04をさらに迂回する形で掘削されている。S D G 51は方形周溝墓を迂回する位置では、必ず周溝部分を再掘削して進んでいることから、古墳時代前期までは墳丘がまだ高まりを維持していたと考えられる。また、S T G 50はS D G 51によって周溝が再掘削された後、大規模な洪水によって墳丘も埋没するが、この洪水砂が墳丘盛土に覆い被さる形で検出されており、こうした推定を裏付けるものとなっている。この洪水砂の堆積以後に掘削された古墳時代中期以降のS D J 06などがS T J 19などの墳丘上を直線的に通過していることも、古墳時代前期までは墳丘が残っていたと考える傍証となろう。つまり、周溝の深さがベース面から80cm近くあるS T G 50の場合、墳丘から周溝の底までは最低でも1.5m近いものになる。古墳時代の溝が迂回するという事実を考慮すれば、その落差は2m近いものになると考えられる。

こうした高い墳丘をもつ方形周溝墓に対し、当初から墳丘盛土をほとんどもっていなかったと考えられる方形周溝墓もある。S T J 133では4基の主体部を確認しており、大きくは削平されたとは考えにくいにもかかわらず周溝深度は10cm前後と浅い。周溝が浅いにもかかわらず、主体部が検出されていることから、この方形周溝墓は、当初から周溝は浅く、墳丘も低かったものと考えられる。このS T J 133に隣接し、2基の主体部があるS T J 127も、本来、浅い周溝をもっていたものが、周溝だけが完全に削平されてしまった可能性がある。こうした浅い周溝は調査区の東端に目立つ。

主体部の検出状況と周溝の深浅に相関関係が無いことから、方形周溝墓の造営時には、規模や高低、周溝の深浅などにもさまざまな組合せがあったものと考えられる。墓域として機能していた段階の下植野南遺跡は、きわめて多様な景観であったと考えられる。

(6) 墳丘の拡張

墳丘規模の拡大を目的とした周溝の再掘削の事例は、S T J 05で認められた1例に限られる。ここでは、S T J 03とほぼ同規模に築造されたS T J 05の南溝1(S D J 118)を埋め戻し、南側

へと墳丘を拡張している。周溝は溝底から約20cm程度まで埋没した段階で、人為的に埋め戻されている。南溝1(SDJ118)から遺物は出土していないので、拡張された時期は不明である。この墳丘の拡張に伴う面積の増加は71.4m²から89.4m²への約18m²である。この方形周溝墓では主体部が見つかっておらず、拡張の結果がどのような意味をもつものかは不明であるが、複数埋葬と単数埋葬の差が、概ね80m²前後のラインであることを考慮すれば、当初、単数埋葬を意図して造営していたが、何らかの事情によって複数埋葬する必要性が生じたという可能性も考えられる。ただし、拡張の事例が少ないということは、埋葬対象者が造墓の段階において基本的に決まっていることを示唆している。

(7) 埋葬施設の配置

埋葬施設は、方形周溝墓の墳丘上に単数配置されるもの、複数配置されるもの、周溝内埋葬、区画溝をもたずに単独で位置するものの4者に分けられ、その比率は18:6:1:3^(注38)である。区画溝をもつ主体部の配置は、周溝の方位に規制されているものが大半である。

単数埋葬のものは、概ね墳丘の中央に位置しており、当初から単数配置を意図しているものと考えられ、80m²以下の小規模な方形周溝墓に集中する傾向がある。

複数埋葬のものには並列、直交、不規則の3つの配置パターンがあり、これらは概ね80m²以上の方形周溝墓に集中する傾向がある。当遺跡で検出された複数埋葬の方形周溝墓6基のうち4基までが並列配置である。特にSTJ95では、中央部に埋葬可能なスペースを残さずに2基一对で4基が並列して配置されており、中心埋葬は行わないことを当初から意図しているものと考えられる。直交配置のSTF193の主体部は、先行する木棺を壊さない程度に墓壙同士を切り合わせるもので、これも意図的な配置である可能性がある。不規則配置は、STJ133が該当する。主軸もわずかに異なるほか、並列や直交といった配置も認められない。ただし、周溝の方位に概ね規制されているといえる範囲であり、全く無秩序というわけではない。

単独で位置する木棺墓・土壙墓は、周溝墓の空閑地に意図的にサブトレンチを設けるなどして調査した結果、3基検出することができた。ただし、これらの木棺墓・土壙墓の検出作業には難渋し、STJ161の場合も後世の柱穴が壊していなければその検出は困難で、これらの墓壙以外にもいくつか存在していた可能性も否定できない。

(8) 木棺墓

下植野南遺跡では31基の木棺墓と7基の土壙墓を検出した。土器棺墓は検出されなかった。31基の木棺墓のうち、小口穴をもつI型ともたないII型の比率は、15:16で、ほぼ50%である。なお、人骨は全ての主体部で検出されていない。

木棺はいずれも痕跡のみで、棺材そのものは遺存していなかったが、木棺の構造を推測できる痕跡はいくつか見つかった。まず、棺材の痕跡が平面形で確認できたSTJ84・99では、いずれも棺の側板が小口板を挟み込む型式のものであった。また、STJ137などは、平面では棺の痕跡を確認できなかったものの、小口穴の位置から箱型木棺を想定できるものであった。そして今回の調査で最も注目されるものとして、木棺の側板痕跡の下に筵状の植物繊維痕跡^(注39)を確認したS

T J 95第4主体部がある。この植物繊維の痕跡は、棺内から側板の下へ潜り込み、掘形埋土内へと伸びており、小口穴をもつ型式のものでも、底板がなく筵状のもので代用されていた可能性が考えられる。また、棺底の短軸形状はやや弧を描いた形で、底板が設置できないと考えられるS T J 84の主体部も、S T J 95の第4主体部と同様、筵状のものを使用したか、もしくは棺底板がないものを想定する必要がある。

棺の深度で最もよく残っているものは、S T J 133の第4主体部で、短軸の土層断面から51cmの深さがあることが判明している。これとは対照的に、棺底から棺蓋までが21cmという非常に浅いものもS T J 88の主体部で検出している。S T J 88では土層の断面から棺蓋が側板と小口板の上に乗った状態であることが観察できた。この主体部は棺蓋が棺内に落下した可能性も考えられるが、棺蓋と考えられるラインより上では棺側板が観察できないことから原位置を保っているものと判断した。ただし、この棺痕跡はS T J 84のように明瞭ではなかったこと、棺材自体の厚みを想定して差し引くと棺内の空間が10cm前後になってしまうことから、はたして被葬者が入るのかという問題がある。今後、これと同様の類例が報告されるまでは保留としておきたい。

以上のように、木棺はその平面形や組み方などに細かい差異があり、これに棺材の選択を加えると、きわめて多様な組合せが存在することが指摘できる。

(9) 周溝内埋葬

下植野南遺跡で確実に周溝内埋葬と言える遺構は、S T F 187南溝で検出された1基のみである。この主体部は周溝がほぼ埋没した段階で掘削されている。墓壙は検出面で長軸250cm、短軸116cmの規模である。

周溝内埋葬の場合、周溝がある程度埋没してから墓壙を掘削するため、検出はきわめて困難である。ただし、周溝の断面が概ね「U」字形であるのに対して、木棺墓あるいは土壙墓の断面形は方形に近いため、周溝の掘削を進めていく段階で、周溝の肩を切り込んだ墓壙を検出することができる。仮に土壙墓であっても、墓壙の形状は基本的に木棺墓と同様であると考えられることから、不整形な周溝内のくぼみを積極的に埋葬施設として評価することには問題がある。下植野南遺跡でも周溝内にいくつかの窪みが存在することを確認したが、いずれも埋葬施設とする根拠は提示できなかった。長岡京跡右京第750次・神足遺跡の調査では周溝の一部が急に深くなる箇所を検出したため、周溝内埋葬を想定して周溝を縦に半截して調査を行った。その結果、遺物が落ち込む状態を確認し、掘形や棺痕跡は認められなかったため周溝内埋葬ではないと判断した。^(注40) こうした事例の存在から、周溝の完掘後に溝底が不自然に深いことなどを根拠に周溝内埋葬と認定することはできないといわざるをえない。

S T J 187の周溝内埋葬は、周溝がいくらか埋没した段階で墓壙が掘削されている。理論的には周溝を掘削した直後の段階から周溝内埋葬を行うことは可能であるが、実際のところ、近畿地方の事例では、周溝掘削直後に埋葬されたものは、墓壙の掘削深度から逆算すると無いか、あるいは有ってもきわめて少ないようである。下植野南遺跡では、前述のように比較的多くの方形周溝墓で周溝の再掘削が行われている。周溝内埋葬はこうした周溝の再掘削が終了し、その後、再

掘削が行われないことが確定した時点で、はじめて周溝内に埋葬されるということになり、ここにも計画性が認められる。

方形周溝墓の被葬者は、墳丘上か周溝内か、単数か複数かに関わらず、きわめて計画的に墓壙が配置されている。特に、複数埋葬の際には、その墳丘上への配置位置まで計画的で、明らかに中心埋葬を行わないことを意図したものが散見される。そして、周溝内の被葬者も計画的に埋葬された可能性が高いと考えられる。このことから、造墓の契機となる人物が死亡し、方形周溝墓が造営される時には、その区画内に何人が埋葬されるのかにとどまらず、誰がどこに入るのかといったことも含めて計画的に配置されており、周溝内までも埋葬対象者は絞り込まれていた可能性が高いと考えられる。

(10) 棺内出土遺物

主体部38基の棺内、墓壙内の埋土はそれぞれを8分割して全量採取した。石鏃はS T J 133第1主体部で7点が出土したのを最多に、7基で出土した。ただし、これらの中には、石器の項目で報告したように、下層のものと考えられる石鏃も混在している。

石鏃のいくつかは先端が欠損しており、その一部はウォーターセパレートによって回収した。人骨が遺存していないため正確なことは分からないが、先端の折れたものも棺内から出土していることから、おそらく人体に石鏃が刺さったままの状態^(注41)で埋葬された可能性が高いものと考えられる。

唯一の副葬品をもった主体部となったS T J 99では、石剣1、石鏃9、剥片44、管玉1が出土した。石剣については棺内に置かれた状態^(注41)で出土している。石剣以外の遺物については現状では副葬品であるのか、何らかの特殊な儀礼行為の痕跡であるのか判断が難しい。今後類例が増加するのを待ちたい。

(11) 供献土器

供献土器の認定について深澤氏は、包含層からの混入などを考慮する必要から、残存率61%を超えるものを供献土器と認定するという明快な基準^(注42)を提示した。しかし、下植野南遺跡では次の二つの観点から、小片であっても供献土器と認定することとしたい。すなわち、一点は下層に弥生時代の遺構あるいは包含層が存在しておらず、混入の可能性はきわめて低いこと、もう一点は豊中市蛍池北遺跡^(注43)や川西市加茂遺跡150次調査^(注44)で指摘された、破碎された土器が周溝内に投棄されている可能性があるのではないかとの問題提起からである。

これまで、方形周溝墓の周溝内から出土する土器は、大阪市亀井遺跡で墳丘上に立て並べられた土器が検出されたことなどにより、墳丘上から転落した供献土器と認識されてきた。しかし、奈良県田原本町阪手東遺跡などでは、墳丘上ではなく、周溝内に供献土器が立て並べられている事例も存在することが明らかになった。また、前述の蛍池遺跡や加茂遺跡などでは、破碎された土器が周溝内に投棄されている可能性も指摘されるようになった。供献土器のあり方もきわめて多様であることが、近年の調査によって明らかになりつつあるといえる。

下植野南遺跡では墳丘上・周溝内を問わず、供献土器が立て並べられている事例は見受けられ

なかった。これに加えて明らかに墳丘上からの転落とは考えられない事例が複数ある。S T F 181の南溝では、幅1.5mの範囲に6個体の土器が、S T F 180の東溝でも幅3.8mの範囲に8個体の土器が集中して出土した。これらの土器は、ほぼ同一のレベルで検出されたばかりでなく、S T F 180東溝では破片となった土器が複雑に折り重なるように出土した。つまり、これらの土器は墳丘上から転落したのではなく、周溝内に破片の状態で投棄されたものである可能性がきわめて高い。こうした問題意識をもって検討すると、土器が上下に割れていて、その口縁と底部が向かい合うように接して出土したS T F 181の水差47、東溝と西溝で出土した土器が接合するS T J 105の壺153の墳丘側ではない方向から転落したと考えられるS T G 50南溝の壺141、墳丘の外にあたる位置で土器が出土したS T G 73の壺127など、その様相もきわめて多様であることが分かる。

周溝内でのこうした供献土器の状況から、これまで一括して供献土器と呼ばれてきたものを墳丘上もしくは周溝内に立て並べられる「供献」、鋤などの木製品が周溝底に置かれたような状態で出土する「遺棄」、そして破片となった土器を周溝に落とし込む「投棄」の三つに分類して理解することが必要である。

「供献」は、墳丘上に立て並べた亀井遺跡例^(注45)と、周溝内に立て並べた阪手東遺跡^(注46)などの事例がある。墳丘上に並べられた供献土器は周溝内に転落して「遺棄」「投棄」との区別が難しい例もある。下植野南遺跡ではこの「供献」にあたる確実な事例は確認されていない。

「遺棄」は、周溝内にいた人物によって置き去られた遺物を想定している。つまり周溝底に接して置かれた鋤などの木製品に加え、周溝の底に接するように出土した土器の一部がこれにあたる。なぜなら、墳丘上からの「供献」土器の転落は、墳丘の一部が崩落することによって生じる現象であり、周溝底に接する可能性は低いと考えられるからである。下植野南遺跡では、先に挙げたS T F 181の水差47などがこの事例にあたる可能性が高い。

最後の「投棄」については、蛍池北遺跡のように破碎土器がまとまって出土しなければ認定が難しいが、完形もしくはそれに近い形であっても「投棄」にあたる場合がある。下植野南遺跡ではS T F 181の6個体、S T F 180の8個体の事例などが該当する。

これら三つの遺物のあり方は、葬送儀礼と密接に係わる差であり、こうした行為の組合せが各地域における葬送儀礼の差違や階層差などを考える指標となる可能性がある。今後、遺物の出土地点と接合状況などの詳細なデータの分析を行い、こうした課題を解決していく必要があろう。

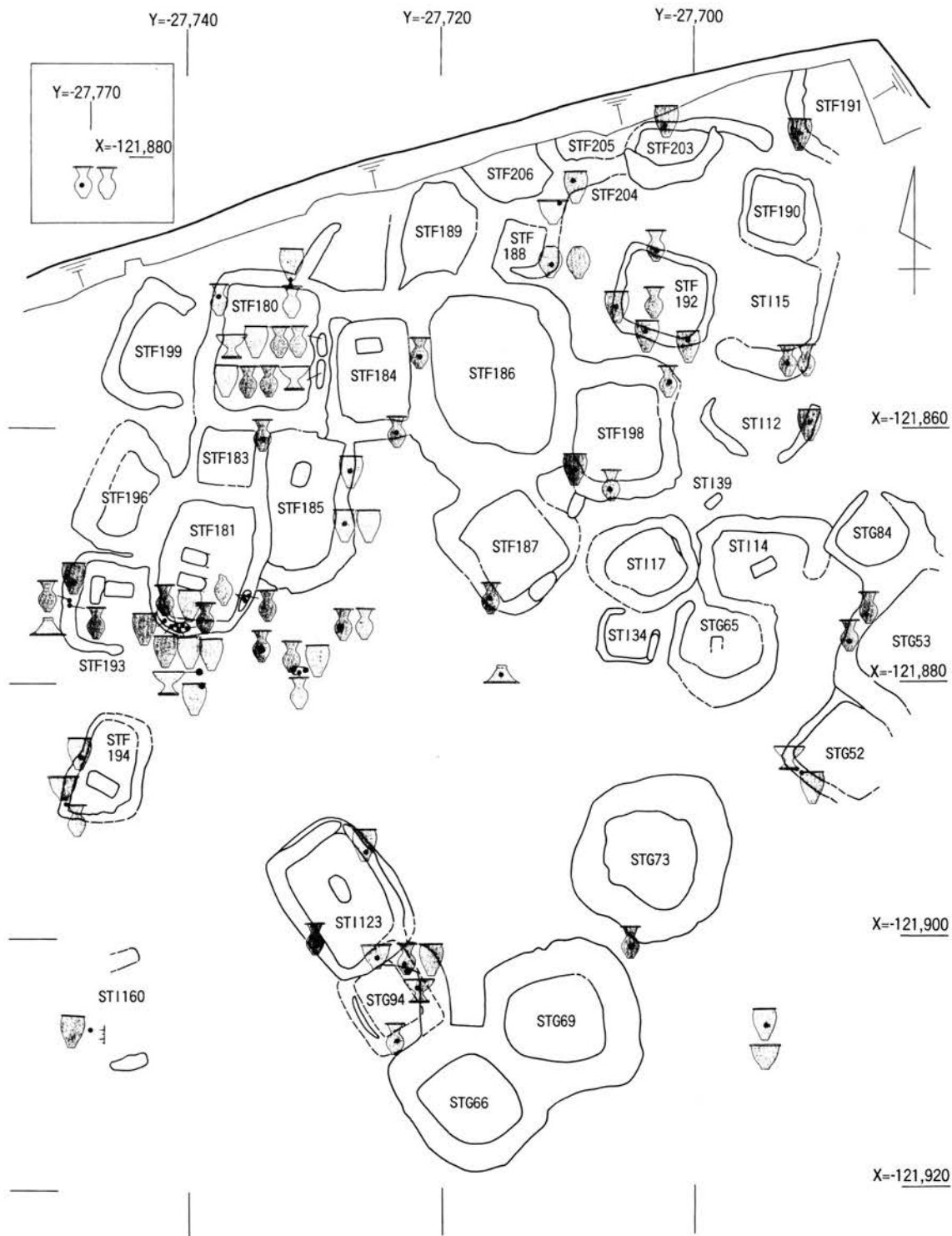
(12)穿孔と打欠

下植野南遺跡では穿孔土器は出土しなかった。もちろん、穿孔部が偶然欠損している可能性も考えられなくはないが、報告可能な土器全てに穿孔が認められないことから、ゼロではなくともその施行率はきわめて低いものと考えられる。

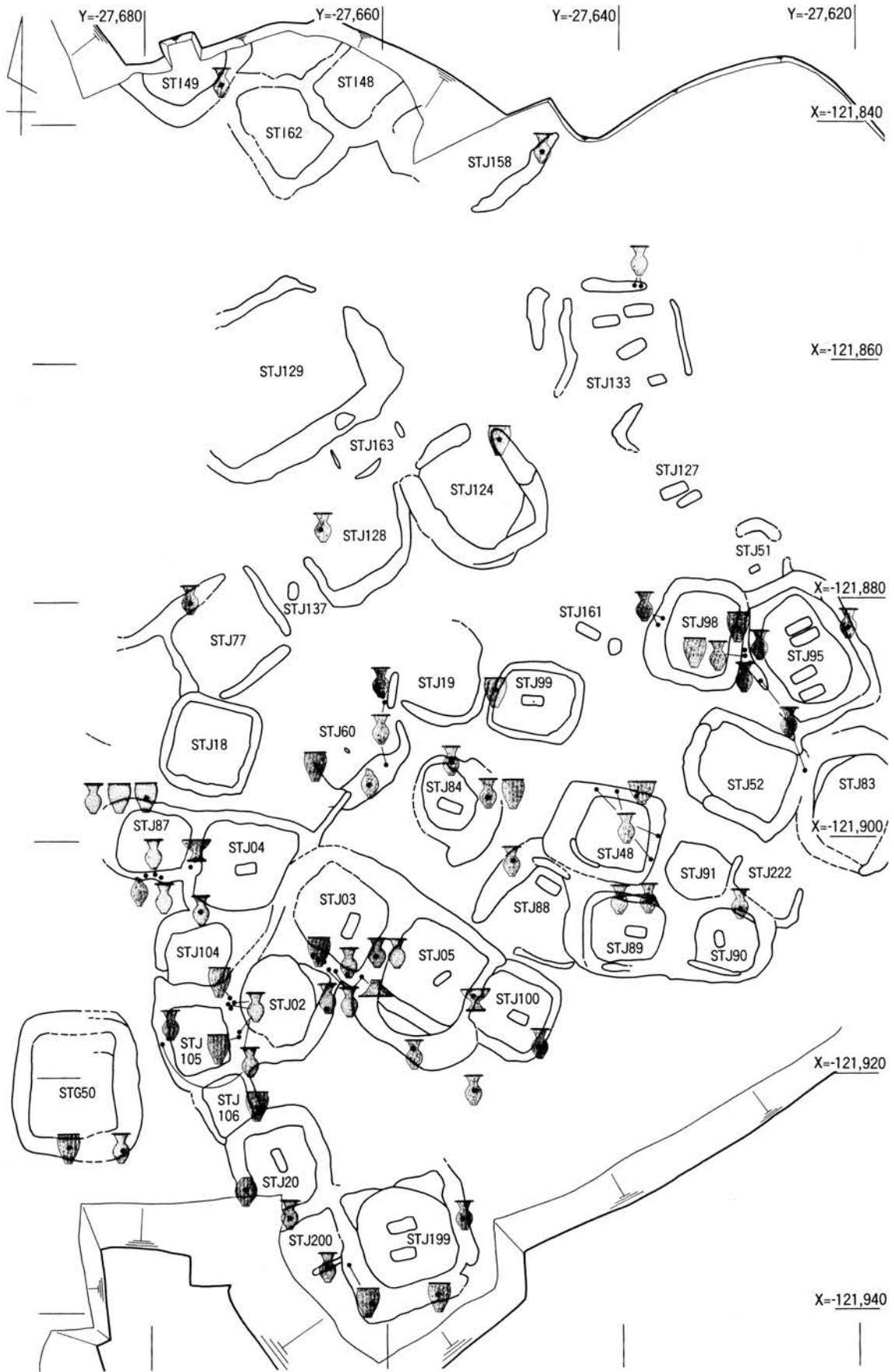
同じ山城地域にあり、下植野南遺跡とはほぼ同時期と考えられる神足遺跡^(注47)(長岡京跡右京第766次調査)の資料には、穿孔土器が報告されている。もとより、全ての土器に穿孔が行われるものではないことは、すでに指摘されているとおりであり、実際に土器の機能を奪うことよりも、それ

が執り行われたと衆人が認識することが重要なのではないかと^(注48)の指摘もある。土器は欠損しやすいだけに認識が難しい部分ではあるが、下植野南遺跡と神足遺跡との差異について、葬送儀礼の執行が、地域や遺跡によって若干の差があることを考慮する必要があるだろう。

壺の口縁部や高杯の脚部の一部が失われた打欠の例がある。特に S T J 100で出土した壺186な



第15図 方形周溝墓出土土器概念図(1)



第16图 方形周溝墓出土土器概念图(2)

どは、出土時に周溝の底に向いた側の口縁が欠損していた。転落時に欠損したものでなければ、こういったものが打欠の事例と考えられる。また、口縁部が不自然に全周欠損している甕65、同じく脚裾が全周欠損している高杯183なども、状況証拠から、打欠の可能性が高いと考えられる。

(13) ミニチュア土器

下植野南遺跡ではミニチュア土器もしくは小形の土器が数点出土している。このうち、3例は、ミニチュアではない土器の内部に納められていた可能性が高い。G地点で検出したSGX97は、残念ながら方形周溝墓に伴う資料ではないが、底部を打ち欠いたと思われる甕の内部から、小形の鉢が出土している。また、現地で出土状況をおさえたものではないが、STF188の無頸壺75をまとめて取り上げてもち帰り、洗浄した際にミニチュア土器76が納められていることが明らかとなったものである。下植野南遺跡では確実に^(注49)おさえることができなかったが、長岡京跡右京第766次・神足遺跡の調査では、確実な例が報告されていることから、供献土器の内部にミニチュアもしくは小形の土器をおさめる儀礼行為が行われていたものと考えられよう。ミニチュア土器の用途を考える上でも重要な成果である。

(14) 朝鮮系無文土器

STF180では、朝鮮系無文土器の可能性のある甕65が出土した。その出土状況は周溝の東側で4個体の破片が混在しつつ溝底からやや浮いた状態で出土した土器群の中に含まれており、甕65は口縁部を除く約9割近くに復原でき、図示した部分についてはほぼ完存に近い形で出土している。このことから、口縁部は意図的に打ちかかれたものである可能性が高いといえる。

この甕は胴部が張らず砲弾型に立ち上がる甕で、外面調整はタテハケカタタキの後、ナデによって整形するが、粘土紐の痕跡がよく観察できることから、1次、2次調整ともにていねいなものではない。この甕の特徴は、最終調整でやや角ばった棒状の工具をタテ方向に、ちょうどタテミガキと同じ動きで器面を調整する点で、結果的にミガキに近い効果を生むが、器壁には複数のタテ方向のキズが残る。一見してケズリのようにも見えるが、単位の幅を認識することができない点が異なる。また、器面に多くの砂粒が浮き出ているにもかかわらず、動いた形跡がないことから、この調整はケズリではないと判断できる。底部調整はナデで、2枚分の木葉圧痕が残っている。

内面はナデ調整で成形するがやはりていねいではなく、粘土紐の接合痕は顕著に観察できる。粘土紐の接合痕から、内傾接合である。胎土には2～3mmの長石・石英が多く、2mm以下の赤色斑粒とチャートが少量含まれる。やや角のある亜角礫が目立つのが特徴といえば特徴だが、在地のものと考えられる土器に含まれる鉱物と比べても、違和感があるということはない。また、器壁も内面が淡褐黄色、外面が灰褐～黄褐色で、同様に違和感があるものではない。器壁の内面にはドーナツ状のスス痕跡が認められ、外面にはスス痕跡とともに炭化物も付着している。供献土器として特別に扱われたというような出土状況は認められない。

この土器を朝鮮系無文土器と関連づけて考える根拠はその形と調整である。中でも調整は、普遍的な山城地域の甕を製作する際にどこかの工程を省けば、この甕ができ上がるというものでは

ない。具体的には、当該地域の甕は形態的には砲弾型にはならない、そして内面はタテ方向のナデで調整することが常で、はっきりと粘土の接合痕を観察できるものは少ない。特にミガキのような効果を生む最終調整は、当該地域では最終調整ではありえないものであるという点が在地の土器との差異といえる。

片岡宏二氏^(注50)は、朝鮮系無文土器を「朝鮮系無紋土器によく似た形態・製作技術をもったものでも、朝鮮系無紋土器との接触がないものは当然それに含むべきではない」と定義しており、今回の資料はこれに抵触する。器壁に残された調整は、諸岡遺跡や羽生遺跡などで出土する朝鮮系無文土器のそれに酷似するものの、これらは弥生時代前期に比定されるもので、時間的にも開きがあることが問題となる。北部九州では、その後やや時間をおいて、弥生時代中期後葉の時期に再び出土するようになるが、下植野南遺跡の事例は丁度この空隙の中におさまるものとなる。近畿地方に限れば、片岡氏や秋山浩三氏^(注51)がともにその可能性を認める資料は弥生時代前期のものに限られており、下植野南遺跡の例は、明らかに新しいものとなる。近畿地方では異質な調整や仕上げではあるが、これまで知られている朝鮮系無文土器との接点はない。類例の増加を待ちたい。

(15) 被葬者像

畿内地域の弥生時代中期段階では、2～3歳に満たない乳幼児は土器棺墓に、それ以上の年齢に達するとは成人と同じ埋葬施設^(注52)に葬られるようになる。また、木棺墓のサイズと年齢の相関関係から、概ね12歳以下の小児は木棺長軸が120cm以下のものに、成人はそれ以上の大きさの木棺に葬られる傾向があることが指摘できる。

さて、この分析に沿って下植野南遺跡の主体部を検討すると、確実に木棺墓といえる26基のうち、3基が12歳以下の小児、残りが12歳以上の男性、もしくは成人女性ということになる。土器棺墓は、下植野南遺跡では検出されていないので、乳幼児埋葬はなかったことになる。土器棺墓は削平された可能性も皆無ではないが、乳幼児埋葬よりも成人埋葬の数の方が上まわるという傾向は、この遺跡に限られたものではなく、乳幼児の死亡率からすれば、きわめて不自然といわざるをえない。下植野南遺跡をはじめとする畿内の方形周溝墓の被葬者が、集落構成員の全てではなく、選択された人物であったと考えられる。

下植野南遺跡では、先にも触れたように、方形周溝墓の平面積が概ね80m²を境に、埋葬施設の単数、複数の違いがあるようである。このことを手掛かりに被葬者数を想定すると、その数は少なく見積もっても120名以上という数になる。^(注53)

(16) 方形周溝墓の階層性

方形周溝墓の被葬者は、選択された人物達であったと考えた。この観点に立てば、少なくとも方形周溝墓に葬られる人とそうでない人の差が存在したということになる。後者は、無区画木棺墓などに葬られたものと考えられるが、それでも乳幼児・小児の埋葬数は少なく、集落構成員の全てが埋葬されたとは考えがたい。つまり、方形周溝墓に葬られる人、無区画の埋葬施設に葬られる人、考古学的に認識不可能な埋葬に付される人という、少なくとも三つの階層に分かれていたことが分かる。

墳丘の規模は、主体部の数によって規定されるものと位置づけた。埋葬施設の状況からきわめて計画的に被葬者が、選択・埋葬されていることが窺われることから、共同体内で一定の規制が存在し、整然と埋葬が執行された可能性を指摘した。ただし、この時期の方形周溝墓にみられる墳丘規模を、格差もしくは序列の表示とは考えられない。墳丘規模は、埋葬可能な人物の多寡と同義であり、その数が墳丘の面積を規定するという点に注意したい。

複数埋葬は、埋葬可能な人物を多く抱えるといった点以外にも、単数埋葬とは異なり土器棺墓、つまりは乳幼児埋葬を行う点が重要である。乳幼児は集落構成員として認められていないからこそ、成人とは異なる埋葬施設を与えられていると考えて良ければ、複数埋葬の被葬者は、「集落構成員として認められないほど小さな乳幼児を埋葬することが許される階層・集団」である可能性が高い。その場合、複数埋葬を多く抱えるA墓群は、単数埋葬が基本となるC墓群よりも相対的に優位にあったと見ることもできる。ただし、いずれの場合でも、その格差は大きなものではない。

3. まとめ

下植野南遺跡では75基の方形周溝墓と4基の区画をもたない木棺墓、土壙墓が検出された。その墓域は明らかになった部分だけで約17,000㎡に及び、山城地域のみならず畿内でも屈指の墓域となった。この墓域に葬られた被葬者達がどのような集団であるのかについては成案をもたないが、少なくとも集落構成員の全てではなく、選択された人物達であったことが指摘できる。その数は少なく見積もっても120名以上と試算した。この試算が正しければ、この墓域を支えた集落は一定以上の規模のものが想定される。しかし、方形周溝墓から出土した土器に遠隔地からの搬入が認められないことなどを勘案すれば、方形周溝墓の数こそ多いものの、いわゆる拠点的な集落ではなかった可能性が高いといえる。墓域が大規模になるのは単数埋葬が多数を占めるためであろう。同時期のもので、やはり大規模な墓域で知られる滋賀県服部遺跡も同様に理解することができる。下植野南遺跡の居住域は近隣に存在するものと考えられる。

この墓域はA～Eの5つの墓群で形成されている。それぞれの墓域に面積の大小、墳丘の高低、周溝の深浅といった要素が認められ、特定墓群の際だった優位性というものは認められない。ただし、複数埋葬のものは単数埋葬のものより、「埋葬可能な人物を多く抱える」という意味で優位にあるものと考えられる。そういった考えが許されるならば、複数埋葬を多く抱えるA墓群は、単数埋葬が基本となるC墓群よりも相対的に優位にあったと見ることもできる。

方形周溝墓の規模は、主体部の数に規定されるものと考えられ、概ね80㎡前後に単数埋葬と複数埋葬の境界が認められた。これらは、造墓の段階で、何人埋葬するのか決定していることを示唆している。特に、並列埋葬の状況から、誰がどこに埋葬されるのかといったことまで計画されている可能性も指摘できる。また、墓域のランドデザインに先立ち、一定の墓群占有範囲も定められていたようである。きわめて整然とした葬送のあり方が明らかになってきたと考えられる。これらの墓群では、複数の地点で周溝の再掘削が行われていることを確認した。再掘削は、単数

埋葬のものにも行われており、かつ周溝内埋葬はこの再掘削が行われなくなつてからの被葬者と考えられることから、墓群、墓域の管理は共同体によって統一的行われていた可能性が高い。

木棺については、確認できたのが痕跡のみであったが、重要な成果があつた。この時期の木棺に埋葬される被葬者は、概ねそれぞれの体格に応じた木棺が与えられる。木棺はこれまでも指摘されてきたように、そのあり方は多様である。特に棺底板がなく、筵状のものが代用とされる場合があることが明らかとなつたのは重要な成果である。棺材の選択と合わせ、これらがどのように決められるのか今後検討を進めるべき課題である。

(藤井 整)

第2節 下植野南遺跡出土の弥生時代石器

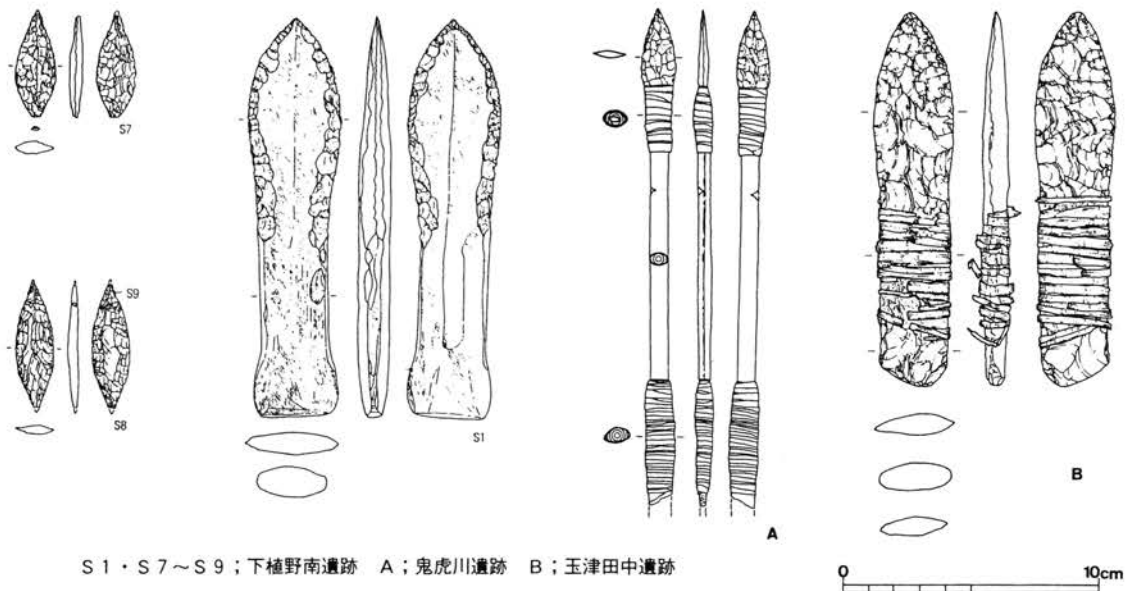
1. S T J 99主体部出土の石剣

今回報告する下植野南遺跡からは第17図に図示した石剣が出土している。材質はサヌカイトであるが、器表面の大部分には研磨加工が施されている。遺跡のある乙訓地域は、西側に粘板岩を産出する丹波帯があり、この地域では石剣の80%以上が磨製石剣であり、そのほとんど全てが粘板岩を素材として用いている。サヌカイトは通常、打製石器に用いられる。このことはサヌカイトが硬く、研磨整形に適さない石材であることによると考えられている。しかし、近くの東土川遺跡では、研磨の後打撃によって加工された石器片が2点出土している。近畿地方ではこのような加工の石剣の数は決して多くないものの、散見することができる。

S 1の石剣は研磨加工の後、打撃によって刃部が形成されている。石剣の場合、磨製であれ打製であれ、その素材剥片の生産や、粗い整形加工は打撃によって行われる。石器の説明で前述したように一般のサヌカイト製の打製石剣に見られるように基部側に自然面の痕跡が認められる。このことは打製石剣の工程を踏襲していることを示唆する。本資料ではこのように剥離による素材礫からの素材剥片作出、打撃による荒整形加工、研磨による整形、打撃による刃部形成が行われている。磨製石剣は通常、研磨工程で刃部が作られる。このように打製で刃部が作られる場合、磨製石剣が破損し機能再生のため再加工された可能性が指摘できるが、本資料は磨製面の分厚さや形状から考えて、再加工の可能性はきわめて低い。打撃による刃部形成は、製作時から意図されたものである。刃部は鋸歯状を呈するよう加工された打製石剣を意図した剣身と、把頭をもつ滑らかに研磨された剣把が認められる。

この石剣と同じような平面形をもつ石剣は、大阪府堺市四ツ池遺跡、兵庫県神戸市の玉津田中遺跡から出土したサヌカイト製石剣の中に認められる。玉津田中遺跡、唐古鍵遺跡、恩智遺跡に見られるように剣把部分が蔓巻にされていたならば、本遺跡の石剣と同型の打製石剣は手にもつた場合大きな違いを見せない。

本遺跡出土の石剣は、直線状の基部をもつ平面形が三角形のもの、基部の両側辺が内湾するもの、杏仁状の平面形をもつものの3種があり、杏仁状のものは身幅に比べ厚いものと薄いものがある。このうち杏仁状の石剣は根挟みなどのように矢に着柄された形態は、第17図の石剣を握っ



S1・S7～S9；下植野南遺跡 A；鬼虎川遺跡 B；玉津田中遺跡

第17図 同じデザインを持つ石製武器

た剣身部との形態的類似が見て取れ、同じ意匠のもとに作られたと考えても良いであろう。このような装着例は、東大阪市の鬼虎川遺跡の出土資料に認められる。

本石剣と同じように把頭をもつ石剣は、京都府では亀岡市太田遺跡や久御山町市田齊当坊遺跡で見られるが、いずれも粘板岩製である。太田遺跡出土のものは剣身部の形状が分からないが、市田齊当坊遺跡のものは鉄剣形石剣と呼ばれる石剣の剣身部と同じく直線状であり、関部が形成されている。

2. 武器が出土する主体部

弥生時代の埋葬主体部から青銅器などの武器が発見されることは古く知られていたが、近年近畿地方において石製の武器が、埋葬主体部から発見される例が増加してきている。特に京都府内においては類例が増え、今回の発掘調査においても3例が確実に共伴する例として、新たに追加することになった。

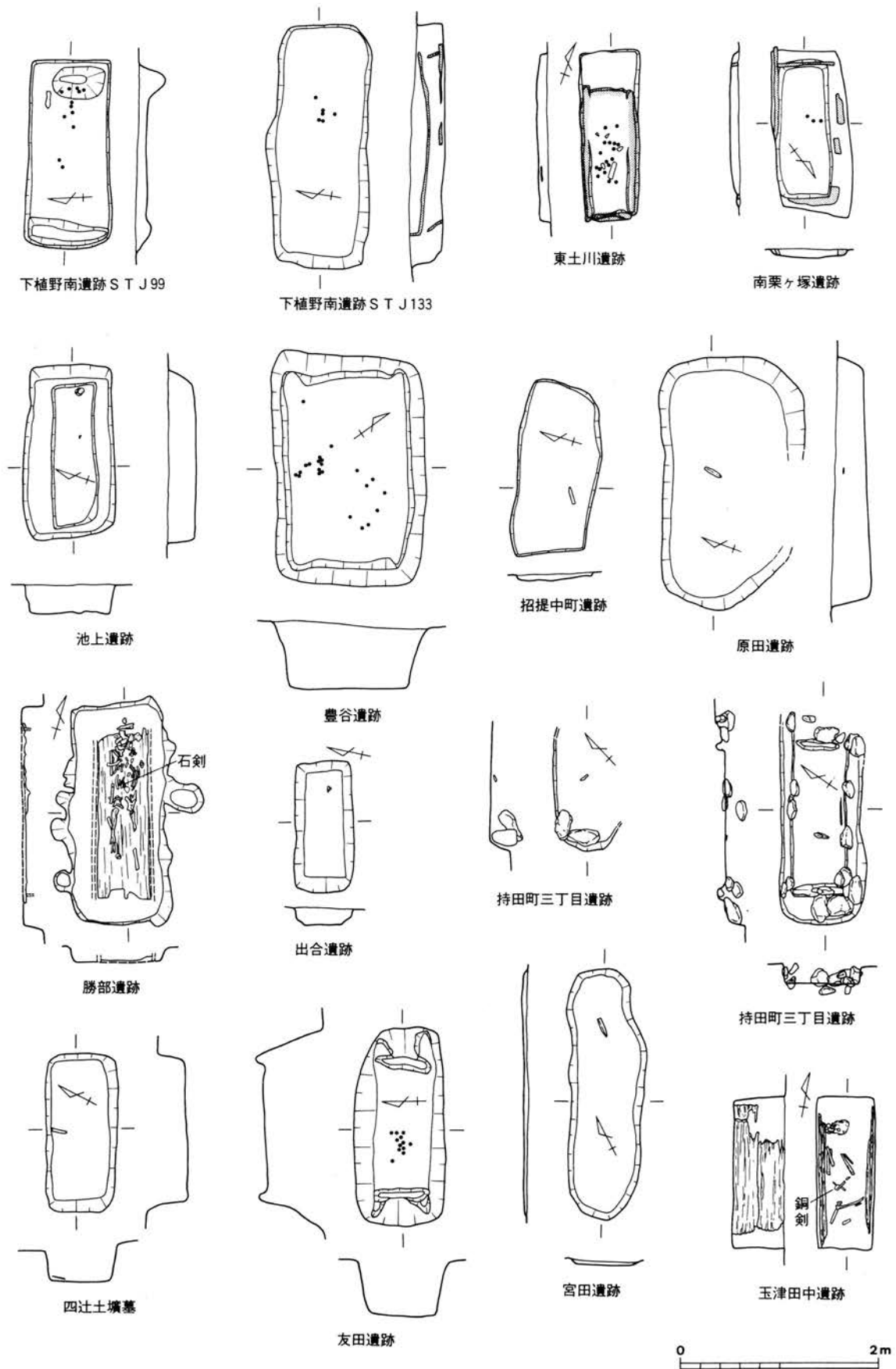
(1) 京都府内の武器出土主体部およびその可能性のある土壌

大山崎町下植野南遺跡

今回の報告した石製武器出土の墓壙のうち、S T J 99・133については、遺物の出土状況が明らかであるため説明を加えたい。

S T J 99については出土遺物の章で詳述したように、磨製と打製の技術を用いた石剣1点、打製石鏃9点が出土している。

S T J 133は4か所の主体部が検出された。その内、小型の部類に属する第1主体部から打製石鏃が出土している。主体部は組合せの木棺で、底板や棺蓋の痕跡が確認されている。石鏃は棺の中央東よりで発見されている。また破損した石鏃が見られ、接合関係のあるものは近い出土位置どうしで接合する。その場での破碎供献行為であればこのような分布は意図的に小さな剥片ど



第18図 京都府内石製武器出土墓壙および本州西部・四国の剣出土土墳墓平面図(再トレース図)

うしを集めるという行為が想定されなければならず、やはり、射込まれたものという考え方を傍証している。

長岡京市南栗ヶ塚遺跡^(注54)

下植野南遺跡から北へ約1kmと近接した遺跡である。この調査では6基の方形周溝墓が検出された。打製石鏃が出土したのは方形周溝墓3911の主体部である。周溝内の出土遺物から弥生時代中期前葉と考えられる。主体部は周溝墓墳丘部分のほぼ中央に位置し、墓壙長軸は周溝の長軸と平行している。主体部は棺をもつ構造で、サヌカイト製の打製石鏃3点は木棺中央部の北西の長側板側に偏在した状態(第18図)で検出された。出土石鏃のうち1点は先端部が欠損している。

京都市東土川遺跡^(注55)

京都市の桂川右岸低地に広がる、弥生時代中期中葉～後葉の遺跡である。弥生時代の遺構には方形周溝墓、環濠があるが、住居跡は検出できなかった。方形周溝墓の溝内に埋葬されたと考えられる木棺直葬の主体部S T 385619の棺内からは、中央部を中心に磨製石剣7～8個体、石鏃12個体が出土している。検出された石剣は全て磨製で切先およびその近くの破片である。石鏃にも衝突による破損と考えられる痕跡が多く認められた。同じ周溝内から出土した土器から、中期中葉～後葉の遺構と考えられる。

遺構の上部は大きく削平されており、墓壙の検出面からの深さは11cmと浅く、掘形の規模は長さ約1.75m、幅約0.56mを測る。木棺の小口部分と掘形には約0.35mの空間が存在する。この部分は棺のあった部分より底部が若干高くなっており、赤色の顔料が残る。切り取られた頭部などが安置された可能性も指摘できる。木棺は小口板を長側板で挟む形態である。その内法は長さ約1.25m、幅約0.4mを測る。

八木町池上遺跡^(注56)

亀岡盆地の北端に位置する弥生時代中期の遺跡である。平成13(2001)年度までに17次の発掘調査が実施されている。方形周溝墓は60基以上、それに伴う埋葬主体部120か所以上が検出されている。第4次調査の埋葬主体部S X B 05から磨製石剣の切先が出土している。出土した2点の破片は接合関係が認められる。副葬品と考えられる脚付きの小形の鉢が墓壙内から出土している。

第12次調査では主体部から、打製石鏃と考えられるサヌカイト片が出土しており、未報告ではあるが第13次調査においても磨製石鏃が棺内から出土している。

綾部市青野遺跡^(注57)

青野遺跡第6次調査において発見されたS K 8112中から磨製石剣が出土している。この土坑は報告文では長さ1.6m、幅0.5mで土坑の底部は丸いと書かれている。主軸の方向をそろえて、同様な土坑S K 8111・8113が近接して存在することから墓壙であると認定している。しかし、弥生時代の中期に属する墓壙の場合、墓壙底は平である。磨製石剣は報文中では先端部とされるが、関部と考えられるふくらみや、先端部とした部分の両側の面取りなどから、尖った中茎部をもつ着柄式磨製石剣の基部の可能性が指摘できる。

久美浜町豊谷遺跡^(注58)

2基の台状墓が低丘陵上で発掘調査された。丘陵頂部にある1号墓には溝はなく、1号墓から続く尾根上に造られた2号墓には1号墓側にのみ尾根を切るように溝が掘られている。1号墓主体部からは22点の打製石鏃が出土している。先端部が欠損したり、先端部のみ石鏃も見られる。主体部出土の石鏃は中央部に集中する傾向が認められるが、豊谷遺跡の事例は、出土した石鏃は2群の集中部に分かれている。このことは、棺の幅が広いことから2体以上の遺体が埋葬されていたことを示している可能性が指摘できる。1つの棺に2体以上の埋葬例は、奈良県四分遺跡で確認されている。

1号墓は、古墳時代には境谷古墳群のA-1墳として利用されている。弥生時代の1号墓主体は墳頂部の中央にはなく周縁部に近い位置に存在する。最もよい位置と考えられる中央部は8.5×2.6mの大形の主体部によって壊されている可能性が指摘できる。表土掘削時には打製石剣が出土している。丘陵の頂部であり生活痕が見られないことから本来は主体部中に入っていた可能性も指摘できる。

(2)本州の剣出土の主体部および主体部の可能性のある土壌

大阪府能勢町原田遺跡^(注59)

弥生時代中期中葉～後期の方形周溝墓5基が検出されている。そのうち1号墓は24×13mの規模をもつ弥生時代中期後葉の丘陵上に造られた方形周溝墓である。18か所の主体部が検出されたが、そのうち墳頂部でも周辺部に位置する第1主体部から磨製石剣が出土している。磨製石剣は墓壙の中央部に墓壙の主軸と直行に近い状態で出土しているが、検出レベルは、墓壙底から25cmほど浮いた状態で検出されている。

大阪府枚方市招提中町遺跡^(注60)

弥生時代前期～中期中葉にかけての遺跡である。中期前葉と考えられるSK2015からサヌカイト製の打製石剣・打製石鏃がそれぞれ1点ずつ出土している。墓壙の規模は1.7×0.8m、深さ0.06mである。木棺の痕跡は検出されていない。打製石剣は水平の状態で、土壙の主軸とやや角度をもって棺の中央部から少し南の方にずれた位置から出土している。石鏃は完形で長さ18.1cm、幅3cm、厚さ1.15cmである。石鏃については出土位置が確認されなかった。石鏃の先端部は欠損しており、鏃が射込まれたと考えられる主体部資料と齟齬はなく、全てが副葬品とした報告には賛成しかねる。

大阪府枚方市星ヶ丘西遺跡^(注61)

星ヶ丘西遺跡では、主体部中から磨製石剣が出土している。詳細は未報告のため不明。第29次調査では木棺内から打製石鏃が1点出土している。

大阪府豊中市勝部遺跡^(注62)

弥生時代中期の第3号墓からは打製石剣1点が出土している。埋葬施設は長側板で小口板を挟む形態の木棺で、底板も発見されている。全身骨格の概要が分かる骨も残されており、腰の部分で石剣が出土している。骨との関係で言うと、腰の背面側に石器があったことになる。打製石剣は先端部が折れているが、骨と供に取り上げられており、その欠損部が存在するのかどうかを調

べられる状態にない。墓壙の長さ2.2m、幅1mを測る。また、弥生時代中期後葉の方形周溝墓が1基検出され、主体部と考えられる土坑が3か所発見されている。そのうち1基の主体部から磨製石剣が出土している。出土位置は未報告である。

大阪府高槻市宮田遺跡^(注63)

磨製石剣が完形の状態、単独の土壙中から出土している。出土状態は土壙の中央部で主軸に対して石剣が垂直方向に傾く状態である。しかし、単独の遺構であり、形状が不整形で長さが2mを越すのに対して、幅が50cmと狭長であり、棺痕跡も認められない。溝やほかの遺構の残欠部である可能性も指摘できることから、参考資料としておきたい。

愛媛県持田町松山市三丁目遺跡^(注64)

弥生時代前期の24基からなる土壙墓群が発見されている。土壙は長軸をそろえて、列をなすように分布している。墳丘や周溝はみとめられない。墓壙内には石が配され、小形の壺が供献されているなどの共通する特徴をもっている。土壙のうちS K32・34から磨製石剣が完形で出土している。S K32は、2.1(推定)×0.87mの規模をもつ土壙で、木棺痕跡が認められる。木棺の小口は墓壙底を掘りくぼめ固定するタイプのものである。管玉が10点、棺の北東半に出土しており、北東側に頭位があったものと考えられる。磨製石剣は墓壙の中央やや南西よりの位置で、石器の主軸と墓壙の軸が直角に近い状態で出土している。磨製石剣は縞目をもつ石材でできた着柄式の石剣で、長さ15cm、幅3.64cm、厚さ0.97cmである。S K34は後世の遺構によって墓壙の斜め半分が破壊されているが、そのほぼ中央部と考えられる部分から、墓壙の主軸と45度程度の角度をもった状態で、有柄式の緑泥片岩製磨製石剣が出土している。墓壙の規模は、現存長が1.14mで、幅が0.62mである。墓壙の小口部分には2個の礫が認められる。石剣は長さ15.43cm、幅3.17cm、0.85cmである。

持田町遺跡の土壙墓では、上記以外に8か所の石鏃が出土した墓壙が報告されている。7か所が全て打製石鏃で、1か所が磨製石鏃である。

兵庫県神戸市出合遺跡^(注65)

中期中葉の方形周溝墓S T02の主体部から、打製石剣の切先部分出土している。S T02の主体部は周溝墓の中央部に位置し、墳丘上には1か所しか主体部が検出されなかった。主体部は木棺の痕跡が認められる。木棺の長さは、1.09m、幅0.38mである。切先部分は東の小口よりで出土している。棺の大きさは成人の身長に比べ小さいため、成人であれば身を屈曲させた状態で埋葬されたと考えられる。

岡山県山陽町四辻峠台状墓^(注66)

弥生時代中期中葉～後葉に位置付けられる台状墓で、台状墓主軸に直交する7つの埋葬主体部が検出されている。埋葬主体部は、中央に位置する第3主体部が最も大きく、中央部から離れるほど小形になる傾向が見て取れる。そのうち最も小さな第1土壙から完形の打製石剣が1点出土している。石剣は墓壙中央北側に墓壙の主軸に対して、ほぼ直交した状態で出土している。1号土壙を除く6か所の埋葬主体部は、墓壙底の小口部分に溝が掘られていることから、小口板を墓

墳底に立てる構造をもつ木棺の存在が想定されるが、第1土墳には、そのような施設は見られなかったことから、ほかの主体部との違いを指摘することができる。第7土墳からも打製石鏃が出土している。

島根県浜田市鱒石遺跡^(注67)

弥生時代前期の32か所の土坑が検出されている。そのうち1か所は、墓壇上面にぎっしりと自然石が並べられていた。土坑の形状は隅丸長方形のものと、円形または不定形のものの2種に分けられる。不定形のものはいかに切り合う事例が多い。また、隅丸長方形の土坑は不定形のものに後発する。報文中に述べられているもの全てが墓壇であるかは、出土状態の詳細な検討によって性格付けされるべきであろう。ちなみに、土坑中からは、着柄式磨製石剣の基部側、銅剣形石剣の中間部がそれぞれ1か所づつ認められた。出土状況は不明である。土坑内からは、石鏃なども見つかるが、石斧、石ノミ、石包丁、砥石、石鎌、剥片など多様な石器が発見されており通常の土壇墓から出土する遺物の様相とは異なる。参考資料としてあげておきたい。

島根県松江市友田遺跡^(注68)

丘陵上に展開する弥生時代前期の土壇墓群である。後に、中期の貼り石墓が造られるため土壇墓に区画があったかどうかは不明である。7か所の石製武器が出土した土壇墓が検出されている。全てが石鏃と報告されている。その内、SK18からは磨製石剣の切先部分と考えられる破片が出土している。縞目をもつ石材で、先端部からすぐにある程度の厚みをもつことから石剣の先と判断した。土壇は長さ2m、幅0.92mである。棺は小口板を長側板で挟む形態である。小口板は墓壇底に掘られた溝により固定されている。石剣の切先以外に13点の打製石鏃が出土している。遺物は、棺の中央西よりでまとまって出土している。

福井県鯖江市西大井古墳群亀山支群1号墳^(注69)

丘陵上に造られた弥生時代中期後葉の亀山1号墳の方形を呈する主体部から、磨製石剣の先端部近くが出土している。切先部分は欠損している。土壇内からの出土状況は不明である。

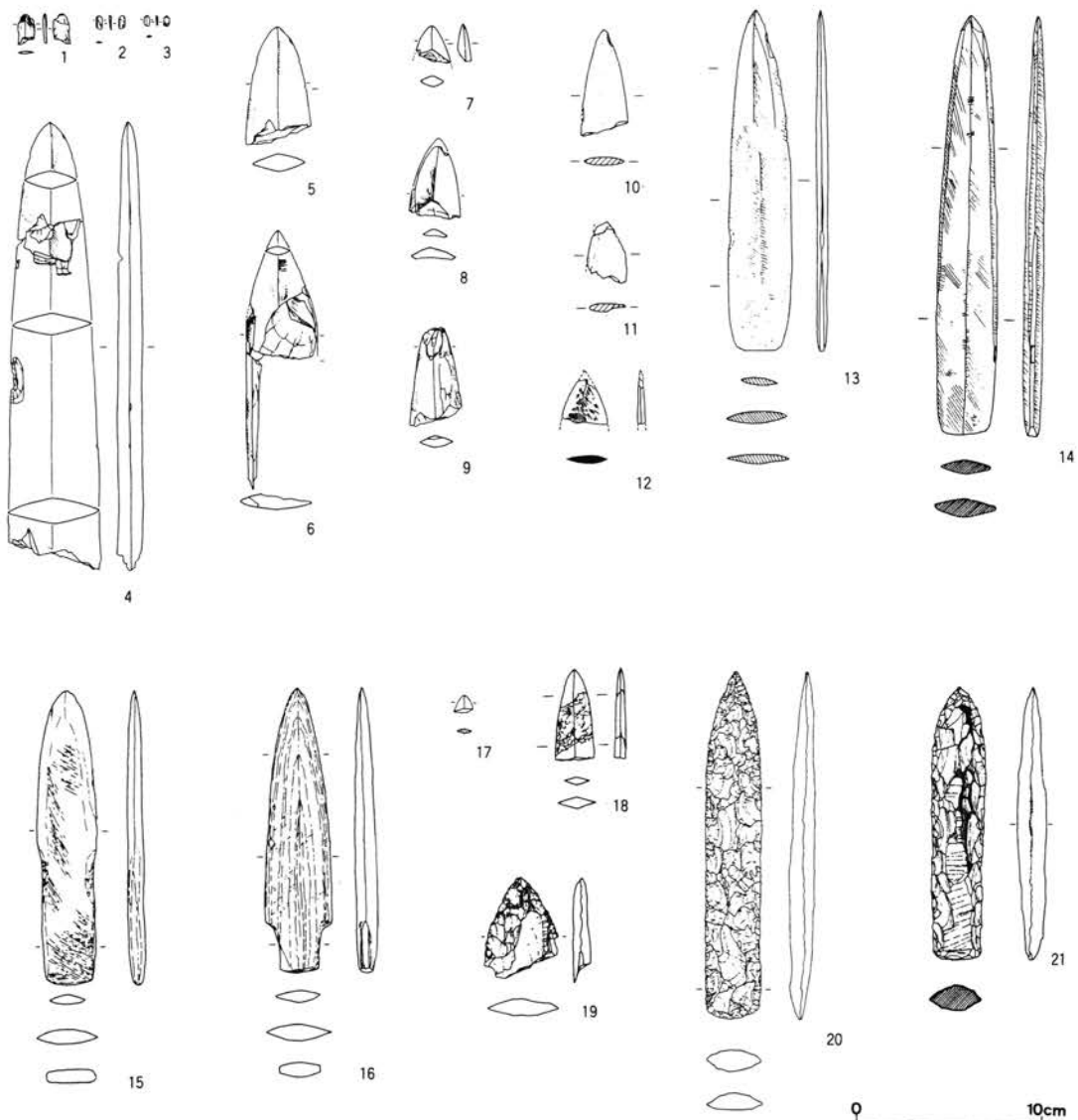
兵庫県神戸市玉津田中遺跡^(注70)

周溝墓SX400014と400015間の溝中埋葬主体部ST40010中からは、銅剣の切先部分が出土している。木棺と人骨が確認されている。掘形は長さ1.52m、幅0.6m、深さ0.52mで、木棺内の法量は、長さ1.15m、幅0.40m、深さ0.52mである。棺は平面積が小さく、成人のものと通常考えられないが、深さがあり成人が埋葬されていた。銅剣の出土状況は、石剣の場合と変わらない。岡山県南方遺跡からも同様に切先部分が出土しているが、詳細は不明である。

(3) 小 結

石製武器が出土する主体部は、近畿地方では弥生時代の前期～中期後葉まで見られる。その検出状態は、棺のほぼ中央部に検出されることが多く、石剣の場合、切先部分か、完形品である。切先部分は、ほかの剥片と接合関係を見せる場合が、東土川遺跡や八木町池上遺跡で見られる。

完形品の石剣の場合、多くは棺の中央部付近から出土することが多い(第18図)。特に勝部遺跡の打製石剣の例は、先端部が若干破損しているがほぼ完形で、基部まで残存している。石剣は人



1～9；東土川遺跡 10・11；池上遺跡 12；西大井古墳群・亀山支群 13；原田遺跡 14；宮田遺跡
 15・16；持田町三丁目遺跡 17；友田遺跡 18；玉津田中遺跡 19；出合遺跡 20；招提中町遺跡
 21；四辻土墳墓

第19図 墓壙出土石剣および銅剣

骨の腰の部分で発見されているが、骨の裏側から出土している。石剣の移動がないとすれば、元から体の後ろ側にあったものと考えられる。この石剣については、体内に残ったものとするよりもむしろ、身につけていたと考えることも出土状態からは可能である。唐古鍵遺跡からは、鞘のついた状態で打製石剣が検出されているが、その鞘には、鞘の主軸方向に対して斜交する穿孔が行われており、紐を通して身につけていたと考えられている。このような例が一般的であるならば、背中^(註71)の腰の部分に斜め方向に装着されていたことになる。こうした目で、完形の石剣の出土例を眺めてみると、下植野南遺跡の例を除き、棺の中央部付近で、長軸に対してやや角度をもって出土している。このような共通点は、遺体が石剣を身につけて埋葬されていたことを示していると考えられる。原田遺跡の場合、棺内の高い位置から出土していることから、遺体上または棺上に置く例もあったことが推測できる。下植野南遺跡の場合、東に頭部があるならばその頭部

分に沿うように、棺側に近い場所から出土している。また、切先は下方向を向いている。このような出土例は、九州では認められる。完形の磨製石剣の場合、副葬品として解釈できるが、その出土状況から、遺体が身につけていたものと、後から沿えたものの2種に細分できる可能性がある。前者の場合、生前の衣装をそのままとい、埋葬された可能性があり、完全な副葬品とするか論議が分かれるが、遺体と分離して埋納された場合は、明確に副葬品として位置付けることができる。

石鏃の棺内出土例は、打製石鏃であることが近畿地方では圧倒的に多い。石鏃の場合、破損したものが棺内で接合するものも多く認められる。また、破損品の割合も高く、破損部位は先端部や中茎部に集中する傾向が見られる。破損面は石器の主軸方向からの力によって破損したと考えられ、ツブレ状や樋状を呈するものも多くある。今回の発掘調査で出土した石鏃にも顕著に衝突痕跡が見られる。このような傾向は^(註72)拙稿で論じた、東土川遺跡例で見られた傾向と一致する。また、主体部から出土した石鏃数が多い、鳥根県友田遺跡、岡山県清水谷遺跡において出土した石鏃の中にも同じような衝突痕が多く認められた。^(註73)

拙稿で示唆したように、石製武器が出土する主体部にもいろいろな要因が存在することがより明らかになった。その中でも、石鏃の出土例は近畿地方では、九州のような明確な副葬を示す出土状態を取らない。また、石鏃や破損した石剣は衝突による破損が認められることや、石剣が切先部およびその破片のみが検出できることから、遺体に刺さっていたことは最も合理的な考え方である。

遺体に武器が刺さっていた場合には、持衰や王といった特定の地位や役割のある人の犠牲死という説と、いわゆる戦死者(戦闘行為による直接的、間接的死者)の2説がある。

石製武器の出土する主体部が、そのほかの主体部とどのような関係にあるかを見ていきたい。弥生時代研究者の多くが、青銅製の武器を石製のものに対して上位の地位を与えている。玉津田中遺跡の例は、小形の棺に押し込められた状態で、方形周溝墓の溝内という場所に選地されている。この間からは前述したように中細型銅剣の切先が出土している。最上級の武器である青銅の剣で殺された人物があらかじめ特定できているならば、最上級の敬意を払う犠牲者であるはずである。

南栗ヶ塚遺跡の場合、方形周溝墓の中央主体部である。東土川遺跡は、溝中埋葬である。八木町池上遺跡の場合、周溝が埋まった後の拡張部の埋葬と墳頂部中央の埋葬である。下植野南遺跡例でも、中央の主体部や中央から外れた位置のものなどが混在する。

このように石製武器が出土する埋葬主体部が墓域内で占める場所は、特に定まっていないのが、四国・本州での傾向である。方形周溝墓の埋葬位置に見られる、一定のヒエラルギーは、中央主体部が大きなものが多いことから認めても良いものと考えられるが、1遺跡内においても武器出土主体部の規模や埋葬位置に決まりがないことから見ると特定の階層が、犠牲として殺されていたという証拠は認められない。もっとも、埋葬位置や規模にまったく階層性が反映しないと考えれば別の結論も生じるが、同時に主体部の性格を考古学的手法によって黑白をつけられないこと

も示すことになる。

またいろいろな要因があり、犠牲者も含まれるといった論調も検証はできない空想上の論議となってしまう。四分遺跡の人骨が示すように武器が出土しない主体部であっても、刃物によって傷つけられた遺体があることは、戦闘行為に関連してなくなった人々の内、石鏃などの腐らない遺物やたまたま骨が残ったものだけが、我々の前に姿をあらわしていることを自覚しなければならない。

(中川和哉)

第3節 下植野南遺跡の集落遺構について

1. 古墳時代前期の遺構

古墳時代前期の遺構とは庄内～布留式土器の出土する時期の遺構であり、須恵器出現、あるいは下植野南遺跡での須恵器を含まない時期を想定したもので、基本的には古墳時代中期以降のベース面である黒褐色粘質土を除去し、黄褐色粘質土まで掘削した段階で明瞭に遺構面が検出できる遺構である。この時期の遺構には竪穴式住居跡4基、井戸状遺構2基、溝状遺構3条などがあり、遺構の多くが今回の調査地の西辺、F・G地点に偏っている。

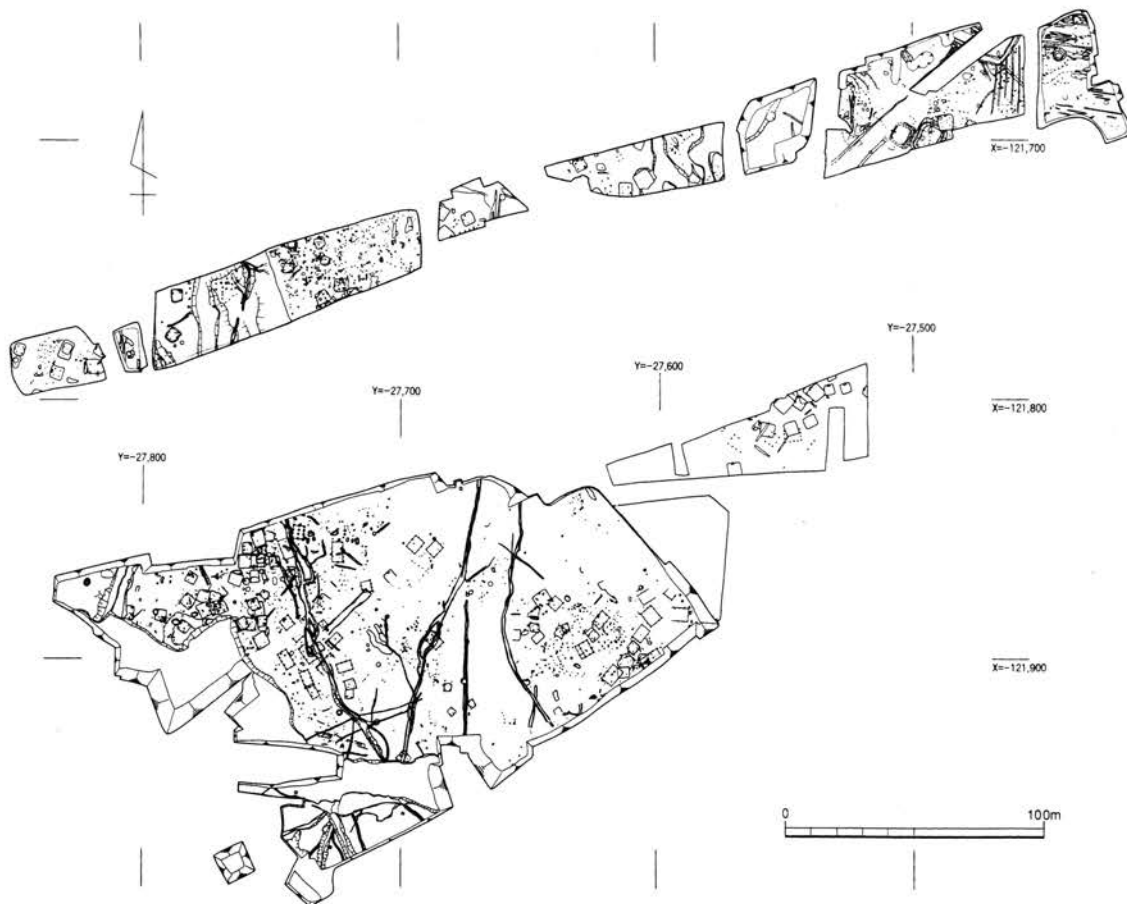
この時期の遺構から出土する遺物は、SHF174・SHI154などの焼失家屋から出土したものを除いてその出土量は多くない。これら出土遺物のうち、「口縁部が直線的または内湾ぎみに開き」、口縁端部を内側に肥厚するもので、体部は球形を呈し、体部外面に縦方向のハケののち、横方向のハケ、内面はヘラ削り調整を施す「布留式甕^(注74)」、杯部が極小化し、口縁部との境の稜が不明瞭な「布留式高杯」が含まれている。この布留式土器群の有無によって、布留式土器群が存在しないSHF173・SHI154・SEF173と、布留式土器群が存在するSHF174などに大別できる。

SEF173の出土遺物の特徴として、壺は、口縁端部がほとんど拡張することなく丸くおさめるものが大半である。また、壺の器形のなかに二重口縁壺(複合口縁壺)は存在しない。甕は分割成形で、底部輪台技法のものを含むが、胴部の粘土帯の成形回数は2～4回と少ない。体部外面のタタキは右上がりあるいは水平主軸の粗いタタキであり、口縁端部を丸くおさめるものが大半である。体部内面はハケ仕上げのほか、ヘラケズリ調整のものがあるが、ヘラケズリの範囲は頸部屈曲部まで明瞭な稜線がつくほどにはケズリの範囲は及んでいない。高杯は441のみであり、比較資料に欠けるが、杯部が深く複合口縁形を呈しており、京都府綾部市小西町田遺跡SK14(土器番号261)などにその類例がある。

これらの甕・高杯の特徴から、SEF173は弥生時代後期後半、森岡編年のV-3^(注76)様式の範疇に含まれるものと思われる。なお、SEF173の時期の竪穴式住居跡は明確ではないが、後述するSHF174の遺物のなかにこの時期の資料が含まれていること、SHF174は遺構の検出状況から2時期の建て替えが考えられ、建て替えられる前の古い時期の竪穴式住居跡との関連が考えられる。

S H I 154は、甕などは細片が多く全体の個体数を数えると壺などとの出土比率に齟齬をきたす可能性があり、全体の個体数までは計測していない。ただし甕の出土量は多い。ここでは図示しえた資料をもとにその時期を検討してみると、S E F 173では広口壺のみであったが、このS H I 154では二重口縁壺がある。二重口縁壺には頸部が直立ぎみに立ち上がるもの(391・395)で口縁部が外反するもの(395)と直立ぎみに短く立ち上がり、口縁部外面に擬凹線文を施すもの(391)がある。広口壺では口縁端部がそのまま尖りぎみに丸くおさまるものと口縁端部をわずかに内側に肥厚させ、丸くおさまるもの(393)、外方にわずかに肥厚するものなどがある。甕は、甕A・甕Bのほか、口縁部が直線的で口縁端部をつまみ上げた米田氏のいう庄内甕が新たに加わる。また口縁部が内湾ぎみで、口縁端部が内側に肥厚して内傾面をつくる布留式甕を若干含んである。甕の中には全体の形状は明らかではないが、山陰系甕(423)、東海系S字口縁甕(425)が含まれている。小型器台では浅い皿状の杯部を呈する庄内系小型器台(396・397)と思われるものがある。また器台のなかには脚部および杯部外面に装飾を施したもの(406)や受け部の上にさらに受け部を設けた装飾器台(408)がある。このようなことから、S H I 154は庄内式新相(庄内式期Ⅲ・Ⅳ期)に相当する時期の資料と思われる。S H I 154と同時期の竪穴式住居跡にはS H G 54がある。

S E F 173・S H I 154が弥生時代後期後半、庄内式新相であるのに対して、S H F 174はやや



第20図 下植野南遺跡古墳中期以降全体図

新しい様相を呈している。SHF174では弥生時代後期後半、庄内式の土器とともに布留式土器が出土している。SEF174出土の布留式甕の特徴として体部が球形、体部外面に縦方向のハケののち、上半部に横方向のハケ調整を施すこと、口縁部は内湾し、口縁端部が内側に傾斜する肥厚面をつくっている。この布留式甕の特徴を備えたものとともに、口縁端部を丸くおさめるものやつまみ上げるもの、外方に肥厚させるものなどが含まれている。ただ、体部の特徴は球形に近く、器壁も薄く仕上げているものが大半である。壺には広口壺、二重口縁壺があり、高野陽子^(注77)のいう二重口縁壺A類とともに、B類が含まれている。同じく米田氏のいう庄内系小型器台(285)、庄内系高杯(276)などが出土していることから布留式古段階(布留式古相)の時期と思われる。なお、前述のようにSHF174の中には弥生時代後期後半の土器が含まれているが、これらの遺物はSHF174bの竪穴式住居跡に伴うものと思われる。

このように下層集落遺構は弥生時代後期後半～古墳時代初頭の時期に営まれたものであり、土器からみて小期を設定した場合、同時期には1・2基程度の竪穴式住居跡で構築された小規模な集落であったと想定できる。

古墳時代中・後期の竪穴式住居跡の平均規模(東西4.4m、南北約4.7m)に比べて、各小期の竪穴式住居跡の規模はSHF174・175、SHG54、SHI154が一辺約6.0mとやや大ぶりなものが多く、わずかにSHF171が東西約4.0m、南北約3.5mとやや小ぶりである。

竪穴式住居跡の遺構検出面から床面までの深さは、SHF171が約20cmとやや浅いのに対してSHF174・175、SHG54、SHI154は約30～40cmと深く、古墳時代中・後期の竪穴式住居跡の平均15cmと比べても深い。各竪穴式住居跡は、周溝と4本柱の支柱穴が明瞭に残っており、明瞭な建て替え跡が認められるものがある。またSHF175、SHI154では住居の廃絶後に意図的に炭とともに土器を廃棄した状態であった。

下植野南遺跡でのこれまでの調査成果では、この時期の竪穴式住居跡は名神高速道路本体の調査が行われていないため全容は明らかではないが、体育館地点、名神拡幅地点の調査では5基の竪穴式住居跡を検出している。名神拡幅地点での4基の竪穴式住居跡(SH368202・395690・395632・395803)では、30～40mと離れて各竪穴式住居跡が造られている。今回の調査でもSHF174・175が5mと近接したものを例外として、竪穴式住居跡は離れた位置にあり、この時期の下植野南遺跡の集落密度は希薄である。

井戸はSHF174・175から東方向に1基(SEF173)とSHG54の北東方向約34mに1基(SEG79)あり、いずれも弥生時代の方形周溝墓の台状部を避け、周溝と重複する形で掘られている。また、溝状遺構SDG51は、方形周溝墓STJ03・05の南溝、東溝を経て、STJ02・105、STG50の北溝を利用し、G地点を斜めに横切るようにのびている。

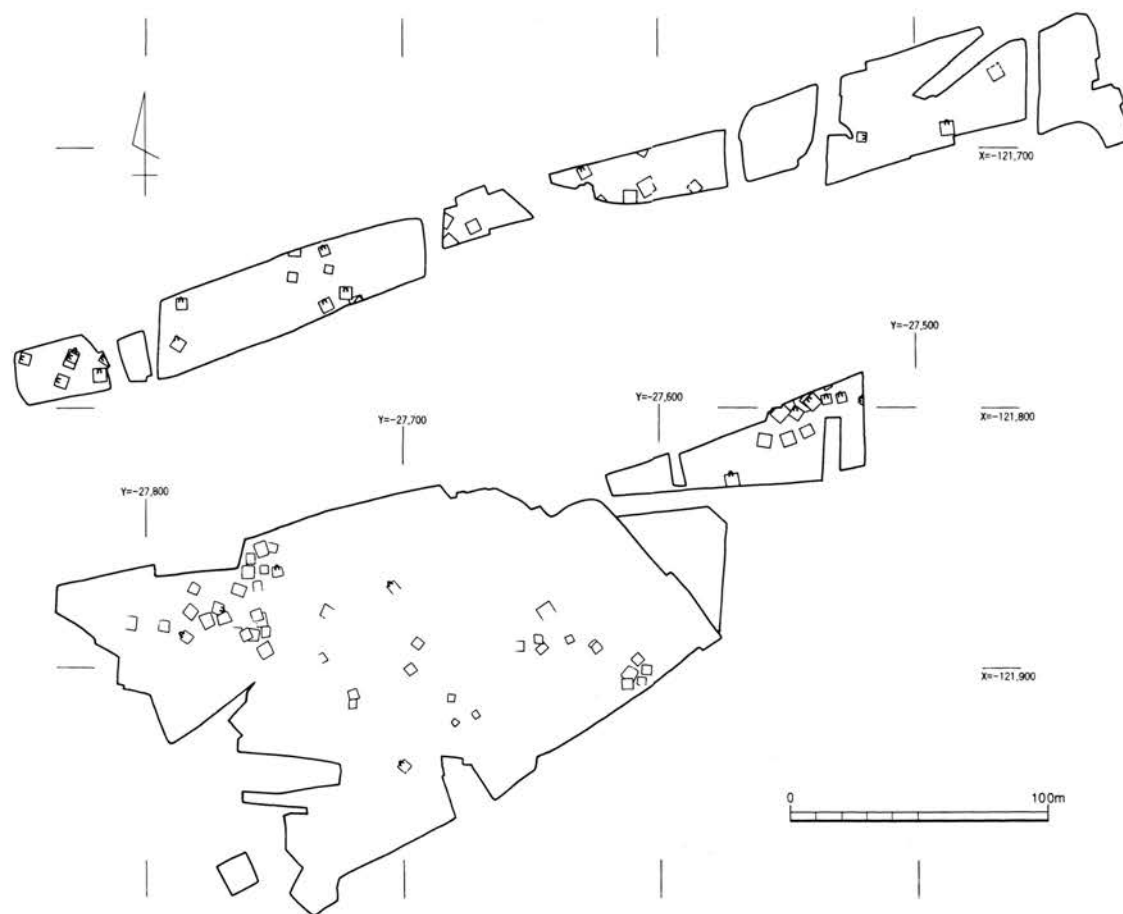
このように竪穴式住居跡の配置、井戸の位置、溝状遺構が方形周溝墓の周溝を再利用していることなどから類推すると、古墳時代前期でもまだ弥生時代中期に築造された方形周溝墓が高まりあるいは凹みとして残っており、この方形周溝墓群の築かれた地点が墓域として意識されていたため、墓域の端に集落を営んでいた。その結果として古墳時代前期の集落としては散漫であった

と思われる。なお、竪穴式住居跡 S H G 54からは東へ約200mの地点に位置する土辺古墳(古墳時代前期、川西編年Ⅱ期)との関連については周辺の調査が十分でないため、検討しえるだけの資料はない。

2. 古墳時代中期以降の集落

古墳時代中期以降の竪穴式住居跡は49基、掘立柱建物跡は31棟を数える。ただ、第2章第5節で記したように、古墳時代前期から中期の間に小泉川から流れた砂礫を含む堆積土の上に古墳時代中期以降の遺構が掘り込まれており、遺構検出作業が困難を極めたこと、遺構の多くが中世以降の洪水層や耕作土によって大きく削り取られており、その当時の実態をそのまま反映していない面もある。

各竪穴式住居跡には遺構輪郭が明確に確認できたもの(J地点南東部分の大半)と遺物の出土からその周辺を精査した結果、方形の竪穴式住居跡の一角を確認し、竪穴式住居跡と考えたもの(おもにF地点、G地点)がある。検出した竪穴式住居跡はいずれも方形を呈し、一辺約4m前後を測るものが大半であり、わずかに規模が大きいものとして、S H J 126の6.0×5.8m以上があるのみである。これは古墳時代前期の竪穴式住居跡に比べて規模が小さく、平均床面積は約16.20㎡である。床面にはJ地点の竪穴式住居跡5基で、周壁溝、4本柱を明確に残すものがあるが、F・G地点では周壁溝・柱穴が不明瞭なものが大半である。竪穴式住居跡では床面に炉跡

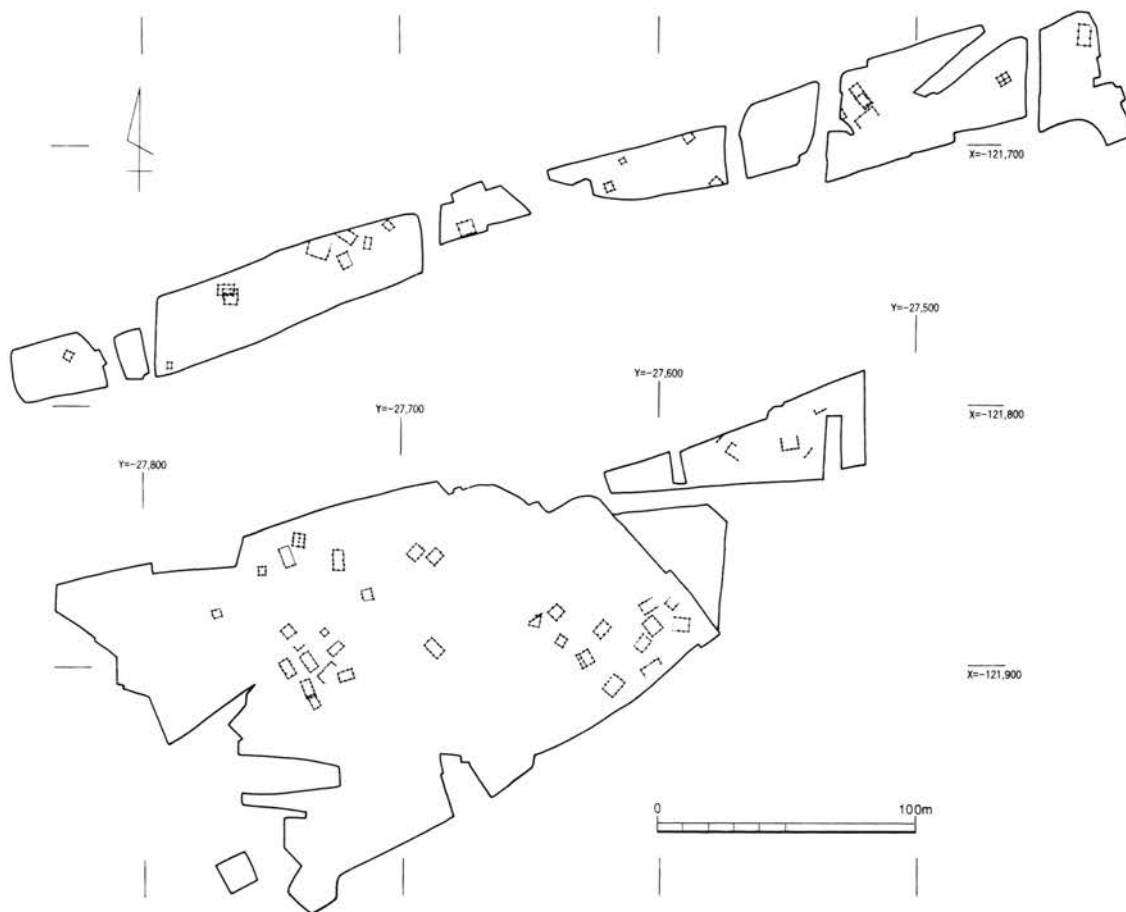


第21図 下植野南遺跡竪穴式住居跡分布図

と思われる焼土痕があるもの5基、造り付け竈を有するもの7基で、造り付け竈の位置は北辺にあるもの3基(SHF40・64、SHG33、SHI08、SHJ126)、北西辺にあるもの1基(SHF120)、北東辺にあるもの1基(SHF115)である。造り付け竈には支脚に土器や石を利用してしているものがある。造り付け竈を有する竪穴式住居跡はMT15型式の時期のものが主体であるが、TK208型式の時期あるいは須恵器出現以前の時期までさかのぼる可能性のものもある。ちなみに体育館地点・名神拡幅地点の調査では、古墳時代中・後期の竪穴式住居跡は16基を数え、名神高速道路本体の未調査部分をあわせると下植野南遺跡で100基以上を数える竪穴式住居跡が点在していたものと思われる。

古墳時代中期以降の竪穴式住居跡は、須恵器の型式名ではMT15・TK10型式のものが大半であり、それよりも古相(OM46型式、TK208・23・47型式)の遺物が出土する竪穴式住居跡が5基、飛鳥I・II式の遺物を含む竪穴式住居跡が3基である。各時期ごとに竪穴式住居跡の主軸に変化があるのかどうかを検討したが、明確な変化は認められなかった。

掘立柱建物跡では、掘形内からの遺物が出土したものは5基(SBF91・92、SBJ181・183・197)である。その出土遺物は、MT15・TK10型式の須恵器であり、竪穴式住居跡と同時期のものが含まれている。ただし、大半の掘立柱建物跡は、掘形・柱穴内からの出土遺物がなく、時期決定の資料を欠く。遺構の切り合い関係からは、竪穴式住居跡を切ったものSBF155、SBJ183、溝SDF22が機能を停止し、溝が埋没した時期に造られた掘立柱建物跡SBF96、S



第22図 下植野南遺跡掘立柱建物跡分布図

B I 140、溝 S D G 48の埋没後に造られた掘立柱建物跡 S B G 47がある。また、久我畷の両側溝の推定ライン上に造られた掘立柱建物跡 S B I 05・06があり、前述の S B F 91などよりも新しくなるものも含まれている。

掘立柱建物の掘形規模をみると、S B F 91が一辺0.6～1.2m、S B J 21が一辺0.4～0.7mと比較的規模が大きいものを除き、大半が掘形規模0.3～0.5mと小さい。また、建物規模をみると、前述の S B F 91が2間×3間の総柱、S B J 21が2間×3間で西側に庇をもつほかは、2間×3～4間という小規模な建物群である。竪穴式住居跡と同様、各掘立柱建物跡の主軸をみると10°の振れの範囲におさまるものは、S B F 91(M T 15・T K 10型式の時期)、S B F 92・155などがあるが、そのほかは建物主軸を意識したようなものではなく、建物配置にも規則性は窺えない。

竪穴式住居跡・掘立柱建物跡のほか、今回の調査では調査地を南北に縦断するように溝 S D F 22・S D J 06がある。S D F 22は奈良・平安時代の遺物が含まれているが、それらの時期の遺物は上面からの出土の可能性が高く、溝が掘削され、機能した時期は古墳時代中・後期と考えられる。この2条の溝が集落を区画する溝と考えて、仮にS D F 22の西側を1区、S D F 22とS D J 06の間を2区、S D J 06の東側を3区と呼称すると、1区はM T 15・T K 10型式を中心とした時期の竪穴式住居の2/3以上がある。2区は新相(飛鳥時代Ⅱ・Ⅲ)の竪穴式住居跡を含む竪穴式住居が5基で散発的である反面、2区の東側で掘立柱建物跡が多い。一方、3区は竪穴式住居跡と掘立柱建物跡が比較的まとまってあり、その時期も竪穴式住居跡の土器の特徴から1・2区よりも古い傾向がある。

3. 奈良時代以降の遺構

奈良時代以降の遺構には、真南北方向の溝 S D J 01や土坑などがあり、掘立柱建物跡の一部に、この時期に造営されたものが含まれているが、溝と掘立柱建物跡の関係など、明確にできるだけの調査成果は得られなかった。また、土坑などの遺構も数が少ない。包含層、精査中の遺物を見ると、S H F 07周辺、S B J 155周辺、S D I 02の北側溝など限られており、全体として遺構密度は希薄である。ただ例外として、調査地の南西端H地点で検出した人面土器を含む溝状遺構 S D H 08があり、集落でない別の性格を帯びた遺跡として下植野南遺跡があったものと思われる。

(石井清司)

第4節 朝鮮半島系土器の出土をめぐって

1. はじめに

陶質土器や韓式土器に代表される朝鮮半島系の土器は、近年の集落遺跡調査によって出土事例が増加する傾向にある。その増加傾向の要因としては、韓式土器研究会などの取り組みにより、朝鮮半島系の土器であるか否かの識別の基準が広く知られたことも見逃せない。

しかし、朝鮮半島の影響を受けて生産された韓式系土器であるにも係わらず、韓式土器ないしは朝鮮半島産の土器として認識され、土器移動の背景に渡来系技術者の関与を想定する報告も

少なからず散見される。

本稿では、下植野南遺跡から出土した朝鮮半島系の土器を基軸に、京都府亀岡市里遺跡と向日市、長岡京市、大山崎町一帯の乙訓地域、そして、朝鮮半島系の遺構や遺物が多く発見された同相楽郡精華町森垣外遺跡についての比較検討を行い、朝鮮半島系の土器の出土の意味について私見を提示したい。なお、畿内一帯において朝鮮半島系の土器は、数多く確認されているが、ここでは、以上の3遺跡を典型的な事例として捉えたいと思う。

2. 亀岡市里遺跡の概観と問題点の抽出

里遺跡^(注78)は、亀岡市旭町里に所在する弥生時代から奈良時代にかけての複合遺跡である。特に、古墳時代中～後期にかけての竪穴式住居跡群の検出は、今まで知られていなかった集落跡の存在を確認できただけでなく、出土遺物の検討から他地域との地域間交流を考える上で基本的な資料を得ることができた。

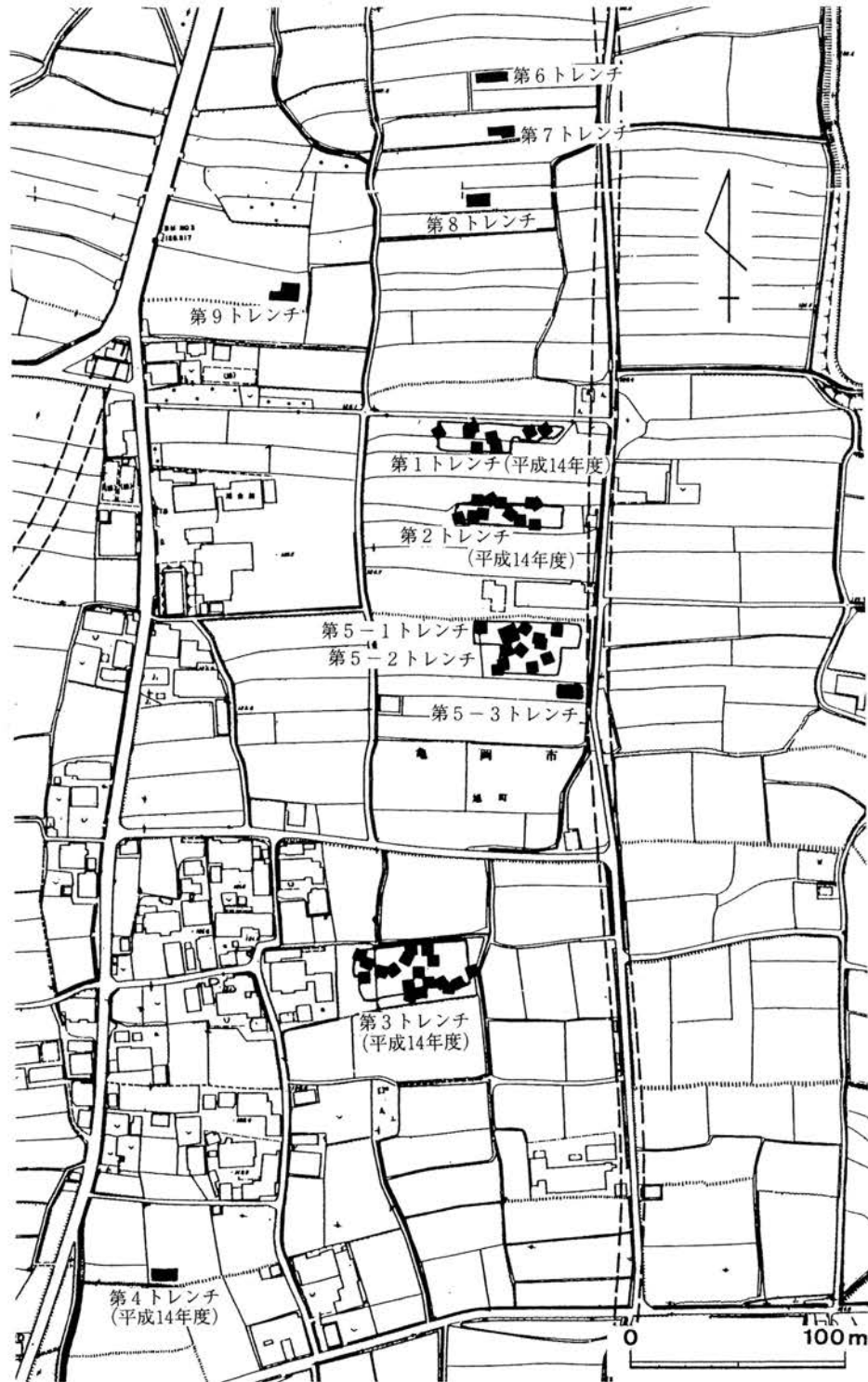
里遺跡では、古墳時代中～後期にかけての竪穴式住居跡を60基以上検出している(第23図)。検出したほとんどの竪穴式住居跡の面積は、25～36㎡に集中しているが、50㎡を越える竪穴式住居跡も確認していることから、各住居の集落内における役割に何らかの違いを想定することも可能である。また、竪穴式住居跡の主軸は、ほぼ北方と一致する一群と、概ね40°西方にふる一群に分類することができる。さらに、検出した竪穴式住居跡の多くには、北辺中央部か北東辺中央部に竈が造り付けられているが、全ての竪穴式住居跡において竈を検出していないことから、竈を有する竪穴式住居跡を中核として、竈をもたない複数の竪穴式住居跡が群を形成していたと考えられる。

検出中、最大規模を測る竪穴式住居跡は、一辺が8mの竪穴式住居跡136(第24図)である。北東辺中央部に竈を有し、南東辺には貯蔵穴が穿たれている。また、この竪穴式住居跡136の床面では、北東辺を共有するように4×5.6mの規模を有する長方形プランの竪穴式住居跡158を検出している。短辺4に対して長辺5の比率を有する長方形を意図した竪穴式住居跡158から、集落内最大規模の竪穴式住居跡136への建て替えは、集落内を統括する複数の首長の存在を示唆するばかりでなく、集落内における何らかの変化をも示唆していると考えて良い状況である。

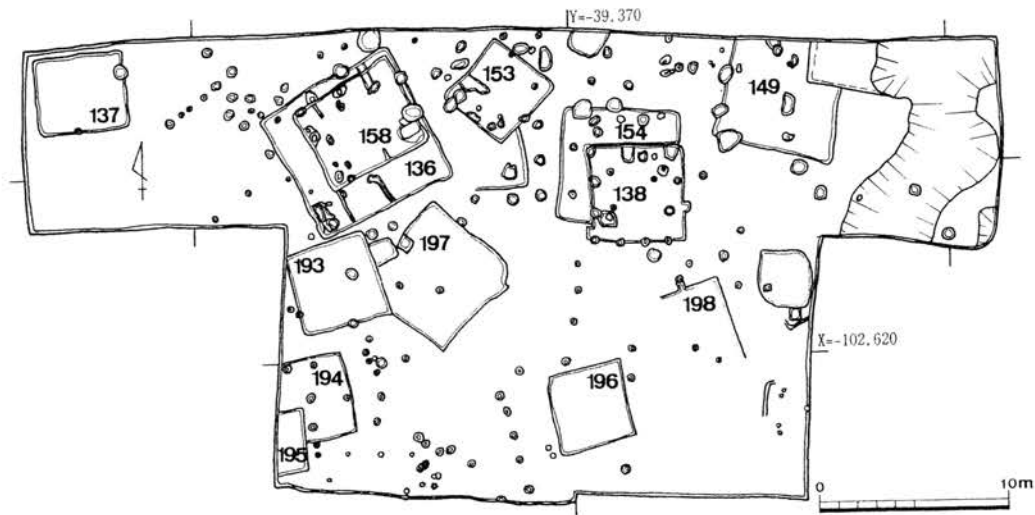
里遺跡では、陶邑編年TK208型式併行期の須恵器の杯(第25図2)が出土する竪穴式住居跡を検出していることから、当該時期を集落の形成期として捉えることができる。一方、出土土器の中で最も出土比率が高い型式は、陶邑編年MT15型式であることから、6世紀前半に集落の最盛期を設定することができる。また、陶邑編年TK43型式から同TK209型式併行期にかけての土器の出土は、急激に減少する傾向にあることから、竪穴式住居跡によって集落内の居住施設を構成する終焉の時期として捉えることができる。なお、各トレンチにおいて陶邑編年TK43型式から同TK209型式併行期にかけての土器が出土する柱穴を検出していることから、当該時期に竪穴式住居跡から掘立柱建物跡に主要な居住施設が変化していると捉えることができる。

さて、里遺跡では、通有にみられる須恵器が多く出土しており、その中には、大阪府陶邑古窯

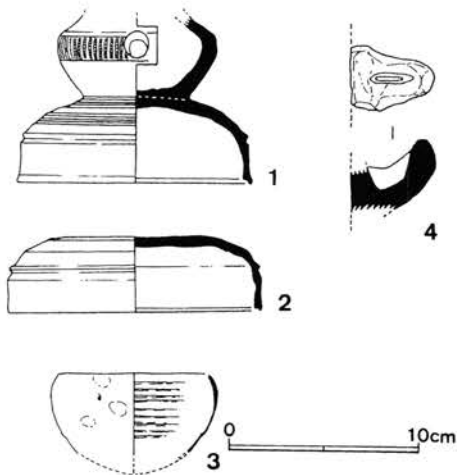
址群からもたらされた土器も、わずかながら認められる。第25図1は、天井部に甕を有する壺の蓋である。当該土器は、今まで横穴式石室などの埋葬施設からの出土が一般的であったが、集落内での使用が確認された事例としては、希有な出土例である。同3は、内面に貝殻条痕が観察でき、胎土が緻密な製塩土器である。色調は赤褐色を呈していることから、和歌山県紀淡海峡付近から当該地へ搬入されたと考えられる。京都府内においては、南山城地域や乙訓地域において、紀淡海峡付近の製塩土器が確認されているが、口丹波地域では初出である。里集落が、単に当該



第23図 亀岡市里遺跡竪穴式住居跡分布図



第24図 亀岡市里遺跡第5-1・2トレンチ平面図



第25図 里遺跡出土土器

地域内での交易によってさまざまな文物の供給を受けていたのではなく、広域な地域間交流を行っていたことを示す重要な土器である。

同4は、上面に篋工具による切り込みが入る甑の把手である。当該土器は、従来、韓式土器として認識されていた土器である。しかし、胎土は里遺跡から出土する土師器とは異なるものの、一般的な土師器の胎土に共通していることから、韓式系土師器として認識することができる。朝鮮半島の影響を受けてはいるものの、当該土器は、朝鮮半島との交流によってもたらされた土器ではないことは明らかである。当該土器の出

土は、畿内一帯に甑が広く流布することとの関係で捉えるべきであろう。

3. 乙訓地域における中後期集落の動態

では、次に、向日市・長岡京市・大山崎町のいわゆる乙訓地域の古墳時代の集落についてみておきたい。

第26図には、下植野南遺跡から出土した、朝鮮半島産の土器と朝鮮半島系の土器の一部を再録している。同図1338は、体部に縄蓆文の叩き目を有し、8条の螺旋状の沈線がめぐっている。体部外面には、格子目状の叩き痕を有している。また、口縁部の形態は、5世紀代の陶質土器の形状に酷似していることから、朝鮮半島からの搬入土器として認定できる個体である。同図638・991は、長胴の軟質焼成の甕である。体部には、格子目叩き痕を有している。双方とも、同一の成形技法を復原しうるが、確実に朝鮮半島からの搬入とは断定しがたいものの、その可能性は高いといえる。一方、同図の608は、平底の甕である。焼成や胎土自体は、畿内一体で通有にみら

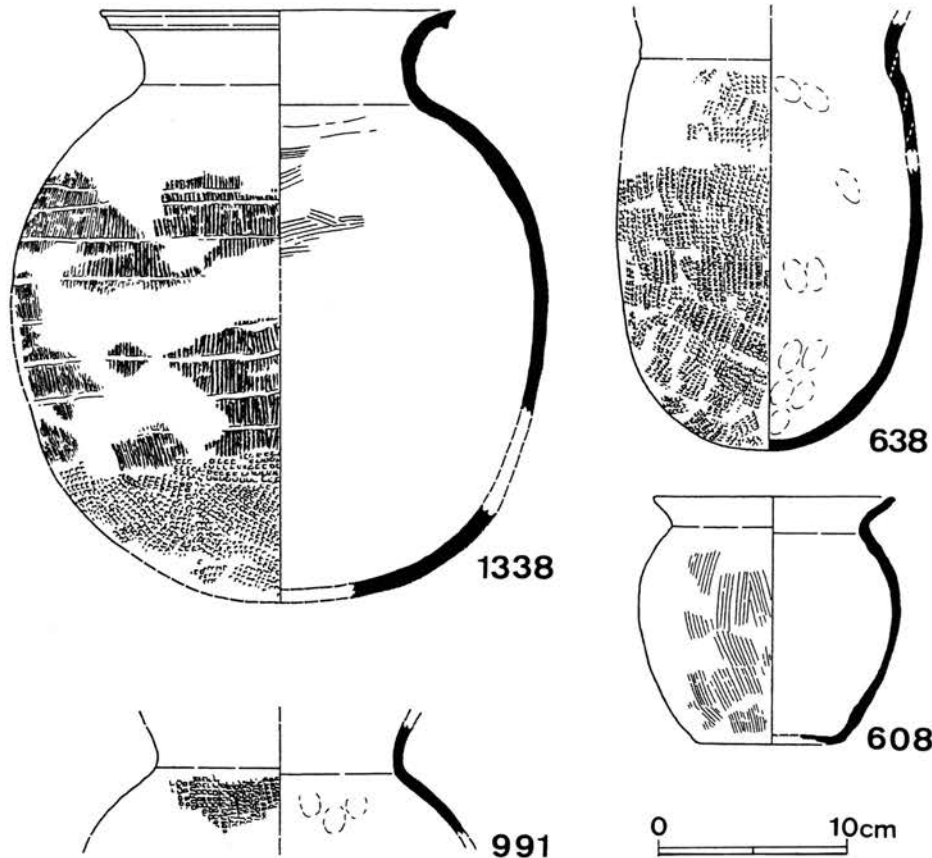
れる土師器の胎土に酷似しているが、その形状から、いわゆる韓式系土師器として捉え得る個体である。

では、次に、下植野南遺跡が所在する乙訓地域における集落の動態と、朝鮮半島に深く関係する土器について概観しておきたい。

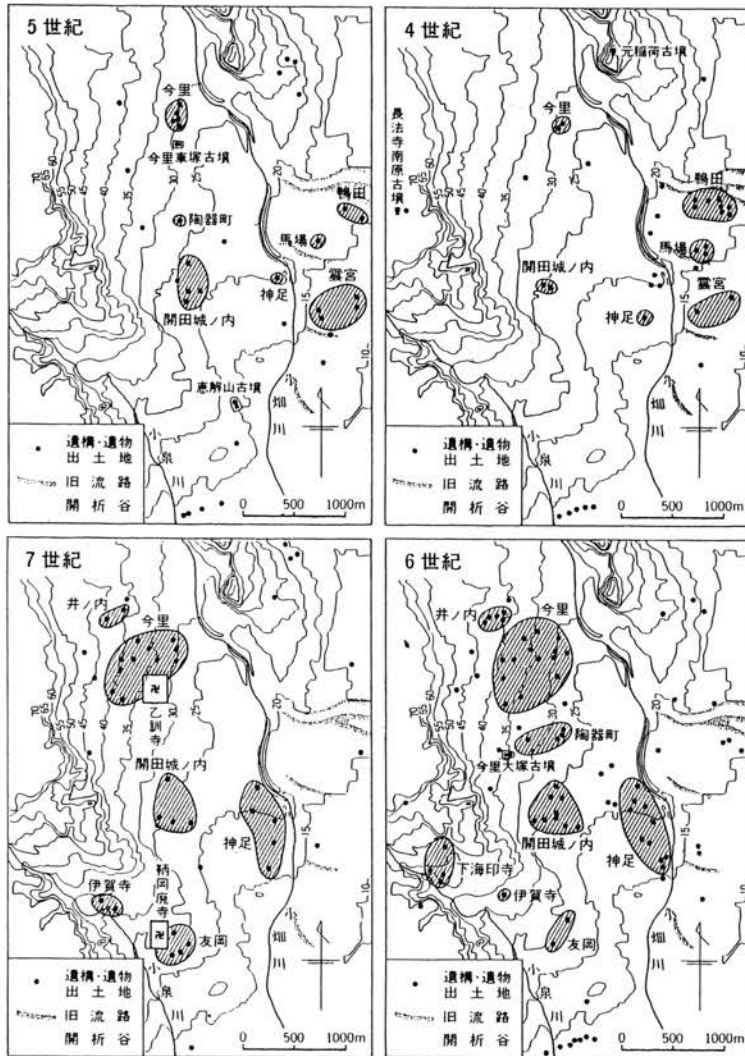
乙訓地域は、古墳時代前期の元稲荷古墳のように、前方後方墳を首長墓の主要な墳形として採用した地域であることから、弥生時代以来の農業生産を基盤にした在地勢力の自立的発展を首肯できる地域である。それらの背景には、桂川や小畑川によって形成された肥沃な地勢と密接な関係があるが、他方、木津川・宇治川・桂川の3河川が、淀川へと合流する地点の上流域でもあり、河川を介在とする広域な地域間交流を容易にした地理的条件も、重要な要素として捉えることができる。

乙訓地域における古墳時代前期～後期にかけての集落の消長変化について、『長岡京市史』^(注79)の挿図(第27図)をもとに概観しておきたい。

先に述べたように、乙訓地域では、弥生時代前期～末期にかけての集落の動態が、長岡京跡の下層の発掘調査として実施され広域に把握されている。そのため、古墳時代の前期集落の生成過程を具体的な調査成果と関連付けて解釈することができている。古墳時代前期における集落としては、鴨田遺跡、馬場遺跡、雲宮遺跡、今里遺跡、神足遺跡、開田城ノ内遺跡などがある。また、古墳時代中期になると徐々にではあるが、規模や各遺跡が有する属性においても相違が認められ



第26図 下植野南遺跡出土土器



第27図 乙訓地域の古墳時代集落の推移(注79転載)

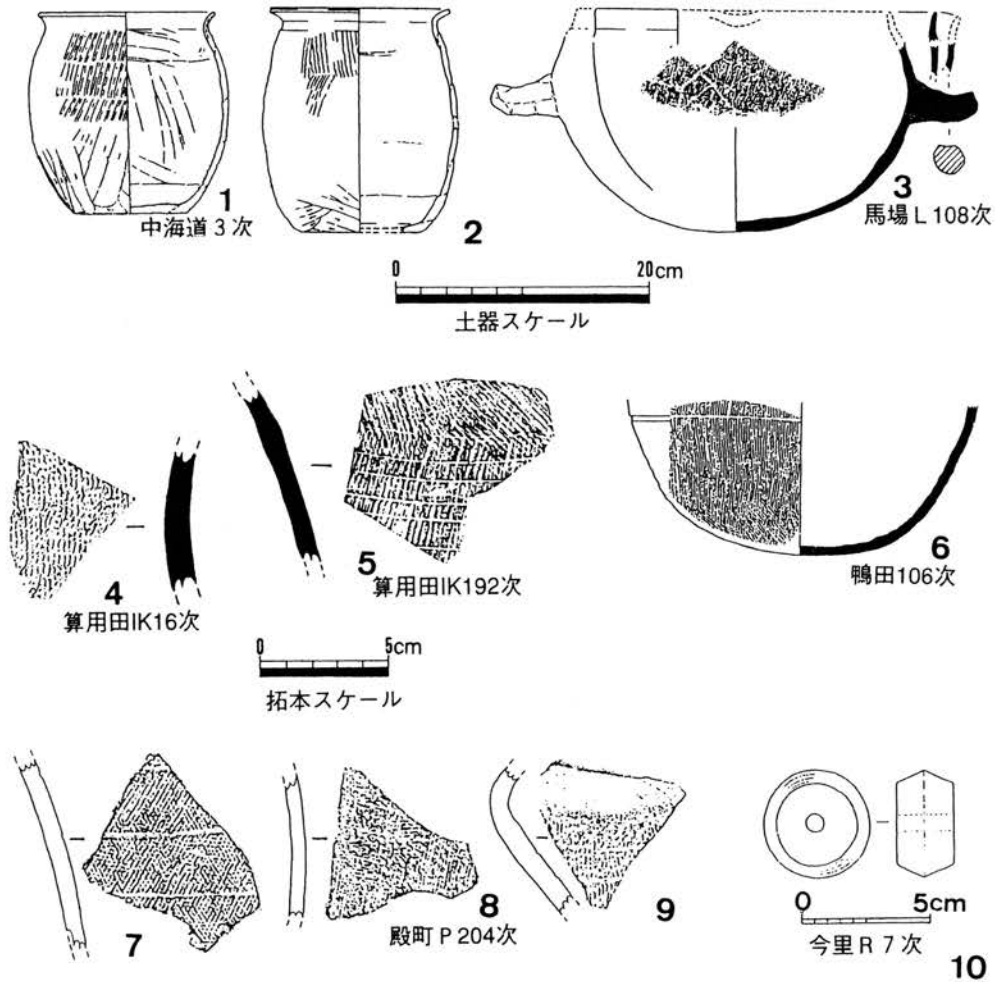
るが、前期集落の延長線上で捉えることができる。

一方、陶邑編年TK23型式から同TK47型式併行期を含む後期集落は、それまでの集落とは、規模あるいは属性においても大きく変化している。まず、今里遺跡、神足遺跡、開田城ノ内遺跡では、集落規模が拡大しており、各集落に何らかの内在的变化を認めることができる。このように各集落が大きく変貌する背景には、畿内政権自体の変質も十分に考慮する必要があるが、各集落における生産力の向上も視野にいれる必要がある。

乙訓地域における朝鮮半島の陶質土器や朝鮮半島系の土器は、殿長遺跡(第28図7～9)、中海道遺跡(同1～2)、鶏冠井遺跡、鴨田遺跡(同6)、

内裏下層遺跡、雲宮遺跡、今里遺跡(同10)、馬場遺跡(同3)、開田城ノ内遺跡、算用田遺跡(同4～5)、下植野南遺跡などから出土しており、また、算盤玉形紡錘車(同10)が今里遺跡から出土している。各遺跡からの、出土数量には大きな隔りがあるが、乙訓地域における古墳時代後期集落には広く散見できる状況である。遺跡群中、最も朝鮮半島系の遺物が多くみられる遺跡として今里遺跡があげられる。出土した土器とともに算盤玉形紡錘車の出土は注意すべきであり、同集落への渡来系技術者集団の確実な参入を想定することができる。しかし、いずれも、遺物に限られており、大壁住居跡などの遺構は検出されていない。各遺跡における調査が、点的調査であり、今後、未検出の遺構の存在を念頭におく必要がある。

乙訓地域における古墳時代中後期集落は、古墳時代前期から継続して営まれた集落と前～中期前半に断絶期を有する集落、そして、初期須恵器段階に成立する集落に大別できる。前期から継続して営まれた集落は、先に述べたように鴨田遺跡、馬場遺跡、雲宮遺跡、今里遺跡、神足遺跡、開田城ノ内遺跡などがあるが、5世紀後半までは、大きな変化はみられず、この時点での渡来系技術者集団の集落内参入は想定し得ない。一方、前期から継続して営まれる集落とともに、古墳



第28図 中海道・算用田・殿町・馬場・今里遺跡出土土器

時代後期に出現する集落が認められる。従前から新興勢力の台頭として解釈されてきたが、その背景にも朝鮮半島からの渡来系技術者集団の存在を想定することができる。

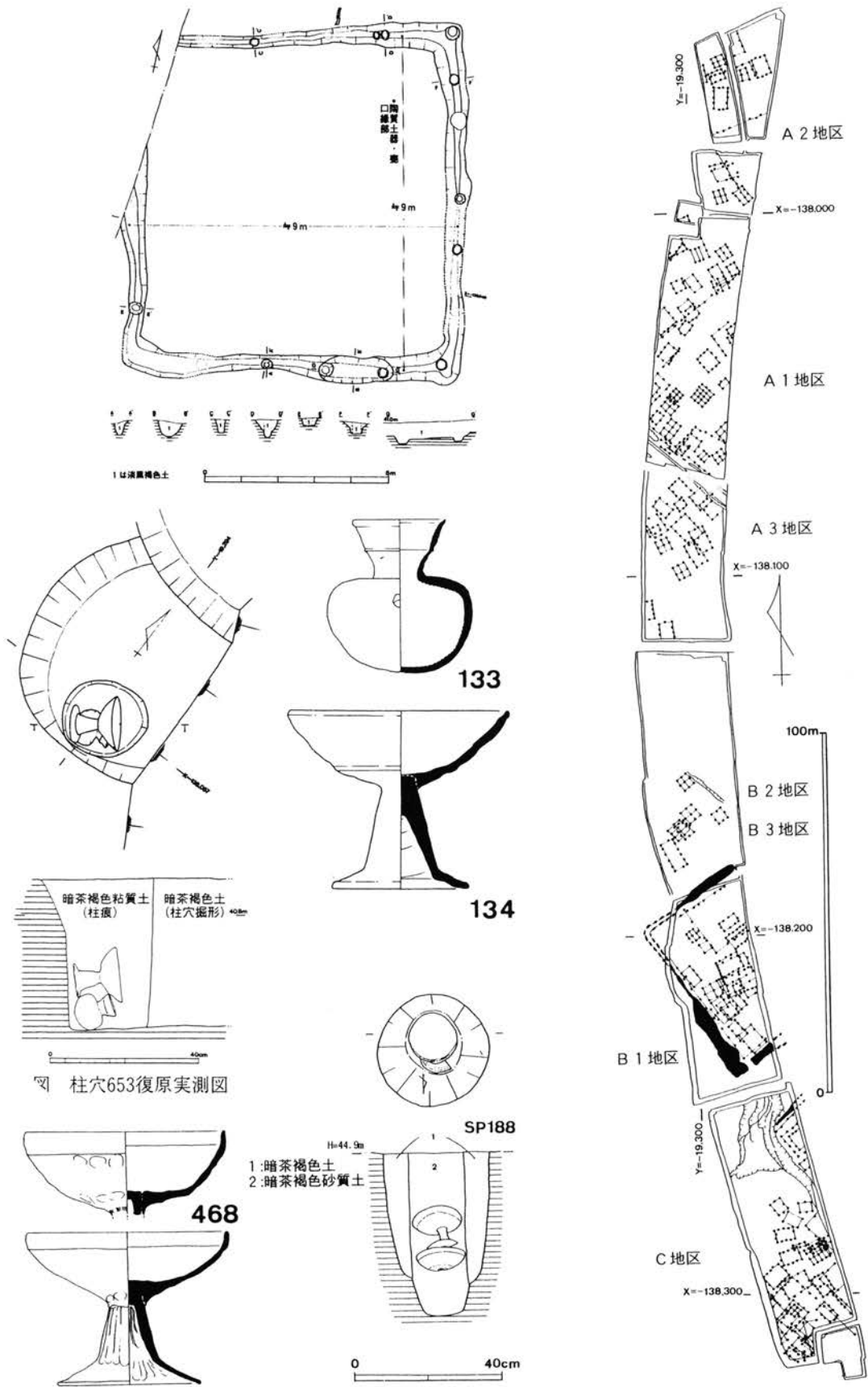
以上見てきたように、乙訓地域における古墳時代の後期集落は、中期集落と比較すれば顕著な大型化を認めることができ、また、遺跡数も増加する傾向が指摘できる。その背景に朝鮮半島からの渡来系技術者集団の集落参入による技術水準の向上を想定することができる。その技術水準の向上が生産力の向上につながった結果が、集落の大型化に到ったと考えておきたい。

4. 精華町森垣外遺跡の調査成果

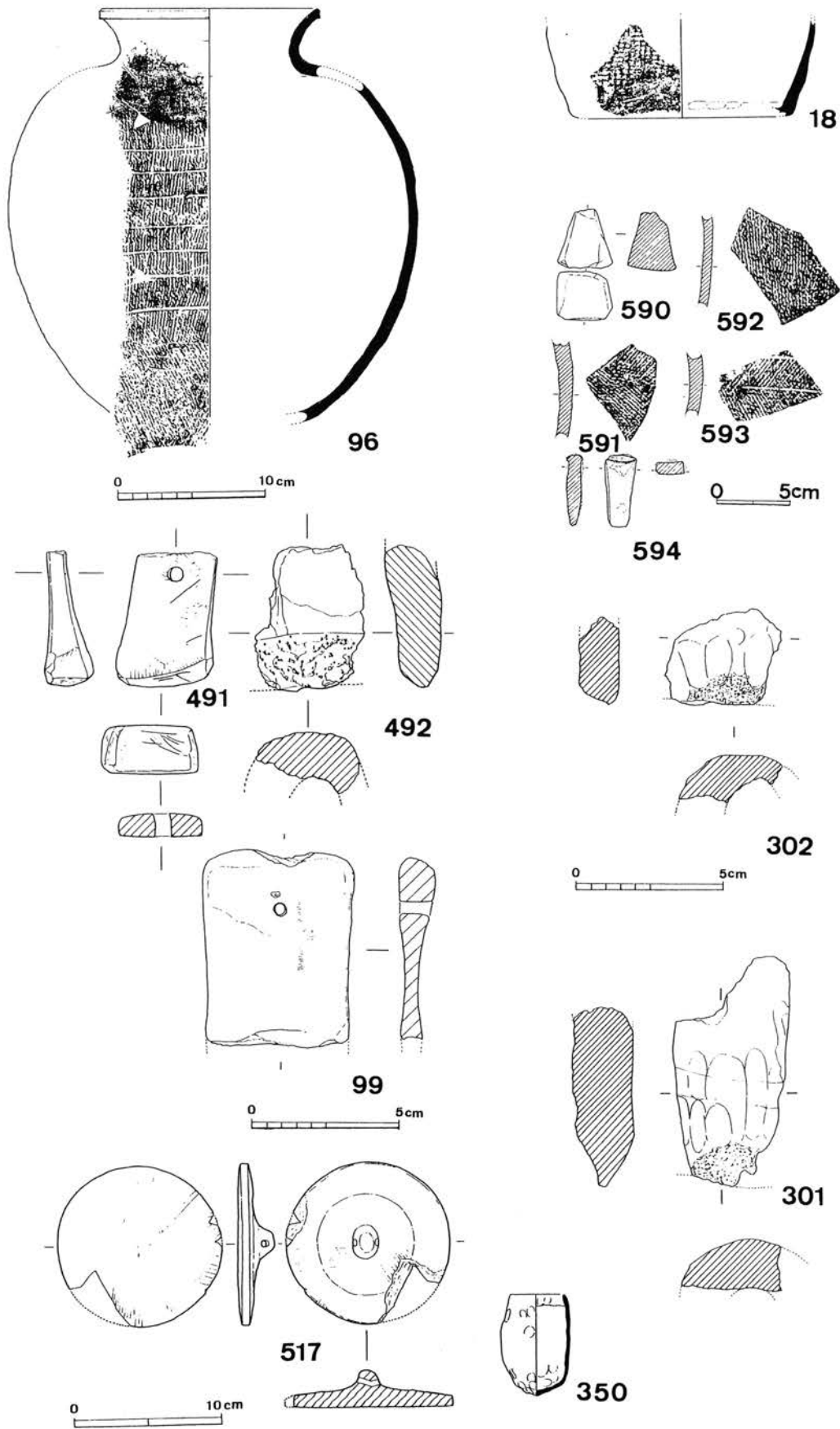
最後に、朝鮮半島系の遺構、遺物が多く認められた相楽郡精華町森垣外遺跡^(注81)(第29・30図)について概観しておきたい。

森垣外遺跡は、京都府相楽郡精華町南稲八妻に所在する古墳時代中期を中心とする集落遺跡である。標高約42mに位置し、遺跡地内からは、南山城地域南半を見晴らせる条件下にある。

集落を構成する居住施設の多くは掘立柱建物跡(第29図)であり、陶邑編年T K 216型式の須恵器の柱穴内埋納(第29図)から、5世紀中葉に集落形成期を想定できる。しかし、一辺46mの方形区画溝とそれに囲繞された大型掘立柱建物跡群が造営される集落の中心的な時期は、同T K 23～



第29図 精華町森垣外遺跡関連図



第30图 森垣外遺跡出土遺物

T K47型式併行期であり、概ね5世紀後半に比定できる。なお、大型掘立柱建物跡群の圍繞施設は、隣接した地点で2区画確認している。

次に、朝鮮半島からの渡来系技術者工人の参入を示す資料を概観したい。まず、朝鮮半島起源の大壁住居跡(第29図)を3棟検出するとともに、馬歯や無文叩き痕をもつ陶質土器が埋納された土坑を複数検出している。また、縄蓆文土器(第30図96・590～593)や韓式系土師器(第30図18)、朝鮮半島起源の携帯用の提碁石(第30図99・491)なども出土している。なお、焼土と炭の充填土坑や鞆羽口(第30図301・302・492)、椀形滓、鉄滓などは、集落内での鍛冶生産を示しており、鉄製農工具や武器、鉄製容器の出土は、渡来系技術者工人による技術水準の向上を示している。

一方、中期集落において通有にみられる資料として、有孔円板や白玉、管玉、勾玉形および剣形滑石製模造品がある。特に、鈕を有し、精巧に成形された鏡形滑石製模造品(第30図517)は、全国で31遺跡32点を数えるに過ぎない希有な事例である。また、滑石原石や碁石の出土は、石製模造品の集落内生産を示唆しており、緑色凝灰岩製の管玉とその原石、そして、琥珀の出土は、集落内の装身具生産をも示している。

先述した馬歯の埋納土坑の検出は、集落内での馬の飼育を示しており、飼料として必要な塩の供給を示す製塩土器(第30図350)も多く出土している。その製塩土器の供給元は、和歌山県紀淡海峡付近や大阪湾沿岸そして、神戸市域湾岸である。また、出土した滑石原石が和歌山県北部産出の滑石に酷似することから、当該地域との取引を想定できる。なお、漁具としての軽石や土錘、紡織具としての滑石製紡錘車は、日常の生業に係る資料である。また、水中貯木による柱材強化のための大型土坑の検出は、掘立柱建物跡で構成される集落では、一般的に存在する施設として認識することも可能である。

以上のように森垣外遺跡では、大壁住居跡などの遺構や朝鮮半島系の遺物が出土しており、集落内に朝鮮半島からの渡来系技術者集団の確実な参入を認めることができる。森垣外遺跡が所在する南山城地域において同様な集落遺跡は確認されておらず、他集落のとの比較はできないが、当該地以北の隣接地に「下粕」の地名が存在することと森垣外遺跡の調査成果は、無関係ではないと思われる。

5. まとめ

府内における陶質土器や朝鮮半島系の土器が出土する遺跡は、ここで取り上げた遺跡以外にも確認されている。しかし、朝鮮半島系土器の出土の意義を考える場合に、今までみてきた遺跡および遺跡群は、異なった状況を考える上での典型的事例であるといえる。

まず、亀岡市里遺跡での一辺8mを測る竪穴式住居跡136の存在は、里集落の群構成を考える上で重要であるばかりでなく、傑出した規模を有する竪穴式住居跡により集落内に複数存在したとおぼしき首長の存在を想起させる。現状では群構成を数的に明らかにすることはできないが、首長を中心に竪穴式住居跡群が分布する状況が把握できる。出土した遺物には、陶邑古窯址群産の須恵器や紀淡海峡から搬入された製塩土器とともに、切り込みの入る甌の把手などがあり、当

該遺跡の特徴的な遺物である。また、竪穴式住居跡の密集度から5世紀後半～6世紀後半までの間に1,000基以上の竪穴式住居跡の存在を想定することができる。集落規模などから、口丹波地域においても大規模集落として認識できるが、現状では、朝鮮半島起源の技術的な影響は首肯できるものの、直接的な渡来系技術者集団の集落内参入は認め難い状況である。

一方、乙訓地域では、古墳時代前期までの生産力を背景とする集落が存在する反面、中期後半に出現する集落も散見できる。現時点で全ての集落に渡来系技術者集団の集落内参入を首肯できる状況ではないが、今里遺跡などの中核的な集落には、それを容認できる状況にある。一帯の地形は、小畑川を中心とした小河川や谷状地形を呈しているものの、集落間の交流は、密接であったと考えられる。また、今里遺跡のような中核集落内の渡来系技術者集団の参入を背景に、生産力を向上させた技術の伝播を示唆する遺物として、ここで取り上げた朝鮮半島系の遺物を捉えることができる。

森垣外遺跡では、大壁住居跡などの朝鮮半島系の住居様式が確認されるとともに、陶質土器や提碁石などの渡来系遺物も多く確認されている。また、渡来系技術者集団の技術により集落内における鍛冶生産なども想定されることから、渡来系技術者集団の存在は、確實視される状況である。現時点では、古墳時代中期に至り集落が形成されることが考えられるが、遺跡北方には、前～中期にかけての集落跡や、宗教的儀礼を執行したと考えられる空間も確認されていることから、一連の遺跡群として認識することも可能である。その推測を前提とすれば、渡来系技術者集団の集落内参入により、居住域が丘陵上に拡張されたとも考えられる。朝鮮半島系の遺物群の出土は、それらの歴史的状況を示唆している。

以上、みてきたように、下植野南遺跡では、確実に朝鮮半島系の土器が出土しており、その背景に渡来系技術者集団の存在を想定しがちである。しかし、ほかの要素にはそれを示す遺構や遺物が確認されていないことから、渡来系技術が当該集落に伝播し、集落規模が拡充されているものの、直接的に渡来系技術者集団が関与したとは言及できないと考えられる。

先に述べたように、朝鮮半島系土器の出土する意義を典型的な3事例をもとに考察することは、特殊例を一般化する危険を含んでいるが、その出土を一律的に解釈すべきではないことは判然としたと思う。また、朝鮮半島系の遺物が少量出土する遺跡であっても、即座に、渡来系技術者集団の存在には至らないことも念頭におくべきであろう。

第5節 集落遺跡出土の製塩土器について—古墳時代中期を中心にして—

1. はじめに

古墳時代中期の集落遺跡は、前期および後期のそれとは大きく様相が異なることが指摘できる。まず、前期集落は、竪穴式住居によって構成される場合が多く、いわゆる首長の居館や倉庫にのみ掘立柱建物が採用される事例が多い。しかし、中期の集落遺跡では、竪穴式住居によって構成される事例が圧倒的に多いものの、一部の中核的な集落では首長の居館や倉庫に限らず、多くの居住施設に掘立柱建物が汎用される。また、数量的には限定されるものの朝鮮半島起源の大壁住

居跡なども確認されており、前期および後期にはみられない居住施設が採用され始める時期といえる。一方、集落内鍛冶による鉄器生産や直接的ないしは間接的な朝鮮半島との交流を示す陶質土器の出土、そして、他地域との交易を示す須恵器の出土や製塩土器、滑石原石、緑色凝灰岩原石は、中期集落の特徴的な遺物群である。その背景には、東アジア一帯の戦乱などによる技術者系渡来集団の畿内政権や各集落への参入を想定するすることができ、中期集落が、前期および後期集落にはみられない画期として認識すべきであることを示している。

さて、土器製塩に関する研究は、香川県喜兵衛島遺跡群に代表される備讃瀬戸地域での考古学的調査によって、その礎を成したことは広く知られている。その後、大阪湾南岸一帯および西庄遺跡などの和歌山県紀淡海峡付近での発掘調査が増加し、備讃瀬戸地域の製塩土器とは異なった様相の土器群が認識された。また、近年、兵庫県神戸市域での古墳時代の集落遺跡調査によって、先に述べた備讃瀬戸地域、大阪湾南岸一帯、紀淡海峡付近で確認される製塩土器とは様相が異なる土器群が確認されるようになり、当該地域においても未確認の製塩遺跡の存在が予想されるに至っている。

一方、消費地では、奈良県布留遺跡などの内陸部に所在する古墳時代の集落跡からも多量の製塩土器が出土することがかねてから知られていた。また、古代の牧として機能していた四条畷市域の古墳時代集落からも大量の製塩土器が出土しており、馬の飼育との関係でこれらの製塩土器を解釈する必要性が指摘された。これらの調査研究から土器製塩が、必ずしも製塩遺跡のみで行われたのではなく、牧や工房跡などのような多量に塩の摂取が必要な集落では、集落内で製塩作業の最終工程が行われていた可能性も指摘されている。

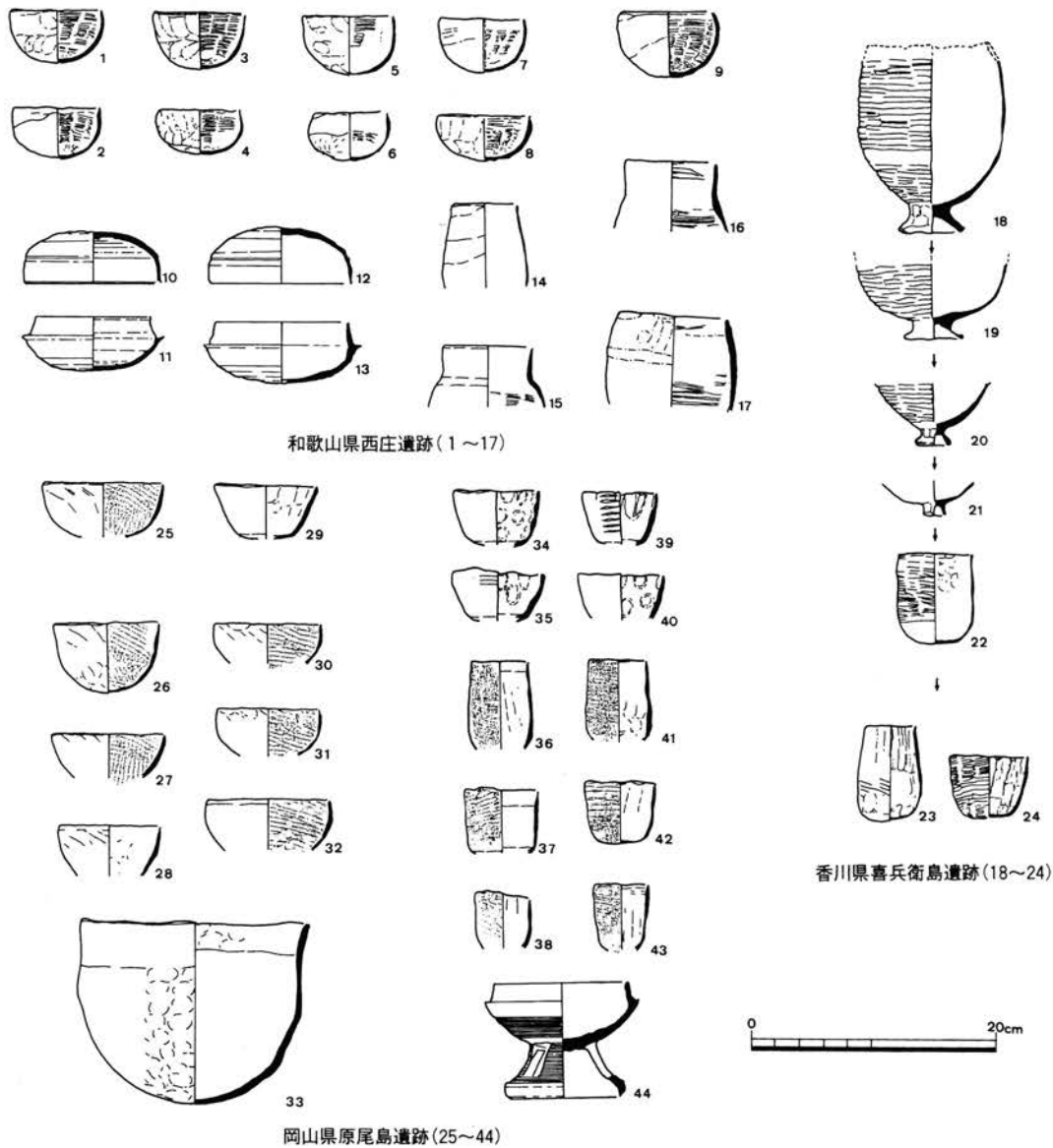
本稿は、以上の経緯を前提として、製塩遺跡および内陸部の集落跡から出土する製塩土器を概観するとともに、下植野南遺跡出土の製塩土器についてほかの遺跡との比較において考察を加えたい。

2. 製塩土器研究の進捗に寄与した遺跡と製塩

まず、製塩遺跡と製塩遺跡から出土する製塩土器についてみておきたい。

(1)和歌山県和歌山市西庄遺跡^(注82) 西庄遺跡は、紀淡海峡一帯に所在する製塩遺跡群の一遺跡であり、布留併行期には操業が開始され、最盛期は陶邑編年TK23型式併行期からMT15型式併行期である。丸底型式の製塩土器は大量に出土しており、3年間の調査で整理箱に1,000箱を数えている。製塩土器以外には、朝鮮半島の陶質土器や大阪府陶邑古窯跡群産の須恵器などが出土している。

西庄遺跡からは、蛸壺形の丸底Ⅰ式(第31図14)と椀形の丸底Ⅱ式(第31図1~9)が大半を占め、それら以外に甕形の製塩土器(第31図15・16)などが出土している。丸底Ⅰ式にも形態差があり、時期差などの要因が想定できる。一方、丸底Ⅱ式は、胎土に砂粒を含まず、色調は全体的に赤褐色を呈している。また、内面に白色の斑文を有する個体が散見できるが、これは、煮沸過程で生じた付着物と考えられ、他地域の製塩土器にはあまりみられない特徴である。焼成は、度重なる



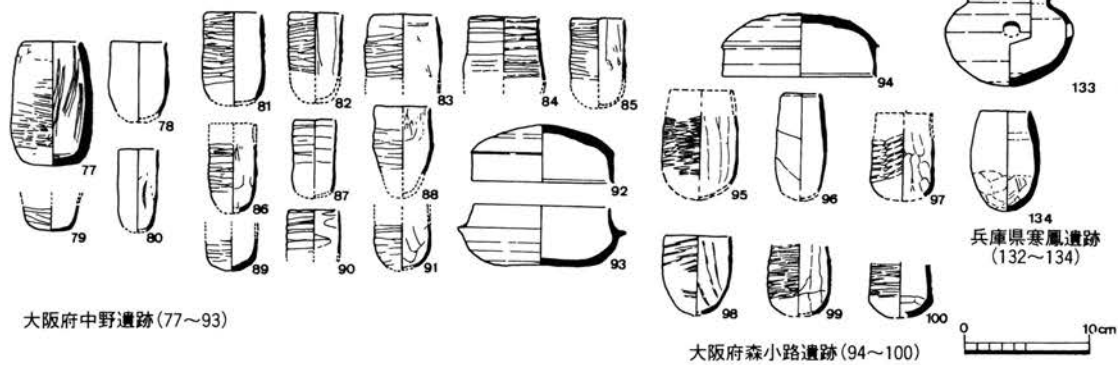
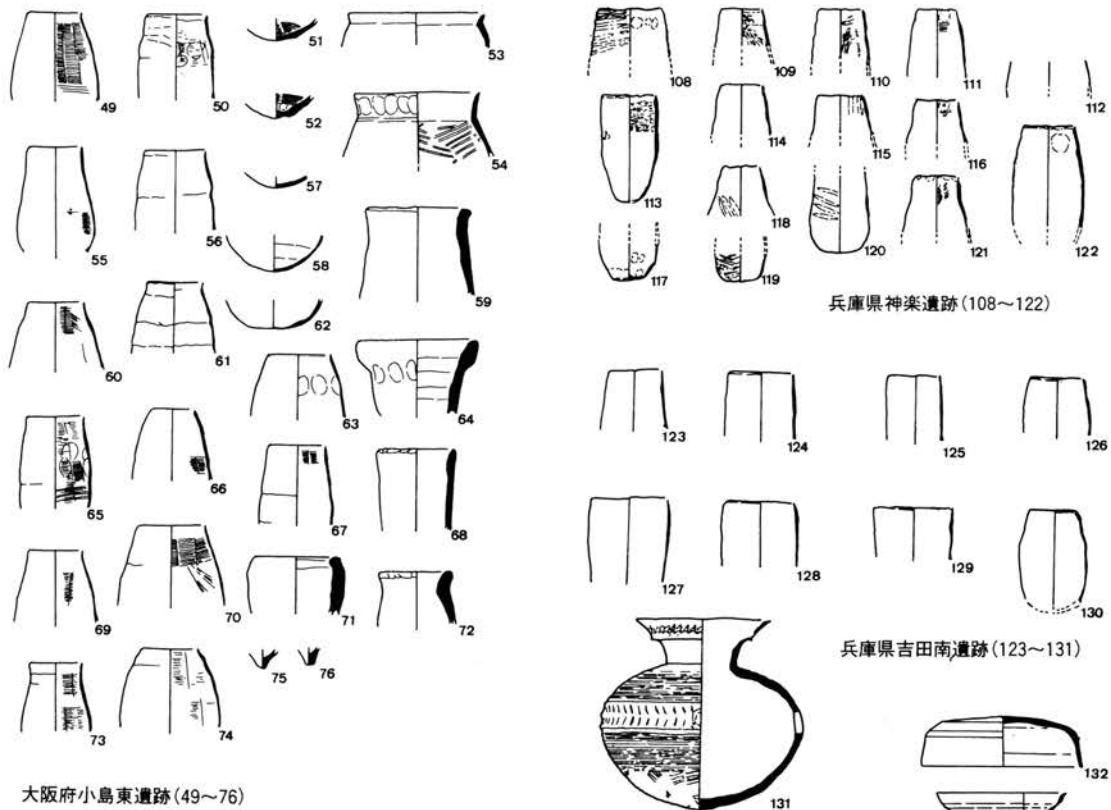
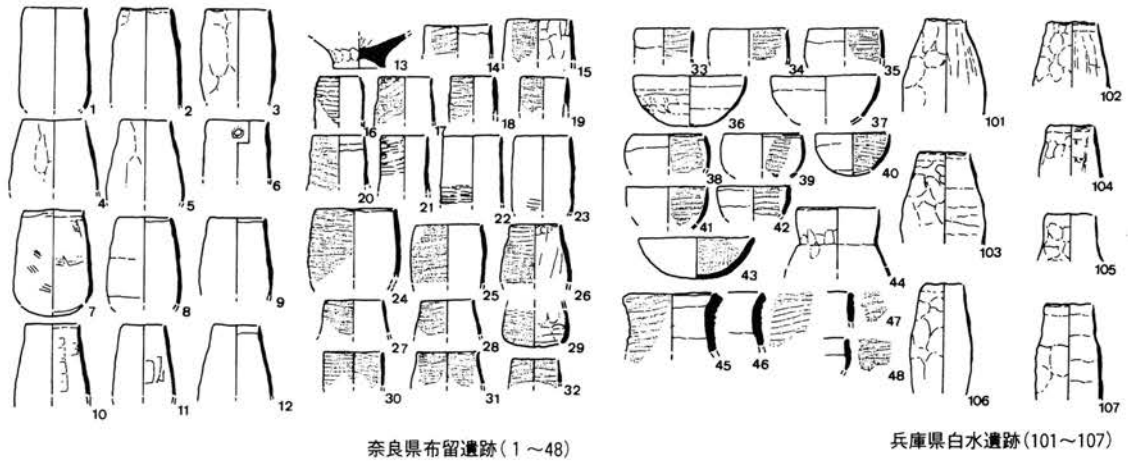
第31図 製塩土器実測図(製塩遺跡)

加熱により、還元焰焼成のように硬質である。器壁は約0.2~0.3cmを測り、外面には粘土接合痕と指ナデ痕が観察できる。内面の貝殻条痕は最も特徴的である。

以上のように、西庄遺跡の製塩土器は、多くの特徴をもっており、消費地から出土する製塩土器内での識別は比較的容易である。なお、西庄遺跡における貝殻条痕は、貝殻を口縁部に対し平行にあてて回転させているが、後で述べる岡山県原尾島遺跡のそれは貝殻を口縁部に対して斜めにあて、中心から外方にむかってかきあげる手法上の違いがみられる。

(2)香川県直島町喜兵衛島遺跡^(注83) 喜兵衛島遺跡は、古墳時代の師楽式土器研究の礎を成した遺跡であり、基本的な報告や論文が多く提示されている。弥生時代の脚台をもつ製塩土器は、古墳時代まで形態的に継承される。しかし、その過程において脚台が徐々に形骸化し、丸底に到る形態的变化が考察されている。

喜兵衛島遺跡における古墳時代中期の製塩土器には、先に述べた西庄遺跡例と同じく、丸底Ⅰ



第32図 製塩土器実測図(集落遺跡)

式と丸底Ⅱ式に分類できる。丸底Ⅰ式の土器胎土には砂粒を多く含み、色調は暗茶褐色である。焼成は硬質であり、器壁は0.2～0.3mmを測る。外面には、平行タタキメが観察でき、内面にはナデ痕が観察できる。一方、丸底Ⅱ式の土器の胎土には砂粒を多く含み、色調は暗茶褐色である。焼成は硬質であり、器壁は0.3mm以上の個体が多い。外面には平行タタキメが観察でき、内面にはナデ痕が観察できる。これらの土器群は、色調が暗茶褐色ないしは暗赤褐色を呈しており、多くの砂粒を胎土に含んでいる特徴がある。

以上が、製塩遺跡における製塩土器の概観である。次に、消費地における製塩土器をみておきたい。なお、製塩遺跡である小島東遺跡は、ほかの出土遺物がきわめて特異なこともあり、ここで概観する。

(1)岡山県岡山市原尾島遺跡^(注84) 出土した製塩土器は、外面をタタキで成形する一群(第31図37・38・42・43)、内外面をナデによって調整する一群(同28・34・40)、外面は未調整ながら内面には貝殻条痕が観察できる一群(同26・27・30～32)、外面はハケメ、内面はナデによって調整する一群(同25)に分類できる。内面に貝殻条痕が観察できる個体は、丸底Ⅱ式に限定されるが、ほかの調整痕は、両型式の土器に共通している。同33は、甕形の製塩土器であるが、濃縮海水を煮沸する容器と考えられる。なお、丸底Ⅱ式の製塩土器は、西庄遺跡のそれと近似する特徴をもっているが、器壁が厚く、胎土に砂粒を多く含む点などの相違点がみられる。

(2)奈良県天理市布留遺跡^(注85) 布留遺跡での製塩土器の出土量は膨大な点数を数える。第32図1～12は、わずかに石英粒を含み、色調は灰色を呈する丸底Ⅰ式に分類できる製塩土器である。焼成は硬質で、器壁は0.2～0.3cmを測る。基本的に内外面はナデ調整である。一方、同14～32は、外面に平行タタキ痕をもつ丸底Ⅰ式の製塩土器である。胎土に石英粒や長石粒を含み、赤褐色ないしは暗赤褐色の色調を呈している。焼成は硬質で、器壁は0.2～0.3cmを測る。外表面は平行タタキによって成形し、内面はナデ調整を施す。同36～42は、丸底Ⅱ式に分類できる一群である。胎土に砂粒を含まず、色調は赤褐色、硬質焼成で、器壁は0.2～0.3cmを測る。内面には貝殻条痕が観察できる。以上のように出土した製塩土器は、紀淡海峡付近や大阪湾沿岸、備讃瀬戸地域から搬入されたと考えられる。広範な地域から製塩土器が搬入される要因には、布留遺跡が有力豪族の拠点であることと関係している。また、集落内から馬歯や馬骨などが多量に出土しており、馬の飼育が製塩土器の大量出土の背景にもあると考えられる。

(3)大阪府泉南郡小島東遺跡^(注86) 小島東遺跡は、遺跡の立地条件および製塩炉の検出により、製塩遺跡であることが確認されているが、製塩土器以外に、多量の滑石製品や鹿角製把縁装具、鍛冶関係の鞆羽口や鉄滓、銅鏃などが出土しており、単なる製塩遺跡とは規定できない要素をもっている。出土した製塩土器の中で、丸底Ⅰ式の胎土は堅緻で、色調は淡灰黄色を呈する個体が大半である。焼成は硬質で、器壁は0.2mmと薄い。また、内外面調整はナデであり、基本的な要素は西庄遺跡出土例に酷似している。なお、丸底Ⅱ式に属する土器は確認されておらず、この点は西庄遺跡とは大きく異なる要素である。なお、製塩土器以外の出土遺物は、一般的な集落においては希少な遺物群であり、土器製塩を操業する背景には、畿内政権との結び付きを考える必要が

ある。

(4)大阪府四條畷市中野遺跡^(注87) 大阪府四條畷市には、東方に位置する生駒山から讃良川、清滝川、権現川の三河川が河内潟に流れ込んでおり、自然地形が良好な牧を形成している。馬の飼育を示唆する資料として、市域から馬歯や馬骨の出土が多くみられ、また、奈良井遺跡や薮屋北遺跡では、殺馬儀礼を示す遺構などが確認されている。

四條畷市域は、河内潟に面していたことから、朝鮮半島から海路によって運搬された馬が、河内潟を経て四條畷付近に陸揚げされ、集約的に飼育されていたと考えられている。また、その後、牧内で馬の繁殖がなされ、本格的な軍馬の飼育がなされたと考えられる。その際、膨大な塩分摂取が必要であるため、市域内に点在する集落跡から多量の製塩土器が出土すると解釈されている。また、畿内一帯に点在する中期集落での急速な馬の需要に対応するために、四條畷市域の牧が、畿内政権との結び付きによって条件が整備されていったと考えられる。

四條畷市域から出土した製塩土器は、きわめて多様であるが、外面に平行タタキ痕を有する丸底Ⅰ式は、形態的特徴や胎土などから当該地から大阪湾岸一帯の近接した地域から搬入されたものと解釈されている。しかし、河内潟を通して大阪湾沿岸には容易に通行できることから、市域に点在する集落跡において土器製塩の最終工程が行われたことが想定されている。出土製塩土器は、基本的には丸底Ⅰ式土器であり、外面に平行タタキを有する個体が大半である。胎土に砂粒を含み、暗灰色の色調を呈する個体が多い。焼成は硬質で、器壁は0.2～0.3mmである。同様な特徴を有する製塩土器が、先に述べた布留遺跡や後で述べる森垣外遺跡などで出土している。

馬を飼育する際の飼料として、塩は不可欠な要素であることはすでに良く知られている。四條畷全域で飼育している馬全頭に塩を飼料として与えるには、相当量の塩の確保が必要である。そのため、安定した供給源を確保する必要がある。同市域内の薮屋北遺跡において狭小なグリッドから整理箱にして25箱の製塩土器が出土した事例などは、焼土の検出こそないが、多量の炭とともに須恵器なども出土しており、当該地が製塩炉に隣接した地点に該当する可能性が高い。なお、当該遺跡では、馬一頭を横位の状態で埋納した土坑が確認されており、奈良井遺跡などとともに、馬を対象とした宗教的儀礼が執行されたことが確認されている。これらの大量の製塩土器の出土は、河内潟周辺でも特異であり、その出土の意義は、古墳時代中期の製塩を考える上できわめて重要な資料である。

(5)大阪府大阪市森小路遺跡^(注88) 森小路遺跡は、河内潟の北辺部に所在しており、古墳時代中期後半の集落跡が確認されている。製塩土器は丸底Ⅰ式が多く、胎土には砂粒を含み、色調は灰色を基調としている。一方、煤の付着した個体も散見でき、焼成は軟質な個体が多く、器壁は0.2～0.3mmを測る。外面は平行タタキによって成形し、内面はナデで仕上げている。大阪湾沿岸からの搬入であろう。

最後に神戸市域の古墳時代集落について、概観しておきたい。神戸市域出土の製塩土器は、市街化が著しいため調査の集中する地域に多く見られる傾向がある。一般的に広域な神戸市域は、吉田南遺跡、新方遺跡、白水遺跡、出会遺跡、玉津田中遺跡、寒鳳遺跡などが所在する西区域と

松野遺跡、神楽遺跡、戎町遺跡、上沢遺跡、大開遺跡などが所在する長田・兵庫区域、そして、郡家遺跡、森北町遺跡、西岡本遺跡などが所在する灘区域の3区域に大別することができる。

(6) **兵庫県神戸市白水遺跡**^(注89) 出土製塩土器には、丸底Ⅰ式に分類できる個体が出土している。丸底Ⅰ式は、基本的な色調は、暗灰色ないしは灰色を呈しているが、外表面には煤が付着しており、淡黒褐色を呈する個体が多い。これは、胎土に多くの砂粒を含んでいることと密接な関係があり、砂粒によって生じた器表面の凹凸に炭素が付着したと考えられる。先に述べた四条畷地域の製塩土器にも煤が付着する個体がみられたが、煤の付着は、胎土や色調以外の要素で搬入元を特定する際の有力な根拠である。なお、土器製塩の煮沸工程では、燃料である木材をそのまま燃焼させるのではなく、炭などを利用し、煙が生じない工夫がなされたと考えられる。そのため、製塩土器の外表面に煤が付着する個体が、極端に少ないと思われる。当該資料はその点においても特異である。

(7) **兵庫県神戸市神楽遺跡**^(注90) 製塩土器の大半は、丸底Ⅰ式であるが、外面に平行タタキ痕を有する個体とナデによって調整する個体に分類することができる。焼成は硬質で、器壁は0.2～0.3mmを測る。なお、器形的には、丸底Ⅰ式に分類できるが、筒形を呈する特徴がある。なお、紀淡海峡付近の製塩土器に近似しているが、胎土は、それほど精緻ではないことから、遺跡の南方に広がる大阪湾岸付近からの搬入を想定できる。

(8) **兵庫県神戸市吉田南遺跡**^(注91) 製塩土器には、丸底Ⅰ式に分類できる製塩土器が出土している。丸底Ⅰ式は、基本的な色調は暗灰色ないしは灰色を呈しているが、外表面には、煤が付着しており、淡黒褐色を呈する個体が多い。これは、神戸市域から出土する製塩土器に共通する特徴である。なお、須恵器には、陶邑古窯跡群産の製品が多く含まれていることが確認できた。

(9) **兵庫県神戸市寒鳳遺跡**^(注92) 寒鳳遺跡は、大量の滑石製模造品が出土するとともに、朝鮮半島の縄文土器や朝鮮半島起源の大壁住居跡などが検出されている。集落全体の構造などは不明な点が多いが、渡来系技術者集団が参入した集落として認識できる。出土する製塩土器は、丸底Ⅰ式であり、筒形を呈する点に大きな特徴がある。胎土などの点でほかの古墳時代中期の集落遺跡から出土する製塩土器に共通する要素も多く、周辺域に存在すると思しき未確認の製塩遺跡からの一括搬入を想起させる。

神戸市域の各遺跡から出土した製塩土器には、備讃瀬戸地域や紀淡海峡付近からの搬入は現時点では認識できず、神戸市域を含めた大阪湾岸からの搬入であることが把握できた。このことは、遠隔地に所在する製塩施設からの搬入より、より近郊に所在する製塩施設からの搬入が一般的であったことを示唆している。しかし、滑石原石の搬入元や須恵器の搬入元など、今後、多方面からの交易の実態を検討する必要がある。なお、事実報告では、神戸市域に広がる器高の高い型式を丸底Ⅰa式として分類したが、本稿では、従来通り丸底Ⅰ式として記述した。

次に、古墳時代中期で最も特徴的な土器の丸底化およびその小型化に到る背景について考えておきたい。

3. 丸底製塩土器の小型化をめぐって

一般的に弥生時代中期に備讃瀬戸地域で生成された土器製塩技術は、瀬戸内沿岸の地形的な要素などから急激に同地域において進展したと考えられる。それらの製塩技術は、瀬戸内海や大阪湾沿岸地域を經由し、弥生時代後期に周辺域に広く伝播した。一方、古墳時代前期には脚台式の製塩土器が瀬戸内沿岸一帯で共通する器形であることが確認されている。また、タタキ技法による成形は、備讃瀬戸地域においては古墳時代後期に到るまで踏襲されるが、紀淡海峡付近や大阪湾南岸一帯、淡路地域の製塩土器には、すでにみられない点を指摘することができる。

さて、丸底型式の製塩土器は、古墳時代中期後半から後期前半にかけて大阪湾南岸から淡路地域にかけて成立していることが理解されている。特に、兵庫県津名郡東浦町に所在する引野遺跡^(注93)では、丸底型式の製塩土器が、脚台式製塩土器から徐々に器形的変遷を遂げて成立する過程が良好な土器群によって検証されている。まず、脚台Ⅲ式は、脚底部の接地面も広く、脚台として十分機能していたと考えられる。しかし、脚台Ⅳ式では、もはや、自立する機能は消失し、脚台の形骸化が顕著にあらわれる。特に、脚台Ⅳ式の最終段階では、脚台自体が突起化しており、形態的にも消失寸前の様相を呈している。その後に区分される丸底型式の最古段階では、突起自体が消失し、底部外面中央部を指押さえによりわずかにつまみ出すまでに形骸化している。現時点での各型式の概ねの年代は、脚台Ⅲ式から脚台Ⅳ式への過渡期が、布留式併行期新段階に比定されており、脚台Ⅳ式から丸底型式への過渡期が、陶邑編年TK208型式併行期に比定されている。丸底型式の製塩土器が、古墳時代中期に到り突然、出現するのではなく、脚台式の製塩土器の形骸化によって生成することが明確になり、その資料的価値は高い。

最後に丸底型式の製塩土器が、極端な小型化に到った経過について考えておきたい。

脚台式から丸底式へと変化する時期は、先に述べたように陶邑編年TK208型式併行期であるが、極端な小型化は、陶邑編年TK23型式から同TK47型式併行期に顕著になることが、先に述べた和歌山県西庄遺跡の事例からも明らかである。当該併行期は、次章で述べるように技術者系渡来工人の集落内参入を契機として、集落の生産力が向上し、馬の飼育が中核をなす集落において開始される時期でもある。この時期に丸底型式の製塩土器が小型化される必要理由には、馬の広範囲な移動が戦術的にも不可欠であったことや広範囲の交易を行う上でも不可欠であったことなどが考えられる。その馬の移動を支障無く効率的に進める必要から、製塩土器の極端な小型化が大阪湾南岸や紀淡海峡付近の製塩遺跡を中心に推し進められ、神戸市域や遠くは備讃瀬戸地域にまで広がったと考えられる。しかし、現時点において朝鮮半島における小型の丸底製塩土器は確認できないことから、小型化の系譜自体は判然としない。なお、馬の飼育に必要な塩は、その膨大な摂取量を丸底型式の製塩土器のみで補ったとは考えられない。丸底製塩土器は、基本的には、集落内での祭祀用であり、副次的に飼料としても使われたと解釈しておきたい。飼料の塩は、甕などの大型移動用容器で集落内に搬入されたのではないか。

4. 集落跡の属性研究と製塩土器の具体的様相

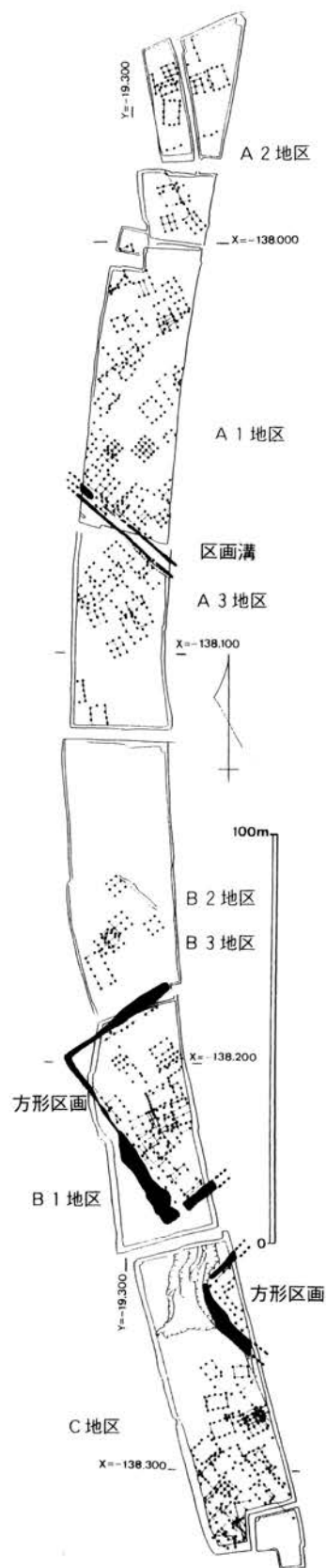
各集落における製塩土器の出土総量は、調査面積や遺構の密集度によっても大きく異なり、一律に比較できない側面をもっている。しかし、出土総量にこそ相違はあっても、出土した製塩土器が多く地域から供給されているか否かについては、把握できる。

ここでは、下植野南遺跡を含めた3遺跡の属性と出土製塩土器に焦点をあてて、製塩土器の具体的な様相について検討しておきたい。

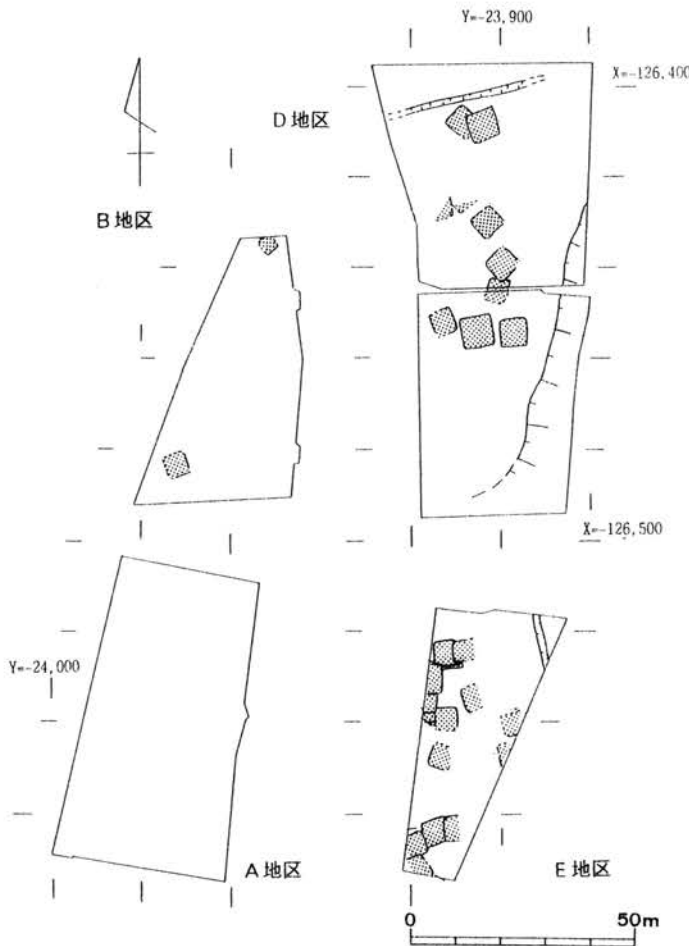
京都府精華町森垣外遺跡^(注94)は、陶邑編年TK208型式から同TK47型式併行期に比定できる掘立柱建物跡群によって構成される集落跡である。同時期の一般的集落では、依然として竪穴式住居跡が居住施設の主流であるが、当該遺跡では、すでに掘立柱建物跡を主たる居住施設として採用している。また、これらの掘立柱建物跡群は、雑然と点在するのではなく、一辺46mの方形区画溝内に整然と併置されていたことも判明した。この区画は、当該遺跡地内において2箇所を確認しており、また、区画溝外周囲には居住施設を殆ど検出していないことから、隔絶された空間に主要居住施設が存在していたと考えられる(第33図)。

さらに、森垣外遺跡を特徴づける遺構として、大壁住居跡をあげることができる。一般的に大壁住居跡は、古墳時代中期以前には見られない建築様式であり、朝鮮半島起源と考えられている。当該遺跡では3棟検出しているが、先述した大型掘立柱建物跡群を圍繞する方形区画溝内での検出ではないことから、主要施設から離れた地点に設営された「倉庫」であった可能性が高い。また、当該遺跡では、陶質土器や韓式系土師器などの外来系土器が出土している。一方、大量に出土する須恵器は、三辻利一氏による胎土分析の結果および肉眼観察によって大阪府陶邑古窯跡群からの搬入品が多く含まれていることが分かっている^(注95)。

一般的に古墳時代中期の技術革新には鍛冶による鉄器生産が大きく影響したとされる。それらの工程では、鉄滓が多く生じるため、集落内の鉄滓出土は、鍛冶などが行われたことを示す遺物として認識されている。当該遺跡においても鉄滓や椀形鉄滓、鞆羽口が出土し、焼土坑も検出していることから、集落内で鍛冶が行われていたことを推測させる。鉄製工具を集落内で



第33図 精華町森垣外遺跡集落構造図



第34図 八幡市内里八丁遺跡集落構造図

の多くは細片であるため、形態については不明な点が多いが、和歌山県紀淡海峡付近から搬入された貝殻条痕を内面に有する個体(第35図1・2)や還元焼成の個体などが確認できる。また、蛸壺形を呈する大阪湾沿岸からの搬入品(第35図5)や胎土に多くの砂粒を含み、外面に煤が付着する特徴を有する神戸市域からの搬入土器も散見できる。製塩土器で得られた塩は、固形塩であり、食用、工作用、宗教的な儀礼用と用途も様々であるが、当該遺跡では、馬糞を埋納したピットを検出していることから、馬の飼育が集落内で行われたことが想定できる。馬の飼育には塩は飼料として不可欠であり、一日の摂取量は、運動量の多い時で概ね二勺を必要とするが、大量に出土する製塩土器が、それと何らかの関係にあることも念頭におかねばならない。また、森垣外遺跡から出土する製塩土器に、四条畷市域で実見した土器を一定量含む背景には、同地域からの馬の移動なども考慮する必要がある。

次に、京都府八幡市内里八丁遺跡^(注97)の集落構造と出土製塩土器についてみておきたい。

京都府八幡市内里八丁遺跡(第34図)は、森垣外遺跡とは異なり、竪穴式住居跡群によって集落が構成される集落跡である。掘立柱建物跡や方形区画溝の検出もなく、確実な陶質土器などの出土もないことから、一般的な農村集落跡と考えられる。また、半島系の土器としては、格子目タキによって成形された韓式系土師器がある。

生産する技術の定着は、生産力向上につながり、中核的集落へと変貌を遂げていく重要な契機ともなったのであろう。また、精巧な鏡形、剣形、勾玉形などの石製模造品や滑石原石の多量出土は、交易によって原石を入手し、集落内で石製品を生産したことを示唆^(注96)している。なお、滑石原石が露頭する和歌山県北部におもむき原石の採取地を実見した結果、森垣外遺跡出土の滑石は紀伊産と同定できた。この結果は、紀淡海峡付近から搬入された製塩土器や軽石の出土とともに、当時の交易の実態を把握する上で重要な認識である。

さて、本稿の主題である製塩土器について概観しておきたい。森垣外遺跡の各調査区からは、相当量の製塩土器が出土している。そ

内里八丁遺跡から出土した製塩土器(第35図下段)は、丸底I式に同定できる土器がほとんどであり、筒形を呈する個体が多い。事実報告での分類に準拠すると、丸底I a式に分類することができる。明確な根拠をもって搬入元を特定できないが、胎土・色調・焼成などの諸様相から、ほぼ同一地域から搬入された可能性が指摘できる。

一方、下植野南遺跡では、倉庫としての掘立柱建物跡は検出されているものの、大半の居住施設は竪穴式住居跡であり、集落構造の様相としては、八幡市内里八丁遺跡に近似している。しかし、集落規模が広大であり、また、朝鮮半島系の土器や陶邑古窯跡群産の須恵器、そして、移動式竈などの出土は、内里八丁遺跡にはみられない様相である。

下植野南遺跡から出土した製塩土器には、約10%の比率で紀淡海峡からの製塩土器が確認でき、また、微量ではあるが、神戸市域を中心とする地域からの搬入土器が認められる。ほかの大阪湾岸一帯の搬入土器を加えれば、複数の地域からの搬入を認めることができる。

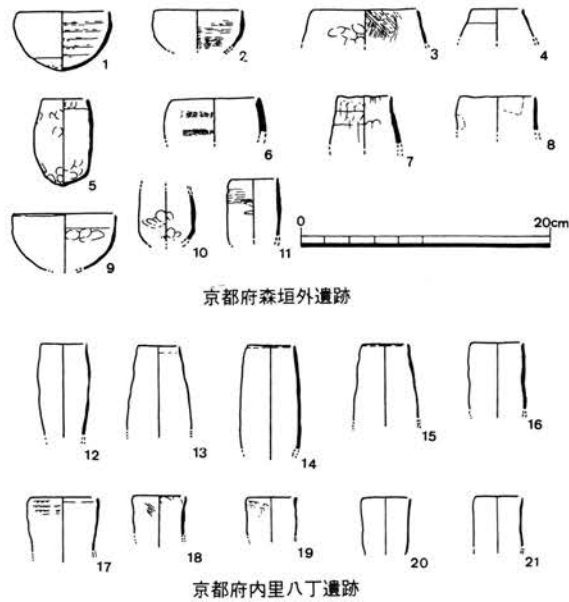
先に述べた森垣外遺跡では、紀淡海峡付近から神戸市域の広範囲な地域を含む大阪湾沿岸地域からの搬入品が多数出土しており、また、下植野南遺跡の製塩土器は、全体総量自体は、わずかであるものの、広範囲な地域からの搬入が確認できた。

製塩土器にみるこのような相違点は、各遺跡の生成過程に起因することが想定でき、製塩土器のみならず他地域との交易自体が、根本的に異なっていることを示している。^(注98)製塩土器の量的な相違にも留意を必要とするが、搬入元が、一地域に限定されるのか、あるいは広範囲な地域からの搬入なのかの検証も重要な集落の属性研究の要素である。

5. ま と め - 製塩土器研究の問題点の指摘 -

製塩土器の研究は、土器編年や胎土、焼成、色調の観察による地域性の把握が基本となって進展した。また、奈良県天理市布留遺跡の研究などにより、消費地での製塩土器のあり方が次第に詳らかになり、古墳時代中期における交易の一側面が明かになりつつある。しかし、近藤義郎^(注100)が指摘するように、集落跡から出土する製塩土器の搬入元を土器の肉眼観察から判定することは、きわめて困難な作業であり、内陸部における製塩土器研究は、未だ、確実な同定を確立する段階から脱していないといえる。

さて、各集落遺跡から出土する製塩土器の総量は、森垣外遺跡で詳しくみたように集落ごとの属性によって大きく異なると考えられる。正確な総量を示すことはできないが、掘立柱建物跡に



第35図 森垣外・内里八丁遺跡出土製塩土器

付表13 遺跡の属性

	内里八丁遺跡	下植野南遺跡	森垣外遺跡
居住等施設	竪穴式住居	竪穴式住居・ 掘立柱建物(倉庫)	掘立柱建物・大壁住居
朝鮮半島土器	×	縄蓆文土器	縄蓆文土器
朝鮮半島系土器	甑	甑・移動式竈・格子タタキ甕	甑・移動式竈・格子タタキ甕
石製模造品	円板・勾玉・管玉・ 白玉	剣・円板・勾玉・管玉・白玉	鏡・剣・円板・勾玉・管玉・白玉
滑石原石	×	×	○
鉄滓	×	×	○
製塩土器	一地域	大阪湾岸(紀淡+神戸)	大阪湾岸(紀淡+神戸)・四条畷

よって構成される森垣外集落の出土総量は、竪穴式住居跡によって構成される内里八丁集落のそれより確実に多いことが指摘できる。また、搬入元も複数であることが確認できる。今後、内陸部における製塩土器研究は、集落の属性研究の一環として捉える必要がある(付表13)。

一方、天然の牧としての機能を有した四条畷市域での製塩土器の出土総量は、製塩遺跡に匹敵する出土量に達している。今後は、当該地域の製塩土器が、内陸部の集落跡から出土するか否かを確認する必要がある。なお、四条畷市域からは、平行タタキをもつ製塩土器が大量に出土しており、焼き塩処理を行っていた可能性を示唆する調査例も増加している。

本稿は、平成12年度に実施した当調査研究センター共同研究「古墳中期における南山城地域の製塩土器^(注101)」の成果の一部を基層として、下植野南遺跡出土の製塩土器を比較した。部分的に重複する内容もあるが、森垣外遺跡、下植野南遺跡、内里八丁遺跡との比較によって、製塩土器の出土傾向が把握できる典型例として提示できたことは、今後の製塩土器研究に寄与できるであろう。

(小池 寛)

第6節 下植野南遺跡の石製模造品

1. 集落出土の石製模造品の問題

下植野南遺跡では6世紀前半に属する勾玉・有孔円板・剣形品・白玉などの石製模造品が出土した。ここでは、研究史を瞥見してその問題の所在を明確化し、併せて本遺跡の分析から得られた石製模造品の製作・使用の復原についての洞察を提示することにした。

石製模造品について大系的な研究を纏めたのは高橋健自^(注102)・後藤守一^(注103)であった。これらは、当時、東京帝室博物館が所蔵していた古墳出土の石製模造品や、関東地方での古墳発掘(群馬県白石稲荷山古墳など)によって編年の位置が確定した石製模造品に検討を加えたものであったが、模造された器物に焦点が集中し、古墳時代の儀礼体系の中で石製模造品を位置付けるといった意識が希薄であった。戦後、大阪府カトンボ山古墳や三重県石山古墳などで発掘調査による石製模造品の出土例が蓄積し、加えて福島県建鉾山高木遺跡・福岡県沖ノ島遺跡などの祭祀遺跡の調査が進むようになると、古墳の埋葬儀礼とは異なった神祭りの場の実体が明らかになってきた。その時に、古墳出土の石製模造品と祭祀遺跡出土の石製模造品とは品目が異なることも次第に気づ

かれてきたのである。つまり、古墳においては刀子・斧・鎌を主体とする農工具の模造が顕著であり、祭祀遺跡では剣形品・子持勾玉・有孔円板・白玉などの品目が卓越する。一方、高度成長期に関東地方では大規模な集落の調査が相次いで行われ、和泉・鬼高期の竪穴式住居跡から出土する石製模造品は、古墳出土のものよりも祭祀遺跡出土のものに近い様相を示すことが明らかになった。これらの流れから、古墳の埋葬儀礼と集落／祭祀遺跡の神祭りという古墳時代の儀礼体系には2相があって、石製模造品の品目の差異にそれが反映していること、ひいては古墳時代中期には葬(埋葬儀礼)と祭(神祭り)が分離したと推定^(注104)されるにいたった。しかし、古墳出土の石製模造品の編年が精緻化するにつれて、この葬祭分離の見解は否定^(注105)され、現在では古墳の被葬者は当初から神祭りの執行者であったと見るのが大勢である。では、神祭りで使用された石製模造品は、どのように集落へもたらされたのであろうか。この問題は、寺村光晴による下総地域の玉作遺跡の検討を端緒とする。この調査では、専業工房というべき大形の特定住居で石製模造品の製作が行われていることや詳細な製作技法が明らかになったが、石製模造品が製作工房からダイレクトに消費集落へもたらされたのかなどの流通・使用の問題については不明な点が多かった。また、高橋和夫は石製模造品を伴う竪穴式住居跡が和泉期を中心としながらも一部五領期にも及ぶことから、大和政権の東方への勢力伸長に伴って、石製模造品が配布または製作集団が移植されたと考えた。近年では、各地域で石製模造品の製作工房や地域的な製作技法の検討が詳細に進められるようになり、流通・使用の復原にも具体的にアプローチできる調査環境が整ってきた。本稿ではこれら研究史の流れを踏まえて、下植野南遺跡の竪穴式住居跡出土の石製模造品、なかでも数量的に確保された白玉の検討から、製作・流通・使用(廃棄)のプロセスがいかなるものであったのかの復原を試みたい。

2. 製作プロセス

先述したように、下植野南遺跡の白玉は、算盤玉形を呈するA類と筒形のB類とに分別できる。今回の調査では、水洗によっても原石や素材や剥片が出土していないため、不確実な部分も残るが、製品の詳細な観察から想定される白玉の製作技法を提示したい。

まず、A類の白玉は側面に稜が走ることから、両側の端面と側面との接線付近に連続的に調整剥離を加えることによって、研磨のための作業面を作出した可能性が高い。このため、あらかじめ板状の素材石核から、1点ずつ目的となる個体を獲得する方が合理的である。A類の白玉に暗灰緑色の石材が多い理由は、板状剥片石核を生成しやすい、片理の発達した石材が優先的に選択されたためとの可能性がある。この反面で、B類の製作技法はA類とは全く異なっている。B類は筒形の白玉の側面の一方に、楔状の工具でベッキング(押圧剥離?)して、それを打点に打割したと推定する。したがって、その前提として、あらかじめ狭長な管状の素材石核を作出しておく必要がある。このような製作技法は、ガラス小玉製作技法に見る管切法と類似するが、穿孔後に打割すると、力の抜け方がコントロールできないので、管切りと穿孔との先後関係は、穿孔途中の資料を待たねばなるまい。ただし、B類の使用石材には灰色のものが目立ち、暗灰緑色のもの

と比べて扁平な板状剥片素材を生成しにくいといった石の性質が、研磨を多用するB類の製作技法を採用させたのかもしれない。いずれにしてもB類は、熟練しさえすれば規格品を大量生産することを意図した製作技法であると言え、出土量もB類が大半であることがそれを裏付けていよう。

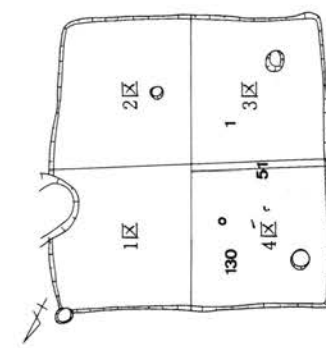
なお、これらの製作には鉄製の刀子・錐が使用されたと考えられ、砥石で仕上げられたと考えられるが、工具は水洗によっても全く出土していない。

3. 流通プロセス

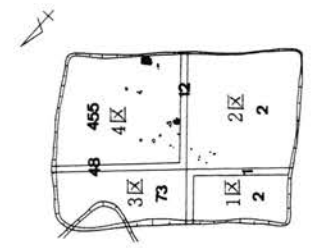
製作された白玉がいかなる流通経路で、下植野南遺跡の竪穴式住居跡にいたったかは不明といわざるを得ない。しかし、製作技法の痕跡や出土状況の検討から、竪穴式住居跡で製作され、ただちに(on the spot)で廃棄されたのか、一旦、第三者を介して配布されたかの論理的な推定は可能であるといえる。それが、白玉の分類に見た第2の属性である端面の研磨が物語る。通常、ある一人の熟練した製作工人が慣用的な肉体運動によって物を製作したと仮定した場合、そこに残る痕跡にはある種の規則性が観察される、と期待される。これが、土器製作の民族誌においてアーノルド^(注106)が指摘した、モーターハビットの概念である。モーターハビットは連続的な筋肉運動を必要とする作業、例えば土器表面のタタキやケズリの動きと工具の分析から工人を分別する際の研究などに実践されているが、土器の場合は、個々の竪穴式住居の成員が土器を作るわけではなく、一旦、土器が集積された後に交換ルートに乗って流通したことは言うまでもないので、一括性の高い土器群でも個人を識別することは非常に難しい。反面、白玉のような石製模造品は製作方法が単純であるだけに、任意の竪穴式住居跡における一括出土の資料が工人の多寡を反映しやすいと考える。この仮定に立って、端面の研磨をみると、全体をないしは個々の竪穴式住居跡においても1～4類がまんべんなく出現し、有意な関係性は認められないという分析結果が出ている。仮に、調査区内に竪穴式住居跡の中に白玉の製作工房があれば、そこでは1～4類のいずれかが突出する正規分布を示すはずであるが、それが無いことは、こ



SHF07



SHF113

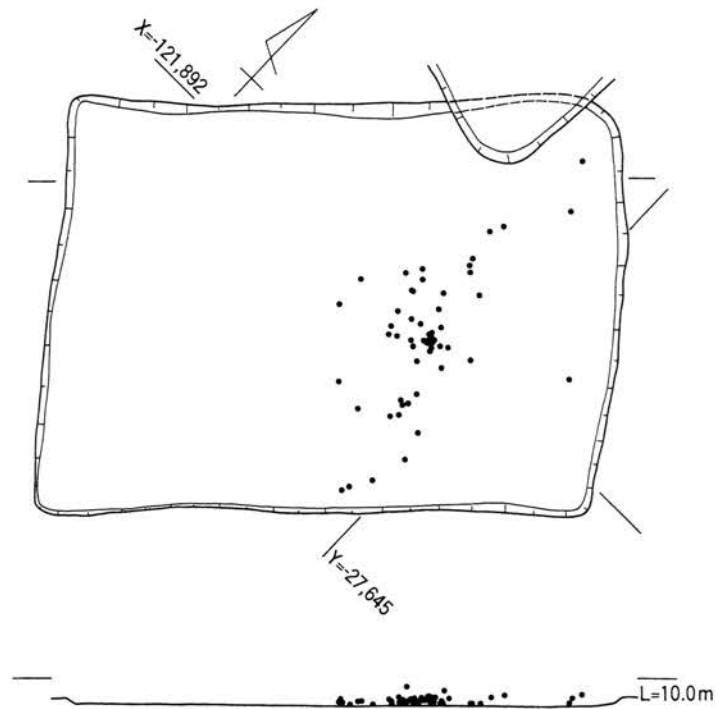


SHJ13

第36図 竪穴式住居跡別白玉出土概念図

これらの白玉が一旦、第三者に集積され、あらためて再分配された可能性を示唆する。

流通プロセスを推定する第2の手がかりは、出土位置である。第36図には水洗によって出土した石製模造品の出土位置が押さえられたものを図示した。これから白玉が住居全面に均一に散布するのではなく、特定区画に集中する傾向をうかがうことができる。仮に竪穴式住居内で製作されたのであれば、支柱穴に囲まれた部分が作業空間として利用されたはずであり、それが



第37図 竪穴式住居跡SHJ13白玉分布図

分割された各区画の出土量に反映するはずであるが、実際には1区画のみが極端に突出し、ほかからの出土が激減する。これからは、出土区画部分で白玉を投棄するあり方が想定され、竪穴式住居跡での出土状況は製作時のあり方を反映していないと考えられる。

以上、2点から白玉の製作と使用(廃棄)の間の流通プロセスには第三者を介した可能性が高いこと、さらには本調査区内で検出された竪穴式住居跡には製作工房が認められないことを示している。

4. 使用(廃棄)プロセス

住居跡から出土した石製模造品の出土位置が発掘調査によって明確にされることは少なく、住居の埋土を水洗浄中に出土するものが大半である。今回の調査では、竪穴式住居跡SHJ13の調査中に多くの石製模造品の出土位置を確認することができた。発掘調査では石製模造品のレベル・座標を測量し、サンプリングした玉・有孔円板・剣形品の分布図(第37図)を作成した。この図から、帯状に集中分布する地区があることを読み取れる。これが、視認できたものみのバイアスではないことを示すのが、埋土の洗浄後の出土総量である。いずれも同一区画に出土量のピークが認められることは、この区画(on the spot)において、石製模造品を使用した儀礼が実修されたことを示唆するものといえよう。また、出土レベルが床面に近いことは、上屋構造が崩落する以前にこれらの石製模造品が投棄されたことを示唆している。これが、住居建築時か生活時のものか、あるいは廃絶時のものかは慎重をきさねばならないが、一括投棄されたものであることは疑いないだろう。

さて、石製模造品の使用状況については、明確にできる出土状況が獲得されたものが少ないが、通常、懸垂して使用されたものではないかと漠然と推定されている。器物を懸垂する儀礼は中国の各種の儀礼をまとめた『儀礼』によれば周代にさかのぼるが、石製模造品は懸垂するために器物をミニチュア化し、懸垂孔を改めて穿つという意味において、縄文時代以来の祭具の伝統の中でも画期的なものである。一方、日本列島以外のミニチュア化した器物を瞥見すると、これらの仮器は明器として副葬に供されるものが一般的である。しかし、古墳時代の石製模造品は剣形品や有孔円板など副葬用とは別の地点から出発したものがあり、しかも懸垂の儀礼に供されているという2点が非常に特徴的であるといえよう。なお、奈良県発志院遺跡では榊を集積した土坑が検出され、千葉県東寺山石神2号墳では白玉出土レベルが上下していることから、樹木に懸垂したまま木棺内に納められたと推定されている。一方、6世紀後半の榛名山二ツ岳の火山灰によって埋没した群馬県黒井峰遺跡では、小形の鉢に白玉を納めた例や樹木下に大甕を据えて、その周囲に石製模造品を散布した例がある。下植野南遺跡の場合、懸垂状態のまま糸が断裂して図に見るような出土状況になったのか、玉類を撒くような儀礼が行われたのかは分からないが、集落での石製模造品の出土状況への注意を喚起しつつ、その実態へも接近していく必要性を強調しておきたい。

5. 下植野南遺跡における石製模造品の生産と流通

本稿での検討結果、下植野南遺跡における石製模造品の製作・流通・使用プロセスが復元的に推測できるようになった。それを以下にまとめて、まとめとすることにした。

石製模造品を製作するために使用された石材は、暗灰緑色・灰色・白灰色の3種の滑石ないしは滑石片岩が採取されるが、これらは紀ノ川－吉野川ラインの変成岩帯から露頭ないしは転石として採取されたと考えられる。山取り加工具は不明であり、素材石核がどのような形態であったかは分からないが、集落内での石製模造品の製作が明らかな相楽郡精華町森垣外遺跡の出土資料によれば、人頭大の塊石から板状剥片を作出したものが、素材として流通していた可能性がある。これらの素材がもたらされた製作工房は、今回の調査で検出された竪穴式住居跡には含まれていないと考える。この素材には暗灰緑色の色調を呈する片理の発達したものと灰色で珪質の強いものがある。このうち、前者は個別に単体の算盤玉を作出するために加工され、後者は研磨によって管状の素材を作出し、管切りによって規格品を打割っていく。使用された工具は出土しなかったが、鉄製のものが使用されたと考えられる。かくして、製作された玉類は一旦、第三者に集積され、その段階で製作時の組み合わせは崩れてしまう。つぎに、本調査区内の竪穴式住居跡に再分配され、竪穴式住居の上屋構造が維持されている段階で、これらの石製模造品は懸垂もしくは投棄によって現在みるような出土状況を提示したと考えられる。

ところで、山城地域における石製模造品は、古墳であれば城陽市芝ヶ原11号墳や京都市鏡山古墳など5世紀初頭～前半を嚆矢とし、5世紀中葉の城陽市久津川車塚古墳、5世紀後半の菅井稲荷山古墳まで5世紀を通じて盛行する。ところが、集落においては、5世紀後半以降の竪穴式住

居跡からのものが集中し、古墳の石製模造品と集落の石製模造品との間には盛行時期に若干の時期差がある。また、これら石製模造品の出土位置は、竈の付近から出土する事例が多いことから、中期後半に渡来する今来漢人との関連を考える見解もある。ところが、下植野南遺跡では竈と石製模造品との有意な関連性をうかがうことはできず、石製模造品の儀礼を一概に渡来人がもたらした新来の儀礼と見なすことはできない。むしろ下植野南遺跡での検討結果からみると、石製模造品は古墳時代の汎用の祭具として、製作の場と使用の場とが分離した儀礼、換言すれば専門的な祭祀集団によって再配布されたものと考えられる。

6. おわりに

最後に、本稿で言及できなかった諸問題を挙げて今後の課題としたい。今回の検討では、原石から素材石核に至るまでの製作工程、作出時に生成される剥片が検出されなかったために、詳細な製作技法の復原がかなわなかった。また、出土状況を押さえられた竪穴式住居跡が1基しかなかったので、この状況が普遍的なものであるか否かは判断できなかった。集落出土の石製模造品については、近年、地域的な検討が進んでいることもあって、実態が徐々に判明してきている。しかし、製作・流通・使用(廃棄)のプロセスを含めた遺構形成過程についての議論には、まだまだ研究の余地が大きいことを強調して、本稿のまとめとしたい。

(河野一隆)

第7節 久我畷について

1. 久我畷関連遺構

下植野南遺跡では、中央自動車道西宮線大山崎ジャンクション建設に伴う発掘調査が計画された時点で、体育館地点、名神拡幅地点の調査で明らかとなった弥生時代方形周溝墓群、古墳時代中期以降の集落遺跡の実態を明らかにするとともに、久我畷の関連遺構の有無と久我畷がいつの時代に造られたのかを確認するための調査が目的であった。

久我畷とは、長岡京域を乙訓郡条里を斜断して鳥羽から大山崎に至る道で、歴史地理学^(注107)では朱雀大路の延長線である「鳥羽作り道」^(注108)と結びつく直線的道路であることから平安京造営に伴い建設された南海・山陽道併用道と推定されており、今回の調査地の府道下植野大枝線がその推定ラインとして位置づけられている。今回の調査では府道下植野大枝線が130mにわたって付け替えられる計画があり、現道を広範囲にわたって調査できるという数少ない調査であったため、調査方法などに検討が行われた。その結果、現府道は埋設管が道路中央に数多くあるため、工事工程から考えてI地点を3分割し、中央の調査地をIトレンチ、東北の調査地をI-1トレンチ、西南の調査地をI-2トレンチと仮称して調査を進めた。その結果、遺構で記したように何面かの道路状遺構を検出した。道路状遺構は地表下約1.7mでSDI02・03の両側溝と石敷面を、さらにその上層では路面状の高まりを検出し、これらの遺構を久我畷関連遺構と想定した。ここでは仮に前者の路面を道路遺構A、その上面の遺構を道路遺構Bと呼称して検討を行う。

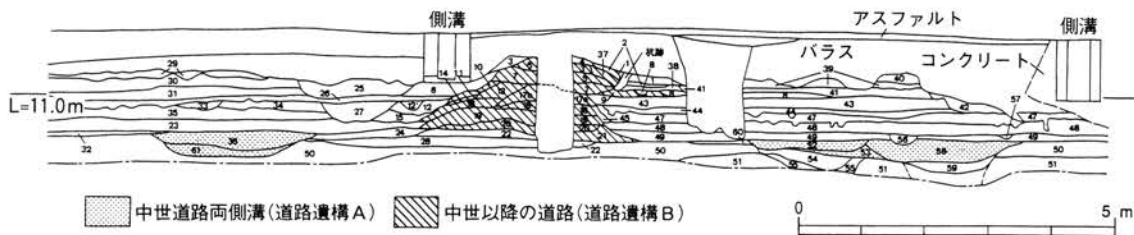


第38図 久我畷と下植野南遺跡

道路遺構Aは、Iトレンチで検出幅約1.0m、深さ0.2~0.4mの2条の溝(S D I 02・03)を全長約75mまで検出し、両溝の心々距離で計測すると道路幅8.5~9.0mを測る。またI-2トレンチでも両側溝(S D I 106・122)の間には拳大の栗石を敷き詰めた路面状遺構(S D I 106)を検出している。この石敷遺構は長さ約17m、幅約7mまで検出しており、両側溝の路面側肩部には側溝に平行するように杭列もある。この路面状遺構では栗石の直上と栗石を除去したところで16枚の古銭が出土しており、石敷直下では熙寧元寶(初鑄年1068年)・天禧通寶(初鑄年1017年)が、石敷直上では初鑄年758年の乾元重寶から最も新しいものとして元祐通寶(初鑄年1086年)があり、両側溝と路面の時期がある程度想定できる。各側溝からの出土土器では平安時代前期の土師器、須恵器のほか、黒色土器、13世紀代の瓦器碗がある。I-1トレンチでも南側溝のさらに南側で、薄く細かい石を敷いたS X I 33を検出したが、この石敷きは小泉川の洪水によってできたもので人工ものでない可能性が高く、路面跡とは考えられないものである。

道路遺構Bは、道路遺構Aの上面で、明瞭な両側溝などはないが、砂・砂礫・粘土を順次積み上げた土塁状の高まりであり、断面観察などから大規模な改修が少なくとも2回は行われていることが確認できた。土塁状の高まりの最終面では矢板と矢板を固定するための丸杭もあり、路肩部分の傾斜変換点には護岸されていたと思われる。砂・砂礫面では土器の出土はないが、砂礫面から続く粘質土層に古い時期のものとして14世紀の中国製青磁雷文碗、15世紀の備前焼播鉢、16世紀頃の中国製青磁碗などが含まれる。近世遺物としては、信楽焼播鉢や肥前磁器染付碗など17世紀初頭から後半にかけてのものや、18世紀後半以降の瀬戸焼の鉢や筒形碗などがある。

道路遺構Bの土塁状の高まりとその両側(北・南側)には水平堆積土がある。この水平堆積土は花粉分析の結果から水田の耕作面と思われるもので、土塁状の高まりからは遺物は出土しなかつ



第39図 久我畷土層概念図

たが、その水平堆積土からは14世紀以降、近・現代までの遺物が出土した。また水田面の堆積土を切り込んだ井戸(S E I 52)があり、この井戸からは寛永通宝が数枚出土した。

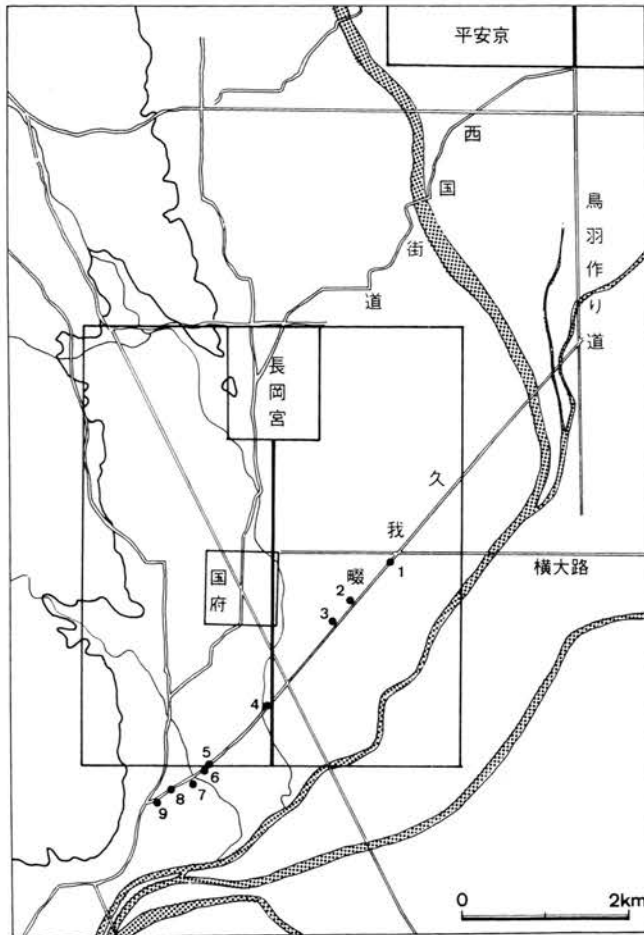
2. 久我畷について

久我畷の文献史料における初見は『徒然草』^(注109)195段で、鎌倉時代以降のことである。平安時代については久我畷に関する記述はなく、むしろ西国街道を利用している例がみられる^(注110)ことから、10世紀ごろには西国街道が実用的な道路として機能していたと考えられる。また、『太平記』に「さしも深き久我畷の、馬の足もたたぬ泥土の中」、^(注111)「久我繩手は、路細く深田なれば」などと表現されているように、当時の久我畷は馬が脚をとられるような状態であったことが分かる。その後、応仁元(1467)年、応仁の乱の際には山名氏と細川氏が「久我繩手」において合戦をしている。少し時代は下って、天正10(1582)年に秀吉が明智光秀と天王山を挟んで対峙したとき、「青龍寺城」へ兵が行き来するのに「久我繩手」^(注112)を使用している。近世には、部分的に参勤交代に使用されていたようであるが、「渺渺たる野径」^(注113)であったという。このように文献史料では14世紀以降の久我畷の様子や利用状況はうかがえるが、それ以前の様相については不明である。また、文献には初見から「繩手」・「畷」と表現されていることや、『太平記』の記述から、14世紀前半には、それまでの道路としての機能は低下し、水田地帯を通る畔道のようになっていたと考えてよいであろう。また、近世においては絵図などでも久我畷が描かれており、明治から戦後しばらくまでの地図には、久我から山崎までの約6km分の痕跡がよく残っている^(注115)。その後、高度経済成長期に名神高速道路ができ、国道171号線沿いに工業地帯が発達すると神足から久我にかけての一带において久我畷は開発のため、とぎれとぎれに痕跡を残すのみとなっている。

久我畷に関する発掘調査はこれまで9地点で行われた(第40図)。道路関連の遺構が確認された^(注116)のは、長岡京跡左京第28・53・230、右京第466次調査および今回の調査があり、そのうち、久我畷の変遷を現代まで追えるのは今回の調査と長岡京跡左京第53次調査の2件である。

まず、長岡京跡左京第53次調査^(注116)では4期にわたる道路遺溝が確認された。第1期の道路は両側溝をもち、側溝心々で幅約9mである。側溝の出土遺物から「平安京遷都後の早い時期」に掘削されたと考えられている。第2期以降の道路遺構は砂礫を盛り上げて構築され、裾幅約6m、路面幅約2mと狭くなる。出土遺物から第2期は12世紀以前、第3期は13世紀末～14世紀初頭と考えられている。第4期の道路は現在の農道である。

つぎに、長岡京跡左京第28次調査^(注118)では、13世紀末～14世紀初頭の久我畷西側溝が約30m分確



第40図 久我暇の調査地点

1. 長岡京跡左京第28次調査
2. 長岡京跡左京第53次調査
3. 長岡京跡左京第72・73次調査
4. 長岡京跡左京第230次調査
5. 長岡京跡右京第466次調査
6. 下植野南遺跡(I地点)
7. 算用田遺跡(I K-16)
8. 長岡京跡右京第156次調査
9. 大山崎町遺跡確認調査第23次

認された。長岡京跡左京第230次調査^(注119)では近世段階の久我暇西側溝が確認されたのみである。

長岡京跡右京466次調査^(注120)では、現道直下で路肩保護をした近世の道路側溝1条と12世紀以前の道路側溝2条が検出されている。後者の道路幅は側溝心々で約8mである。また、算用田遺跡(I K-16次調査)^(注121)や大山崎町遺跡確認調査第23次調査^(注122)では道路関係の遺構はなく、平安期の洪水堆積層が確認されている。

以上の考古学の成果から明らかにできる久我暇は、当初は両側溝を掘削する幅約8~10mの道路で、中世後半段階には砂や礫などを積み上げて構築した裾幅約5~6mの道路になり、現代にいたる。後者はまさに文献に見える畔道の久我暇であり、前者は文献史料に現れない時期すなわち14世紀以前の様相であるといえるであろう。

これまでの久我暇に関する研究は、歴史地理学を中心に進められており、大方は足利説によるものである。そして、長岡京跡左京第53次調査の成果を受けて、久我暇の敷設を平安京造営時とする足利説が実証されたとした。これに対し、岩松保は、遺物の出土状況などから積極的

な根拠とはならないとし、鳥羽離宮造営時に伴うものと考えた。^(注124)確かに、岩松が指摘するように、左京第53次調査の道路側溝出土遺物は小破片であり点数もわずかに過ぎず、今回の調査でも平安時代前期の遺物を含みながらもその出土状況や古銭などから、考古学的には久我暇の敷設時期を平安京遷都時と断定できるだけの資料を得ることはできなかった。

この問題については、今後、久我暇敷設の歴史的意義を踏まえた上で西国街道や「鳥羽作り道」など周辺の道路交通網を視野に入れ総合的に検討していく必要があるだろう。

今回の一連の調査では、中世後半から現代にいたる久我暇の規模、構造および変遷を追うこと

ができた。具体的には、久我畷は敷設当初は2条の側溝を掘削して路面を形成する幅約10mの道路で、部分的に石敷きが施されていた。その後、早くて中世後半段階には道幅を狭めて盛り土により道路を構築し、改修をしながら現代にいたっていることが明らかになった。中世後半以降の様相については文献史料から想定できる久我畷と大差ないものとする。

これまでの道路関係の調査において、現道部分を調査し、その変遷を追うことができた例はほとんどない。そういう意味でも今回の調査は非常に貴重であり、道路遺構の研究に貴重な資料を追加したといえよう。

(松尾史子)

- 注1 『京都府遺跡地図』第4分冊〔第2版〕 京都府教育委員会 1989
- 注2 都出比呂志・四手井晴子編『京都府乙訓地域の石器—資料編—』 乙訓文化遺産を守る会一日曜部会— 1971、関係文献C-1で写真紹介されている。
- 注3 野々口陽子「長岡京跡右京第541次・脇山遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第77冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1997
- 注4 林亨「遺跡の位置と環境」(『算用田遺跡右京第192次発掘調査概報』 大山崎町教育委員会) 1991、に宮脇遺跡の石器が紹介されている。
- 注5 渡辺誠編『京都府長岡京市下海印寺遺跡範囲確認調査報告書』 長岡京市教育委員会 1982
- 注6 久保哲正「長岡京跡右京第14次(7ANRUI地点)発掘調査報告」(『長岡京跡発掘調査研究所調査報告書』第1集 長岡京跡発掘調査研究所) 1979
- 注7 中川和哉ほか『雲宮遺跡』(『京都府遺跡調査報告書』第22冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1997ほか
- 注8 山中章「長岡京跡左京第82次(7ANEIS地区)～左京二条三坊一町・鶏冠井遺跡第2次～発掘調査概要」(『向日市埋蔵文化財調査報告書』第10集 向日市教育委員会) 1983ほか
- 注9 白川成明・原秀樹・岩崎誠「長岡京跡右京第39次(7ANQMK地区)調査概要」(『長岡京市文化財報告書』第11冊 長岡京市教育委員会) 1983
- 注10 久保哲正・山本輝雄「長岡第九小学校建設にともなう発掘調査概要・長岡京跡右京第10・28次調査(7ANMMB地区)」(『長岡京市文化財調査報告書』第5冊 長岡京市教育委員会) 1980ほか
- 注11 都出比呂志・福永伸哉ほか『鳥居前古墳』(『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第6集 大山崎町教育委員会) 1987
- 都出比呂志・福永伸哉ほか『鳥居前古墳—総括編—』(『大阪大学考古学研究報告』第1集 大阪大学考古学研究室) 1990
- 注12 林亨「第4節 境野古墳群1号墳第1次調査(7AN地区)発掘調査概要」(『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第2集 大山崎町教育委員会) 1982
- 注13 川西宏幸「円筒埴輪総論」(『考古学雑誌』第64巻第2号 日本考古学会) 1978
- 注14 田辺昭三『陶邑古窯址群I』(『研究論集』第10号 平安学園考古学クラブ) 1966ほか
- 注15 中川和哉「算用田遺跡発掘調査概要(I K-16)」(『京都府遺跡調査概報』第53冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1993
- 林亨「算用田遺跡右京第192次発掘調査概報」(『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第9集 大山崎町教育委員会) 1991

- 注16 名神拡幅地点のBトレンチの東半部S D36848の東側で黒褐色粘質土を除去して掘立柱建物跡を4棟検出し、竪穴式住居跡と同時期に想定されているが、今回報告する門田地区では黒褐色粘質土を除去した面での掘立柱建物跡がなく、上層遺構の可能性が高いため、ここではあえて竪穴式住居跡と併存する掘立柱建物跡は考えないこととする。
- 注17 (株)パレオ・ラボ、新山雅広「下植野南遺跡の花粉化石群集」による。
- 注18 方形周溝墓の被葬者像については第5章で詳述する。B-3関連文献に同じ。
- 注19 関連文献A-3に同じ
- 注20 (株)パレオ・ラボ、植田弥生「下植野南遺跡の炭化材の樹種同定」による。
- 注21 現地調査中あるいは土器洗浄中に土器が混在し、見誤っている可能性もあるが、ほかの遺構でも同一個体の土器が別遺構から出土する例があることから、ここでは整理段階で誤っていないという前提にたって付記しておく。
- 注22 藤田三郎『昭和57年度唐古・鍵遺跡13・14・15次発掘調査概報』 田原本町教育委員会 1983
- 注23 岩崎誠「神足遺跡第16次調査」(『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第4集 (財)長岡京市埋蔵文化財センター) 1989
- 注24 山本一博・伊庭功・国分政子「能登川町中沢遺跡(第4次)S X 1出土の弥生土器について」(『滋賀考古』第22号 滋賀考古学研究会) 2000
- 注25 底部内面には炭化物が付着していたため、加速器質量分析法(AMS法)放射性炭素年代測定を行った。その結果、C¹⁴年代(yr B P ± 1σ)は2300±50、暦年代較正值はcal B C 390、1σ暦年代範囲はcal B C 405—355(63.9%)である((株)パレオ・ラボ、山形秀樹「放射性炭素年代測定」による)。
- 注26 奈良国立文化財研究所・飛鳥藤原宮跡調査部『藤原宮と京』 1991
- 注27 伊藤広幸「引野遺跡発掘調査概要」(『東浦町埋蔵文化財調査報告』第2集 東浦町教育委員会) 1999
- 注28 小林行雄「せきせい—もぞうひん」(小林行雄・水野清一『図解考古学辞典』 東京創元社) 1985
- 注29 野島永「弥生・古墳時代の鉄器生産の—様相」(『たたら研究』第38号 たたら研究会) 1997
- 注30 行時志郎『荻鶴遺跡』(『日田市埋蔵文化財調査報告書第9集』 日田市教育委員会) 1995
島崎東編『窪木薬師遺跡 前川河川改修工事に伴う発掘調査』(岡山県埋蔵文化財発掘調査報告86 岡山県教育委員会) 1993
- 注31 相田則美ほか『出作遺跡I(出作圃場整備事業埋蔵文化財調査報告書』 松前町教育委員会) 1993
島崎久恵『亀川遺跡』(『(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告』第75冊 (財)大阪府文化財調査研究センター) 2002
- 注32 中川和哉ほか『下植野南遺跡』(『京都府遺跡調査報告書』第25冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1999
- 注33 関東地方では、甲冑破片や小札状鉄製品などを出土する鍛冶遺構が見られるようになってきた。内山敏行「関東地域の古墳時代の竪穴鍛冶遺構」(『新郭古墳群・新郭遺跡・下り遺跡 栃木県埋蔵文化財調査報告第214集』 栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団) 1998、518—528頁。
- 注34 S T J 127出土の甕底部より採取した炭化物の放射性炭素年代測定では、cal B C 390との値がでている。
- 注35 関連文献A-5に同じ
- 注36 神足遺跡では比較的大規模な居住域と墓域を想定されてきたが、さらに小規模な居住域と墓域のセット関係が見出せる可能性がある。藤井整「山城地域における弥生集団墓の特質」(『考古学ジャ

- ーナル』No.484号 ニューサイエンス社) 2002
- 注37 注10に同じ
- 注38 S T J 127は複数にカウントしている。
- 注39 分析の結果、種類は同定できなかったが、草木炭化物であることが判明している。
- 注40 藤井整「長岡京跡右京第750次・神足遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第107冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2003
- 注41 過去の調査概要などで、石剣の刃を付け直した際のチップが棺内から出土していたが、正しくは第2章のとおりである。
- 注42 深澤芳樹「墓に土器を供えるという行為について(上・下)」(『京都府埋蔵文化財情報』第61・62号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1996
- 注43 大庭重信「弥生時代中期の方形周溝墓にみられる大量土器廃棄について—蛭池北遺跡の事例から—」(『蛭池北遺跡(宮の前遺跡)第12次発掘調査報告—弥生時代中期方形周溝墓群の調査—』 豊中市教育委員会) 1995
- 注44 榎田佳男・藤井整・則本聡子「加茂遺跡第150次調査」(『平成7年度 川西市発掘調査概要報告書—阪神・淡路大震災復旧・復興に伴う発掘調査—』 川西市教育委員会) 1996
- 注45 (財)大阪府文化財センター『近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書 亀井その2』 1986
- 注46 清水琢哉「阪手東遺跡第2次調査検出の方形周溝墓」(『みずほ第38号』 大和弥生文化の会) 2003
- 注47 木村泰彦「長岡京跡右京第766次発掘調査報告」(『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第33集 (財)長岡京市埋蔵文化財センター) 2003
- 注48 深澤前出 注42に同じ。
- 注49 木村前出 注47に同じ。
- 注50 片岡宏二「日本出土の朝鮮系無文土器」(『古代朝鮮と日本』古代史論集4 名著出版) 1990
- 注51 秋山浩三「近畿における無文土器系土器の評価」(『突帯文と遠賀川』) 2000
- 注52 藤井整「近畿地方の弥生土器棺墓」(『古代文化』第53巻第2号 (財)古代学協会) 2001
- 注53 関連文献C-1に同じ。
- 注54 白川前出、注9に同じ。
- 注55 野島永・中川和哉『長岡京跡左京二条三・四坊・東土川遺跡』(『京都府遺跡調査報告書』第28冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2000
- 注56 谷口悌ほか『池上遺跡発掘調査報告書—第3次・第4次調査—』 八木町教育委員会 2000
中川和哉「池上遺跡第12次調査概報」(『京都府遺跡調査概報』第108冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2003
- 注57 辻本和美ほか「青野遺跡第6・7次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第4冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1983
田代弘「青野遺跡第6次調査で出土した磨製石剣について」(『京都府埋蔵文化財情報』第23号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987
- 注58 肥後弘幸「豊谷墳墓群」(『埋蔵文化財調査概要(1992)』 京都府教育委員会) 1993
- 注59 重金誠『原田遺跡発掘調査報告書』 能勢町教育委員会 1998
- 注60 上山弘・山田隆一『招提中町遺跡—府宮方牧野東住宅建て替えに伴う弥生時代墓域の調査—』

大阪府教育委員会 2003

- 注61 枚方市文化財協会の桑原武志氏のご教示を得た。
- 注62 勝部遺跡発掘調査団編『勝部遺跡』 豊中市教育委員会 1972
- 注63 橋本久和『嶋上遺跡群17』 高槻市教育委員会 1993
- 注64 真鍋昭文ほか『持田3丁目遺跡』 (財)愛媛県埋蔵文化財センター 1996
- 注65 神戸市教育委員会『出合遺跡第27次発掘調査報告書』 1994
- 注66 則武忠直・神原秀朗『四辻土壙墓遺跡・四辻古墳群(他方形周溝墓発掘調査概報3編)』 山陽町教育委員会 1973
- 注67 前島己基『鰐石遺跡』 浜田市教育委員会 1973
- 注68 岡崎雄二郎ほか「友田遺跡」(『松江圏都市計画事業乃木地区再整備事業区域内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』 松江市教育委員会) 1983
- 注69 古川登「福井県鯖江市における方形台状墓出土の石剣片について」(『福井考古学会誌』第3号 福井考古学会) 1985
- 注70 兵庫県教育委員会『兵庫県文化財調査報告 第135-1~6冊』 1994・1996
- 注71 このような着装事例は中国秦の始皇帝陵にある兵馬俑坑の兵士像の中に同様な短剣の佩用の仕方があることを、独立行政法人奈良文化財研究所深澤芳樹氏からご教授を得た。
- 注72 中川和哉「弥生時代の石製武器出土埋葬主体部—京都市東土川遺跡例から—」(『考古学に学ぶ 同志社大学考古学シリーズⅦ』 同志社大学) 1999
- 注73 友田遺跡については岡崎雄二郎氏、清水谷遺跡については小林博明氏のご好意により実見・観察する機会に恵まれた。
- 注74 米田敏幸「土師器の編年1 近畿」(『古墳時代の研究6』 雄山閣) 1992
- 注75 竹原一彦・三好博喜「近畿自動車道敦賀線関係遺跡(8次区間)三宅遺跡・小西町田遺跡」(『京都府遺跡調査報告書』第18冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1993、報告書では脚部が欠損しているため、高杯なのか、鉢なのかは不明。
- 注76 森岡秀人「各地域の様式と編年8 山城」(寺沢薫・森岡秀人編『弥生土器の様式と編年Ⅱ』 木耳社) 1990
- 注77 野々口陽子「いわゆる畿内系二重口縁壺の展開」(『京都府埋蔵文化財論集』第3集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1996
- 注78 『亀岡市里遺跡第6次 京埋セ現地説明会資料No.03-05』 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 2003
- 注79 長岡京市史編纂委員会『長岡京市史』 1991
- 注80 丸川義広「山城の渡来人」(『日本考古学協会 2003年度滋賀大会資料集』 日本考古学協会) 2003
- 注81 森垣外遺跡発掘調査概要は、当調査研究センター刊行の『京都府遺跡調査概報』第86冊(1999)、第91冊(2000)、第96冊(2001)に収録されている。
- 注82 富加見泰彦「紀淡海峡の製塩土器」(『久保和士君追悼考古論文集』 久保和士君追悼考古論文集刊行会) 2001
- 注83 大久保徹也「喜兵衛島遺跡群出土製塩土器について」(『喜兵衛島一師楽式土器製塩土器遺跡群の研究—』 喜兵衛島刊行会) 1999
- 注84 正岡睦夫・光永真一・島崎東・平井泰男・高畑知功「百間川原尾島遺跡2」(『岡山県埋蔵文化財

- 発掘調査報告』56 建設省岡山河川工事事務所・岡山県教育委員会) 1984
- 注85 高野政昭「(7)製塩土器」「(9)古墳時代の製塩土器」(『奈良県天理市布留遺跡(里中)地区発掘調査報告書』埋蔵文化財天理教調査団) 1995
- 注86 広瀬和雄「小島東遺跡」(『岬町遺跡群発掘調査概要—小島東遺跡・淡輪遺跡—』大阪府教育委員会) 2001
- 注87 野島稔「大阪府四条畷市発見の製塩土器」(『古代学研究』第86号 古代学研究会) 1978
- 注88 田中清美ほか『大阪市森小路遺跡発掘調査報告書』(財)大阪市文化財協会 2001
- 注89 中居さやか・口野博史・安田滋・池田毅・千種浩・中村善則・川上厚志『白水遺跡第3・6・7次発掘調査報告書』神戸市教育委員会 2000
- 注90 菅本宏明『神楽遺跡発掘調査報告書』神戸市教育委員会 1981
- 注91 『吉田南遺跡現地説明会資料』神戸市教育委員会 1977
- 注92 黒田恭正・東喜代秀・中村大介「寒鳳遺跡第2次調査」(『平成8年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会) 1999
- 注93 注27に同じ。
- 注94 注80に同じ。
- 注95 三辻利一「森垣外遺跡出土古式須恵器の蛍光X線分析」(『京都府遺跡調査概報』第91冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2000
- 注96 小池寛「石製模造品の生産と消費に関する一事例」(『古事』第6冊 天理大学考古学研究室紀要) 2002
- 注97 森下衛・柴暁彦「内里八丁遺跡2」(『京都府遺跡調査報告書』第30冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2001
- 注98 小池寛「古墳時代中期集落の動態と古墳の変遷」(『日本考古学協会第68回総会研究発表要旨』日本考古学協会) 2002
- 注99 高野政昭「布留遺跡出土の古墳時代製塩土器」(『天理大学学报』第157輯 天理大学学術研究会) 1988
- 注100 近藤義郎・岩本正二「4 塩の生産と流通」(『日本考古学』3 岩波書店) 1986
- 注101 小池寛「古墳時代中期における製塩土器研究の現状と課題」(『京都府埋蔵文化財情報』第86号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2002
- 注102 高橋健自『古墳発見石製模造器具の研究』(『帝室博物館学』第1冊 帝室博物館) 1919
- 注103 後藤守一『石製品』(『考古学講座』第32号) 1930
- 注104 梶山林継「祭と葬の文化」(『現代神道研究集録』二神道史研究編) 1998
- 注105 白石太一郎「神まつりと古墳の祭祀—古墳出土の石製模造品を中心として—」(『古代の祭祀と信仰』国立歴史民俗博物館研究報告第7集) 1985
- 注106 Arnold D. E. Theory and Cultural Process, Cambridge University Press 1985
- 注107 足利健亮「第2節 国府と古道」(『向日市史』上巻 向日市) 1983
- 足利健亮「平安京南の計画道路体系」(『日本古代地理研究』大明堂) 1985
- 注108 「鳥羽作り道」についても『徒然草』にみえることから、14世紀には存在していたようであるが、いつ敷設されたか明らかでない。
- 注109 「ある人久我繩手を通りけるに」とあり、『徒然草』の書かれたときには久我暲が存在していたことが分かる。

- 注110 『親信卿記』天延二(974)年閏十月二十五日条で、当時検非違使であった平親信が津巡りのため京から山崎や淀に向かう際に、また、『土佐日記』によると、承平五(983)年、紀貫之が土佐から都へ帰る途中、山崎で舟を降りて京に向かう際に西国街道に相当するルートを辿っている。
- 注111 足利は『太平記』の記述より久我暇の大きな弱点として低湿性を指摘し、その性格を儀式的な通行の際の利用に限定。西国街道がそのバイパスとして実質的な機能を果たしていたとする。
- 注112 『豊鑑』(『群書類従』第20号)
- 注113 『山州名跡志』巻11、『拾遺都名所図會』巻4
- 注114 『大漢和辞典』によると、いずれも「たんぼみち・あぜみち」の意味である。
- 注115 山口恵一郎ほか『日本図誌大系』近畿Ⅱ 朝倉書店 1973
- 注116 左京第72・73次調査および右京第156次調査では久我暇関連の遺構は確認されていない。竹井治雄「長岡京跡右京第156次調査」(『京都府遺跡調査概報』第15冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1985
- 注117 戸原和人ほか「長岡京跡左京第53次(7ANMSB地区)調査概要」(『長岡京市文化財調査報告書』第14冊 長岡京跡発掘調査研究所) 1985
- 注118 戸原和人ほか「長岡京跡左京第28次(7ANMSB地区)調査概要」(『長岡京市文化財調査報告書』第14冊 長岡京跡発掘調査研究所) 1985
- 注119 小田桐 淳「左京第230次(7ANMJN地区)調査略報」(『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成元年度 (財)長岡京市埋蔵文化財センター) 1991
- 注120 戸原和人「名神高速道路関係遺跡平成6年度発掘調査概要(9)長岡京跡右京第466次 下植野工区 C-6地区(7ANTD-5)」(『京都府遺跡調査概報』第69冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1996
- 中川和哉・野島永『下植野南遺跡』(『京都府遺跡調査報告書』第25冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1999
- 注121 中川和哉「算用田遺跡発掘調査概要(I K-16)」(『京都府遺跡調査概報』第53冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1993
- 注122 古閑正浩「大山崎町第23次遺跡調査(7YYMS'HK-3地区)略報」(『大山崎町文化財年報』平成7年度 大山崎町教育委員会) 1996
- 注123 金田章裕「第3章 第4節 大山崎の条里」(『大山崎町史』大山崎町) 1983
- 高橋美久二『古代交通の考古地理』大明堂 1995
- 注124 岩松保「西国街道の成立と変遷」(『京都府遺跡調査報告書』第24冊) (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1998

調査参加者(順不同、敬称略)

調査補助員 尾上忍・渡辺咲子・穂積優子・魚津知克・松野元宏・今林信祐・鷲原裕太郎・村上奈弥・佐々木勝・中村美也・山本佳子・中村武生・藤木句子・坂元昭子・松村知也・加賀谷央・石立浩之・壺岐一哉・石丸和正・小山達也・前田修一・谷内高章・大野雅哉・植木理人・田中園子・小椋恵・佐々木奈月・白取智彦・大野壽子・山田詳子・中道勝也・久米洋平・田中智子・関口美由紀・朴貴広・杉江貴宏・木藤洋介・大月直子・山内彩子・佐藤純一・宮城一木・藤田勇貴・三阪一徳

整理員 尾上忍・鈴木浩子・内藤チエ・西村敏子・長谷川マチ子・長尾美恵子・荒川仁佳子・村上優美

子・安田純子・久米政代・渡辺咲子・村上奈弥・松野元宏・高田良太・西村美智子・安田裕貴子・楠本美那子・高橋富子・古川(石川)智子・小林佳子・奥田久美子・玉谷友子・土屋みづほ・竹脇あゆみ・寺尾貴美子・荻野富紗子・田中美恵子・古賀友佳子・田嶽美紀・奥島かおり・平林千佳・岩戸晶子・春日満子・森川 実・山本弥生・稲垣あや子・今林信祐・川村真由美・陸田初代・西脇夏海・山岡匠平・杉山拓己・大月直子・山内彩子・佐藤純一・宮城一木・藤田勇貴・三阪一徳・西村香代子・藤井矢壽子・堀大輔

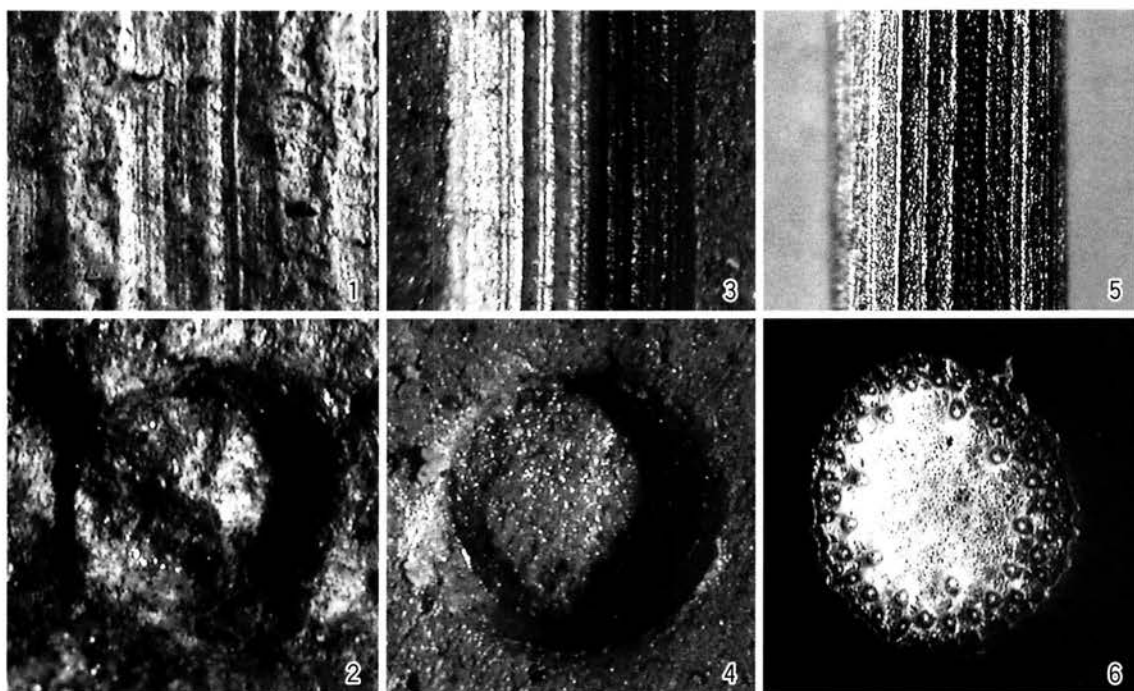
付 編

草本を用いた櫛状工具

独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所
深澤 芳樹

序言 弥生時代中期に、近畿地方の土器に櫛描紋が現われる。下植野南遺跡などの土器を飾った櫛描紋は、一度に複数の沈線を描く点で、一本ずつ描く篋描紋とは全く異なる。土器に残った櫛状工具の歯先の痕跡は多様だが、このうちに直径約1mmで断面がほぼ円形・中空をなすものがあることがすでに明らかになっている。本稿において、この中空の歯をイグサと推定する。

櫛描紋に先行して現われた回転台(佐原1959)のほかに櫛描紋の成立には、土器製作のどの段階で施紋するか、という作業工程が深く関わっていた。北部九州地方では、土器器表面をくぼませて紋様を描く陰影表現は、前期初頭以来、調整の最終段階で行なってきた。ミガキはよく乾燥させてから行なうので、したがって最終調整をミガキとする壺形土器や鉢形土器などでは、施紋段階には器面はすでにかなり硬くなっており陰影表現で紋様を描くには不向きな状態であった。現に北部九州地方では、前期末以降急速に陰影表現の紋様を土器表面から失い、かわりにこの施紋工程を守ったミガキ後の暗紋という光沢の効果を利用する別種の紋様を発展させた。これに対し、



写1～6 25倍に拡大した弥生土器櫛描紋とイグサ
(写1・2弥生土器 写3・4イグサによる粘土実験 写5・6イグサ)

近畿地方では、初頭の弥生土器は北部九州地方と同じ工程で施紋していたが、前期のうちにすべての器形で一律にハケメの後か、この直後のナデの後で施紋するようになった。この工程では器面はまだ軟らかいから、比較的軟質の素材でも施紋具として使用できた。つまり中期に至って、これからみるイグサのような草本でさえ、土器の器面に細い複数の沈線からなる櫛描紋を描くの、土器製作工程における施紋工程が可能にしていたのである。

櫛状工具の歯 では25倍に拡大した弥生土器の櫛描紋をみてみよう。奈良県橿原市四分遺跡S D 8814で出土した中期後半の弥生土器(奈文研1998)では櫛歯圧痕は、一本ずつ独立していて、外形がおおよそ円形、直径は1～2mmである。圧痕(写2)は縁辺部が僅かにくぼんで環状をなしている。内部は、やや盛り上がっていて、内部の高まりの頂部高は器表面よりやや低い位置にある。また櫛状工具を器面に沿って移動した沈線部分(写1)をみると、ほぼ等間隔にやや大きな溝があって、これが規則的に並んでいる。この溝の間にも併行するさらに細かな溝がある。

圧痕が環状をなすから、この櫛歯が草本であったことが確定する。そして内部の盛り上がり方をみると、頂部が土器表面より低いから内面でも弱いながら土器壁に圧力がかかったことを示している。以上の二点から、櫛歯は縁辺部の硬い部分と内側の柔らかい部分からなる、すなわち周囲の皮と内部の髓で構成された草本の茎であると、推定できる。とすると、沈線内面にできたほぼ規則的に並んだ大小の溝は、縦列に突出して並んだ細胞群とその表面をおおうクチクラ層で、これは木本になく草本のうち特に単子葉類に顕著な、植物体を最外部で補強する大小二種類の突線の断面を転写したもの、と理解できる。

櫛歯に用いた茎としては、大きさや皮の硬さから、イグサ科、イネ科、それにカヤツリグサ科の茎が候補になる。このうちイグサ科は断面円形か二稜形で中実、イネ科は多くが断面円形で中空、カヤツリグサ科は多くが断面三稜形で中実である。土器面の痕跡から断面円形で内部に髓がなくはならないから、イグサ科で断面二稜形のもの、それにイネ科やカヤツリグサ科の多くは、この櫛歯の候補から脱落する。そして残った草本のうちで最有力候補は、イグサ科に属すイグサである(写5・6)。

牧野富太郎(牧野1982)、佐竹義輔(佐竹1982)、木村陽一郎(木村1996)、また星川清親(星川1984)によれば、イ(イ(藺)が和名。本稿では、イグサと呼称する。)は、イグサ科に属す多年草。分類上は、単子葉植物綱(Monocotyledonae)、ユリ目(Liliiflorae)、イグサ科(Juncaceae)、イグサ属(Juncus)に属す。学名は、*Juncus effusus* L. var. *decipiens* Buchen.で、属名は「結ぶ、しぼる」、種小名は「非常に開いた、非常にばらばら」、変種名は「虚偽の」を意味する。

イグサは、日本各地、朝鮮半島、中国、ウスリーなどの、温帯から暖帯にかけて分布する、湿地に生育する多年草。茎が地下茎から密に直立する。茎は、イグサ科は、円柱形か二稜形かであるが、このうちイグサは、直径1～2mmの円柱形をなす。外面は濃緑色を呈し、はっきりしない縦溝がある。高さは25～120cmほどになる。内側には白い髓がある。初夏に茎の中ほどに小さな花穂をつけ、茎は7月頃になると、弾力をともなって強くなる。葉は茎の基部にあって、鱗状、鞘状をなす。茎は、畳表や花蓆、草履とされる。また茎の髓は、白く弾力があって油を吸うので、



写7 自生するイグサ(奈良市佐紀町2003年8月)



写8 イグサ



写9 イグサ茎の圧痕



写10 櫛描紋の復原

これを行灯の灯心にした。イグサの別名、トウシンソウ(灯心草)は、これに由来する。また髓を採ったあとの皮は、ちまきを巻くのに用いた。

イグサは、現在の日本列島において、湿地環境の場所ならみつけることのできる、ごく一般的な草本である。2003年8月、奈良市佐紀町の旧水田に浅く水がたまった湿地で、他の草本類とともに自生していたイグサを採集した(写7)。このイグサは、地下茎のひげ根を含む全長が、長いもので85cm(写8)。茎の太さは根の近くで1~2mm、長さは30~70cmであった。葉は茎の基部に鱗状・鞘状にあって、淡褐色を呈していた。1本は先端から15cm下に緑褐色の小花からなる小さい花穂をつけていた。

茎を剃刀の刃で切り、その断面を実体顕微鏡で25倍に拡大した(写6)。皮の断面は、稜はなく基本的に円形で、周囲の皮の部分と内部の髓の部分からなっている。皮の最外部に植物体を補強する大小の突線があって、茎の周囲を大きい突線29本がほぼ等間隔に規則的に並んでいる。このため外面に、縦溝ができていている(写5)。内部の髓には細かな不定形の空隙が多くある。

この切断面を粘土に軽くあててみた。はじめのうちは中実の円形圧痕が多かったが、繰り返すと縁辺がくぼんだ環状の圧痕になった(写4・9)。これは髓が粘土の圧力で奥に後退したからで、内面の頂部高はほとんどが表面よりやや低い。また粘土に沈線をひくと、断面は円弧状で、大小の突線が、ほぼ等間隔の大きい溝とこれに併行する細かな溝となって現われた(写3)。

このイグサ実験でえた細部(写3・4)は、写1・2に掲げた弥生土器櫛描紋の細部に一致する。このことは少なくともイグサを用いれば弥生土器の櫛描紋ができることを示している。

櫛描紋の復原 櫛状工具の可能性のある考古資料が、奈良県橿原市タメンダイW遺跡で出土している(小林1930)。吉田宇太郎、樋口清之、神原亮によれば、残存長約4.5cm、中央幅約0.8cmで、5~7本ほどの木枝を植物の蔓で巻きつけていた。中央断面は楕円形をなし、端部は木枝が一列に並んでいた、という。小林行雄は、土器圧痕から櫛状工具を、歯数は2~20数本で、歯は通常2mm以下で1mm内外、各歯間は0.5mm内外、材料は、「(I)柔軟ならざる程度の植物の枝茎を束ねたもの。(II)木竹等の小片の先端を細かく割った物。等」(小林1930 388頁)、と推定した。貝を櫛状工具にしたものもあった(中村1982)が、櫛状工具としての条件は歯が、ほぼ等間隔でかつほぼ一直線に並んでいることだから、土器に施紋する時点で、歯先をこのように保持できるのなら、タメンダイW遺跡例のような工具でも可能かもしれない。しかし櫛描紋は凹線紋出現以降幅広になり、2.7cmの例さえある。こうなると植物の蔓を簡単に巻きつけるだけでは、歯を等間隔に一列に並ばせ、かつ固定するのは容易でない。

そこで櫛描紋の復原実験に用いる施紋具は板で挟むことにした。直径1mm強のイグサの茎10本を長さ12cmに切りそろえ、長さ5cm・幅2.5cm・厚さ5mmの2枚の板の間に滑り止めとして濡れた紙を添えて、イグサを一列に並べてから細紐で縛って固定した(写10)。歯幅は、1.8cm、突出した部分のイグサの長さは、1.5cmである。もう一方は5.5cm突出した。

粘土面に、この工具で櫛描簾状紋、櫛描列点紋、櫛描直線紋を描いた。この粘土面にできた紋様に、弥生土器の櫛描紋との違いはみられなかった。さらに、弥生土器の器表面には凹凸が多く

あるが、イグサの弾力がこの凹凸面に沿って紋様をつけるのを可能にし、凹部面にもきれいに施紋できた。櫛幅全面が器面をなでるようにして施紋するので、器壁を抉り込んで土器を傷めることはない(金関ほか1986 P.L. 1)。荷重に対する曲がり応力度は、櫛状工具としての必要条件でもある。イネ科やカヤツリグサ科の草本では、曲がり応力度が低いために、荷重に対して折れやすい。イグサが草本のうちで表皮に強度があり、かつ適度な曲がり応力度と引張力度をそなえていることは、これまで単体の紐や編物としてイグサの茎が選択されてきた事実が証している。

弥生土器の櫛状工具の歯がイグサの茎と同じ特徴を有したものがあること、イグサの茎を粘土に押しあてると弥生土器のそれと同一の痕跡がえられたこと、さらにイグサの茎の特性が櫛状工具の歯に適すること、を確かめた。以上から弥生土器の櫛描紋の施紋具で圧痕が環状をなすものはイグサを用いた、と推定する。この推定を可とするのなら、髓の位置を考慮して、断面が円形をなすすべての櫛歯にイグサの可能性を認めることになる。

彩紋の刷毛 ところで近畿地方の弥生時代前期には、土器紋様として、陰影表現のほかに赤色顔料を塗る彩色表現がある。直線紋のような単純な紋様から、木葉紋のように複雑な紋様まで描いた。かつて小林は、この彩色表現に線描と平塗りの二種があると、指摘した(小林1943)。

ところで藤枝晃(藤枝1975)によれば、中国における文字の字形の変遷は、筆の形と毛の材質に規定されたという。すなわち「篆—隸—楷と言う書体の変遷は、古筆—秦筆—今筆という筆の進化に應ずるものであった。」(藤枝1975 80頁)とし、四つ割りの木軸に鹿毫をすげた秦筆の「四つ割り軸は、二枚の木片に毛を挿んだ刷毛から転化発達したものに違いない。即ち古筆とは刷毛形のひら筆ということになる。」(藤枝1975 80頁)と、古筆の形状を定めた。

糸だけで櫛歯を簾状に固定する(徳永1995)、1枚板に糸で固定する(中村2000)ほかに、本稿では前期に線描や平塗りで彩色表現を行った道具にこのような平刷毛を想定し、櫛状工具の櫛歯を2枚の板に固定する復原を行った技術的系譜の根拠を、この平刷毛に求めておこう。

イグサの利用 九州地方の弥生人に、イグサを活用していた形跡がある。橋口達也(橋口1980、橋口1996)によれば、九州地方において弥生時代中期後半以降、畳表状の蓆が出土しており、このうちにイグサを用いた可能性の高いものを含む。

まず福岡県太宰府市吉ヶ浦遺跡で出土した第49甕棺。中期後半に属す合口甕棺で、40歳代の女性を埋葬した。右大腿骨に付着した蓆に2条ずつが対になった経糸があって、対の間隔は17mm、編み方は「現在のタタミ表と同じである。」(橋口1980 35頁)、とする。

次に福岡県筑紫野市道場山遺跡の第100号甕棺。この甕棺は、後期初頭に位置づけることができる合口甕棺で、被葬者は成年男子かとされている。甕棺内部に副葬してあった鉄戈に畳表状蓆が銹着していた。これも経糸が2本対になっており、「経糸の間隔は19~21mmで現在のタタミ表と形状・編み方ともにはほぼ同様なものである。」(橋口1980 358頁)とする。この素材を、橋口はイグサかとし(橋口1996 4頁)、伊藤実はイグサとした(伊藤2000 63頁)。

そして橋口は、畳表状蓆が吉ヶ浦遺跡の甕棺で、甕棺内壁、人骨全体、頭部、後頭部、右大腿骨、と遺体各所におよんでいる事実から、「甕棺内より出土する蓆は遺体の下に敷いたものでは

なく、遺体をこれらの蓆ですまきにしていたことは確実である。」(橋口1980 370頁)とした。

このように九州地方において弥生人はイグサの茎の特性を熟知し、これを生かした編み物を製作し、通過儀礼での非日常空間で重用していた可能性が高いのである。

結語 本稿において、近畿地方ではイグサを弥生土器の表面をおおう櫛描紋の施紋具に用いた、と考定した。櫛描紋を実体顕微鏡等でわずか25倍程度拡大すれば、櫛歯の外面に突出した突線群の有無を確かめることができる。そうすれば、櫛状工具の歯が、草本であるか、木本であるか、判別できる。さらにこの簡単な手続きは、櫛描紋に限らず調整法の条線についても適用可能であって、溝の配列等で外皮突線と維管束などを区別できる可能性が高いので、その素材の詳細を検討する確かな手掛りを提供するはずである。

本稿をなすにあたって、崔完奎・伊藤実・井上直夫・牛嶋茂・小倉研二・小野健吉・金田明大・金原正明・高妻成洋・古平栄一・杉本和樹・中村一郎・橋口達也・橋本紀美・豆谷和之・光谷拓実の諸氏に、ご教示、ご援助賜った。崔完奎氏は、大韓民国高敞遺跡を訪れる機会を与えてくれた。そして伊藤氏が、高敞遺跡でイグサを教えてくれた。写1～6は高妻氏、写7は杉本氏、写8～10は牛嶋氏が撮影してくれた。あらためて以上の方々に、わたくしは、深く感謝する。

(2003.09.01.)

【文献】

- 伊藤実2000「たたみの起源を探る—ムシロの考古学—」『広島県立歴史博物館 秋の企画展 備後表—タタミの歴史を探る—』
- 金関恕・佐原真編1986『弥生文化の研究』第3巻
- 木村陽二郎1996『図説 花と樹の大事典』
- 小林行雄1930「弥生式土器に於ける櫛目式文様の研究」『考古学』第1巻第5・6号
- 小林行雄1943「第一様式土器における彩文」『大和唐古弥生式遺跡の研究』(京都帝国大学文学部考古学研究報告 第16冊)
- 小林行雄・佐原真1964「櫛描文」『紫雲出』(詫間町文化財保護委員会)
- 佐竹義輔1982「イグサ科 JUNCACEAE」『日本の野生植物 草本Ⅰ 単子葉類』
- 佐原真1959「弥生式土器製作技術に関する二、三の考察—櫛描文と回転台をめぐって—」『私たちの考古学』第5巻第4号
- 徳永哲秀1995「箱清水式土器の櫛描文の施文具および施文法について」『長野県考古学会誌』75号
- 中村友博1982「土器様式変化の一研究—伊勢湾第Ⅰ様式から伊勢湾第Ⅱ様式へ—」『考古学論考』
- 中村友博2000「製陶具としての連体」『利根川』21
- 奈良国立文化財研究所1998「西方官衙南地区の調査 第85次」『奈良国立文化財研究所年報1998-II』
- 橋口達也1980「甕棺内人骨等に附着せる布・蓆」『鏡山先生古稀記念古文化論攷』
- 橋口達也1996「原始・古代のタタミ表状の蓆」『福岡県の蘭業誌』
- 藤枝晃1975『文字の文化史』
- 星川清親1984「イグサ」『平凡社 大百科事典』1
- 牧野富太郎1982『原色牧野植物大図鑑』

付表14 検出遺構一覧表

(備考：遺構名の略称 堅穴=堅穴式住居跡 掘立=掘立柱建物跡 周溝墓=方形周溝墓)

遺構名	地区	種類	概要	出土遺物	時期	旧遺構名
SDF01	1~5 -Zp~ Zr	溝	本文参照	本文参照	古墳中・後期	SRF01
SKF02	1-Zy	土坑	本文参照	本文参照	古墳中・後期	SKF02
SEF03	2-Zo	井戸	掘形を南北に長い楕円形を呈し、その内側に方形の井戸枠をもつ。井戸枠は、下にむかって小さくなる3段構造で、上、中段の四隅には角柱の太い柱を据え、それに横棧をほぞ穴に差し込んで固定し、その間に細い丸太材と竹材を隙間なく縦方向に打ち込む	井戸枠および堀形内からは、染付の磁器椀、棧瓦など	近世以降	SEF03
SKF04	2-Zs	土坑	南北約2.0m×東西約1.5m、深さ7cmの楕円形土坑	本文参照	古墳中・後期	SKF04
SKF05	1-Zx	土坑	直径約1.0m、深さ4.5cmを測る円形土坑	須恵器杯蓋、土師器甕の細片		SKF05
SHF06	1-Zw	堅穴	本文参照	本文参照	古墳中・後期	SHF06
SHF07	97-C	堅穴	本文参照	本文参照	古墳中・後期	SHF07
SHF08	98-B	堅穴	本文参照	本文参照	古墳中・後期	SHF08
SKF09	1-C	土坑	SB155南側掘形によって切られた東西約3.5m×南北約2.7m、深さ約15.7cmの隅丸方形の土坑			SHF09
SHF10	99-C	堅穴	本文参照	本文参照	古墳中・後期	SPF10
SKF11	98-C	土坑	SHF07の南約1mにある長軸0.7m、短軸約0.5m、深さ12cmの楕円形土坑	須恵器片、土師器片少量	時期不明	SPF11
SKF12	98-B	土坑	SHF08とSHF09の間で検出した直径約0.5m、深さ8.4cmの円形土坑	土師器細片少量	時期不明	SPF12
SKF13	98-B	土坑	SKF12の南西約0.5mにある直径約0.3m、深さ6.3cmの円形土坑	土師器片少量	時期不明	SPF13
SPF14	98-B	ピット	SHF08内のピット	土師器高杯片、製塩土器		SPF14
SPF15	98-B	ピット	SHF08内のピット	土師器片、須恵器片		SPF15
SPF16	98-B	ピット	SHF08内のピット	土師器甕片、須恵器杯蓋片、土師器羽釜片	古墳中・後期	SPF16
SKF17	99-B	土坑	直径約0.3m、深さ2cmの円形土坑	須恵器杯蓋、土師器高杯、製塩土器	古墳中・後期	SPF17
SDF18	99~ 4-Zr・ Zs	溝	本文参照	本文参照	古墳中・後期	SDF18
SHF19	99-A・ B	堅穴	本文参照	本文参照	古墳中・後期	SHF19
SHF20	1-B	堅穴	本文参照	本文参照	古墳中・後期	SHF20
SKF21	2-Z r・Z s	土坑	SDF18の西側で、SDF18によって東半部が削り取られた直径約1.7m、遺構検出面からの深さ17cmを測る円形土坑である。埋土内から布留式甕の体部片のほか、土師器片が少量出土した	布留式甕の体部片のほか、土師器甕片が少量		SKF21
SDF22	96-E	溝	本文参照	本文参照	古墳中・後期	SDF22
SKF23	1-E	土坑	SHF64の南東約3mで、東西約3.8m×南北約4.0m、深さ約11.1cmの隅丸方形土坑	本文参照	古墳中・後期	SHF23
SDF24	1~2- E・F	溝	SKF23を切る検出長約7m、上面幅約0.3m、深さ約5.4cmの小溝	土師器細片	時期不明	SDF24
SHF25	97-C・ D	堅穴	本文参照	本文参照	古墳中・後期	SHF25
SDF26	99-D	溝	SHF64の北約2mで検出した上面幅約0.5mの溝状遺構	須恵器、土師器細片	時期不明	SDF26
SKF27	99-C	土坑	SKF26とは西側に接するようにある一辺約1.3~1.5mの方形土坑で、検出面からの深さ12.4cmを測る	須恵器杯蓋、土師器高杯、甕の細片、製塩土器が少量	古墳中・後期	SKF27
SKF28	97-H・ I	土坑	本文参照	本文参照	古墳中・後期	SKF28
	96-E	掘形	SBF91の掘形	土師器片少量	時期不明	SPF29

SKF30	96-F	土坑	SBF91北辺中央の掘形に近接し、直径約60cm、深さ7.1cmの円形土坑、土坑内中央に柱穴あり	須恵器甕、弥生土師底部片		SPF30
	97-F	掘形	SBF91の掘形	土師器細片、須恵器甕体部片	時期不明	SPF31
	97-F	掘形	SBF91の掘形	須恵器杯蓋・杯身、土師器甕体部片	古墳中・後期	SPF32
	98-H	掘形	SBF92の掘形	須恵器杯身、土師器甕口縁片、白玉1点		SPF33
SKF34	98-G	土坑	本文参照	須恵器杯身・土師器細片	古墳中・後期	SKF34
SKF35	97-I	土坑	直径約0.7m、検出面からの深さ9.7cmを測る円形土坑	須恵器甕体部片	古墳中・後期	SPF35
SHF36	3・4-B	竪穴	本文参照	本文参照	古墳中・後期	SHF36
SHF37	5-A	竪穴	本文参照	本文参照	古墳中・後期	SHF37
SHF38	5-C	竪穴	本文参照	本文参照	古墳中・後期	SHF38
SHF39	4-B・C	竪穴	本文参照	本文参照	古墳中・後期	SHF39
SHF40	5-B	竪穴	本文参照	本文参照	古墳中・後期	SHF40
SHF41	5-A	竪穴	本文参照	本文参照	古墳中・後期	SHF41
SDF42	98・99-I・J	溝	北東方向から南西方向へ流れる全長約22m、上面最大幅約0.9m、深さ13cmの溝	須恵器杯蓋、土師器細片	古墳中・後期	SDF42
	99-I	掘形	SBF92の東側南より1列北の掘形	須恵器杯蓋		SPF43
SKF44	98・99-I	土坑	本文参照	本文参照	古墳中・後期	SDF44
SPF45	98-I	ピット	SDF42を切る直径約20cm、深さ4cmのピット	須恵器杯蓋、土師器片	古墳中・後期	SPF45
	99-I	掘形	SBF92の南東端の掘形	土師器細片1点のみ	時期不明	SPF46
SKF47	98-G	土坑	本文参照	本文参照	古墳中・後期	SKF47
SKF48	97-G	土坑	SBF91の東にある直径約30cm、深さ41.8cmの円形土坑	土師器・須恵器細部片	古墳中・後期	SKF48
SDF49	96・97-M	溝	検出全長約6.3m、上面最大幅0.8m、深さ12cmの溝	緑釉陶器、須恵器杯蓋、土師器細片	古墳後期以降	SDF49
SKF50	96-K	土坑	直径約1.0m、深さ2.8cmの円形土坑	土師器片のみ、	時期不明	SPF50
SKF51	95-K	土坑	SKF50の北西にある直径約0.6mの円形土坑	土師器細片	時期不明	SPF51
SKF52	96-K	土坑	SKF51の南にある直径約1.0mの円形土坑	本文参照	古墳後期以降	SPF52
		欠番				SDF53
SKF54	97-K	土坑	直径約0.5mの円形土坑	土師器細片	古墳中・後期	SPF54
SKF55	97-K	土坑	SKF54の南約1.6mにある直径0.6m、深さ5.5cmの円形土坑	須恵器杯、土師器細片	奈良	SPF55
SPF56	1-I	ピット	SBF92の南約3.0mにある直径約0.3m、深さ9cmのピット	土師器細片少量、須恵器壺	古墳中・後期	SPF56
SPF57	1-I	ピット	SPF56の西側に接してある直径約0.3m、深さ10.3cmの円形のピット	土師器片	時期不明	SKF57
SKF58	98-G	土坑	本文参照	土師器片・製塩土器片	古墳中・後期	SKF58
SKF59	97-G	土坑	長軸約2.2m、短軸約1.0m、深さ2.9cmの隅丸長方形土坑	土師器片5点	時期不明	SKF59
SDF60	1~3-G	溝	SDF22に平行して掘られた検出全長11.5m、上面幅0.5m、深さ5cmの小溝	須恵器体部片、土師器細片少量	時期不明	SDF60
SHF61	3-G・H	竪穴	本文参照	本文参照	古墳中・後期	SHF61
SKF62	2-E	土坑	直径約0.7m、短軸約0.6mの不整形土坑	本文参照	古墳期	SKF62
SKF63	1・2-D	土坑	本文参照	本文参照	古墳中・後期	SKF63
SHF64	99-D	竪穴	本文参照	本文参照	古墳中・後期	SHF64

SKF65	1・2-D	土坑	本文参照	本文参照	古墳中・後期	SXF65
SKF66	1-A	土坑	一辺約0.8m、深さ33.4cmの方形土坑	須恵器杯蓋、土師器細片	古墳中・後期	SPF66
SKF67	3-C	土坑	本文参照	本文参照	古墳中・後期	SHF67
SPF68	3-C	ピット	SKF67の南約0.3m、深さ約4.7cmの円形ピット	土師器細片	時期不明	SPF68
SKF69	1・2-B	土坑	本文参照	本文参照	古墳中・後期	SKF69
	96-F	掘形	SBF91の北側中央掘形			SPF70
SKF71	97-I	土坑	長軸約1.7m、短軸約1.0m、深さ約1.9cmの楕円形土坑	須恵器杯蓋、土師器細片	古墳中・後期	SKF71
SKF72	97-I	土坑	直径約0.7m、深さ2.9cmの円形土坑	土師器細片少量、須恵器片、製塩土器	時期不明	SPF72
SKF73	97-I	土坑	直径約0.4m、深さ16cmの円形土坑	須恵器杯蓋、土師器片	古墳中・後期	SPF73
SPF74	97-I	ピット	直径約0.3m、深さ6.4cmのピット	須恵器片、土師器片	時期不明	SPF74
SPF75	97-I	ピット	SKF28に切られた一辺約0.4m、深さ約5cmのピット	土師器甕のほか土師器細片少量	時期不明	SPF75
SKF76	2-B	土坑	本文参照	本文参照	古墳中・後期	SKF76
SDF77	4-C・D	溝	SHF38を切る検出全長約4.0m、上面幅約0.5m、深さ13.9cmの溝状遺構	本文参照	古墳中・後期	SKF77
SKF78	1-Zy	土坑	本文参照	本文参照	古墳中・後期	SKF78
SDF79	2-H	溝	検出全長約4.5m、上面幅約0.3mの小溝			SDF79
SKF80	98-B	土坑	直径約0.6m、深さ約8.5cmの円形土坑			SPF80
SDF81	98-C	溝	検出長約2.5m、上面幅約0.2m、深さ27cmの小溝	土師器細片	時期不明	SDF81
	1-B	掘形	SBF155の掘形			SPF82
	99・1-C	掘形	SBF155の掘形	須恵器、土師器細片		SPF83
	99・1-C	掘形	SBF155の掘形			SPF84
SKF85	99-D	土坑	SHF64内で北辺に接してある直径約0.8m、深さ38.6cmの方形土坑、貯蔵穴か	須恵器甕、口縁部片、製塩土器	古墳中・後期	SKF85
SKF86	99-D	土坑	SHF64中央部で、SHF64の埋没後に掘られた直径約0.6m、深さ56.7cmの円形土坑	土師器細片少量、製塩土器		SDF86
SKF87	1-E	土坑	SKF231によって切られた東西約2.5m、南北約1.1m、深さ9.3cmの隅丸方形土坑	土師器片少量	不明	SKF87
SDF88	99~4-D~F	溝	本文参照	本文参照	時期不明	SDF88
		欠番				SHF89
SKF90	98-C	土坑	直径約0.7mの円形土坑	土師器甕口縁部片	時期不明	SPF90
SBF91	97-F	掘立	本文参照	本文参照		SBF91
SBF92	98-I	掘立	本文参照	本文参照		SBF92
SPF93	2-E	ピット	直径約0.2m、深さ10cmの小ピット	土師器片	時期不明	SPF93
SKF94	2-E	土坑	長軸約0.5m、短軸約0.4m、深さ4.9cmの楕円形土坑	土師器片少量	時期不明	SPF94
		欠番				SKF95
SBF96	98-E	掘立	本文参照	須恵器杯蓋の細片、土師器片少量		SBF96
SKF97	4-B	土坑	SHF36・39を切る不整形土坑	本文参照	古墳中・後期	SKF97
SDF98	1-Zx	溝	検出長約8.5m、上面幅約1.5m、深さ74cmの溝。溝内の堆積状態から自然流路と思われる	土師器片(須恵器を含まず)製塩土器	古墳時代か?	SRF98
SRF99	4~18-Zo~P	流路	小泉川の支流と思われる流路であり、G・H・J区へ続く。G・H区では流路幅20m、深さ1.8mを測る	平安時代の土師器、須恵器、緑釉陶器、中世の土師皿、白磁、中世陶器	古墳後期以降	SDF99
SDF100	4-Zs	溝	SHF111と南東コーナーから北東方面へのびる検出長約6.3m、上面幅約0.2m、深さ5.9cmの小溝	土師器細片少量	時期不明	SDF100
SPF101	5-Zr	ピット	SHF111の南で検出した直径約0.1mのピット、ピット内には木杭が遺存	土師器細片1点	時期不明	SPF101

検出遺構一覧表

SPF102	4-Zs	ピット	SHF111の上面で検出した木杭を含む直径約0.1mの小ピット	土師器片細片少量	時期不明	SPF102
SPF103	5-Zs	ピット	木杭を含む直径約0.1mの小ピット	製塩土器	古墳後期以降	SPF103
SEF104	4-Zu	井戸	SHF121を切る直径約2.0m、検出面からの深さ約46.6cmの円形素掘り井戸	土師皿	古墳後期以降	SKF104
SEF105	5-Zv	井戸	SHF120の西壁に接し、SDF147を切る長軸約3.1m×短軸約2.3m、深さ72.8cmを測る楕円形土坑、素掘り井戸か	土師器片少量	古墳後期以降	SKF105
		欠番				SDF106
SBF107	5-E	掘立	本文参照			SBF107
SDF108	5-Zs	溝	本文参照	本文参照	古墳中・後期	SDF108
SKF109	1-Zx	土坑	本文参照	本文参照	古墳中・後期	SKF109
SPF110	5-A	ピット	SHF41の上層で検出した直径約0.4m、深さ11.2cmの小ピット	平安時代の土師器皿、須恵器片1点	古墳後期以降	SPF110
SHF111	4-Zs	堅穴	本文参照	本文参照	古墳中・後期	SHF111
SKF112	99-D	土坑	SHF64を切った直径約0.6mの円形土坑	土師器片少量	時期不明	SKF112
SHF113	6-C	堅穴	本文参照	本文参照	古墳中・後期	SHF113
SXF114	2-Zz	不明土坑	一辺約1.4m、深さ10.5cmを測る方形土坑	本文参照	古墳中・後期	SKF114
SHF115	3-Zy	堅穴	本文参照	本文参照	古墳中・後期	SHF115
SHF116	4-Zz	堅穴	本文参照	本文参照	古墳中・後期	SHF116
		欠番				SKF117
SPF118	2-Zy	ピット	SXF151を切り込んだ直径約0.4m、深さ5.9cmの円形ピット	須恵器片、土師器片少量	時期不明	SPF118
SPF119	2-Zx	ピット	直径約0.3mの円形ピット	須恵器片、瓦器碗、土師器片	中世	SPF119
SHF120	5-Zw	堅穴	本文参照	本文参照	古墳中・後期	SHF120
SHF121	4-Zu	堅穴	本文参照	本文参照	古墳中・後期	SHF121
SHF122	1・2-A	堅穴	本文参照	本文参照	古墳中・後期	SHF122
SHF123	4-Zx	堅穴	本文参照	本文参照	古墳中・後期	SHF123
SPF124	3-Zx	ピット	SHF150を切った直径約0.4m、深さ9.3cmの方形ピット	須恵器杯蓋、土師器片	古墳中・後期	SPF124
SPF125	4-Zw	ピット	SHF150を切った直径約0.6m、検出面からの深さ7.7cmの円形ピット	土師器片少量	時期不明	SPF125
SPF126	3-Zw	ピット	SHF150内ピット	土師器高杯片2点、須恵器杯蓋	奈良	SPF126
SPF127	3-Zw	ピット	SHF150内ピット	土師器片少量	時期不明	SPF127
SPF128	3-Zv	ピット	直径約0.3m、深さ3.3cmのピット	土師器細片、土師器甌細片	古墳中・後期	SPF128
SPF129	3-Zv	ピット	直径約0.2mのピット	土師器体部片	時期不明	SPF129
SPF130	4-Zv	ピット	直径約0.2mのピット	土師器細片少量	時期不明	SPF130
SKF131	2-Zx	土坑	SXF151を切った直径約0.8mの円形土坑	土師器細片少量	時期不明	SPF131
SPF132	2-Zx	ピット	直径約0.3mのピット	土師器細片1点	時期不明	SPF132
SKF133	3-Zw	堀形	SHF150を切る一辺約0.7m、深さ約18.1cm、柱穴直径約0.2mの方形堀形	土師器、須恵器細片	時期不明	SPF133
SPF134	3-Zx	ピット	SHF123・SXF151の上面から掘り込まれた直径約0.2m、深さ15.1cmの円形ピット	土師器、須恵器細片	時期不明	SPF134
SKF135	3-Zx	土坑	SHF123の上面で、長軸約1.2m、短軸約0.6m、深さ3.4cmの楕円形土坑	土師器細片少量	時期不明	SPF135
SPF136	4-Zy	ピット	SHF123内にある長軸約0.7m、短軸0.5m、深さ7.7cmの楕円形ピット	土師器細片	時期不明	SPF136
	96-F	堀形	SBF91の堀形	土師器細片		SPF137
SPF138	98-G	ピット	直径約0.5m、深さ14.1cmの円形ピット、中央に直径約0.1mの柱穴あり	土師器細片少量	時期不明	SPF138

SPF139	98-I	ピット	SKF44を切る直径約0.2m、深さ19.8cmのピット	土師器細片少量	時期不明	SPF139
	97-F	掘形	直径約0.2mのピット、SBF91の掘形	土師器片1点、土師器片	時期不明	SPF140
SKF141	97-F	土坑	直径約0.6m、深さ16.2cmの円形土坑	土師器片、杯蓋の細片を含む須恵器片	古墳中・後期	SPF141
SKF142	97-H	土坑	直径約0.5m、深さ8.8cmの円形土坑	土師器片1点	時期不明	SPF142
SPF143	98-I	ピット	SDF42の上面で検出した直径約0.3m、深さ20.4cmのピット	土師器片少量	時期不明	SPF143
SPF144	95-G	ピット	直径約0.2m、深さ14.1cmのピット	土師器片少量、須恵器片	古墳中・後期か?	SPF144
SKF145	3-C	土坑	直径約0.5m、深さ2cmの円形土坑	土師器甕少量	古墳中・後期	SKF145
SKF146	5-Zy	土坑	本文参照	本文参照	古墳中・後期	SKF146
SDF147	4~14-Zo~F	溝	本文参照	本文参照	古墳中・後期	SDF147
SKF148	3-Zw	土坑	SHF150内で検出した長軸約0.7m、短軸約0.4m、深さ6cmの不整形土坑	本文参照	古墳中・後期	SKF148
SPF149	3-Zx	ピット	SHF15を切る直径約0.3m、深さ16.5cmのピット	土師器片、須恵器片少量、製塩土器	時期不明	SPF149
SHF150	3-Zw	竪穴	本文参照	本文参照	古墳中・後期	SHF150
SXF151	3-Zx	不明土坑	本文参照	本文参照	古墳中・後期	SHF151
SKF152	4-Zy	土坑	SHF116を切った直径約0.8m、深さ20.1cmの円形土坑	須恵器杯身・杯蓋、土師器細片	古墳中・後期	SKF152
	97-E	掘形	SBF91の西側北から2列目の掘形	土師器片		SPF153
	97-F	掘形	SBF91の東側北から3列目の掘形			SHF154
SBF155	99-C	掘立	本文参照			SBF155
SBF156	3・4-Zy	掘立	本文参照			SBF156
	5~8-Zq~A	流路	SRF99と同一遺構			SRF157
SPF158	97-H	ピット	SKF28を切り込んだ直径約0.3m、深さ16.5cmのピット	須恵器片、土師器片少量	古墳中・後期	SPF158
SDF159	99-1-I・J	溝	全長約8.4m、上面幅0.4m、深さ11.2cmの溝状遺構	土師器甕体部片1点	時期不明	SDF159
SKF160	2-F	土坑	直径約0.5m、深さ20.7cmの円形土坑	土師器片少量	時期不明	SPF160
SPF161	3-E	ピット	直径約0.4m、深さ7.6cmのピット	土師器片、須恵器片	時期不明	SPF161
	97-E	掘形	SBF96の掘形	須恵器杯蓋・土師器細片	古墳中・後期	SPF162
SPF163	3-D	ピット	SHF67の東約4.5mで直径約0.4m、深さ18.7cmのピット	土師器片少量	時期不明	SPF163
	97-F	掘形	SBF91の北2列目で、西2列目の掘形		時期不明	SPF164
	97-E	掘形	SBF91の北東列で、北3列目の掘形			SPF165
SPF166	3-Zx	ピット	SXF151を切った直径約0.4m、深さ5.1cmのピット	土師器片少量	時期不明	SPF166
SPF167	2-Zx	ピット	SXF151を切った直径約0.25m、深さ3cmのピット	土師器片少量	時期不明	SPF167
SPF168	4-Zw	ピット	SHF150の床面で検出した直径約0.2m、深さ6.7cmのピット	土師器甕体部片、製塩土器少量	古墳中・後期	SPF168
SPF169	4-Zw	ピット	SDF147を切った直径約0.5mのピット	土師器片少量、製塩土器	時期不明	SPF169
SPF170	4-Zw	土坑	直径約0.5mの円形土坑	土師器片少量	時期不明	SPF170
SHF171	4-D・E	竪穴	本文参照	本文参照	古墳前期	
	2・3-D	周溝	STF193の西溝		弥生	SDF172
SEF173	99-F	井戸	本文参照	本文参照	古墳前期	SEF173
SHF174	98・99-D・E	竪穴	本文参照	本文参照	古墳前期	SHF174
SHF175	99-1-B・C	竪穴	本文参照	本文参照	古墳前期	SHF175

検出遺構一覧表

SKF176	94-M	土坑	本文参照	本文参照	古墳中・後期	SKF176
	97-M・N	周溝	STF192南溝		弥生	SDF177
	5-D	周溝	STF194西溝		弥生	SDF178
	93・94-0	周溝	STF191西溝		弥生	SDF179
STF180	96～98-F～H	周溝墓	本文参照	本文参照	弥生	STF180
STF181	1・2-E・F	周溝墓	本文参照	本文参照	弥生	STF181
	94-M～0	周溝	STF203北溝		弥生	SXF182
STF183	99-F	周溝墓	本文参照	本文参照	弥生	STF183
STF184	97・98-H・I	周溝墓	本文参照	本文参照	弥生	STF184
STF185	99～2-G・H	周溝墓	本文参照	本文参照	弥生	STF185
STF186	96～99-I～L	周溝墓	本文参照	本文参照	弥生	STF186
STF187	1・2-J・K	周溝墓	本文参照	本文参照	弥生	STF187
STF188	95・96-J・K	周溝墓	本文参照	本文参照	弥生	STF188
STF189	95・96-I・J	周溝墓	本文参照	本文参照	弥生	STF189
STF190	94～96-N・0	周溝墓	本文参照	本文参照	弥生	STF190
STF191	93・94-0・P	周溝墓	本文参照	本文参照	弥生	STF191
STF192	96・97-L～N	周溝墓	本文参照	本文参照	弥生	STF192
STF193	1～3-D・E	周溝墓	本文参照	本文参照	弥生	STF193
STF194	4～6-D・E	周溝墓	本文参照	本文参照	弥生	STF194
		欠番				STF195
STF196	99・1-D・F	周溝墓	本文参照	本文参照	弥生	STF196
		欠番				STF197
STF198	98・99-L・M	周溝墓	本文参照	本文参照	弥生	STF198
STF199	96～98-D～F	周溝墓	本文参照	本文参照	弥生	STF199
SKF200	97-H	土坑	SKF28を切る直径約0.8m、深さ16.5cmの土坑	土師器甕口縁部片	古墳中・後期	SKF200
		欠番				STF201
SKF202	1-E・F	土坑	本文参照	本文参照	古墳前期か	SKF202
STF203	94-M	周溝墓	本文参照	本文参照	弥生	STF203
STF204	95-K	周溝墓	本文参照	本文参照	弥生	STF204
STF205	94-K	周溝墓	本文参照	本文参照	弥生	SDF205
STF206	95-J	周溝墓	本文参照	本文参照	弥生	SDF206
	95-J	周溝	STF189北溝		弥生	SDF207
	95-I	周溝	STF189西溝		弥生	SDF208

		欠番				SDF209
		欠番				SKF210
SXF211	1-Zq	土器溜まり	本文参照	本文参照		古墳中・後期
SXF212	3-Zp	土器溜まり	本文参照	本文参照		古墳中・後期
SXF213	5-A	土器溜まり	SHF37内で、幅0.7m範囲に広がる土器溜まり	本文参照		古墳中・後期
	97-F	堀形	SBF91内の堀形	須恵器M T 15・T K 10		古墳中・後期
SXF215	3-F	土器出土地点	弥生土器単独出土部分			弥生
SXF216	4-F	土器出土地点	弥生土器単独出土部分			弥生
SXF217	3-G	土器出土地点	弥生土器単独出土部分			弥生
SXF218	3-G	土器出土地点	弥生土器単独出土部分			弥生
SXF219	3-H	土器出土地点	弥生土器単独出土部分			弥生
SXF220	4-Zy	土器出土地点	弥生土器単独出土部分			弥生
	8~15-H~L	溝	SDF22と同一遺構	本文参照		古墳中・後期
SDG02	14-G・H	溝	上面幅0.1m、深さ3cm、SDG03との溝の心々距離は1.35mを測る	土師器細片		平安
SDG03	13・14-H	溝	上面幅0.1m、深さ3.7cm	土師器細片		平安
SDG04	14・15-I~K	溝	上面幅8~12cm、深さ3.5cm、SDG04とSDG05の溝心々距離は1.5mを測る。SDG04とSDG05の間には、直径の0.3~0.4m程度の凹みあり、SDG04はSDG16の埋滅後に作られる	須恵器杯B、杯蓋、杯、土師器把手付甕、高杯の細片		平安
SDG05	14-J・K	溝	上面幅9~14cm、深さ2.3cm	須恵器細片2点、土師器細片8点		平安
SKG06	14-H	土坑	本文参照	本文参照		奈良
SPG07	13-G	土坑	SDG02とSDG03の間で検出した直径20cmの不整形土坑			不明
SPG08	14-H	土坑	SDG02とSDG03の間で検出した長軸35cm、短軸20cmの不整形土坑			不明
SPG09	14-H	土坑	SDG02とSDG03の間で検出した直径30cmの円形土坑			不明
SKG10	13-H	土坑	長軸0.35m、短軸0.25mの炭を含む不整形土坑	土師器細片・製塩土器の脚部		SKG10
SPG11	13-H	ピット	直径約0.14mの円形ピット			不明
SPG12	13-H	ピット	SDG04とSDG05の間で検出した直径16cmの円形ピット			不明
SPG13	14-I	ピット	SD04に切られた長軸0.4m、短軸0.3mの楕円形ピット			不明
SPG14	14-I	ピット	SPG13の北側に隣接して掘り込まれた直径12cmの円形ピット			不明
SPG15	14-I	ピット	SPG14に隣接して掘り込まれた8cmの円形ピット	土師器細片		不明
SDG16	10~14-I~O	溝	幅0.5m、深さ14.2cmの小溝	須恵器体部・土師器細片		不明
SKG17	14-J	土坑	直径0.8m、深さ17.5cmの円形土坑	須恵器細片・土師器細片		不明
SPG18	14-I	ピット	SDG04とSDG05の間の長軸0.5m、短軸0.3mの不整形の落ち込み			不明
SPG19	14-J	ピット	SDG04とSDG05の間の長軸0.4m、短軸0.25mの楕円形の落ち込み	須恵器杯蓋・土師器細片		古墳中・後期
SPG20	14-J	ピット	SDG04とSDG05の間の直径0.3mの円形の落ち込み	土師器細片		不明
SPG21	14-J	ピット	SDG04とSDG05の間の直径0.3m円形の落ち込み	土師器細片		不明
SPG22	14-J	ピット	SDG04とSDG05の間の長軸0.5m、短軸0.3mの楕円形の落ち込み			不明
SPG23	14-J	ピット	SDG04とSDG05の間の直径0.25mの円形の落ち込み			不明

検出遺構一覧表

SPG24	14-J	ピット	SDG04とSDG05の間の長軸0.45m、短軸0.3mの不整形の落ち込み	土師器細片	不明	SKG24
SPG25	14-J	ピット	SDG04とSDG05の間の直径0.25mの円形の落ち込み	土師器細片 2点出土	不明	SPG25
SPG26	14-J	ピット	SDG04とSDG05の間の直径0.2mの円形の落ち込み	土師器細片・飛鳥2期の須恵器杯身の細片	古墳後期以降	SPG26
SPG27	14-J	ピット	SDG04とSDG05の間の直径0.3mの円形の落ち込み		不明	SPG27
SPG28	14-J	ピット	SDG04とSDG05の間の直径0.2mの円形の落ち込み		不明	SPG28
SPG29	14-K	ピット	SDG04とSDG05の間の直径0.15mの円形の落ち込み		不明	SPG29
SPG30	14-K	ピット	SDG04とSDG05の間の直径0.3mの円形の落ち込み		不明	SPG30
SKG31	14-I	土坑	本文参照	須恵器細片、土師器細片	奈良以降	SKG31
SKG32	14-H	土坑	東西2.5m、南北0.3mの不整形土坑			SKG32
SHG33	15-N	竪穴	本文参照	本文参照	古墳中・後期	SHG33
		欠番				SPG34
		欠番				SDG35
		欠番				SDG36
SDG37	3-Q	溝	SDG48の上面で検出した全長約6.0m、上面幅0.5mの溝状遺構	土師器甕を含む土師器細片	不明	SDG37
		欠番				SDG38
		欠番				SDG39
		欠番				SHG40
SDG41	10~14-L~R	溝	本文参照	本文参照	古墳後期以降	SDG41
SKG42	6-N	土坑	長辺約1.0m、短辺約0.8m、深さ6cmの方形土坑		不明	SKG42
SKG43	7-N	土坑	直径約1.0m、深さ5cmの円形土坑	土師器細片	不明	SKG43
SPG44	7-N	ピット	直径約0.3m、深さ5cmのピット	土師器細片	不明	SPG44
SPG45	6-N	ピット	直径約0.25m、深さ15cmのピット	須恵器・土師器細片	不明	SPG45
		欠番				SHG46
SBG47	6-P	掘立	本文参照	土師器細片	不明	SBG47
SDG48	93~16-N~T	溝	本文参照	本文参照		SDG48
	10-0	溝	SDG51と同一遺構		古墳前期	SDG49
STG50	11・12-0	周溝墓	本文参照	本文参照	弥生	SDG50
SDG51	10~15-J~AB	溝	本文参照	本文参照	古墳前期	SDG51
STG52	4・5-0~Q	周溝墓	本文参照	本文参照	弥生	SDG52
STG53	3-Q	周溝墓	本文参照	本文参照	弥生	SDG53
SHG54	12・13-E~G	竪穴	本文参照	本文参照	古墳前期	SHG54
SHG55	10-J	竪穴	本文参照	本文参照	古墳中・後期	SHG55
SHG56	10-J	竪穴	本文参照	本文参照	古墳中・後期	SHG56
	4~7-L	溝	SDG41と同一遺構		古墳中・後期	SDG57
SDG58	13~15-K・L	溝	本文参照	土師器高杯脚部、甕体部片	古墳中・後期	SDG58
SDG59	5~7-K~M	溝	本文参照	本文参照	奈良	SDG59
SKG60	7-K	土坑	長軸約1.4m、短軸約1.0m、深さ5cmの楕円形土坑	土師器細片が出土	不明	SKG60
SKG61	7-K	土坑	長軸約1.5m、短軸約1.0m、深さ3cmの楕円形土坑	土師器細片が少量出土	不明	SKG61
SPG62	15-N	ピット	SHG33の上面で検出した直径13cm、深さ23cmのピット		不明	SPG62
SPG63	6-M	ピット	SKG42の北西約1.8mで検出した、直径約0.3mのピット	土師器細片が3点出土	不明	SDG63

SPG64	6-N	ピット	SKG42の北東約2.8mで検出した、長辺約0.5m、短辺約0.4mの方形ピット	土師器細片が4点	不明	SPG64
STG65	3・4-M・N	周溝墓	本文参照	本文参照	弥生	SDG65
STG66	9-I・J	周溝墓	本文参照	本文参照	弥生	SDG66
	10・11-I・J	周溝	STG66南溝		弥生	SDG67
	10・11-J・K	周溝	STG66東溝	土師器片少量	弥生	SDG68
STG69	9-K	周溝墓	本文参照	本文参照	弥生	SDG69
	8・9-J	周溝	STG69西北溝		弥生	SDG70
	10-K・L	周溝	STG69東南溝		弥生	SDG71
	8・9-L	周溝	STG69東溝		弥生	SDG72
STG73	6-M	周溝墓	本文参照	本文参照	弥生	SDG73
	6・7-L	周溝	STG73西溝		弥生	SDG74
	7-L・M	周溝	STG73南溝		弥生	SDG75
	5~7-N	周溝	STG73東溝		弥生	SDG76
SPG77	8-M	ピット	直径約0.4mのピット		不明	SPG77
SPG78	8-M	ピット	SPG77の南東約0.3mで検出した、直径0.4mのピット		不明	SPG78
SEG79	8-L	井戸	本文参照	本文参照	古墳前期	SKG79
	4・5-0・P	周溝	STG52西溝		弥生	SDG80
	5-0・P	周溝	STG52南溝		弥生	SDG81
	5-P	周溝	STG52東溝		弥生	SDG82
SBG83	8-I	掘立	本文参照	土師器細片、須恵器細片少量	古墳中・後期	SBG83
STG84	1・2-P・Q	周溝墓	本文参照		弥生	SDG84
	9-I	周溝	STG94北溝		弥生	SDG85
	3・4-M・N	周溝	STG83西溝		弥生	SDG86
	3-0	周溝	STG65東溝		弥生	SDG87
	5~7-0・P	溝	SDF48と同一遺構		弥生	SDG88
	1-Q	周溝	STG84北溝		弥生	SDG89
	1・2-P	周溝	STG84南溝	土師器細片1点	時期不明	SDG90
	9-H	周溝	STG94西溝		弥生	SDG91
SXG92	13-L	土坑	本文参照		古墳中・後期	SXG92
	欠番					SRG93
STG94	8-I	周溝墓	本文参照	本文参照	弥生	SDG94
SPG95	10-I	ピット	SHG56を切った直径約0.3mのピット	製塩土器	不明	SPG95
SPG96	10-I	ピット	SHG55を切った直径約0.4mのピット		不明	SPG96
	15-P	溝	SRF99と同一遺構		古墳後期遺構	SRG201
	10・11-P	周溝	STG50北溝		弥生	SDG202
	6-P	掘立	SBG47と同一遺構		不明	SBG203
	7-P	掘形	SBG47の掘形		不明	SPG204
	7-Q	掘形	SBG47の掘形		不明	SPG205
	6-Q	掘形	SBG47の掘形		不明	SPG206
	6-Q	掘形	SBG47の掘形		不明	SPG207
	6-P	掘形	SBG47の掘形		不明	SPG208
SPG209	6-P	ピット	直径0.3m、深さ35.6cmの円形ピット			SPG209

検出遺構一覧表

SPG210	13-P	ピット	直径0.5m、深さ14.5cmの円形ピット			SPG210
SPG211	13-P	ピット	直径0.2mの円形ピット			SPG211
SPG212	5-Q	ピット	SPG48を切る直径0.4m、深さ20cmの円形ピット	土師器椀の細片		SPG212
	13-P	周溝	STG50南溝	本文参照	弥生	SDG213
SPG214	13-P	ピット	STG50の南溝を切る直径0.2mの円形ピット	土師器細片 5点	不明	SPG214
		欠番				SXG215
SPG216	13-P	ピット	STG50の南溝を切る直径0.6mの円形ピット			SPG216
		欠番				SHG217
		欠番				SDG218
		欠番				SHG219
		欠番				SHG220
SPG301	12-G	ピット	直径0.6m、深さ8.8cmの円形ピット	土師器皿、黒色土器A、須恵器捏鉢	平安	SPG301
SPG302	13-G	ピット	直径0.5m、深さ20.1cmの円形ピット	土師器高台細片、須恵器杯身細片	奈良以降	SPG302
	10-G	掘形	SBG315の掘形	須恵器細片 1点、土師器細片 7点	不明	SPG303
SPG304	10-G	ピット	直径0.3m、深さ21.8cmの円形ピット			SPG304
	10-G	掘形	SBG314の掘形	土師器細片少量	不明	SPG305
SPG306	10-G	ピット	直径0.3m、深さ10.2cmの円形ピット	土師器細片少量	不明	SPG306
	9-G	掘形	SBG314の掘形	土師器甕体部片	古墳中・後期	SPG307
	9-G	掘形	SBG314の掘形	土師器細片少量	不明	SPG308
	10-F	掘形	SBG314の掘形	土師器細片 8点	不明	SPG309
	10-F	掘形	SBG314の掘形	須恵器、土師器細片少量	不明	SPG310
SPG311	11-E	ピット	直径約0.7m、深さ約18.9m、掘形内には直径0.2mの柱穴あり	土師器細片少量、須恵器杯B	平安	SPG311
	11-G	掘形	SBG315の掘形			SPG312
SPG313	11-G	ピット	SBG315内にある長軸約0.4m、短軸約0.2m、深さ約22.5cmの楕円形ピット	土師器細片	不明	SPG313
SBG314	9-F	掘立	本文参照	須恵器・土師器細片		SBG314
SBG315	10-G	掘立	本文参照	須恵器・土師器細片		SBG315
		欠番				SDG316
		欠番				SDG317
		欠番				SXG318
		欠番				SXG319
SPG320	11-H	ピット	一辺約0.5m、深さ約22cmの円形ピット			SPG320
SPG321	10-G	ピット	直径約0.2m、深さ約16.8cmの不整形ピット			SPG321
SPG322	10-G	ピット	SBG315内にある一辺約0.5m、深さ約23.7cmの方形ピット	土師器甕細片 1点	不明	SPG322
		欠番				SPG323
SPG324	10-G	ピット	一辺約0.4m、深さ約26.1cmの方形ピット	須恵器片、土師器片	不明	SPG324
SPG325	10-G	ピット	直径0.5m、深さ22.4cmの円形ピット	土師器細片?点、布留式土器か?		SPG325
		欠番				SAG326
SXG327	12-G	土器溜まり	長軸1.2m、短軸0.7mの範囲に広がる土器だまり	白玉43点、勾玉 1点		SRG327
	11~14-A~F	流路	SRF99と同一遺構		古墳後期以降	SHG328
	15-L	溝	SDF22と同一遺構		古墳中・後期	SRH01
SDH02	20・21-D~H	溝	本文参照	本文参照		SDH02
	15・16-L	溝	SDG58と同一遺構			SDH03
	15-I	溝	SDG93と同一遺構			SDH04

	16-M・N	竪穴	SHG33と同一遺構				SHH05
SRH06	19-G ~M	流路	本文参照	本文参照		古墳後期以降	SRH06
SDH07	15-I ~K	溝	SDG93を切る全長9.0m、幅0.3m、深さ20cmの溝				SDH07
SDH08	20~ 23-H ~J	溝	本文参照	本文参照		奈良以降	SRH08
SDH09	19・ 20-N・ O	溝	本文参照				SDH09
SEH10	20-N	井戸	掘形直径1.2m、掘形内に直径0.8mの桶状の木枠、近世以降の野井戸				SEH10
SEH11	22-H	井戸	本文参照	桃の種子、平安時代の土師器出土	古墳後期以降		SEH11
SDH12	19~ 23-G・ H	溝	本文参照			弥生	SDH12
SDH13	21~ 23-G・ H	溝	本文参照				SDH13
		欠番					SDH14
		欠番					SHH15
SKH16	20-G	土坑	本文参照	本文参照		古墳前期	SKH16
SDH17	21・ 22-I ~K	溝	本文参照			弥生	SDH17
SDH18	21~ 23-H・ I	溝	検出全長10.5m、上面幅0.8~1.0m、深さ20cmの南北溝				SDH18
SDH19	20~ 22-J・ K	溝	本文参照				SDH19
SXH20	23・ 24-I・ J	不明	本文参照				SXH20
SDH21	21-H・ I	溝	SDH17・SDH08に切られた長さ0.8m、幅0.2mの溝				SDH21
SDH22	18-C	溝	検出長1.0m、幅0.15m、深さ21cmの小溝、土器下に炭化物あり	本文参照			SDH22
SDH23	22・ 23-G	溝	SDH13と一部重複した検出全長8.0m、幅1.0m、深さ34cmの南北溝				SDH23
SKI01	4-L	土坑	本文参照	本文参照		古墳中・後期	SKI01
SDI02	99~ 7-H~ O	溝	本文参照	本文参照		古墳後期以降	SDI02
SDI03	98~ 3-I ~M	溝	本文参照	本文参照		古墳後期以降	SDI03
		欠番					SEI04
SBI05	98-O	掘立	本文参照			古墳中・後期	SBI05
SBI06	98-P	掘立	本文参照			古墳中・後期	SBI06
SKI07	97-P	土坑	長辺1.0m、短辺約0.5m、深さ0.7mの方形土坑				SKI07
SHI08	1-M	竪穴	本文参照	本文参照		古墳中・後期	SHI08
SBI09	2-K	掘立	本文参照	土師器細片			SBI09
SPI10	99-P	ピット	直径約0.3m、深さ15cmのピット				SPI10
SPI11	1-P	ピット	直径約0.4m、深さ27cmのピット				SPI11
STI12	98・ 99-N ~O	周溝墓	本文参照	本文参照		弥生	STI12
		欠番					SHI13

検出遺構一覧表

STI14	1・2-N・O	周溝墓	本文参照	本文参照	弥生	STI14
STI15	96・97-N・O	周溝墓	本文参照	本文参照	弥生	STI15
	2・3-M・N	周溝	STG65周溝		弥生	STI16
STI17	1・2-L・M	周溝墓	本文参照		弥生	STI17
	1・2-J・K	周溝	STF187周溝		弥生	STI18
	98・99-L・M	周溝	STF198周溝		弥生	STI19
		欠番				SDI20
SAI21	96-Q・R	柵列	本文参照		近世以降	SAI21
SAI22	95-S	柵列	丸木材(直径10cm前後)を利用した柵列		近世以降	SAI22
SAI23	94・95-R・S	柵列	SAI21とは1.5m北にずれて打ち込まれた丸木材(直径10cm)を利用した柵列。柵列は全長約6.0mまで確認		近世以降	SAI23
SAI24	95-R	柵列	本文参照		近世以降	SAI24
SAI25	96-Q・R	柵列	本文参照		近世以降	SAI25
SAI26	95-S	柵列	本文参照		近世以降	SAI26
SAI27	94-S	柵列	本文参照		近世以降	SAI27
SAI28	94・95-T	柵列	SAI23の延長部にある直径約10cmの丸木材を利用した全長14m以上を測る杭列、杭の間には一部板材(厚さ1.5cm)を利用した側板が据えられる		近世以降	SAI28
SAI29	94-T・U	柵列	SAI28に続く丸太材を利用して作られた杭列		近世以降	SAI29
SDI30	93-U	柵列	本文参照		近世以降	SAI30
SDI31	96・97-R・S	溝	本文参照		古墳後期以降	SDI31
SEI32	6-H・I	井戸	SDI02を切る掘形直径約2.0mで、掘形内には木枠をもつ近世以降の井戸	近世以降の陶器	近世以降	SEI32
SXI33	96・97-R・T	不明遺構	本文参照		古墳後期以降	SFI33
STI34	2・3-L・M	周溝墓	本文参照	本文参照	弥生	STI34
	1-P・Q	周溝	STG84周溝		弥生	STI35
SKI36	99・1-P	土坑	長軸約1.5m、短軸約0.6mの不整形土坑			SXI36
SPI37	5-K	ピット	直径約0.6mの円形ピット	須恵器杯蓋	古墳中・後期	SPI37
	97-P	掘形	SBI06の掘形			SPI38
STI39	1-N	周溝墓	本文参照		弥生	STI39
SBI40	5-G・H	掘立	本文参照	須恵器甕体部片		SBI40
SDI41	2~5-H~K	溝	SDI02・03の間で、全長23m、上面幅2.7~2.9m、深さ30cmの溝		不明	SDI41
		欠番				SPI42
		欠番				SPI43
SPI44	5-K	ピット	一辺約0.6mの方形ピット			SPI44
SPI45	5-K	ピット	直径約0.5mの円形ピット			SPI45
SPI46	5-J	ピット	SPI37の西約1.8mで検出した一辺約0.7m、深さ10cmを測る方形ピット			SPI46
SKI47	5-H	土坑	SDI20を切った長軸約2.0m、短軸約0.9mの楕円形土坑	土師器片	時期不明	SXI47
STI48	93~95-T~V	周溝墓	本文参照	本文参照	弥生	STI48

STI149	93・94-Q ~S	周溝墓	本文参照	本文参照	弥生	STI149
		欠番				STI150
	93~97-S・T	溝	SDG48と同一遺構			SDI151
SEI152	93-T	井戸	掘形直径1.2mを測る近世以降の野井戸			SEI152
SEI153	94・95-S	井戸	掘形直径1.3mを測る近世以降の野井戸			SEI153
SDI154	93-S・T	溝	上面幅0.7m以上の北東-南西方向の溝			SDI154
SDI155	95-P・R	溝	褐色推砂で小泉川の洪水による流路の可能性あり			SDI155
SDI156	94・95-Q・R	溝	本文参照			SDI156
SAI157	95-Q・R	柵列	SDI155の北肩に打ち込まれた検出全長8m以上の杭列			SAI157
SAI158	95-Q・R	柵列	SAI157と同様、SDI155の北肩に打ち込まれた全長3.0mの杭列			SAI158
SDI159	94-T	溝	近世以降の久我畷の路面部で掘り込まれた暗渠。上面幅1.4m、遺存長2.0mの溝状遺構を穿したのち底部に板を据え、その上部に「」の字に角材を掘り込み暗渠とする			SDI159
		欠番				SDI160
SKI161	93・94-R	土坑	STI149の中央で検出した直径約1.0m、深さ17cmの円形土坑			SKI161
STI162	94~95-S ~U	周溝墓	本文参照		弥生	STI162
		欠番				SDI163
		欠番				STI164
SXI165	3-K	土器出土地点	弥生土器単独出土部分		弥生	
SEI101	8-D	井戸	掘形は東西約2.3m、南北は1.3m以上、掘形内には四隅に角材を立て、横棧で縦板組みの井戸枠がある近世以降の方形井戸	掘形および井戸枠内からは、棧瓦のほか染付少量出土した	近世以降	SEI101
SEI102	7・8-D	井戸	SEI101の北約0.3m検出した井戸で、底部には桶の底板のみ遺存		近世以降	SEI102
SEI103	9-B・C	井戸	東西約2.5m、南北約1.5mで、内側には横棧で縦板を組み合わせた長方形土坑、現代の野井戸の可能性が高い		近世以降	SEI103
SEI104	10・11-C・D	井戸	SRI07の埋没後に構築された東西約2.7m、南北約4.0m、深さ0.85mを測る長方形土坑、長方形土坑の東西辺の内側約0.2mには丸太材を据え、その丸太材を固定するように丸太の両側には直径5cmの丸杭が0.7m間隔で打ち込まれる、野井戸か	掘形および木枠内から近世以降の陶磁器のほか棧瓦	近世以降	SEI104
	7・8-G	溝	SDF22と同一遺構	本文参照	古墳中・後期	SDI105
SDI106	8~10-D ~G	溝	本文参照	本文参照	平安	SDI106
	9~13-A ~D	流路	SRF99と同一遺構		古墳後期以降	SRI107
	5・6-G	溝	SDF22と同一遺構	本文参照	古墳中・後期	SDI108
SHI109	7-G	竪穴	本文参照	本文参照	古墳中・後期	SHI109
	7-H	掘形	SBI161の掘形		古墳中・後期	SKI110
SPI111	7-H	ピット	SBI161の内側に位置する直径30cmの円形ピット			SKI111
	7-H	掘形	SBI161の掘形			SKI112
	7-H	掘形	SBI153の掘形			SKI113
	7-H	掘形	SBI153の掘形			SKI114

検出遺構一覧表

	6-H	掘形	SBI153の掘形			SKI115
SPI116	6-H	土坑	SBI153の北西隅掘形に切られた一辺約0.5mの方形掘形			SKI116
	7-H	掘形	SKI110と同様、周溝墓墳丘上で検出したSBI153の掘形			SKI117
SKI118	6-H	土坑	直径0.3mの土坑			SKI118
SDI119	6・7-H・I	溝	SBI153掘形に切られた検出全長6.2m、上面幅0.6mの溝			SDI119
	5~7-F	溝	SDF22と同一遺構	本文参照		SDI120
		欠番				SDI121
SDI122	7~9-C~E	溝	本文参照	本文参照	古墳後期以降	SDI122
STI123	6~8-G~I	周溝墓	本文参照	本文参照	弥生	STI123
SPI124	7-H	ピット	SHI109を切った直径約0.4m、深さ26cmの円形ピット			SPI124
		欠番				SDI125
SKI126	8-F	土坑	本文参照	本文参照	古墳後期以降	SKI126
SKI127	7-E	土坑	本文参照	本文参照	古墳中・後期	SKI127
		欠番				SKI128
	9-F	掘形	SBG314の掘形			SPI129
SKI130	9-F	土坑	直径約0.9mの円形土坑			SKI130
SKI131	9・10-E	土坑	長軸約1.6m、短軸約0.79mの不整形土坑			SKI131
	8-F	掘形	SBI145の掘形			SPI132
	9-F	掘形	SBG314の掘形			SPI133
	9-F	掘形	SBG314の掘形			SPI134
SPI135	8-G	ピット	直径約0.2mのピット			SPI135
	7-G	掘形	SBI140の掘形			SPI136
	7-G	掘形	SBI140の掘形			SPI137
		欠番				SHI138
SBI139	6-E・F	掘立	本文参照			SBI139
SBI140	7-F	掘立	本文参照			SBI140
	9-F	掘立	SBG314と同一遺構			SBI141
	8-G	掘形	SBI161の掘形			SPI142
	8-G	掘形	SBI161の掘形			SPI143
SPI144	7-E	ピット	直径0.4m、深さ3cmの円形ピット			SPI144
SBI145	8-E	掘立	本文参照			SBI145
	7-D	掘形	SBI145の掘形			SPI146
SPI147	7-D	土坑	長辺0.7m、短辺0.5mの方形ピット			SPI147
SPI148	7-E	ピット	長辺2.7m、短辺0.6mの方形ピット			SPI148
SPI149	7-E	土坑	SBI140の中にある一辺0.4m、深さ9cmを測る方形土坑			SPI149
SPI150	8-D	ピット	一辺0.35mの方形ピット			SPI150
SPI151	8-D	ピット	一辺約0.3m、深さ8cmの不整形ピット			SPI151
	8-G	ピット	SBI161の掘形	土師器片、須恵器片		SPI152
SBI153	6-H	掘立	本文参照			SBI153
SHI154	9・10-D・E	竪穴	本文参照	本文参照	古墳前期	SHI154
SPI155	8-D	ピット	直径約0.5m、深さ7cmの掘形内には直径約0.15mの柱穴あり	土師器細片		SPI155
SPI156	6-F	ピット	FBI139の内側に位置する直径約20cmの円形ピット	柱穴内に須恵器甕体部片		SPI156
SPI157	8-F	ピット	直径約0.4m、深さ15cmの円形ピット	土師器甕片		SPI157
SPI158	10-E	ピット	SHI154の上面から切り込まれた直径0.5m、深さ15cm、柱穴直径0.2mを測る方形ピット			SKI158
		欠番				SDI159
STI160	8-D・E	周溝墓	本文参照	本文参照	弥生	STI160

SBI161	8-G・H	掘立	本文参照			SBI161
SFI162	7～ 10-D ～F	石敷き	本文参照			SFI162
SDJ01	3～ 14-S ～R	溝	本文参照	本文参照	平安	SDJ01
STJ02	10・ 11-S・ T	周溝墓	本文参照	本文参照	弥生	SXJ02
STJ03	8・9- T・U	周溝墓	本文参照	本文参照	弥生	SXJ03
STJ04	7・8-R ～T	周溝墓	本文参照	本文参照	弥生	SXJ04
STJ05	9・10- U～W	周溝墓	本文参照	本文参照	弥生	SXJ05
SDJ06	95～ 3-W～ Y	溝	本文参照	本文参照	古墳後期以降	SDJ06
SPJ07	9-X・Y	ピット	直径0.6m、深さ6cmの円形ピット			SKJ07
SPJ08	3-AA	ピット	長辺0.5m、短辺0.3m、深さ8cmの方形ピット	土師器細片、須恵器体部片少量	時期不明	SPJ08
SPJ09	4-AA	ピット	直径0.3m、深さ5cmの円形ピット	土師器細片、須恵器細片	時期不明	SPJ09
SPJ10	3-AB	ピット	直径0.2m、深さ4cmの円形ピット	須恵器・土師器細片	時期不明	SPJ10
SPJ11	8-AA	ピット	直径0.6m、深さ3cmの円形ピット	土師器細片	時期不明	SPJ11
SPJ12	8・9-Y	ピット	長軸0.6m、短軸0.3m、深さ4cmの楕円形ピット	須恵器・土師器細片	時期不明	SPJ12
SHJ13	6-X	竪穴	本文参照	本文参照	古墳中・後期	SHJ13
SHJ14	11-S	竪穴	本文参照	本文参照	古墳中・後期	SHJ14
	12-Q	周溝	STG50周溝		弥生	STJ15
SHJ16	10-Q	竪穴	本文参照	土師器細片	古墳中・後期	SHJ16
		欠番				SXJ17
STJ18	5～7- R～S	周溝墓	本文参照		弥生	SXJ18
STJ19	4・5- V・W	周溝墓	本文参照	本文参照	弥生	SXJ19
STJ20	12～ 14-S・ T	周溝墓	本文参照	本文参照	弥生	SXJ20
SBJ21	7-AB	掘立	本文参照	土師器細片、杯蓋を含む須恵器細片	古墳中・後期	SBJ21
SPJ22	7-AB	ピット	SBJ21の内側に位置する直径0.4m、深さ5cmの円形ピット			SPJ22
	8-AB	掘形	SBJ21の掘形			SPJ23
SHJ24	6-AB・ AC	竪穴	本文参照	本文参照	古墳中・後期	SHJ24
SPJ25	5-AB	ピット	直径0.4m、深さ8cmの円形ピット	土師器細片	時期不明	SPJ25
SPJ26	5-AB	ピット	直径0.8m、深さ7cmの円形ピット	土師器細片	時期不明	SPJ26
SHJ27	5-X	竪穴	本文参照	白玉1点、有孔円盤1点、土師器細片	古墳中・後期	SHJ27
SHJ28	12-Q	竪穴	本文参照	本文参照	古墳中・後期	SHJ28
SPJ29	5-AC	ピット	SBJ45の内側に位置する直径0.4m、深さ15cmの円形ピット	須恵器杯蓋	古墳中・後期	SPJ29
	5-AC	掘形	SBJ45の掘形	須恵器甕口縁部片	時期不明	SPJ30
SPJ31	5-AC	ピット	直径0.4m、深さ12cmの円形ピット	須恵器甕体部片、土師器細片	時期不明	SPJ31
SPJ32	5-AC	ピット	直径0.3m、深さ6cmの円形ピット	土師器、須恵器甕細片	時期不明	SPJ32
SPJ33	5-AC	ピット	直径0.3m、深さ3cmの円形ピット	土師器細片1点	時期不明	SPJ33
SPJ34	6-AC	ピット	直径0.4m、深さ4cmの円形ピット	須恵器杯蓋・壺・甕、土師器細片	古墳中・後期	SPJ34

検出遺構一覧表

SKJ73	13-Y	土坑	長軸約0.9m、短軸約0.6m、深さ5cmの楕円形土坑	須恵器甕		SPJ73
SPJ74	8-Y	ピット	長軸約0.7m、短軸約0.5m、直径約0.6m、深さ5cmの楕円形ピット	土師器細片	時期不明	SPJ74
SPJ75	8-Z	ピット	直径約0.5m、深さ7cmの円形ピット	土師器細片	時期不明	SDJ75
SPJ76	8-W	ピット	長軸約0.4m、短軸約0.3m、深さ3cmの楕円形ピット	土師器片少量	時期不明	SPJ76
STJ77	3~5-R~T	周溝墓	本文参照	本文参照	弥生	STJ77
SPJ78	2-S	ピット	長軸約0.6m、短軸約0.3mの楕円形ピット			SPJ78
SPJ79	5-Q	ピット	直径約0.4m、深さ5cmの楕円形ピット	土師器細片		SPJ79
	10-X~AB	溝	SDG51と同一遺構	須恵器杯蓋、須恵器片、土師器片	古墳中・後期	SDJ80
	8~10-P~W	溝	SDG51と同一遺構	布留壺、タタキ甕、高杯		SDJ81
	97~3-Q-R	溝	SDG48と同一遺構			SDJ82
STJ83	6~8-AB~AD	周溝墓	本文参照	本文参照	弥生	STJ83
STJ84	6~7-V~W	周溝墓	本文参照	本文参照	弥生	STJ84
	2~4-P~R	周溝	STG53周溝		弥生	STJ85
		欠番				STJ86
STJ87	7~8-Q-R	周溝墓	本文参照	本文参照	弥生	STJ87
STJ88	8~9-W-X	周溝墓	本文参照	本文参照	弥生	STJ88
STJ89	9~Y-Z	周溝墓	本文参照	本文参照	弥生	STJ89
STJ90	9~10-Z~AB	周溝墓	本文参照	本文参照	弥生	STJ90
STJ91	8-Z-AA	周溝墓	本文参照	本文参照	弥生	STJ91
SDJ92	1~2-S-T	溝	検出全長10m、上面幅0.7m、深さ19cmの溝状遺構	杯蓋、土師器片	古墳中・後期	SDJ92
SKJ93	1-U	土坑	SDJ92の埋没後に掘り込まれた長辺約2.0m、短辺約1.0mの方形土坑			SKJ93
SHJ94	6-V~W	竪穴	本文参照	本文参照	古墳中・後期	SHJ94
STJ95	3~6-AA~AD	周溝墓	本文参照	本文参照	弥生	STJ95
		欠番				STJ96
		欠番				STJ97
STJ98	3~5-Z~AA	周溝墓	本文参照	本文参照	弥生	STJ98
STJ99	5~6-W~Y	周溝墓	本文参照	本文参照	弥生	STJ99
STJ100	10~11-W-X	周溝墓	本文参照	本文参照	弥生	STJ100
SKJ101	8-AA	土坑	本文参照	本文参照	古墳中・後期	SKJ101
		欠番				SHJ102
		欠番				SPJ103
STJ104	9~10-R-S	周溝墓	本文参照		弥生	STJ104
STJ105	10~11-R-S	周溝墓	本文参照	本文参照	弥生	STJ105
STJ106	12-S	周溝墓	本文参照	本文参照	弥生	SDJ106
SBJ107	5~6-Z	掘立	本文参照			SBJ107
	6-Y	掘形	SBJ107掘形			SPJ108

SKJ73	13-Y	土坑	長軸約0.9m、短軸約0.6m、深さ5cmの楕円形土坑	須恵器甕		SPJ73
SPJ74	8-Y	ピット	長軸約0.7m、短軸約0.5m、直径約0.6m、深さ5cmの楕円形ピット	土師器細片	時期不明	SPJ74
SPJ75	8-Z	ピット	直径約0.5m、深さ7cmの円形ピット	土師器細片	時期不明	SDJ75
SPJ76	8-W	ピット	長軸約0.4m、短軸約0.3m、深さ3cmの楕円形ピット	土師器片少量	時期不明	SPJ76
STJ77	3~5-R~T	周溝墓	本文参照	本文参照	弥生	STJ77
SPJ78	2-S	ピット	長軸約0.6m、短軸約0.3mの楕円形ピット			SPJ78
SPJ79	5-Q	ピット	直径約0.4m、深さ5cmの楕円形ピット	土師器細片		SPJ79
	10-X~AB	溝	SDG51と同一遺構	須恵器杯蓋、須恵器片、土師器片	古墳中・後期	SDJ80
	8~10-P~W	溝	SDG51と同一遺構	布留壺、タタキ甕、高杯		SDJ81
	97~3-Q~R	溝	SDG48と同一遺構			SDJ82
STJ83	6~8-AB~AD	周溝墓	本文参照	本文参照	弥生	STJ83
STJ84	6・7-V・W	周溝墓	本文参照	本文参照	弥生	STJ84
	2・4-P~R	周溝	STG53周溝		弥生	STJ85
		欠番				STJ86
STJ87	7・8-Q・R	周溝墓	本文参照	本文参照	弥生	STJ87
STJ88	8・9-W・X	周溝墓	本文参照	本文参照	弥生	STJ88
STJ89	9-Y・Z	周溝墓	本文参照	本文参照	弥生	STJ89
STJ90	9・10-Z・AB	周溝墓	本文参照	本文参照	弥生	STJ90
STJ91	8-Z・AA	周溝墓	本文参照	本文参照	弥生	STJ91
SDJ92	1・2-S・T	溝	検出全長10m、上面幅0.7m、深さ19cmの溝状遺構	杯蓋、土師器片	古墳中・後期	SDJ92
SKJ93	1-U	土坑	SDJ92の埋没後に掘り込まれた長辺約2.0m、短辺約1.0mの方形土坑			SKJ93
SHJ94	6-V・W	竪穴	本文参照	本文参照	古墳中・後期	SHJ94
STJ95	3~6-AA~AD	周溝墓	本文参照	本文参照	弥生	STJ95
		欠番				STJ96
		欠番				STJ97
STJ98	3~5-Z・AA	周溝墓	本文参照	本文参照	弥生	STJ98
STJ99	5・6-W~Y	周溝墓	本文参照	本文参照	弥生	STJ99
STJ100	10・11-W・X	周溝墓	本文参照	本文参照	弥生	STJ100
SKJ101	8-AA	土坑	本文参照	本文参照	古墳中・後期	SKJ101
		欠番				SHJ102
		欠番				SPJ103
STJ104	9・10-R・S	周溝墓	本文参照		弥生	STJ104
STJ105	10・11-R・S	周溝墓	本文参照	本文参照	弥生	STJ105
STJ106	12-S	周溝墓	本文参照	本文参照	弥生	SDJ106
SBJ107	5・6-Z	掘立	本文参照			SBJ107
	6-Y	掘形	SBJ107掘形			SPJ108

検出遺構一覧表

SKJ109	9-R	土坑	直径2.0m、深さ21cmの円形土坑	本文参照		SKJ109
SAJ110	4-X	柵列	本文参照	須恵器杯蓋、甕体部、土師器細片	古墳中・後期	SAJ110
SPJ111	5-X	ピット	SHJ27を切った一辺約0.6m、深さ11cmの楕円形ピット	土師器細片		SPJ111
SPJ112	6-V	ピット	直径約0.5m、深さ15cmの円形ピット	土師器高杯	古墳中・後期	SPJ112
SPJ113	7-Z	ピット	直径約0.5m、深さ10cmの円形ピット	土師器片		SPJ113
SDJ114	97~1-V	溝	検出全長約18m、上面幅0.2~0.3m、深さ4~10cmの溝状遺構	須恵器杯身、土師器片	平安	SDJ114
SDJ115	99・1-W~Y	溝	検出全長約25m、上面幅0.2~0.6m、深さ4~14cmの溝状遺構	土師器細片		SDJ115
SPJ116	7-Y	ピット	SPJ56の北東約2.5mに位置する直径約0.3mの円形ピット	土師器細片1点		SPJ116
		欠番				SPJ117
SDJ118	10・11-U・V	周溝墓	SDJ05の周溝		弥生	SDJ118
	3-Y	掘形	SBJ123の掘形	土師器細片1点	時期不明	SPJ119
SPJ120	3-X	ピット	SHJ126内ピット	土師器細片		SPJ120
	3-X	掘形	SAJ110の掘形	土師器細片		SPJ121
SXJ122	2-TU	土坑	SDG48の東約10mで、直径2mの範囲に広がる焼土坑			SHJ122
SBJ123	3-Y・Z	掘立	本文参照			SBJ123
STJ124	1~3-V~X	周溝墓	本文参照	本文参照	弥生	STJ124
SPJ125	4-Y	ピット	直径0.7~0.8m、深さ20cmの方形ピット	須恵器細片1点		SPJ125
SHJ126	3-X・Y	竪穴	本文参照	本文参照		SHJ126
STJ127	2-Z・AA	周溝墓	本文参照	本文参照	弥生	STJ127
STJ128	2・3-T~V	周溝墓	本文参照	本文参照	弥生	STJ128
STJ129	98~1-S~V	周溝墓	本文参照		弥生	STJ129
SPJ130	99-Z	ピット	直径0.4mの円形ピット	土師器甕		SPJ130
SXJ131	2-V	焼土痕	STJ124内で周溝内外に広がる焼土痕		弥生前後	SXJ131
	3~5-R~T	周溝	STJ77周溝		弥生	STJ132
STJ133	98・99-Y・Z	周溝墓	本文参照	本文参照	弥生	STJ133
		欠番				SXJ134
SEJ135	1-AF・AG	井戸	本文参照	本文参照	古墳中・後期	SEJ135
SKJ136	97-Z	土坑	STJ133北溝東側土坑			SKJ136
STJ137	3-T	周溝墓	本文参照		弥生	STJ137
SPJ138	1-AG	ピット	直径0.5m、深さ8cmの円形ピット	須恵器片2点		SPJ138
SKJ139	2-AF	土坑	本文参照	本文参照	古墳中・後期	SKJ139
SPJ140	3-Y	ピット	SBJ142内にある直径0.5m、深さ7cmの円形ピット			SPJ140
SPJ141	3-Y	掘形	SHJ126内にある掘形			SPJ141
		欠番				SBJ142
SPJ143	3-Y	ピット	一辺約0.45m、深さ15cmの楕円形ピット			SPJ143
SPJ144	3-W	ピット	長辺約0.5m、短辺約0.4mの円形ピット			SKJ144
	3-A I	掘形	SBJ179の掘形			SPJ145
SKJ146	3-A I	土坑	本文参照	土師器片少量	時期不明	SKJ146
SKJ147	3-A I	土坑	直径0.7m、深さ15cmの円形土坑			SKJ147
	4-AJ	掘形	SBJ180の掘形			SPJ148
SPJ149	4-AJ	ピット	直径0.3m、深さ4cmの円形ピット			SPJ149
SPJ150	4-AJ	ピット	直径0.8mの円形ピット			SPJ150

	4-AJ	掘形	SBJ180の掘形			SPJ151
SPJ152	4-AJ	ピット	直径0.2m、深さ7cmの円形ピット			SPJ152
SPJ153	4-AJ	ピット	直径0.3m、深さ3cmの円形ピット			SPJ153
SKJ154	4-AJ	土坑	本文参照	本文参照	古墳中・後期	SKJ154
		欠番				SXJ155
		欠番				SPJ156
		欠番				SPJ157
STJ158	94・95-V ~X	周溝墓	本文参照	本文参照	弥生	STJ158
SPJ159	94-AA	ピット	本文参照	土師器片、土師器高杯、製塩土器	古墳中・後期	SPJ159
		欠番				SPJ160
STJ161	4-Y	周溝墓	本文参照		弥生	STJ161
SKJ162	4-Y	土坑	STJ161の南東約1mにある直径1.3mの円形土坑			STJ162
STJ163	1-U	周溝墓	本文参照		弥生	STJ163
	4-X	掘形	SBJ167の掘形			SPJ164
SKJ165	94・95-AB	土坑	直径1.1m、深さ20cmの楕円形土坑	土師器細片少量、製塩土器		SKJ165
SKJ166	95-AB	土坑	長辺1.0m、短辺0.6m、深さ30cmの方形土坑	土師器細片少量、製塩土器	古墳中・後期	SKJ166
SBJ167	4-X	掘立	本文参照			SBJ167
SKJ168	95-AA	土坑	直径0.7m、深さ15cmの楕円形土坑			SKJ168
SPJ169	94-AA	ピット	直径0.3m、深さ15cmの円形ピット	土師器片6点	時期不明	SPJ169
SPJ170	95-AB	ピット	直径0.3mの円形ピット			SPJ170
SPJ171	95-AA	ピット	直径0.3m、深さ60cmの円形ピット			SPJ171
SPJ172	95-AA	ピット	直径0.3m、深さ30cmの円形ピット			SPJ172
SPJ173	95-AA	ピット	直径0.3m、深さ30cmの円形ピット	土師器片2点	時期不明	SPJ173
SPJ174	95-AA	ピット	直径0.3m、深さ30cmの円形ピット			SPJ174
SPJ175	95-AA	ピット	直径0.5m、深さ0.1mの円形ピット			SPJ175
		欠番				SPJ176
SPJ177	94-AA	ピット	直径0.4m、深さ6cmの円形ピット	土師器細片2点	時期不明	SPJ177
SBJ178	3-AF・AG	掘立	本文参照	須恵器細片、須恵器杯蓋の口縁部片		SBJ178
SBJ179	3-AH・AI	掘立	本文参照			SBJ179
SBJ180	4・5-A I・AJ	掘立	本文参照	土師器細片		SBJ180
SBJ181	4-AG	掘立	本文参照	本文参照	古墳中・後期	SBJ181
SBJ182	6-AF	掘立	本文参照	須恵器杯蓋細片、土師器細片	古墳中・後期	SBJ182
SBJ183	9-AD	掘立	本文参照	須恵器杯蓋細片、土師器細片	古墳中・後期	SBJ183
SPJ184	4-AF	ピット	直径0.3m、深さ3cmの不整形ピット	土師器片4点	時期不明	SPJ184
SPJ185	6-AF	ピット	直径0.3m、深さ2cmのSBJ182内にある円形ピット	土師器細片、須恵器杯身	古墳中・後期	SPJ185
SPJ186	6-AF	ピット	直径0.4mの円形ピット	土師器細片3点	時期不明	SPJ186
SPJ187	9-AD	ピット	直径0.4m、深さ3cmの円形ピット	須恵器体部片3点、土師器少量		SPJ187
SPJ188	9-AD	ピット	長軸0.8m、短軸0.6m、深さ6cmの楕円形ピット	土師器、須恵器細片	古墳中・後期	SKJ188
SPJ189	9-AD	ピット	一辺約0.3m、深さ7cmの方形ピット	土師器細片2点	時期不明	SPJ189
SPJ190	9-AC	ピット	直径約0.3m、深さ5cmの円形ピット	土師器細片1点	時期不明	SPJ190
SHJ191	9-AE	竪穴	本文参照	本文参照	古墳中・後期	SHJ191
SHJ192	7-AE	竪穴	本文参照	本文参照	古墳中・後期	SHJ192

SHJ193	8-AF	竪穴	本文参照	本文参照	古墳中・後期	SHJ193
SHJ194	8-AF	竪穴	本文参照	本文参照	古墳中・後期	SHJ194
SKJ195	6-AG	土坑	本文参照	土師器少量	古墳中・後期	SKJ195
		欠番				SDJ196
SBJ197	8-AG	掘立	本文参照	本文参照	古墳中・後期	SBJ197
SKJ198	5-AJ	土坑	本文参照	本文参照	古墳中・後期	SKJ198
STJ199	13~15-U~W	周溝墓	本文参照	本文参照	弥生	STJ199
STJ200	14・15-T・U	周溝墓	本文参照		弥生	STJ200
SHJ201	8-AE	竪穴	本文参照	本文参照	古墳中・後期	SHJ201
SPJ202	8-AF	ピット	SHJ201内の直径0.2m、深さ20cmの円形ピット	須恵器杯身		SPJ202
SPJ203	8-AE	ピット	SHJ201内の直径0.15m、深さ20cmの円形ピット	土師器細片		SPJ203
SPJ204	7-AF	ピット	直径0.3mの円形ピット	土師器細片	不明	SPJ204
SPJ205	8-AF	ピット	直径0.5mの円形ピット	土師器細片	不明	SPJ205
SPJ206	8-AF	ピット	直径0.2mの円形ピット	土師器細片	不明	SPJ206
SPJ207	8-AF	ピット	直径0.5m、深さ3cmの円形ピット	土師器細片、須恵器杯蓋	古墳中・後期	SPJ207
SPJ208	8-AF	ピット	直径0.4m、深さ5cmの円形ピット	土師器細片	不明	SPJ208
SKJ209	7-AE	土坑	SHJ201を切った長辺1.6m、短辺0.8m、深さ24cmの長方形土坑	須恵器杯身	古墳中・後期	SXJ209
SPJ210	8-AC	ピット	直径0.4mの円形ピット	土師器片、須恵器片	不明	SPJ210
SPJ211	8-AC	ピット	直径0.3mの円形ピット	須恵器片	不明	SPJ211
SPJ212	9-AC	ピット	一辺0.5mの方形ピット	須恵器有蓋高杯、脚部	古墳中・後期	SPJ212
SKJ213	8-AF・AG	土坑	長軸1.1m、短軸0.9m、深さ20cmの焼土坑	本文参照		SKJ213
SKJ214	8-AG	土坑	本文参照	本文参照	古墳中・後期	SKJ214
SKJ215	8-AG	土坑	本文参照	本文参照		SKJ215
SPJ216	15-W	ピット	一辺0.6mで直径0.15mの柱穴をもつ方形ピット	土師器細片	不明	SPJ216
SKJ217	14-U	土坑	長辺0.9m、短辺0.5m、深さ15cmの長方形土坑	土師器片	不明	SKJ217
SPJ218	8-AF	ピット	直径0.6m、深さ24cmの円形ピット	須恵器杯蓋、土師器細片	古墳中・後期	SPJ218
SPJ219	7-AF	ピット	直径0.4mの円形ピット	須恵器杯蓋、土師器甕	古墳中・後期	SPJ219
SPJ220	9-AC	ピット	直径0.2mの円形ピット	須恵器片	不明	SPJ220
SPJ221	9-AC	ピット	直径0.2mの円形ピット	土師器細片	不明	SPJ221
STJ222	8・9-AA~AC	周溝墓	本文参照		弥生	
SXJ223	6-W	土器溜まり	本文参照	本文参照		
SKJ224	9-Q	土坑	本文参照	本文参照		
SKJ225	9-AH	土坑	本文参照	土師器片		
SXJ226	8-AG	土器溜まり	SHJ193の南東に広がる土器溜まり	本文参照		
SXJ227	3-AE	土器溜まり	東西0.6m、南北1.5の範囲に広がる土器溜まり	本文参照		
SXJ228	5-AJ	土器溜まり	東西0.5m、南北1.0mの範囲に広がる土器溜まり	本文参照		
SKJ229	8-AF	土坑	本文参照			
SXJ230	12-W	土器出土地点	STJ100の南方の弥生土器単独出土部分		弥生	

付表15 弥生土器観察表

番号	器形	出土遺構	法量(cm)			残存率	調整		胎土・鉱物	色調
			口径	底径	器高		内面	外面		内面/外面
35	広口壺	STF193 西溝	(14.4)	5.4	27.4	9/10	ハケ後ナ デ	ハケ後胴 上ナデ、 胴下ミガ キ	稍粗・0.5~1 チャ、石・少/0.5 以下長、石、チャ・ 多	黒灰色/淡 灰褐色
36	短頸壺	STF193 西溝	11.6	5.7	27.9	2/3	ハケ後ナ デ	ハケ後胴 下ミガ キ、胴上 磨滅	稍粗・2~3 長、 石・極多/2 前後 チャ・稍多	黒灰色/褐 ~黄褐色
37	甕	STF193 西溝	18.0	6.8	30.0	9/10	ハケ後頸 ナデ	タテハケ	稍粗・2 以下長、 チャ、石・多/同 赤・極少	淡灰黄色/ 淡灰黄~淡 灰褐色
38	甕用蓋	STF193 西溝	16.2	—	(3.4)	1/8	ナデ	タテハケ	稍粗・0.5~1.5 長、石・稍多/同透 石・少/同赤・極少	淡灰黄色/ 淡黄褐色
39	広口壺	STF194 西溝	(16.6)	6.9	(41.4)	1/2	磨滅	胴ヨコハ ケ	粗・0.5~2 石、 長・多/同頁、赤・ 稍多/1~2 チャ・極少	淡黄褐色/ 淡黄褐色
40	鉢	STF194 西溝	(17.4)	6.1	12.0	4/5	ナデ	胴下タテ ハケ	稍粗・2 以下長・ 多/同石、チャ、 赤・少	明黄褐色/ 黄褐~淡赤 褐色
41	甕	STF194 西溝	(18.7)	—	(31.7)	4/5	ハケ後ナ デ	タテハケ	普・0.5~1 透 石・極少/1~1.5 赤、頁・極少/1~ 2 石、チャ・多/ 同長・稍多	淡黄灰色/ 淡黄灰色
42	壺(底)	STF196 東溝	—	(5.4)	(1.8)	2/5	ナデ	磨滅	稍密・0.5以下石、 頁・少/同赤・稍少	淡黄灰色/ 淡黄灰色
43	広口壺	STF181 南溝	(16.4)	—	(2.6)	1/4	磨滅	磨滅	稍粗・0.5~2.5 長、石・稍多/0.5~ 1.5 頁、透石・少	淡灰褐色/ 淡灰褐色
44	壺	STF181 南溝	—	5.8	(13.7)	2/3	ハケ後ナ デ、胴下 ミガキか	ミガキか	稍粗・0.5~2 長、石・多/0.5~4 頁、チャ・稍少 /.0.5 前後透石・ 極少	淡黒灰色/ 淡黄褐色
45	壺	STF181 東溝	—	5.5	(16.6)	5/6	ヨコハケ 後ナデ	ハケ後ミ ガキ	稍粗・0.5~2 長、石・多/同頁、 砂・稍少	灰褐色/淡 灰黄~灰色
46	壺	STF181 南溝	(15.2)	5.5	25.8	11/12	ナデ	ハケ後ナ デ、胴下 ミガキ	稍密・1 長、石・ 多/同チャ、赤・少/ 同雲・頁・極少	淡灰褐色/ 淡灰褐色
47	水差	STF181 東溝	9.2	7.8	39.5	11/12	ナデ、指 頭圧	ハケ後タ テミガキ	稍粗・1~1.5 石・多/同チャ、 長・稍多/同頁・少	淡灰~淡灰 白色/淡灰 ~淡灰白色
48	甕	STF181 南溝	15.5	(5.3)	18.9	4/5	ナデか	タテハケ	稍粗・1~2 石、 チャ・多/同長・稍 少/0.5~1 透石・ 稍少	濃灰褐色/ 濃赤褐色
49	甕	STF181 南溝	15.3	5.9	16.0	5/6	ケズリ	タテハケ	稍粗・1~1.5 長、石・稍多/1 赤・稍少/0.5~1 透石・稍少/1~1.5 チャ・稍少	淡黄灰色/ 灰黄色

50	甕	STF181 南溝	(16.8)	—	(13.5)	1/5	磨減	タテハケ	稍粗・2 以下石、 長、チャ・稍多/1 ~1.5 砂、赤・少	濃灰黄色/ 濃灰黄色
51	甕	STF181 南溝	—	5.0	(8.4)	1/2	磨減、剥 離	磨減、剥 離	稍粗・0.5~2 長、石・多/同 チャ・稍多/0.5~1 透石、赤斑・少	淡灰白色/ 明褐黄色
52	甕	STF181 南溝	(16.3)	5.7	27.2	2/3	ハケ後ナ デ	ハケ後胴 下ミガ キ、胴上 磨減	普・0.5以下~1.5 長、石・多/0.5~2 赤・稍少/1~2 砂・極少	にぶい灰黄 色/にぶい 灰黄色
53	壺(ミ ニチュ ア)	STF181 北溝	(5.6)	—	(5.6)	1/6	ナデ	ナデ	稍密・0.5~1.5 長、石、透石・稍多	暗灰黄色/ 暗黄灰色
54	壺	STF183 東溝	—	6.6	(16.3)	1/3	ナデ、指 頭圧	タテハ ケ、胴下 ミガキ	稍粗・1~3 長、 石・普/2 前後 チャ・少/0.5 前後 透石・少	黒灰色/明 褐黄色
55	広口壺	STF180 東溝	16.8	6.0	33.0	11/12	ハケ後ナ デ	胴上磨 減、胴下 タテハケ 後タテミ ガキ	稍粗・1 前後長、 石・多/同チャ、 雲・少	淡灰褐色/ 明褐灰色
56	広口壺	STF180 東溝	17.6	5.9	31.8	9/10	磨減	磨減・胴 下ミガキ か	稍粗・1~2 長、 石・多/同チャ、 赤・少/極少	黄灰~黄褐 色/黄灰~ 黄褐色
57	広口壺	STF180 東溝	18.7	6.7	33.2	5/6	ナデ	頸上、胴 下ハケ、 胴中ハケ 後ミガキ	普・1~1.5 長、 石、チャ・多/2.5 前後長、石、チャ・ 少	淡黄褐色/ 明褐~明褐 灰色
58	広口壺	STF180 北溝	(17.0)	6.5	33.0	1/2	ナデ	タテハケ	稍粗・1~2 長、 石、チャ・多/1~ 1.5 赤、透石、 頁・少/2~4 長、石、チャ・極少	淡灰褐色/ 淡黄褐色
59	短頸壺	STF180 西溝	5.0	3.3	13.6	1/1	ナデ	タテハケ 後ナデ	稍粗・2 以下石、 長・多/同チャ、 赤・少	淡灰褐色/ 淡灰黄色
60	壺(底)	STF180 東溝	—	5.3	(4.3)	4/5	ナデ、指 頭圧	磨減	稍粗・0.5~2.5 長、石・多/1~2 チャ・多/0.5~1 透石・極少/1~ 1.5 砂・極少	灰色(磨 減)/黄褐色 (磨減)
61	高杯	STF180 東溝	(21.6)	10.5	19.0	11/12	(杯)ナ デ、(脚) ヨコハケ 後ナデ、 指頭圧	(杯)ナデ か、(脚) ナデ	普・0.5~2 長、 石・多/同透石・稍 少/0.5~1 砂岩 (?)極少/1~2 チャ・極少	淡灰黄色/ 淡黄灰色
62	高杯	STF180 東溝	19.1	11.7	13.5	1/1	(杯)ナ デ、(脚) ヨコハケ 後上半ヨ コナデ	(杯)ナデ か、(脚) ナデ後タ テミガキ か	稍密・0.5~3.5 長、石・多/同頁、 チャ・稍多/0.5~2 赤・少/同透石・ 極少	(杯) 淡黄 灰色(脚) 淡褐黄色/ 淡灰黄色
63	甕	STF180 東溝	(20.3)	—	(2.3)	1/4	ヨコハケ	タテハケ	稍粗・0.5~1.5 長、石・稍多/同 チャ・少	黄褐色/黄 褐色

64	甕	STF180 北溝	(24.2)	7.2	32.0	3/5	タテハケ 後ナデ	タテハケ	稍粗・0.5~1.5 長、石・多/同 チャ、透石・稍多 /0.5~1 雲・少/ 2~4 長、石、 頁・極少/1~2 頁・少	淡灰褐色/ 淡黄灰色
65	甕	STF180 東溝	—	8.5	(26.4)	11/12	ナデ	ナデ後ミ ガキか	稍密・2~3 長、 石・多/2 赤、 チャ・少	淡黄褐色/ 灰褐~黄褐 色
66	短頸壺	STF185 南溝	(10.4)	—	(9.9)	1/5	ナデ、指 頭圧	ナデか?	稍密・0.5~1 長、石・普/同桜色 岩片、赤・極少	淡灰白色/ 淡灰白色
67	甕	STF185 南溝	(18.6)	—	(7.1)	1/6	ナデ	磨滅	稍粗・0.5~1.5 石・稍多/同長、透 石・少/0.5~1 雲・極少	淡赤褐色/ 淡赤褐色
68	甕	STF185 東溝	(14.4)	(5.2)	(21.0)	1/9	ナデ	タテハケ	普・0.5~2.5 石、 長・稍多/同チャ・ 少/0.5~1.5 透 石・極少	黄褐色/黄 褐色
69	甕	STF185 東溝	18.8	(5.2)	(26.8)	1/3	ナデ	タテハケ	普・0.5~1.5 長、 石・稍多/同透石・ 少/同雲、頁・極少	黒灰色/淡 黄灰色
70	甕	STF185 東溝	15.5	7.1	29.5	11/12	タテハケ 後胴下ナ デ、指頭 圧	タテハケ 後胴下ミ ガキ	稍粗・1 前後石、 長、赤・多/同雲、 チャ・極少	淡灰褐色/ 黄褐色
71	広口壺	STF184 南溝	(20.5)	7.0	35.6	11/12	ハケ後ナ デか	ハケ後ナ デ	稍粗・2 以下長、 石、赤、花崗岩 片?・多	淡褐灰色/ 淡褐灰色
72	広口壺	STF189 西溝	(14.6)	—	(5.8)	1/10	磨滅	タテハケ 後ミガキ	稍密・0.5~2.5 石・多/同長、赤・ 稍多	淡灰黄色/ 淡灰黄色
73	鉢	STF206 南溝	(11.8)	4.1	8.1	1/2	ナデ	タテハケ	普・1~1.5 石、 砂、長・稍多/同 チャ、赤、頁・少 /0.5~1 透石・極 少	淡黄灰色/ 暗灰黄色
74	壺(底)	STF206 南溝	—	—	(4.7)	1/3	磨滅	ナデ、指 頭圧	普・1 前後長・多 /同チャ、石、雲、 赤・極少/同桜色岩 片・極少	淡黄灰色/ 淡黄灰色
75	無頸壺	STF188 東溝	(12.3)	—	(35.8)	3/4	ヨコ・ナ ナメハケ 後ナデ	胴上ハケ 後ナデ、 胴下ハケ 後ナデ、 ミガキ	稍粗・2 以下長・ チャ、赤・多/同 石・少	淡褐色/淡 灰褐色~淡 褐色
76	無頸壺 (ミニ チュ ア)	STF188 東溝	(3.3)	2.6	5.4	4/5	ナデ	ナデ、指 頭圧	普・1~1.5 長・ 多/同石・稍少	淡灰~淡灰 黄色/淡黄 灰色
77	広口壺	STF186 西溝	20.0	5.1	39.2	1/2	ハケ後ナ デ	タテハケ 胴下ミガ キ	稍粗・2 以下長、 石・多/1~1.5 透 石・普/同チャ・稍 多/0.5 以下雲・少	淡黄灰色/ 淡灰~明 灰黄色

78	壺(底)	STF186 南東溝	—	5.9	(4.4)	3/4	磨減	タテハケ 後ナデ	普・0.5~2 石、 長・多/同赤、 チャ・稍少/同透 石・少	淡灰黄色/ 淡灰黄色
79	壺(底)	STF186 南溝	—	6.4	(8.4)	1/2	ナデ	ミガキ	稍密・0.5~2 石、長・稍多/同 赤、透石・普	淡黄褐色/ 淡黄褐色
80	広口壺	STF187 西溝	(34.4)	—	(1.4)	1/4	—	磨減	稍粗・0.5~2 石、長・稍多/同 赤・普/同チャ・少	黄褐色/黄 褐色
81	壺	STF187 東溝	(11.6)	—	(2.4)	1/10	ナデ	ハケ	稍粗・0.5~2.5 石、長・多/同透 赤・稍多	
82	広口壺	STF187 東溝	(13.6)	—	(2.7)	1/3		タテハケ 後ナデか	稍粗・0.5~2.5 石、長・多/同透 石、赤・少/同雲・ 極少	淡黄灰色/ 淡黄灰色
83	甕(底)	STF187 西溝	—	3.4	(2.0)	11/12	指頭圧	磨減	稍粗・0.5~2 長、石・多/同雲・ 少/同砂、頁・極少	淡灰黄色/ 黄灰色
84	高杯	STF187 東溝	(22.8)	(11.8)	(16.3)	1/3	ナデ	磨減	稍粗・0.5~2 石、長・多/同砂・ 稍少/同透石・少	淡黄褐色/ 淡黄灰色
85	甕(底)	STF187 西溝	—	4.4	(3.3)	3/4	ナデ、指 頭圧	磨減	普・0.5~2 石、 長・稍少/0.5~1.5 透石・少	黒灰色/淡 黄褐色
86	壺(底)	STF204 北溝	—	(6.8)	(1.9)	1/2	磨減	磨減	稍粗・1~2 長、 チャ、石、赤・多/ 同濃青灰色岩片・多	黒灰色(磨 減)/暗灰褐 色
87	鉢	STF204 西溝	(23.6)	(7.7)	16.6	1/4	ナデ	ハケ後ミ ガキ	普・1~1.5 石、 長・稍多/1~2 チャ、砂、赤・極少	淡黄灰色/ 濃褐色/ 明黄褐色
88	甕	STF204 北溝	14.8	4.8	17.0	11/12	ナデ	タテハケ	稍粗・0.5~1 透 石、チャ・少/同 石、長・多/1~1.5 砂・少	淡黄褐色/ 暗灰褐色
89	甕	SXF216	16.8	5.8	27.0	5/6	磨減	胴下タテ ハケ	稍粗・0.5~3 長、石・多/0.5~4 頁・極少/1~2 雲・極少	淡黄褐色/ 淡黄褐色
90	甕	STF203 北溝	15.9	5.7	15.0	3/4	ナデ	タテハケ	粗・2~3 長、 赤・多/同チャ・少/ 5 長、赤・少	淡灰褐色/ 淡灰褐色~ 淡褐色
91	広口壺	STF192 北溝	(21.3)	5.4	34.8	1/2	ナデ、指 頭圧	タテミガ キ	稍密・0.5~2 石、長・多/0.5~1 透石、赤、頁・少 /同砂極・少	灰~灰黄色 /淡黄褐色
92	短頸壺	STF192 南溝	10.9	5.0	20.7	9/10	ナデ	ナデ	稍密・1~2 長、 石、赤、チャ・多	淡灰色/淡 灰色~淡灰 黄色
93	甕	STF192 南東隅	21.1	6.1	31.2	11/12	指頭圧、 ナデ頸上 ヨコハケ	タテハケ	普・M~L頁、石・多 /・M~L長、砂・少 /・Mチャ・極少/ LL頁、石、長・少	淡灰~淡灰 黄色/淡黄 灰色

94	甕	STF192 南溝	18.7	5.8	26.0	11/12	ハケ後ナ デ	タテハケ	稍密・1~3 長、 石・多/同チャ、 頁・稍少/1~1.5 透石・極少/同砂・ 少	淡灰黄色/ 黄褐~淡黄 褐色
95	甕	STF192 西溝	15.8	4.5	16.0	11/12	ハケ後ナ デ	タテハケ	稍密・0.5~1.5 長、石・多/1~1.5 赤、チャ・少/0.5 以下透石・少	淡灰黄色/ 淡灰~灰黄 色
96 ・ 97	広口壺	STI15 南溝	22.5	—	(5.8)	11/12	磨減	タテハケ	稍粗・0.5~3 石、長・多/同赤・ 稍少/同頁、チャ・ 少/0.5~1.5 透 石・極少	淡黄灰色/ 淡黄褐色
98	広口壺	STF198 東溝	19.4	—	(22.8)	1/2	ナデ	ナデ	稍粗・0.5~2.5 石、長・多/同赤、 頁、チャ・普/0.5~ 1.5 透石・少	灰黄色/淡 灰色
99	短頸壺	STF198 南溝	—	—	(5.1)	1/1	ハケ後ナ デ	磨減	稍粗・0.5~2 長、石・多/同透 石・稍多/同黒・極 少	淡褐灰色/ 淡褐灰色
100	甕	STF198 西溝	(18.0)	5.6	24.7	3/5	ナデ、指 頭圧	タテハケ	稍粗・0.5~2.5 石、長・極多/0.5~ 2 赤・多/1~1.5 頁、チャ・極少	淡赤褐色/ 淡赤褐~淡 黄褐色
101	甕	STI12 東溝	20.9	5.7	26.9	4/5	ナデ	タテハケ	稍粗・0.5~4 長、石・多/同 チャ・稍少/同頁、 赤・少	黄褐色/淡 黄褐色
102	甕	STF181 北西溝	(19.6)	—	(5.6)	1/4	ナデ、指 頭圧	タテハケ	稍密・0.5~3 石・多/0.5~2 長・多/同赤・稍少/ 同透石・極少	淡黄灰色/ 淡黄灰色
103	甕	STF181 北西溝	(17.8)	—	(5.4)	1/8	ナデ	タテハケ	稍粗・1~2 石・ 多/同長・稍多/同 頁、透石・少	淡灰白色/ 淡灰黄色
104	甕	STF191 西溝	—	8.1	(15.4)	11/12	ハケ後ナ デ	タテハケ	稍粗・1 前後長、 石・多/2~3 長・少	淡黄灰色/ 灰~灰黄色
105	広口壺	STI48 南溝	(36.4)	—	(7.8)	1/8	磨減	磨減	粗・0.5~3 石、 長・多/同チャ・普 /0.5~1.5 黒、 雲・少/0.5~1 透石・少	淡黄灰色/ 淡黄灰色
106 ・ 107	壺	STI49 南溝	—	9.9	(30.6)	2/3	ナデ、指 頭圧	ミガキ	稍粗・0.5~2 長、石・多/同頁、 チャ・普/同赤、透 石・少	淡黄灰色/ 淡黄灰色
108	広口壺	STJ158 南溝	(30.2)	—	(31.7)	1/5	ナデ	磨減	稍粗・0.5~3 石、長・多/同赤・ 少/0.5~1.5 透 石・少/同雲・極少	淡黄灰色/ 淡黄灰色
109	甕	STI160 西溝	17.9	6.6	32.7	4/5	ハケ後ナ デ	タテハケ 後ミガキ (胴上磨 減)	稍粗・0.5~3.5 長、石・多/同赤・ 普/0.5~2 頁・稍 少	淡黄灰色/ 淡黄灰色

110	壺	STI123 西溝	—	6.4	(13.8)	4/5	磨減	磨減	普・0.5~3.5 石、 長・稍多/同赤、 チャ・普/0.5~1.5 透石・極少	明黄灰色/ 明黄灰色
111	台付鉢	STI123 南溝	13.2	—	(11.8)	11/12	ナナメハ ケ後ヨコ ナデ	ナナメハ ケ後ナデ	普・0.5~2 石、 長・多/同頁、 チャ・少/0.5~1.5 透石・極少	淡黄灰色/ 淡黄灰色
112	甕	STI123 東溝	14.2	6.0	19.5	11/12 以上	ハケ後ナ デ、指頭 圧	タテハケ	普・0.5~2.5 長、 石・多/同チャ、 頁・稍多/同赤、 砂・稍少/0.5~1.5 雲・極少	淡黄灰色/ 淡黄褐色
113	甕	STI123 西溝	(18.7)	—	(4.7)	1/6	ナデ	タテハケ	稍粗・0.5~1.5 石、長・多/同赤・ 少/1.5~1.0透石・ 極少	
114	甕	STI14 北溝	—	—	(2.3)	1/10	磨減	磨減	稍粗・0.5~2 石、長・多/同赤、 黒・少	淡黄灰色/ 淡黄褐色
115	甕	STG66 南溝	—	—	(2.2)	1/12	磨減	磨減	稍粗・0.5~2 石、長・稍多/同 砂、頁、赤・稍少/ 同透石・極少	淡黄灰色/ 淡黄灰色
116	広口壺	STG66 西溝	(24.2)	—	(8.8)	1/4	ナデ	タテハケ 後ナデ	稍粗・0.5~2 石、長・多/同赤・ 稍多/同砂、頁・少/ 同雲・極少	淡黄灰色/ 淡灰黄色
117	広口壺	STG65 南溝	(24.8)	—	(7.3)	1/12 以下	ナデ	磨減	稍粗・0.5~3 石、長、チャ・多 /0.5~1.5 赤、透 石・極小	淡黄灰色/ 灰黄色
118	壺(底)	STG65 南溝	—	(9.1)	(11.7)	1/3	磨減	胴下ミガ キカ	稍粗・0.5~3 石、長・多/同 チャ・小/0.5~1.5 赤、透石・極小	淡黄灰色/ 灰黄色
119	広口壺	STG94 東溝	19.4	5.6	29.0	5/6	ハケ後ナ デ	タテハケ	普・0.5~2 長、 石・多/0.5 以下 雲・極少/1~2 赤・稍少	淡灰色/淡 灰褐色
120	直口壺	STG94 東溝	7.0	—	(13.3)	1/2	ナデ	タテハケ 後ナデ	普・0.5~2.5 長、 石・多/同透石・極 少/0.5~1.5 雲・ 極少	淡黄灰色/ 淡黄灰色
121	太頸壺	STG94 南溝	17.0	7.4	31.5	1/1	ナデ、指 頭圧	ナデ後ミ ガキ	稍密・0.5~3 長、石・多/同 チャ・少	淡黄灰色/ 淡黄灰色
122	高杯	STG94 東溝	23.6	(13.3)	16.6	5/6	タテミガ キ	タテミガ キ	普・0.5~2 長、 石・多/同チャ、透 石・稍少/同赤・普	淡黄褐色/ 淡黄灰色
123	甕	STG94 東溝	19.8	—	(12.5)	3/5	ナデ	タテハケ	稍粗・0.5~2 石・多/同長・稍多/ 同チャ・少	灰黄色/淡 黄褐色
124	高杯	STG66 西溝	(17.4)	—	(3.2)	1/12	ナデ	ナデ	稍粗・0.5~3.5 石、長・多/同赤・ 少	淡黄灰色/ 淡褐色

125	甕(底)	STG66 北溝	—	(5.0)	(2.1)	1/5	磨減	磨減	普・0.5~2 石、 長・稍多/同頁、透 石・少	淡黄灰色/ 淡黄灰色
126	甕(底)	STG66 北溝	—	5.1	(1.8)	1/1	ナデ、指 頭圧	タテハケ 後ナデ	普・1 以下透石、 チャ・少	黄灰色/灰 黄色
127	壺	STG73 南方	—	—	(37.8)	4/5	ナデ	タテハケ 後ナデか	稍粗・0.5~4 長、石・多/同 チャ、赤・稍多/0.5 ~1.5 透石・少	淡黄灰色/ 黄灰色
128	壺(底)	STG73 南溝	—	6.5	(3.5)	11/12 以上	ナデ	ナデか	普・0.5~2 長、 石・稍多/同赤・稍 少/0.5~1.5 透 石・少	淡灰白色/ 淡黄灰色
129	壺(底)	STG73 北溝	—	(12.0)	(2.5)	1/2	剥離	磨減	稍粗・0.5~3 長、石・多/同 チャ、雲・普	黒灰色/淡 黄灰色
130	甕	STG73 南溝	19.6	—	(4.0)	1/3	磨減	タテハケ	稍粗・0.5~2.5 石、長・多/同頁、 赤・稍少/0.5~1.5 透石・極少	淡黄灰色/ 灰黄色
131	甕(底)	STG73 南溝	—	5.2	(3.0)	1/2	ナデ	磨減	稍粗・0.5~4 石・多/0.5~3 長・多/0.5~2 頁、赤・少/0.5~ 1.5 透石・少	淡黄灰色/ 淡黄灰色
132	甕(底)	STG73 南溝	—	(5.7)	(5.4)	3/4	磨減	タテハケ	稍粗・0.5~3 石、長・多/同 チャ・稍少/同透 石・少	灰黄色/黄 褐色
133	短頸壺	STG52 北溝	(9.2)	—	(4.3)	1/3	磨減	磨減	普・0.5~3 石、 長、赤・多/0.5~2 頁・少/同透石・ 極少	淡黄灰色/ 淡黄灰色
134	短頸壺	STG52 北溝	(12.0)	—	(4.5)	1/6	磨減	ナデか	稍粗・1~2.5 長、石・多/1~2 赤・稍少	明褐色/明 褐色
135	壺(底)	STG52 北溝	—	(8.8)	(3.8)	1/12	ナデ	磨減	稍粗・0.5~2.5 石・多/同長、赤・ 稍多/同頁・少/同 雲・極少	淡黄灰色/ 淡黄灰色
136	高杯	STG52 南溝	18.4	11.2	(11.3)	5/6	磨減	磨減	稍粗・1~2 石、 長・稍多/同チャ、 赤・稍少/0.5~1 透石・極少	淡灰黄色/ 淡灰黄色
137	甕	STG52 南溝	19.4	5.4	27.2	9/10	ナデ	タテハケ	普・0.5~1.5 長、 石・多/同赤、 チャ、透石・少	淡黄灰色/ 淡黄灰色
138 ・ 139	壺	STG53 西溝	—	6.0	(10.1) +(2.4)	3/4	磨減	ナデか	普・1~3 石、 長・極多/同頁、 雲・少	淡灰黄色/ 淡灰黄色
140	壺	STJ77 西溝	(23.1)	—	(3.4)	1/4	磨減	磨減	稍粗・0.5~4 石、長・多/0.5~ 2.5 チャ・少/0.5 ~1.5 赤、透石・ 極少	淡黄灰色/ 淡黄灰色
141	広口壺	STG50 南東隅	21.8	(6.5)	37.5	11/12 以上	ナデ、指 頭圧	ハケ後ナ デ、胴下 ミガキ	稍粗・ML石、長・ 赤・多/M透石・稍多 /LL頁少	淡灰黄色/ 淡灰黄色

142	甕	STG50 南溝	20.2	6.0	26.0	1/1	ナデ	タテハケ	稍粗・0.5~2 石、長、赤・多	淡黄褐色/ 淡黄褐色
143	壺	STJ87 北方	(14.8)	—	(4.1)	1/12	ヨコハケ	磨滅	普・0.5~2 長、 石・稍多/同砂、 頁・稍少/0.5~1.5 赤・少	淡黄褐色/ 濃黄褐色
144	壺	STJ87 北方	(16.5)	—	(1.7)	1/5	—	タテハケ 後ヨコナ デ	普・0.5~1.5 長・ 稍多/同石、砂・普/ 同頁・少	濃黄褐色/ 黄褐色
145	広口壺	STJ87 南溝	18.8	—	(15.8)	4/5	ハケ後ナ デ	ナデ	普・0.5~2.5 石、 長・多/同赤、砂・ 普/同頁・極少	淡黄灰色/ 淡黄灰色
146	広口壺	STJ87 南溝	16.5	6.8	28.5	11/12 以上	ナデ、指 頭圧	ナデ、胴 下ミガキ	稍密・1~1.5 石、長・赤・多/同 黒、チャ・稍少/同 透石・極少	淡灰黄色/ 淡灰黄色
147	壺	STJ87 北方	—	7.4	(22.3)	7/8	ナデ	タテハケ 後胴下ミ ガキ	普・0.5~1.5 石、 長・多/同透石、 チャ・少/同頁、 砂・稍少	黒灰色/淡 黄灰色
148	水差	STJ87 南溝	7.0	6.0	24.7	3/4	ナデ、指 頭圧	ナデ、胴 下ミガキ	稍密・1~3 長、 石、赤・多/同黒・ 稍多/同透石・稍少 /1.5~2 チャ・稍 少	淡灰~淡灰 黄色/灰黄 色
149	広口壺	STJ04 南溝	21.0	6.5	35.2	11/12	ナデ	ハケ後ナ デ、胴下 ミガキ	普・0.5~1.5 石、 長、赤・多/1.5~2 長、石・極少/1 ~1.5 チャ・少	淡黄灰色/ 淡褐灰色
150	細頸壺	STJ04 西溝	—	5.8	(19.5)	11/12	ハケ後ナ デ	ハケ後胴 上ナデ、 胴下ミガ キ	稍密・0.5~2 長、石・多/同頁、 赤・普/0.5~1 透 石・極少	濃灰色/淡 黄灰色
151	高杯	STJ04 西溝	(20.4)	14.3	15.3	3/4	ナデか	ナデか	普・0.5~1.5 長、 石・多/同頁・普/同 砂・極少	淡灰黄色/ 淡灰黄色
152	広口壺	STJ105 東溝	26.1	—	(40.6)	2/3	ナデ	ナデ、磨 滅	稍粗・0.5~3 長、石・多/同赤、 頁・普/同チャ・稍 少/同透石・少	淡黄灰色/ 淡灰黄色
153	広口壺	STJ105 東溝	24.8	8.7	38.9	1/2	ナデ	タテハケ 後胴上ナ デ胴下ミ ガキ	普・0.5~3 長、 石・稍多/同砂・普/ 同チャ、赤、黒・少 /0.5~1.5 雲・極 少	淡灰黄色/ 淡黄褐色
154	壺(底)	STJ105 西溝	—	8.0	(2.3)	2/3	剥離	ナデか	粗・0.5~2 石・ 極多/同長・多/同 チャ・稍少	淡黄灰色/ 淡灰黄色
155	甕	STJ105 東溝	—	5.9	(15.5)	3/5	ナデ	タテハケ	稍粗・0.5~2 石、長、赤・多/同 頁・普/0.5~1 透 石・稍少	淡灰黄色/ 淡灰黄色
156	甕	STJ106 東溝	20.6	7.8	32.7	11/12	ナデか	磨滅	稍粗・0.5~2 石、長、赤・多/同 頁・普	淡黄褐色/ 淡黄褐色

157	短頸壺	STJ02 東溝	9.2	5.0	18.0	3/4	ナデ	胴上ナデ 胴下ミガキ	普・0.5~2 石、 長・多/同赤、 チャ・少/0.5~1 透石・極少	淡灰白色/ 淡灰白色
158	甕	STJ02 南溝	16.4	—	(16.8)	11/12	タテナデ	タテハケ	稍密・1~3 長、 石、チャ・稍多/0.5 ~1 長、石・透 石・多/同黒、赤・ 少	淡黄灰色/ 灰黄色
159	無頸壺	STJ20 西溝	(10.1)	8.7	32.8	2/3	ナデ、指 頭圧	ハケ後ナ デ、胴下 ミガキ	稍粗・0.5 以下 長、石・極多/1~ 1.5 長、石、 チャ・多/同赤・少	淡黄灰色/ 淡黄灰色
160	壺	STJ20 南溝	(18.9)	6.1	(35.4)	1/4	タテナデ	タテハケ 後ミガキ	普・0.5~4 石、 長・多/0.5~6 チャ・普/0.5~1 透石・稍少	
161	広口壺	STJ20 北溝	(28.3)	—	(1.4)	1/3	磨滅	磨滅	稍粗・0.5~3 石、長・多/同赤・ 稍多/同頁・少	黄灰色/黄 灰色
162	甕(口)	STJ200 南溝	—	—	(1.6)	1/12 以下	—	タテハケ	稍粗・0.5~1.5 石・稍多/同砂・普/ 同長・少	淡黄灰色/ 淡灰白色
163	甕(ミ ニチュ ア)	STJ20 北溝	—	—	(0.7)	1/12 以下	—	—	普・0.5~1.5 石、 長・多/同赤・普	淡黄灰色/ 淡黄灰色
164	甕(底)	STJ20 東溝	—	(4.7)	(2.8)	1/4	ナデ	タテハケ	稍粗・0.5~3 石、長、チャ・稍多 /同赤・少/0.5 以 下透石・少	淡灰褐色/ 淡黄灰色
165	甕用蓋	STJ03 南東隅	(15.8)	—	(1.9)	1/6	ヨコハケ	磨滅	普・0.5~2.5 長・ 普/同赤・稍少/同透 石・極少	淡黄灰色/ 淡黄灰色
166	広口壺	STJ03 東溝・ STJ05 北溝	(22.8)	—	(5.2)	1/2	磨滅	ナデ	稍粗・0.5~2.5 石、長、赤、砂・稍 多/同チャ・極少	淡黄灰色/ 淡黄褐色
167	壺	STJ03 南溝	—	6.0	(26.2)	5/6	ナデ	胴上ナ デ、胴下 ミガキ	普・0.5~3 長、 石・多/同頁・稍少/ 同チャ・少/0.5~ 1.5 透石・少	淡褐色/ 淡灰褐色
168	広口壺	STJ03 南溝	(16.1)	6.4	32.0	11/12 以上	ナデ?	タテハケ	稍密・ML石、長・多 /LL石・少/mチャ、 赤稍少	淡黄灰色/ 淡黄灰色
169	壺(底)	STJ03 東溝	—	7.1	(3.2)	11/12	磨滅	磨滅	稍粗・0.5~2.5 石、長、赤、砂・稍 多/同チャ・極少	淡黄灰色/ 淡黄褐色
170	壺(底)	STJ03 南溝	—	(7.5)	(5.3)	1/2	磨滅	ミガキ	稍粗・0.5~3 石、長・多/同赤・ 稍少/同チャ、頁・ 少/0.5~1 透石・ 極少	淡灰黄色/ 淡黄褐色
171	甕	STJ03 南溝	(18.0)	5.4	21.9	4/5	ナデ	タテハケ	普・0.5~2 長、 石・多/同赤・普/同 チャ・極少	淡灰黄色/ 淡灰黄色

弥生土器観察表

172	壺	STJ200 南溝	13.7	4.9	23.5	2/3	ナデ	タテハケ	稍粗・0.5~2.5 石、長・多/同 チャ・普/0.5~1 透石・少	淡灰黄色/ 淡黄灰色
173	広口壺	STJ199 西溝	(20.4)	—	(2.7)	1/8	—	ナデ	稍密・0.5~2 長・多/0.5~2.5 石、頁、砂・普/0.5 ~1 チャ・少/同 透石・極少	灰黄色/灰 黄色
174	壺	STJ199 東溝	10.1	4.7	21.2	11/12	ナデ	ハケ後ナ デ	稍粗・1~3.5 石、長・多/同 チャ、頁、赤・稍多 /0.5~1.5 透石・ 稍少	褐黄色/灰 褐色
175	甕(口)	STJ199 東溝	—	—	(1.6)	1/12 以下	—	タテハケ	稍粗・0.5~1.5 長、石・多/同赤・ 稍多	淡黄褐色/ 淡黄褐色
176	甕	STJ199	(11.6)	—	(3.3)	1/6	ナデ	磨滅	稍密・0.5~2.5 長、石・稍多/同 チャ、頁、赤・稍少 /0.5~1 透石・少	淡灰黄色/ 淡灰黄色
177	甕	STJ199 西溝・ 南西隅	(18.6)	—	(18.2)	1/3	ナデ	タテハケ	稍粗・0.5~3 長・稍多/同砂、 頁・稍少/0.5~1 透石・極少	灰~灰褐色 /淡灰褐色
178	甕(底)	STJ199 南溝	—	5.1	(4.3)	11/12	ナデ	タテハケ	稍粗・0.5~2.5 石、長・普/同頁、 チャ、砂・普/同 赤・少	淡黄灰色/ 淡灰黄色
179	広口壺	STJ05 南溝	—	—	(6.4)	1/12	ナデ	ナデ	稍粗・0.5~3 石、長・多/同 チャ・稍少/同砂、 頁・少	灰黄色/淡 灰黄色
180	壺	STJ05 南東隅	—	—	(2.2)	1/12 以下	ナデ	ナデ	稍粗・0.5~2.5 長、石・多/同頁・ 少	明黄灰色/ 淡黒灰色
181	短頸壺	STJ05 南溝	16.4	6.4	30.5	11/12	ハケ後ナ デ	ミガキカ	稍密・0.5~4 長、赤・多/同頁、 石・稍少/0.5~2 砂・少	淡灰~淡灰 黄色/淡黄 灰色
182	壺	SXJ230	—	—	(21.2)	2/5	ナデ	タテハケ 後ナデ、 胴下ミガ キ	普・1.5~2.5 石、 長、チャ・多/同 頁、黒・少	淡灰黒色/ 淡灰黒色
183	高杯	STJ05 東溝	18.4	—	(16.8)	11/12	ナデ	ナデ	普・0.5~1.5 石、 長・多/同頁・稍少/ 同透石、赤・少	明黄灰色/ 淡黄灰色
184	広口壺	STJ128 北溝推 定ライ ン	(19.7)	—	(11.1)	1/3	ヨコハケ 後ナデ	ナデ	稍粗・0.5~3 石、長・多/同赤・ 少/同チャ・極少 /0.5~1.5 透石・ 極少	淡黄灰色/ 淡黄灰色
185	甕(如)	STJ124 東溝	(15.7)	—	(13.5)	1/5	磨滅	ハケ後ヨ コナデ	稍粗・0.5~2 石、長・多/同赤・ 普	褐灰色/濃 褐灰色

186	短頸壺	STJ100 東溝	11.0	5.8	23.0	11/12 以上	ハケ後ナ デ、頸上 ヨコハケ	ナデ後下 半ミガキ	稍粗・1~1.5 石、長・多/チャ・ 稍少/赤・少/2~3 長・少	淡黄灰色/ 淡黄灰色
187	広口壺	STJ60 南溝・ 東溝	(23.2)	—	(16.0)	1/3	ナデ	ヨコハケ 後ナデ	普・0.5~4 石、 長・多/同チャ・少 /0.5~1.5 透石、 赤・少	淡灰黄色/ 淡灰黄色
188	壺(底)	STJ60 東溝	—	7.4	(2.4)	4/5	—	タテハケ	普・0.5~4 石、 長・多/同チャ・少 /0.5~1.5 透石、 赤・少	淡灰黄色/ 淡灰黄色
189	水差	STJ60 南溝	(8.4)	5.8	28.2	3/5	ナデ、指 頭圧	ハケ後胴 上ナデ、 胴下ミガ キ	稍密・0.5~1 長、石・稍多/同 頁、赤、砂、チャ・ 少	淡灰黄色/ 淡灰黄色
190	甕	STJ60 西溝	17.2	(5.1)	23.1	1/2	ナデ	タテハケ	稍粗・0.5~3.5 長、石・多/0.5~3 ・チャ、頁・普/ 同砂・稍少/0.5~1 透石	淡黄灰色/ 淡黄灰色
191	甕	STJ60 東溝	—	(5.6)	(13.2)	2/3	ナデ、指 頭圧	タテハケ	稍粗・0.5~2 石、長・多/同頁、 赤・少	黒灰色/黄 灰色
192	甕	STJ19 東溝	16.6	—	9.0	1/3	磨減	磨減	稍粗・0.5~3 石・多/0.5~2 長、赤・稍多/同透 石・少	淡黄灰色/ 淡黄灰色
193	甕底	STJ19 東溝	—	5.0	(12.0)	3/4	ナデ、指 頭圧	タテハケ	稍粗・0.5~1.5 長、石・多/同 チャ、透石、赤・稍 多	淡灰黄色/ 淡灰黄色
194	広口壺	STJ84 東溝	—	—	(20.0)	3/5	磨減	磨減	稍粗・0.5~2.5 石、長・多/同頁、 赤・普/0.5~2 チャ、透石・少	黄褐色/黄 褐色
195	細頸壺	STJ84 北溝	(6.0)	(4.6)	19.4	1/2	ハケ後ナ デ	ハケ後胴 上ナデ、 胴下ミガ キ	普・0.5~2 長、 石・多/同赤、砂・ 普/同黒・少	淡灰黄色/ 淡灰黄色
196	甕	STJ84 東溝	17.8	5.4	(23.3)	1/8	ナデ、指 頭圧	タテハケ	稍粗・0.5~3 長、石・稍多/同 赤、頁・少/0.5~ 1.5 透石、チャ・ 少	淡黄灰色/ 淡黄灰色
197	甕	STJ99 西溝	(18.4)	—	(16.3)	1/8	磨減	タテハケ	稍粗・0.5~3 石、長・多/同赤、 チャ、頁、黒・少 /0.5~1.5 透石・ 極少	明黄灰色/ 淡褐色
198	壺	STJ88 西溝	13.0	5.6	22.1	2/3	ナデ	胴中ヨコ ミガキ	普・0.5~3 長、 石・稍多/同チャ、 赤・普/0.5~1 透 石・少	灰~灰白色/ 淡灰黄色
199	広口壺	STJ48 北溝・ 東溝	28.4	(8.2)	49.8	2/3	ナデ	磨減・胴 下ミガキ か	稍粗・0.5~2 長、赤、石・多/同 頁・稍少	淡黄灰色/ 淡黄灰色

200	鉢	STJ48 北溝	11.0	6.4	17.2	11/12 以上	ナデ	タテハケ 後ナデ後 ミガキ	稍粗・1~2 長、 石、赤・チャ・多	淡灰黄色/ 淡灰黄色
201	壺(底)	STJ48 北溝	—	3.8	(2.5)	11/12	指頭圧	ナデ、指 頭圧	稍粗・1~2.5 長、石・稍多/同 チャ・稍少/1~2 透石・極少	黒灰色/淡 黄灰色
202	広口壺	STJ89 北溝	(23.4)	—	(6.0)	2/5	ヨコハケ 後ナデ	ナデか	普・0.5~4 長、 石・多/同チャ・普 /0.5~2 透石・極 少	淡褐灰色/ 淡褐灰色
203	直口壺	STJ89 北溝	(9.0)	6.1	28.0	1/2	ナデ	胴上ナ デ、胴下 ミガキ	普・0.5~3 長、 石・多/同頁、赤・ 稍少/0.5~1.5 透 石・少	黒灰色/淡 黄灰色
204	甕(底)	STJ91 東溝	—	(5.3)	(5.4)	1/5	ナデ、指 頭圧	タテハケ	稍粗・0.5~3 石、長・多/同赤、 チャ・少	淡黄灰色/ 淡黄灰色
205	甕(底)	STJ91 東溝	—	4.4	(4.1)	1/2	ナデ、指 頭圧	タテハケ	稍粗・0.5~2.5 石・稍多/0.5~2 長、赤・稍多/0.5~ 1.5 透石・少	淡黄灰色/ 淡黄灰色
206	短頸壺	STJ90 北溝	10.8	—	(20.5)	3/4	ナデ	ナデ後胴 下ミガキ	普・0.5~1.5 石、 長・多/同赤・稍多/ 同頁、黒・稍少	淡黄灰色/ 淡黄灰色
207	壺	STJ133 北溝	(18.2)	—	(6.8)	1/3	ナデ	タテハケ	普・0.5~4 石、 長、チャ・多/0.5~ 2.5 黒、雲・稍少 /0.5~1.5 透石・ 少	
208	壺	STJ133 北溝	—	(5.6)	9.0	1/5	ナデ	磨滅	普・0.5~3.5 石、 長、赤・多/同 チャ、頁・稍多	淡灰褐色/ 淡黄灰色
209	甕(底)	STJ133 南溝	—	5.6	(3.0)	5/6	ナデ	タテハケ	稍粗・0.5~3.5 石・多/同頁、長・ 稍多/0.5~2 雲・ 極少	黒灰色/淡 黄褐色
210	広口壺	STJ98 西溝	16.5	7.1	24.4	—	ナデ	磨滅	普・0.5~3 石、 長・多/同頁・普/同 赤、チャ・稍少/0.5 ~1.5 透石・少	淡黄灰色/ 黄灰色
211	甕	STJ98 東溝	14.5	4.7	16.2	1/1	ナデ	タテハケ	稍粗・0.5~1.5 石、長・多/同透 石、頁・少/同 チャ、赤・極少	灰褐色/淡 灰黄色
212	広口壺	STJ52 東溝	(28.0)	—	(30.3)	1/2	磨滅	磨滅	稍粗・0.5~1.5 長、石・多/同透 石、赤、チャ・稍多	淡灰色/淡 褐黄色
213	広口壺	STJ95 西溝	(13.2)	—	(27.4)	1/4	ナデ、指 頭圧	タテハケ 後ナデ	稍密・0.5~3 長、石・多/0.5~2 赤、頁・稍少/同 チャ、透石・少/2 雲・極少	淡黄灰色/ 淡黄灰色
214	短頸壺	STJ95 東溝	10.8	5.7	24.1	7/8	ナデ	胴上タテ ハケ、胴 下ナナメ ハケ、底 周ケズリ	稍密・0.5~1.5 長、石・稍多/同透 石、赤・少	黒灰色/淡 黄褐色

215	壺(底)	STJ95 西溝	—	6.2	7.5	1/2	磨減	磨減	稍密・0.5~2 石、長・多/同 チャ、頁、赤・稍少 /0.5~1.5 透石・ 少	灰色/淡灰 黄色
216	甕	STJ95 西溝	(8.2)	(4.8)	(6.7)+ (4.5)	1/8	磨減	磨減	稍密・0.5~2.5 長、石・稍多/同 黒・稍少/0.5~2 赤・稍少/同透石・ 少	淡黄褐色/ 淡黄褐色
217	甕(底)	STJ95 西溝	—	(4.8)	(4.5)	1/6	磨減	タテハケ	稍粗・0.5~3 石、長・稍多/同 黒、赤・少/0.5~1 透石・少	淡灰色/淡 黄灰色
218	甕(底)	STJ52 南溝	—	(5.8)	(1.6)	1/2	ナデ	タテハケ 後ナデ	稍粗・0.5~2 石、長・多/同頁、 赤・少/同透石・極 少	淡灰黄色/ 灰黄色
219	広口壺	SXF219	—	—	(13.3)	1/5	ハケ後ナ デ	ナデ	粗・0.5~1.5 長、 石・稍多/同透石・ 極少	灰褐色/濃 褐色
220	広口壺	SXF219	—	—	(16.8)	4/5	ナデ	磨減	稍粗・0.5~3 長、石・多/同赤・ 稍多/0.5~1 透 石・極少	淡黄灰色/ 淡黄褐色
221	広口壺	SXF217	(15.4)	6.6	27.8	3/5	ナデ、指 頭圧	タテハケ	稍密・1~3 長、 石・稍少/同チャ・ 少/1~2 砂・極 少/1 前後透石・ 極少	淡灰色/淡 黄灰色
222	広口壺	SXF218	20.4	5.9	28.7	10/12	ハケ後ナ デ	タテハケ 頸下タテ ミガキ	稍粗・0.5~2 長、石・多/同 チャ・稍多/0.5 以 下雲・極少/0.5~1 透石・稍多	淡黄灰色/ 淡黄灰色
223	無頸壺	SXF218	11.8	6.6	22.4	11/12 以上	ハケ後ナ デ	ナナメハ ケ、胴下 ケズリ後 ハケ後ミ ガキ	普・0.5~1 石・ 極多/同長、透石、 雲・稍多/同頁・少/ 1~1.5 石・稍多	明黄灰色/ 淡灰黄色
224	甕	SXF218	12.6	4.0	14.0	3/4	ハケ後ナ デ	タテハケ	稍密・M・S長、M チャ、石・稍多/M 頁・少	淡黄褐色/ 淡黄褐色
225	短頸壺	SXF220	10.3	—	(19.6)	4/5	ナデ、指 頭圧	ナデか	普・1~2 長・多 /同石・稍多/同 チャ・極少	濃黄褐色/ 淡褐色
226	壺	SXF220	—	—	(4.7)	1/8	ナデ	ナデ	稍粗・1~3 長、 石・稍多/同赤・稍 少/1~2 透石・ 少	
227	高杯	SXF215	(22.3)	(13.6)	17.1	—	磨減	磨減(ミ ガキか)	普・M石、極多/L 石、M~L長・多/M チャ・稍少	淡黄灰色/ 淡黄灰色
228	甕用蓋	SXI65	—	4.8	(8.3)	3/4	ナデ	ナデ	稍粗・0.5~2.5 石、長・多/同砂、 赤・稍多/同頁、 チャ・少/0.5~1.5 透石・少	黄灰色/淡 灰黄色

229	鉢	SXG97	11.7	4.5	7.3	4/5	ナデ	タテハケ	稍粗・0.5~3 石、長・多/同 チャ・稍多/0.5~ 1.5 赤・少/同透 石・極少	淡黄灰色/ 淡黄灰色
230	甕	SXG97	21.0	—	(25.7)	7/8	ナデ	タテハケ	稍密・0.5~1 長、石・普/同透 石、赤・少/1~2 頁・極少	淡黄灰色/ 淡黄灰色
231	太頸壺	SHF115	(16.8)	—	(5.6)	1/6	ナデ	磨減	普・0.5~2 石、 長・多/同チャ、 頁・稍多/同透石、 砂極少	淡赤褐色/ 淡赤褐色
232	壺(底)	SHF06	—	(5.8)	(2.6)	1/3	不明	ナデアケ	密・3 以下長、 石、チャ、赤・少	明茶灰褐色/ 茶褐色
233	壺用蓋	SHF123	—	4.2	(2.2)	2/3	ナデ	磨減	普・0.5~1.5 長、 石・稍多/同チャ・ 少/同透石、雲・極 少	淡黄褐色/ 淡黄褐色
234	甕(底)	SKF152	—	5.2	(3.4)	2/3	ナデ	磨減	普・0.5~3 石・ 多/同チャ・普/0.5 ~2 長・稍多/0.5 ~1 透石・極少	淡灰色/淡 黄褐色
235	壺	SKJ54	—	—	(4.7)	1/12	磨減	ナデ	稍粗・0.5~2 長、石・多/同赤・ 稍少/同チャ・極少	淡灰黄色/ 淡灰黄色
236	甕	STJ98 か	—	(3.4)	(5.3)	1/3	ナデ	ケズリ?	普・0.5~2 長、 石・多/同チャ・普	淡黄灰色/ 淡黄灰色
237	甕(底)	SKJ154	—	5.0	(3.8)	11/12 以上	ケズリ後 ナデ	タテハケ	普・0.5~2 長・ 稍多/同砂、頁・普 /0.5~1 透石・極 少	淡黄灰色/ 淡灰黄色
239	水差	SDF98	—	—	(3.2)	1/4	—	—	稍密・0.5~3 石・稍多/0.5~2 赤、頁・少/0.5~1 長・稍多	明黄褐色/ 明黄褐色
240	甕	SDF98	(16.5)	—	(7.2)	1/8	ナデか	タテハケ	稍密・0.5~1 石・多/0.5~1 長、透石、赤・稍多 /1~2 石、長、 赤・稍多	淡褐色/淡 褐色
241	甕	SDF98	(20.6)	—	(3.9)	1/4	磨減	磨減	稍密・0.5~2.5 石、長・多/同赤・ 稍多/同透石、 チャ・稍少	淡灰褐色/ 淡灰褐色
242	甕	SDF98	—	—	(3.1)	1/12 以下	ナデ	ナデ	粗・0.5~2 石、 長・多/0.5 以下 雲・極少	濃褐灰色/ 濃褐灰色
243	甕(底)	SDF98	—	5.5	(2.9)	2/3	指頭圧	タテハケ	普・0.5 以下透 石、赤・極少/1~ 2 長、頁・稍多	灰白色/淡 赤褐色
244	甕(底)	SDF98	—	5.1	(3.9)	3/4	ハケ後ナ デ	タテハケ	稍粗・0.5~1.5 赤、長・稍多/0.5~ 1 透石・少	淡灰黄色/ 淡黄褐色
245	甕(底)	SDF98	—	(5.0)	(3.0)	1/3	ナデ、指 頭圧	タテハケ	稍密・0.5~1.5 石、長、赤・稍多/ 2 チャ・極少	淡黄褐色/ 淡黄褐色

246	壺(底)	SDF22	—	(8.8)	(6.4)	1/3	ナデ	磨滅	普・0.5~4 石、 長・極多/0.5~6 チャ・普/0.5~3 黒、赤・稍少/0.5~ 1.5 透石・極少	淡黄灰色/ 淡黄褐色
247	甕	SDH02	(17.8)	—	(2.6)	1/12 以下	磨滅	タテハケ	稍密・0.5~3 石・稍多/0.5~2m 長・多/同赤・稍少/ 同砂、透石・少	淡黄灰色/ 淡黄灰色
248	甕	SDH08	(17.8)	—	(2.7)	—	—	タテハケ	稍粗・0.5~2 長、石・多/同 チャ、頁・稍少/0.5 ~1.5 透石・極少	明黄灰色/ 淡褐黄色
249	甕	SDH12	(19.9)	—	(7.2)	1/5	ナデ	タテハケ	普・0.5~2 長、 石・稍多/同赤・普 /0.5~1.5 チャ・ 少/0.5~1 透石・ 極少	褐灰色/明 黄褐色
250	甕	SDH12	(19.6)	—	(8.1)	1/5	ナデ	タテハケ	稍粗・0.5~2 石、長、赤・多/同 頁・普/0.5~1.5 透石・少	褐黄色/黄 灰色
251	甕	SDH13	(17.8)	—	(3.3)	1/9	ナデ	タテハケ	稍粗・0.5~2 石、長・多/同 チャ、赤・普/0.5~ 1 透石・少	淡黄褐色/ 淡黄褐色
252	甕	SDH13	(20.0)	—	(5.5)	1/8	ナデ	タテハケ	稍密・0.5~1.5 石、長・多/同m チャ、赤・普/同 透石・少	淡灰白色/ 淡黄灰色
253	甕(底)	SDH13 西肩	—	6.2	(3.0)	11/12	ナデ	磨滅	稍粗・0.5~2 石、長・多/同 チャ、赤・稍多/0.5 ~1 砂、透石・少	黒灰色/淡 黄灰色
254	甕(底)	SDH13	—	(6.0)	(5.7)	1/5	ナデ	タテハケ	稍密・0.5~1 石、長・普/同赤、 頁・稍少	黒灰色/淡 灰白色
255	甕	SDH17	(18.2)	—	(5.6)	1/4	ナデ	タテハケ	普・0.5~2 石、 長・稍多/同砂、 赤、頁・少/0.5~1 黒・極少	灰黄色/淡 黄褐色
256	甕	SDH17	(20.0)	—	(3.8)	1/8	—	—	普・0.5~3 石、 長・稍多/0.5~1.5 チャ・少/0.5~1 透石・極少	淡黄灰色/ 淡灰黄色
257	甕(底)	SDH17	—	7.7	(4.5)	11/12	ナデ、指 頭圧	タテハケ	稍粗・0.5~3 石、長、赤・稍多 /0.5~1.5 チャ、 透石・少	淡黄褐色/ 淡黄灰色
258	甕(底)	SDH17	—	(7.5)	(4.4)	1/6	ナデ、指 頭圧	タテハケ	稍粗・0.5~4 石、長・普/0.5~ 1.5 チャ、頁・少/ 同透石・極少	灰黄色/淡 黄灰色
259	壺(底)	SDG51	—	6.2	(3.5)	11/12	磨滅	ナデ	稍粗・1~2 長、 石・稍多/同頁、 赤・普	磨滅/淡黄 灰色

260	甕用蓋	SRF99	—	(4.0)	(3.5)	1/3	指頭圧	タテハケ	稍粗・0.5~3 石、長・稍多/同 赤、チャ・極少	淡灰赤色/ 淡灰赤色
261	壺(底)	SRF99	—	7.1	(2.2)	1/2	ナデ	ナデ	稍密・0.5~1.5 赤、石・多/同 チャ、透・少	淡褐色/淡 黄褐色
262	甕(底)	包含層	—	4.4	(3.9)	4/5	ナデ	タテハケ	稍密・0.5~1.5 長、石・稍多/同 チャ、砂、透石・少	淡灰黄色/ 明黄灰色
263	壺(底)	包含層	—	(5.7)	(2.1)	3/4	磨滅	指頭圧		
264	壺(底)	包含層	—	4.9	(2.4)	1/1	磨滅	タテハケ 後ナデ	稍粗・0.5~2 石、長・普/同黒、 透石・極少	淡灰黄色/ 淡黄灰色
265	甕	包含層	(18.5)	—	(5.8)	1/6	タテハケ 後ナデ	タテハケ	稍密・0.5~1.5 石、長・普/0.5~2 赤・少	淡灰黄色/ 淡灰黄色

備考

- ・口径、底径、残存高のうち、()内のものは復原数値である。
- ・残存率は、図化した部分に対する数値である。
- ・胎土、鈳物は、胎土の粗密、含まれる鈳物のサイズ、種類、量の順で記載した。
- ・胎土の粗密は、極粗、粗、稍粗、普通、稍密、密、微密の7段階とした。
- ・鈳物名は、長石を「長」、石英を「石」、極めて透明度の高い石英を「透石」、チャートを「チャ」、赤色斑粒を「赤」、頁岩片を「頁」、砂岩片を「砂」、雲母を「雲」と省略して記載した。

報告書抄録

ふりがな	しもうえのみなみいせき							
書名	下植野南遺跡Ⅱ							
副書名								
巻次								
シリーズ名	京都府遺跡調査報告書							
シリーズ番号	第35冊							
編著者名	石井清司・引原茂治・増田孝彦・小池寛・中川和哉・野島永・藤井整・松尾史子							
編集機関	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター							
所在地	〒617-0002 京都府向日市寺戸町南垣内40-3				Phone	075(933)3877		
発行年月日	西暦 2004 年 3 月 26 日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "		m ²	
しもうえのみなみいせき	きょうとふおとくにぐんおおやまざきちょうおおあざしもうえのこあざかどたほか							
下植野南遺跡	京都府乙訓郡大山崎町大字下植野小字門田ほか	26303	29	34° 54' 15"	135° 41' 39"	19980117 ～ 20020730	25,000	道路建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
下植野南遺跡	墓 集落・墳墓 集落	弥生中期 古墳 平安 中世 近世		方形周溝墓 竪穴式住居跡・掘立柱建物跡・方墳 掘立柱建物跡・井戸 道路状遺構 井戸		弥生土器・石器 土師器・須恵器・石 製模造品・埴輪 土師器・須恵器 瓦器・銭貨		方形周溝墓 79基 一辺13mの 方墳である 土辺古墳から 古墳前期の 家形埴輪 出土 中世久我 関連の道路 側溝の確認

備考：北緯・東経の値は世界測地系に基づく。

京都府遺跡調査報告書 第35冊<本文編>

平成16年3月26日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Phone (075)933-3877 (代)

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル
Phone (075)256-0961 (代)